下田南遺跡発掘調査報告書

－川井野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

本　文　編

２０２３

岩倉市教育委員会
株式会社アーキジオ

下田南遺跡発掘調査報告書

－川井野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

本　文　編

２０２３

岩倉市教育委員会
株式会社アーキジオ

例　言

1　本書は、愛知県企業庁と岩倉市が共同で実施した川井野寄地区工業用地開発事業に伴い埋蔵文化財の発掘調査を実施した愛知県岩倉市川井町地内に所在する下田南遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査・整理作業は、愛知県企業庁との協議にもとづき岩倉市が主体となって行い、岩倉市教育委員会の監理のもと株式会社アーキジオ中日本支店に発注して実施した。

3　本書で報告する発掘調査・整理作業の概要と担当者は次のとおりである。

発掘調査面積　43,186㎡（令和元年度：17,177㎡、令和２年度：26,009㎡）
調査準備期間　令和元年６月25日～令和元年８月25日
発掘調査期間　令和元年８月26日～令和３年３月31日
整理作業期間　令和３年４月１日～令和５年３月17日
監理担当者　岩倉市教育委員会　生涯学習課
主査　山内宏之
文化財指導員　平松久和
発掘調査担当者　株式会社アーキジオ中日本支店
担当調査員　高野裕二　（令和元年８月26日～令和２年３月31日）
大岡由記子（令和元年８月26日～令和２年３月31日）
阿部将樹　（令和元年８月26日～令和元年12月31日）
基峰　修　（令和２年１月１日～令和３年３月31日）
田中昌樹　（令和２年４月１日～令和３年３月31日）
丸山大貴　（令和２年４月１日～令和３年３月31日、
調査補助員：令和元年８月26日～令和２年３月31日）
調査補助員　小島宏貴　（令和元年８月26日～令和３年３月31日）
三島ゆかり（令和元年10月１日～令和３年３月31日）
村上　佳　（令和元年10月１日～令和３年３月31日）
後藤泰志　（令和元年10月１日～令和３年３月31日）
首藤有里　（令和２年４月１日～令和３年３月31日）
後藤秀夫　（令和２年４月１日～令和３年３月31日）
町田義哉　（令和２年４月１日～令和３年３月31日）
土木施工・安全管理
春本和浩　（令和元年８月26日～令和３年３月31日、現場代理人）
伊東孝次　（令和元年８月26日～令和３年３月31日）
津嶋雄朔　（令和元年８月26日～令和２年３月31日）
黒田忠明　（令和元年10月１日～令和２年６月30日）
柿島浩志　（令和２年７月１日～令和３年３月31日）
井上　一　（令和元年10月１日～令和３年３月31日）
河野　潤　（令和２年４月１日～令和３年３月31日）
測量施工　楠原　崇　（令和元年８月26日～令和３年３月31日）
安藤　均　（令和元年10月１日～令和３年３月31日）

安藤朱美　（令和元年10月１日～令和３年３月31日）

整理作業担当者　株式会社アーキジオ中日本支店

担当調査員　基峰　修　（現場代理人）

調査補助員　小島宏貴、三島ゆかり、村上　佳、後藤泰志

首藤有里、後藤秀夫

整理補助員　服部仁実、桂川　慧

4　発掘調査及び整理作業では、次の機関よりご指導・ご協力を賜った。（順不同、敬称略）

川井町・野寄町自治会　岩倉市文化財保護委員会　愛知県県民文化局　愛知県教育委員会

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 名古屋大学

東京国立博物館　あいち朝日遺跡ミュージアム　岩倉市立岩倉東小学校

NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク　大興建設株式会社　株式会社渡邊組

5　発掘調査は令和元年度（第１期）に１ａ～１ｅ区、令和２年度（第２期）に２ａ～２ｅ区・Ｒａ～Ｒｇ区の地区を設定し、地区分割して実施した。

6　発掘調査の遺構写真撮影は、高野・阿部（１ｅ区１面）、大岡（１ａ区・１ｂ区）、基峰（１ｅ区２面・２ｃ区・Ｒａ～Ｒｄ区）、小島（１ｃ区・１ｄ区・２ｂ区・２ｄ区・Ｒｅ区・Ｒｆ区）、丸山（２ａ区・２ｅ区・Ｒｇ区）が分担して実施した。

7　発掘調査の無人航空機（Unmanned aerial vehicle、本書ではＵＡＶと略称で記す）による空中写真撮影は、楠原（２ａ区・２ｅ区・Ｒｇ区）、三島（１ｅ区２面・２ｃ区・Ｒａ～Ｒｄ区・全景）、村上（１ａ～１ｄ区・１ｅ区１面・２ｂ区・２ｄ区・Ｒｅ区・Ｒｆ区）が分担して実施した。

8　整理作業は令和３年度（第３期）に遺構図・遺物等の整理と自然科学分析作業を行い、令和４年度（第４期）に遺構・遺物図版を作成して報告書を刊行した。

9　整理作業の遺物写真撮影は、基峰の指示のもと桂川が行い、一部を首藤が行った。赤外線カメラによる遺物写真撮影は首藤が行った。

10　整理作業での自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ東海支店に依頼し、その成果を第４章第１～第10節に掲載した。併せて保存処理作業に伴う樹種同定結果を、第４章第11節に掲載した。

11　第５章第１節に掲載したイラスト（想像図）は服部が作成した。

12　本書の編集は基峰が担当し、執筆は第１章第１節を山内、第２章を平松、その他は第４章以外を基峰、小島、三島、後藤（泰）、首藤、後藤（秀）が分担して実施した。文責は目次及び文末に記した。

13　発掘調査・整理作業後の出土品及び原図・写真等の記録類は、岩倉市教育委員会が保管している。

14　発掘調査及び整理作業の作業員及び参加者は次の通りである。（男女別・五十音順、敬称略）

［発掘調査］　青山隆生、秋田博海、浅井紀之、浅田義弘、浅野忠男、浅野範彦、阿部久邇夫、石川尚美、磯村侑希、井上健三、岩田寛仁、上杉康郎、鵜瀬道久、大嶋清美、岡三喜男、奥　淳一、奥野基史、奥藤純平、小栗弘二、尾本直彦、桂川　慧、河内正人、河野　潤、吉良多喜夫、草田克己、黒瀬　勅、葛谷友紀、倉地裕治、栗本和通、香田　徹、小澤和夫、児玉哲郎、古森敬博、近藤良成、後藤秀夫、坂口和彦、桜井賢二、佐久間興治、佐藤勝蔵、嶋　保、清水克己、白浜幸好、杉本和行、砂畑勇一、仙田友彦、高沢義幸、高田　茂、舘　栄二、田中　博、富田　守、中島雅晴、中野達雄、中村哲士、橋本正彦、長谷川農、服部勝敏、廣木　操、町田義哉、松岡　明、馬淵一代司、水野耕治、水野正博、満仲賢市、壬生　明、宮西昭夫、村瀬重厚、安行正一、山口　治、山田　顕、山本　彰、山本人士、横井正興、吉野政寿、池山有美、猪瀬美紀、鵜飼京子、大嶽友美、岡　峰代、岡本奈美、

荻本康美、柿島光代、河地裕子、京極早苗、佐々木寿子、首藤有里、高尾陽子、竹川美智子、田中敬子、椿　久美、鶴見千秋、寺澤なつ江、東海栄子、服部仁実、林　美香、平野昌子、舟橋知美、益口ヨシ子、松野博恵、三輪清子、森　淳子、横井理子、横井麻菜

［整理作業］　磯村侑希、小笠原寛仁、河野　潤、春本和浩、町田義哉、満仲賢市、村本一馬、大嶽友美、大橋洋子、大橋令子、岡本奈美、黒川静江、京極早苗、櫻井たか子、櫻井裕子、左高テル、嶋　智子、新保利恵、杉山睦美、土井玲子、畑シノブ、藤井美紀、藤岡美由紀、毛利嘉那

凡　例

1　本書で用いた座標は世界測地系Ⅶ系である。挿図の方位は真北、水平基準は海抜高である。

2　層序（地層）および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1995年版』に拠る。

3　遺構記号は、掘立柱建物：ＳＢ、竪穴建物：ＳＩ、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、ピット：ＳＰ、カマド：ＳＬ、その他の遺構：ＳＸ、自然流路：ＮＲを用いた。

4　遺構実測図の縮尺は挿図中に縮尺を示した。

5　遺物実測図の縮尺は原則１/３であるが、その他の縮尺の場合は挿図中に縮尺を示した。

6　挿図中の網掛けは、次のとおりであるが、必要ある場合は個々の遺構・遺物図の脇に個別に記載した。　□：地山　■：須恵器の断面　■：灰釉陶器の断面　■：墨書文字

7　本文編第３章第２節遺構の【堆積土】で記載した「(数字)」は遺構図版の該当する断面図中の数字と一致する。

本文編　目次

例　言
凡　例

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査にいたる経緯 …… （山内）… 1
第２節　発掘と整理作業の経過 …… （基峰）… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 17
第１節　遺跡の位置と地形 …… （平松）… 17
第２節　歴史的環境 …… （平松）… 18

第３章　調査の方法と成果 …… 23
第１節　調査の方法と層序 …… （基峰）… 23
第２節　遺構 …… 24
（１）１ａ区 …… （首藤）… 24
（２）１ｂ区 …… （首藤・基峰・後藤秀）… 27
（３）１ｃ区 …… （小島・後藤泰）… 37
（４）１ｄ区 …… （小島・後藤泰）… 60
（５）１ｅ区 …… 76
①１面（上層） …… （三島）… 76
②２面（下層） …… （基峰）… 79
（６）２ａ区 …… 82
①１面（上層） …… （首藤）… 82
②２面（下層） …… （後藤泰）… 95
（７）２ｂ区 …… （小島・首藤）… 98
（８）２ｃ区 …… （基峰）… 116
（９）２ｄ区 …… （小島）… 138
(10) ２ｅ区 …… 145
①１面（上層） …… （後藤秀）… 145
②２面（下層） …… （後藤秀）… 152
(11) Ｒａ区 …… （基峰）… 153
(12) Ｒｂ区 …… 162
①１面（上層） …… （首藤）… 162
②２面（下層） …… （首藤）… 163
(13) Ｒｃ区 …… （三島）… 166
(14) Ｒｄ区 …… （後藤泰）… 169
(15) Ｒｅ区 …… 175
①１面（上層） …… （小島）… 175

②２面（下層）　……（小島）… 176
(16) Ｒｆ区　…… 176
①１面（上層）　……（小島）… 176
②２面（下層）　……（小島）… 178
(17) Ｒｇ区　…… 180
①１面（上層）　……（後藤秀）… 180
②２面（下層）　……（後藤秀）… 184
(18) 旧五条川（１ｃ区・１ｄ区・１ｅ区・２ｃ区・Ｒｆ区）　……（基峰）… 185
第３節　遺物　…… 186
（１）１ａ区　……（後藤秀）… 186
（２）１ｂ区　……（後藤秀）… 189
（３）１ｃ区　……（小島・後藤泰）… 194
（４）１ｄ区　……（小島・後藤泰）… 205
（５）１ｅ区　…… 213
①１面（上層）　……（三島）… 213
②２面（下層）　……（基峰）… 215
（６）２ａ区　…… 216
①１面（上層）　……（後藤秀・首藤）… 216
②２面（下層）　……（後藤泰）… 221
（７）２ｂ区　……（小島）… 224
（８）２ｃ区　……（基峰）… 232
（９）２ｄ区　……（小島）… 239
(10) ２ｅ区　…… 240
①１面（上層）　……（後藤秀）… 240
②２面（下層）　……（後藤秀）… 243
(11) Ｒａ区　……（基峰）… 244
(12) Ｒｂ区　…… 246
①１面（上層）　……（首藤）… 246
②２面（下層）　……（首藤）… 248
(13) Ｒｃ区　……（三島）… 248
(14) Ｒｄ区　……（後藤泰）… 249
(15) Ｒｅ区　…… 250
①１面（上層）　……（小島）… 250
②２面（下層）　……（小島）… 250
(16) Ｒｆ区　…… 251
①１面（上層）　……（小島）… 251
②２面（下層）　……（小島）… 251
(17) Ｒｇ区　…… 252
①１面（上層）　……（後藤秀）… 252
②２面（下層）　……（後藤秀）… 253

第４章　自然科学分析 …… 255
第１節　放射性炭素年代測定 ……（パレオ・ラボ）… 255
第２節　珪藻分析 ……（パレオ・ラボ）… 259
第３節　花粉分析 ……（パレオ・ラボ）… 267
第４節　プラント・オパール分析 ……（パレオ・ラボ）… 272
第５節　出土木製品の樹種同定 ……（パレオ・ラボ）… 275
第６節　出土した大型植物遺体（２ｃ区） ……（パレオ・ラボ）… 278
第７節　出土した大型植物遺体（２ｃ区以外） ……（パレオ・ラボ）… 280
第８節　１ｂ区・Ｒａ区掘立柱建物群の
南東側硬化面埋土から得られた昆虫片……（パレオ・ラボ）… 283
第９節　出土した動物遺体 ……（パレオ・ラボ）… 285
第10節　出土須恵器の蛍光Ｘ線分析 ……（パレオ・ラボ）… 286
第11節　【補足】出土木製品の保存処理作業に伴う
樹種同定 ……（パリノ・サーヴェイ）… 289

第５章　総括 …… 295
第１節　遺構 ……（基峰・小島・後藤秀・三島）… 295
第２節　遺物 ……（後藤泰・小島・基峰・首藤・後藤秀・三島）… 313
第３節　まとめ ……（基峰）… 338

引用・参考文献
報告書抄録

本文編　図目次

第２章　２－図１　下田南遺跡位置図 …… 17
２－図２　下田南遺跡と周辺（岩倉市内・岩倉市外）の遺跡分布図 …… 19
第４章　４－図１　歴年較正結果 …… 258
４－図２　各地点の珪藻化石分布図 …… 265
４－図３　花粉分布図 …… 270
４－図４　下田南遺跡における植物珪酸体分布図 …… 273
４－図５　各元素分布図 …… 288
４－図６　自然科学分析の試料採取地点 …… 293・294
第５章　５－図１　下田南遺跡Ⅰ～Ⅷ期変遷図 …… 297
５－図２　１ｂ区・Ｒａ区古代倉庫群の配置と復元想定 …… 299
５－図３　１ｂ区・Ｒａ区古代倉庫群の想像図 …… 301・302
５－図４　下田南遺跡の竪穴建物規模 …… 304
５－図５　下田南遺跡と周辺の超大型竪穴建物 …… 305
５－図６　２ｃ区古代竪穴建物の構造変遷 …… 307
５－図７　近世の岩倉市域村落図（上図）・川井村図（下図） …… 310
５－図８　下田南遺跡周辺の地籍図・等高線図 …… 311
５－図９　旧五条川（旧河道）の復元想定 …… 312
５－図10　２ａ区２面ＳＤ166ほか（境界溝）から出土した土器の器種別出土地点 … 315
５－図11　円面硯の部位名称・種類・分類・出土陶硯の時期・参考事例と法量 …… 317
５－図12　愛知県出土の主要な石帯（腰帯具） …… 320
５－図13　Ｒｇ区出土軒丸瓦の復元と周辺出土の坂田寺亜式軒丸瓦 …… 321
５－図14　出土した漁撈錘（管状土錘・陶錘）の形状分類と比率 …… 323
５－図15　出土した製塩土器と残存部位の比率 …… 325
５－図16　出土した土馬と出土地区別比率・土馬復元図 …… 326
５－図17　出土した紡錘車の最大径・重さの分類 …… 327
５－図18　出土した須恵器短頸壺（鉢）と周辺出土の有蓋四耳壺（短頸壺） …… 329
５－図19　主要な掘立柱建物の分布と礎板・柱根に使用された樹種 …… 330
５－図20　出土した墨書土器 …… 333
５－図21　各地出土の賽子（サイコロ）と中世の賽磨（職人） …… 335
５－図22　下田南遺跡と権六遺跡の馬小屋と想定できる建物 …… 337

本文編　表目次

第２章　２－表１　下田南遺跡周辺の遺跡一覧（岩倉市内） …… 20
２－表２　下田南遺跡周辺の遺跡一覧（岩倉市外） …… 21
第４章　４－表１　測定試料および処理 …… 255
４－表２　放射性炭素年代測定および歴年較正の結果 …… 256

４－表３　分析試料一覧 …… 259
４－表４　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 264
４－表５　分析試料一覧 …… 267
４－表６　産出花粉種子一覧表 …… 269
４－表７　分析試料一覧 …… 272
４－表８　試料１g当りのプラント・オパール個数 …… 273
４－表９　樹種同定結果 …… 276
４－表10　下田南遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧 …… 276
４－表11　下田南遺跡出土の大型植物遺体（種実） …… 279
４－表12　下田南遺跡から出土した大型植物遺体（１） …… 282
４－表13　下田南遺跡から出土した大型植物遺体（２） …… 282
４－表14　下田南遺跡の動物遺体同定結果 …… 285
４－表15　分析対象一覧 …… 286
４－表16　蛍光Ｘ線分析結果 …… 287
４－表17　出土木製品の樹種同定（保存処理）結果 …… 289
４－表18　出土木製品の樹種同定（保存処理）結果一覧 …… 290
第５章　５－表１　郡家（評家）と周辺寺院 …… 303
５－表２　２ａ区２面ＳＤ166ほか（境界溝）から出土した
土器群の器種別個数と割合比率 …… 313
５－表３　出土した墨書土器一覧表 …… 332
５－表４　下田南遺跡と権六遺跡の馬小屋と想定できる建物一覧 …… 336

本文編　図版目次

第４章　４－図版１　産出した珪藻化石 …… 266
４－図版２　１ｄ区の西側トレンチの2459から産出した花粉化石 …… 271
４－図版３　産出した植物珪酸体 …… 274
４－図版４　下田南遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真 …… 277
４－図版５　下田南遺跡から出土した大型植物遺体 …… 279
４－図版６　下田南遺跡から出土した大型植物遺体 …… 282
４－図版７　下田南遺跡から得られた昆虫化石 …… 284
４－図版８　下田南遺跡出土の動物遺体 …… 285
４－図版９　分析対象須恵器 …… 287
４－図版10　下田南遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真 …… 291
第５章　５－図版１　岩倉土地整理図 川井村之図:下田南全図（１ａ区・１ｂ区を含む） … 308
５－図版２　岩倉土地整理図 川井村之図:石両全図（２ａ区・２ｂ区を含む） …… 308

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

下田南遺跡は、愛知県岩倉市南西部の川井町に所在する。平成27年以降、遺跡の所在する岩倉市川井町地内では、愛知県企業庁と岩倉市の共同で岩倉川井野寄地区内陸用地造成事業が計画・推進された。事業地周辺には、周知の埋蔵文化財包蔵地である権現山遺跡、薬師堂廃寺が所在しており、遺跡の存在が想定されたため、愛知県教育委員会、岩倉市教育委員会によって平成28、29年に試掘調査（平成28年26箇所、平成29年15箇所）が実施された。調査の結果、土坑・溝等の遺構と須恵器・土師器・山茶碗等の遺物が確認され、周辺の地形からみて旧五条川の自然堤防に形成された古墳時代から中世にいたる集落跡が所在するとして、愛知県埋蔵文化財包蔵地台帳への新規記載が行われた。

開発事業の対象区域は、下田南遺跡の範囲に該当するため、埋蔵文化財の取扱いについて愛知県企業庁、愛知県教育委員会、岩倉市企業立地推進室、岩倉市教育委員会による協議を実施し、平成29年度の範囲確認調査（30箇所）を経て、発掘調査範囲の決定と記録保存を行うことで合意した。

遺跡の発掘調査・整理作業は、令和元年６月24日付けで岩倉市と株式会社アーキジオ中日本支店との間で業務委託契約が締結され、岩倉市教育委員会の監理のもと令和元年６月24日～令和５年３月21日の期間で実施することになった。（第１期：発掘調査 令和元年６月25日～令和２年３月31日、第２期：発掘調査 令和２年４月１日～令和３年３月31日、第３期：整理作業 令和３年４月１日～令和４年３月31日、第４期：整理作業・報告書作成 令和４年４月１日～令和５年３月21日）

文化財保護法第92条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」は、株式会社アーキジオ中日本支店から令和元年７月19日付けで岩倉市教育委員会を経由して愛知県教育委員会に提出され、令和元年８月９日付け31教生第1596号通知によって受理された。

「埋蔵文化財発掘調査の届出」の受理後、発掘調査の実施に関する基本的事項について、令和元年８月16日付けで岩倉市・株式会社アーキジオ中日本支店・岩倉市教育委員会の三者で「岩倉川井野寄地区内陸用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結し、令和元年８月26日から現地での発掘調査を開始した。

（山内）

第２節　発掘と整理作業の経過

［令和元年度（第１期）］

令和元年６月25日から発掘調査の準備を開始し、先ず開発事業（工事）の着手時期と工程を考慮して効率よく発掘調査を実施するために、調査区域を令和元年度（第１期）に１ａ区～１ｅ区の５地区、令和２年度（第２期）に２ａ区～２ｅ区の５地区に分割し、長期にわたる発掘調査を円滑に行うための実施計画書（工程表）を策定した。併せて、現地での状況確認や調査区の設定、作業員募集、建設作業用機械（バックホー・クローラダンプなど）の搬入や現場事務所の設営に関わる準備を行った。

発掘調査は、「埋蔵文化財発掘調査の届出」の受理と「埋蔵文化財の実施に関する三者協定書」の締結後、同年８月26日から現地での調査作業を開始した。さらに９月４日に作業員募集に伴う説明会を岩倉市スポーツセンターで実施した。

着手開始の地区順に発掘作業の経過を記載する。

１ｃ区：調査担当は高野、補助員は小島・後藤(泰)で発掘作業を行った。８月26日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、９月２日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。表土掘削作業と並行して実施した遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、10月16日から遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。飛鳥～古代の総柱構造の掘立柱建物群などが見つかり、須恵器円面硯２点や暗文土器などの遺物が出土した。なお、１月24日に転倒によって作業員１名が手首に怪我をする労災事故が発生した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の西側を11月26日、東側を２月７日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区の西側が１月７日、東側が２月10日に行われた。補足作業を行い２月19日に調査終了し、調査面積は2,802㎡となった。

１ｂ区：調査担当は大岡、補助員は丸山・村上で発掘作業を行った。９月17日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、翌18日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。表土掘削作業と並行して実施した遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、９月25日から遺構の掘り下げ、図面作成･土色観察･写真撮影･測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。飛鳥～古代の竪穴建物と掘立柱建物群などが見つかり、須恵器･土師器などの遺物が出土した。なお、10月24日に滑って作業員１名が右肩に怪我する労災事故が発生した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の西側を11月26日、東側を12月13日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区の西側が12月12日、東側が１月７日に行われた。残務作業を行い１月９日に調査終了し、調査面積は2,893㎡となった。

１ｅ区１面：調査担当は阿部、補助員は三島・村上で発掘作業を行った。10月７日からバックホーを使用して表土層の上層に敷きつめられた盛土の掘削作業を開始した。盛土除去後の10月23日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、10月28日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。表土掘削作業と並行して実施した遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、11月15日にＵＡＶを使用して遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。北側を中心に中世以降の溝などが見つかり、山茶碗や獣骨などの遺物が出土した。また、南側では近代以前の旧五条川が確認できた。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の西側を11月８日、東側を12月11日、全体を12月16日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に12月20日に行われた。12月20日に調査終了し、１面の調査面積は2,908㎡となった。

１ｅ区２面：調査担当は基峰、補助員は三島で発掘作業を行った。１面調査終了後の１月６日からバックホーを使用して２面の遺構検出のための包含層の掘削作業を開始し、１月９日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。包含層掘削作業と並行して実施した遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、１月17日に調査区全体を対象にＵＡＶを使用して遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。飛鳥～古代の東西に延びる道路状遺構などが見つかり、須恵器・土師器などの遺物が出土した。調査区外になるが道路状遺構の東には薬師堂廃寺跡（飛鳥～古代）が存在し、その関連性が注目された。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の全体を対象に１月31日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に２月10日に行われた。現地説明会に伴う補足作業を行い２月14日に調査終了し、２面の調査面積は2,908㎡となった。

１ａ区：調査担当は大岡、補助員は丸山・村上で発掘作業を行った。12月18日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、翌19日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。表土掘削作業と並行して実施した遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、１月16日に調査区西側を対象にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。中世以降の溝などが見つかり、山茶碗などの遺物が出土した。なお、１月７日に転倒によって作業員１名が怪我する労災事故が発生した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に２月12日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区の西側が２月７日、東側が２月21日に行われた。残務作業を行い２月26日に調査終了し、調査面積は2,824㎡となった。

１ｄ区：調査担当は高野・基峰、補助員は三島・丸山・小島・後藤(泰)で発掘作業を行った。１月21日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、２月６日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。表土掘削作業と並行して実施した遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の西側を２月７日、東側を２月28日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。古代の一辺10ｍ以上の大型竪穴建物（ＳＩ609）などが見つかり、須恵器円面硯１点や石製紡錘車、灰釉陶器・山茶碗、羽口（製鉄関連）などの遺物が出土した。また、西端で近代以前の旧五条川が確認できた。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の西側を２月28日、全体を３月７日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に３月12日に行われた。３月12日に調査終了し、３月31日まで残務作業を行った。調査面積は2,842㎡となった。

１ａ区～１ｅ区全ての調査区での排土は、バックホーとダンプトラックなどを使用して調査区外の開発事業区域内に移動して、整地し仮保管をした。

１ａ区～１ｅ区全ての調査区を合わせた調査面積は17,177㎡となった。

第１回現地説明会：一般を対象にした調査成果の初回報告として、２月15日の９時～15時にかけて第１回現地説明会を開催した。１ｂ区の一部分の掘立柱建物、１ｃ区の竪穴建物・掘立柱建物群、１ｅ区２面の道路状遺構などの飛鳥～古代を中心とした遺構の調査成果と出土遺物を公開し、見学者は568人であった。

[令和２年度（第２期)]

２ａ区～２ｅ区の５地区に加えて、令和元年度の調査結果をふまえて各調査区を分断する道路部分についても遺構の存在が予測できたため、Ｒａ区～Ｒｇ区の７地区に分割して発掘調査を実施することになった。新型コロナウイルス感染症の拡大予防対策のため、４月28日～５月10日までの期間は発掘作業を休止とし，現地説明会も開催期間を延期して感染症の予防対策を実施したうえで行うことになった。また、６月４日に２ａ区１面で発生した労災事故によって、６月５日～８日までの期間は発掘作業を休止とした。

先に２ａ区～２ｅ区、次にＲａ区～Ｒｇ区について、着手開始の順に発掘作業の経過を記載する。

２ａ区１面：調査担当は高野・田中・丸山、補助員は後藤(秀)で発掘作業を行った。先行して２月28日からバックホーを使用した表土層の掘削作業を開始し、４月６日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の西側を４月９日、東側を４月24日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。中世以降の溝などが

見つかり、山茶碗などの遺物が出土した。なお、６月４日にベルトコンベアーの落下によって作業員１名が大怪我をする労災事故が発生し、作業を休止して６月15日から再開した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に８月４日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に８月４日に行われた。補足作業を行い８月７日に調査終了し、１面の調査面積は3,141㎡となった。

２ａ区２面：調査担当は田中・丸山、補助員は後藤(秀)で発掘作業を行った。１面調査終了後、８月17日からバックホーを使用して２面の遺構検出のための包含層掘削作業と並行して作業員による包含層掘削･遺構検出作業を開始した。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の東側を８月31日、西側を10月16日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。飛鳥～古代の溝などが見つかり、溝（ＳＤ166）からは多くの土師器・須恵器がまとまって出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の東側を10月１日、西側を10月30日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区の東側が10月７日、西側が11月４日に行われた。11月４日に調査を終了し、２面の調査面積は3,141㎡となった。

２ｂ区：調査担当は田中、補助員は小島･村上･町田で発掘作業を行った。４月６日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、５月11日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の西側を５月15日、東側を５月22日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。古代～飛鳥の竪穴建物や掘立柱建物などが見つかり、勾玉１点などのほかに、東端の２ａ区２面ＳＤ166から続く溝（ＳＤ005・ＳＫ027）からは多くの土師器・須恵器がまとまって出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の東側を８月５日、西側を10月30日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区の東側が８月５日、西側が11月４日に行われた。11月４日に調査終了し、調査面積は3,092㎡となった。

２ｅ区１面：調査担当は田中・丸山、補助員は後藤(秀)で発掘作業を行った。８月17日からバックホーを使用して表土層の掘削作業と並行して作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、９月16日に調査区南側のＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、２ａ区２面の作業優先のために一旦作業を休止した。10月５日から作業を再開し、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。飛鳥～古代、中世の溝などが見つかり、須恵器･土師器、山茶碗などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の南側を12月１日、北側を１月14日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に１月21日に行われた。溜まった雨や雪による排水作業を行い１月29日に調査終了し、１面の調査面積は2,973㎡となった。

２ｅ区２面：調査担当は田中・丸山、補助員は後藤(秀)で発掘作業を行った。１面調査終了後、２ｅ区の南側半分を対象に２月１日からバックホーを使用して２面の遺構検出のための包含層の掘削作業を開始し、並行して作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、２月９日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成･土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。飛鳥～古代の竪穴建物や溝などが見つかり、須恵器・土師器などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの

記録作業の終了後、調査区全体を対象に２月26日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に３月４日に行われた。３月４日に調査終了し、２面の調査面積は1,637㎡となった。

２ｃ区：調査担当は基峰、補助員は三島・後藤(泰)・首藤・小島・村上・町田で発掘作業を行った。10月22日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、11月２日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の東端を11月５日、西側から東側の順で11月９日・12日、１月６日・８日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。古墳～平安の竪穴建物や掘立柱建物・溝などが見つかり、須恵器や土師器、灰釉陶器・山茶碗などのほかに溝（ＳＤ700）から石帯（巡方）１点が出土した。また、南端では近代以前の旧五条川の存在が一部分ではあるが確認できた。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の東端を11月13日、西側を12月23日、冬季の完掘遺構の管理状況を考慮して東端を除く東側を１月31日と２月12日・24日の数回に分けてＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に２月25日に行われた。残務作業を行い２月26日に調査終了し、調査面積は3,163㎡となった。

２ｄ区：調査担当は田中、補助員は小島・町田で発掘作業を行った。11月11日からバックホーを使用して表土層の掘削作業を開始し、11月13日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の北側を11月18日、中央を11月27日、東側を12月４日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。古墳～中世の溝・土坑などが見つかり、須恵器・土師器のほかに山茶碗などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の西側を12月23日、東側を１月19日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区の西側が12月24日、東側が１月21日に行われた。１月21日に調査終了し、調査面積は2,952㎡となった。

Ｒａ区：調査担当は基峰、補助員は三島・後藤(泰)・首藤で発掘作業を行った。５月11日からバックホーを使用して側溝と道路舗装・敷砕石などの撤去作業を開始し、５月14日から旧表土層の掘削作業を開始した。旧表土層掘削後、５月25日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の東側から西側の順に６月１日・２日・３日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。１ｂ区と１ｃ区に挟まれた東西に伸びる範囲であるため、１ｂ区・１ｃ区の遺構と一体となる飛鳥～古代の竪穴建物や掘立柱建物などが見つかり、須恵器・土師器などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、東側から西側に向かって進めた完掘作業に合わせて、調査区の東端を６月23日、中央を７月31日、西端を８月18日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に８月21日に行われた。８月21日に調査終了し、調査面積は844㎡となった。

Ｒｃ区：調査担当は基峰、補助員は三島・後藤(泰)・首藤で発掘作業を行った。７月13日からバックホーを使用して側溝と道路舗装・敷砕石などの撤去作業を開始し、７月16日から旧表土層の掘削作業を開始した。旧表土層掘削後、８月18日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の南側を８月19日、北側を８月31日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、

遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。１ｃ区・１ｄ区と２ｂ区・２ｃ区に挟まれた南北に伸びる範囲であるため、１ｃ区・１ｄ区・２ｂ区・２ｃ区の遺構と一体となる飛鳥～古代の竪穴建物や掘立柱建物、中世の溝などが見つかり、須恵器・土師器、山茶碗などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、南側から北側に向かって進めた完掘作業に合わせて、調査区の南側を８月27日、北側を９月30日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区の南側が９月１日、北側が10月２日に行われた。10月２日に調査終了し、調査面積は397㎡となった。

Ｒｂ区１面：調査担当は基峰、補助員は三島・後藤（泰）・首藤で発掘作業を行った。７月27日からバックホーを使用して側溝と道路舗装・敷砕石などの撤去作業を開始し、８月27日から旧表土層の掘削作業を開始した。旧表土層掘削後、８月31日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、９月２日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。１ｂ区と２ａ区に挟まれた南北に伸びる範囲であるため、１ｂ区・２ａ区の遺構と一体となる中世の溝などが見つかり、山茶碗などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に９月23日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に９月24日に行われた。９月24日に調査終了し、１面の調査面積は272㎡となった。

Ｒｂ区２面：調査担当は基峰、補助員は三島・後藤（泰）・首藤で発掘作業を行った。１面調査終了後、９月26日からバックホーを使用して２面の遺構検出のための包含層の掘削作業を開始し、９月30日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、９月30日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。１ｂ区・２ａ区の遺構と一体となる飛鳥～古代の溝などが見つかり、須恵器・土師器などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に10月５日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に10月７日に行われた。10月７日に調査終了し、２面の調査面積は272㎡となった。

Ｒｄ区：調査担当は基峰、補助員は三島・後藤（泰）・首藤で発掘作業を行った。９月１日からバックホーを使用して側溝と道路舗装・敷砕石などの撤去作業を開始し、９月30日から旧表土層の掘削作業を開始した。旧表土層掘削後、10月５日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の西側から東側の順に10月５日・14日・28日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。２ａ区と２ｂ区に挟まれた東西に伸びる範囲であるため、２ａ区・２ｂ区の遺構と一体となる飛鳥～古代の竪穴建物や掘立柱建物、中世の溝などが見つかり、須恵器・土師器、山茶碗などの遺物が出土した。また、東端の２ａ区２面ＳＤ166から続く溝（ＳＤ162）からは多くの土師器・須恵器がまとまって出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、西側から東側に向かって進めた完掘作業に合わせて、調査区の西端を10月16日、中央を10月27日、東端を11月６日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に11月12日に行われた。11月12日に調査終了し、調査面積は1,085㎡となった。

Ｒｇ区１面：調査担当は田中・丸山、補助員は後藤（秀）で発掘作業を行った。12月９日からバック

ホーを使用して側溝と道路舗装・敷砕石などの撤去作業を開始し、12月10日から旧表土層の掘削作業を開始した。旧表土層掘削後、12月14日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10mグリッド杭を設置し、調査区の東側を１月７日、西側を１月26日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。２ｄ区と２ｅ区に挟まれた東西に伸びる範囲であるため、２ｄ区･２ｅ区の遺構と一体となる中世の溝などが見つかり、山茶碗などの遺物が出土した。また、調査区外の東側に位置する薬師堂廃寺跡（飛鳥～古代）から出土した軒丸瓦と同様の文様を持つ軒丸瓦破片１点が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に２月８日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に２月９日に行われた。２月９日に調査終了し、１面の調査面積は1,078㎡となった。

Ｒｇ区２面：調査担当は田中・丸山、補助員は後藤(秀)で発掘作業を行った。１面調査終了後、２月10日からバックホーを使用して２面の遺構検出のための包含層の掘削作業を開始し、並行して作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10mグリッド杭を設置し、２月13日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。２ｄ区・２ｅ区の遺構と一体となる古墳～古代の溝などが見つかり、須恵器・土師器などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の一部を２月24日、全体を２月26日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に３月４日に行われた。３月４日に調査終了し、２面の調査面積は688㎡となった。

Ｒｆ区１面：調査担当は田中、補助員は小島・町田で発掘作業を行った。12月21日からバックホーを使用して側溝と道路舗装・敷砕石などの撤去作業を開始し、１月６日から旧表土層の掘削作業を開始した。旧表土層掘削後、１月13日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10mグリッド杭を設置し、調査区の南側を１月14日、北側を１月20日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。１ｅ区・２ｅ区と２ｂ区・２ｃ区に挟まれた南北に伸びる範囲であるため、１ｅ区・２ｂ区・２ｃ区・２ｅ区の遺構と一体となる中世の溝などが見つかり、山茶碗などの遺物が出土した。また、南端で近代以前の旧五条川が確認できた。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区の南側を１月29日、北側を２月４日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に２月９日に行われた。２月９日に調査終了し、１面の調査面積は422㎡となった。

Ｒｆ区２面：調査担当は田中、補助員は小島・町田で発掘作業を行った。１面調査終了後、２月10日からバックホーを使用して２面の遺構検出のための包含層の掘削作業を開始し、並行して作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10mグリッド杭を設置し、２月12日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。１ｅ区・２ｂ区・２ｃ区・２ｅ区の遺構と一体となる飛鳥～古代の掘立柱建物･溝などが見つかり､須恵器･土師器などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に２月23日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に２月25日に行われた。２月25日に調査終了し、２面の調査面積は422㎡となった。

Ｒｅ区１面：調査担当は田中、補助員は小島・町田で発掘作業を行った。12月22日からバックホー

を使用して側溝と道路舗装・敷砕石などの撤去作業を開始し、１月６日から旧表土層の掘削作業を開始した。旧表土層掘削後、１月19日から作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、調査区の南側を１月26日、北側を２月８日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。２ａ区と２ｄ区に挟まれた南北に伸びる範囲であるため、２ａ区･２ｄ区の遺構と一体となる中世の溝･土坑などが見つかり、山茶碗などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に２月13日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に２月17日に行われた。２月17日午前に調査終了し、１面の調査面積は274㎡となった。

Ｒｅ区２面：調査担当は田中、補助員は小島・町田で発掘作業を行った。１面調査終了後、２月17日午後からバックホーを使用して２面の遺構検出のための包含層の掘削作業を開始し、並行して作業員による包含層掘削・遺構検出作業を始めた。遺構検出後に10ｍグリッド杭を設置し、２月12日にＵＡＶによる遺構検出面の空中写真撮影を行い、遺構の掘り下げ、図面作成・土色観察・写真撮影・測量などの記録、遺物取り上げと土壌試料採取などの作業を実施した。２ａ区・２ｄ区の遺構と一体となる飛鳥～古代の溝などが見つかり、須恵器・土師器などの遺物が出土した。遺構完掘と測量などの記録作業の終了後、調査区全体を対象に２月25日にＵＡＶによる空中写真撮影を行った。監理担当者による発掘作業完了の確認は、調査区全体を対象に２月25日に行われた。２月25日に調査終了し、２面の調査面積は156㎡となった。

２ａ区～２ｅ区とＲａ区～Ｒｇ区全ての調査区での排土はバックホーとダンプトラックなどを使用して調査区外の開発事業区域内に移動して、整地し仮保管をした。また、Ｒａ区～Ｒｇ区から撤去したコンクリート側溝・道路アスファルト・敷砕石については、バックホーとダンプトラックなどを使用して調査区外の開発事業区域内に移動して、種類ごとに分別して仮保管を行った。

２ａ区～２ｅ区とＲａ区～Ｒｇ区全ての調査を３月４日までに終了し、全ての調査区での調査面積は26,009㎡となった。

埋め戻しについては、当初は行わない予定であったが、工事主体者と工事業者との協議にもとづき、バックホーとブルドーザーなどを使用して完掘遺構の敷き均し程度の各調査区の埋め戻しを実施し、３月25日までに埋め戻し作業の完了と撤収を行い、発掘調査を完了した。

株式会社アーキジオ中日本支店から発掘作業完了報告票・調査記録写真・埋蔵文化財保管証を添付のうえ､岩倉市教育委員会を経由して３月25日付けで愛知県知事に「埋蔵文化財発掘作業の完了報告」を提出し、４月５日付け３文芸第48号にて愛知県知事に受理された。

第２回現地説明会：一般を対象にした調査成果の中間報告として、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策として密集を防ぎ口頭説明を行わないなどの制限を設けて、第２回現地説明会を10月３日の９時～15時にかけて実施した。２ａ区２面の溝（ＳＤ166)、２ｂ区の竪穴建物・掘立柱建物などの飛鳥～古代にかけての遺構、２ｅ区１面の中世以降の遺構検出状況といった調査成果と出土遺物を公開し、見学者は229人であった。

第３回現地説明会：一般を対象にした調査成果の最終報告として、第２回現地説明会と同様に新型コロナウイルス感染症拡大予防対策として密集を防ぎ口頭説明を行わないなどの制限を設けて、第３回現地説明会を１月16日の９時～15時にかけて実施した。２ｄ区と２ｅ区の中世以降の溝・土坑などの遺構の調査成果と全ての調査区から出土した代表的な出土遺物を公開した。見学者は164人であった。

［令和３年度（第３期）］

整理担当は基峰、補助員は三島・小島・後藤(秀)・後藤(泰)・首藤で整理作業を行った。４月１日から発掘作業による図面・写真などの記録類、コンテナ580箱相当の出土遺物の整理作業を開始した。図面の整理は平面・断面図の整合・図化などを行い、遺物の整理作業は洗浄・注記後に遺構出土のもので特徴的なものと全体の器形などがわかるものを優先して抽出し、接合・復元、実測・観察・図化した。遺物写真はデジタルカメラを使用して、図化したものを優先して撮影した。

土壌試料採取したものについて、株式会社パレオ・ラボ東海支店に依頼して、自然科学分析作業を実施した。

［令和４年度（第４期）］

第３期から継続して図面・写真などの記録類と出土遺物の整理作業を行った。報告書の遺構・遺物の実測図版と写真図版、遺物観察表などの作成と並行して原稿執筆・編集作業を行い、令和５年３月21日に本書を刊行した。整理作業と並行して発掘･整理など作業の成果品を作成し、業務を完了した。

（基峰）

発掘作業日誌抄

令和元年度（第１期）

令和元年

〔６月〕

25日：発掘調査の準備開始。

〔８月〕

26日：発掘作業の開始。

１ｃ区、バックホーでの表土層掘削作業の開始。

〔９月〕

２日：１ｃ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。

17日：１ｂ区、バックホーでの表土層掘削作業の開始。

18日：１ｂ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。

25日：１ｂ区、遺構掘り下げ、写真・測量など記録作業の開始。

〔10月〕

７日：１ｅ区１面、バックホーでの表土層上面盛土掘削作業の開始。

16日：１ｃ区、遺構掘り下げ、写真・測量など記録作業の開始。

23日：１ｅ区１面、バックホーでの表土層掘削作業の開始。

24日：１ｂ区、労災事故の発生（作業員１名怪我）。

28日：１ｅ区１面、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。

〔11月〕

８日：１ｅ区１面、西側の遺構完掘・写真・測量など記録作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

15日：１ｅ区１面、遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など記録作業の開始。

26日：１ｂ区、西側の遺構完掘・写真・測量など記録作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

１ｃ区、西側の遺構完掘・写真・測量など記録作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

〔12月〕

11日：１ｅ区１面、東側の遺構完掘・写真・測量など記録作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
12日：１ｂ区、西側の発掘作業完了確認（市教委）。
13日：１ｂ区、東側の遺構完掘・写真・測量など記録作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
16日：１ｅ区１面、西側の遺構完掘・写真・測量など記録作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
18日：１ａ区、バックホーでの表土層掘削作業の開始。
19日：１ａ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
20日：１ｅ区１面、発掘作業完了確認（市教委）。
　　１ｅ区１面、調査終了（面積2,908㎡）。
28日：年末の作業休止。

令和２年

〔１月〕

６日：作業の再開。
　　１ｅ区２面、バックホーでの包含層掘削作業の開始。
７日：１ｂ区、東側の発掘作業完了確認（市教委）。
　　１ｃ区、西側の発掘作業完了確認（市教委）。
　　１ａ区、労災事故の発生（作業員１名怪我）。
９日：１ｅ区２面、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
　　１ｂ区、調査終了（面積2,893㎡）。
16日：１ａ区、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
17日：１ｅ区２面、遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
21日：１ｄ区、バックホーでの表土層掘削作業の開始。
24日：１ｃ区、労災事故の発生（作業員１名怪我）。
31日：１ｅ区２面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

〔２月〕

６日：１ｄ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
７日：１ｄ区、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
　　１ｃ区、東側の遺構完掘・写真・測量など作業終了、遺構完掘空中写真撮影。
　　１ａ区、西側の発掘作業完了確認（市教委）。
10日：１ｃ区、東側の発掘作業完了確認（市教委）。
　　１ｅ区２面、発掘作業完了確認（市教委）。
12日：１ａ区、遺構完掘・写真・測量など作業終了、遺構完掘空中写真撮影。
14日：１ｅ区２面、調査終了（面積2,908㎡）。
15日：第１回現地説明会の開催（見学者568人）。
19日：１ｃ区、調査終了（面積2,802㎡）。
21日：１ａ区、東側の発掘作業完了確認（市教委）。

26日：１ａ区、調査終了（面積2,824㎡）。
28日：１ｄ区、東側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
１ｄ区、西側の遺構完掘・写真・測量など作業終了、遺構完掘空中写真撮影。
２ａ区１面、バックホーでの表土層掘削作業の開始。

〔３月〕
７日：１ｄ区、東側の遺構完掘・写真・測量など作業終了、遺構完掘空中写真撮影。
12日：１ｄ区、発掘作業完了確認（市教委）。
１ｄ区、調査終了（面積2,842㎡）。
１ａ区～１ｅ区全ての発掘作業完了（面積17,177㎡）。
31日：残務作業の終了。

令和２年度（第２期）

令和２年

〔４月〕
６日：２ａ区１面、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
２ｂ区、バックホーでの表土層掘削作業の開始。
９日：２ａ区１面、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
24日：２ａ区１面、東側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業開始。
28日：新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため作業休止。

〔５月〕
11日：作業の再開。
２ｂ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
Ｒａ区、バックホーなどでの側溝・道路舗装・敷砕石など撤去作業の開始。
14日：Ｒａ区、バックホーでの旧表土層掘削作業の開始。
15日：２ｂ区、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
22日：２ｂ区、東側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
25日：Ｒａ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。

〔６月〕
１日：Ｒａ区、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影。
２日：Ｒａ区、西側の遺構検出空中写真再撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
３日：Ｒａ区、東側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影。
４日：２ａ区１面、労災事故の発生（作業員１名大怪我）。
５日：労災事故のため作業休止。
15日：作業の再開。
23日：Ｒａ区、東端の遺構完掘・写真・測量など作業終了、遺構完掘空中写真撮影。

〔7月〕
13日：Ｒｃ区、バックホーなどでの側溝・道路舗装・敷砕石など撤去作業の開始。
16日：Ｒｃ区、バックホーでの旧表土層掘削作業の開始。
27日：Ｒｂ区１面、バックホーなどでの側溝・道路舗装・敷砕石など撤去作業の開始。
31日：Ｒａ区 、中央の遺構完掘・写真・測量など作業終了、遺構完掘空中写真撮影。
〔8月〕
４日：２ａ区１面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
２ａ区１面、発掘作業完了確認（市教委）。
５日：２ｂ区、東側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
２ｂ区、東側の発掘作業完了確認（市教委）。
７日：２ａ区１面、調査終了（面積3,141㎡）。
12日：お盆での作業休止。
17日：作業の再開。
２ａ区２面、バックホーでの包含層掘削と作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
２ｅ区１面、バックホーでの表土層掘削と作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
18日：Ｒａ区、西端の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
Ｒｃ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
２ｂ区、勾玉１点出土。
19日：Ｒｃ区、南側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
21日：Ｒａ区、発掘作業完了確認（市教委）。
Ｒａ区、調査終了（面積844㎡）。
27日：Ｒｃ区、南側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
Ｒｂ区１面、バックホーでの旧表土層掘削作業の開始。
31日：２ａ区２面、東側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
Ｒｃ区、北側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
Ｒｂ区１面、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
〔9月〕
１日：Ｒｄ区、バックホーなどでの側溝・道路舗装・敷砕石など撤去作業の開始。
Ｒｃ区、南側の発掘作業完了確認（市教委）。
２日：Ｒｂ区１面、遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
16日：２ｅ区、南側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
16日～23日：２ａ区２面、ＳＤ166から土師器・須恵器の甕などが集中して出土。
24日：Ｒｂ区１面、発掘作業完了確認（市教委）。
Ｒｂ区１面、調査終了（面積272㎡）。
26日：Ｒｂ区２面、バックホーでの包含層掘削作業の開始。

30日：Ｒｄ区、バックホーでの旧表土層掘削作業の開始。
Ｒｂ区２面、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始・終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
Ｒｃ区、北側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

〔10月〕

１日：２ａ区２面、東側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
２日：Ｒｃ区、北側の発掘作業完了確認（市教委）。
Ｒｃ区、調査終了（面積397㎡）。
３日：第２回現地説明会の開催（見学者229人）。
５日：Ｒｂ区２面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
Ｒｄ区、西端の作業員による包含層掘削・遺構検出開始・終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
７日：２ａ区２面、東側の発掘作業完了確認（市教委）。
Ｒｂ区２面、発掘作業完了確認（市教委）。
Ｒｂ区２面、調査終了（面積272㎡）。
14日：Ｒｄ区、中央の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
16日：２ａ区２面、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
Ｒｄ区、西端の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
22日：２ｃ区、バックホーでの表土層掘削作業の開始。
27日：Ｒｄ区、中央の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
28日：Ｒｄ区、東端の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
30日：２ａ区２面、西側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

〔11月〕

２日：２ｃ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
４日：２ａ区２面、西側の発掘作業完了確認（市教委）。
２ａ区２面、調査終了（面積3,141㎡）。
２ｂ区、西側の発掘作業完了確認（市教委）。
２ｂ区、調査終了（面積3,092㎡）。
５日：２ｃ区、東端の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
６日：Ｒｄ区、東端の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
９日：２ｃ区、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影。
11日：２ｄ区、バックホーでの表土層掘削作業の開始。
12日：Ｒｄ区、発掘作業完了確認（市教委）。
Ｒｄ区、調査終了（面積1,085㎡）。
２ｃ区、西側の遺構検出面空中写真再撮、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
13日：２ｄ区、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。

16日：２ｅ区、北側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
18日：２ｄ区、北側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
27日：２ｄ区、中央の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。

〔12月〕
１日：２ｅ区１面、南側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
４日：２ｄ区、東端の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
９日：Ｒｇ区１面、バックホーなどでの側溝・道路舗装・敷砕石など撤去作業の開始。
10日：Ｒｇ区１面、バックホーでの旧表土層掘削の開始。
14日：Ｒｇ区１面、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
21日：Ｒｆ区１面、バックホーなどでの側溝・道路舗装・敷砕石など撤去作業の開始。
22日：Ｒｅ区１面、バックホーなどでの側溝・道路舗装・敷砕石など撤去作業の開始。
23日：２ｃ区、西側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
２ｄ区、西側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
24日：Ｒｇ区１面、軒丸瓦１点出土。
25日：年末の作業休止。

令和３年
〔１月〕
５日：作業の再開。
６日：Ｒｅ区１面、バックホーでの旧表土層掘削の開始。
２ｃ区、中央の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
７日：Ｒｇ区２面、東側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
８日：２ｃ区、東端を除く東側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
14日：Ｒｆ区１面、南側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
２ｅ区１面、北側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
16日：第３回現地説明会の開催（見学者164人）。
19日：２ｄ区、東側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。
Ｒｅ区１面、作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。
20日：Ｒｆ区１面、北側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。
21日：２ｅ区１面、発掘作業完了確認（市教委）。
２ｄ区、東側の発掘作業完了確認（市教委）。

２ｄ区、調査終了（面積2,952㎡）。

26日：Ｒｅ区、南側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。

Ｒｇ区２面、西側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。

29日：２ｅ区１面、調査終了（面積2,973㎡）。

Ｒｆ区１面、南側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

31日：２ｃ区、東端を除く東側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

〔２月〕

１日：２ｅ区２面、バックホーでの包含層掘削作業の開始。

４日：Ｒｆ区１面、北側の遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

８日：Ｒｇ区１面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

Ｒｅ区２面、北側の遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。

９日：２ｅ区２面、遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。

Ｒｆ区１面、発掘作業完了確認（市教委）。

Ｒｆ区１面、調査終了（面積422㎡）。

10日：Ｒｆ区２面、バックホーでの包含層掘削作業の開始。

Ｒｇ区２面、バックホーでの包含層掘削作業の開始。

12日：２ｃ区、東端を除く東側の遺構完掘･写真･測量など作業の終了、遺構完掘空中写真再撮影。

Ｒｆ区２面、遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。

13日：Ｒｅ区１面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

Ｒｇ区２面、遺構検出作業終了、遺構検出面空中写真撮影、遺構掘り下げ・写真・測量など作業の開始。

17日：Ｒｅ区１面、発掘作業完了確認（市教委）。

Ｒｅ区１面、調査終了（面積274㎡）。

Ｒｅ区２面、バックホーでの包含層掘削と作業員による包含層掘削・遺構検出作業の開始。

23日：Ｒｆ区２面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

24日：２ｃ区、東端を除く東側の遺構完掘･写真･測量など作業の終了、遺構完掘空中写真再々撮影。

Ｒｇ区２面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

25日：２ｃ区、発掘作業完了確認（市教委）。

Ｒｆ区２面、発掘作業完了確認（市教委）。

Ｒｆ区２面、調査終了（面積422㎡）。

Ｒｅ区２面、遺構完掘・写真・測量など作業の終了、遺構完掘空中写真撮影。

Ｒｅ区２面、発掘作業完了確認（市教委）。

Ｒｅ区２面、調査終了（面積156㎡）。

26日：２ｃ区、調査終了（面積3,163㎡）。

Ｒｇ区２面、遺構完掘空中写真再撮影。

〔３月〕

４日：Ｒｇ区２面、発掘作業完了確認（市教委）。

Ｒｇ区２面、調査終了（面積688㎡）。

２ａ区～２ｅ区・Ｒａ区～Ｒｇ区全ての発掘作業完了（面積26,009㎡）。

25日：埋め戻し作業の終了。

（基峰）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地形（第１～４図）

下田南遺跡が所在する岩倉市は、愛知県北西部に位置する（２－図１）。そして、愛知県北西部は、木曽川・長良川・揖斐川によって形成された濃尾平野のほぼ中央部に位置する。この濃尾平野は、北は両白山地、東は尾張丘陵、西は伊吹・養老山地を限りとする臨海平野で、総面積約1,800㎢を有する広大な平野である。濃尾平野の中でも木曽川左岸の愛知県側に広がる平野は尾張平野と呼ばれ、その地形は犬山城下を扇頂とする扇状地から自然堤防地帯、三角州低地と続き、岩倉市は扇状地南限の末端から広がる自然堤防帯上に位置する。

岩倉市の地形は、北東部の井上町が標高約12m、市役所がある中央部の栄町・本町付近で標高約８m、南西部の野寄町は標高約７ｍとほぼ平坦であり、市域全体は北東から南西方向に向かって緩やかに低くなっている。地質基盤は第４紀沖積層で、粘性土・砂質土からなり、沖積層の厚さは、扇状地の扇端線上に位置する井上町で約３ｍ、栄町で約５ｍ、野寄町で約10mと厚さが増している。

市域の南北最長は約4.9㎞、東西最長約3.9㎞、面積は10.47㎢で、県内で最も面積が狭い市である。市域中央には、岐阜県多治見市の高社山付近に源を発する一級河川の五条川が北から南へ流れており、川の両側には自然堤防帯が形成されている。そして、これを囲うような形で、旧河道によって形成された小高い自然堤防洲と後背湿地が入り混じった平地が広がっている。

市域中央を南流してきた五条川は、南東部の大山寺町で大曲りして西進する。下田南遺跡は、この大曲りから約２㎞下流の右岸、五条川によって形成された標高約７ｍの自然堤防上に所在する。遺跡の周辺は、水田と畑地からなる広大な耕作地帯が広がり、その中に住宅地や工場などが点在している。

（平松）

２－図１　下田南遺跡位置図

第２節　歴史的環境（第５図）

下田南遺跡周辺と岩倉市の遺跡について概観する（２－図１）。肥沃な土地に恵まれた岩倉市には、62遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として存在する（２－表１）。

また、本遺跡周辺の遺跡として、一宮市に所在する24遺跡、小牧市に所在する６遺跡、北名古屋市に所在する21遺跡も併せて表記・記載した（２－表２）。

（１）縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡は14遺跡あり、その内10遺跡が岩倉市に所在する。川井町に所在する縄文中期のノンベ遺跡（22）では、石皿と磨石が出土している。

また、野寄町から北島町にかけて所在する権現山遺跡（58）では、十数棟の竪穴建物をはじめ、この地域の土器形態を調べる上で重要な深鉢が出土している。

大地新町に所在する縄文後期の西北出（Ａ）遺跡（19）では、大量の土器片とともに堅果類の貯蔵穴が発見されている。八剱町の八剱遺跡（37）は縄文晩期の遺跡で、条痕文を有する厚手の土器片が出土している。この条痕文を有する土器は、尾張・三河・信濃に広く分布する土器である。

（２）弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡は60遺跡あり、その内32遺跡が岩倉市に所在する。大地町の野辺遺跡（21）、ノンベ遺跡では、遠賀川式土器が出土し、野辺遺跡では用水路と排水路の遺構が確認されている。弥生中期の遺跡は、大地町に所在する県指定史跡の大地遺跡（61）で、接触式である大地式土器や、全国的にも珍しい６本の主柱を有する竪穴建物などが発見されている。弥生後期の遺跡は、曽野町に所在する曽野遺跡（45）で、出土した赤彩土器は尾張地域を特徴付けるもので、ギリシャのクレタ島クノッソス宮殿跡から出土した宮廷式になぞらえて「パレス・スタイル土器」とも呼ばれる。五条川の川底から採集された完形品の丹彩台付壺型土器は、市指定文化財に指定されている。

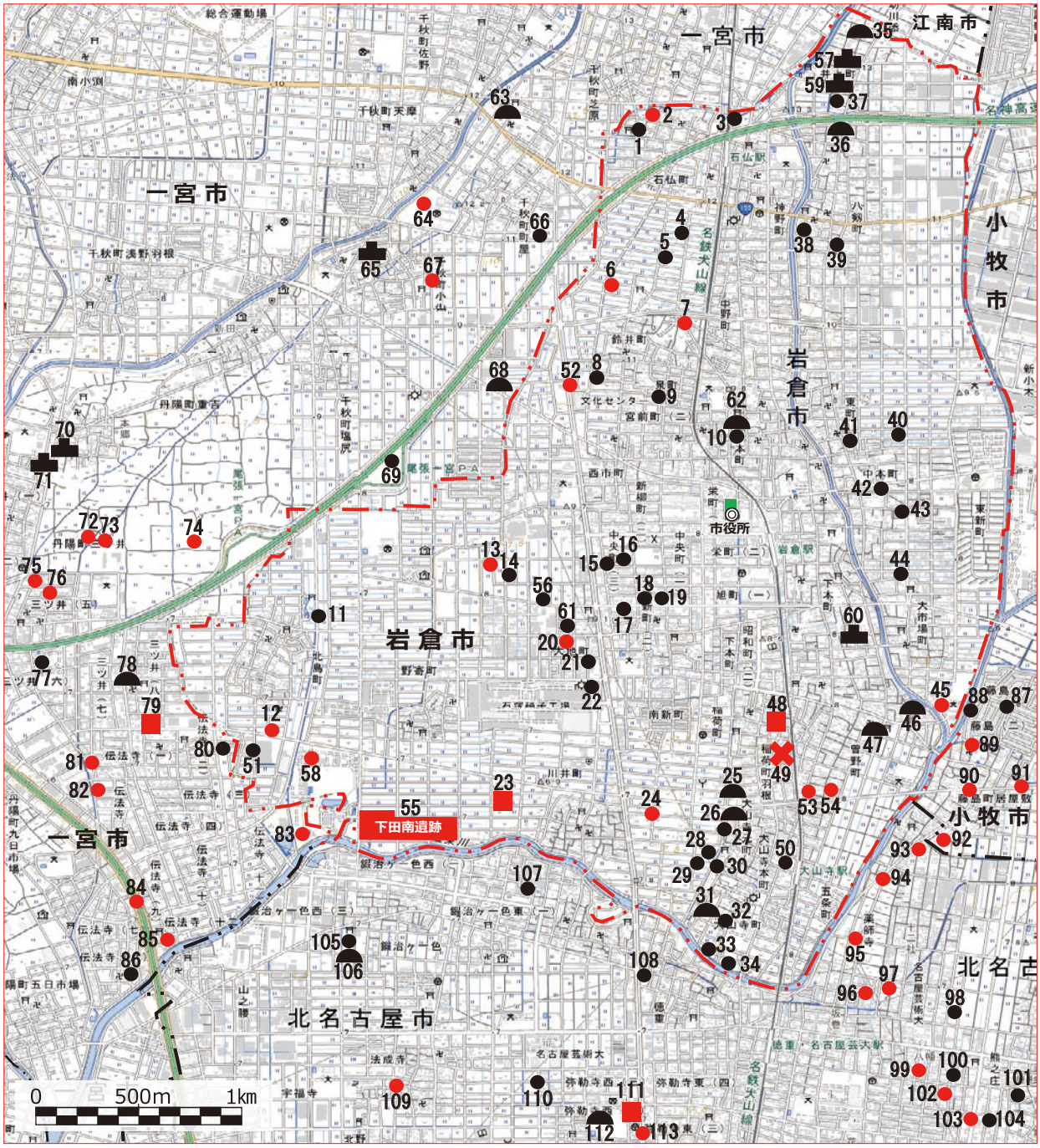
（３）古墳時代の遺跡

古墳時代の遺跡は62遺跡あり、「古墳」と名が付く遺跡は12箇所あり、岩倉市には８古墳が所在する。大山寺町に所在する西出古墳（26）は、前期の方墳で外提が約20ｍで区画される。発掘調査で出土した土師質円筒埴輪60個体をはじめ、朝顔型埴輪４個体・須恵器の高坏・蓋杯などは、一括して市指定文化財に指定されている。後期の古墳では、井上町の種畑古墳（35）、八剱町の七面山古墳（36）、本町の新溝古墳（62）、曽野町の居屋敷古墳（46）と神清院古墳（47）、大山寺町の高畑古墳（31）の６つが存在する。この内、墳丘が残っているのは、七面山古墳、新溝古墳、神清院古墳で、墳形はいずれも円墳である。

また、下田南遺跡から南へ約1.0㎞の北名古屋市鍛冶ヶ一色襟には、古墳時代中期の古墳で市指定史跡に指定されている高塚古墳（106）が所在する。墳丘に造出し部を有する直径約40.0ｍの円墳で、発掘調査では、冑・甲冑・盾・家・蓋などの形象埴輪や円筒埴輪が大量に出土した。

（４）古代の遺跡

古代の遺跡は47遺跡あり、その内岩倉市内には15遺跡が存在する。下田南遺跡（55）から東へ約0.5㎞の川井町に薬師堂廃寺跡（23）が所在する。そして、西へ約0.5㎞の一宮市丹陽町に伝法寺野田遺



国土地理院電子地形図25,000分の1と、愛知県統合型地理情報システム内「愛知県文化財マップ（埋蔵文化財・記念物）」を使用し加工した。

凡例			
●	散布地/集落遺跡	●	古代の散布地/集落遺跡
◠	古墳	■	古代の寺院跡
▟	中世の城址	✕	官衙遺跡

※　下田南遺跡の最盛期である古代（飛鳥時代・奈良時代・平安時代）に関連する遺跡の分布状況を解りやすくするために、地図上では赤色で遺跡を表記した。

２－図２　下田南遺跡と周辺（岩倉市内・岩倉市外）の遺跡分布図

番号	遺跡名（ふりがな）		所在地	種別	遺跡の時代							
					縄文	弥生	古墳	古代			中世	近世
								飛鳥	奈良	平安		
1	西広畑	にしひろはた	岩倉市	散布地		●						
2	西土門	にしどもん	岩倉市	散布地						●		
3	長福寺	ちょうふくじ	岩倉市	散布地		●						
4	梅ノ木	うめのき	岩倉市	散布地			●					
5	岩塚	いわつか	岩倉市	散布地		●						
6	立切	たちきり	岩倉市	散布地		●			●			
7	御山寺	ごさんじ	岩倉市	散布地	●	●	●		●	●	●	●
8	法成寺	ほうせいじ	岩倉市	散布地		●						
9	天神	てんじん	岩倉市	散布地			●					
10	宮東	みやひがし	岩倉市	散布地		●						
11	西道海戸	にしみちかいど	岩倉市	散布地		●						
12	前田	まえだ	岩倉市	散布地			●			●		
13	乾出	いぬいで	岩倉市	散布地		●			●			
14	穴田	あなだ	岩倉市	散布地	●	●						
15	西町畑	にしちょうはた	岩倉市	散布地	●	●						
16	東町畑	ひがしちょうばた	岩倉市	散布地		●						
17	伴定	ばんじょう	岩倉市	散布地	●							
18	西北出（B）	にしきたで(B)	岩倉市	散布地			●					
19	西北出（A）	にしきたで(A)	岩倉市	散布地		●	●		●	●		
20	葉広	はひろ	岩倉市	散布地		●	●		●	●		
21	野辺	のべ	岩倉市	散布地	●	●	●					
22	ノンベ	のんべ	岩倉市	散布地	●	●	●					
23	薬師堂廃寺跡	やくしどうはいじあと	岩倉市	社寺跡		●	●		●	●	●	
24	寺山	てらやま	岩倉市	散布地					●			
25	神宮寺古墳	じんぐうじこふん	岩倉市	古墳			●					
26	西出古墳	にしでこふん	岩倉市	古墳			●					
27	西出	にしで	岩倉市	散布地							●	
28	吸田	すいた	岩倉市	散布地			●					
29	前畑	まえはた	岩倉市	散布地			●				●	
30	石塚	いしづか	岩倉市	散布地		●						
31	高畑古墳	たかはた	岩倉市	古墳			●					
32	下流	しもながれ	岩倉市	散布地			●					
33	小森	こもり	岩倉市	散布地							●	
34	西生田	にしいくた	岩倉市	散布地		●						
35	種畑古墳	たねばたこふん	岩倉市	古墳			●					
36	七面山古墳	しちめんやまこふん	岩倉市	古墳			●					
37	八剱	やつるぎ	岩倉市	散布地	●	●	●					
38	大塚	おおつか	岩倉市	散布地		●	●					
39	東郷前	ひがしごうまえ	岩倉市	散布地		●						
40	中出口	なかでぐち	岩倉市	散布地		●						
41	白山	はくさん	岩倉市	散布地		●						
42	古市場	ふるいちば	岩倉市	散布地			●					
43	真光寺	しんこうじ	岩倉市	散布地		●						
44	天神塚	てんじんづか	岩倉市	散布地			●					
45	曽野	その	岩倉市	散布地		●	●		●	●		
46	居屋敷古墳	いやしきこふん	岩倉市	古墳			●					
47	神清院古墳	しんせいいんこふん	岩倉市	古墳			●					
48	御土井廃寺跡	みどいはいじあと	岩倉市	社寺跡		●	●		●	●	●	
49	国衙	こくが	岩倉市	官衙/散布地	●				●	●		
50	長畑	ながはた	岩倉市	散布地			●					
51	北島白山	きたじまはくさん	岩倉市	散布地		●						
52	下新田	しもしんでん	岩倉市	集落跡		●			●	●	●	
53	中街道	なかかいどう	岩倉市	散布地			●				●	
54	花ノ木	はなのき	岩倉市	散布地			●				●	
55	下田南	しもだみなみ	岩倉市	官衙/集落			●	●	●	●	●	
56	蕎麦	そばた	岩倉市	散布地		●					●	
57	井上城跡	いのうえじょうあと	岩倉市	城館跡							●	
58	権現山	ごんげんやま	岩倉市	集落跡	●	●	●		●	●	●	
59	八剱砦	やつるぎとりで	岩倉市	城館跡							●	
60	岩倉城	いわくらじょう	岩倉市	城館跡							●	
61	大地	だいち	岩倉市	集落跡	●	●						
62	新溝古墳	にいみぞこふん	岩倉市	古墳			●					

２－表１　下田南遺跡周辺の遺跡一覧（岩倉市内）

番号	遺跡名（ふりがな）		所在地	種別	遺跡の時代							
					縄文	弥生	古墳	古代			中世	近世
								飛鳥	奈良	平安		
63	円長寺古墳	えんちょうじ	一宮市	古墳			●					
64	一宮南高校平松	いちのみやみなみこうこうひらまつ	一宮市	集落/散布地		●	●	●	●	●	●	
65	小山城	おやまじょう	一宮市	城館跡							●	
66	町屋	まちや	一宮市	散布地		●						
67	鹿取	かとり	一宮市	散布地		●			●	●		
68	蕪池	かぶらいけ	一宮市	古墳		●						
69	猫島	ねこじま	一宮市	集落跡	●	●		●	●	●		
70	重吉城跡	しげよしじょうあと	一宮市	城館跡/その他の墓			●	●	●	●	●	
71	尾藤城	びとうじょう	一宮市	城館跡				●	●	●	●	
72	東高龍	ひがしたかりゅう	一宮市	散布地						●		
73	飛所	とびしょ	一宮市	散布地						●		
74	三ツ井	みつい	一宮市	集落/散布地	●	●	●	●	●	●	●	
75	茂八杁	もはちいり	一宮市	集落/散布地		●	●	●	●	●		
76	六所	ろくしょ	一宮市	散布地		●	●	●	●	●		
77	池之上	いけのうえ	一宮市	散布地	●		●				●	
78	稲荷山古墳	いなりやまこふん	一宮市	古墳			●					
79	伝法寺廃寺	でんぽうじはいじ	一宮市	集落/社寺跡					●	●		
80	元屋敷	もとやしき	一宮市	集落跡		●	●				●	
81	飯守神	おしゃもじ	一宮市	集落/散布地		●		●	●	●	●	
82	西大門	にしだいもん	一宮市	集落跡			●	●	●	●	●	
83	伝法寺野田	でんぽうじのだ	一宮市	散布地		●	●	●	●	●	●	●
84	伝法寺本郷	でんほうじほんごう	一宮市	散布地			●	●	●	●	●	
85	五輪ヶ淵	ごりんがふち	一宮市	散布地					●	●	●	
86	寺跡	てらあと	一宮市	散布地								●
87	藤島	ふじしま	小牧市	散布地	●							
88	藤島町高畑	ふじしまちょうたかはた	小牧市	散布地							●	
89	藤島町居屋敷北	ふじしまいやしききた	小牧市	散布地		●	●		●	●	●	
90	藤島町居屋敷	ふじしまちょういやしき	小牧市	散布地		●	●		●	●		
91	藤島町五才田	ふじしまちょうございでん	小牧市	散布地		●	●		●	●	●	
92	藤島町出口	ふじしまちょうでぐち	小牧市	散布地		●	●		●	●	●	
93	十二社	じゅうにそ	北名古屋市	散布地			●		●	●	●	
94	村前	むらまえ	北名古屋市	散布地		●	●			●		
95	樋口	ひぐち	北名古屋市	散布地		●	●			●	●	
96	山浦	やまうら	北名古屋市	散布地		●	●		●	●	●	
97	古井	こい	北名古屋市	散布地		●				●		
98	射矢重	いやしげ	北名古屋市	散布地		●						
99	新宮	しんぐう	北名古屋市	散布地		●	●			●		
100	八幡西	はちまんにし	北名古屋市	散布地		●					●	
101	熊之庄	くまのしょう	北名古屋市	散布地		●						
102	石塚	いしづか	北名古屋市	散布地			●			●	●	
103	村上	むらかみ	北名古屋市	散布地					●		●	
104	山の神	やまのかみ	北名古屋市	散布地							●	
105	高塚南	たかつかみなみ	北名古屋市	集落跡			●				●	●
106	高塚古墳	たかつかこふん	北名古屋市	古墳			●					
107	鍛冶ヶ一色	かじがいっしき	北名古屋市	散布地		●	●		●	●	●	
108	徳重	とくしげ	北名古屋市	散布地			●					
109	法成寺	ほうじょうじ	北名古屋市	散布地		●	●		●	●	●	
110	神子前	かみこまえ	北名古屋市	散布地		●	●					
111	弥勒寺廃寺	みろくじはいじ	北名古屋市	社寺跡					●	●		
112	弥勒寺（古山王古墳）	みろくじ	北名古屋市	古墳/散布地		●	●					
113	弥勒寺御申塚	みろくじおさるつか	北名古屋市	散布地		●	●		●	●	●	●

※　下田南遺跡の最盛期である古代は、愛知県統合型地理情報システム内「愛知県文化財マップ（埋蔵文化財・記念物）」の表記に合せ、古代を「飛鳥」・「奈良」・「平安」と三つに分類し記載した。

２－表２　下田南遺跡周辺の遺跡一覧（岩倉市外）

跡（83）が所在する。薬師堂廃寺跡では、藤原宮と同范型の単弁八葉蓮華文の軒丸瓦が出土しており、本遺跡の発掘調査でも同范の軒丸瓦が出土している。また、伝法寺野田遺跡では、古代～中世にかけての条里型の水田跡が確認されている。遺跡の位置関係からみても二つの遺跡と本遺跡の関連性は非常に強く、今後この地域の古代史を考察する上で非常に興味深い遺跡である。

その他の古代の遺跡としては、稲荷町に御土井廃寺跡（48）が所在する。巨石や布目瓦などが古くから確認されており、発掘調査によって「鴟尾片」と「塼仏」が出土し、白鳳時代の寺院跡であることが判明した。市外では、一宮市丹陽町に伝法寺廃寺（79）、北名古屋市西春町に弥勒寺廃寺（111）が所在する。この地域の古代の遺跡の特徴としては、狭小の範囲において、寺院跡の遺跡が密集していることが挙げられる。これは、社会経済面において中核的な地域であり、また、文化面においても先進的な地域であったことの証であると考えられる。

（5）中世の遺跡

中世の遺跡は42遺跡あり、市内には下本町の岩倉城（60）、井上町の井上城跡（57）、八剱城屋敷の八剱砦（59）をはじめ15遺跡が所在する。特に岩倉城は、尾張守護代の織田敏広の居城として築城され、織田伊勢守（岩倉織田氏）の本拠地となる。その後、永禄２年（1559年）に尾張南部の領袖であった織田信長によって落城した城として著名である。

（6）近世の遺跡

近世になると遺跡数は激減し、市内では御山寺遺跡の１遺跡、下田南遺跡周辺では、一宮市丹陽町の寺跡遺跡（786）、伝法寺野田遺跡、北名古屋市鍛冶ヶ一色襟の高塚南遺跡（105）、北名古屋市弥勒寺西の弥勒寺御申塚遺跡（113）の４遺跡が存在する。

（平松）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法と層序（第６～13図）

下田南遺跡の発掘調査（調査面積43,186㎡）では、令和元年度（第１期）に１ａ区～１ｅ区、令和２年度（第２期）に２ａ区～２ｅ区・Ｒａ区～Ｒｇ区に分割して実施し、令和元年度（第１期）に17,177㎡、令和２年度（第２期）に26,009㎡の調査を実施した。

各地区では、基本として次の方法にもとづき調査を実施した。

基本グリッドは、座標軸に合わせて10ｍ×10ｍのグリッドを設定した。グリッドの呼称は、調査区全ての範囲を対象に、Ｘ軸には西から東にむかって０～40までの数字、Ｙ軸には北から南にむかってＡ～Ｌまでのアルファベットを付し、グリッド名称として使用した。

表土層ないしは旧表土層（基本層序Ⅰ’層・Ⅰ層）の掘削にはバックホーを使用して、担当調査員の指示立ち会いないしは担当調査員の指示をうけた調査補助員の立ち会いのもと掘削作業を行った。遺物包含層（基本層序Ⅱ層・Ⅲ層）の上層部分の掘削作業も同様の手順で行い、バックホーを使用した掘削作業後に、スコップやジョレンなどの発掘道具を使用して、作業員による遺物包含層の下層部分の掘り下げと精査作業を行い、遺構の検出を実施した。遺構検出の際に出土した遺物は、取り上げ番号を付けてグリッドごとに取り上げを行った。

遺構検出後に、ＵＡＶを使用して遺構検出面の写真撮影を行い、遺構検出概略図を作成した。検出遺構に遺構記号と番号を付けた後、移植ゴテなどの発掘道具を使用して、作業員による遺構の掘り下げを開始した。ＳＢ（掘立柱建物）に伴うＳＰ（ピット）のほかにＳＫ（土坑）や単独のＳＰ（ピット）などの遺構は半截掘り下げを行った後、ＳＩ（竪穴建物）やＳＤ（溝）などの遺構は掘り下げ区ごとに掘り下げを行った後、一眼レフデジタルカメラ（2,000万画素以上）を使用した写真撮影と手実測にて断面図を作成し、完掘掘り下げの作業を行った。さらに、２ａ区２面ＳＤ166のようにほぼ完形に近い状態で須恵器・土師器甕などの土器がまとまって出土した遺構については、遺物の出土状況の写真撮影と詳細平面図による記録の作成後、遺物取り上げを行い、完掘を行った。

また、完掘作業と並行してトータルステーションによる測量を行い、各遺構と全体遺構平面図の作成を行った。完掘後に、ＵＡＶによる調査区全体と周辺景観を含めた写真撮影を行った。

基本層序は、１ａ区～１ｅ区と２ａ区～２ｅ区･Ｒａ区～Ｒｇ区のＡ～Ｚまでの各地点で作成した。

上層から順に、Ⅰ’層：表土層（客土、2.5Y7/3：浅黄色土）、Ⅰ層：表土層（旧表土、2.5Y5/3：黄褐色土）、Ⅱ層：遺物包含層（中世以降、10YR5/3：にぶい黄褐色土）、Ⅲ層：遺物包含層（古代以前、10YR7/4：にぶい黄橙色土）、Ⅳ層：地山層（砂質土、5Y8/4：淡黄色土）である。Ⅳ層下には、Ⅴ層～ⅩⅣ層以上におよぶ粘質土層が厚く堆積する。

遺物包含層であるⅡ層とⅢ層には、細粒砂と1.0～3.0㎜大の炭粒が含まれ、Ⅲ層では酸化鉄が含まれるのが特徴である。遺構の検出は、事前の試掘調査の結果に基づきⅡ層とⅢ層の安定した堆積が良好に認められた１ｅ区・２ａ区・２ｅ区・Ｒｂ区・Ｒｅ区・Ｒｆ区・Ｒｇ区では、１面調査はⅢ層上面、２面調査はⅣ層上面を基準として行い、それ以外の調査区では、Ⅳ層上面を基準として実施した。Ⅳ層下に堆積する地層については、１ｄ区・１ｅ区・２ｃ区・２ｄ区などにて遺構の完掘後に掘り下げ作業を実施して確認した。

（基峰）

第２節　遺構

以下、調査区と調査面に分けて代表的な遺構の内容を記したい。

（１）１ａ区（第14～18図、写真図版25～27）

【遺構名】１ａ区ＳＩ021（ＳＬ021）（竪穴建物）
【位置】１ａ区南側、西壁面より30m、Ｃ４グリッドに位置する。
【形状・規模】建物本体は西に位置する１ａ区ＳＤ018や、１ａ区ＳＤ018の東に位置するＳＤ019などの浸食によってか既に削平され、カマドのみが確認できた。カマドの形状は不整楕円形、規模は長さ1.18m、幅0.60m、深さ0.15mである。内部から焼土と土師器片を確認した。
【堆積土】下層に炭・焼土の混じった暗オリーブ褐色シルトの細砂、間層に地山（明黄褐色シルト細砂）の混じったオリーブ褐色のシルト細砂、上層に炭・焼土の混じったオリーブ褐色のシルト細砂が堆積する。
【出土遺物】土師器片が出土した。
【時期】出土遺物より７世紀と思われる。
【特徴・性格】カマドしか残っておらず、建物の規模などは判明しなかった。１ａ区ＳＩ067同様に集落の北端に位置していた竪穴建物と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＩ067（竪穴建物）
【位置】１ａ区南側、東壁面より30m、C10グリッドに位置する。
【形状・規模】平面隅丸方形の竪穴建物で、規模は長さ5.20m、幅4.90m、深さは0.30mを測り、建物の主軸方向はN-39°-Wを示す。床面は暗灰黄色シルト細砂(2)で平坦に整地され、主柱穴は壁面の隅付近に４本、北西壁面にカマドが付設される。カマド内には支脚と思われる石が配置されていた。貯蔵穴は確認できなかった。
【堆積土】暗灰黄色シルト細砂(2)、上層にオリーブ褐色シルト細砂(1)が堆積していた。
【出土遺物】須恵器の坏、土師器の甕が出土した。（第342図１）
【時期】出土遺物より６世紀後半と思われる。
【特徴・性格】北西壁面に突出してカマドが付設された竪穴建物で、１ａ区ＳＰ090～１ａ区ＳＰ093の４本の主柱穴で上屋部を支持した建物である。

【遺構名】１ａ区ＳＫ049（土坑）
【位置】１ａ区東側、Ｃ９グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は不整楕円形で、底面はほぼ平坦である。長軸1.30m、短軸1.10m、深さ0.32mを測る。
【堆積土】上層ににぶい黄色のシルト細砂(1)、下層に黒褐色とオリーブ黄色の混入した灰黄色のシルト細砂(3)が堆積する。
【出土遺物】土師器の甕の口縁部が出土した。（第342図３）
【時期】出土遺物より６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】１ａ区ＳＫ051（土坑）

【位置】１ａ区東側、Ｃ９・Ｃ10グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は不整方形で、長軸3.60m、短軸2.40m、深さ0.20mを測る。

【堆積土】不明である。

【出土遺物】土師器の甕の口縁部が出土した。（第342図４）

【時期】出土遺物より６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】１ａ区ＳＤ002（溝）

【位置】１ａ区西側、Ｂ１・Ｃ１グリッドに位置する。調査区外（西）に続く。

【形状・規模】北東～南西に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面は溝の東側に少し凹凸がある。残存長11.30m、最大幅3.20m、深さ0.32mを測る。

【堆積土】黄灰色のシルト細砂と暗灰黄色のシルト細砂が堆積する。

【出土遺物】粘板岩の砥石が出土した。（第342図５）

【時期】出土遺物より９～10世紀と考えられる。

【特徴・性格】北は既に削平され、11.0mほど南に進むと西に折れ調査区外に続いている。

【遺構名】１ａ区ＳＤ014（溝）（１ｂ区ＳＤ088・ＳＤ256、２ａ区１面ＳＤ003、２ｂ区ＳＤ092、Ｒｂ区１面ＳＤ003）

【位置】１ａ区西側、Ｂ１・Ｂ２・Ｃ２・Ｃ３グリッドに位置し、１ｂ区ＳＤ088・ＳＤ256、２ａ区１面ＳＤ003、２ｂ区ＳＤ092、Ｒｂ区１面ＳＤ003と一体の溝であると思われる。調査区外（北）に延びる。

【形状・規模】北西～南東に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面は東にかけてやや深くなっている。残存長25.40m、幅8.50m、深さ0.22mを測る。

【堆積土】上層にはにぶい黄色のシルト細砂、下層には暗灰黄色のシルト細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身、山茶碗の碗、古瀬戸の尊式花瓶、土錘、鉄製品（釘か鎹）が出土した。（第342図６～15）

【時期】出土遺物などから13世紀と考えられる。

【特徴・性格】北は調査区外へ延びている。出土遺物の時期が幅広いが中世にかけて使用された溝と考えられる。

【遺構名】１ａ区ＳＤ018（溝）（１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ003、２ａ区１面ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022）

【位置】１ａ区西側、Ｂ２・Ｂ３・Ｃ３・Ｃ４グリッドに位置し、１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ003、２ａ区１面ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022と一体の溝である。調査区外（北）に延びる。

【形状･規模】北西～南東に延び、壁面は丸みを帯びた傾斜で断面は椀型をしている。残存長26.40m、幅2.10m、深さ0.86mを測る。

【堆積土】上層に黄灰色のシルト細砂、下層に粘性が強い黄灰色のシルト極細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身と鉢・合子、灰釉陶器の瓶類、山茶碗の小碗・小皿・碗、古瀬戸の鉢、陶器（瀬戸）の擂鉢、土錘、砥石が出土した。（第342図16・17、第343図18～35、第344図36・37）
【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】北は調査区外へ延びている。出土遺物の時期が幅広いが中世にかけて使用された溝と考えられる。

【遺構名】１ａ区ＳＤ019（溝）（１ｂ区ＳＤ117、１ｅ区１面ＳＤ006、２ａ区１面ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028･ＳＤ030、Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024）
【位置】１ａ区、Ｂ３・Ｂ４・Ｃ４・Ｃ５グリッドに位置し、１ｂ区ＳＤ117、１ｅ区１面ＳＤ006、２ａ区１面ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024と一体の溝である。調査区外（北）に延びる。
【形状・規模】北西～南東に延び、壁面は緩やかな傾斜で西端から1.80ｍ地点で0.20ｍ下がり、2.40ｍ地点で壁面が丸みを帯びた椀型をしている。残存長28.40ｍ、幅5.65ｍ、深さ0.38ｍを測る。
【堆積土】上層に黄灰色のシルト細砂、下層に粘性の強い黄灰色のシルト極細砂が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の小碗・碗が出土した。（第344図38～44）
【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】北は調査区外へ延びている。性格は不明である。

【遺構名】１ａ区ＳＤ024（溝）
【位置】１ａ区、Ｂ４グリッドに位置する。
【形状･規模】西～南東に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面は南東側に下がっている。残存長10.45ｍ、幅1.25ｍ、深さ0.24ｍを測る。
【堆積土】上層に黄褐色のシルト細砂、下層にオリーブ黄色のシルト細砂と黒褐色のシルト細砂がブロック状に混じる黄褐色のシルト細砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器の高坏が出土した。（第344図45）
【時期】出土遺物から６～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】１ａ区ＳＤ019に重複している。性格不明の溝である。

【遺構名】１ａ区ＳＰ057（ピット）
【位置】１ａ区、Ｃ10グリッドに位置する。
【形状・規模】平面楕円形のピットである。長軸0.80ｍ、短軸0.55ｍ、深さ0.29ｍを測る。
【堆積土】不明である。
【出土遺物】須恵器の坏蓋が出土した。（第344図46）
【時期】出土遺物から６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】１ａ区ＳＸ060（溝状遺構）
【位置】１ａ区東側、Ｂ11・Ｃ11・Ｃ12グリッドに位置する。調査区外（東）に延びる。
【形状・規模】調査区東端より数条に分かれている。溝状ないしは不整方形の形状をしている。深さ

は0.61ｍを測る。

【堆積土】上層に褐灰色のシルト細砂、下層にオリーブ黄色のシルト細砂が混じる黒褐色のシルト極細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・高坏・壺・鍋・瑞、土師器の台付甕・甕、山茶碗の碗が出土した。（第344図47～52、第345図53～65、第346図66～69）

【時期】山茶碗は上層付近からの混入品と思われるので、出土遺物より６～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】性格は不明である。

（首藤）

（２）１ｂ区　（第19～35図、写真図版28～56）

【遺構名】１ｂ区ＳＢ001（掘立柱建物）

【位置】１ｂ区西側、Ｄ１・Ｄ２グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の３間×２間構成の総柱構造と考えられ、建物の主軸方向はN-80° -Wである。桁行4.92ｍ×梁行3.95ｍ、柱間の桁行1.36ｍ、梁行1.54ｍを測る。

隅柱は北東１ｂ区ＳＰ095、南東１ｂ区ＳＰ021、南西１ｂ区ＳＰ008、北西１ｂ区ＳＰ005の４本で、側柱は北１ｂ区ＳＰ011・１ｂ区ＳＰ024、東１ｂ区ＳＰ030、南１ｂ区ＳＰ016・１ｂ区ＳＰ018、西１ｂ区ＳＰ007の６本である。建物内部の中柱は１ｂ区ＳＰ014・１ｂ区ＳＰ023の２本と思われる。隅柱４本、側柱６本、推定中柱２本の合計12本で構成されている。

柱穴の平面形は、不整方形や不整楕円形である。１ｂ区ＳＰ005・１ｂ区ＳＰ007・１ｂ区ＳＰ011・１ｂ区ＳＰ095は直にしっかりと掘り込まれ、底面は平坦である。１ｂ区ＳＰ016・１ｂ区ＳＰ023の掘り込みは本建物の中では浅く、１ｂ区ＳＰ008・１ｂ区ＳＰ024・１ｂ区ＳＰ030の掘り込みは緩やかな傾斜で、底面はやや丸底である。１ｂ区ＳＰ005・１ｂ区ＳＰ014・１ｂ区ＳＰ021の底面には柱の当たりが残る。

【堆積土】ＳＰ014では上層より黄灰色シルト細砂、黄褐色シルト細砂、黄灰色シルト細砂、黄灰色シルト極細砂が堆積する。１ｂ区ＳＰ021・１ｂ区ＳＰ022・１ｂ区ＳＰ024では上層より灰黄色シルト細砂、黄灰色シルト細砂、黄褐色シルト細砂が堆積する。１ｂ区ＳＰ005・１ｂ区ＳＰ006・１ｂ区ＳＰ007・１ｂ区ＳＰ008の埋土には焼土と炭が含まれており、下層の明黄褐色シルト細砂には黒褐色のシルト細砂がブロック状に堆積している。１ｂ区ＳＰ095の下層に堆積する黄褐色シルト細砂には灰黄色のシルト極細砂が混じり、１ｂ区ＳＰ021の下層に堆積する黄褐色シルト細砂にはオリーブ褐色シルト細砂が混じる。

【出土遺物】柱穴から須恵器・土師器の破片と鉄滓が出土した。

【時期】出土した遺物より７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造の小型の掘立柱建物で、隅柱が主柱、側柱・中柱が束柱と考えられ、穀物類などを保管した高床ないしは床束建築の倉庫の可能性が高い。１ｂ区ＳＰ005・１ｂ区ＳＰ008・１ｂ区ＳＰ014・１ｂ区ＳＰ021・１ｂ区ＳＰ095は、ほかの柱穴に比べ、深めで大きく掘削されている。何らかの理由で拡幅ないしは拡張した可能性が考えられる。重複する１ｂ区ＳＩ027との切り合い関係では、本建物が１ｂ区ＳＩ027よりも新しい時期となる。

【遺構名】１ｂ区ＳＢ002（掘立柱建物）

【位置】 １ｂ区西側、Ｆ３・Ｆ４グリッドに位置する。

【形状･規模】平面正方形の２間×１間構成の側柱構造で､建物の主軸方向はN-11° -Wである｡桁行3.20ｍ、柱穴の深さ0.3ｍ、柱間は桁行2.68ｍ、梁行2.76ｍを測る。

隅柱は北東１ｂ区ＳＰ064、南東１ｂ区ＳＰ066、南西１ｂ区ＳＰ061、北西１ｂ区ＳＰ063の４本、側柱は東１ｂ区ＳＰ065、西１ｂ区ＳＰ062の２本である。

柱穴は平面円形で、緩やかな傾斜で掘り込まれており底面は平坦である。１ｂ区ＳＰ064の底面には柱の当たりが残り、１ｂ区ＳＰ066は本建物の中で一番掘り込みが浅い。

【堆積土】西側の１ｂ区ＳＰ061･１ｂ区ＳＰ062･１ｂ区ＳＰ063は粘性の強い黄褐色のシルト細砂(3)、東側の１ｂ区ＳＰ064・１ｂ区ＳＰ065・１ｂ区ＳＰ066には黄灰色シルト細砂(1)・黄褐色のシルト細砂(2)が堆積する。

【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土した。

【時期】出土した遺物より７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】小型の掘立柱建物で、隅柱を主柱とした簡易な高床倉庫であったと思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＢ003（掘立柱建物）

【位置】１ｂ区西側、Ｆ３グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の２間×１間構成と考えられる側柱構造で、建物の主軸方向はN-35° -Wである。桁行4.30ｍ、梁行2.30ｍ、柱穴の深さ0.36ｍを測り、柱間は桁行2.10ｍ、梁行1.80ｍである。

確認できた隅柱は北１ｂ区ＳＰ085、南東１ｂ区ＳＰ060、北西１ｂ区ＳＰ057の３本、側柱は北西１ｂ区ＳＰ058､１ｂ区ＳＰ059の２本である｡本来は隅柱４本､側柱２本で構成されていたと思われる。４本目の隅柱があったと想定される場所は､１ｂ区ＳＤ042によって切られているため確認できなかった。

柱穴の平面は不整楕円形をしているが、１ｂ区ＳＰ085は１ｂ区ＳＤ045の中に位置するため詳細な形状は不明である。１ｂ区ＳＰ057の底面は丸底である。１ｂ区ＳＰ058・１ｂ区ＳＰ059・１ｂ区ＳＰ060・１ｂ区ＳＰ085の底面には柱の当たりが残る。

【堆積土】不明である。

【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土した。

【時期】出土した遺物より７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】とても小型の掘立柱建物で、隅柱を主柱とした簡易な高床倉庫であったと思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＢ004（掘立柱建物）

【位置】１ｂ区西側、Ｆ４・Ｆ５グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の２間×１間構成と考えられる側柱構成で、建物の主軸方向はN-20° -Wである。桁行3.30ｍ、梁行1.78ｍ、深さ0.26ｍ、柱間は桁行1.24ｍ、梁行1.40ｍを測る。

確認できた隅柱は北１ｂ区ＳＰ097、南東１ｂ区ＳＰ078、北西１ｂ区ＳＰ080の３本、側柱は東に１本である。本来は隅柱４本、側柱２本で構成されていたと思われる。

柱穴は平面円形で、１ｂ区ＳＰ080の底面には柱の当たりが残る。１ｂ区ＳＰ078・１ｂ区ＳＰ079は丸みを帯びた椀状の掘り込みで、底面は丸底である。１ｂ区ＳＰ097は直にしっかりと掘り込まれ、底面は平坦である。

【堆積土】不明である。

【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土した。
【時期】出土遺物より６世紀末頃～７世紀と考えられる。
【特徴・性格】環状の１ｂ区ＳＤ069の内側に位置する。小型の掘立柱建物で、１ｂ区ＳＢ003と同様に隅柱を主柱とした簡易な高床倉庫であったと思われる。

（首藤）

【遺構名】１ｂ区ＳＢ005（掘立柱建物）
【位置】１ｂ区の中央南、Ｆ７グリッドに位置する。
【形状･規模】平面方形の３間×３間の総柱構造で、建物の主軸方向はN-３°-Eである。桁行5.70m、梁行4.90m、柱間は桁行1.56m、梁行1.37m、柱穴の深さ0.50mを測る。

隅柱は南東１ｂ区ＳＰ113、南西１ｂ区ＳＰ150、北西１ｂ区ＳＰ109、北東１ｂ区ＳＰ112の４本で、側柱は東１ｂ区ＳＰ102・１ｂ区ＳＰ103、西１ｂ区ＳＰ099・１ｂ区ＳＰ106、南１ｂ区ＳＰ114・１ｂ区ＳＰ115、北１ｂ区ＳＰ110・１ｂ区ＳＰ111の８本である。建物内部の中柱は１ｂ区ＳＰ100・１ｂ区ＳＰ101・１ｂ区ＳＰ104・１ｂ区ＳＰ105の４本である。隅柱４本と側柱８本、中柱４本の合計16本の柱穴で構成される。

柱穴は、平面が不整楕円形ないしは不整方形に近く、掘り込みは深くしっかりとしていて、底面は平坦なものが多い。１ｂ区ＳＰ106・１ｂ区ＳＰ111の底面には柱の当たりが残っていた。
【堆積土】南の柱穴列である１ｂ区ＳＰ115では上層全体に黄灰色のシルト(1)が堆積し、下層の中央部分に柱痕と想定される粘性の強い黄褐色のシルト(2)、掘方埋土に黄灰色や黒褐色の細砂を含む粘性の強い黄褐色のシルト(3)が堆積する。掘方底面からは礎板が出土した。
【出土遺物】柱穴の埋土中からは、須恵器・土師器の小破片以外が出土したのみであるが、隅柱１ｂ区ＳＰ150と側柱１ｂ区ＳＰ115の掘方埋土中から礎板が出土した。
【時期】層位と建物主軸から、７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。１ｂ区ＳＰ150出土の礎板（スギ）の放射性炭素年代測定では、５～６世紀の年代観が得られているが、古木効果による測定年代より新しい時期の年代が指摘されており（第４章第１節参照）、時期には相違ないと考えられる。
【特徴・性格】主軸を南北方位に合わせた掘立柱建物である。総柱構造で、隅柱が主柱、側柱・中柱が束柱で、穀物類などを保管した高床建築の倉庫と考えられる。本建物の南に位置するＲａ区ＳＢ001、東に位置する１ｂ区ＳＢ007・Ｒａ区ＳＢ008・１ｂ区ＳＢ010の総柱構造の掘立柱建物と併せて、高床倉庫群を形成していたことが考えられ、所謂「正倉」のひとつであった可能性が高い。

（基峰）

【遺構名】１ｂ区ＳＢ006（掘立柱建物）
【位置】１ｂ区西側、Ｄ２・Ｅ２・Ｅ３グリッドに位置する。
【形状･規模】平面正方形の１間×１間構造の側柱構造で、建物の主軸方向はN-44°-Eである。桁行2.82m、梁行2.48m、柱間は桁行2.42m、梁行2.10m、柱穴の深さ0.22mを測る。

隅柱だけで構成され北１ｂ区ＳＰ501、東１ｂ区ＳＰ053、南１ｂ区ＳＰ052、西１ｂ区ＳＰ134の４本である。

柱穴は平面円形で直に掘り込まれ、底面は平坦である。１ｂ区ＳＰ051の底面には柱の当たりが残る。
【堆積土】不明である。
【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土した。
【時期】出土した遺物より７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】小型の掘立柱建物で、隅柱を主柱とした簡易な高床倉庫であったと思われる。

（首藤）

【遺構名】１ｂ区ＳＢ007（掘立柱建物）

【位置】１ｂ区の中央東寄り、Ｆ８・Ｆ９グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の４間×２間の総柱構造で、建物の主軸方向はＮ-85°-Ｗである。桁行8.00ｍ、梁行4.40ｍ、柱間は桁行1.70ｍ、梁行1.70ｍ、柱穴の深さ0.50ｍを測る。

隅柱は南東１ｂ区ＳＰ169、南西１ｂ区ＳＰ156、北西１ｂ区ＳＰ158、北東１ｂ区ＳＰ173の４本で、側柱は東１ｂ区ＳＰ171、西１ｂ区ＳＰ157、南１ｂ区ＳＰ159・１ｂ区ＳＰ162・１ｂ区ＳＰ165、北１ｂ区ＳＰ161・１ｂ区ＳＰ164・１ｂ区ＳＰ167の８本である。建物内部の中柱は１ｂ区ＳＰ160・１ｂ区ＳＰ163・１ｂ区ＳＰ166の３本である。隅柱４本と側柱８本、中柱３本の合計15本の柱穴で構成される。

柱穴は、平面が不整楕円形ないしは不整方形に近く、掘り込みは深くしっかりとしていて、底面は丸底ないしは平坦なものが多い。隅柱の１ｂ区ＳＰ156・１ｂ区ＳＰ169、中柱中央部の１ｂ区ＳＰ163の掘方底面に柱の当たりが残っていた。

【堆積土】中柱の中央部１ｂ区ＳＰ163では中央に柱痕と想定される黄灰色のシルト(2)が堆積し、掘方埋土として上層に黄灰色のシルト(1)、下層に明黄褐色のシルト(5)が堆積する。

【出土遺物】中柱１ｂ区ＳＰ160の掘方埋土中から、土師器の把手付き甑の口縁部が出土した。さらに隅柱１ｂ区ＳＰ173と側柱１ｂ区ＳＰ164の掘方埋土中からは、礎板が出土した。柱穴の埋土中からは、須恵器・土師器の小破片以外が出土したのみであるが、側柱１ｂ区ＳＰ162の掘方埋土中からは鉄滓片が出土している。（第６図75）

【時期】出土遺物と層位、建物主軸から、７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。１ｂ区ＳＰ173出土の礎板（コウヤマキ）の放射性炭素年代測定では、７～８世紀の年代観が得られており（第４章第１節参照）、時期に相違はない。

【特徴･性格】主軸を東西方位に合わせた横長の掘立柱建物である。総柱構造で、隅柱が主柱、側柱･中柱が束柱で、穀物類などを保管した高床建築の倉庫と考えられる。形状から長倉（横倉）と推定される。本建物の東に位置するＲａ区ＳＢ008・１ｂ区ＳＢ010、西に位置する１ｂ区ＳＢ005、南西に位置するＲａ区ＳＢ001の総柱構造の掘立柱建物と併せて、高床倉庫群を形成していたことが考えられ、所謂「正倉」のひとつであった可能性が高い。

【遺構名】１ｂ区ＳＢ010（掘立柱建物）

【位置】１ｂ区の東側、F10・F11・G10・G11グリッドに位置し、建物の南側はＲａ区となる。

【形状･規模】平面方形の３間×３間の総柱構造で、建物の主軸方向はＮ-３°-Ｅである。桁行5.65ｍ、梁行4.80ｍ、柱間は桁行1.67ｍ、梁行1.50ｍ、柱穴の深さ0.35ｍを測る。

隅柱は南西Ｒａ区ＳＰ018、北西１ｂ区ＳＰ226、北東１ｂ区ＳＰ232の３本で、南東の隅柱は既に削平されていた。また北西の隅柱１ｂ区ＳＰ226は、布掘りを想定させるような溝状の形状を呈し、２本の柱穴が連結したものと想定される。確認できた側柱は、東１ｂ区ＳＰ227・Ｒａ区ＳＰ014、西１ｂ区ＳＰ218（Ｒａ区ＳＰ017）、南Ｒａ区ＳＰ019、北１ｂ区ＳＰ224の６本で、既に削平されたものを含めて本来は８本と考えられる。建物内部の中柱は１ｂ区ＳＰ219（Ｒａ区ＳＰ016）・１ｂ区ＳＰ220（Ｒａ区ＳＰ015）・１ｂ区ＳＰ221・１ｂ区ＳＰ222の４本である。隅柱４本と側柱８本、中柱４本の合計16本の柱穴で構成されていたことが推定される。

１ｂ区ＳＰ226を除き柱穴は、平面が不整楕円形で、掘り込みは深くしっかりとしているが、Ｒａ

区で確認できたＲａ区ＳＰ014～Ｒａ区ＳＰ017はその痕跡のみであった。掘方底面は丸底ないしは平坦である。隅柱の１ｂ区ＳＰ232、中柱の１ｂ区ＳＰ219・１ｂ区ＳＰ222の掘方底面には、柱の当たりが残っていた。

【堆積土】堆積状態が良好に確認できた中柱の１ｂ区ＳＰ222では、上層に黄灰色や黄褐色のシルト(1・2)が堆積し、下層に明黄褐色の細砂を含むシルト(3)が堆積した。

【出土遺物】柱穴の埋土中からは、土師器の小破片が出土したのみであった。

【時期】層位と建物主軸から、７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】既に一部の柱穴が削平され、北側の柱穴列では大きく柱穴の形状が損壊していたが、南北方位に合わせた掘立柱建物である。総柱構造で、隅柱が主柱、側柱・中柱が束柱で、穀物類などを保管した高床建築の倉庫と考えられる。本建物の西に位置するＲａ区ＳＢ008・１ｂ区ＳＢ007・１ｂ区ＳＢ005、南西に位置するＲａ区ＳＢ001の総柱構造の掘立柱建物と併せて、高床倉庫群を形成していたことが考えられ、所謂「正倉」のひとつであった可能性が高い。

（基峰）

【遺構名】１ｂ区ＳＩ027（ＳＬ048）（竪穴建物）

【位置】１ｂ区北西端、Ｄ１・Ｄ２・Ｅ１・Ｅ２グリッドまたがって位置する。

【形状・規模】平面が隅丸方形の竪穴建物で、北西壁面の一部が突出し１ｂ区ＳＬ048（カマド）を付設する。壁面の掘り込みは緩い傾斜で底面は平坦である。床面は暗黄褐色シルト細砂(4)で整地されていたと思われる。長辺（南北）4.80m、短辺（東西）4.70m、深さ0.24mを測る。建物の主軸方向はN-63°-Wである。カマドは、平面不整楕円形で底面はほぼ平坦である。長軸2.38m、短軸0.84m、深さは0.18mを測る。煙道が屋外に突出する。

【堆積土】上層に黄褐色シルト細砂(1)が、中層に床面と思われる暗黄褐色シルト細砂(4)が、下層はオリーブ褐色シルト細砂の混じる暗黄褐色シルト細砂(3)とオリーブ褐色シルト細砂(5)が堆積する。カマドには、上層に黄褐色のシルト質細砂、中層に焼土、下層に炭を含んだ明黄褐色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の坏蓋、カマドから土師器の甕が出土した。（第347図76～78）

【時期】出土した遺物より６世紀中頃～７世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】北西壁面にカマドを付設する竪穴建物である。建物内に幾つかピットを検出しているが、主柱穴の確認はできなかった。カマドに炭や焼土が混入していることから、住居として使用されていたと考えられる。１ｂ区ＳＢ001と一部が重複している。

【遺構名】１ｂ区ＳＩ230（ＳＬ236）（竪穴建物）

【位置】１ｂ区東南端、Ｅ11・Ｅ12・Ｆ11・Ｆ12グリッドにまたがって位置する。

【形状・規模】平面が隅丸方形の竪穴建物で、北西壁面の一部が突出し１ｂ区ＳＬ236（カマド）を付設する。壁面の掘り込みは緩い傾斜で底面は平坦である。一辺が6.30m、深さ0.16mを測る。南東隅を１ｂ区ＳＤ211に切られている。また東側を１ｂ区ＳＤ241・１ｂ区ＳＫ269により切られている。建物の主軸方向はN-58°-Wである。

【堆積土】上層に黄褐色シルト質細砂(1)、中層に黄褐色シルト質細砂(2)、明黄褐色シルト質細砂（地山）が混じる黄褐色シルト質細砂(3)が堆積する。カマドの上層には炭・焼土混じりのオリーブ褐色シルト質細砂(6)が、下層には地山がブロック状に混じる暗オリーブ褐色シルト質細砂(7)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身、土師器の甕、羽口、砥石が出土した。砥石は１ｂ区ＳＰ263から

の出土である。（第347図79～87）

【時期】出土した須恵器やカマドから出土した土師器甕から、７世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】北西壁面にカマドを付設する竪穴建物で、主柱穴４本が確認できた。４本柱で上屋を支持した建物である。カマド埋土中に炭や焼土の混入、土師器の甕が出土していることから、住居として使用されていたと考えられる。羽口が出土していることから、建物内で小鍛冶が行われた可能性が高い。

（首藤）

【遺構名】１ｂ区ＳＫ025・ＳＫ028（土坑）

【位置】１ｂ区、Ｅ２グリッド、ＳＩ027東南壁面の一部に重複する。

【形状・規模】１ｂ区ＳＫ025は平面横長の溝状を呈し、長軸3.10m、短軸0.92m、深さ0.40mを測る。底面の北寄りに１ｂ区ＳＫ028を内包する。１ｂ区ＳＫ028は平面円形で、長軸0.72m、短軸.70m、深さ0.12mを測る。

【堆積土】上層の１ｂ区ＳＫ025には、炭・焼土混じりの灰白色シルト細砂(1)の下に灰白色シルト細砂(2)が堆積し、それを挟むように黄褐色シルト細砂(3)が堆積する。下層の１ｂ区ＳＫ028は、炭混じりの灰白色シルト細砂(4)が堆積し、さらにその下に炭混じりの黄灰色シルト細砂(5)が堆積する。

【出土遺物】１ｂ区ＳＫ025の埋土中からは須恵器・土師器の小破片、１ｂ区ＳＫ028の埋土中からは須恵器・土師器の小破片とともに鉄滓片が出土している。

【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】１ｂ区ＳＫ025と１ｂ区ＳＫ028は一体の遺構である可能性が高く、堆積土に炭が混じること、１ｂ区ＳＫ028の埋土中から鉄滓片が出土していることから、製鉄（小鍛冶）に関連した遺構の可能性が考えられる。

【遺構名】１ｂ区ＳＫ038（土坑）

【位置】１ｂ区、Ｅ２グリッド、調査区東壁面近くに位置する。

【形状・規模】平面楕円形で、長軸1.82m、短軸0.98m、深さ0.12mを測る。

【堆積土】にぶい黄色シルト細砂(2)を切り込み、浅黄色シルト細砂(1)が堆積する。

【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土した。

【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】１ｂ区ＳＫ084（土坑）

【位置】１ｂ区、Ｄ３グリッド、調査区北壁面近くに位置する。

【形状・規模】平面方形で、長軸1.84m、短軸1.38m、深さ0.26mを測る。

【堆積土】上層は黄褐色シルト細砂の混じる黄灰色シルト細砂(1)、中層は黄灰色シルト細砂(2)、下層は黄褐色シルト細砂(3)の三層からなる。

【出土遺物】土師器の小破片が出土した。

【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】１ｂ区ＳＤ086を切っている。これにより１ｂ区ＳＤ086の埋没後に形成されたことがわかる。性格は不明である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ040（溝）

【位置】１ｂ区西側、Ｄ３グリッドに位置し、調査区南壁面に接している。調査区外（西・南）に続く。

【形状・規模】調査区南西端にあるため、形状の詳細は不明である。西側の掘り込みは壁面から底面にかけてほぼ直に下がり、東側の掘り込みはやや緩やかな傾斜、底面はほぼ平坦である。残存長5.10m、残存幅1.00m、深さ0.36mを測る。

【堆積土】上層に粘性のない浅黄色のシルト質細砂、下層ににぶい黄色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身、土師質の移動式竈、羽口が出土した。（第348図88～92）

【時期】出土遺物などから７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】性格は不明である。Ｒａ区ＳＸ224と一体となる可能性が高い。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ042（溝）（Ｒａ区ＳＤ101）

【位置】１ｂ区西側、Ｄ３・Ｅ３・Ｅ４グリッドに位置し、西の調査区外へ延びている。Ｒａ区ＳＤ101と一体の溝である。

【形状・規模】東西に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面はほぼ平坦である。残存長26.50m、幅2.10m、深さ0.32mを測る。

【堆積土】上層にしまりのある黄灰色のシルト質細砂、下層にしまりのあるオリーブ褐色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の瓶・壺、土錘、羽口が出土した。（第348図93～96）

【時期】出土遺物より７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】規模の大きい溝である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ043（溝）

【位置】１ｂ区西側、Ｄ３・Ｅ２・Ｅ３・Ｅ４グリッドに位置する。

【形状・規模】南西～東に延び、湾曲している。長さ30.60m、幅1.20m、深さ0.36mを測る。壁面はやや傾斜が強く掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。

【堆積土】上層にしまりのある浅黄色のシルト質細砂、下層にしまりのあるオリーブ褐色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・高坏、土師器の甕、羽口が出土した。（第348図96～101）

【時期】出土遺物より６世紀後半～７世紀と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の溝で、１ｂ区ＳＢ006の一部が重複している。

（後藤秀）

【遺構名】１ｂ区ＳＤ069（溝）

【位置】１ｂ区の西側南寄り、Ｆ４・Ｆ５・Ｇ４・Ｇ５グリッドに位置し、南はＲａ区となる。

【形状・規模】南をＲａ区ＳＤ101（１ｂ区ＳＤ042）によって削平されるが、平面は円形で、環状に溝が全周する形状である。推定外径8.30 ～ 8.50m、溝幅は1.00～1.20m、深さ0.20mを測る。壁面は傾斜で、底面は平坦である。溝の内側にピットが確認できたが、本溝に伴うものかは不明である。

【堆積土】上層に粘性の欠しい黄灰色のシルト(1)が堆積し、下層には粘性の欠しい黄褐色のシルト(2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは、土師器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位と重複するＲａ区ＳＤ101（１ｂ区ＳＤ042）によって壁面が切られている関係から、６

～７世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】竪穴建物の規模に相当する大きさを有する内側が平坦となる円形の環状溝で、サイロ状の形状を呈することから、平地建物の痕跡である可能性も考えたが、環状溝の規模や堆積土などから考えて、竪穴建物の外周溝ないしは壁際溝（壁溝）の可能性が高いと考えられる。周溝をもつ竪穴建物であった場合は、溝が全周する構造となる。建物遺構であった場合は、建物本体の掘り込みはとても浅いかほとんどなかったものと考えられ、カマドの付設も無く、主柱穴も不明である。

（基峰）

【遺構名】１ｂ区ＳＤ086（溝）

【位置】１ｂ区、Ｄ３～Ｄ５・Ｅ５グリッドに位置する。

【形状・規模】東西に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面はほぼ平坦である。残存長19.0m、幅9.00m、深さ0.20mを測る。

【堆積土】上層に黄灰色のシルト質細砂、下層に地山が混じる黄灰色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の甕が出土した。（第348図103）

【時期】出土遺物から８世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】１ｂ区ＳＫ084・１ｂ区ＳＤ087・１ｂ区ＳＤ088に一部が削平されている。性格不明の溝である。

（首藤）

【遺構名】１ｂ区ＳＤ087（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｅ区１面ＳＤ013、２ａ区１面ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022）

【位置】１ｂ区、Ｄ５・Ｅ５～Ｅ12グリッドに位置する。北は調査区外に延びる。１ａ区ＳＤ018、１ｅ区１面ＳＤ013、２ａ区１面ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022と一体の溝である。

【形状・規模】東西に延びる規模の大きな溝で、壁面は緩やかな傾斜で底面は平坦である。残存長80.40m、幅2.60m、深さ0.42mを測る。

【堆積土】上層に暗灰黄色のシルト質細砂、下層に黄灰色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の高坏、土師器の器台、山茶碗の小皿・碗が出土した。（第349図104～115）

【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。

【特徴･性格】１ｂ区ＳＤ088に並行して検出された中世の溝で、１ｂ区の調査区内最も規模が大きい。東西に延びているがＥ６グリッド内で北西に向きを変えている。古代の遺物は後世に混入したと考えられる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ088（溝）（１ａ区ＳＤ014、１ｂ区ＳＤ256、２ａ区１面ＳＤ003、２ｂ区ＳＤ092、Ｒｂ区１面ＳＤ003）

【位置】１ｂ区、Ｄ４・Ｅ４～Ｅ９・Ｆ６・Ｆ７グリッドに位置する。１ａ区ＳＤ014、１ｂ区ＳＤ256、２ａ区１面ＳＤ003、２ｂ区ＳＤ092、Ｒｂ区１面ＳＤ003と一体の溝と考えられる。北は調査区外に延びる。

【形状・規模】東西に延びる大きな溝で、壁面は緩やかな傾斜で底面は平坦である。残存長58.80m、幅3.60m、深さ0.12mを測る。

【堆積土】上層に黄灰色のシルト細砂、下層に暗灰黄色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身・高坏、山茶碗の小皿・碗が出土した。須恵器の坏身・高坏は混入と思われる。（第349図116～121）

【時期】出土遺物などから13世紀と考えられる。

【特徴・性格】１ｂ区ＳＤ087に並行して検出された溝である。１ｂ区中央付近で幅が広がり、Ｅ９グリッドで消滅する。約22.00m先に１ｂ区ＳＤ256があり、本溝の続きと考えられる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ107（溝）

【位置】１ｂ区、Ｅ５グリッド、調査区北壁面から緩く北東～南西方向に延びる。

【形状・規模】長さ3.00m、幅0.94m、深さ0.12mの溝である。１ｂ区ＳＤ087に切られ、その先に続く溝は検出されなかった。

【堆積土】黄褐色シルト細砂(3)単層である。

【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土した。

【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】１ａ区ＳＤ029から続く浅い溝である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ117（溝）（１ａ区ＳＤ019、１ｅ区１面ＳＤ006、２ａ区１面ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024）

【位置】１ｂ区、Ｄ６～D12グリッドに位置する。北は調査区外に延びる。１ａ区ＳＤ019、１ｅ区１面ＳＤ006、２ａ区１面ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024と一体の溝である。

【形状・規模】東西に延びる溝で、壁面はほぼ直に下がり、底面は北側が深くなっている。残存長65.50m、幅1.85m、最も深い地点で0.42mを測る。

【堆積土】上層に黄灰色のシルト質細砂、下層に粘性のある黄灰色のシルト質極細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の長頸壺･甕､山茶碗の碗､青磁の小皿が出土した。須恵器は混入と思われる。（第350図122～125）

【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】東西に延びる溝であるがＤ６グリッド内で北西に向きを変え、Ｄ９とD12グリッドで一部削平されている。

（後藤秀）

【遺構名】１ｂ区ＳＤ120（溝）

【位置】１ｂ区、Ｅ６・Ｆ７グリッドに位置する。

【形状・規模】南北に延び、壁面はやや傾斜があり底面はほぼ平坦である。残存長7.70m、幅0.80m、深さ0.22mを測る。

【堆積土】上層に黄褐色のシルト質細砂、下層に黄灰色のシルト質細砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第350図126）

【時期】出土遺物から６世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】遺構の北側を１ｂ区ＳＤ087に削平される。古代に掘削された性格不明の溝である。

（首藤）

【遺構名】１ｂ区ＳＤ128（溝）（１ｃ区ＳＤ181、Ｒａ区ＳＤ097）

【位置】１ｂ区、Ｆ６・Ｆ７グリッドの境に位置する。調査区外（南）へ続く。
【形状・規模】南北に延びる溝で、壁面は傾斜が強く掘り込まれている。残存長6.20m、幅1.04m、深さ0.32mを測る。北側を１ｂ区ＳＤ088に削られる。
【堆積土】上層は黄褐色シルト質細砂(3)、下層は黄灰色シルト質極細砂(4)の２層からなる。
【出土遺物】山茶碗の小碗が出土した。（第350図127）
【時期】出土した山茶碗より12世紀後半以降と思われる。
【特徴・性格】Ｒａ区ＳＤ097、１ｃ区ＳＤ181と一体となる溝である。１ｃ区内で先細りし消滅してゆく。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ151（溝）
【位置】１ｂ区、Ｅ７・Ｆ７・Ｆ８グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東へ延びる溝で、壁面は緩やかな傾斜で底面は平坦である。残存長11.80m、幅1.30m、深さ0.14mを測る。北側を１ｂ区ＳＤ088に削られ、南側は調査区南壁面付近で消滅している。
【堆積土】北側の上層は暗灰黄色シルト質細砂、下層は黄灰色シルト質細砂が堆積する。南側の上層は明黄褐色シルト質細砂の混じる暗オリーブ褐色シルト質細砂が堆積しており、北側と南側で堆積土に差異がある。
【出土遺物】須恵器の坏・高坏、土師器の甕・甑・鍋、砥石が出土している。（第350図128～135、第351図136・137）
【時期】出土遺物より６世紀後半～７世紀中頃と思われる。
【特徴・性格】小規模な溝で、１ｂ区ＳＢ007を構成する１ｂ区ＳＰ156に掘削されており、１ｂ区ＳＢ007が建てられる頃には既に埋没していたか、または溝としては機能していなかったと思われる。調査区南壁面際で遺物の出土が集中している。

（後藤秀）

【遺構名】１ｂ区ＳＤ152（溝）
【位置】１ｂ区、Ｅ８・Ｆ８グリッドに位置する。
【形状・規模】東西に延び、残存長17.30m、幅2.50m、深さ0.10mを測る。
【堆積土】不明である。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第351図138）
【時期】出土遺物から７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

（首藤）

【遺構名】１ｂ区ＳＤ243（溝）
【位置】１ｂ区南端、F12グリッドに位置する。
【形状･規模】調査区南壁面にあるので、形状の詳細は不明であるが、東西に延びていると思われる。壁面は緩やかな傾斜で底面はほぼ平坦である。残存長9.00m、残存幅1.40m、深さ0.24mを測る。
【堆積土】上層に黄灰色のシルト質細砂、下層に地山が混じる黄褐色のシルト質細砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・壺の蓋が出土した。（第351図139～141）
【時期】出土遺物より８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。溝の西側は１ｂ区ＳＸ212によって削平されている。

（後藤秀）

【遺構名】１ｂ区ＳＰ012（ピット）
【位置】１ｂ区、Ｄ１グリッドに位置する。
【形状・規模】平面楕円形で壁面はやや急な傾斜で底面は南端から0.64ｍ地点で0.38ｍ下がり、1.04ｍ地点から平坦である。長軸1.15ｍ、短軸0.40ｍ、深さ0.69ｍを測る。
【堆積土】上層に黄灰色のシルト質細砂、下層に明黄褐色のシルト質細砂と黒褐色のシルト質細砂がブロック状に堆積し、焼土と炭が混じったものが堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋、椀形滓が出土した。（第351図142・143）
【時期】出土遺物から７～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の遺構である。

【遺構名】１ｂ区ＳＰ039（ピット）
【位置】１ｂ区西端、Ｆ１グリッドに位置する。
【形状・規模】平面方形で長軸0.70ｍ、短軸0.59ｍを測る。
【堆積土】不明である。
【出土遺物】須恵器の坏蓋が出土した。（第351図144）
【時期】出土遺物から８世紀初頭～前半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の遺構である。

【遺構名】１ｂ区ＳＰ070（ピット）
【位置】１ｂ区、Ｆ４グリッドの南端に位置する。
【形状・規模】南壁により遺構の一部を削平されているため形状は不明である。長軸0.50ｍ、短軸0.30ｍを測る。
【堆積土】不明である。
【出土遺物】須恵器の短頸鉢が出土した。（第351図145）
【時期】出土遺物から７世紀後半と考えられる。
【特徴・性格】１ｂ区ＳＤ069内にあるが、性格不明の遺構である。

【遺構名】１ｂ区ＳＸ092（不明遺構）
【位置】１ｂ区、Ｆ５グリッドに位置する。
【形状・規模】平面長方形で長軸3.60ｍ、短軸2.30ｍを測る。
【堆積土】不明である。
【出土遺物】須恵器の坏蓋が出土した。（第351図146）
【時期】出土遺物から７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の遺構である。

（首藤）

（３）１ｃ区（第36～67図、写真図版57～81）

【遺構名】１ｃ区ＳＢ001（掘立柱建物）
【位置】１ｃ区の西寄り、Ｈ３グリッドの北西に位置する。

【形状・規模】南北３間×東西２間の総柱建物である。建物の主軸方向はN- 12° -Eで東へ振れる。規模は桁行4.65m、梁行4.30m、柱間は桁行1.20m、梁行1.62mを測る。柱穴の平面形状は隅丸方形や不整円形などと一定せず、特に北面の１ｃ区ＳＰ070・１ｃ区ＳＰ071・１ｃ区ＳＰ072は不整形で小さく浅い。西面側柱１ｃ区ＳＰ073･１ｃ区ＳＰ075は平面形状が隅丸方形を志向していると思われる。南西隅柱１ｃ区ＳＰ078は平面が隅丸方形で、長辺1.26m、短辺1.05m、断面は垂直に近い角度で底面に柱を据えるためとみられる掘り込みがある。１ｃ区ＳＰ081は南東隅柱と南面側柱を１つに繋げて掘削されたものである。東面側柱１ｃ区ＳＰ077は平面不整形であるが別の柱穴が重なっていた可能性がある。断面が箱型で底面に柱を据えるための掘り込みがあり、柱根が残されていた。柱の太さは0.15m程度である。１ｃ区ＳＰ076・１ｃ区ＳＰ089は中柱で、平面形状が円形に近く規模が一回り小さい。

【堆積土】柱穴の埋土は基本層序Ⅳ層由来の砂質土を主とし、上層部分にシルトが多く含まれる。１ｃ区ＳＰ073の柱痕(2)には灰黄褐色の粘土質シルトが堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・有台坏身・高坏などが出土しているほか、１ｃ区ＳＰ075・１ｃ区ＳＰ077から柱根が出土した。（第354図166～168）

【時期】出土遺物から８世紀初頭以降と考えられる。

【特徴・性格】総柱の建物で高床倉庫の可能性があるが、中柱の柱穴規模が小さく、重量物を載せることを想定しない床束建物の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ002（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の西端近くに位置する。

【形状・規模】南北４間×東西２間の南北に長い掘立柱建物である。建物の主軸方向はN- 17° -Eと東に振れる。桁行8.90m、梁行5.40m、柱間は桁行2.03m、梁行2.16mを測る。側柱建物を想定しているが、１ｃ区ＳＰ113が中柱にあたる可能性がある。柱穴の形状や規模は一定ではなく、東面側柱１ｃ区ＳＰ115のように方形を志向し底面を平らにするものもある。なお南面の柱穴１ｃ区ＳＰ041・１ｃ区ＳＰ046・１ｃ区ＳＰ047は上面が削平されており本来の形状は不明である。

【堆積土】柱穴の埋土はにぶい黄褐色や褐色の砂質シルトを主とする。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身などが出土したが、建物の推定時期よりも古く、埋土に混入したと考えられる。（第354図169～171）

【時期】出土遺物の時期は７世紀前半～中頃であるが、建物方向と周辺の遺構の状況などから７世紀後半～８世紀の建物と考えられる。

【特徴・性格】中規模の掘立柱建物で側柱構造であることから、役所的性格を持つエリア内で倉庫以外の役割を担ったと考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ003（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の西寄り、Ｈ２・Ｈ３・Ｉ２・Ｉ３グリッドに跨って位置する。

【形状・規模】２間×２間の総柱建物である。建物の主軸方向はN- 9° -Eでやや東へ振れる。桁行4.50m、梁行3.70mでやや南北に長く、柱間は桁行1.73m、梁行1.41mを測る。北面の柱穴の一部が１ｃ区ＳＤ061により削られており、北へ１間程度延長される可能性は否定できない。柱穴は平面形状が不整円形や隅丸方形で一定しない。断面形状も箱型やすり鉢状、階段状などがある。最大の南東隅柱１ｃ区ＳＰ302は長軸1.53mを測り、段差をつけて掘り下げられている。柱穴の規模は大きいが、

出土した柱根の直径は0.10m程度である。

【堆積土】柱穴の埋土の大半は極細粒砂や砂質シルトである。

【出土遺物】１ｃ区ＳＰ120から須恵器の甕、１ｃ区ＳＰ302から柱根などが出土した。（第354図172）

【時期】出土遺物より時期を推定することは困難であるが、周辺の掘立柱建物と同様に７世紀後半～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】小規模な総柱建物である。高床倉庫の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ005（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の中央、Ｈ７グリッドの北西に位置する。

【形状・規模】２間×２間の総柱建物である。建物の主軸方向はＮ- 21° -Ｗと西へ振れる。桁行4.35m、梁行3.80m、柱間は桁行1.80m、梁行1.52mを測る。柱穴の平面形状は円形で直径0.85m程度である。断面形状はすり鉢状のものが多く、１ｃ区ＳＰ182・１ｃ区ＳＰ228・１ｃ区ＳＰ231・１ｃ区ＳＰ468・１ｃ区ＳＰ475で柱の当たりが確認できた。

【堆積土】柱穴の埋土はにぶい黄褐色の砂質シルトが大半を占め、底面の付近に粘土が堆積するものがある。中柱１ｃ区ＳＰ228では柱痕が確認され、シルト質の粘土が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋などが出土した。（第354図173）

【時期】１ｃ区ＳＩ226を切っているが、建物の主軸方向が大きく西に傾いていることや柱穴が円形であることなど、掘立柱建物の中では古い様相を持っていると考えられるため、７世紀中頃～末頃といえる。

【特徴・性格】総柱構造の建物であり比較的小規模な高床倉庫と考えられる。同じ方向の掘立柱建物が少ないことから、役所的性格を持つ掘立柱建物群の中で初期の頃、あるいはそれ以前の集落内の倉庫の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ006（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の中央西寄り、Ｇ４・Ｇ５・Ｈ４・Ｈ５グリッドに位置し、北面がＲａ区に跨がる。

【形状・規模】南北３間×東西２間の南北に長い総柱建物である。建物の主軸方向はＮ- ３° -Ｅとほぼ方位に沿う。規模は桁行5.10m、梁行5.10m、柱間は桁行1.36m、梁行1.92mを測る。北面の側柱は重複する遺構によって削平されており確認できなかった。柱穴の形状は不整形で規模も深さもばらつきがある。南面側柱１ｃ区ＳＰ491は長軸1.32m、深さ0.82mで、断面形状は箱型である。

【堆積土】柱穴の埋土は１ｃ区ＳＰ491で最上層にシルト質の極細粒砂(1)が堆積し、その下にシルト(2・3)、最下層に粘土(4～6)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の高坏、土錘などが出土した。（第354図174・175）

【時期】出土遺物より時期を推定することは困難であるが、建物方向と周辺の掘立柱建物の関係から７世紀後半～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】総柱建物であり高床倉庫の可能性が高いと考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ007（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の東側、Ｉ10・Ｉ11グリッドに位置する。

【形状・規模】東西に長い廂付と考えられる掘立柱建物である。廂を除いて東西５間×南北３間である。廂は北面に側柱と並行する柱穴列があるが、ほかの３面についてははっきりとしない。しかし北

東隅に側柱より東に突出した廂の柱穴があることから、東西面にも廂があった可能性が高い。南面は北面のように整列する柱穴がないが、廂が存在した可能性は否定できない。建物の主軸方向はN-89°-Wでほぼ方位に沿う。廂を除いた建物規模は、桁行9.97m、梁行6.20m、柱間は桁行1.81m、梁行1.67mを測る。柱穴は円形や隅丸方形を呈しており、北面の廂の柱穴は一回り小さい。建物規模に比べて検出面からの掘り込みが非常に浅く、基壇の上に建てられていた可能性がある。

【堆積土】柱穴の埋土はにぶい黄褐色の粘土が主であり、柱痕には灰黄褐色のシルト質の粘土が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・高坏・甕、土師器の畿内系の皿、製塩土器などが出土した。（第354図176～184）

【時期】出土遺物の時期は北側の１ｃ区ＳＤ512と近く、７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【特徴･性格】廂付の比較的大型の側柱建物である。板葺き又は茅葺きなどの仏堂施設（村落内寺院）等であった可能性も考えられるが、役所的機能の執務の中心を担った建物の可能性が高いと考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ008（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の中央東寄り、Ｉ９グリッドに位置する。

【形状・規模】１間×１間のほぼ正方形に配置された４本の柱で建てられた建物である。建物の主軸方向がN-31°-Wと西に振れ、桁行3.20m、梁行2.90mを測る。柱穴は全て円形で、直径は0.65m前後を測る。断面形状はすり鉢状あるいは箱型に近い形状で、柱の当たりの沈み込みがみられる。

【堆積土】上層に暗褐色のシルト質の粘土、下層ににぶい黄褐色や灰黄褐色のシルト質の粘土が堆積する。

【出土遺物】須恵器片や土師器片が出土したが図化できるものは無かった。

【時期】１ｃ区ＳＤ527に切られていることから６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】４基の柱穴のみが確認された建物で詳細は不明であるが、小規模な高床建物や平地式の建物の可能性も考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ009（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の中央、Ｈ７グリッドに位置する。

【形状・規模】２間×１間の長方形の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN-23°-Eで東へ振れる。桁行3.43m、梁行3.18m、桁行の柱間は1.48mである。柱穴の平面形状は円形で北東隅柱１ｃ区ＳＰ239が直径0.40m程度である。

【堆積土】柱穴は上層に砂質土が堆積し､下層に地山の粘土ブロックを含むシルト質の土が堆積する。

【出土遺物】須恵器や土師器片が出土したが図化できるものは無かった。

【時期】１ｃ区ＳＩ808を切って建てられており、７世紀後半以降と考えられる。

【特徴・性格】小規模な側柱建物である。建物方向は１ｃ区ＳＢ002などに近いが、中世の溝である１ｃ区ＳＤ061とも方向が近いため、時期などの断定はできない。規模から小屋程度の建物であったと考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ010（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の中央西寄り、Ｈ４・Ｈ５・Ｉ４・Ｉ５グリッドに跨って位置する。

【形状・規模】残存状況が悪く正確に形状を捉えられていないが、東西４間×南北２間の総柱構造の掘立柱建物と推定した。建物の主軸方向はN- 88° -Wでほぼ方位に沿う。規模は桁行7.20m、梁行4.01mで、柱間は桁行1.59m、梁行1.74mを測る。撹乱で削平された柱穴が多く、特に南西側柱穴の平面形状がはっきりしない。北東隅柱１ｃ区ＳＰ567や北面側柱１ｃ区ＳＰ333は隅丸方形である。断面形状はすり鉢状や箱型で、柱の当たりが沈み込むものがある。

【堆積土】北西隅柱１ｃ区ＳＰ319では上層ににぶい黄褐色の砂質シルト、柱痕に極細粒砂、底面の縁に灰黄褐色のシルト質の極細粒砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の有台坏身などが出土したほか、北東隅柱１ｃ区ＳＰ567の底面近くから３つの土器片が重なった状態で出土した。（第354図185）

【時期】出土遺物と周辺の掘立柱建物から７世紀末頃～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造の遺物で高床倉庫の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ011（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の中央東寄り、Ｈ９グリッドに位置する。

【形状・規模】１間×１間のほぼ正方形に配置された４本の柱で建てられた建物である。建物の主軸方向はN- 9° -Eで東に少し振れ、桁行、梁行ともに2.50mで、柱間は2.16mを測る。柱穴は全て円形で直径0.40m程度、深さは0.42mを測る。

【堆積土】暗褐色の粘土が堆積し、上層はシルトを多く含む。

【出土遺物】須恵器片や土師器片が出土したが図化できるものは無かった。

【時期】時期の特定できる遺物は無いが、堆積土と形状から６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】４基の柱穴のみが確認された建物で詳細は不明であるが、小規模な高床建物や平地式の建物の可能性も考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ012（掘立柱建物）

【位置】１ｃ区の東側、Ｉ11・Ｉ12グリッドに跨って位置する。

【形状・規模】２間×２間のやや南北に長い総柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN- 0° -Sで方位に沿っている。桁行5.21m、梁行4.50m、柱間は桁行2.12m、梁行1.63mを測る。北面の側柱１ｃ区ＳＰ679と隅柱１ｃ区ＳＰ680は隣接する１ｃ区ＳＢ013と完全に重なり合っており、どちらの建物を構成するか判別が困難であったが、周辺遺構の切り合い関係上１ｃ区ＳＢ012が新しいと判断したため、１ｃ区ＳＢ012と判断した。柱穴は平面形状が円形や隅丸方形などの不揃いである。南西隅柱１ｃ区ＳＰ849は長軸1.20m、中柱１ｃ区ＳＰ987は直径0.54mを測り、東側の突出部が抜き取り時に拡張された可能性がある。柱穴の断面形状はすり鉢状で底面が平坦なものとそうでないものがある。柱穴の深さは北東隅柱１ｃ区ＳＰ680で0.62mを測る。南面側柱の１ｃ区ＳＰ995は規模が小さく浅いが、根石と思われるこぶし大の礫が残っていた。

【堆積土】南東隅柱１ｃ区ＳＰ849では抜き取り時の埋土と思われるにぶい黄褐色の粘土質のシルトやシルト質の粘土(1・2)、掘方埋土ににぶい黄褐色の粘土(3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中より須恵器の坏身、羽口の破片、用途不明の鉄製品などが出土した。（第355図186～188）

【時期】出土した須恵器は７世紀中頃であるが、１ｃ区ＳＢ013やほかの切り合う柱穴との関係から８世紀の建物と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造で高床の倉庫の可能性もあるが、中柱の規模が小さいため揚床の床束建物である可能性が高いと考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ013（掘立柱建物）
【位置】１ｃ区の東端近くに位置し、１ｃ区ＳＢ012と一部重複する。
【形状・規模】東西３間×南北２間の東西にやや長い掘立柱建物である。建物の主軸方向はN- 88° -Ｅでほぼ方位に沿う。桁行6.00m、梁行5.51m、柱間は桁行1.48m、梁行2.06mを測る。南西隅柱とその東の側柱の柱穴は１ｃ区ＳＢ012と重なり失われたと考えられる。柱穴は平面形状が隅丸方形や円形など一定ではない。断面形状は総じて壁が切り立つ。底面は平坦と丸底、段差があるものがある。中柱１ｃ区ＳＰ720からは礎板が出土している。
【堆積土】礎板が出土した中柱１ｃ区ＳＰ720では抜き取り時の埋土で砂質シルトや極細粒砂(1～3)が堆積する。その下層は柱据付け時の埋土で灰黄褐色の粘土質シルト(4・5)、最下層に礎板設置前の埋土の黒褐色粘土(6)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋や礎板などが出土した。（第355図189）
【時期】１ｃ区ＳＢ012と１ｃ区ＳＤ512に切られていることから７世紀後半～末頃と考えられる。
【特徴・性格】総柱構造であり柱穴に礎板を使用していることから、重量物を載せるための高床倉庫と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ158（ＳＬ158）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央西寄り、Ｈ４グリッドに位置する。
【形状・規模】粘土塊と炭層の存在からカマドと判断した。竪穴建物に伴うものと考えられるが、建物の掘方は確認できなかった。カマドの掘方は長軸2.00m、短軸1.72mを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色の極細粒砂や砂質シルト(1～3)が上層に薄く堆積し、その下層に炭や焼土を多く含むシルトが堆積し、燃焼面にあたる。カマド本体に使われていたと思われる粘土塊(7)も残存する。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したが図化できるものは無かった。
【時期】時期を特定できるものはないが、周辺の同様の遺構から７世紀と考えられる。
【特徴・性格】竪穴建物内に付設されたカマドと考えられるが詳細は不明である。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ169（ＳＬ110）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の西寄り、Ｈ４・Ｇ４グリッドに位置し、一部Ｒａ区に跨る。
【形状・規模】隅丸方形と考えられる竪穴建物である。掘方の上部は削平され、南側の一部は撹乱を受けて失われており全体の輪郭は捉えることができなかった。建物の主軸方向はN-37° -Wで西に振れている。長辺6.36m、短辺6.00mを測り、北西面の中央に１ｃ区ＳＬ110（カマド）を持つ。カマドは原形を留めていないが、僅かに残る粘土塊と炭層、遺物から推定した。竪穴内部には１ｃ区ＳＤ173・１ｃ区ＳＤ189があり、壁際溝（壁溝）の可能性があるが、これらは不明瞭な溝で完全に壁面に沿うわけではない。ピットは建物内より複数確認されている。そのうち西隅付近の１ｃ区ＳＰ192は位置や規模から主柱穴であった可能性が考えられる。１ｃ区ＳＰ192は円形で直径0.70m程度、深さ0.34mを測る。断面がすり鉢状で中心部に柱の当たりがある。
【堆積土】竪穴上層には褐色の極細粒砂、下層にはにぶい黄褐色の極細粒砂やシルトが堆積する。

【出土遺物】カマドから土師器の甕と甑がまとまって出土したほか、１ｃ区ＳＤ189より須恵器の瓶の口縁部、埋土中より須恵器の坏蓋などが出土した。（第355図190～193）
【時期】出土遺物から６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】住居として使用された竪穴建物と考えられる。カマドは掘方の位置から一部が竪穴外に突出していた可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ195（ＳＬ195）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央西寄り、１ｃ区ＳＢ006の南東に位置する。
【形状・規模】竪穴建物に伴うカマドであるが、建物本体は検出できなかった。炭層と粘土の一部が確認できる程度で、原形は留めていない。掘方は長軸1.56m、短軸1.52mで不整形であるが北西方向に向いていたと考えられる。
【堆積土】遺構検出面に土器片や粘土塊を含む埋土(1～3)があり、その直下に炭を多量に含む層(4･5)が堆積し、燃焼面にあたる。
【出土遺物】検出面から土師器の甕が割れて散乱した状態で出土した。（第355図194）
【時期】出土した土師器から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】竪穴建物内に付設されたカマドである。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ199（ＳＬ199）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央、Ｈ６・Ｉ６グリッドに位置する。
【形状・規模】竪穴建物に伴うカマドであるが、建物本体の検出はできなかった。形状は粘土塊が一部残存するのみで原形を留めていない。掘方は不明瞭であったが長軸1.68m、短軸1.56mを測る。
【堆積土】最上層の極細粒砂(1)と共に粘土塊(2)があり、崩れたカマドの一部が散らばったものと考えられる。その下に炭を多く含む層(3・4)があり、燃焼面にあたる。大きな粘土塊(6)は原位置を留めている可能性がある。
【出土遺物】土師器の甕、鍛の可能性がある鉄製品が出土した。（第355図195～197）
【時期】出土した土師器から７世紀中頃～後半と考えられる。
【特徴・性格】竪穴建物内に付設されたカマドと考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ223（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央に位置する。
【形状・規模】隅丸方形と推定される竪穴建物である。南半分が１ｃ区ＳＤ061（中世の溝）に切られており正確な規模は不明であるが、残存規模で長辺7.50m、短辺6.10mを測る。建物の主軸方向はN-37°-Wで西に振れる。掘方上部は削平され失われており、床面は確認できなかった。火処も不明である。主柱穴は１ｃ区ＳＰ663・１ｃ区ＳＰ888が該当する可能性があり、４本の主柱穴があった可能性が高い。
【堆積土】竪穴の埋土には基本層序Ⅴ・Ⅵ層を含む砂質シルトや極細粒砂が堆積する。主柱穴の可能性がある１ｃ区ＳＰ663は掘方埋土ににぶい黄褐色の極細粒砂、柱の当たりにやや色の暗い砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】竪穴の埋土より須恵器の坏蓋・坏身・高坏、土錘、椀形滓などが出土した。（第355図198～200、第356図201～203）

【時期】出土遺物より６世紀末頃～７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】削平されており、詳細不明の竪穴建物である。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ226（ＳＬ227）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央、Ｈ７グリッドに位置する。
【形状・規模】隅丸方形の竪穴建物である。南北6.66m、東西6.60mのほぼ正方形で、建物の主軸方向はN-２°-Wでほぼ方位に沿う。北面の中央付近に１ｃ区ＳＬ227（カマド）があり、壁際溝（壁溝）が全周にわたり掘られている。また壁際溝（壁溝）よりも幅広で浅い掘り込みがあり、竪穴の中央に地山の高まりが島状に残っていた。掘方上部は削平されており、検出面にてカマドの炭層が広がっていたことから、床面と検出面がほとんど同じ高さと考えられる。掘方底面までは深さ0.18mを測る。主柱穴と考えられる柱穴が４つ確認された。柱穴は円形で直径0.60m前後、深さは検出面から0.60m程度である。カマドはほとんど原形を保っていないが東側の基底部の一部と推定される粘土塊が残されているほかに、カマドの残骸と推定される粘土塊が散乱して確認された。カマドの掘方は竪穴内に収まる。
【堆積土】検出面にてカマド内外に広がる炭層が確認されたことで、その面が床面と推察されたが、貼り床層は認められず、極細粒砂を主とする層が堆積するのみであった。カマドと柱穴の埋土も極細粒砂を主とし、竪穴の埋土との違いが少なかった。北西の１ｃ区ＳＰ656では柱痕が確認され、柱の直径は0.10m程度であったと想定される。
【出土遺物】検出面や埋土から須恵器の坏身・高坏・甕、土錘、羽口の破片など、壁際溝（壁溝）から完形品の須恵器の坏蓋、土師器の甕の口縁部などが出土した。（第356図204～212）
【時期】出土遺物より７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】住居として使われた竪穴建物と考えられる。竪穴建物の中では比較的残存状態が良い。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ251（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央東寄り、Ｈ７・Ｈ８・Ｉ７・Ｉ８グリッドに跨がり、１ｃ区ＳＩ226の東に隣接して位置する。
【形状・規模】隅丸方形で東西7.38m、南北6.78mで僅かに東西に長い。建物の主軸方向はN-３°-Wでほぼ方位に沿う。竪穴の掘方は上部が削平を受けており、検出面と床面がほとんど同じ高さと考えられる。掘方底面までの深さは0.16mを測る。竪穴内は幅0.40m程度の壁際溝（壁溝）が全周して巡る。時期不明のピットが多くあり主柱穴は断定はできないが、１ｃ区ＳＰ736・１ｃ区ＳＰ746・１ｃ区ＳＰ747・１ｃ区ＳＰ761・１ｃ区ＳＰ1034が該当する可能性がある。１ｃ区ＳＰ747は円形で直径0.65m、検出面からの深さは0.40m程度である。１ｃ区ＳＬ507（カマド）が北面のやや東寄りに位置するが原形を留めておらず、残骸の粘土塊や炭、焼土、土器片が確認された。
【堆積土】カマド近くに堆積する炭を多く含む層(5)の直上に褐色の砂質シルト(2)が竪穴全体を薄く覆う。貼り床は無く、下層はにぶい黄褐色の砂質シルト(12)が掘方底面まで堆積する。柱穴の埋土も同様の砂質シルトや細粒砂が中心である。
【出土遺物】カマドから須恵器の坏蓋・坏身、土師器の甕・甑、ほかに竪穴の埋土内から須恵器の坏蓋・坏身・甕、砥石などが出土した。（第356図213～220、第357図221・222）
【時期】カマドの出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】住居として使用された竪穴建物と考えられる。１ｃ区ＳＩ226に隣接し、規模も方向も近いことから、建て替えられた可能性もあるが、その新旧関係は判別できなかった。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ307（ＳＬ178、ＳＫ500）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央西寄り、Ｇ５・Ｇ６・Ｈ５・Ｈ６グリッドに跨って位置する。
【形状・規模】掘方の残存状況が悪く不整方形に検出されたが、本来は隅丸方形であったと推定される。建物の主軸方向はＮ-10° -Ｗとやや西に傾く。規模は長辺7.80m、短辺6.72m、掘方底面までの深さは0.30mを測る。北面と東面の壁面に沿って壁際溝（壁溝）が確認された。主柱穴となる柱穴は不明であるが、臼玉が出土した１ｃ区ＳＰ363は本建物に伴う柱穴の可能性が高い。火処は北面中央付近に１ｃ区ＳＬ178（カマド）があるが、竪穴中央付近にも１ｃ区ＳＫ500（炭溜まり遺構）があり、本建物に伴う火処であった可能性がある。１ｃ区ＳＬ178（カマド）は粘土塊や炭・焼土と共に土器が散乱した状態で原形を留めていなかった。
【堆積土】竪穴内はにぶい黄褐色の砂質シルト(4)が上層を覆い、その直下に１ｃ区ＳＫ500(5)がある。１ｃ区ＳＬ178はすでに検出面に露出していたため、１ｃ区ＳＫ500よりも僅かに高い位置にあった。床面～掘方底面にかけての堆積は、砂やシルト（9～18）で構成される。
【出土遺物】１ｃ区ＳＬ178から土師器の甕、１ｃ区ＳＫ500から須恵器の無台坏身、炉石、１ｃ区ＳＰ363から臼玉、竪穴の埋土より須恵器の坏蓋・坏身・高坏などが出土した。（第357図223～233）
【時期】出土遺物から６世紀末頃～７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】住居として使用されていた竪穴建物と考えられる。２つの火処を持っていた可能性がある。しかしながら１ｃ区ＳＫ500は、本建物とは時期の異なる無関係の遺構の可能性もある。ほかにも新旧の遺構が似たような状態で複雑に切り合っており、本建物に伴うものか判断するのは困難であった。また東に隣接する１ｃ区ＳＩ813との新旧関係も不明である。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ389（竪穴建物）
【位置】１ｃ区、Ｉ４・Ｉ５グリッドの南壁際に位置し、調査区南へと続く。
【形状・規模】北西部の輪郭が不明瞭であったが、概ね隅丸方形と推定される。規模は東西9.86m、南北3.50m以上あり、掘方底面までの深さは検出面から0.33mを測る。火処や貯蔵穴は確認されず、主柱穴も不明である。
【堆積土】褐色やにぶい黄褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】竪穴の埋土から用途不明の鉄製品が出土している。（第357図234）
【時期】時期を特定できる遺物は無いが、周辺の竪穴建物と同様に７世紀と考えられる。
【特徴・性格】比較的大型の竪穴建物であるが詳細は不明である。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ546（ＳＬ403）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央西寄り、Ｈ５グリッドに位置する。
【形状・規模】建物の全体の規模は不明であるが、１ｃ区ＳＬ403（カマド）と壁際溝（壁溝）の可能性がある１ｃ区ＳＤ899の存在から隅丸方形の竪穴建物と判断した。壁際溝（壁溝）から推定した建物の主軸方向はＮ-21° -Ｗと西に傾き、規模は南北5.76mを測る。西半分は確認できなかったので東西の規模は不明である。カマドは原形を留めておらず、遺物と共に炭層が広がり粘土塊が散見する残骸であった。

【堆積土】壁際溝（壁溝）内はシルト質の極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】カマドから須恵器の坏蓋、土師器の甕、遺構検出面から土師器の鍋･甑などが出土した。（第357図235～237、第358図238）
【時期】出土遺物より６世紀後半～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】住居として使用されたと考えられる竪穴建物であるが、残存状況が悪く詳細は不明である。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ808（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央、Ｈ７グリッドに位置し１ｃ区ＳＩ226に切られる。
【形状・規模】隅丸方形の竪穴建物である。掘方の大半は削平され、溝状に掘られた掘方基底部が確認された。建物の主軸方向はＮ-39°-Ｗと西へ傾く。規模は長辺6.60ｍ、短辺6.54ｍを測る。主柱穴は１ｃ区ＳＰ511・１ｃ区ＳＰ904・１ｃ区ＳＰ906・１ｃ区ＳＰ1123の４本と考えられる。東面と南・北面の一部に壁際溝（壁溝）が確認できた。火処は不明である。
【堆積土】壁際溝（壁溝）に褐色の極細粒砂、掘方基底部に砂質シルトが堆積する。主柱穴の１ｃ区ＳＰ904は掘方埋土ににぶい黄褐色の砂質シルト、柱の当たりにシルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器や土師器片が出土しているが図化できるものは無かった。
【時期】１ｃ区ＳＩ226に切られていることから６世紀後半～７世紀前半と推定される。
【特徴・性格】削平された竪穴建物で、詳細は不明である。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ813（ＳＬ201）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央、Ｈ６グリッドに位置し、１ｃ区ＳＩ307・１ｃ区ＳＩ226に隣接する。
【形状・規模】隅丸方形と推定されるが北東隅の形状のみが確認できた。建物の主軸方向はＮ-35°-Ｗと推定され、西へ傾く。規模は長辺3.40ｍ以上、短辺3.20ｍ以上、掘方底面までの深さは0.33ｍを測る。北西面に１ｃ区ＳＬ201（カマド）があるが残存状況が悪く残骸のみしか確認できなかった。
【堆積土】掘方埋土には砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】カマドから土師器の甕が散乱した状態で出土した。（第358図239）
【時期】出土遺物から７世紀中頃と推定される。
【特徴・性格】住居と推定される竪穴建物であるが、詳細は不明である。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ965（ＳＬ965）（竪穴建物）
【位置】１ｃ区の中央東寄り、Ｉ８・Ｉ９グリッドに跨って位置する。
【形状・規模】竪穴建物に付設されたカマドと考えられる。建物掘方は確認できなかった。カマド基底部の粘土が一部残存し、粘土が出土した範囲から北西を向いていたと考えられる。
【堆積土】検出面に燃焼面の炭層が薄く広がり、上面を削平された粘土のみが確認された。炭層の下には灰黄褐色の極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】図化できる遺物は無かったが、炭層の上から細かいハケが施された土師器片が出土した。
【時期】出土遺物から６世紀後半～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】竪穴建物内に付設されたカマドと考えられるが、詳細は不明である。

（小島）

【遺構名】１ｃ区ＳＫ092（土坑）

【位置】 １ｃ区西端、Ｇ２グリッドに位置する。
【形状・規模】 平面形状は不整方形で南北を長軸とする土坑である。底面は南が低いがおおむね平坦で、規模は長軸1.60m、短軸1.24m、深さ0.28mを測る。
【堆積土】 上層に鉄を含むにぶい黄褐色の極細粒砂(1)が堆積し、下層には灰黄褐色の極細粒砂(2)が堆積する。
【出土遺物】 埋土中から土師器甕が出土した。(第358図240)
【時期】 出土遺物の時期から７世紀後半～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】 性格不明の土坑である。

(後藤泰)

【遺構名】１ｃ区ＳＫ254（炭溜まり土坑）
【位置】 １ｃ区、Ｉ８グリッドの竪穴建物が重複する中に位置する。
【形状・規模】 直径0.45m程度の円形の範囲に広がる炭溜まりである。
【堆積土】 にぶい黄褐色の細粒砂に炭や焼土が含まれる。
【出土遺物】 須恵器の坏蓋が出土した。(第358図241)
【時期】 出土遺物から６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】 住居の火処に伴う炭溜まりの可能性がある。

(小島)

【遺構名】１ｃ区ＳＫ448（土坑）
【位置】 １ｃ区中央西寄り、Ｈ５グリッドに位置する。
【形状･規模】 平面形状は隅丸方形で北西～南東を長軸とする土坑である。底面は小さな凹凸があり、土坑の規模は長軸1.32m、短軸1.16m、深さ0.24mを測る。
【堆積土】 最上層は褐色のシルト(2)が堆積し、その下層にはにぶい黄褐色と褐色のシルトと砂質シルト(3～9)が堆積する。また炭が含まれている層(3・4・6)がある。
【出土遺物】 埋土中から土師器と須恵器の小片のみ出土した。
【時期】 １ｃ区ＳＢ006を切っていることから８世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】 本土坑は１ｃ区ＳＢ006に重複し、切り合い関係から１ｃ区ＳＢ006よりも新しい時期に相当する。堆積土の３層・４層に炭化物を多く含み、土坑内で何かを燃やしたと考えられるが、詳細は不明である。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ622（土坑）
【位置】 １ｃ区東側、Ｉ10・Ｉ11グリッドに位置する。
【形状・規模】 平面形状が不整円形と推定される。テラス状の段差をつけながら中央に向かって深くなっており、規模は長軸2.40m、短軸2.28m、深さ0.60mを測る。
【堆積土】 最上層はにぶい黄褐色のシルト質粘土(1)が堆積し、その下に炭化物を含む灰褐色の粘土(2)、にぶい黄褐色・褐灰色・黒色の粘土(3～5)が堆積する。
【出土遺物】 埋土中から須恵器の坏身・鉢・蹄脚円面硯が出土した。(第358図242～245)
【時期】 出土遺物の時期から７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】 本土坑は１ｃ区ＳＤ600と重複し、切り合い関係から１ｃ区ＳＤ600よりも古い時期に相当する。出土遺物に円面硯があることから、役所機能を有する施設に関連した遺構である可能性が考えられる。

（後藤泰）

【遺構名】１ｃ区ＳＫ666（土坑）

【位置】１ｃ区の中央東寄り、Ｈ９・Ｉ９グリッドに跨って位置し、１ｃ区ＳＤ512・１ｃ区ＳＤ527と重複する。

【形状・規模】楕円形のような形状の土坑である。長軸6.49m、短軸3.39m、深さ0.45mを測る。断面の傾斜はなだらかで、底面は平坦に近い。

【堆積土】最上層に灰黄褐色の粘土質シルトが薄く堆積し、その下層の黒褐色や灰黄褐色の粘土には灰色土が薄く何層にも縞状に堆積しており、繰り返し水の流入がありながら埋没したようである。またこの層には拳大から人頭大の石が少量混じる。最下層は基本層序Ⅴ層･Ⅵ層の粘土が混ざっており、底面を整形した層と考えられる。

【出土遺物】須恵器の鉢・長頸瓶・甕などが出土した。（第358図246、第359図247・248）

【時期】出土遺物と切り合い関係から７世紀後半～末頃と考えられる。

【特徴・性格】性格は不明であるが、１ｃ区ＳＤ527の上位から掘られている。元々水が流入しやすい場所に意図して掘った可能性があり、簡易な貯水場所ないしは施設であった可能性が考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ753（土坑）

【位置】１ｃ区、H11グリッドに位置する。

【形状・規模】楕円形で長軸1.77m、短軸0.76m、深さ0.22mを測る。掘方の傾斜は緩やかで底面は平坦である。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト、下層に地山土がブロック状に含まれるにぶい黄褐色粘土が堆積する。

【出土遺物】上層埋土より須恵器の坏身が出土した。（第359図249）

【時期】出土遺物から６世紀末頃以降と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ868（竪穴状土坑）

【位置】１ｃ区の東寄り、Ｉ８グリッドに位置する。

【形状・規模】南側が１ｃ区ＳＤ061に切られる不整形である。長軸2.43m、短軸1.93m、深さ0.11mを測る。浅い落ち込み状の形状である。

【堆積土】にぶい黄褐色のシルトが堆積する。

【出土遺物】石製の紡錘車が出土した。（第359図250）

【時期】時期を特定できる遺物は無いが､周辺遺構の状況から６世紀後半～７世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】性格不明であるが、竪穴建物の基底部の掘り込みであった可能性がある。

（小島）

【遺構名】１ｃ区ＳＫ967（土坑）

【位置】１ｃ区東側、Ｉ11グリッドに位置する。

【形状・規模】平面形状は楕円形である。規模は、長軸2.16m、短軸1.44m、深さ0.68mを測る。

【堆積土】１ｃ区ＳＤ527と区別できずに掘削を始めたため不明な点が多いが、上層に灰黄褐色のシルト質粘土(1)が堆積し、中層ににぶい黄褐色のシルト(2)と黒褐色のシルト質粘土(3)、下層ににぶい黄褐色のシルト(5)、黒褐色・褐灰色の粘土(4・6)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身・長頸瓶が出土した。（第359図251・252）
【時期】出土遺物から７世紀後半～末頃と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。本土坑は１ｃ区ＳＤ527と重複し、切り合い関係から１ｃ区ＳＤ527の最終埋没より古い時期に相当するが、１ｃ区ＳＤ527との時期差はあまりなく、同時期の可能性がある。

（後藤泰）

【遺構名】１ｃ区ＳＤ048（溝）
【位置】１ｃ区の西側に位置する。
【形状・規模】南北に掘られた幅3.11m、深さ0.23mの幅広で浅い溝である。北はＲａ区へと続き、南は削平されて失われているが旧五条川へと接続していたと考えられる。
【堆積土】にぶい黄褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】本業焼の反り皿、陶器の丸碗、陶錘などが出土した。陶錘は後世の混入品と考えられる。（第359図253～255）
【時期】出土遺物から17世紀以降に機能していたと考えられる。
【特徴・性格】旧五条川へと排水する溝と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ051（溝）
【位置】１ｃ区の西側、Ｈ３・Ｉ３グリッドに位置する。
【形状・規模】南北に掘られた長さ15.20m以上、幅3.17m、深さ0.22mの幅広で浅い溝である。１ｃ区ＳＤ048に並行し、調査区の南へと続く。
【堆積土】暗褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗のほか、図化できなかったが近世の陶磁器片が出土した。（第359図256）
【時期】１ｃ区ＳＤ048と同時期に機能していたと考えられる。
【特徴・性格】旧五条川へと排水する溝と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ061（溝）（１ｄ区ＳＤ075・ＳＤ551）
【位置】１ｃ区、Ｈ２～Ｈ４・Ｉ４～Ｉ９グリッドにかけて位置する。
【形状・規模】東西方向の直線的な溝で、西が南方向へと振れ、Ｉ５グリッドで南へ直角に分岐する。１ｄ区ＳＤ075・１ｄ区ＳＤ551と同一の溝と考えられる。幅は2.00m前後で深さ0.54mを測るが、分岐点より西は深さ0.35m程度と一段浅くなる。溝の断面は壁面の傾斜が45°程度で、底面は0.90m程の幅で平坦となっている。
【堆積土】上層に厚く堆積する黄褐色のシルト質粘土は廃絶後に埋め戻されたものと考えられ、その下層に溝の肩部から流れ込んだ砂質土層、水の滞留によって堆積したとみられる粘土層がある。最下層には掘削してまもなく埋められたとみられる地山の粘土がブロック状に含まれた土が堆積する。
【出土遺物】山茶碗類のほか、須恵器、土師器、灰釉陶器、陶器、砥石などの多様な遺物が混入する。遺物の出土量は全体的に上層が多く、埋没していく中で周辺の土に含まれていた遺物が流れ込んだと考えられる。（第359図257～263、第360図264～277）
【時期】出土遺物から13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】長期間存続した大型の溝で、形状と時期から中世の屋敷を取り囲む屋敷溝の可能性が高い。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ096（溝）
【位置】１ｃ区の西側、南壁近くに位置する。
【形状・規模】南～東へ折れ曲がる溝で、１ｃ区ＳＤ051を挟んだ１ｃ区ＳＤ156と同一の可能性がある。幅は広い場所で0.94m、深さ0.14mを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色の極細粒砂の単層である。
【出土遺物】山茶碗の小皿が出土した。（第361図278・279）
【時期】出土遺物から13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】１ｃ区ＳＤ061と重なる時期の溝で、中世の屋敷内の溝の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ135（溝）
【位置】１ｃ区、Ｉ２～Ｉ４グリッドに位置する。
【形状・規模】直線的で幅1.36m、深さ0.22mを測る。
【堆積土】鉄分を含むにぶい黄褐色のシルトの単層である。
【出土遺物】山茶碗の碗･小皿のほか、埋没過程で混入したと考えられる須恵器の蹄脚円面硯の破片、製塩土器が出土した。（第361図280～284）
【時期】出土遺物から13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】１ｃ区ＳＤ096との新旧関係は不明であり、同時期に併存または掘り直した中世の屋敷内の溝の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ154（溝）
【位置】１ｃ区、Ｉ３グリッドに位置する。
【形状・規模】長さ2.60m、幅0.55mの小さい南北溝である。
【堆積土】鉄分を含むにぶい黄褐色の極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器の鉢が出土した。（第361図285）
【時期】出土遺物から７世紀末頃以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ181（溝）（１ｂ区ＳＤ128、Ｒａ区ＳＤ097）
【位置】１ｃ区、Ｇ６・Ｈ６・Ｉ６グリッドに位置する。
【形状・規模】直線的な南北溝で、北が西へ若干振れる。南は１ｃ区ＳＤ061にぶつかり北はＲａ区ＳＤ097へと続く。幅0.76m、深さ0.30mを測る。
【堆積土】褐色のシルト質極細粒砂の単層である。
【出土遺物】山茶碗の碗などが出土した。（第361図286）
【時期】出土遺物から12世紀後半以降と考えられる。
【特徴・性格】中世の屋敷溝と考えられる１ｃ区ＳＤ061に直交し時期も重なることから、屋敷周辺を区画した溝の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ249（溝）
【位置】１ｃ区、Ｇ７・Ｇ８グリッドの北壁沿いに位置する。

【形状・規模】東西方向の溝で、長さ13.50m、幅0.85mで深さ0.24mを測る。壁面の傾斜は緩やかで底面は平坦である。
【堆積土】上層に灰黄褐色の極細粒砂、下層にシルト質の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身、土師器の甕などが出土した。（第361図287・288）
【時期】出土遺物から７世紀末頃以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ250（溝）
【位置】１ｃ区、Ｇ７・Ｇ８・Ｈ８グリッドに位置する。
【形状・規模】南北方向で緩やかに屈曲する溝である。残存長8.50m、幅0.67m、深さ0.20mを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋・高坏などが出土した。（第361図289・290）
【時期】１ｃ区ＳＤ249に切られていることから７世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ288（溝）
【位置】１ｃ区、Ｉ９グリッドに位置する。
【形状・規模】北東方向から始まり南西へと続く。１ｃ区ＳＤ061（中世の溝）に切られ、南の１ｄ区では確認できない。残存長7.41m、幅1.08m、深さ0.23mを測り、断面の傾斜は緩やかで底面は平坦である。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色の砂質シルト、下層に褐色の粘土質シルトが堆積する。水が流れた状況は確認できない。
【出土遺物】須恵器の坏身・短頸壺・高坏などが出土した。（第361図291～293）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。集落内を区画する溝の可能性がある。

（小島）

【遺構名】１ｃ区ＳＤ512（溝）
【位置】１ｃ区中央東寄り～東端、Ｈ９～Ｈ12グリッドに位置する。
【形状・規模】東西に延びる溝で、長さ28.00m、幅1.96m、底面は東がやや深くなっており、深さ最大0.70mを測る。西側の掘方は不明瞭で、１ｃ区ＳＤ527へ流れ込む可能性がある。
【堆積土】ｂ-ｂ'間では上層に灰黄褐色のシルト(1・2)と粘土質シルト(3)、中層ににぶい黄褐色のシルト質粘土(4)、褐色と灰黄褐色の粘土質シルト(5・6)、下層に褐色・黒褐色・灰黄褐色の粘土(7～9)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器と土師器が出土している。器種は、須恵器が坏類・壺・鉢・盤・鼈・瓶、土師器が甕である。出土遺物の多くが上層～中層のもので、下層からの出土は少ない。また７世紀前半～後半の遺物は後世の混入品もしくは重複する１ｃ区ＳＤ527・１ｃ区ＳＫ666に関係する遺物の可能性がある。（第361図294～298、第362図299～316、第363図317～332、第364図333～344）
【時期】出土遺物から７世紀後半～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】本溝は１ｃ区ＳＢ013、１ｃ区ＳＤ527、１ｃ区ＳＫ666と重複する。切り合い関係から最も新しい時期の溝と考えられる。上層に多く遺物が含まれ、その中に転用硯もあることから、役

所機能に関係した溝と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ527（溝）

【位置】１ｃ区中央東寄り～東端、Ｇ８・Ｈ８・Ｈ９・Ｉ９～Ｉ11・Ｊ11グリッドに位置する。

【形状・規模】南東～北西に向けて延びる溝で、１ｃ区部分の長さは43.00m、幅2.32m、壁面～底面にかけてはなだらかで、調査区中央付近が最も浅く南東側が最も深い。深さ0.54mを測る。

【堆積土】南東のｆ-ｆ'間では上層にシルトが堆積し、下層に粘土質シルト・シルト質粘土、最下層に基本層序Ⅻ層がブロック状に含まれる粘土が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器､土師器､砥石が出土した。器種は須恵器が坏蓋･坏身･高坏･壺･甕･鉢･瓶・平瓶、土師器が坏・甕・鍋である。（第365図345～369、第366図370～387、第367図388～393）

【時期】出土遺物から６世紀末頃以降に形成され、８世紀前半までに埋没したと考えられる。

【特徴・性格】本溝は、切り合い関係から１ｃ区ＳＤ512、１ｃ区ＳＫ666よりも古い。しかし南東側からは１ｃ区ＳＤ512 と近い時期の遺物が出土しており一概に古い遺構とは言えない。調査時には確認できなかったが南東側の深くなっている場所は後に掘られた別の遺構の可能性もある。７世紀前半までは自然地形の落ち込み程度のもので、７世紀後半以降に南東側が排水などの目的で新たに掘削されたのではないかと考えられる。

（後藤泰）

【遺構名】１ｃ区ＳＤ600（溝）

【位置】１ｃ区の東側、Ｈ10・Ｈ11・Ｉ10・Ｊ10グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】南北に延びる直線的な溝で北が東へ若干振れる。幅0.68m、深さ0.23mを測り底面は平坦である。

【堆積土】上層に灰黄褐色の粘土、下層ににぶい黄褐色の粘土が堆積する。上層埋土には地山の土がブロック状に混じる。

【出土遺物】須恵器の坏身、砥石などが出土した。（第367図394～397）

【時期】切り合い関係から８世紀後半以降と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の直線的な溝である。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ621（溝）

【位置】１ｃ区の東側、Ｉ11グリッドに位置する。

【形状・規模】東西方向の溝である。残存長4.66m、幅0.73m、深さ0.13mを測る。１ｃ区ＳＤ600を挟んで西側の１ｃ区ＳＤ854とは繋がらないが一連の溝の可能性がある。

【堆積土】にぶい黄褐色のシルト質の粘土が堆積する。

【出土遺物】土師器の甕などが出土した。（第367図398）

【時期】出土遺物から７世紀後半以降で、１ｃ区ＳＢ007の建築以前に埋没する。

【特徴・性格】浅く短い性格不明の溝である。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ637（溝）

【位置】１ｃ区の東側、Ｈ10～Ｈ12グリッドに位置する。

【形状･規模】東西方向の直線的な溝で、西が北へ若干振れる。確認された長さは16.70m、幅0.49m、深さ0.08mを測る。

【堆積土】にぶい黄褐色の極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身・壺が出土した。（第367図399～402）
【時期】出土遺物から８世紀中頃以降と考えられる。
【特徴・性格】詳細は不明であるが方位と規模から古代の道路側溝の一部の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ673（溝）
【位置】１ｃ区の東側、Ｉ10～Ｉ12グリッドにかけて位置する。
【形状・規模】東西方向の溝で東が北に振れる。残存長13.30m、幅0.73m、深さ0.27ｍを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の水瓶・甕などが出土した。（第367図401・402）
【時期】出土遺物から８世紀後半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ674（溝）（１ｃ区ＳＤ743・ＳＤ912）
【位置】１ｃ区の東端、Ｇ12・Ｈ11・Ｈ12・Ｉ11・Ｊ11グリッドにかけて位置する。
【形状・規模】弧を描くような形状で北東～南へと続く。幅1.45m、深さ0.11ｍで底面は緩やかな傾斜がある。
【堆積土】にぶい黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身・高坏・長頸瓶、土師器の鍋などが出土した。（第368図403～407）
【時期】１ｃ区ＳＤ512に切られていることから８世紀初頭以前と考えられる。
【特徴・性格】集落内の区画や排水を担った溝の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ693（溝）（１ｄ区ＳＤ502、２ｂ区ＳＤ219、２ｃ区ＳＤ693、Ｒｃ区ＳＤ063）
【位置】１ｃ区の南東隅に位置する。
【形状・規模】方位に沿って直角に折れ曲がる溝である。南は１ｄ区ＳＤ502、東はＲｃ区ＳＤ063へと続く。幅1.22m、深さ0.21ｍを測る。断面の傾斜は緩やかで底面は平坦に掘られている。
【堆積土】上層に自然堆積のにぶい黄褐色の粘土が堆積し、下層に掘削時に底面を整えるための地山の土が混じる粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身・長頸瓶、山茶碗の碗・鉢が出土した。須恵器類は後世の混入品と考えられる。（第368図408～412）
【時期】山茶碗などから13世紀と考えられる。
【特徴・性格】１ｄ区・１ｃ区・Ｒｃ区・２ｂ区・２ｃ区に及ぶ平面方形を呈する大型の溝の一部分で、全体では東西幅60.25m、南北残存37.00ｍを測る。形状と時期から判断して、屋敷を囲む方形の屋敷溝であった可能性が高い。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ866（溝）
【位置】１ｃ区、Ｉ８グリッドの竪穴建物が集合する中に位置する。
【形状・規模】全長5.69m以上、幅0.46m、深さ0.04～0.16ｍの折れ曲がる小溝である。
【堆積土】にぶい黄褐色のシルト質極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】土師器の甕が出土した。（第368図413）

【時期】出土遺物から７世紀中頃～後半と考えられる。
【特徴・性格】竪穴建物の壁際溝（壁溝）の一部の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ001（ピット）
【位置】１ｃ区北西隅、Ｒａ区との境界に位置する。
【形状・規模】平面形状がダルマ状の不整形で長軸1.34m、短軸1.10m、深さ0.44mを測る。底面は平坦である。２つのピットが重複したもので、抜き取りの際に拡張された柱穴の可能性がある。柱痕や柱の当たりは確認できなかった。
【堆積土】上層に基本層序Ⅳ層の細粒砂を多く含むシルト、下層に基本層序Ⅴ層を主に由来となる粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身・壺、暗文の入った畿内系土師器の坏が出土した。（第369図414～416）
【時期】出土遺物から７世紀末頃～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】柱穴の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ006（ピット）
【位置】１ｃ区の西端、Ｇ１・Ｈ１グリッドに跨って位置する。
【形状・規模】平面形状は円形で長軸0.82m、短軸0.73m、深さ0.40mを測る。断面形状はすり鉢状で底面は平坦ではない。
【堆積土】柱痕と考えられる層に炭の混じる暗褐色のシルト、掘方埋土ににぶい褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の短頸壺、土師器の甕が出土した。（第369図417・418）
【時期】出土遺物から７世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】柱穴と推定される。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ069（ピット）
【位置】１ｃ区の西端、１ｃ区ＳＢ002の北側に位置する。
【形状・規模】円形で長軸0.47m、短軸0.36m、深さ0.17mを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】陶錘が出土した。（第369図419）
【時期】出土遺物から６世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ152（ピット）
【位置】１ｃ区の西側、Ｉ３グリッドに位置する。
【形状・規模】撹乱によって一部削られており平面形状は不整形である。長軸0.88m、短軸0.84m、深さ0.57mを測る。断面の傾斜はやや緩やかで底面の中央に柱の当たりと推定される凹みがある。柱痕は確認できなかった。
【堆積土】掘方埋土は上層に灰黄褐色のシルト質極細粒砂、下層ににぶい黄褐色の砂質シルトが堆積する。いずれも焼土を含む。
【出土遺物】須恵器の坏蓋が出土した。（第369図420）

【時期】出土遺物から７世紀末頃～８世紀と推定される。
【特徴・性格】形状から柱穴と推定される。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ212（ピット）
【位置】１ｃ区の西側、Ｉ２グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は円形で長軸0.54m、短軸0.49m、深さ0.42mを測り、底面は平坦である。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト質極細粒砂、下層に灰黄褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の長頸瓶が出土した。（第369図421）
【時期】出土遺物から７世紀中頃以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ248（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ７グリッド、１ｃ区ＳＩ251の南西に位置する。
【形状・規模】平面形状は円形で長軸0.74m、短軸0.62m、深さ0.45mを測る。底面は平坦に掘られ、柱の当たりと推定される凹みがある。
【堆積土】掘方は砂質シルトが堆積し、柱の当たりには粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】土師器の甑が出土した。（第369図422）
【時期】出土遺物から７世紀と推定される。
【特徴・性格】形状から柱穴と推定される。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ266（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｇ４グリッドに位置し、１ｃ区ＳＢ006に切られる。
【形状・規模】平面形状は隅丸方形と推定され、長軸0.69m、短軸0.67m、深さ0.44mを測る。垂直に近い角度で掘り込まれ、底面の北東隅に柱の当たりと考えられる凹みがある。
【堆積土】掘方埋土の上層に褐色の砂質シルト、下層に暗褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】鞴の羽口の破片が出土した。（第369図423）
【時期】７～８世紀と推定される。
【特徴・性格】形状から柱穴と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ291（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ９グリッドに位置する。
【形状･規模】平面形状は円形で長軸0.78m、短軸0.76m、深さ0.24mを測り、テラス状の段差を有する。
【堆積土】暗褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】土師器の甕の口縁部が出土した。（第369図424）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と推定される。
【特徴・性格】形状から柱穴と推定される。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ347（ピット）
【位置】１ｃ区の中央、１ｃ区ＳＩ307に重複して位置する。
【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸0.69m、短軸0.47m、深さ0.54mを測る。

【堆積土】にぶい黄褐色のシルト質極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】土師器の甕の口縁部が出土した。（第369図291）
【時期】出土遺物から６世紀後半以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ370（ピット）
【位置】１ｃ区の西側、Ｉ３グリッドの南壁に位置する。
【形状・規模】平面形状は円形で長軸0.57m、短軸0.47m、深さ0.30mを測る。
【堆積土】埋土上層に褐色の細粒砂が堆積し、底面ににぶい黄褐色の砂質シルトが薄く堆積する。
【出土遺物】検出面から須恵器の坏身が出土した。（第369図426）
【時期】出土遺物から６世紀後半以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ431（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ４グリッドの南壁、１ｃ区ＳＩ389の下層に位置する。
【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸1.23m、短軸0.83m、深さ0.80mを測る。断面形状は箱型に近く、底面が平坦である。
【堆積土】砂が混じるシルトが全体に堆積する。
【出土遺物】古墳時代の土師器の高坏が出土したほか、図化はできなかったが口縁部がつまみ上げられた土師器甕の小片が出土した。（第369図427）
【時期】出土遺物から６世紀後半以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ453（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｈ４・Ｈ５グリッドの境界に位置し、１ｃ区ＳＢ006（１ｃ区ＳＰ491）を切る。
【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸0.61m、短軸0.44m、深さ0.24mを測る。
【堆積土】暗褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋などが出土した。（第369図428）
【時期】１ｃ区ＳＢ006の柱穴を切っており８世紀以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ529（ピット）
【位置】１ｃ区の中央西寄り、Ｈ４グリッドの１ｃ区ＳＢ010の北側に位置する。
【形状・規模】平面形状は隅丸方形で長軸0.89m、短軸0.62m、深さ0.49mを測る。
【堆積土】褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】陶錘などが出土した。（第369図429）
【時期】出土遺物から６世紀以降と推定される。
【特徴・性格】形状から柱穴と推定される。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ576（ピット）

【位置】１ｃ区、Ｉ10グリッドの南壁に位置し、１ｃ区ＳＰ577を切る。
【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸1.18m、短軸0.76m、深さ0.24mを測る。壁面は緩やかな傾斜があり底面も平坦ではない。
【堆積土】にぶい黄褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】土師器の甕の口縁部が出土した。（第369図430）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ618（ピット）
【位置】１ｃ区の東側、Ｉ10グリッド、１ｃ区ＳＢ007の南に隣接して位置する。
【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸1.16m、短軸0.95m、深さ0.55mを測る。中心に向かって深くなるように掘られている。
【堆積土】上層に灰黄褐色の粘土質シルト、下層に暗褐色のシルト質粘土、底面に褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の長頸瓶の頸部が出土した。（第369図431）
【時期】出土遺物から７世紀中頃以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明であるが柱穴の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ626（ピット）
【位置】１ｃ区の東側、Ｉ10グリッド、１ｃ区ＳＢ007の南に隣接して位置する。
【形状・規模】平面形状は隅丸方形で長軸0.97m、短軸0.76m、深さ0.44mを測る。断面形状はすり鉢状である。
【堆積土】上層に灰黄褐色の粘土質シルト、下層に地山の黄褐色土をブロック状に含む灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】土師器の鍋の破片が出土した。（第370図432）
【時期】出土遺物から７世紀後半以降と推定される。
【特徴・性格】柱穴の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ628（ピット）
【位置】１ｃ区の東寄り、Ｉ11グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は円形で長軸1.12m、短軸0.80m、深さ0.25mを測る。断面形状は傾斜が緩やかで底面が平坦である。
【堆積土】にぶい黄褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の有台坏身の底部が出土した。（第370図433）
【時期】出土遺物より７世紀後半以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ676（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ11グリッドに位置し、１ｃ区ＳＢ012（１ｃ区ＳＰ677）に切られる。
【形状･規模】平面形状は隅丸方形と推定され、長軸0.73m、短軸は0.47m以上、深さは0.48mを測り、

垂直に近い角度で掘り込まれている。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色の粘土質シルト、下層に黒褐色・暗褐色の粘土が堆積する。

【出土遺物】須恵器の有台坏身が出土した。(第370図434)

【時期】出土遺物より７世紀末頃～８世紀と推定される。

【特徴・性格】柱穴と考えられる。

(小島)

【遺構名】１ｃ区ＳＰ744（ピット）

【位置】１ｃ区東端、H12グリッドに位置する。

【形状・規模】平面形状は不整円形で、長軸1.36m、短軸1.24m、深さ0.60mを測る。

【堆積土】上層にシルト質極細粒砂(1・2)、下層にシルト質粘土(3・7)とシルト(4～6)が堆積する。

【出土遺物】図化できるものは無かったが、埋土中から須恵器片と根石が出土した。

【時期】出土遺物からは時期が推定できず不明であるが、７～８世紀と推定される。

【特徴・性格】堆積土と出土した根石から柱穴と考えられるが、周辺に組み合わさる柱穴がない。

(後藤泰)

【遺構名】１ｃ区ＳＰ778（ピット）

【位置】１ｃ区の西端に位置する。

【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸0.70m、短軸0.62m、深さ0.21mを測る。断面形状は緩やかな斜面で、北西隅に柱の当たりと考えられる凹みがある。

【堆積土】褐色の極細粒砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の甕の体部が出土した。(第370図435)

【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。

【特徴・性格】形状から柱穴と考えられる。

(小島)

【遺構名】１ｃ区ＳＰ815（ピット）

【位置】１ｃ区の中央西寄り、Ｈ５グリッドに位置する。

【形状・規模】平面形状は隅丸方形に近く、長軸1.72m、短軸1.20m、深さ1.08mを測る。

【堆積土】上層に砂質シルト(1)、柱痕に極細粒砂・粘土質シルト(2・3)、下層に極細粒砂(4)・砂質シルト(5)が堆積する。

【出土遺物】図化できるものは無かったが埋土中から須恵器、土師器が出土し、底面から礎板が出土した。

【時期】出土遺物から時期は推定できないが堆積土から７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】堆積土や遺構底面から礎板が出土したことから柱穴と考えられるが、組み合わさる柱穴は不明である。

(後藤泰)

【遺構名】１ｃ区ＳＰ819（ピット）

【位置】１ｃ区、Ｈ７グリッド、１ｃ区ＳＩ808に重複して位置する。

【形状・規模】平面形状は円形で長軸0.50m、短軸0.49m、深さ0.28mを測る。

【堆積土】にぶい黄褐色の砂質シルトが堆積する。

【出土遺物】須恵器の壺の口縁部が出土した。(第370図436)

【時期】出土遺物から６世紀末頃以降と推定される。

【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ822（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｈ６グリッド、１ｃ区ＳＩ813に重複して位置する。
【形状・規模】平面形状は不整形で長軸0.83m、短軸0.47m、深さ0.34mを測る。垂直に近い角度で掘り込まれ、テラス状の段差がある。
【堆積土】上層に褐色の細粒砂、底面ににぶい黄褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の壺の破片が出土した。（第370図437）
【時期】出土遺物から６世紀末頃以降である。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ871（ピット）
【位置】１ｃ区の東側、Ｊ10グリッドの南壁にかかる。
【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸0.76m、短軸0.51m以上、深さ0.37mを測る。断面がすり鉢状で南側にテラス状の段差を有する。
【堆積土】にぶい黄褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】ヘラ記号のある須恵器の坏身の底部が出土した。（第370図438）
【時期】出土遺物から６世紀後半以降と推定される。
【特徴・性格】形状から柱穴と推定される。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ879（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ８グリッド、１ｃ区ＳＤ061の壁面にかかる。
【形状・規模】平面形状は円形で直径0.45m、深さ0.24mを測る。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色の砂質シルト、下層に褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】完形品の須恵器の坏身が出土した。（第370図439）
【時期】出土遺物から６世紀末頃以降と推定される。
【特徴・性格】竪穴建物内の貯蔵穴の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ927（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ８グリッド、竪穴建物が重複する中に位置する。
【形状・規模】平面形状は円形で長軸0.45m、短軸0.43m、深さ0.66mを測る。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色の極細粒砂、下層に灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身、土師器の甕が出土した。（第370図440）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と推定される。
【特徴・性格】柱穴の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ934（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ８グリッド、竪穴建物の重複する中に位置する。
【形状・規模】平面形状は不整方形で長軸0.81m、短軸0.78m、深さ0.44mを測る。テラス状の段差があり、底面の端に小さな凹みがある。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルトが堆積し、下層に粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身、土師器の甕が出土した。（第370図443）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ971（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｈ８グリッド、１ｃ区ＳＩ251の東側に位置する。
【形状･規模】平面形状は円形で長軸0.39m、短軸0.27m、深さ0.15mを測り、断面はすり鉢状である。
【堆積土】暗褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗の底部が出土した。（第370図444）
【時期】出土遺物から11世紀中頃と推定される。
【特徴・性格】詳細不明のピットである。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ1008（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ10グリッド、１ｃ区ＳＤ527に重複して位置する。
【形状・規模】平面形状は隅丸長方形で、長軸0.94m、短軸0.63m、深さ0.30mを測る。１ｃ区ＳＤ527の底面で確認されたが新旧関係は不明である。ピット底面には段差があり、ほぼ中央に柱の当たり（凹み）がある。
【堆積土】にぶい黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器高坏の脚部が出土した。（第370図445）
【時期】出土遺物から７世紀中頃以降と考えられる。
【特徴・性格】形状から柱穴と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ1028（ピット）
【位置】１ｃ区、Ｉ10・Ｉ11グリッドに跨がり、１ｃ区ＳＫ622に切られて位置する。
【形状・規模】平面形状は不整円形で長軸1.01m、短軸0.76m、深さ0.58mを測る。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】暗文を有する畿内系土師器の皿の破片が出土した。（第370図446）
【時期】出土遺物から７世紀末頃以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

（小島）

（４）１ｄ区（第68 ～ 97図、写真図版82 ～ 114）

【遺構名】１ｄ区ＳＢ503（掘立柱建物）
【位置】１ｄ区の東端、Ｊ11・Ｊ12・Ｋ11・Ｋ12グリッドに位置する。
【形状・規模】東西５間×南北３間の東西に長い側柱構造の掘立柱建物で、１ｄ区ＳＢ510・１ｄ区ＳＩ750に切られる。建物の主軸方向はN- 89° -Wでほぼ方位に沿い、規模は桁行10.46m、梁行6.44m、柱間は桁行1.84m、梁行1.73mを測る。柱穴の平面形状は隅丸方形、断面形状は箱型を呈するものが多く、底面には柱の当たり（凹み）がある。柱穴の規模に大きな差は無く、長辺1.00m程度である。

使用されていた柱の太さは柱痕の太さから直径0.10～0.15m程度であったと推定される。

【堆積土】堆積土はにぶい黄褐色や暗褐色、黒褐色の粘土を主とし、基本層序Ⅷ層やⅫ層をブロック状に含む層がある。柱痕が多くの柱穴で確認されており、シルト質土が堆積する。

【出土遺物】須恵器の壺、弥生土器の深鉢の破片、陶錘などが出土した。弥生土器は下層から捲き上げられ混入したものと考えられる。（第374図493～495）

【時期】１ｄ区ＳＢ510・１ｄ区ＳＩ750に切られていることから７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

【特徴・性格】中規模の側柱建物の一つである。廂をもたない切妻造の上屋と推定され、８世紀初頭以前の官衙的施設の中で実務が行われた建物の一つと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ504（掘立柱建物）

【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｋ９・Ｌ９グリッドに位置する。

【形状・規模】南北５間×東西３間の南北に長い側柱構造の掘立柱建物で、１ｄ区ＳＢ511に切られる。建物の主軸方向はN- 0°-Sで方位に沿い、規模は桁行11.00m、梁行5.88m、柱間は桁行2.07m、梁行1.56mを測る。遺構の重複が激しく、調査時には廂をもつ１軒の掘立柱建物を想定していたが、柱穴の配置を再考した結果、古い１ｄ区ＳＢ504と新しい１ｄ区ＳＢ511の２軒の側柱建物が存在したと判断した。柱穴の平面形状は遺構検出面が砂質土であることと遺構が激しく重複することによって不明瞭なものが多いが、最も大きい１ｄ区ＳＰ635は隅丸方形を呈している。

【堆積土】柱穴の堆積土は砂質土を主とし、下層にはシルトや粘土が多く含まれる。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・高坏・甕、釘と推定される鉄製品などが出土した。（第374図496～500）

【時期】出土遺物に８世紀初頭のものが含まれること、１ｄ区ＳＢ511に切られること、１ｄ区ＳＩ609と近接し併存できないことから８世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】中規模の側柱建物の一つで、梁行がやや狭い特徴がある。８世紀前半の官衙的施設の中の実務が行われた建物の一つと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ506（掘立柱建物）

【位置】１ｄ区の東側、Ｊ10・Ｊ11・Ｋ11グリッドに位置し、１ｄ区ＳＩ609の北東に隣接する。

【形状・規模】東西３間×南北２間の総柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN- 86°-Eでやや東側が北へ振れる。規模は桁行7.80m、梁行4.80m、柱間は桁行2.36m、梁行2.20mを測る。柱穴の平面形状は円形や隅丸方形を呈し、南西隅柱で長辺1.36mを測る。柱穴の断面形状は箱型で、柱の当たりが少し沈み込むものが多い。

【堆積土】にぶい黄褐色や暗褐色の粘土やシルトが主に堆積する。

【出土遺物】西面側柱１ｄ区ＳＰ736から須恵器の高坏が出土した。（第374図501）

【時期】西面側柱の１ｄ区ＳＰ919が１ｄ区ＳＤ663・１ｄ区ＳＫ726と重複している。調査時はそれらの掘削後に１ｄ区ＳＰ919を確認したため、当初は１ｄ区ＳＢ506を古いものと考えたが、出土遺物の比較と隅丸方形の柱穴があることから３つの遺構で最も新しい７世紀後半以降と推定した。

【特徴・性格】総柱構造の掘立柱建物で、高床倉庫の可能性が考えられる。１ｄ区ＳＢ506周辺には側柱建物が多く確認されているが、高床倉庫と推定される総柱建物は近接していない。また、建物方位も他の多くの総柱建物と異なっており、やや独立した印象が持たれる。詳しい時期は不明であるが、一帯が倉庫群として最も栄えた時期よりも、新旧いずれかに外れる時期の高床倉庫の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ508（掘立柱建物）

【位置】１ｄ区の南東隅、Ｌ11・Ｌ12グリッドに位置し、調査区外南側へと延びる。

【形状・規模】東西５間×南北３間以上の側柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はＮ- 85° -Ｅで東面がやや北に振れる。規模は桁行10.15m、梁行5.10m以上、柱間は桁行1.80m、梁行1.73mを測る。柱穴の平面形状は一定ではないが、東面の１ｄ区ＳＰ695・１ｄ区ＳＰ902は整った隅丸方形を呈し、断面形状は１ｄ区ＳＰ695が箱型で、柱の当たりが沈み込む。１ｄ区ＳＰ791・１ｄ区ＳＰ902からは柱根が原位置を保った状況で出土しており、太さは0.15～0.20m程度である。

【堆積土】柱穴の埋土は粘土を主とする。柱根が出土した１ｄ区ＳＰ902は、上層に基本層序Ⅷ層の粘土をブロック状に含むにぶい黄褐色の粘土(1)、柱根周辺に灰黄褐色の粘土(2・3)、掘方埋土の下層に基本層序Ⅷ層の粘土を多く含むにぶい黄褐色の粘土(4)や黒褐色の粘土(5)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・高坏・瓶・甕、砥石のほか、１ｄ区ＳＰ791・１ｄ区ＳＰ902から柱根が出土した。樹種同定の結果、１ｄ区ＳＰ791の柱根はコウヤマキ製であることが確認された。（第374図502～509、第375図510・511）

【時期】出土遺物から８世紀前半以降と考えられる。

【特徴・性格】中規模の側柱建物の一つで、推定される時期から、近接する１ｄ区ＳＩ609・１ｄ区ＳＩ795の廃絶後に建てられた可能性が高い。８世紀前半以降の官衙的施設の中で実務が行われた建物の一つと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ509（掘立柱建物）

【位置】１ｄ区の東側、Ｋ11グリッドに位置する。

【形状・規模】東西２間×南北１間の側柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はＮ- 79° -Ｅで、規模は桁行3.40m、梁行3.28m、柱間は桁行1.38m、梁行2.60mを測る。柱穴は全て円形で、直径0.50～0.80m程度、深さは最も深い１ｄ区ＳＰ573で0.44mを測る。

【堆積土】暗褐色の粘土質シルトが主に堆積し、黄橙色のシルトがブロック状に含まれる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【時期】詳細な時期は不明であるが、建物方位から７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】小規模な小屋程度の建物であったと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ510（掘立柱建物）

【位置】１ｄ区の北東隅、Ｊ11・Ｊ12グリッドに位置し、調査区北側へと延びる。

【形状・規模】東西５間×南北２間以上の側柱構造の掘立柱建物である。１ｃ区では柱穴は確認されていないため、最大でも南北３間と考えられる。建物の主軸方向はＮ- 87° -Ｅで僅かに東側が北に振れる。規模は桁行11.50m、梁行2.70m以上、柱間は桁行1.82m、梁行1.80mを測る。柱穴の多くが上面を中世の溝に切られており形状が不明瞭であるが、隅丸方形を呈するものが多いと考えられる。

【堆積土】残存状態の比較的良好な南東隅柱１ｄ区ＳＰ768で、柱痕に褐色の粘土(1)、掘方埋土上層に灰黄褐色のシルト(2)、下層ににぶい黄褐色の砂質シルト(3)、掘方底面に薄く灰黄褐色の粘土(4)が堆積する。

【出土遺物】柱穴の埋土から須恵器の有台坏身、砥石などが出土した。（第375図512・513）

【時期】出土遺物と、南面の柱穴が１ｄ区ＳＢ503の柱穴を切っていることから８世紀前半以降と考

えられる。
【特徴・性格】中規模の側柱建物の一つで、切り合う１ｄ区ＳＢ503とほぼ同規模と推定され、同じ機能をもった建物が建て替えられた可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ511（掘立柱建物）
【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｋ９・Ｌ９グリッドに位置する。
【形状・規模】南北５間×東西３間の側柱構造の掘立柱建物で、１ｄ区ＳＢ504の柱穴を切って建てられている。建物の主軸方向はN- 1°-Wでほぼ方位に沿い、規模は桁行11.20m、梁行6.40m、柱間は桁行1.98m、梁行1.49mを測る。遺構の重複が激しく、調査時には廂をもつ掘立柱建物を想定していたが、柱穴の配置を再考した結果、古い１ｄ区ＳＢ504と新しい１ｄ区ＳＢ511の２軒の側柱建物が存在したと判断した。柱穴の平面形状は遺構の重複が激しく不明瞭なものがほとんどであるが、東面側柱１ｄ区ＳＰ634は隅丸方形を呈する。断面形状は箱型や段差をつけて掘られているものが多く、柱の当たりが沈み込んでいるものがみられる。
【堆積土】柱穴の堆積土は極細粒砂を主とし、基本層序Ⅷ層をブロック状に含む層がある。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみで図化できるものは無かったが、１ｄ区ＳＰ642より８世紀初頭と考えられる坏蓋の口縁部が出土している。
【時期】出土遺物から時期の推定は困難であるが、１ｄ区ＳＢ504の柱穴を切っていることから、８世紀中頃以降と考えられる。
【特徴・性格】重複する１ｄ区ＳＢ504と近い規模の側柱建物であり、同様の機能をもつ建物を建て替えた可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ251（竪穴建物）
【位置】１ｄ区の中央、Ｊ８・Ｋ８グリッドに跨って位置する。
【形状・規模】平面形状が不整方形の竪穴建物である。規模は長軸5.76m、短軸5.52m、掘方底面までの深さ0.18mを測り、底面は平坦である。火処は北西の１ｄ区ＳＰ269から炭化物や焼土が確認されており、カマドの掘方であった可能性がある。１ｄ区ＳＰ269がカマドであれば、竪穴建物から突出した形状のカマドであったと考えられる。柱穴は北隅の１ｄ区ＳＰ252、東隅の１ｄ区ＳＰ262、西隅の１ｄ区ＳＰ276が主柱穴にあたる可能性があるが、南隅からは柱穴が確認できなかった。
【堆積土】竪穴掘方と柱穴はともに、焼土や炭化物を含む砂質土が全体に堆積する。
【出土遺物】埋土中から土師器の甕、羽口の破片などが出土した。（第375図514・515）
【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】住居として使用された竪穴建物と考えられるが詳細は不明である。羽口の破片が出土していることから建物内で小鍛冶が行われた可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ401（竪穴建物）
【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｋ８・Ｋ９・Ｌ８・Ｌ９グリッドに跨って位置する。
【形状・規模】不整方形の竪穴建物で、長軸4.48m、短軸3.64m、掘方底面までの深さ0.16mを測る。竪穴内西側の１ｄ区ＳＰ405は、炭化粒・焼土を含みカマドの残骸である可能性が高い。竪穴内には多数のピットが確認されたが、本建物に伴う柱穴は、１ｄ区ＳＰ410・１ｄ区ＳＰ413・１ｄ区ＳＰ415・１ｄ区ＳＰ849のいずれかと考えられる。また、竪穴内東側に位置する１ｄ区ＳＫ409は、本建

物より古い遺構と考えられる。

【堆積土】カマドの可能性がある１ｄ区ＳＰ405では炭化粒や焼土を含むにぶい黄橙色・灰黄褐色の砂質土(1～3)が堆積する。竪穴埋土には灰オリーブ色の砂質土(6)が堆積する。

【出土遺物】土師器の高坏・甕などが出土した。高坏は５世紀のもので、後世に混入したと考えられる。(第375図516～518)

【時期】出土した土師器甕から７世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】小規模な竪穴建物である。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ609（竪穴建物）

【位置】１ｄ区の東側、Ｋ10・Ｋ11・Ｌ10・Ｌ11グリッドに跨って位置する。

【形状・規模】隅丸方形で北壁面に突出部をもつ超大型の竪穴建物で、東西12.72m、南北11.28m、掘方底面までの深さ0.48mを測る。突出部の先端まで含めると南北13.10mとなるが、中央付近を１ｄ区ＳＤ551（中世の溝）によって大きく削平されているため正確な規模は不明である。建物の主軸方向はＮ-２°-Ｗで僅かに西へ振れる。掘方底面は平坦ではなく、中央のやや西寄りと、中央のやや東寄りの位置に地山を掘り残した高まりがある。火処や炭溜まりは確認されなかったが、１ｄ区ＳＤ551に削平された北壁面の突出部にカマドの存在が推定される。竪穴内からはピットが多数確認されており、柱穴の可能性が高いと考えられるものだけで20基を超える。柱穴の一つ一つが巨大なものが多く、北東隅付近の１ｄ区ＳＰ817を例にすると、隅丸方形の平面形状で長辺1.42m、短辺1.14m、柱穴の深さ0.80mを測る。類似する規模の柱穴だけでも10基を超え、切り合っているものもあり少なくとも一度は建て替えがあった可能性が考えられる。前述した掘方底面の高まりが２箇所に分断されていることから、東と南へ規模を拡大して建て替えた可能性が高い。柱穴が多く主柱穴の組み合わせを判別するのは困難であったが、柱穴の配置から４本もしくは６本の主柱穴の他に補助的な柱が多数あったことが推測される。また北面付近の中央にある１ｄ区ＳＰ794は棟持柱の可能性がある。柱の太さは柱痕や柱の当たりから推測すると、大規模な柱穴で直径0.20～0.25m、小規模な柱穴で0.10m程度であったと考えられる。１ｄ区ＳＰ829･１ｄ区ＳＰ831からは礎板が二重に重なって出土しており、柱の沈下対策を行っていた一方で、柱の当たりが沈み込む柱穴もあることから、必ずしも礎板を使用していたわけではないと思われる。

【堆積土】竪穴建物の上層には炭化物や焼土が含まれるにぶい黄褐色のシルト(3)が全体に堆積する。自然の作用で流れ込んだような痕跡は無く、同様の土が0.15m程度の厚さで堆積し、廃絶後に人為的に埋め戻された可能性が高い。明確な貼り床は確認されなかったが、(3)層の下に一部の柱穴が検出される面(11)があり床面であった可能性がある。(11)と(3)層の相違は粘性が強いという程度の違いである。基底部付近には基本層序Ⅷ層をブロック状に含むシルト質粘土・粘土質シルト(23～25)が堆積する。柱穴は、柱抜き取り後の埋土と考えられる上層部分が主に灰黄褐色のシルトが堆積し、下層の掘方埋土には灰褐色・黒褐色・黒色の地山の粘土が混ざり合った土が堆積する。

【出土遺物】須恵器や土師器などが出土しているが、遺構の規模に比べて遺物量は少ない。大半が器種の特定できない小片であり、埋土に混入したものと考えられる。図化できたものとしては須恵器の坏蓋・坏身・鉢・盤・壺、畿内系暗文土師器、製塩土器、土錘がある。また柱穴内に礎板が残されていたものが複数あった。(第375図519～526、第376図527～536、第377図537・538)

【時期】出土遺物の時期は７世紀末頃～８世紀初頭であり、一部８世紀前半にかかる遺物もあることから、８世紀前半には完全に廃絶し人為的に埋められたと考えられる。

【特徴・性格】傑出した規模の大型竪穴建物である。時期は７世紀末頃～８世紀前半と考えられ、当遺跡が官衙的性格を持つ時期に建てられている。規模に比べて遺物は非常に少なく、廃絶時に持ち出した可能性が高い。明確に火処は見つからなかったが、住居や官舎（曹司）というよりは、来客者などに宿泊や食事の提供を行った厨的性格ないしは集会所などの役割をもった建物であったと想像できる。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ750（竪穴建物）

【位置】１ｄ区の東端、K11・K12グリッドに位置する。

【形状・規模】隅丸方形の竪穴建物で、規模は東西5.32m、南北5.08m、掘方底面までの深さ0.16mを測る。１ｄ区ＳＢ503の柱穴を切って建てられ、１ｄ区ＳＤ501・１ｄ区ＳＤ502（中世の溝）に大きく削平されている。建物の主軸方向はN-５°-Wで僅かに西に傾き、壁際溝（壁溝）は確認されなかったが、竪穴中央がドーナツ状に掘り残されている。火処の痕跡は確認されず、柱穴も無かった。

【堆積土】にぶい黄褐色のシルトが全体に堆積し、上層には炭化物が少量含まれていた。

【出土遺物】須恵器の坏蓋、椀形滓などが出土したが、遺物量は非常に少なく、埋土に混入したと考えられる小片ばかりである。（第377図539・540）

【時期】１ｄ区ＳＢ503より新しい時期であり、出土遺物から８世紀初頭～前半以降と考えられる。

【特徴・性格】比較的小規模な竪穴建物である。竪穴内に主柱穴は確認されず、壁立式の建物であった可能性が高い。時期は８世紀と考えられ、一帯が官衙的施設である中に立地していることから一般的な住居とは考えづらく、作業場や物置などの可能性が考えられるが詳細は不明である。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ795（竪穴建物）

【位置】１ｄ区の東端、K12・L12グリッドに位置する。

【形状・規模】隅丸方形と推定される竪穴建物で、南北4.76m、東西3.84mを測る。建物の主軸方向はN-０°-Sで方位に沿い、中央が１ｄ区ＳＤ502（中世の溝）により大きく削平されている。掘方の深さは一定ではなく、深さ南側が0.30m程度、北側が0.50m程度、最も深い中央東側の落ち込みの底面で0.66mを測る。壁際にはテラス状の段差がみられ、棚として機能していた可能性がある。柱穴と推定されるピットは確認されず、竪穴内に柱をもたない壁立式であった可能性がある。中央東側の落ち込みは、貯蔵穴もしくは甕を据え付けたピットと考えられる。埋土に多量の炭や焼土が含まれることから竪穴内で火が使用されていた可能性は高く、北半分の埋土中に焼けた粘土塊が多量に混じっていたことから、北面にカマドがあったと想定される。さらに、関連性は不明であるが、検出面から１ｄ区ＳＫ820（炭溜まり遺構）が確認されている。

【堆積土】埋土の大半はにぶい黄褐色や灰黄褐色のシルトないしは粘土質シルトで、下層を除くほとんどの層に炭化物・焼土が含まれる。北側の(4～12)層はカマドが想定される付近の埋土で、竪穴を広く覆う(13)層を掘り込んで堆積していることから、カマドの付け替えと廃絶時に意図的に破壊を行った可能性がある。

【出土遺物】竪穴全体から須恵器、土師器をはじめ多数の遺物が出土した。土器は坏類や甕などの日用雑器がほとんどで、土器以外では羽口の破片、砥石、椀形滓といった鉄製品生産に関連する遺物が顕著である。また図示はしていないが鍛造剥片と考えられる金属片や、竈の一残骸の可能性がある焼けた粘土塊が出土している。遺物は遺構全体の上層～下層にわたって散らばっており、残存状態の比較的良いものもあるが完形品となるものは確認できなかった。その場で割れて埋まったというよりは、

割れたものを捨てたような状況である。（第377図541～553、第378図554～570、第379図571～581、第380図582～593）

【時期】遺物の時期から７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。

【特徴・性格】小規模な竪穴建物で、堆積土の状況から火を扱う作業が継続的に行われていたと考えられる。遺物の量は周辺の遺構と比較して非常に多く、製鉄関連遺物がまとまって出土している特徴がある。周辺が官衙的性格をもつ時期に相当しており、特に西に位置する１ｄ区ＳＩ609（大型竪穴建物）と併存した可能性が高い。１ｄ区ＳＩ609は対象的に遺物量が少なく、明確に火処が確認されていないことから、１ｄ区ＳＩ609で提供する食事の調理場として１ｄ区ＳＩ795があった可能性も考えられる。また、製鉄関連遺物の出土から鉄製品生産も行っていたようであるが、鉄滓の量や大きさから簡易的な小鍛冶の域は出ないと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ922（竪穴建物）

【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｌ９グリッドに位置し、調査区南側へと延びる。

【形状・規模】隅丸方形の竪穴建物と推定される。規模は東西5.08ｍ以上、南北4.48ｍ以上を測る。掘方の大半が削平されており、ドーナツ状に掘られた基底部のみが確認された。火処の痕跡は確認されず、主柱穴も不明である。

【堆積土】にぶい黄褐色の粘土質シルトが堆積する。

【出土遺物】須恵器や土師器片が出土しているが図化できるものは無かった。

【時期】詳細な時期は不明であるが、１ｄ区ＳＢ511に切られていることから６～７世紀と考えられる。

【特徴・性格】比較的小規模な竪穴建物である。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ016（土坑）

【位置】１ｄ区西側、Ｊ６グリッドに位置する。

【形状・規模】隅丸方形に近い形状で、長軸1.63ｍ、短軸1.12ｍ、深さ0.20ｍを測る。掘方の傾斜は緩やかで、底面は概ね平坦である。

【堆積土】灰黄褐色や褐灰色の砂質土が主に堆積し、底面ににぶい黄色の粘質土が薄く堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の坏蓋が出土した。（第381図594）

【時期】出土遺物から８世紀前半以降と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ032（土坑）

【位置】１ｄ区西側、Ｊ６グリッドに位置する。

【形状・規模】西側が１ｄ区ＳＤ001に切られるが隅丸方形と推定され、長軸0.93ｍ、短軸0.74ｍ以上、深さ0.06ｍを測る。

【堆積土】焼土粒や炭化粒を含む粘質土が主に堆積する。

【出土遺物】埋土中より須恵器の甕が出土した。（第381図595）

【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ167（土坑）

【位置】 １ｄ区の中央、Ｊ７・Ｊ８・Ｋ７・Ｋ８グリッドに跨って位置する。
【形状・規模】 隅丸方形で長軸1.44m、短軸1.18m、深さ0.45mを測る。垂直に近い角度で掘り込まれており、底面は平坦である。
【堆積土】 全体に砂質土が堆積し、上層埋土には焼土や炭化物が含まれる。また、柱痕の可能性がある堆積が確認された。
【出土遺物】 埋土中から棒状の鉄製品が出土した。（第381図596）
【時期】 堆積土から７世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】 堆積土から柱穴の可能性がある。

【遺構名】 １ｄ区ＳＫ548（土坑）
【位置】 １ｄ区の東側、K11グリッドに位置する。
【形状・規模】 細長い形状で長軸0.95m、短軸0.42m、深さ0.11mを測る。
【堆積土】 灰黄褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】 埋土中より山茶碗の小皿が出土した。（第381図597）
【時期】 出土遺物から14世紀と考えられる。
【特徴・性格】 性格不明の土坑である。

（小島）

【遺構名】 １ｄ区ＳＫ625（土坑）
【位置】 １ｄ区東側、K11・K12グリッドに位置する。
【形状・規模】 東西に長い楕円形の土坑である。規模は長軸2.08m、短軸1.20m、深さ0.40mを測り、断面形状は傾斜の緩やかなすり鉢状で、底面には凹凸がある。
【堆積土】 最上層に焼土を含む炭層(1)があり、灰黄褐色のシルト(2)を挟んで再び炭層(3)が堆積する。下層には灰黄褐色土と暗褐色土が交互になるように堆積する。
【出土遺物】 須恵器の無台坏身が出土したが、遺物量は非常に少ない。（第381図598）
【時期】 出土遺物から７世紀後半～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】 遺物が少なく詳細不明であるが、少なくとも２度にわたって本土坑で火が使われたと考えられる。炭層には炭化した木片は含まれず、草や葉などを主に燃やしたのではないかと推測される。

【遺構名】 １ｄ区ＳＫ726（土坑）
【位置】 １ｄ区東側北寄り、Ｊ10・Ｊ11グリッドに位置する。
【形状・規模】 平面形状は不整円形で南西～北東を長辺とする土坑である。土坑の規模は長軸1.68m、短軸1.44m、深さ0.32mを測る。
【堆積土】 上層に黒褐色の極細粒砂(1)、下層に黒褐色の粘土質シルト(2)が堆積する。
【出土遺物】 遺物は上層からのものがほとんどで、須恵器の坏蓋･坏身･浅鉢･鉢などが出土した。（第381図599～602）
【時期】 出土遺物から７世紀中頃～後半と考えられる。本土坑は１ｄ区ＳＤ663と重複し、遺構検出段階では１ｄ区ＳＤ663が本土坑を切っていると判断された。しかし出土遺物の時期からは本土坑が新しい可能性がある。
【特徴・性格】 比較的大きな土坑で遺物の量も多い。土器を廃棄するための土坑と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ840（土坑）

【位置】１ｄ区中央北寄り、Ｊ９・Ｋ９グリッドに位置する。

【形状・規模】平面形状が隅丸方形の北西～南東を長辺とする土坑である。底面は平坦で、土坑の規模は長軸2.44m、短軸1.04m、深さ0.96mを測る。

【堆積土】上層に灰黄色のシルト(1～3)、中層に灰黄褐色の粘土質シルト(4)や暗灰黄色のシルト(5)、下層には黄灰色の粘土質シルト(6)や黄灰色と黒褐色の粘土(7～9)が堆積する。

【出土遺物】顕著な遺物は出土しなかった。

【時期】１ｄ区ＳＤ254と一体であり、13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】１ｄ区ＳＤ254の底面に掘り込まれた土坑である。目立った出土遺物もなく性格は不明である。

（後藤泰）

【遺構名】１ｄ区ＳＤ001（溝）

【位置】１ｄ区の西寄り、Ｊ６・Ｋ６・Ｌ５・Ｌ６グリッドに位置する。

【形状・規模】南北方向に僅かに蛇行する溝で、北側が若干東に振れる。一部が撹乱により失われているが長さは20.80m、幅は1.00m程度、深さ0.17mを測る。

【堆積土】上層に灰黄色や灰白色の砂質土、底面の一部に灰色の粘質土が堆積する。

【出土遺物】山茶碗の碗、砥石が出土した。（第381図603・604）

【時期】出土した山茶碗の年代から13世紀と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の溝であるが１ｄ区ＳＤ075や１ｄ区ＳＤ201と概ね並行する方位を持った溝である。それらと同様に中世の屋敷に関連する溝の可能性が考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ075（溝）（１ｃ区ＳＤ061、１ｄ区ＳＤ551）

【位置】１ｄ区の西寄り、Ｊ５・Ｋ５ グリッドに位置する。

【形状・規模】南北方向の溝で、北側が若干東に振れる。南側が旧五条川によって削平されており、残存長7.44m、幅1.87m、深さ0.56mを測る。北は調査区外へと延び、１ｃ区ＳＤ061へ繋がると考えられる。

【堆積土】堆積土は上層～下層まで全体に砂質土が堆積し、上層埋土には炭化粒が少量含まれる。

【出土遺物】埋土中より土師器の高坏、製塩土器、土錘、土馬の脚部などが出土した。（第381図605～609）

【時期】出土遺物は古代のものばかりであるが、１ｃ区ＳＤ061と同一であるので13～15世紀の溝と考えられる。

【特徴・性格】１ｃ区ＳＤ061を経由して１ｄ区ＳＤ551へと繋がる長期間存続した大規模な溝で、形状と時期から中世の屋敷を取り囲む屋敷溝の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ089（溝）

【位置】１ｄ区の西寄り、Ｊ６・Ｋ６・Ｌ６グリッドに位置し、南は調査区外へと続く。

【形状・規模】南北方向の溝で、北側が若干東に振れる。僅かに蛇行し、残存長17.40m、最大幅2.59m、深さ0.14mを測る。

【堆積土】全体的によく締まった褐灰色やにぶい黄橙色の砂質土が堆積する。

【出土遺物】埋土中より灰釉陶器の皿、山茶碗の碗・小皿、青磁の碗、土錘などが出土した。（第382図610～ 617）
【時期】出土遺物から13～14世紀と考えられる。
【特徴・性格】１ｄ区ＳＤ001と並行する溝で、中世の屋敷に関連する溝の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ201（溝）
【位置】１ｄ区の西寄り、Ｊ６・Ｋ６グリッドに位置し、北は調査区外へと続く。
【形状・規模】南北方向の直線的な溝で、北側が若干東に振れる。調査区外北側で東に折れ曲がり１ｄ区ＳＤ254に繋がる可能性が高い。確認された長さは9.62m、幅1.70m、深さ0.57ｍを測る。壁面の傾斜角は45°程度で、底面は幅0.40m程度の平坦面が続く。
【堆積土】灰白色やにぶい黄橙色の砂質土が全体に堆積し、最下層を除き地山ブロックが含まれる。
【出土遺物】中世土師器の非ロクロ皿、山茶碗の碗・小皿、製塩土器、土錘などが出土した。（第382図618～630）
【時期】出土遺物から13～15世紀と考えられる。
【特徴･性格】１ｄ区ＳＤ075と同時期で溝の方向もほぼ同じである。１ｄ区ＳＤ254と繋がれば「コ」の字形に南側を取り囲む形状となり、二重に巡らされた中世の屋敷溝の内側の溝であったと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ245（溝）
【位置】１ｄ区の中央西寄り、Ｋ６・Ｌ６ グリッドに位置する。
【形状・規模】南北方向の溝で西は１ｄ区ＳＤ089に切られ、南は調査区外へと続く。規模は南北9.34ｍ以上、幅4.28m以上、深さ0.19ｍを測る。
【堆積土】地山ブロックを含む灰白色の砂質土が主に堆積する。
【出土遺物】埋土中より須恵器の高坏、土師器の甕、製塩土器が出土した。（第382図631～633）
【時期】出土遺物から７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ254（溝）
【位置】１ｄ区の中央、Ｊ７～Ｊ９・Ｋ９・K10・Ｌ９グリッドに位置する。
【形状･規模】東西方向の直線的な溝で､K10グリッドで南へ直角に折れ曲がる。西側が北へ若干振れ、西と南が調査区外へと続く。西は調査区外で１ｄ区ＳＤ201に繋がる可能性が高い。
【堆積土】灰黄褐色やにぶい黄橙色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・甕、山茶碗の碗・小皿、青磁の碗、古瀬戸の折縁深皿、土錘、砥石、鉄釘などが出土した。（第383図634～652、第384図653～665）
【時期】出土した山茶碗などから13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】１ｄ区ＳＤ201と繋がり、南側を取り囲むように掘られていると考えられる。二重に巡る中世の屋敷溝の内側の溝であったと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ502（溝）（１ｃ区ＳＤ693、２ｂ区ＳＤ219、２ｃ区ＳＤ693、Ｒｃ区ＳＤ063）
【位置】１ｄ区の東端、Ｌ12・Ｋ12・Ｊ12グリッドに位置する。

【形状・規模】南北方向の直線的な溝である。ほぼ方位に沿い、北は１ｃ区ＳＤ693に繋がると考えられ、南は調査区外へと延びる。１ｄ区内で長さ22.35m、幅1.50m程度、深さは南壁付近で0.54mを測り、北に行くにつれ浅くなる。

【堆積土】暗褐色のシルト質粘土が主に堆積し、底面に薄くにぶい黄褐色の粘土が堆積する。

【出土遺物】埋土中より須恵器の坏身・鉢、山茶碗の小皿、鞴の一部の可能性がある土製品、砥石などが出土した。製鉄関連遺物は１ｄ区ＳＩ795からの流入の可能性がある。（第384図666～670、第385図671～674）

【時期】出土した山茶碗などから13世紀と考えられる。

【特徴・性格】１ｄ区・１ｃ区・Ｒｃ区・２ｂ区・２ｃ区に及ぶ平面方形を呈する大型の溝の一部分で、全体では東西幅60.25m、南北残存37.00mを測る。形状と時期から判断して、屋敷を囲む方形の屋敷溝であった可能性が高い。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ551（溝）（１ｃ区ＳＤ061、１ｄ区ＳＤ075）

【位置】１ｄ区の東寄り、Ｊ10・Ｋ10・Ｌ10グリッドに位置する。

【形状・規模】南北方向の直線的な溝で北側がやや東へ振れる。南は調査区外へ延び、北は北壁付近で西へ直角に折れ曲がって１ｃ区ＳＤ061～１ｄ区ＳＤ075へ繋がると考えられる。規模は１ｄ区内で長さ22.50m、幅2.43m、深さ0.54mを測り、底面は幅0.80m程度の平坦面が続く。

【堆積土】灰黄褐色の粘土が主に堆積し、上層には鉄分が含まれる。

【出土遺物】埋土中より須恵器の坏蓋・坏身、山茶碗の碗・小皿が出土した。（第385図675～683）

【時期】出土遺物から13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】１ｃ区ＳＤ061・１ｄ区ＳＤ075に繋がる長期間存続した大規模な溝で、形状と時期から中世の屋敷を取り囲む溝の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ552（溝）

【位置】１ｄ区の東側、Ｊ11・Ｋ10・Ｋ11・Ｌ10グリッドに位置する。

【形状・規模】南北方向の溝で、北側が緩やかに東へ曲がる。壁面の傾斜はやや緩やかで、底面は幅0.60m程度の平坦面が続く。

【堆積土】上層に灰黄褐色のシルト、下層ににぶい黄褐色のシルトが堆積する。

【出土遺物】埋土中より中世土師器の鍋、古瀬戸の尊式花瓶が出土した。（第385図684・685）

【時期】出土遺物から15世紀と考えられる。

【特徴・性格】他の中世の溝が直線的なのに対し、緩やかに曲がる不規則な溝である。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ597（溝）（Ｒｃ区ＳＤ005）

【位置】１ｄ区の東側、Ｊ10～Ｊ12グリッドに位置し、東はＲｃ区ＳＤ005へと続く。

【形状・規模】東西方向の直線的な溝で、西側が北へ若干振れる。東はＲｃ区ＳＤ005へと続き、Ｒｃ区内で北へ直角に折れ曲がってまもなく途切れる。西側は１ｄ区ＳＤ551にぶつかり消失するが、元々接続するように掘られた可能性が高い。規模は１ｄ区内で長さ21.60m、幅1.50m程度、深さ0.14mを測る。断面形状は中央に向かって緩やかに傾斜する。

【堆積土】灰黄褐色の粘土が堆積する。

【出土遺物】埋土中より古瀬戸の直縁大皿が出土した。（第385図686）

【時期】出土遺物から15世紀と考えられる。
【特徴・性格】中世の屋敷溝と考えられる１ｄ区ＳＤ551に直交して接続する溝である。屋敷周辺の区画と排水を行うための溝と考えられる。

（小島）

【遺構名】１ｄ区ＳＤ663（溝）
【位置】１ｄ区東側北寄り、Ｊ10・Ｊ11グリッドに位置する。
【形状・規模】北東～南西方向の溝で、南側は１ｄ区ＳＩ609に切られる。長さ7.60m、幅0.80m、深さ0.28mを測る。
【堆積土】上層からにぶい黄褐色のシルト(1)、暗褐色の粘土質シルト(2)、にぶい黄褐色のシルト質粘土(3)が堆積する。
【出土遺物】上層から遺物の出土が多く、須恵器の埦・高坏、土師器の甕などが出土した。（第386図687～689）
【時期】出土遺物の時期は７世紀前半に相当するが、遺構検出段階で１ｄ区ＳＤ663より古いと判断した１ｄ区ＳＫ726から７世紀中頃～後半の土器が出土している。下限は１ｄ区ＳＩ609が建てられるまでの時期で、遺構検出時の新旧把握が誤っている可能性をふまえて７世紀後半としたい。
【特徴・性格】１ｄ区内で完結する溝である。性格不明であるが、時期と方位、規模が１ｃ区ＳＤ288と近く、関連性が考えられる。

（後藤泰）

【遺構名】１ｄ区ＳＤ725（溝）
【位置】１ｄ区の東側、Ｊ11グリッドに位置する。
【形状・規模】南北方向の溝で南は１ｄ区ＳＤ597に切られる。北は調査区外へと続くが、１ｃ区では確認されなかった。規模は長さ1.84m以上、幅0.92m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の壺が出土した。（第386図690）
【時期】出土遺物から６～７世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ012（ピット）
【位置】１ｄ区の西寄り、Ｌ５グリッドに位置する。
【形状・規模】長軸0.60m、短軸0.44mの楕円形で深さ0.23mを測り、底面が平坦である。
【堆積土】褐灰色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏蓋が出土した。（第386図691）
【時期】出土遺物から８世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ033（ピット）
【位置】１ｄ区の西寄り、Ｊ６グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.60m程度の円形で深さ0.20mを測り、底面は平坦である。
【堆積土】上層に灰黄褐色の砂質土、中層に暗褐色の砂質土、下層に褐灰色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第386図692）

【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ158（ピット）
【位置】１ｄ区の中央、Ｋ７グリッドに位置する。
【形状・規模】長軸0.89m、短軸0.72mの隅丸方形に近い形状で深さ0.23mを測る。南東側にテラス状の段差があり底面は中央に向かってなだらかに深くなる。
【堆積土】にぶい黄橙色の砂質土が主に堆積し、底面の一部に灰黄褐色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋が出土した。（第386図693）
【時期】出土遺物から７世紀中頃以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ178（ピット）
【位置】１ｄ区の中央、Ｋ８グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.80m程度の円形で、深さ0.34mを測る。断面は薬研状で中央が最も深い。
【堆積土】堆積土は砂質土で上層に炭化物・焼土が含まれる。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身が出土した。（第386図694）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】形状から柱穴と考えられるが、組み合わさる柱穴は不明である。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ181（ピット）
【位置】１ｄ区の中央北寄り、Ｊ８グリッドに位置する。
【形状・規模】長軸0.71m、短軸0.60mの楕円形で、深さ0.30mを測る。
【堆積土】上層に灰黄褐色の砂質土、下層に地山ブロックが含まれる褐灰色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第386図695）
【時期】出土遺物から６世紀後半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ182（ピット）
【位置】１ｄ区の中央、Ｊ８グリッドに位置し、北壁にかかる。
【形状・規模】長軸0.74m、短軸0.55mの不整方形で深さ0.44mを測る。底面は段差があり、北東側が最も深い。
【堆積土】灰黄褐色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏蓋が出土した。（第386図696・697）
【時期】出土遺物から６世紀末頃以降と考えられる。
【特徴・性格】形状から柱穴の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ214（ピット）
【位置】１ｄ区の中央西寄り、Ｋ６グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.60m程度の円形で、深さ0.15mを測る。底面が平坦である。

【堆積土】中央に柱痕と考えられる灰黄褐色の砂質土が堆積し、掘方埋土に褐灰色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身が出土した。（第386図698）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】堆積土から柱穴と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ216（ピット）
【位置】１ｄ区の中央西寄り、Ｋ６グリッドに位置する。
【形状・規模】楕円形で長軸0.56m、短軸0.31m、深さ0.13mを測る。
【堆積土】上層に柱痕と考えられる灰黄褐色の砂質土、下層に地山ブロックを含む褐灰色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第386図699）
【時期】出土遺物から６世紀後半～７世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】堆積土から柱穴の可能性が高い。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ511（ピット）
【位置】１ｄ区の東端、K12グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.50m程度の円形で、深さ0.15mを測る。
【堆積土】灰黄褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の瑞が出土した。（第386図700）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ570（ピット）
【位置】１ｄ区の東側、Ｌ11グリッドに位置する。
【形状・規模】長軸1.06m、短軸0.70mの楕円形で、深さ0.50mを測る。壁面は切り立ってオーバーハング気味に掘られ、底面は北側が一段低くなっている。
【堆積土】上層に炭・焼土、基本層序Ⅷ層をブロック状に含むにぶい黄褐色のシルトが堆積し、一段低い下層に黒褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身が出土した。（第386図701）
【時期】出土遺物から８世紀中頃以降と考えられる。
【特徴・性格】形状から柱穴の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ636（ピット）
【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｋ９グリッドに位置し、１ｄ区ＳＢ504の柱穴に切られる。
【形状・規模】楕円形と推定され、長軸0.71m以上、短軸0.62m、深さ0.35mを測る。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色の極細粒砂、下層に黄褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身が出土した。（第386図702）
【時期】出土遺物から７世紀初頭以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ658（ピット）
【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｊ９グリッドの北壁近くに位置する。
【形状・規模】隅丸方形のピットで、長軸1.02m、短軸0.72m、深さ0.50mを測る。断面形状は箱型に近く底面は平坦である。
【堆積土】上層全体をにぶい黄褐色の粘土質シルトが覆い、その下層の柱痕に灰黄褐色の粘土質シルト・暗褐色のシルト質粘土、掘方埋土に灰黄褐色・黒褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身が出土した。（第386図703）
【時期】出土遺物から８世紀後半以降と考えられる。
【特徴・性格】堆積土から柱穴と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ668（ピット）
【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｊ10グリッドの北壁近くに位置する。
【形状・規模】隅丸方形で長軸0.91m、短軸0.73m、深さ0.30mを測る。テラス状の段差があり底面中央に柱の当たりと考えられる凹みがある。
【堆積土】ピット中央の柱痕に暗褐色のシルト質粘土、掘方埋土に基本層序Ⅷ層を含む暗褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】遺構検出面から須恵器の坏蓋が出土した。（第386図704）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】堆積土から柱穴と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ739（ピット）
【位置】１ｄ区の東寄り、Ｊ10グリッドに位置し、北壁にかかる。
【形状・規模】長軸0.72m、短軸0.28m以上、深さ0.22mを測る。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト、下層ににぶい黄褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】埋土中から土師器の甕が出土した。（第386図705）
【時期】出土遺物から７世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ741（ピット）
【位置】１ｄ区の南東側、Ｌ11グリッドに位置し、１ｄ区ＳＢ508の柱穴に切られる。
【形状・規模】長軸1.20m、短軸0.72mの隅丸方形に近い形状と推定され、深さ0.50mを測る。掘方壁面は急峻な角度で掘り込まれている。
【堆積土】にぶい黄褐色のシルト・粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の鉢が出土した。（第387図706）
【時期】出土遺物の時期と１ｄ区ＳＢ508に切られることから７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】柱穴の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ748（ピット）
【位置】１ｄ区の北東隅近く、Ｊ12グリッドに位置する。

【形状・規模】直径0.30m程度の円形で、深さ0.13mを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】ピット内に置かれたような状況で須恵器壺の底部が出土した。（第387図707）
【時期】出土遺物から８世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明であるが、出土した壺の底部が原位置を保っていると考えられ、壺を埋納もしくは設置するために掘られた可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ852（ピット）
【位置】１ｄ区中央東寄り、Ｋ９グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.30m程度の円形で、深さ0.34mを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身・高坏が出土した。（第387図708・709）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】完形品の坏身が出土しており、意図的に土器を収めた可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ920（ピット）
【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｊ９グリッドに位置する。
【形状・規模】隅丸方形で長軸0.95m、短軸0.73m、深さ0.63mを測る。断面形状は箱型に近く、北側に柱の当たりと考えられる凹みがある。
【堆積土】にぶい黄褐色の粘土が主に堆積する。
【出土遺物】須恵器台付壺の底部が出土した。（第387図710）
【時期】出土遺物から８世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】柱穴と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＸ073（竪穴状遺構）
【位置】１ｄ区の西側、Ｊ６・Ｋ６グリッドに位置する。
【形状・規模】南北にやや長い不整形で長軸4.11m、短軸2.44m、深さ0.35mを測る。
【堆積土】炭化物を含む褐灰色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】中央付近から須恵器の坏蓋が出土した。（第387図711）
【時期】出土遺物から７世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の竪穴状遺構である。

【遺構名】１ｄ区ＳＸ258（竪穴状遺構）
【位置】１ｄ区の中央、Ｋ７グリッドに位置する。
【形状・規模】北側を１ｄ区ＳＩ251に切られる不整形の竪穴状遺構で、長軸4.99m以上、短軸1.71m以上、深さ0.13mを測る。掘方底面は平坦であるが、ピットが複数確認される。
【堆積土】灰白色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の高坏、土師器の甕が出土した。（第387図712・713）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】大きく削平されており詳細は不明であるが、竪穴建物の掘方の可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＸ400（竪穴状遺構）

【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｊ８・Ｋ８・Ｋ９グリッドに位置する。

【形状・規模】広範囲に広がる不整形の竪穴状遺構で、中央西寄りに掘り残された地山の高まりがある。規模は長軸10.80ｍ以上、短軸6.90ｍ、深さ0.20ｍを測り、底面は平坦である。竪穴内部には多数のピットが確認されたがＳＸ400に関係するものかどうかは不明である。

【堆積土】炭化物や焼土を含むにぶい黄褐色の砂質土が主に堆積し、下層の一部に灰黄褐色・褐灰色の砂質土が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身・高坏、土師器の甑などが出土した。（第387図714～718）

【時期】出土遺物から７世紀前半～８世紀初頭と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の竪穴状遺構である。複数の竪穴建物をはじめとした遺構が重なり合って形成されたと考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＸ809（竪穴状遺構）

【位置】１ｄ区の中央東寄り、Ｋ９グリッドに位置する。

【形状・規模】西側が１ｄ区ＳＸ400に削平されているが、隅丸方形と推定される竪穴状遺構で、南北4.80ｍ、東西4.16ｍ以上を測る。幅1.00ｍ前後、深さ0.10ｍ程度のドーナツ状に掘られており、中央は地山が残されている。範囲内にはピットが多数重複しているが、本遺構に伴うものは不明である。

【堆積土】にぶい黄褐色のシルト・灰黄褐色の粘土質シルトが堆積する。

【出土遺物】顕著な遺物は出土しなかった。

【時期】層位から６～７世紀と考えられる。

【特徴・性格】詳細は不明であるが、掘方上部を削平された竪穴建物の可能性がある。

（小島）

（５）１ｅ区　（第98～112図、写真図版115～119）

①　１面（上層）

【遺構名】１ｅ区１面ＳＩ032（ＳＬ032）（竪穴建物）

【位置】１ｅ区１面の北側、Ｊ39グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。

【形状・規模】建物本体は調査区外のため不明であるが、確認できた１ｅ区１面ＳＬ032（カマド）の平面は楕円形と推定でき、建物の南側に突出する。カマドは残存長1.10ｍ、残存幅0.76ｍで、カマド掘方の底面は平坦で深さ0.10ｍを測る。

【堆積土】上層に炭化物・焼土を含む褐灰色の粘質土(1)、下層に炭化物をわずかに含む暗灰黄色の粘質土(3)が堆積する。

【出土遺物】上層から土師器甕の口縁部が出土した。（第390図753）

【時期】出土遺物から、７世紀中頃～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】形状と堆積土から竪穴建物のカマドと考えられるが、詳細は不明である。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＫ023（土坑）

【位置】１ｅ区１面の北側、Ｊ34・Ｊ35グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は不整楕円形で、底面はほぼ平坦で西側が一段高くなる。長軸1.60m、短軸0.64m、深さ0.10mを測る。

【堆積土】上層に灰黄褐色の粘質土(1)、下層ににぶい黄橙色の粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】土師器甕の口縁部が出土した。（第390図754）

【時期】層位などから11世紀以降と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ001（溝）

【位置】１ｅ区１面の北側、Ｊ33～Ｊ37・Ｋ37～Ｋ39グリッドに位置する。

【形状・規模】東西に延びる溝で、壁面はなだらかな傾斜で、底面は平坦である。残存長48.98m、幅1.20m、深さ0.30mを測る。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色の粘質土(1)、下層に酸化鉄粒含む褐灰色の粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】土師器の高坏が出土した。（第390図755）

【時期】層位などから11～13世紀と考えられる。

【特徴・性格】古代末～中世にかけて掘削された溝で、性格は不明である。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ002（溝）

【位置】１ｅ区１面の北側、Ｊ36～Ｊ39・Ｋ37～Ｋ39グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。

【形状･規模】北西～南東に向かって延びる溝で、壁面はゆるやかな傾斜で、底面はほぼ平坦である。南東は後世の攪乱により壊されており、残存長20.83m、幅1.67m、深さ0.26mを測る。

【堆積土】細砂・酸化鉄粒を含む褐灰色の粘質土(1)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の短頸壺の口縁部～体部上半が出土した。（第390図756）

【時期】層位などから11～13世紀と考えられる。

【特徴・性格】古代末～中世にかけて掘削された溝で、性格は不明である。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ003（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、２ａ区１面ＳＤ022、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022）

【位置】１ｅ区１面の北側、Ｊ37～Ｊ39・Ｋ38～Ｋ39グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。

【形状・規模】北西～南東に向かって延びる溝で、壁面はゆるやかな傾斜で、底面は平坦である。南東は後世の攪乱により壊されており、残存長22.11m、幅1.26m、深さ0.41mを測る。

【堆積土】上層に細砂・酸化鉄粒を含む褐灰色の粘質土(1)、下層に極細粒砂を含む明青灰色の粘質土（３）が堆積する。

【出土遺物】須恵器、山茶碗、瓦が出土した。（第390図757～766）

【時期】出土遺物と層位などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】２ｅ区１面ＳＤ050へと続き、北に隣接する１ｅ区１面ＳＤ006と一緒に並行して延びる形状から、用水路と道路側溝の役割を兼ねていた溝の一部と考えられる。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ006（溝）（１ａ区ＳＤ019、１ｂ区ＳＤ117、２ａ区１面ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024）

【位置】１ｅ区１面の北側、Ｊ38～Ｊ40･Ｋ40グリッドに位置し、調査区外(北と東の双方)へ延びる。

【形状･規模】北西～東に延びる溝で、壁面はゆるやかな傾斜で、底面は平坦である。残存長20.20m、幅2.81m、深さ0.12mを測る。

【堆積土】細砂を含む褐灰色の粘質土(1)が堆積する。

【出土遺物】須恵器、山茶碗が出土した。(第391図767～779)

【時期】層位などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】２ｅ区１面ＳＤ030へと続き、南に隣接する１ｅ区１面ＳＤ003と一緒に並行して延びる形状から、用水路と道路側溝の役割を兼ねていた溝の一部と考えられる。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ008（溝）

【位置】１ｅ区１面の東側北隅、Ｋ40グリッドに位置し、調査区外(北と東の双方)へ延びる。

【形状・規模】東西に延びる溝で、壁面はゆるやかな傾斜で、底面は平坦である。残存長3.80m、残存幅0.73m、深さ0.16mを測る。

【堆積土】細砂を含む褐灰色の粘質土(1)が堆積する。

【出土遺物】平瓦の破片が出土した。(第392図780)

【時期】層位などから11～13世紀と考えられる。

【特徴・性格】古代末～中世にかけて掘削された溝で、性格は不明である。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ025（溝）

【位置】１ｅ区１面の中央、Ｊ33・Ｋ33グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。

【形状･規模】南北に延びる溝で、壁面はゆるやかな傾斜で、底面は平坦である。残存長11.84m、幅0.86m、深さ0.20mを測る。

【堆積土】細砂を含む褐灰色の粘質土(1)が堆積する。

【出土遺物】山茶碗の碗の底部が出土した。(第392図781)

【時期】出土遺物と層位などから14世紀と考えられる。

【特徴・性格】中世以降に掘削された溝である。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ038（溝）

【位置】１ｅ区１面の西側、Ｊ29～Ｊ31・Ｋ30～Ｋ33グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。

【形状・規模】北西～南東に延びる大きな溝で、壁面はゆるやかな傾斜で、底面は平坦である。底面の高低差から北西～南東に向かって水が流れていたといえる。残存長38.86m、幅3.36m、深さ0.49mを測る。

【堆積土】全体的に極細粒砂を含む灰色の粘質土(1)が堆積する。

【出土遺物】天目茶碗、製塩土器、羽口、砥石が出土した。(第392図782～786)

【時期】出土遺物と層位などから16世紀と考えられる。

【特徴・性格】南に位置する旧五条川へと水が流れていたことから、旧五条川に流れ込んでいた流水路と考えられる。

② ２面（下層）

【遺構名】１ｅ区２面ＳＤ039・１ｅ区２面ＳＤ050（道路状遺構）

【位置】１ｅ区２面の中央～東側、Ｊ33～Ｊ37・Ｋ35～Ｋ37グリッドに位置し、調査区外(東)へ延びていた可能性が高い。

【形状・規模】南北に並行して東西方向に直線として延びる２条の溝である。１ｅ区２面ＳＤ039（南）は残存長31.00m、１ｅ区２面ＳＤ050（北）は残存長38.00m、双溝ともに幅0.70m、底面はなだらかで平坦に近く深さ0.10m、溝間は平坦で、その距離は中心軸で4.30m（約14尺）を測る。

【堆積土】１ｅ区２面ＳＤ039は２面調査開始の際には既に掘削後の状態であったため堆積土については不明であるが，１ｅ区２面ＳＤ050の堆積土は上層に細砂を含む黒褐色の粘質土(1)、下層に細砂を多量に含むにぶい黄色の粘質土(2)が堆積する。１ｅ区２面ＳＤ039と１ｅ区２面ＳＤ050の間は、断ち割って掘り下げを行った結果、上層に細砂を多量に含むオリーブ黄色の砂質土（１・基本層序Ⅳ層に相当)、下層に少量の細砂と酸化鉄を含む明黄色の粘質土（４・基本層序Ⅷ層に相当）が堆積し、その間層として僅かに粘性の弱い暗灰黄色の粘質土（２・基本層序Ⅵ層に相当）が見られ、いずれも自然堆積土であった。

【出土遺物】１ｅ区２面ＳＤ039から須恵器、瓦が出土した。(第394図806～808)

【時期】層位と出土遺物などから７～８世紀前半に相当する。

【特徴・性格】２面調査の段階では既に上層面が無くなっていたことから１ｅ区２面ＳＤ039と１ｅ区２面ＳＤ050の間にて波板状凹凸面（圧痕）を確認することはできなかったが、１ｅ区２面ＳＤ039と１ｅ区２面ＳＤ050の形状や距離間、断ち割りの状況などから判断して、両溝は道路脇の側溝と考えられる。西250mの位置には７世紀後半建立の古代寺院と推定される薬師堂廃寺が所在することから、時期的に判断して本遺跡と薬師堂廃寺との間をつなぐ道路であった可能性が高い。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＤ042（大溝）

【位置】１ｅ区２面のほぼ中央、Ｊ32・Ｊ33・K32グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。

【形状・規模】南北に延びる規模の大きな溝で、底面は全体的になだらかであるが、中央部分が一段低くなって流水の痕跡が明瞭に認められ､水の流れは底面の高低差から北～南に向かって流れていた。南は後世の撹乱によって壊されており、残存長9.50m、幅8.25m、北側壁面の状況から深さ0.75mを測る。

【堆積土】基本層序Ⅲ層下面からの掘り込みである。炭化物などを含む灰黄褐色や褐灰色の粘質土(1・4)が全体に堆積するが、一段低くなった中央部分には粘性の強い灰色のシルト土(16・17)が堆積する。

【出土遺物】須恵器、瓦、山茶碗が出土した。(第394図809～816)

【時期】出土遺物から８世紀後半～12世紀後半にかけて、長期間にわたり機能していたといえる。

【特徴・性格】規模の大きな溝で、北～南に向かって水が流れていた。流水路ないしは小河川と考えられる。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＤ045（溝）

【位置】 １ｅ区２面の西側、Ｋ29・Ｋ30・Ｌ29・Ｌ30グリッドに位置する。
【形状・規模】 東西に延びる小規模な溝で、底面には流水による凹凸が見られ、流水は蛇行する平面形状と底面の高低差から西～東に向かっていたといえる。残存長11.50m、幅0.88m、深さ0.40mを測る。
【堆積土】 上層には細砂を含む粘性の弱いオリーブ褐色の粘質土(1)、底面付近に細砂を含む粘性の弱い暗褐色の粘質土(7)が堆積する。
【出土遺物】 埋土中から、須恵器と思われる小破片１点が出土した。
【時期】 出土遺物から７世紀以降と想定される。
【特徴・性格】 形状・規模から洪水などによって発生した自然流路の可能性が高い。

【遺構名】 １ｅ区２面ＳＤ061（溝）
【位置】 １ｅ区２面の西側、Ｊ28グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。
【形状・規模】 南北に延びる溝で、底面は平坦である。残存長2.50m、幅1.92m、深さ0.35mを測る。
【堆積土】 上層に大きく後世の撹乱が入っていたが、全体的に細砂・炭化物・酸化鉄粒を含む粘性に富む灰色の粘質土(3)が堆積する。
【出土遺物】 埋土中から、須恵器と土師器の小破片が出土した。
【時期】 出土遺物は周辺遺構などからの混入と思われ、層位などから判断して13世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】 中世以降に掘削された溝である。

【遺構名】 １ｅ区２面ＳＤ063（溝）（Ｒｆ区ＳＤ004）
【位置】 １ｅ区２面の西側、Ｊ28・Ｊ29・Ｋ28・Ｋ29グリッドに位置し、西隣のＲｆ区ＳＤ004と一体である。
【形状・規模】 南西～北東に向かって延びる大きな溝で、側面～底面にかけてなだらかな薬研状を呈する。北に接する１ｅ区２面ＳＤ061を避けて構築されており、残存長13.20m、幅2.40m、深さ0.60mを測る。
【堆積土】 上層には細砂を多量に含む粘性の弱い褐灰色の粘質土(1)が全体的に堆積し、底面付近に粘性に富む暗灰黄色の粘質土(8)などが堆積する。
【出土遺物】 古瀬戸小皿が出土した。（第394図817）
【時期】 基本層序Ⅰ層下面から掘り込まれた溝で、１ｅ区２面ＳＤ061を避けた形状から１ｅ区２面ＳＤ061とほぼ同時期の13世紀以降に構築されたと考えられ、出土遺物から15世紀初頭までは開渠であったといえる。
【特徴・性格】 中世以降に掘削された溝である。

【遺構名】 １ｅ区２面ＳＫ053（土坑）
【位置】 １ｅ区２面の東側、Ｊ35・Ｊ36グリッドに位置し、調査区外(北)へ延びる。
【形状・規模】 平面は隅丸方形と推定でき、南のやや東寄りがピット状に突出する。底面は平坦で、全長（東西）長2.08m、深さ0.22mを測る。
【堆積土】 上層に酸化鉄粒を多量に含む褐灰色の粘質土(1)、下層に同様の混入物を含むにぶい黄褐色の粘質土(3)が堆積する。
【出土遺物】 埋土中から土師器の小破片１点が出土した。

【時期】出土遺物から、６～７世紀と想定される。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＰ043（ピット）
【位置】１ｅ区２面の中央東寄り、Ｋ36グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は不整円形で、長軸0.34m、短軸0.32m、掘り込みは深く0.32mを測る。
【堆積土】上層に細砂を多量に含む灰色の粘質土(1)、下層に粘性の強いにぶい黄色と暗オリーブ色の粘質土(4・5)が堆積し、中央には柱痕と推定される細砂・黒色粒を含むオリーブ褐色の粘質土(3)が見られた。
【出土遺物】埋土中から土師器の小破片１点が出土した。
【時期】出土遺物から、６～７世紀と想定される。
【特徴・性格】形状と堆積土の状況から柱穴と考えられる。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＰ051（ピット）
【位置】１ｅ区２面の中央東寄り、Ｋ36グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は不整楕円形で、長軸0.65m、短軸0.60m、深さ0.16mを測る。
【堆積土】上層に炭化物・焼土粒を多量に含む黄灰色の粘質土(1)、下層に細砂・炭化物を含む黄褐色の粘質土(2)などが堆積する。
【出土遺物】埋土中から土師器の小破片が数点出土した。
【時期】出土遺物から、６～７世紀と想定される。
【特徴・性格】形状と堆積土から柱穴であった可能性が高い。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＰ064（ピット）
【位置】１ｅ区２面の西端、Ｊ28グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は不整円形で、長軸0.48m、短軸0.48m、深さ0.20mを測る。
【堆積土】上層に細砂を多量に含むオリーブ褐色の粘質土(1)、下層に暗灰黄色の粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】遺物の出土はなかった。
【時期】出土遺物もなく不明である。
【特徴・性格】形状と堆積土から柱穴であった可能性が高い。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＰ066（ピット）
【位置】１ｅ区２面の東端、Ｊ40グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は楕円形で、長軸0.36m、短軸0.30m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】酸化鉄粒を少量含む褐灰色の粘質土(1)である。
【出土遺物】土師器台付甕の体部下半～台部が西にやや倒れた状態で出土した。(第394図818)
【時期】出土遺物から、３世紀と考えられる。
【特徴・性格】小規模なピットであるが土器埋納遺構と考えられる。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＸ055（溝状遺構）

【位置】 １ｅ区２面の中央、K33グリッドに位置する。
【形状・規模】 北東から蛇行して西に延びる不整形な溝状を呈する遺構で、底面はほぼ平坦である。東側が後世の撹乱によって壊されている。残存長6.50m、幅2.80m、深さ0.40mを測る。
【堆積土】 底面全体に酸化鉄粒を多量に含む粘性の強い黄褐色の粘質土(6)が堆積する。
【出土遺物】 土師器高坏が出土した。(第394図819)
【時期】 出土遺物から、３世紀と考えられる。
【特徴・性格】 形状・規模から洪水などによって発生した自然流路の可能性が高いと思われるが、全調査区の調査終了後の全体像からは、２ｅ区２面ＳＤ118との関連も想定できる。

(基峰)

（６）２ａ区（第113～132図、写真図版120～142）

①　１面（上層）

【遺構名】２ａ区１面ＳＢ001（掘立柱建物）
【位置】 ２ａ区１面、F16グリッドに位置する。
【形状･規模】平面長方形の１間×１間構成の側柱構造で､建物の主軸方向はN-64°-Wである｡桁行5.28m、梁行3.66m、深さ0.09mを測る。隅柱のみの構造で北西２ａ区１面ＳＰ054、北東２ａ区１面ＳＰ058、南東Ｒｄ区ＳＰ084、南西２ａ区１面ＳＰ041の４本である。２ａ区１面ＳＰ041・２ａ区１面ＳＰ054、Ｒｄ区ＳＰ084の壁面は緩やかに傾斜し、底面は丸みを帯びる。２ａ区１面ＳＰ058は壁面の傾斜が急ですり鉢状になっている。
【堆積土】 ２ａ区１面ＳＰ041は単層で赤色のしまりが悪いシルト(1)が堆積する。２ａ区１面ＳＰ054は上層に褐灰色のしまりが悪いシルト(1)、下層に褐色のしまりが悪いシルト(2)が堆積する。２ａ区１面ＳＰ058は上層に褐灰色のしまりが悪いシルト(1)、下層に黄褐色のしまりが悪いシルト(2)が堆積する。Ｒｄ区ＳＰ084は上層に暗灰黄色の粘性が弱くしまりが悪いシルト(1)、下層ににぶい黄褐色の粘性がとても弱くしまりが悪いシルト(2)が堆積する。
【出土遺物】 出土遺物はない。
【時期】 層位と柱穴堆積土の状況などから13世紀以降と思われる。
【特徴・性格】 小型の掘立柱建物で、簡易的な倉庫状の建物であったと考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＢ002（掘立柱建物）
【位置】 ２ａ区１面、F16・17に位置する。
【形状・規模】 平面長方形の３間×１間以上の構成による総柱構造で、建物の主軸方向はN-67°-Wである。桁行7.47m、梁行2.61m以上、深さ0.15m、柱間は桁行2.10m、梁行1.80mを測る。隅柱は南東２ａ区１面ＳＰ090、南西２ａ区１面ＳＰ095の２本で、東２ａ区１面ＳＰ075は側柱と考えられる。２ａ区１面ＳＰ057・２ａ区１面ＳＰ073・２ａ区１面ＳＰ075・Ｒａ区１面ＳＰ090・２ａ区１面ＳＰ095の壁面は緩やかに傾斜し、底面はほぼ平坦である。
【堆積土】 ２ａ区１面ＳＰ057は単層で褐灰色のしまりが悪いシルト(1)が堆積する。２ａ区１面ＳＰ073は上層に粘性が弱くしまりが良い灰色のシルト(1)、下層に粘性が弱くしまりが良い褐灰色のシルト(2)が堆積する。２ａ区１面ＳＰ075は単層で粘性が弱くしまりが良い褐灰色のシルト(1)が堆積す

る。２ａ区１面ＳＰ090は上層に粘性が弱くしまりが悪い灰黄褐色シルト(1)、下層に粘性が弱くしまりが悪い暗灰黄色シルト(2)が堆積する。２ａ区１面ＳＰ095は上層に粘性が弱くしまりが良い褐灰色のシルト(1)、下層に粘性が弱くしまりが良い褐灰色のシルト(2)が堆積する。

【出土遺物】出土遺物はない。

【時期】層位や建物方向などから６～７世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】構成される他のピットは２ａ区１面ＳＤ004や２ａ区１面ＳＫ077によって削平されたものと考えられ、本来は３間×２間ないしは３間程度の総柱建物だったと思われる。隅柱の２ａ区１面ＳＰ090と２ａ区１面ＳＰ095が支柱で、他の側柱と中柱が束柱と考えられ、高床倉庫であった可能性が高い。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ006（土坑）

【位置】２ａ区１面東側、Ｅ24グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整楕円形で壁面の掘り方はやや傾斜があり、底面は西側が深く掘り込まれている。長軸1.16m、短軸0.64m、深さ0.28mを測る。

【堆積土】灰褐色のシルト細砂(1・2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】出土した土器の小破片から７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ007（土坑）

【位置】２ａ区１面東側、Ｆ24グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整楕円形で壁面は直線的に傾斜し、底面は平坦である。長軸4.28m、短軸1.60m、深さ0.24mを測る。

【堆積土】上層にオリーブ灰色のシルト細砂(1)、下層に灰黄褐色の粘質土を含んだ明黄褐色の粘質土(3)と一部に灰褐色の粘質土(4)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】出土した土器の小破片から14世紀と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ011（土坑）

【位置】２ａ区１面東側、Ｅ24グリッドに位置する。

【形状･規模】平面不整方形で壁面はやや傾斜があり、底面はやや平坦で東側に木根痕（樹木の根穴）の窪みがある。長軸1.92m、短軸1.06m、深さ0.46mを測る。

【堆積土】上層に粘性がやや強い灰赤色のシルト質(1)と、黄褐色の粘質土をブロック状に含んだ褐灰色の粘質土(3)が、下層に灰オリーブ色の粘質土(7)と黄灰色の粘質土を少量含んだ黄褐色の粘質土(9)が堆積する。

【出土遺物】出土遺物はない。

【時期】層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【特徴･性格】底面に木根痕（樹木の根穴）と思われる窪みがあり、粘性がやや弱い灰色の粘質土(10)が堆積する。性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ013（土坑）

【位置】２ａ区１面東側、Ｅ24グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形で、壁面はやや傾斜があり底面は平坦である。長軸0.92m、短軸0.56m、深さ0.22mを測る。

【堆積土】上層に灰褐色のシルト細砂(1)、下層に灰褐色の粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】出土遺物はない。

【時期】層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】底面中央付近に柱の当たりが確認できたため柱穴と考えられるが、詳細は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ025（土坑）

【位置】２ａ区１面東側、Ｅ26グリッド、２ａ区１面ＳＤ005内に位置する。

【形状・規模】平面不整方形で壁面は緩やかに傾斜し、底面は浅い丸底である。長軸1.78m、短軸0.68m、深さ0.18mを測る。

【堆積土】上層ににぶい赤褐色のシルト細砂(1)、下層ににぶい黄褐色の粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】出土遺物はない。

【時期】層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ033（土坑）

【位置】２ａ区１面東側、Ｆ24・Ｆ25グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整楕円形で壁面は緩やかに傾斜し、底面は平坦に近い。調査区南側へ延びるため詳細な形状は不明である。長軸2.24m、短軸1.18m、深さ0.22mを測る。

【堆積土】上層に褐灰色の粘質土(1)、下層に粘性のやや悪い褐灰色の粘質土(3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ044（土坑）

【位置】２ａ区１面西側、Ｆ14グリッド、２ａ区１面ＳＤ004内に位置する。

【形状・規模】平面不整方形で南側の壁面は緩やかに傾斜し、北側は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。長軸0.86m、短軸0.74m、深さ0.12mを測る。

【堆積土】しまりが悪い赤色のシルト(1)と、しまりが悪い褐灰色のシルト(2・3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】出土遺物は７世紀後半～８世紀前半だが混入したものと考えられ、層位や周辺遺構などから13世紀以降と考えられる。

【特徴・性格】堆積土はいずれもしまりが悪く、多量の炭化物を含んでいることから何らかを焼成した土坑と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ048（土坑）

【位置】２ａ区１面西側、Ｅ14グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整楕円形で、壁面は緩やかに傾斜し、底面はやや平坦であるが北東側は丸底で一段深くなる。長軸2.16m、短軸1.24m、深さ0.16mを測る。

【堆積土】上層にしまりが良い暗オリーブ色のシルト(1)としまりが悪い黄褐色のシルト(2)、下層にしまりが良い灰黄褐色のシルト(3)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の瓶が出土した。(第395図821)

【時期】出土遺物から７世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】遺構内に浅いピットがあるが、植物根痕と考えられる。性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ050（土坑）

【位置】２ａ区１面西側、Ｆ14グリッド、２ａ区１面ＳＤ004内に位置する。

【形状・規模】平面不整楕円形で長軸3.45m、短軸0.70m、深さ0.05mを測る。

【堆積土】不明である。

【出土遺物】須恵器の甕が出土した。(第395図822)

【時期】出土遺物は７世紀前半だが混入したものと考えられ、層位や周辺遺構などから15世紀中頃以降と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ051（土坑）

【位置】２ａ区１面西側、Ｆ14グリッド、２ａ区１面ＳＤ004内に位置する。

【形状･規模】平面不整方形で壁面は緩やかに傾斜し､底面は平坦で北側にやや傾斜する。長軸2.74m、短軸1.76m、深さ0.32mを測る。

【堆積土】上層にしまりがやや良く粘性が弱い赤灰色の粘質土(1)、下層にしまりが良く粘性が弱い褐灰色のシルト(3)、しまりがやや良く粘性が強い褐灰色の粘質土(4)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の埦・鉢が出土した。(第395図823・824)

【時期】出土遺物から７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ077（土坑）

【位置】２ａ区１面西側、Ｆ16グリッドに位置する。

【形状･規模】平面不整方形で、壁面は緩やかに傾斜し、底面は平坦である。長軸3.22m、短軸2.04m、深さ0.12mを測る。

【堆積土】しまりが悪く粘性が弱い褐灰色のシルト(1・2)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。(第395図825・826)

【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】２ａ区１面ＳＰ058・２ａ区１面ＳＰ085が重複している。性格不明の土坑である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ001（溝）（１ａ区ＳＤ019、１ｂ区ＳＤ117、１ｅ区１面ＳＤ006、
２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、

Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024）

【位置】２ａ区１面、D14・D15、Ｅ15～Ｅ19、Ｆ19・Ｆ20グリッドに位置する。１ａ区ＳＤ019、１ｂ区ＳＤ117、１ｅ区１面ＳＤ006、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024と一体の溝である。

【形状・規模】西～南東に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面は椀状である。残存長70.85m、幅2.25m、深さ0.74mを測る。Ｅ19グリッド内で南に方向を変える。

【堆積土】上層にしまりと粘性がある褐灰色の粘質シルト、下層にしまりと粘性がある褐灰色の粘質土が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・埦・壺・鉢、山茶碗の碗・小皿が出土した。（第395図828～836）

【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】７～８世紀の土器が出土しているが、混入した可能性が高い。中世に掘削された規模の大きい溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ002（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ013、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022）

【位置】２ａ区１面、Ｅ14～Ｅ18、Ｆ18・Ｆ19グリッドに位置する。１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022と一体の溝である。

【形状・規模】西～南東に延び、壁面は傾斜があり、底面はやや平坦である。残存長62.50m、幅2.40m、深さ0.54mを測る。Ｆ19グリッド内で南に方向を変える。

【堆積土】上層にしまりがあり粘性が弱いにぶい赤褐色の粘質シルト、下層にしまりが弱く粘性がない褐灰色の粘質シルトと明黄褐色のシルト粗砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の甕・坏身・瓶、土師器の甕・鍋・山茶碗の碗・小碗、小皿、砥石、平瓦が出土した。（第396図837～855・第397図856～860）

【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】出土遺物の時期の幅が広く、中世に掘削された規模の大きな溝である。調査範囲全体から見ると、北に隣接する２ａ区１面ＳＤ001（Ｒｂ区ＳＤ001）と一緒に並行して延びる形状から、用水路と道路側溝の役割を兼ねていた溝の一部と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ003（溝）（１ａ区ＳＤ014、１ｂ区ＳＤ088・ＳＤ256、２ｂ区ＳＤ092Ｒｂ区１面ＳＤ003、Ｒｄ区ＳＤ136）

【位置】２ａ区１面、Ｅ14～Ｅ18、Ｆ18・Ｆ19グリッドに位置する。１ａ区ＳＤ014、１ｂ区ＳＤ088・ＳＤ256、２ｂ区ＳＤ092、Ｒｂ区１面ＳＤ003、Ｒｄ区ＳＤ136と一体の溝と考えられる。

【形状・規模】西～南東に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面はやや平坦である。残存長57.10m、幅2.40m、深さ0.28mを測る。F19グリッド内で南に方向を変える。

【堆積土】しまりがある赤灰色のシルトが堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身、山茶碗の小皿が出土した。（第397図861～863）

【時期】出土遺物などから13世紀と考えられる。

【特徴・性格】中世に掘削された性格不明の大きな溝である。１ａ区ＳＤ014、１ｂ区ＳＤ088と一体

の溝と考えられる。調査範囲全体から見ると、道路側溝を兼ねた水路と考えられ、２ａ区１面ＳＤ001・ＳＤ002によって構成される道路の拡幅に伴う溝の一部と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ004（溝）

【位置】２ａ区１面、Ｅ14～Ｅ16、Ｆ16～Ｆ18グリッドに位置する。

【形状・規模】西～南東に延びる鈎状の溝である。壁面は緩やかな傾斜で底面はやや平坦である。残存長50.85m、幅3.55m、深さ0.44mを測る。Ｆ14グリッド内でほぼ直角に南から西に方向を変えている。

【堆積土】上層にしまりがあり粘性がない灰褐色のシルト、下層にしまりと粘性がない明褐灰色のシルトが堆積する。

【出土遺物】須恵器の壺、山茶碗の碗、古瀬戸の皿・折縁深皿、内耳鍋、陶馬の脚部、陶錘が出土した。（第398図864～871）

【時期】７～８世紀の遺物が出土しているが混入したものと考えられ、層位や周辺遺構などから12～15世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ005（溝）（Ｒｅ区１面ＳＤ003）

【位置】２ａ区１面、Ｅ25・Ｅ26グリッドに位置する。Ｒｅ区１面ＳＤ003と一体の溝である。

【形状・規模】東西に延び、壁面の東側は直線的に傾斜し、西に行くほど緩やかに傾斜する。底面はやや平坦である。残存長21.25m、幅0.94m、深さ0.20mを測る。

【堆積土】上層に灰色のシルト細砂(1)、下層に褐灰色の粘質土をブロック状に含む黄褐色の粘質土(3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】層位や周辺遺構などから８世紀と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の溝である。２ａ区１面ＳＤ012と一体の溝と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ008（溝）

【位置】２ａ区１面、Ｆ24グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整長方形で、壁面は直線的に傾斜し、底面はほぼ平坦である。長軸5.04m、短軸1.34m、深さ0.26mを測る。

【堆積土】上層に灰色のシルト細砂(1)、下層に灰黄褐色の粘質土(3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】層位などから14世紀と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ012（溝）

【位置】２ａ区１面、Ｅ23・Ｅ24グリッドに位置する。

【形状・規模】東西に延びる溝である。壁面はしっかりと掘り込まれ、底面は平坦である。残存長15.10m、幅0.24m、深さ0.28mを測る。

【堆積土】上層に灰色のシルト細砂(1)、下層に灰褐色の粘質土(4)、東側の一部に灰黄褐色のシルト細砂(2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから８世紀中頃～後半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。２ａ区１面ＳＤ005の一部と考えられるが、詳細は不明である。西端部分は、土坑などの別遺構の可能性も考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ016（溝）
【位置】２ａ区１面、Ｅ25・Ｅ26グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東にかけて延び、壁面は直線的に掘り込まれ、底面は南側が一段低くなっている。長さ14.30m、幅1.20m、深さ0.25mを測る。
【堆積土】上層に灰褐色のシルト細砂(1)、下層に褐灰色の粘質土をブロック状に含む黄褐色の粘質土(4)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ045（溝）
【位置】２ａ区１面、Ｆ13グリッドに位置する。調査区外（西）へ延びる。
【形状･規模】調査区西端にあり、壁面は緩やかに傾斜し、底面はほぼ平坦である。残存長2.50m、幅0.35m、深さ0.13mを測る。
【堆積土】上層にしまりと粘性がある暗赤灰色の粘質土、下層にしまりと粘性が弱い灰オリーブ色のシルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋・高坏・埦、古瀬戸の卸皿、内耳鍋が出土した。（第398図872～876）
【時期】７世紀後半以降と考えられるが、時期は不明である。
【特徴・性格】詳細不明の溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ083（溝）
【位置】２ａ区１面、Ｄ14・Ｅ14グリッドに位置する。
【形状･規模】南北に延び、壁面は直線的に掘り込まれ、底面は凹凸がある。残存長4.92m、幅1.50m、深さ0.54mを測る。
【堆積土】上層にしまりが良く粘性が強い赤灰色の粘質土(1)、下層にしまりが良く粘性が強い褐灰色の粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第398図877）
【時期】出土遺物から７世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】２ａ区１面ＳＤ001・２ａ区１面ＳＤ002・２ａ区１面ＳＤ082が上層に重複する。性格不明の溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ142（溝）
【位置】２ａ区１面、Ｅ17・Ｅ18グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東に延び、壁面は緩やかな傾斜で底面はほぼ平坦である。残存長4.48m、幅1.00m、深さ0.12mを測る。

【堆積土】上層に褐灰色のシルト(1)、下層に地山ブロックを含む褐灰色のシルト(2・3)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。(第398図878)
【時期】出土遺物から６世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ143（溝）
【位置】２ａ区１面、D16・D17、E17・E18グリッドに位置する。
【形状･規模】東西に延び、壁面の中央付近は直線的に立ち上がり、東に行くほど緩やかに傾斜する。底面は中央付近では平坦で、東に行くほど丸みを帯びる。残存長20.40m、幅0.72m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】上層にしまりが良く粘性が弱い灰褐色のシルト(1)、下層にしまりが良く粘性が弱い地山ブロックを含んだ褐灰色のシルト(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身、土師器の甕が出土した。(第399図879・880)
【時期】出土遺物から７世紀と考えられる。
【特徴・性格】２ａ区１面ＳＤ142と接しており、上層に重複する。本溝の西端は２ａ区１面ＳＰ079によって削平されている。性格不明の溝である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ009（ピット）
【位置】２ａ区１面、F24グリッドに位置する。
【形状･規模】平面円形で壁面はやや傾斜があり底面は平坦である。長軸1.13m、短軸1.10m、深さ0.14mを測る。
【堆積土】上層にオリーブ灰のシルト細砂(1)、下層に褐灰色の粘質土(2)とにぶい黄褐色のシルト細砂(3)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀中頃～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ055（ピット）
【位置】２ａ区１面、F16グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で掘り込みは傾斜が急で、底面は細くなり丸みを帯びている。長軸0.48m、短軸0.40m、深さ0.22mを測る。
【堆積土】上層にしまりが悪い褐灰色のシルト(1)、不層にしまりが悪い灰黄褐色のシルト(2)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】詳細は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ056（ピット）
【位置】２ａ区１面、F16グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で壁面はしっかりと直に下がり、底面は南西側が低くなっている。長軸0.36m、短軸0.32m、深さ0.25mを測る。

【堆積土】しまりが悪い褐灰色のシルト(1・2)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀前半と考えられる.
【特徴・性格】詳細は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ059（ピット）
【位置】２ａ区１面、F16グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で壁面は緩やかな傾斜で、底面は平坦である。長軸0.60m、短軸0.58m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】しまりが悪い褐灰色のシルト(1・2)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀と考えられる。
【特徴・性格】底面の中央付近に柱の当たりが見られ、柱穴と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ068（ピット）
【位置】２ａ区１面、E17グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で壁面は直に下がり、底面は平坦である。長軸0.58m、短軸0.50m、深さ0.46mを測る。
【堆積土】上層にしまりがやや悪く粘性が弱い暗赤褐色のシルト(1)、下層にしまりがやや良く粘性が弱い暗赤色のシルト(2)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片と柱根が出土した。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀と考えられる。
【特徴・性格】柱根が出土したことから柱穴である。北側に位置する２ａ区１面ＳＰ134からは柱根が出土しており、南側に位置する２ａ区１面ＳＰ070からは柱痕が確認されている。この３本の柱穴は等間隔で直線上に並ぶことから、柵列の可能性が考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ070（ピット）
【位置】２ａ区１面、E17グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で壁面は直に下がり、底面は少し丸みを帯びている。直径0.50m、深さ0.18mを測る。
【堆積土】柱痕は２層に分かれている。上層に灰褐色のシルトがマーブル状に混ざる粘性がなくしまりがある暗赤灰色のシルト細砂、下層に灰褐色のシルトがマーブル状に混ざる粘性がなくしまりがややある暗赤灰色のシルト細砂が堆積する。掘り方は単層で、西側が灰色のシルトがマーブル状に混ざる粘性がなくしまりがある暗赤灰色のシルト細砂、東側がにぶい橙色のシルトがマーブル状に混ざる粘性がなくしまりがある赤灰色のシルト細砂が堆積する。
【出土遺物】刀子が出土した。(第399図881)
【時期】層位と出土遺物などから７世紀と考えられる。
【特徴・性格】柱穴である。北側に位置する２ａ区１面ＳＰ068と２ａ区１面ＳＰ134と合わせて、柵列であった可能性が考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ120（ピット）
【位置】２ａ区１面、Ｆ20グリッドに位置する。
【形状･規模】２ａ区１面ＳＤ001に削平されているため、正確な形状は不明である。残存長軸1.05m、残存短軸0.90mを測る。
【堆積土】不明である。
【出土遺物】土師器の高坏が出土した。（第399図882）
【時期】出土遺物から５～６世紀と考えられる。
【特徴・性格】底面の中央付近に柱の当たりがあることから、柱穴と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ125（ピット）
【位置】２ａ区１面、Ｅ18グリッドに位置する。
【形状･規模】平面不整楕円形で底面はほぼ平坦である。長軸1.02m、短軸0.57m、深さ0.20mを測る。
【堆積土】上層にしまりはやや良く粘性が弱い灰褐色のシルト(1)、下層にしまりはやや良く粘性が弱い褐灰色のシルト(3)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】２ａ区１面ＳＤ002が隣接しており、北側２ａ区１面ＳＰ127、南側２ａ区１面ＳＰ126によって一部削平されている。性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ126（ピット）
【位置】２ａ区１面、Ｅ18グリッドに位置する。
【形状・規模】平面不整形で底面はほぼ平坦である。長軸0.52m、短軸0.44m、深さ0.18mを測る。
【堆積土】しまりはやや良く粘性がやや強い褐灰色の粘質シルト(1)の単層である。
【出土遺物】須恵器の甕が出土した。（第395図827）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】２ａ区１面ＳＤ002に隣接しており、北側２ａ区１面ＳＰ125と重複し、南側２ａ区１面ＳＰ129に接している。性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ127（ピット）
【位置】２ａ区１面、Ｅ18グリッドに位置する。
【形状・規模】平面不整円形で底面は北側が深くなっている。長軸0.59m、残存短軸0.50m、深さ0.28mを測る。
【堆積土】上層にしまりが良く粘性が強い褐灰色の粘質シルト(1)、下層は南北に層が分かれ、しまりが良く粘性が弱く炭ブロックを含む黒褐色のシルト(2)、しまりが良く粘性が強い灰褐色の粘質シルト(3)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】２ａ区１面ＳＤ002に隣接しており、北側２ａ区１面ＳＰ128、南側２ａ区１面ＳＰ125の一部と重複する。性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ128（ピット）

【位置】２ａ区１面、E18グリッドに位置する。

【形状･規模】平面円形で底面は南側が深くなっている。長軸0.78m、短軸0.66m、深さ0.22mを測る。

【堆積土】しまりが良く粘性が弱い褐灰色のシルト(1・2)が堆積する。

【出土遺物】土師器の甕が出土した。(第399図883)

【時期】出土遺物から７世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】２ａ区１面ＳＤ002に隣接しており、南側２ａ区１面ＳＰ127の一部と重複する。性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ129（ピット）

【位置】２ａ区１面、E18グリッドに位置する。

【形状･規模】形状は２ａ区１面ＳＤ002に削平されているため不明である。底面は丸みを帯びている。残存長軸0.78m、残存短軸0.34m、深さ0.25mを測る。

【堆積土】上層にしまりが悪く粘性が弱い褐灰色のシルト(1)、下層にしまりが悪く粘性が弱い明褐灰色のシルト(2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】層位や周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】北側で２ａ区１面ＳＰ126と接しており、南側は２ａ区１面ＳＤ002によって削平されている。性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ134（ピット）

【位置】２ａ区１面、E17グリッドに位置する。

【形状・規模】平面円形で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれ底面は平坦である。直径0.40m、深さ0.44mを測る。

【堆積土】上層にしまりと粘性がややある褐灰色の粘質シルト、下層にしまりと粘性がある褐灰色の粘質シルトが堆積する。

【出土遺物】土器の小破片と柱根が出土した。

【時期】層位や周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】柱根が出土したことから柱穴と考えられる。南側に位置する２ａ区１面ＳＰ068と２ａ区１面ＳＰ070と合わせて柵列であった可能性が考えられる。２ａ区１面ＳＤ001と一部重複する。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ144（ピット）

【位置】２ａ区１面、E17グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整楕円形で、壁面は緩やかな傾斜で底面は丸みを帯びている。長軸0.75m、短軸0.49m、深さ0.11mを測る。

【堆積土】にぶい褐色の粘質土ブロックを多量に含むしまりが良く粘性は弱い褐灰色の粘質シルトの単層である。

【出土遺物】出土遺物はない。

【時期】層位や周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】２ａ区１面ＳＤ142と接している。性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ147（ピット）
【位置】２ａ区１面、E15グリッドに位置する。
【形状・規模】平面不整方形で壁面は緩やかに傾斜し、底面は東側が深くなっている。長軸0.95m、短軸0.70m、深さ0.22mを測る。
【堆積土】上層に地山ブロックが混ざるしまりと粘性がある褐灰色の粘質シルト、下層にしまりと粘性があるにぶい黄橙色の粘質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第399図884）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】底面中央付近に柱の当たりがあることから柱穴と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ148（ピット）
【位置】２ａ区１面、E15グリッドに位置する。
【形状・規模】形状は２ａ区１面ＳＤ002に削平されているため不明である。底面は丸みを帯びている。壁面は緩やかな傾斜で、中央付近が深くなっている。残存長軸0.94m、残存短軸0.64m、深さ0.22mを測る。
【堆積土】上層にしまりが良く粘性が弱い褐灰色のシルト(1)、下層にしまりが良く粘性が強い褐灰色の粘質シルト(3)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などからも時期の特定はできなかった。
【特徴・性格】底面の中央付近に柱の当たりがあることから柱穴と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ149（ピット）
【位置】２ａ区１面、E14グリッドに位置する。
【形状･規模】形状は２ａ区１面ＳＤ002に削平されているため不明である。底面は中央付近で深くなっている。残存長軸0.84m、残存短軸0.38m、深さ0.22mを測る。
【堆積土】上層にしまりが良く粘性が強い黄褐色の粘質土(1)、下層にしまりが良く粘性が強い褐灰色の粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】出土遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】底面の中央付近に柱の当たりがあることから柱穴と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ150（ピット）
【位置】２ａ区１面、E14グリッドに位置する。２ａ区１面ＳＤ002内にある。
【形状・規模】平面不整楕円形で、壁面は直に下がり底面は平坦である。長軸0.72m、短軸0.52m、深さ0.10mを測る。
【堆積土】横方向に３層重なり、東側からしまりが良く粘性が強い褐灰色の粘質シルト(1)、しまりが良く粘性が強い褐灰色の粘質土(2)、しまりが良く粘性が強い褐灰色の粘質シルト(3)が堆積する。
【出土遺物】出土遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などからも時期の特定はできなかった。

【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ155（ピット）
【位置】２ａ区１面、E19グリッドに位置する。
【形状・規模】平面不整方形で壁面はしっかりと直に下がり、底面は中央部が深くなっている。長軸1.35m、短軸1.20m、深さ0.34mを測る。
【堆積土】横３層に分かれている。中央部はしまりと粘性がある褐灰色の粘質シルト、南東はしまりが弱く粘性がない灰褐色のシルト、北西はしまりがあり粘性がない褐灰色のシルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第399図885）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ158（ピット）
【位置】２ａ区１面、E18グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で、壁面はしっかりと掘り込まれ底面は中央付近が一段高くなっている。長軸0.60m、短軸0.52m、深さ0.18mを測る。
【堆積土】上層にしまりがあり粘性のない褐灰色のシルト(1)、下層の南西側はしまりがややあり粘性のない褐灰色のシルト(2)、北東側はしまりがあり粘性のない褐灰色のシルト(3)が堆積する。
【出土遺物】出土遺物はない。
【時期】層位や周辺遺構などからも時期の特定はできなかった。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ159（ピット）
【位置】２ａ区１面、E18グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で壁面はＶ字状に傾斜し、底面は小さく丸みを帯びている。中央部が一段深くなっている。長軸0.62m、短軸0.54m、深さ0.25mを測る。
【堆積土】上層にしまりがあり粘性のない褐灰色のシルト(1)、下層にしまりがあり粘性のない灰褐色のシルト(2)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位と周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】底面の中央付近に柱の当たりが残っており、柱穴と考えられる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ160（ピット）
【位置】２ａ区１面、E18グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で壁面は緩やかな傾斜で椀状になっている。長軸0.40m、短軸0.38m、深さ0.14mを測る。
【堆積土】しまりがあり粘性がない褐灰色のシルト(1)の単層である。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】層位と周辺遺構などから７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

（首藤）

② ２面（下層）

【遺構名】２ａ区２面ＳＢ001（掘立柱建物）

【位置】２ａ区２面西端、Ｆ14グリッドに位置する。

【形状・規模】東西を長軸とする２間×２間の平面方形の掘立柱建物で、総柱構造である。建物規模は桁行5.30m、梁行4.38m、深さは２ａ区２面ＳＰ197で0.36mを測り、柱間は桁行2.25m、梁行1.80mである。本建物は隅柱４本、側柱４本、中柱１本の合計９本の柱穴で構成され、隅柱は南西２ａ区２面ＳＰ183、北西２ａ区２面ＳＰ186、北東２ａ区２面ＳＰ193、南東２ａ区２面ＳＰ195、側柱は西２ａ区２面ＳＰ202、北２ａ区２面ＳＰ200、東２ａ区２面ＳＰ194内Ｐ５、南２ａ区２面ＳＰ197、建物内部の中柱は２ａ区２面ＳＰ199で、柱穴は平面形状が円形もしくは不整円形を呈し、底面は丸底ないしは平坦である。建物の主軸方向はＮ-５°-Ｅである。

【堆積土】北の柱穴列である２ａ区２面ＳＰ186と２ａ区２面ＳＰ200では、２ａ区２面ＳＰ186の上層に褐灰色粘質シルト(1)とシルト質細砂(2)、下層に暗褐色粘質土(3)が堆積し、２ａ区２面ＳＰ200の上層に灰褐色シルト質細砂(1)と褐灰色粘質シルト(2)が堆積する。

【出土遺物】２ａ区２面ＳＰ194から須恵器の坏蓋が出土した。北の柱穴列西に位置する２ａ区２面ＳＰ184から礎板、さらに中央に位置する２ａ区２面ＳＰ200からも礎板（サワラ）が出土した。

【時期】出土した遺物や建物方向などから考えて、７～８世紀中頃と考えられる。

【特徴･性格】北東～南西に主軸を向けた掘立柱建物で、総柱構造であることから隅柱が支柱、側柱･中柱が束柱と推定でき、高床ないしは床束建築の小型倉庫と考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＢ002（掘立柱建物）

【位置】２ａ区２面西端、Ｅ14・Ｆ14グリッドに位置する。

【形状･規模】東西を長軸とする２間×２間と推定される平面長方形の掘立柱建物で､側柱構造である。建物規模は桁行4.34m、梁行3.08m、深さは柱根の出土した２ａ区２面ＳＰ187で0.38mを測り、柱間は桁行1.88m、梁行1.26mである。本建物は東の柱穴列の中央に柱穴が確認できなかったが、隅柱４本、側柱４本の合計８本の柱穴で構成されると推定できる。隅柱は南西２ａ区２面ＳＰ185、北西２ａ区２面ＳＰ188、北東２ａ区２面ＳＰ192、南東２ａ区２面ＳＰ194内Ｐ１、側柱は西２ａ区２面ＳＰ187、北２ａ区２面ＳＰ191、南２ａ区２面ＳＰ235である。柱穴は平面形状が円形もしくは不整円形を呈し、底面は丸底ないしは平坦で、２ａ区２面ＳＰ187以外の柱穴は掘り方が浅い。建物の主軸方向はＮ-４°-Ｅである。

【堆積土】西の柱穴列２ａ区２面ＳＰ187では灰褐色シルト質細砂(1・2)、東の柱穴列２ａ区２面ＳＰ194内Ｐ１では柱痕に灰色シルト(1)、掘方に褐灰色粘質土とシルト(2・3)が堆積する。

【出土遺物】２ａ区２面ＳＰ187から柱根（コウヤマキ）が出土し、２ａ区２面ＳＰ194内Ｐ１から土師器甕の小片と柱根（コウヤマキ）が出土した。

【時期】出土遺物や建物方向などから、７世紀前半～８世紀と考えられる。２ａ区２面ＳＰ187から出土した柱根（コウヤマキ）の放射性炭素年代測定では、５～６世紀の年代観が得られたが、古木効果による測定年代より新しい時期の年代が指摘されている（第４章第１節参照）ことから、時期には相違ないと考えられる。

【特徴・性格】２ａ区２面ＳＢ001と南の柱穴列が重複しているが、出土遺物の時期から考えると２

ａ区２面ＳＢ001よりも古い時期の建物と考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＫ170（土坑）

【位置】２ａ区２面中央、Ｆ22・Ｆ23グリッドに位置する。

【形状・規模】北東～南西を長軸とする平面形状が不整方形の土坑である。底面は平坦で、規模は長軸3.50m、短軸1.44m、深さ0.11mを測る。

【堆積土】上層に褐灰色粘質土(1)が堆積し、下層に黄灰色地山粘質土(2)がわずかに堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の破片が１点出土した。

【時期】出土した遺物から時期の特定が困難であるため、層位や周辺遺構などから、７世紀と考えられる。

【特徴・性格】掘りが浅く性格などは不明である。

【遺構名】２ａ区２面ＳＫ172（土坑）

【位置】２ａ区２面中央、Ｅ20グリッドに位置する。

【形状・規模】東西を長軸とする平面形状が長方形の土坑である。底面は平坦で、規模は長軸3.70m、短軸0.92m、深さ0.16mを測る。

【堆積土】上層に黄色粘質土(1)、中層に灰色粘質土(2)が堆積し、下層に黄灰色地山粘質土(3)が堆積する。

【出土遺物】須恵器・土師器が出土したがいずれも小片である。

【時期】出土した遺物から時期の特定が困難であるため、層位や周辺遺構などから、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】掘りが浅く性格などは不明である。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ166（溝）（２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027、Ｒｄ区ＳＤ162、Ｒｆ区２面ＳＤ045）

【位置】２ａ区２面西側北端～南側東端、Ｄ19・Ｅ20～Ｅ23・Ｆ23・Ｆ24グリッドに位置し、２ｂ区、Ｒｄ区、Ｒｆ区２面にまたがる。

【形状・規模】北西～南東方向に延びる２ｂ区ＳＤ005、Ｒｄ区ＳＤ162、Ｒｆ区２面ＳＤ045と一体となる長大な溝である。２ａ区２面部分の規模は長さ62.60m、幅1.60m、深さはｆ-ｆ’間で0.40mを測る。壁面はなだらかに傾斜する部分と段を有する部分があり、底面は平坦である。

【堆積土】ｆ-ｆ’間では上層に褐灰色粘質土(1・2)、中層に黄橙色粘質土(3)・褐灰色粘質土(4)・黄灰色地山粘質土(5)、下層に灰白色粘質土(6)が堆積する。

【出土遺物】底面から数地点に渡って完形に近い状態の須恵器、土師器、土錘、砥石が出土した。器種は、須恵器が坏類・高坏・提瓶・𤭯・甕・壺・長頸壺、土師器が甕である。（第443図930～956）

【時期】本溝と一体となる２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027とＲｄ区ＳＤ162から出土した土器から７世紀前半～後半と考えられる。

【特徴・性格】２ａ区・２ｂ区・Ｒｄ区・Ｒｆ区まで続く長大な溝で、本溝を境としてその西（内側）と東（外側）では集落の様相が大きく変化する。西（内側）では建物などの居住にかかわる遺構が多く確認されているが、東（外側）では居住にかかわる遺構が極端に少なくなっており、この溝が生活区域の境界であったと考えられる。本溝から出土した土器群と同様に２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027とＲｄ

区ＳＤ162からも土器群が出土しており、溝内に土器を意図的に埋納した可能性が考えられる。本溝から出土した遺物については、２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027とＲｄ区ＳＤ162から出土した遺物と合わせて、その特徴・性格を記したい（第５章第２節参照）。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ167（溝）
【位置】２ａ区２面中央北側～東側、Ｄ23・Ｅ23・Ｅ24グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東方向に延びる溝である。検出時に底面がわずかに残存するだけであった。規模は長さ19.50m、幅0.80m、深さ0.06mを測る。
【堆積土】明褐色粘質土(1)が堆積している。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】遺物が出土しなかったが、層位や周辺遺構などから６～７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】底面がわずかに残存するのみで、遺物の出土もないため、性格などは不明である。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ171（溝）
【位置】２ａ区２面中央南側、Ｆ20グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東に延びる溝である。底面のみが残存しており、底面には凹凸がある。規模は残存長6.74m、幅0.49m、深さ0.07mを測る。
【堆積土】褐灰色粘質土(1)が薄く堆積する。
【出土遺物】溝の南端から須恵器と土師器が出土した。（第406図957～961）
【時期】出土遺物から７世紀初頭～前半と考えられる。
【特徴・性格】遺物が南端から集中して出土しているのが特徴であるが、規模が小さく、堆積土も単層のみであるため性格などは不明である。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ174（溝）
【位置】２ａ区２面中央、Ｅ22グリッドに位置する。
【形状･規模】南北に延びる溝である。底面のみが残存し、底面には段がみられる。規模は残存長2.76m、幅0.57m、深さ0.10mを測る。
【堆積土】褐灰色粘質土(1)が堆積し、その下にわずかに黄橙色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】遺物が出土しなかったが、層位や周辺遺構などから６～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】本溝は２ａ区２面ＳＤ166と重複し、切り合い関係から２ａ区２面ＳＤ166よりも古い時期に相当する。底面のみが残存し、出土遺物もないため性格などは不明である。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ175（溝）
【位置】２ａ区２面中央東寄り、Ｆ23・Ｆ24グリッドに位置する。
【形状・規模】東西に延びる溝である。壁面は急に傾斜する箇所と緩やかに傾斜する箇所があり、底面は鋭角となる。残存長2.38m、幅0.16m、深さ0.02mを測る。
【堆積土】上層に褐灰色粘質土(1)が堆積し、下層に褐灰色粘質土を含む黄橙色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】遺物が出土しなかったが、層位や周辺遺構などから６～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】本溝は２ａ区２面ＳＤ166と重複し、切り合い関係から２ａ区２面ＳＤ166よりも古い時期に相当する。遺物の出土もなく性格などは不明である。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ178（溝）
【位置】２ａ区２面中央南寄り、Ｆ20グリッドに位置する。
【形状･規模】東西に延びる溝で、中間で途切れて２つの溝に分断される。底面のみが残存しており、底面は平坦である。規模は分断される２つの溝を合わせて全長6.08m、幅0.34m、深さ0.24mを測る。
【堆積土】黄灰色粘質土(1)が堆積する。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】遺物が出土しなかったが、層位や周辺遺構などから７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】本溝は中央部でいったん途切れており、本来は中央部で溝の底面が高くなっていたと考えられる。遺物の出土もないため、性格などは不明である。

（後藤泰）

（７）２ｂ区（第133～174図、写真図版143～174）

【遺構名】２ｂ区ＳＢ001（掘立柱建物）
【位置】２ｂ区の東寄り、Ｉ23グリッドに位置する。
【形状・規模】１間×１間の４本の柱で構成される方形の掘立柱建物である。建物の主軸方向をN-65°-Wとし、規模は桁行2.85m、梁行2.43m、柱間は桁行2.12m、梁行1.88mを測る。柱穴は全て円形で、直径は0.60m程度、深さは２ｂ区ＳＰ078で0.39mを測る。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色の砂質シルト、底面付近に灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】２ｂ区ＳＰ074から土師器の甕が出土した。（第407図967）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】４基の柱穴が確認されたのみで詳細は不明であるが、小規模な高床建物や平地式建物などの可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ002（掘立柱建物）
【位置】２ｂ区の東寄り、Ｉ23グリッドに位置する。
【形状・規模】１間×１間の４本の柱で構成される方形の掘立柱建物である。建物の主軸方向をN-21°-Eとし、規模は桁行2.68m、梁行2.55m、柱間は桁行2.20m、梁行2.20mを測る。柱穴は全て円形で、直径は0.45～0.70m、深さは２ｂ区ＳＰ066で0.60mを測る。
【堆積土】黒褐色のシルト質粘土が主に堆積する。
【出土遺物】２ｂ区ＳＰ060から須恵器の坏身が出土した。（第407図968）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】４基の柱穴が確認されたのみで詳細は不明であるが、小規模な高床建物や平地式建物などの可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ003（掘立柱建物）
【位置】２ｂ区の中央、Ｈ20グリッドに位置する。

【形状・規模】南北３間×東西２間の長方形の掘立柱建物で、北面側柱は２ｂ区ＳＤ013（中世の溝）に削平されて失われているが、総柱構造と考えられる。規模は桁行5.98m、梁行4.92m、柱間は桁行1.72m、梁行1.82mを測り、建物の主軸方向はN- 4°-Eで、僅かに東に振れる。柱穴は円形ないしは隅丸方形で、北西隅柱２ｂ区ＳＰ138は長軸1.17m、短軸0.80m、南面側柱２ｂ区ＳＰ129は直径0.74mを測る。柱穴の断面形状は箱形やすり鉢状で、柱の当たりが沈み込んでいるものがある。柱の当たりが柱穴の中心ではなく、建物の内側に寄る傾向がある。

【堆積土】南西隅柱２ｂ区ＳＰ111では上層の柱抜き取り後の埋土に灰黄褐色の砂質シルト(1)、柱痕の下層ににぶい黄褐色のシルト質粘土(2)が堆積し、掘方埋土には粘土と極細粒砂とシルトが薄く堆積している(3～6)。似た状況は南東隅柱２ｂ区ＳＰ106でも確認されており、版築技法を意識して掘方を埋めた可能性もあるが、埋土の締まりは強くなく、つき固められた様子も確認できなかった。

【出土遺物】須恵器坏蓋･無台坏身のほか、２ｂ区ＳＰ138と２ｂ区ＳＰ142から礎板が出土した。（第407図969～972）

【時期】出土遺物から８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造であり礎板を使用した柱穴も複数あることから、穀物などの重量物を載せる高床倉庫と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ004（掘立柱建物）

【位置】２ｂ区の中央西寄り、H17・H18グリッドに位置する。

【形状・規模】２間×２間の方形の総柱構造の掘立柱建物である。規模は桁行4.28m、梁行4.00m、柱間は桁行1.74m、梁行1.70mを測り、建物の主軸方向はN- 10°-Eで東に振れる。柱穴は平面形状が円形で、断面形状はすり鉢状の浅いものが多い。柱穴の直径は0.55～0.85m程度、深さは北面側柱２ｂ区ＳＰ267で0.32mを測る。

【堆積土】褐色の細粒砂や極細粒砂が主に堆積する。柱痕が確認されたものはなかった。

【出土遺物】２ｂ区ＳＰ278から須恵器坏蓋、滑石製の勾玉が出土した。（第407図973・974）

【時期】出土遺物から８世紀後半～末頃と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造であり高床倉庫の可能性があるが、建物と柱穴ともに規模が小さく、倉庫ではない高床建物の可能性も考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ005（掘立柱建物）

【位置】２ｂ区の西寄り、Ｉ16・Ｉ17グリッドに位置する。

【形状・規模】東西５間×南北２間の長方形の側柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN-84°-Wで西面がやや北へ振れる。規模は桁行8.92m、梁行5.16m、柱間は桁行1.60m、梁行2.12mを測る。柱穴は円形のものが多く、最も大きい南西隅柱２ｂ区ＳＰ437で直径0.96mを測る。断面形状は急峻に掘り込まれたものや緩やかに掘り込まれたものなど様々で、底面には柱の当たりが確認できるものが多い。

【堆積土】にぶい黄褐色や灰黄褐色の砂質土が主に堆積する。

【出土遺物】須恵器坏蓋、土師器甕が出土した。（第407図975・976）

【時期】出土遺物から７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

【特徴・性格】中規模の側柱建物である。廂をもたない切妻造と推定され、８世紀初頭以前の官衙的施設の中の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ006（掘立柱建物）

【位置】２ｂ区の西寄り、H16グリッドに位置する。

【形状・規模】東西３間×南北２間の長方形の総柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN-81°-Wで西面が北へ振れる。規模は桁行5.15m、梁行4.30m、柱間は桁行1.44m、梁行1.64mを測る。柱穴は隅丸方形のものが多く、規模は長軸0.80m程度で概ね揃っている。

【堆積土】柱穴の埋土は上層に褐色の極細粒砂、下層ににぶい黄褐色の極細粒砂が主に堆積する。

【出土遺物】須恵器の蓋が出土した。（第407図977）

【時期】出土遺物の時期は７世紀前半～中頃であるが、建物方向と周辺にある掘立柱建物の時期から７世紀末頃～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造であることから高床倉庫の可能性が高い。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ007（掘立柱建物）

【位置】２ｂ区の西端、H15・Ｉ15グリッドに位置する。

【形状・規模】東西２間×南北２間のやや南北に長い長方形の総柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN-５°-Eで、僅かに東へ振れる。規模は桁行4.85m、梁行4.30m、柱間は桁行2.04m、梁行1.71mを測る。柱穴は円形や隅丸方形を呈し、最も大きい南東隅柱２ｂ区ＳＰ491は長軸1.20m、最も小さい東面側柱２ｂ区ＳＰ478は直径0.60mと不揃いである。断面形状はすり鉢状のものが多く、柱痕や底面に柱の当たりが確認された。

【堆積土】灰黄褐色やにぶい黄褐色の細粒砂が全体に堆積し、上層には炭化物や焼土が含まれる。

【出土遺物】顕著な土器類は出土しなかったが、２ｂ区ＳＰ583から礎板が出土した。（第407図978）

【時期】建物方向と、２ｂ区ＳＢ011を切っていることから７世紀末頃～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造で礎板を使用している柱穴があることから、重量物を載せる高床倉庫の可能性が高い。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ008（掘立柱建物）

【位置】２ｂ区の西端、Ｉ15グリッドに位置する。

【形状・規模】建物中央を２ｂ区ＳＤ219によって削平されているが、東西３間×南北２間の長方形の総柱構造と推定される掘立柱建物である。規模は桁行6.70m、梁行4.80m、柱間は桁行1.86m、梁行1.68mを測り、建物の主軸方向はN-87°-Wで西面が僅かに北に振れる。柱穴の平面形状は円形や不整円形が多いが北東隅柱２ｂ区ＳＰ473は隅丸方形に近い形状である。柱穴の規模は均一ではなく、直径0.66～1.05mとばらつきがあり、底面には柱の当たりがある。使用されていた柱の太さは２ｂ区ＳＰ499出土の柱根から0.10～0.15m程度と推測される。

【堆積土】灰黄褐色や褐灰色の砂質土が主に堆積し、上層にはマンガン粒が含まれる。

【出土遺物】２ｂ区ＳＰ541から須恵器坏蓋が出土したほか、２ｂ区ＳＰ499から柱根が原位置を保った状態で出土した。（第407図979～981）

【時期】出土遺物と建物方向から８世紀と考えられる。

【特徴・性格】総柱構造の掘立柱建物であり、高床倉庫の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ009（掘立柱建物）

【位置】 ２ｂ区の西端、H14グリッドに位置する。

【形状・規模】 東西３間×南北２間の長方形の総柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向をN-86°-Wとし、西面が僅かに北に振れる。規模は桁行4.46m、梁行4.08m、柱間は桁行1.13m、梁行1.44mを測る。柱穴は不整形で大きさ深さともに不揃いで、北西隅柱２ｂ区ＳＰ659は長軸1.31m、深さ0.68mを測る。柱穴の断面形状は小さなものはすり鉢状で、大きなものは段差をつけて掘られている。使用されていた柱の太さは２ｂ区ＳＰ684から出土した柱根から直径0.20m程度と推定される。

【堆積土】 にぶい黄褐色や灰黄褐色の細粒砂が主に堆積し、上層には炭化物や焼土、下層には地山の粘土がブロック状に含まれる。

【出土遺物】 須恵器の無台坏身・有台坏身・高坏が出土したほか、２ｂ区ＳＰ684から柱根が出土した。（第408図982～985）

【時期】 出土遺物から７世紀後半～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】 総柱構造の掘立柱建物であり、小規模な高床倉庫の可能性が高い。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ010（掘立柱建物）

【位置】 ２ｂ区の西寄り、Ｉ15・Ｉ16グリッドに位置する。

【形状・規模】 東西５間×南北３間以上、南側は調査区外へと続き形状は不明であるが、北面のみもしくは南北の２面に廂をもつ長方形の掘立柱建物と推定した。建物の主軸方向をN-86°-Wとし、僅かに西面が北に振れる。規模は桁行10.45m、梁行6.30m以上、柱間は桁行1.90m、梁行1.60mを測る。柱穴の平面形状は円形や楕円形・隅丸方形と様々で、最も大きい２ｂ区ＳＰ432で長軸1.47mを測る。断面形状も一様ではないが、大きい柱穴は上部を緩やかに掘り込み、段差を設けてからほぼ垂直に掘り下げているものがみられる。また廂柱と推定される柱穴は、側柱の柱穴と比較して遜色のない規模である。

【堆積土】 総じて細粒砂や砂質シルトが主に堆積する。北面の廂柱２ｂ区ＳＰ436では柱抜き取り後の埋土に砂質シルトや地山の粘土、掘方埋土に砂質土が主に堆積する。

【出土遺物】 須恵器坏蓋・坏身が出土した。２ｂ区ＳＰ494出土の坏蓋は柱抜き取り後の埋土から出土しており、建物廃絶時に廃棄された可能性が高い。（第408図986～988）

【時期】 出土遺物から８世紀末頃～９世紀初頭に取り壊されたと考えられる。

【特徴・性格】 廂をもつ比較的規模の大きい掘立柱建物である。建物の時期は本遺跡が官衙的性格を有していた末期の頃と考えられ、倉庫群などを管理する中心的な建物の可能性がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ011（掘立柱建物）

【位置】 ２ｂ区の西寄り、H15・H16・Ｉ15・Ｉ16グリッドに位置する。

【形状・規模】 南北５間×東西３間の長方形の側柱構造と推定される掘立柱建物で、南西側の柱穴は確認できなかった。規模は桁行10.70m、梁行6.70m、柱間は桁行1.85m、梁行1.96mを測り、建物の主軸方向はN-32°-Wで西へ大きく振れる。北東隅柱２ｂ区ＳＰ610は２ｂ区ＳＢ006の柱穴に切られ、南東隅柱２ｂ区ＳＰ579は２ｂ区ＳＢ005の柱穴に切られている。柱穴は隅丸方形や円形・楕円形を呈し、北西隅柱２ｂ区ＳＰ470は長軸1.17m、短軸0.95mを測る。柱穴の深さは北面の柱穴は浅く、南東側の２ｂ区ＳＰ579・２ｂ区ＳＰ590・２ｂ区ＳＰ626では深く掘り込まれる傾向がある。

【堆積土】 柱穴の埋土にはにぶい黄褐色や灰黄褐色の細粒砂が主に堆積する。柱痕が確認できたものはなかった。

【出土遺物】 ２ｂ区ＳＰ471から須恵器の鉢が出土した。（第408図989）
【時期】 切り合い関係と建物方向から７世紀中頃～後半と考えられる。
【特徴・性格】 主軸が西に大きく傾き、奈良時代の建物に切られていることから、掘立柱建物の中では古い時期に相当すると考えられる。本遺跡が官衙的性格をもった初期、あるいはそれ以前の集落内の建物の可能性がある。前者であれば官舎の一つの可能性があり、後者の場合は竪穴建物群の中に単独で建てられたやや大型の掘立柱建物で、一般の住居ではなく集会所や祭祀を執り行う建物など、特殊な建物の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ012（掘立柱建物）
【位置】 ２ｂ区の中央、H19グリッドに位置する。
【形状・規模】 東西２間×南北２間の総柱構造と推定される方形の掘立柱建物であるが、南面の側柱は確認できなかった。規模は桁行4.24m、梁行4.10m、柱間は桁行1.65m、梁行1.65mを測り、建物の主軸方向はN- 8° -Eでやや東へ振れる。柱穴は円形や楕円形で直径は0.60～1.00m、深さは２ｂ区ＳＰ235で0.40mを測る。
【堆積土】 ２ｂ区ＳＰ234では柱痕に暗褐色のシルト質極細粒砂、掘方埋土上層に褐色の極細粒砂、下層に砂を含むにぶい黄褐色のシルトや粘土が堆積する。
【出土遺物】 須恵器の坏蓋・坏身が出土したが、古い時期のものが混入した可能性が高い。（第408図990・991）
【時期】 建物方向から７世紀後半～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】 総柱構造の掘立柱建物であり高床倉庫の可能性があるが、柱穴が小規模で浅いものが多いことから倉庫ではない小規模な床束建物の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ013（掘立柱建物）
【位置】 ２ｂ区の西端、Ｉ13・Ｉ14グリッドに位置する。
【形状・規模】 南北２間×東西１間の方形の側柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN- 2° -Eでほぼ方位に沿い、規模は桁行4.30m、梁行3.90m、柱間は桁行1.70m、梁行3.40mを測る。柱穴の平面形状は南西隅柱２ｂ区ＳＰ609が隅丸方形に近いが、他は円形や楕円形を呈し、断面形状はすり鉢状や段差をつけて掘られている。柱穴の規模は南西側柱２ｂ区ＳＰ609で長軸0.84m、深さ0.50mを測る。
【堆積土】 灰黄褐色や褐灰色の細粒砂が主に堆積する。
【出土遺物】 ２ｂ区ＳＰ558から製塩土器、２ｂ区ＳＰ558と２ｂ区ＳＰ559から礎板と考えられる木材が出土した。（第408図992）
【時期】 出土遺物から８世紀と考えられる。
【特徴・性格】 小規模な側柱建物であるが、柱穴は深く礎板も用いていることから小さな高床倉庫や物見櫓のような建物が想像される。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ014（掘立柱建物）
【位置】 ２ｂ区の中央、Ｉ20グリッドに位置する。
【形状・規模】 東西２間×南北２間の方形の側柱構造と推定される掘立柱建物である。南西隅柱と西面側柱は確認できなかった。規模は桁行4.30m、梁行4.02m、柱間は桁行1.78m、梁行1.68mを測り、

建物の主軸方向はN- 6°-Eで僅かに東へ振れる。柱穴の形状は円形や隅丸方形を呈しており、南東隅柱２ｂ区ＳＰ134は長軸1.07m、短軸0.76mを測る。平面規模はどの柱穴も大差ないが、深さはばらつきがあり、最も深い北面側柱２ｂ区ＳＰ141で0.58mを測る。

【堆積土】北面側柱２ｂ区ＳＰ141で柱痕の上層に炭化物や焼土を含む砂質シルト、下層に褐色の砂質シルト、掘方の上層に褐色やにぶい黄褐色の極細粒砂、下層に灰黄褐色の細粒砂が堆積する。多くの柱穴の柱痕の上層に炭や焼土が多く含まれた。

【出土遺物】須恵器の坏身・蓋が出土した。（第408図993・994）

【時期】出土遺物と建物方向から７世紀後半～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】小規模な掘立柱建物であるが、柱穴規模が大きく深く掘り込まれていることから高床建物の可能性が高い。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ112（ＳＬ140）（竪穴建物）

【位置】２ｂ区の中央東寄り、H22・Ｉ22グリッドに位置する。

【形状・規模】２ｂ区ＳＤ013によって大きく削平されているが、隅丸方形と推定される竪穴建物である。重複する２ｂ区ＳＩ170を切っている。規模は長辺5.88m、短辺5.28m、掘方底面までの深さ0.30mを測り、建物の主軸方向はN- 39°-Wで西へ大きく振れる。壁際にはほぼ全周にわたって幅0.30m程度の壁際溝（壁溝）が巡らされており、掘方底面は平坦ではなく、中央をドーナツ状に掘り残す形状である。火処は北西の壁面近くに炭や焼土の堆積と、僅かに粘土塊が確認されたことから２ｂ区ＳＬ140（カマド）の存在を推定した。主柱穴は２ｂ区ＳＰ117・２ｂ区ＳＰ157・２ｂ区ＳＰ159・２ｂ区ＳＰ182の４基が該当すると考えられ、柱間は桁行3.17m、梁行2.85mを測る。また南東壁面付近の２ｂ区ＳＰ121と２ｂ区ＳＰ155は柱間が0.69mと狭いが、出入口の柱穴の可能性がある。柱穴は全て円形で、断面形状は薬研状に掘り込まれている。使用されていた柱の太さは柱痕の大きさから0.10m程度と考えられる。

【堆積土】掘方埋土の上層にはにぶい黄褐色の砂質シルト、壁際溝（壁溝）にはにぶい黄褐色の粘土質シルト、基底部には暗褐色の粘土質シルトが堆積する。柱穴の埋土は２ｂ区ＳＰ117で柱痕に灰黄褐色の粘土、掘方ににぶい黄褐色の粘土質シルトが堆積する。

【出土遺物】カマドから土師器の鍋が出土したほか、建物埋土中から須恵器の坏蓋・坏身、砥石が出土した。（第409図995～999）

【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】小規模な竪穴建物で、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ170（ＳＬ183）（竪穴建物）

【位置】２ｂ区の中央東寄り、Ｉ22グリッドに位置する。

【形状・規模】２ｂ区ＳＩ112に切られる隅丸方形の竪穴建物で、規模は長辺5.04m、短辺4.62mを測り、建物の主軸方向はN- 25°-Wで西に振れる。やや不明瞭ではあるが、壁際溝（壁溝）が全周を巡っていたと考えられる。火処は２ｂ区ＳＤ083に大きく削平されているが、北西側で炭や焼土の堆積と粘土塊が僅かに確認されたことから２ｂ区ＳＬ183（カマド）が存在したと考えられる。主柱穴は２ｂ区ＳＰ167・２ｂ区ＳＰ168・２ｂ区ＳＰ185・２ｂ区ＳＰ195の４基が該当すると考えられ、柱間は桁行2.25m、梁行2.19mを測る。柱穴は直径0.30～0.50m程度の円形で、深さ0.45m程度を測る。

【堆積土】壁際溝（壁溝）ににぶい黄褐色の極細粒砂、掘方基底部ににぶい黄褐色の砂質シルトが堆

積する。柱穴の埋土は２ｂ区ＳＰ185では柱痕に暗褐色の粘土質シルト、掘方ににぶい黄褐色の砂質シルトや粘土が堆積する。

【出土遺物】建物埋土から須恵器坏蓋、土師器甕などが出土した。（第409図1000・1001）

【時期】出土遺物から６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】小規模な竪穴建物で、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ174（竪穴建物）

【位置】２ｂ区の中央東側、Ｉ22・Ｉ23グリッドに位置し、南半分が調査区外（南）へと延びる。

【形状・規模】隅丸方形と推定される竪穴建物で、長辺5.46m、短辺2.76m以上を測り、建物の主軸方向はＮ - 1° -Wでほぼ方位に沿う。掘方底面は概ね平坦で、壁際溝（壁溝）が巡る。検出時に炭層の広がりが確認され、検出面がほぼ床面に相当すると思われる。火処は北側で炭や焼土とともにカマドを構築していた粘土の基底部が残存しており、カマドは建物の北側へ突出していた可能性がある。カマド東側の２ｂ区ＳＫ187は貯蔵穴と考えられ、炭が貯蔵穴内部に流れ込む状況が確認された。主柱穴は特定できないが、２ｂ区ＳＰ213や２ｂ区ＳＰ231が該当する可能性がある。

【堆積土】ｂ-ｂ’間で掘方埋土の上層に褐色の細～中粒砂(1)が堆積し、その下層の壁際溝（壁溝）ににぶい黄褐色の粘土質シルト(2)、基底部ににぶい黄褐色の細粒砂や暗褐色の粘土質シルト(3・4)が堆積する。

【出土遺物】建物埋土から須恵器坏蓋が出土したほか、図化できなかったが２ｂ区ＳＫ187（推定貯蔵穴）から細かいハケが施された土師器甕の破片が出土した。（第409図1002）

【時期】出土遺物から６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】一般的な住居と考えられる。貯蔵穴内に炭の流入した層が厚くあり、ある程度の長期間にわたって人が生活していたと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ184（ＳＬ192）（竪穴建物）

【位置】２ｂ区の中央東寄り、Ｈ21・Ｉ21グリッドに位置する。

【形状・規模】隅丸方形と推定される竪穴建物である。２ｂ区ＳＤ013・２ｂ区ＳＤ083・２ｂ区ＳＤ092(後世の溝)によって削平されており、正確な規模は不明である。長辺6.18m、短辺5.40m以上を測り、建物の主軸方向はＮ- 15° -Wで西に振れる。掘方は大半が削平され、検出面でカマド周辺の炭層が露出していた。掘方底面は平坦ではなく、壁に沿って幅の広い溝状の掘り込みがあり、竪穴中央が高く掘り残される形状である。また北側で幅0.35m程度の壁際溝（壁溝）が確認された。火処は北側に２ｂ区ＳＬ192（カマド）を有するが、カマドは原形を保っておらず、炭や焼土の堆積に混じって粘土塊や遺物が散乱した状態であった。主柱穴は２ｂ区ＳＰ196・２ｂ区ＳＰ203・２ｂ区ＳＰ204・２ｂ区ＳＰ210の４基が該当すると考えられ、柱間は桁行・梁行ともに3.00m程度である。柱穴の平面形状は円形ないしは不整円形で、２ｂ区ＳＰ196では直径0.52m、深さ0.50mを測る。

【堆積土】掘方基底部には地山の粘土を含むにぶい黄褐色の細粒砂が堆積する。北西の主柱穴２ｂ区ＳＰ204は上層ににぶい黄褐色の細～中粒砂(1)、柱痕に暗褐色の粘土(2)、掘方埋土に灰黄褐色の粘土(3)が堆積する。

【出土遺物】カマドから須恵器坏身と土師器甕が出土した。カマドを構築していたと考えられる粘土の下や粘土に混じって土器が出土している。カマドに土器が付設されたままないしは土器を廃棄した後にカマドが崩壊または破壊されたと考えられる。（第409図1003・1004）

【時期】出土遺物から６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】カマドを有する中規模な竪穴建物で、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ257（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の中央、Ｉ18・Ｉ19グリッドに位置し、南端が調査区の南壁に接する。
【形状・規模】隅丸方形の竪穴建物で、長辺8.32m、短辺7.92mを測る。やや大型で、建物の主軸方向はN- 37° -Wで西に大きく振れる。床面は削平されて失われており、ドーナツ状に深く掘られた基底部のみが確認された。火処は竪穴中央付近に２ｂ区ＳＬ350（カマド）の痕跡が確認されたが、位置から考えて本建物に付設されたものとは考えられず、後世のものないしは古いカマドが削平されずに残っていた可能性も考えられる。主柱穴は２ｂ区ＳＰ269・２ｂ区ＳＰ280・２ｂ区ＳＰ300・２ｂ区ＳＰ283ないしは２ｂ区ＳＰ291の内４基が該当すると考えられる。
【堆積土】基底部埋土や柱穴ともに褐色や暗褐色の砂質土が主に堆積する。
【出土遺物】東隅付近の基底部の埋土から須恵器の片口鉢、土師器甕が出土した。（第409図1005～1007）
【時期】出土遺物と遺構の切り合い関係から７世紀中頃～末頃と考えられる。
【特徴・性格】やや規模の大きい竪穴建物であるが、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ258（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の中央西寄りの北壁際、Ｇ18・Ｇ19・Ｈ18・Ｈ19グリッドに位置する。
【形状・規模】北側の掘方が削平されて確認できなかったが、隅丸方形と推定される竪穴建物で、長辺6.72m以上、短辺6.18mを測る。建物の主軸方向はN- 42° -Eと推定され、東へ大きく振れる。既に削平され床面は失われており、ドーナツ状に深く掘られた基底部のみが確認された。火処は不明で、主柱穴は２ｂ区ＳＰ263・２ｂ区ＳＰ264・２ｂ区ＳＰ265・Ｒｄ区ＳＰ116ないしはＲｄ区ＳＰ117の内４基が該当する可能性が高い。柱穴は全て円形で直径は0.65m程度、深さは東隅柱２ｂ区ＳＰ265で0.56mを測る。
【堆積土】掘方埋土には褐色の細～中粒砂が堆積する。主柱穴の可能性がある２ｂ区ＳＰ265は上層ににぶい黄褐色の細～中粒砂､下層に地山の粘土をブロック状に含む暗褐色の細～中粒砂が堆積する。
【出土遺物】掘方基底部付近から土師器甕が出土した。（第410図1008）
【時期】出土遺物などから７世紀前半以前と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明であるが、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ289（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の中央、Ｉ19グリッドに位置する。
【形状・規模】遺構検出時に壁際溝（壁溝）と考えられる溝が確認されたことから隅丸方形の竪穴建物と推定した。西側が削平されており正確な規模は不明である。長辺6.90m、短辺6.00m以上を測り、建物の主軸方向はN- 27° -Eで東に振れる。火処は北東の壁際に焼土を含む堆積と僅かに粘土塊が確認されたことからカマドが存在したと考えられる。主柱穴は２ｂ区ＳＰ270・２ｂ区ＳＰ311・２ｂ区ＳＰ315・２ｂ区ＳＰ327の４基が該当すると考えられ、柱間は桁行・梁行ともに3.70mである。柱穴は円形で、南東の２ｂ区ＳＰ311は直径0.63m、断面形状は薬研状で深さ0.62mを測る。
【堆積土】壁際溝（壁溝）には褐色のシルト質の極細粒砂、主柱穴２ｂ区ＳＰ311は上層に褐色の極

細粒砂、下層にシルトや砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】壁際溝（壁溝）から須恵器坏蓋、砥石が出土した。（第410図1009～1011）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】カマドを有する中規模の竪穴建物で、一般的な住居の一つと考えられる。周辺の多くの竪穴建物と違い北東壁面にカマドがあり、基底部の幅広の掘り込みは確認されなかった。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ302（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の中央西寄り、Ｉ17・Ｉ18グリッドに位置する。
【形状・規模】北半分が削平されているが隅丸方形と推定される竪穴建物である。東西5.46m、南北3.36m以上を測り、建物の主軸方向はN- 17° -Wと推定される。底面は平坦ではなく壁に沿って幅広の掘り込みがある。火処は不明で、主柱穴は２ｂ区ＳＰ346や２ｂ区ＳＰ347、２ｂ区ＳＩ312の下層で確認された２ｂ区ＳＰ335、２ｂ区ＳＤ219の下層で確認された２ｂ区ＳＰ337の４基が該当すると考えられ、柱間は桁行・梁行ともに2.80mを測る。
【堆積土】掘方埋土は上層に褐色の細～極細粒砂、下層ににぶい黄褐色の細粒砂、柱穴の埋土には暗褐色の細～中粒砂が堆積する。
【出土遺物】掘方埋土から須恵器坏身が出土した。（第410図1002）
【時期】出土遺物と遺構の切り合い関係から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明の小規模な竪穴建物である。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ309（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の中央、H18・H19・Ｉ18・Ｉ19グリッドに位置する。
【形状･規模】平面不整方形の竪穴建物で、長辺6.30m、短辺6.00mを測り、建物の主軸方向はN- 19° -Wと推定される。掘方底面は中央をドーナツ状に掘り残す形状で、２ｂ区ＳＩ257に切られ２ｂ区ＳＩ362を切っている。床面は削平されており、火処は確認されなかった。主柱穴は竪穴内にピットが多数あり特定できないが、２ｂ区ＳＰ322などが該当すると考えられ、４本の主柱穴で建てられていたと推定される。
【堆積土】掘方埋土と柱穴ともににぶい黄褐色の細粒砂や極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】竪穴の埋土から須恵器坏身・高坏、土師器甕などが出土した。（第410図1013～1015）
【時期】出土遺物と遺構の切り合い関係から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明であるが、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ314（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の中央西寄り、H18・Ｉ18グリッドに位置する。
【形状・規模】掘方上面は削平されており、基底部の掘り込みの一部のみが確認された。長辺5.48m、短辺5.00mを測り、建物の主軸方向はN- 33° -Wと推定される。火処や関連する柱穴は不明である。
【堆積土】褐色のシルト質の細粒砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器坏蓋が出土した。（第410図1016）
【時期】出土遺物から６世紀中頃～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明の竪穴建物である。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ362（ＳＬ286）（竪穴建物）

【位置】２ｂ区の中央、H18・H19グリッドに位置する。

【形状・規模】隅丸方形と推定される竪穴建物である。南側は２ｂ区ＳＩ309、東側は２ｂ区ＳＩ363に切られており残存状況はよくないが、規模は東西7.92m、南北7.32mを測り、建物の主軸方向はN-１°-Wと推定されほぼ方位に沿う。火処は北側の壁際に炭と焼土を含む層と粘土塊が僅かに確認されたことから、２ｂ区ＳＬ286（カマド）と推定した。竪穴建物の範囲内からはピットが多数確認されたが、本建物に伴う柱穴は不明である。

【堆積土】掘方埋土にはにぶい黄褐色の砂質土が主に堆積する。

【出土遺物】須恵器坏身、土師器甕が出土したほか、カマドから椀形滓が出土した。（第410図1017～1020）

【時期】出土遺物と遺構の切り合い関係から７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】残存状況は良くないが、カマドを有するやや大きい竪穴建物である。一般的な住居の一つと考えられ、カマドから椀形滓が出土していることからカマドを利用して小鍛冶が行われていた可能性が高い。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ363（ＳＬ288）（竪穴建物）

【位置】２ｂ区の中央、H18・H19グリッドに位置する。

【形状・規模】南側と東側の掘方は確認できなかったが、隅丸方形と推定される竪穴建物である。南北6.90m、東西5.40m以上を測り、建物の主軸方向はN-１°-Wと推定される。掘方の大部分が失われているが、西側のみ輪郭が確認できた。火処は北側の壁際に２ｂ区ＳＬ288（カマド）があり、カマド両袖の基底部の粘土塊が残存していた。カマドの東側に土器が収められた２ｂ区ＳＰ364があり、本建物に伴う貯蔵穴の可能性がある。主柱穴は特定できないが、２ｂ区ＳＰ284や２ｂ区ＳＰ390が該当する可能性がある。

【堆積土】掘方基底部埋土には褐色の細粒砂が堆積する。カマドは灰黄褐色の粘土塊に囲まれた範囲の上層に焼土塊を多く含んだシルト質粘土があり、その下に炭層が厚めに堆積する。他の竪穴建物のカマドではカマドの内外に粘土塊が散乱していることが多かったが、そのような状況は見られなかった。主柱穴の可能性がある２ｂ区ＳＰ390は上層に褐色の極細粒砂、下層ににぶい黄褐色の細粒砂や極細粒砂が堆積する。貯蔵穴の可能性がある２ｂ区ＳＰ364はにぶい黄褐色のシルトが堆積し、下層には地山の粘土が混じる。

【出土遺物】カマドの炭層上から須恵器坏身、土師器甕が割れて散らばって出土したほか、貯蔵穴の可能性がある２ｂ区ＳＰ364から須恵器坏身・甕の破片が出土した。（第410図1021・1022、第411図1023・1024）

【時期】出土遺物と遺構の切り合い関係から７世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】カマドをもつ中規模の竪穴建物で、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ372（竪穴建物）

【位置】２ｂ区の西側、G17・H17グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形の竪穴建物で、北隅が削平されている。長辺9.00m、短辺6.90mを測る。床面は残存せず、掘方の基底部が確認されたのみである。建物の主軸方向はN-36°-Eと推定され、東へ大きく振れる。主柱穴は２ｂ区ＳＰ378や２ｂ区ＳＰ387が該当する可能性がある。

【堆積土】基底部の埋土にはにぶい黄褐色や褐色の砂質土が堆積する。２ｂ区ＳＰ378は柱痕に暗褐色の細粒砂、掘方埋土上層に褐色の細～極細粒砂、下層に暗褐色のシルト質の極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】掘方埋土から須恵器坏蓋・坏身、土師器鍋の把手、砥石などが出土した。（第411図1025～1029）
【時期】出土遺物から７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明のやや大型の竪穴建物である。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ416（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の西側、Ｉ16・Ｉ17グリッドに位置する。
【形状・規模】隅丸方形の竪穴建物で、長辺7.26m、短辺6.42mを測り、建物の主軸方向はN- 15° -Wでやや西に振れる。掘方底面は平坦ではなく中央が高く掘り残される形状である。火処は北寄りの位置に２ｂ区ＳＬ338（カマド）が存在したようであるが、炭や焼土の堆積と、粘土塊や遺物が散乱した状態で原形は留めていない。主柱穴は竪穴範囲内に時期不明のピットが多くあり特定できなかった。
【堆積土】掘方埋土にはにぶい黄褐色や褐色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】カマドとその周辺から須恵器の高坏、土師器の甕、石製の紡錘車、刀子の可能性がある鉄製品が出土したほか、掘方埋土から須恵器坏身・長頸瓶、土師器の甕などが出土した。（第411図1030～1033、第412図1034～1037）
【時期】出土遺物から７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】カマドを有する中規模の竪穴建物で、一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ417（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の西側、Ｇ16・Ｇ17・Ｈ16・Ｈ17グリッドに位置する。
【形状･規模】隅丸方形と推定される竪穴建物で、東側が２ｂ区ＳＩ372に切られている。長辺7.14m、短辺6.24mを測る。掘方の大半が削平されており、1.50m程度の幅で溝状に掘られた基底部のみが確認された。建物の主軸方向はN- 45° -Wで西に大きく振れる。火処は不明で、ピットはいくつか確認されたが本建物に伴う柱穴は不明である。
【堆積土】掘方埋土には褐色の細粒砂が主に堆積する。
【出土遺物】基底部の埋土から須恵器の坏蓋、瑪瑙製の勾玉が出土した。ともに建築時に混入したものと考えられる。（第412図1038・1039）
【時期】出土遺物と遺構の切り合い関係から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明の竪穴建物である。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ577（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の西側、Ｇ15・Ｈ15・Ｈ16グリッドに位置する。
【形状・規模】隅丸方形と推定される竪穴建物で、長辺8.24m、短辺6.96mを測り、建物の主軸方向はN- 40° -Wで西へ大きく振れる。掘方上部は削平されほとんど失われており、検出面で地山が一部露出していた。底面の起伏は比較的小さいが、掘方外周に沿ってやや深い掘り込みがあり、竪穴中央が掘り残される形状である。火処は不明であるが２ｂ区ＳＫ660の埋土には炭や焼土が含まれており、カマドの掘方の可能性がある。主柱穴は２ｂ区ＳＰ487・２ｂ区ＳＰ593・２ｂ区ＳＰ617・２ｂ区ＳＰ627が該当する可能性が高く、柱間は桁行・梁行ともに3.60m程度である。

【堆積土】掘方埋土や柱穴ともに褐色やにぶい黄褐色の細粒砂や極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】掘方埋土から須恵器の坏蓋・坏身が出土した。（第412図1040・1041）
【時期】出土遺物から６世紀末頃～７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明のやや規模の大きい竪穴建物である。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ622（ＳＬ399）（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の西側、H17グリッドに位置する。
【形状・規模】平面不整方形のやや大型の竪穴建物である。南側が２ｂ区ＳＤ219や２ｂ区ＳＩ416に切られるが、規模は長辺9.00m、短辺8.40m程度と推定され、建物の主軸方向はN- 20° -Wで西に振れる。床面は確認できなかったが、掘方底面までの深さ0.38mを測る。掘方底面は平坦ではなく、外周に沿って1.50～2.50m程度の幅で深く掘り下げられていた状況が北西側で確認できた。火処は北西側に２ｂ区ＳＬ399（カマド）があり、炭化物や焼土とともに、粘土塊や遺物が散乱している状態であった。掘方も確認できなかった。底面には時期不明のピットが多数あり、本建物に関連する柱穴は不明であるが、位置と形状から２ｂ区ＳＰ304や２ｂ区ＳＰ591が主柱穴にあたる可能性がある。
【堆積土】掘方埋土や柱穴はともに褐色やにぶい黄褐色の細粒砂が主に堆積する。
【出土遺物】カマドから須恵器の高坏、土師器の甕、掘方埋土から須恵器の坏身などが出土した。（第412図1042～1046）
【時期】出土遺物と遺構の切り合い関係から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】やや大型の竪穴建物であるが、周辺の竪穴建物と同様にカマドを有する一般的な住居の一つと考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ696（竪穴建物）
【位置】２ｂ区の西端、Ｉ14グリッドに位置する。南端が調査区外に延びる。
【形状・規模】平面隅丸方形の竪穴建物と推定され、規模は長辺5.28m、短辺4.52mを測る。掘方の大半が削平されており、幅1.50m程度の溝状に深く掘られた基底部のみが確認された。
【堆積土】掘方埋土には褐色のシルト質の極細粒砂やにぶい黄褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋、砥石が出土した。（第413図1047・1048）
【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明の小規模な竪穴建物である。竪穴内に柱穴をもたない壁立式の建物の可能性がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ017（土坑）
【位置】２ｂ区の東側、H25グリッドに位置する。
【形状･規模】隅丸方形の土坑である。長軸2.32m、短軸1.44m、深さ0.52mを測り、底面は平坦である。
【堆積土】地山の粘土をブロック状に含むにぶい黄褐色のシルト質粘土が全体に堆積する。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、周辺地区にある同様の土坑と同じく13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明であるが、掘ってまもなく一括して埋め戻したような状況から、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ027（２ｂ区ＳＤ005内土坑）（２ａ区２面ＳＤ166、Ｒｄ区ＳＤ162、Ｒｆ区２面ＳＤ045）

【位置】２ｂ区の東端、H26グリッドの２ｂ区ＳＤ005内に位置する。

【形状・規模】２ｂ区ＳＤ005が直角に折れ曲がる位置に多量の土器を収めた土坑である。２ｂ区ＳＤ005（溝）の上面を検出した際には確認できず、掘り下げ作業時に土器が集中している状況が確認されたことから土坑と推定して調査を行った。形状は不明瞭であるが長軸2.88m、短軸1.76mを測る範囲である。

【堆積土】遺物の周辺に灰黄褐色のシルト質の粘土(1)、その下層に黒褐色の粘土(2)が堆積する。なお(2)層は２ｂ区ＳＤ005の下層の堆積の可能性があり、また本遺構の後に２ｂ区ＳＤ005の上層埋土である黒褐色の粘土が堆積したと考えられる。

【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・甕、土師器の甕・鍋といった生活什器といえる土器類がまとまって出土した。甕は中央にまとめて並べたような状態であり、廃棄したのではなく置いて納めるような意識があったと考えられる。（第413図1049～1057、第414図1058～1063）

【時期】出土遺物から７世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】集落を取り囲むと考えられる２ｂ区ＳＤ005（２ａ区２面ＳＤ166・Ｒｄ区ＳＤ162・Ｒｆ区２面ＳＤ045）が、直角に折れ曲がる特徴のある場所に位置し、特殊な遺物こそはないが何らかの祭祀的な意図をもって埋納された可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ084（土坑）

【位置】２ｂ区の中央東寄り、H22グリッドに位置する。

【形状・規模】不整円形の土坑で、南西側が２ｂ区ＳＤ155に切られる。長軸2.52m、短軸2.16m以上、深さ0.46mを測り、底面には凹凸がありテラス状の段差を有する。

【堆積土】にぶい黄褐色や灰黄褐色のシルトや粘土が堆積する。

【出土遺物】須恵器坏身、土師器甕が出土した。（第415図1064・1065）

【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ179（土坑）

【位置】２ｂ区の中央、Ｉ20グリッドの２ｂ区ＳＸ163の上面に位置する。

【形状・規模】不整形の土坑で、規模は長軸3.28m、短軸1.88m、深さ0.44mを測る。

【堆積土】にぶい黄褐色の極細粒砂が主に堆積し、炭化物や焼土を含む層が多くみられる。

【出土遺物】須恵器の坏身・短頸壺、土師器の甕などが主に上層部分からまとまって出土した。（第415図1066～1069）

【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。

【特徴・性格】遺物が多く出土した土坑である。２ｂ区ＳＸ163を少し掘り下げたところで確認されたことから、２ｂ区ＳＸ163が完全に埋没する前に掘削されたようである。土器の廃棄土坑と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ256（土坑）

【位置】２ｂ区の中央西寄り、H18グリッドに位置する。
【形状･規模】隅丸方形の土坑で､規模は長軸1.88m､短軸1.56m､深さ0.12mを測り､底面は平坦である。
【堆積土】上層に灰黄褐色の砂質シルト、下層に褐色の細粒砂が主に堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋、鉄滓が出土した。（第415図1070・1071）
【時期】出土遺物から８世紀後半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ259（土坑）
【位置】２ｂ区の中央西寄り、Ｉ17・Ｉ18グリッドに位置する。
【形状・規模】不整円形の土坑で、南側が２ｂ区ＳＤ219に切られる。東西1.76m、南北1.56m以上、深さ0.52mを測り、底面には凹凸がある。
【堆積土】にぶい黄褐色や褐色の砂質土が堆積し、上層埋土には炭化物や焼土が含まれる。
【出土遺物】須恵器坏身、土師器甕、陶錘などが出土した。（第415図1072～1078）
【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ301（土坑）
【位置】２ｂ区の中央西寄り、Ｉ18グリッドに位置する。
【形状・規模】不整形の土坑で、長軸1.11m、短軸0.83m、深さ0.26mを測る。
【堆積土】褐色のシルト質細粒砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器坏身の完形品・長頸瓶の体部、坏身に重なった状態の土師器鍋の口縁部が出土した。（第416図1079～1081）
【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】土器を意図的に納めたと考えられる土坑で、貯蔵穴の可能性もある。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ426（土坑）
【位置】２ｂ区の西側、Ｉ17グリッドに位置する。
【形状・規模】隅丸方形の土坑で、長軸1.32m、短軸0.96m、深さ0.42mを測る。断面形状は箱形に近いが僅かに東側が低い。
【堆積土】上層に灰黄褐色のシルト質細粒砂、下層に砂質シルトやシルト質の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の短頸壺、土師器甕の口縁部のほか、上層からミニチュア土器が出土した。土師器甕は古墳時代のものであり混入したと考えられる。（第416図1082～1084）
【時期】出土した須恵器から８世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。

（小島）

【遺構名】２ｂ区ＳＤ005（溝）（２ａ区２面ＳＤ166、Ｒｄ区ＳＤ162、Ｒｆ区２面ＳＤ045）
【位置】２ｂ区の東端、G26・H26・H27グリッドに位置する。
【形状・規模】北から続きH26グリッド内で直角に曲がり東へ延びる溝で、２ａ区２面ＳＤ166・Ｒｄ区ＳＤ162・Ｒｆ区２面ＳＤ045と一体である。２ｂ区内で長さ14.80m、幅3.70m、深さ0.45mを測るが、東西方向に掘られた場所は一段浅くなっており、深さ0.25m程度となっている。壁面の傾斜は

緩やかで、底面は平坦である。

【堆積土】上層は黒褐色の粘土、下層に灰黄褐色の粘土が堆積する。

【出土遺物】須恵器と土師器片が出土したが図化できるものはなかった。

【時期】同一溝の他地区からの出土遺物から７世紀前半～後半と考えられる。

【特徴・性格】２ａ区・２ｂ区・Ｒｄ区・Ｒｅ区・Ｒｆ区にまたがる長大な溝で、本溝を境としてその西（内側）と東（外側）では集落の様相が大きく変化する。東（外側）では建物などの居住にかかわる遺構が極端に少なくなっており、この溝が生活区域の境界であったと考えられる（本書第５章第２節参照）。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ010（溝）（１ａ区ＳＤ019、１ｂ区ＳＤ117、１ｅ区１面ＳＤ006、２ａ区１面ＳＤ001、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、Ｒｂ区ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024）

【位置】２ｂ区の東側、Ｇ20・Ｇ21・Ｈ21～Ｈ26・Ｉ25～Ｉ27グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】東西に延び、１ａ区ＳＤ019・１ｂ区ＳＤ117・１ｅ区１面ＳＤ006・２ａ区１面ＳＤ001・２ｅ区１面ＳＤ028・２ｅ区１面ＳＤ030・Ｒｂ区ＳＤ001・Ｒｄ区ＳＤ140・Ｒｆ区１面ＳＤ024と一体の溝である。２ｂ区内で長さ65.10m、幅2.14m、深さ0.50mを測る。壁面は傾斜角が45°程度で底面は平坦である。

【堆積土】上層は鉄分を含む灰黄褐色のシルト質粘土､下層は粘性のある灰黄褐色の粘土が堆積する。

【出土遺物】山茶碗の碗・小皿などが出土した。（第416図1085～1088）

【時期】他地区の同一溝や出土遺物などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】２ｂ区ＳＤ013とともに用水路と道路側溝の役割を兼ねていた可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ013（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ003、２ａ区１面ＳＤ002、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022）

【位置】２ｂ区の東側、Ｇ20・Ｇ21・Ｈ21～Ｈ26・Ｉ25～Ｉ27グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】東西に延び、１ａ区ＳＤ018・１ｂ区ＳＤ087・１ｅ区１面ＳＤ003・２ａ区１面ＳＤ002・２ｅ区１面ＳＤ050・Ｒｂ区ＳＤ002・Ｒｄ区ＳＤ136・Ｒｆ区１面ＳＤ022と一体の溝である。２ｂ区内で長さ73.70m、幅1.77m、深さ0.44mを測る。壁面はやや傾斜が急で底面は概ね平坦である。

【堆積土】上層に細粒砂を多く含むにぶい黄褐色のシルトが厚く堆積し、下層に灰黄褐色のシルトや細粒砂、最下層に地山の粘土が混ざり合った層が堆積する。

【出土遺物】山茶碗の碗などが出土した。（第417図1089～1091）

【時期】他地区の同一溝や出土遺物などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】２ｂ区ＳＤ010とともに用水路と道路側溝の役割を兼ねていた可能性が考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ054（溝）

【位置】２ｂ区の東側、Ｈ23グリッドに位置する。

【形状･規模】南東～北西に延び、北は２ｂ区ＳＤ006、南は２ｂ区ＳＤ010によって削平されている。残存長8.40m、幅1.80m、深さ0.20mを測る。壁面～底面は緩やかな椀状になっている。

【堆積土】上層に灰黄褐色の粘土質シルト(1)、下層に地山の粘土をブロック状に含む灰黄褐色の粘

土質シルト⑵が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身・高坏・壺・提瓶などが出土した。（第417図1092～1096）
【時期】出土遺物から６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】集落の縁部に位置しており、遺物の量が多い溝である。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ055（溝）
【位置】２ｂ区の東側、Ｇ21・Ｈ21・Ｈ22グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東に延び、長さ14.30m、幅1.37m、深さ0.34mを測る。壁面はやや急な傾斜で底面は概ね平坦である。
【堆積土】上層に鉄分を含むにぶい黄褐色の極細粒砂、下層に地山の粘土をブロック状に含む灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗などが出土した。（第417図1097）
【時期】出土遺物から12～13世紀と考えられる。
【特徴・性格】２ｂ区ＳＤ092と並行する溝である。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ070（溝）
【位置】２ｂ区の東側、Ｉ24・Ｉ25グリッドに位置する。
【形状・規模】東西方向の溝で、西側がやや北に振れる。長さ6.22m、幅0.63m、深さ0.16mを測る。壁面の傾斜は緩やかで断面形状は椀状である。
【堆積土】鉄分を含む灰黄褐色のシルト質細粒砂の単層である。
【出土遺物】転用硯の可能性がある須恵器坏蓋が出土した。（第417図1098）
【時期】出土遺物から８世紀後半以降と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ080（溝）
【位置】２ｂ区の東側、Ｉ23・Ｉ24グリッドに位置する。
【形状・規模】東西方向の溝である。長さ5.70m以上を測り、幅や深さは不明である。壁面はやや傾斜が強く、段差をつけて掘られている。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト、下層に灰黄褐色の細粒砂を多く含む粘土が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗・小皿、古瀬戸の折縁深皿などが出土した。（第417図1099～1101）
【時期】出土遺物から14世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ219（溝）（１ｃ区ＳＤ693、１ｄ区ＳＤ502、２ｃ区ＳＤ693、Ｒｃ区ＳＤ063）
【位置】２ｂ区、Ｉ13～Ｉ18グリッドにかけて位置する。
【形状・規模】東西へ延び、Ｉ18グリッド内で南方向に曲がる。１ｃ区ＳＤ693・１ｄ区ＳＤ502・２ｃ区ＳＤ693･Ｒｃ区ＳＤ063と一体の溝である。２ｂ区内で長さ48.50m、幅1.80m、深さ0.40mを測る。壁面はなだらかな傾斜で、底面は丸みを帯びている。
【堆積土】上層に褐色の極細粒砂、下層ににぶい黄褐色の細～極細粒砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身、古瀬戸の花瓶、土錘などが出土した。（第417図1102～1104）
【時期】他地区の同一溝の遺物などから13世紀と考えられる。
【特徴・性格】１ｃ区・１ｄ区・２ｂ区・２ｃ区・Ｒｃ区にまたがる平面方形を呈する大型の溝の一部分で、全体では東西幅60.25m、南北残存37.00mを測る。形状と時期から判断して、屋敷を囲む方形の屋敷溝であった可能性が高い。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ290（溝）
【位置】２ｂ区の西側、Ｉ17グリッドに位置する。
【形状・規模】緩やかに曲がる南北方向の溝で、長さ5.28m、幅0.98m、深さ0.05mを測る。壁面の傾斜は緩やかで底面はほぼ平坦である。
【堆積土】にぶい黄褐色のシルト質の細粒砂が堆積する。
【出土遺物】布目痕をもつ平瓦の小片が出土した。（第417図1105）
【時期】出土遺物から７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ613（溝）（Ｒｄ区ＳＤ001）
【位置】２ｂ区の西端、G14・H14グリッドに位置する。
【形状・規模】南北方向の溝で、北側が東へやや振れる。Ｒｄ区ＳＤ001と一体の溝で長さ13.40m、幅1.56m、深さ0.18mを測る。東側が少し深く、西側が浅い形状である。
【堆積土】灰黄褐色や褐色の細粒砂が堆積する。
【出土遺物】後世の混入品と考えられるが、布目痕をもつ平瓦の小片が出土した。（第417図1106）
【時期】遺物から時期を推定できないが、２ｂ区ＳＤ219と同時期と考えられる。
【特徴・性格】２ｂ区ＳＤ219に直角に交わる溝で、中世の屋敷周辺の区画と排水のために掘られた可能性がある。

（首藤）

【遺構名】２ｂ区ＳＰ047（ピット）
【位置】２ｂ区の東側、H22グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.60m程度の円形で、深さ0.26mを測る。垂直に近い角度で掘り込まれ、中に人頭大の石が２つ据えられていたことから柱穴と考えられる。
【堆積土】黒褐色の粘土質シルトが堆積し、上層には地山の粘土がブロック状に混じる。
【出土遺物】根石以外の遺物は出土しなかった。
【時期】堆積土などから７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】大きな根石が据えられており柱穴と考えられるが、関連する柱穴は不明である。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ239（ピット）
【位置】２ｂ区の中央、G19グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.32m程度の円形で、深さ0.16mを測る。
【堆積土】褐色のシルト質細粒砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身が出土した。（第418図1107）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】坏身を意図的に納めた可能性がある小規模で浅いピットである。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ328（ピット）
【位置】２ｂ区の中央、Ｉ19グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.45ｍの円形で、深さ0.47ｍを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色や褐色の砂質土が主に堆積し、底面に暗褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】瓦塔の一部と推定される須恵質の破片が出土した。（第418図1108）
【時期】出土遺物から８世紀末頃と考えられる。
【特徴・性格】詳細不明のピットである。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ413（ピット）
【位置】２ｂ区の中央、Ｈ18グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.68ｍの円形で、深さ0.26ｍを測り、底面に凹凸がある。
【堆積土】灰黄褐色の細粒砂が堆積し、上層には炭化物や焼土が少量含まれる。
【出土遺物】完形品に近い須恵器の坏蓋・坏身が出土した。セット関係にあると考えられ、蓋は逆さの状態で出土した。（第418図1109・1110）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】意図的に土器を納めたと考えられるピットで、貯蔵穴などの可能性がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ503（ピット）
【位置】２ｂ区の西側、Ｉ15グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.60ｍの円形で、深さ0.24ｍを測り、底面が平坦である。
【堆積土】上層に褐色の極細粒砂、下層ににぶい黄褐色のシルト質極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小型の鉢が底面近くに据え置かれたような状況で出土した。（第418図1111）
【時期】出土遺物から７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】意図的に土器を納めたと考えられるピットで、貯蔵穴などの可能性がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ521（ピット）
【位置】２ｂ区の西側、Ｉ17グリッドに位置する。
【形状・規模】隅丸方形で長軸1.00ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.28ｍを測り、底面は平坦である。
【堆積土】灰黄褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の埦・高坏が出土した。（第418図1112・1113）
【時期】出土遺物から８世紀後半と考えられる。
【特徴・性格】性格不明のピットである。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ566（ピット）
【位置】２ｂ区の西側、Ｉ16グリッドに位置する。
【形状・規模】直径0.47ｍの円形で、深さ0.23ｍを測る。
【堆積土】にぶい黄褐色の砂質シルトが堆積する。
【出土遺物】滑石製の紡錘車が出土した。（第418図1114）

【時期】 ２ｂ区ＳＢ005の柱穴に切られていることから７世紀と考えられる。
【特徴・性格】 性格不明のピットである。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ719（ピット）
【位置】 ２ｂ区の西側、Ｉ14グリッドに位置する。
【形状・規模】 直径0.45ｍの円形で、深さ0.24ｍを測る。
【堆積土】 にぶい黄褐色の極細粒砂が堆積する。
【出土遺物】 須恵器の坏蓋が出土した。（第418図1115）
【時期】 出土遺物から７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】 性格不明のピットである。

【遺構名】２ｂ区ＳＸ001（土器溜まり）
【位置】 ２ｂ区の西端、Ｈ13グリッドに位置する。
【形状・規模】 検出面で長軸1.44ｍ、短軸0.58ｍを測る範囲に広がる土器溜まりである。表土掘削の際に検出面よりも上層から遺物が多量に確認されており、本来は基本層序１層の直下から掘り込まれていたようで、範囲はさらに広かったように思われる。
【堆積土】 遺物が密集する隙間に灰黄褐色の砂質土が堆積する。
【出土遺物】 古代～中世にかけての多量の土器や石が混在し、その中から７点出土した古代の平瓦片を図示した。（第418図1116～1120、第419図1121・1122）
【時期】 出土遺物と層位などから15世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】 多量の遺物をまとめて廃棄した遺構である。中世末以降に耕作地を整備する過程で周辺から出土した遺物をまとめて廃棄したのではないかと推測される。

【遺構名】２ｂ区ＳＸ163（竪穴状遺構）
【位置】 ２ｂ区の中央南寄り、Ｉ19・Ｉ20グリッドに位置する。
【形状・規模】 不整形の竪穴状遺構で長軸11.30ｍ、短軸4.90ｍ以上を測り、調査区南側へと続く。深さ0.25ｍ程度で、底面は概ね平坦である。
【堆積土】 褐色の極細粒砂が堆積し、下層には細粒砂や中粒砂が多く含まれる。
【出土遺物】 須恵器の坏身・短頸鉢、土師器の埦・甕が出土した。（第419図1123～1130）
【時期】 出土遺物から７世紀と考えられる。
【特徴・性格】 詳細は不明であるが、複数の竪穴建物などの遺構の集合体の可能性がある。

（小島）

（８）２ｃ区（第175～223図、写真図版175～224）

【遺構名】２ｃ区ＳＢ001（掘立柱建物）
【位置】 ２ｃ区の東側、Ｊ24・Ｊ25・Ｋ24・Ｋ25グリッドに位置する。
【形状・規模】 平面長方形の５間×３間の側柱構造で、建物の主軸方向はＮ-87°-Ｅである。桁行10.80ｍ、梁行6.20ｍ、柱間は桁行2.00ｍ、梁行1.80ｍ、柱穴の深さ0.60ｍを測る。
隅柱は、北東２ｃ区ＳＰ618、南東２ｃ区ＳＰ006、南西２ｃ区ＳＰ044、北西２ｃ区ＳＰ069の４本

である。南東の隅柱２ｃ区ＳＰ006は重複する２ｃ区ＳＰ037によって切られている。側柱は、東西は東２ｃ区ＳＰ004・２ｃ区ＳＰ005と西２ｃ区ＳＰ011・２ｃ区ＳＰ012の４本、南北は南２ｃ区ＳＰ007～ＳＰ010と北２ｃ区ＳＰ615～ＳＰ617・２ｃ区ＳＰ070の８本、隅柱と合わせた柱の総数は16本である。

柱穴は、平面が不整円形ないしは不整楕円形、掘方は深くてしっかりとしており、底面はやや丸底にちかい平坦なものが多い。柱穴の底面には、隅柱（２ｃ区ＳＰ006・２ｃ区ＳＰ044・２ｃ区ＳＰ069・２ｃ区ＳＰ618）と東２ｃ区ＳＰ004・２ｃ区ＳＰ005、西２ｃ区ＳＰ012、南２ｃ区ＳＰ007～ＳＰ010、北２ｃ区ＳＰ615・２ｃ区ＳＰ617・２ｃ区ＳＰ070で、柱の当たりが見られた。

【堆積土】柱穴にはシルトや粘質土・砂質土が堆積する。北西の隅柱２ｃ区ＳＰ069では、にぶい黄褐色の砂質土(1・5)が柱痕で、その下層の柱の当たりに灰黄褐色の砂質土(6)、掘方土として褐色や暗灰黄色の砂質土(2～4)が堆積する。

【出土遺物】北西の隅柱２ｃ区ＳＰ069の埋土中から口縁部を欠損した須恵器の瓶、東の側柱２ｃ区ＳＰ004の埋土中から土師器高坏の口縁部、磨石が出土した。（第421図1149～1151）

【時期】２ｃ区ＳＰ069から出土した須恵器の瓶や、建物方向から８世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】桁行を東西方位に合わせた掘立柱建物で、隅柱が支柱、側柱が束柱となる高床建築の建物と考えられる。側柱構造であることから、重量を伴う穀物などを保管した高床倉庫とは考え難く、他の性格・機能が想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ002（掘立柱建物）

【位置】２ｃ区の中央、Ｌ19・Ｌ20グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は不整長方形で、２間×２間の側柱構造の簡易な掘立柱建物と考えられ、建物の主軸方向はN-10°-Eである。桁行5.15m、梁行3.90m、柱間は桁行2.58m、梁行3.90m、柱穴の深さ0.40mを測る。

隅柱は南東２ｃ区ＳＰ915、南西２ｃ区ＳＰ944、北西２ｃ区ＳＰ942、北東２ｃ区ＳＰ922で、側柱は北２ｃ区ＳＰ925、西は２ｃ区ＳＰ933と推定できるが、東は既に削平、南は撹乱によって不明である。

柱穴はいずれも平面円形で、直径約0.35m程度の小規模で、底面はやや尖りぎみの丸底である。

【堆積土】全ての柱穴に、砂質土（極細粒砂）が堆積する。南東隅柱２ｃ区ＳＰ915では、上層ににぶい黄褐色(1)と下層に暗褐色(2)の砂質土が堆積する。北側柱２ｃ区ＳＰ925では、上層～中央部分にかけて柱痕と推定されるしまりの弱い灰黄褐色(1・2)、掘方土として地山ブロックを含む灰黄褐色(3)、底面にはしまりの弱い灰黄褐色(4)の砂質土が堆積する。

【出土遺物】特に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】不明であるが、小規模な柱穴による構成と柱穴の堆積土の状況などから、中世（13世紀）以降の可能性が高い。

【特徴・性格】平面の柱穴構成にずれが見られることから、掘立柱建物であったかどうか不明な点もあるが、柱穴の状態と特徴から簡易な掘立柱建物と判断した。簡易な小屋程度の建物であったと考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ003（掘立柱建物）

【位置】２ｃ区の西側、Ｊ13・Ｊ14・Ｋ13・Ｋ14グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の６間×２（ないしは１）間の側柱構造で、建物の主軸方向はN-10°-E

である。桁行10.30m、梁行5.20m、柱間は桁行1.50m、梁行2.20m（ないしは4.40m）、柱穴の深さ0.50mを測る。柱数は推定で16本ないしは15本である。

西の柱穴列（２ｃ区ＳＰ100～ＳＰ104・２ｃ区ＳＰ106・２ｃ区ＳＰ114）は状態がとても良好であったが、東の柱穴列（２ｃ区ＳＰ120・２ｃ区ＳＰ123・２ｃ区ＳＰ134・２ｃ区ＳＰ145・２ｃ区ＳＰ158）は重複する２ｃ区ＳＤ122（溝）による削平や、大きな撹乱によって状態が悪く、調査段階では平面長方形に柱穴が配置されていることが認識できなかったため、西の柱穴列のみを２ｃ区SA001（柵列）と呼称して調査を進めた。

隅柱は南東２ｃ区ＳＰ120、南西２ｃ区ＳＰ114、北西２ｃ区ＳＰ100の３本で、北東の隅柱は２ｃ区ＳＤ122によって削平され不明である。南西隅柱２ｃ区ＳＰ114は平面が東西に長い不整楕円形、北西隅柱２ｃ区ＳＰ100は平面がやや南北に長い形状の不整円形で、双方ともに掘り込みが深くしっかりとした柱穴で、平坦な底面には柱の当たりが残る。南東隅柱２ｃ区ＳＰ120は撹乱によって全体像は不明であるが、底面には柱の当たりが残る。

東の側柱は２ｃ区ＳＰ123・２ｃ区ＳＰ134・２ｃ区ＳＰ145・２ｃ区ＳＰ158の４本であるが、２ｃ区ＳＰ145は撹乱によって全体像は不明である。２ｃ区ＳＰ134は平面が隅丸の不整方形、２ｃ区ＳＰ123・２ｃ区ＳＰ158は平面が南北に長い不整楕円形で、いずれも底面は平坦に近く、２ｃ区ＳＰ134・２ｃ区ＳＰ158では柱の当たりが残っていた。西の側柱は２ｃ区ＳＰ101～ＳＰ104・２ｃ区ＳＰ106の５本で、２ｃ区ＳＰ101は平面が南北に長い溝状の楕円形、２ｃ区ＳＰ102～ＳＰ104・２ｃ区ＳＰ106は平面が隅丸の方形で、いずれも掘り込みが深くしっかりとした柱穴で、平坦な底面には柱の当たりが残る。北の側柱２ｃ区ＳＰ155は平面が南北に長い隅丸の方形で、西の側柱同様に掘り込みが深くしっかりとした柱穴で、底面の南はやや傾斜があるが他は平坦で柱の当たりが残る。南に２ｃ区ＳＰ155に相応（対面）する柱穴があったかどうかは不明である。

【堆積土】 ２ｃ区ＳＰ105と重複する２ｃ区ＳＰ104では、南に位置する２ｃ区ＳＰ105を切って掘り込まれており、中央部に位置する少量の焼土を含むにぶい黄褐色のシルト(1)が柱痕で、その下の柱の当たりには粘性の強いにぶい黄褐色と黄灰色の粘質土(13・14)、掘方には黒褐色や褐灰色などのシルト(2～10)が堆積する。

【出土遺物】 ２ｃ区ＳＰ103の埋土中から土錘が出土した。（第421図1152）

【時期】 層位と建物方向、出土遺物から７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】 柱穴の配置や形状から、建物の建て替えまたは拡張、２軒の掘立柱建物の重複も考えたが、検証の結果、桁行を南北方位に合わせた横長の掘立柱建物１棟と判断した。隅柱が支柱、側柱が束柱となる高床建築の建物と考えられる。側柱構造であることから重量を伴う穀物などを保管した倉庫とは考え難く、平面形状と規模などから、牛馬などの家畜小屋であった可能性も想像できる。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ004（掘立柱建物）

【位置】 ２ｃ区の西側、Ｌ14グリッドに位置する。

【形状・規模】 平面長方形の２間×２間の側柱構造で、建物の主軸方向はN-80°-Wである。桁行6.70m、梁行3.80m、柱間は桁行3.00m、梁行1.70m、柱穴の深さ0.40mを測る。北西と南に大きな撹乱が入り込んで、柱穴の一部が削平されているため、調査段階では平面長方形に柱穴が配置されていることが認識できず、西の柱穴列を２ｃ区SA002（柵列）と呼称して調査を進めた。

隅柱は、南東２ｃ区ＳＰ176、南西２ｃ区ＳＰ112、北西２ｃ区ＳＰ121、北東２ｃ区ＳＰ173の４本である。側柱は、東の２ｃ区ＳＰ174、西の２ｃ区ＳＰ118、北の２ｃ区ＳＰ152で、南は不明である。

柱穴は２ｃ区ＳＰ121・２ｃ区ＳＰ152を除き平面楕円形で、２ｃ区ＳＰ152・２ｃ区ＳＰ173・２ｃ区ＳＰ176の底面は平坦、２ｃ区ＳＰ112・２ｃ区ＳＰ118・２ｃ区ＳＰ121・２ｃ区ＳＰ174の底面は丸底に近い。２ｃ区ＳＰ118・２ｃ区ＳＰ173の底面には柱の当たりが残る。

【堆積土】残存状態の良好であった北東隅柱２ｃ区ＳＰ173では、中央の焼土と炭化物を含む灰黄褐色の砂質土(1)が柱痕で、掘方土の上層に炭化物を含む灰黄褐色の砂質土(2)、下層に灰黄褐色やにぶい黄褐色の砂質土(3～5)が堆積する。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位や建物方向などから判断して７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】桁行を東西にとり、梁行をほぼ南北方位に合わせた規模の小さな掘立柱建物である。隅柱が支柱となる高床建築の小型建物と想定される。側柱構造であることから、重量のある穀物などを保管した倉庫の可能性は低いといえる。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ005（掘立柱建物）

【位置】２ｃ区の東側、Ｊ22・Ｋ22グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の５間×１間の側柱構造で、建物の主軸方向はＮ-５°-Ｗである。桁行9.40ｍ、梁行5.70ｍ、柱間は桁行1.80ｍ、梁行4.70ｍ、柱穴の深さ0.15ｍを測る。東の柱穴列の南よりの半分が既に削平されていたことから、調査段階では平面長方形に柱穴が配置されていることが認識できず、西の柱穴列を２ｃ区SA003（柵列）と呼称して調査を進めた。

隅柱は、南西２ｃ区ＳＰ734、北西２ｃ区ＳＰ728、北東２ｃ区ＳＰ715の３本で、南東の隅柱は前述のとおり既に削平されていた。側柱は、東は２ｃ区ＳＰ716・２ｃ区ＳＰ718、西は２ｃ区ＳＰ730～ＳＰ733で、本来は隅柱を含めて６本×２列（東西）の柱穴で構成されていたと推定される。

柱穴はいずれも平面楕円形で、底面は平坦であるがやや丸底のものが見られる。隅柱の２ｃ区ＳＰ715・２ｃ区ＳＰ734と東側柱の２ｃ区ＳＰ716の底面では柱の当たりが残る。東側柱の２ｃ区ＳＰ718の底面には２ｃ区ＳＰ718よりも古い時期の２ｃ区ＳＰ797が重複する。

【堆積土】南西隅柱２ｃ区ＳＰ734では、掘方ににぶい黄褐色のシルト(2)、柱の当たりに灰黄褐色の砂質土(6)が堆積する。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位や建物方向などから判断して７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】桁行を南北にとる横長の掘立柱建物である。隅柱を支柱、側柱を束柱とする高床建築の建物と推定される。側柱構造であることから、重量のある穀物などを保管した倉庫の可能性は低いと考えられ、平面形状と規模などから牛馬などの家畜小屋であった可能性も考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ006（掘立柱建物）

【位置】２ｃ区東側の中央寄り、Ｊ20・Ｊ21・Ｋ20・Ｋ21グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】平面長方形の４間×１間の側柱構造で、建物の主軸方向はＮ-５°-Ｅである。桁行7.30ｍ、梁行6.40ｍ、柱間は桁行1.50ｍ、梁行5.50ｍ、柱穴の深さ0.30ｍを測る。ほぼ全体的に２ｃ区ＳＸ723・２ｃ区ＳＸ934と重複し、北東隅柱が既に削平されていたことから、調査段階では平面長方形に柱穴が配置されていることが認識できず、南の柱穴列をSA004（柵列）と呼称して調査を進めた。

隅柱は、南東２ｃ区ＳＰ777、南西２ｃ区ＳＰ787、北西２ｃ区ＳＰ964の３本で、北東の隅柱は既に削平されていた。側柱は、南は２ｃ区ＳＰ774～ＳＰ776、北は２ｃ区ＳＰ881・２ｃ区ＳＰ883・２

ｃ区ＳＰ962で、本来は隅柱を含めて５本×２列（南北）の柱穴で構成されていたと推定される。

柱穴はいずれも平面楕円形で、底面は平坦である。南西隅柱の２ｃ区ＳＰ787と南側柱の２ｃ区ＳＰ776・北側柱２ｃ区ＳＰ962の底面には柱の当たりが残る。

【堆積土】南西隅柱２ｃ区ＳＰ787では、掘方ににぶい黄褐色の砂質土(1・2)、柱の当たりに焼土や炭化物を含む灰黄褐色の砂質土(3)、その下層に炭化物を含むにぶい黄褐色の砂質土(4)が堆積し、柱の当たりに堆積する砂質土(3・4)が柱痕と考えられる。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位や建物方向などから判断して７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。重複する２ｃ区ＳＸ723・２ｃ区ＳＸ934よりも、掘方の壁面の切り合い関係から判断して新しい時期である。

【特徴・性格】桁行を東西にとる横長の掘立柱建物で、本来はもっと東西に延びる建物であった可能性がある。隅柱を支柱、側柱を束柱とする高床建築の建物と想定もされるが、側柱構造であることから、重量のある穀物などを保管した倉庫の可能性は低いと考えられ、平面形状と規模などから牛馬などの家畜小屋であった可能性も考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ007（掘立柱建物）

【位置】２ｃ区西側の中央寄り、Ｋ15・Ｋ16・Ｌ15・Ｌ16グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】平面長方形の３間×１間の側柱構造で、建物の主軸方向はＮ-90°-Ｅである。桁行6.80ｍ、梁行4.80ｍ、柱間は桁行1.80ｍ、梁行4.00ｍ、柱穴の深さ0.44ｍを測る。北の柱穴列は２ｃ区ＳＸ300と重複し、南西隅柱が２ｃ区ＳＫ597によって既に削平されていた。また周囲には数多くのピットが存在する。

隅柱は、南東２ｃ区ＳＰ425、北西２ｃ区ＳＰ321、北東２ｃ区ＳＰ374の３本で、前述のとおり南西の隅柱は既に削平されていた。側柱は、南は２ｃ区ＳＰ205・２ｃ区ＳＰ417、北は２ｃ区ＳＰ327・２ｃ区ＳＰ369で、本来は隅柱を含めて４本×２列（南北）の柱穴で構成されていたと推定される。

柱穴はいずれも平面不整楕円形で、底面は平坦である。３本の隅柱（２ｃ区ＳＰ321・２ｃ区ＳＰ374・２ｃ区ＳＰ425）と南の側柱２ｃ区ＳＰ417の底面には柱の当たりが残る。

【堆積土】掘方埋土中から礎板と推定される木材が出土した北の側柱である２ｃ区ＳＰ369では、上層に地山ブロック粒を多量に含むにぶい黄褐色の砂質土(1)が堆積し、その下層に炭化物と少量の地山ブロック粒を含む灰黄褐色の砂質土(2)が堆積する。この灰黄褐色の砂質土(2)が柱痕に相当し、その周囲に掘方埋土として褐色の砂質土(4)が堆積し、その下から礎板と推定される木材が出土した。礎板の下層には褐灰色の砂質土(5)が堆積する。

【出土遺物】前述のとおり北の側柱２ｃ区ＳＰ369から礎板と推定される木材が出土したのみで、柱穴からは土器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位や建物方向などから判断して７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。掘方の壁面の切り合い関係などから、重複する２ｃ区ＳＸ300・２ｃ区ＳＫ597・２ｃ区ＳＰ328よりも古い時期で、２ｃ区ＳＰ329・２ｃ区ＳＰ404・２ｃ区ＳＰ425よりも新しい時期と判断できる。北に隣接する２ｃ区ＳＢ008との新旧関係（時期）は不明である。

【特徴・性格】桁行を東西にとる横長の掘立柱建物である。隅柱が支柱、側柱が束柱となる高床建築の小型建物とも想定できるが、側柱構造であることから、重さのある穀物などを保管した倉庫である可能性は低いと考えられ、平面形状・規模などから牛馬などの家畜小屋であった可能性も考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ008（掘立柱建物）

【位置】２ｃ区西側の中央寄り、Ｊ15・Ｊ16・Ｋ15・Ｋ16グリッド、２ｃ区ＳＢ007の北に位置する。

【形状･規模】平面正方形の２間×２間の総柱構造で､建物の主軸方向はＮ-０°-Ｓである。桁行6.20ｍ、梁行5.90ｍ、柱間は桁・梁行ともに2.50ｍ、柱穴の深さ0.30ｍを測る。

周囲には数多くのピットが存在するが、本建物の隅柱は、南東２ｃ区ＳＰ373、南西２ｃ区ＳＰ319、北東２ｃ区ＳＰ576の３本で、北西の隅柱は２ｃ区ＳＩ240によって既に削平されている。側柱は東２ｃ区ＳＰ341、西２ｃ区ＳＰ305、南２ｃ区ＳＰ438、北２ｃ区ＳＰ436の４本、中柱は２ｃ区ＳＰ359の１本である。本来は合計９本の柱穴で構成される。

柱穴はいずれも平面楕円形で、底面は平坦である。南西隅柱２ｃ区ＳＰ319の底面に柱の当たりが残る。

【堆積土】南西隅柱２ｃ区ＳＰ319では、掘方埋土の上層にしまりの悪い灰黄褐色やにぶい黄褐色の砂質土(1・2)が堆積し、その下層にしまりのよい暗褐色やにぶい黄褐色の砂質土(3・4)、粘性の強い灰黄褐色のシルト(5)やしまりのよい暗褐色の砂質土(6)、粘性の強い灰黄褐色の粘質土(7)が層状に堆積する。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位や建物方向などから判断して７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。掘方の壁面の切り合い関係などから、重複する２ｃ区ＳＩ240・２ｃ区ＳＰ320・２ｃ区ＳＰ334・２ｃ区ＳＰ351・２ｃ区ＳＰ434・２ｃ区ＳＸ300よりも古い時期である。南に隣接する２ｃ区ＳＢ007との新旧関係（時期）は不明である。

【特徴・性格】東西南北の方位に桁行と梁行（建物軸）を合わせた掘立柱建物である。総柱構造と判断できることから、隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱となる高床ないしは床束建築の倉庫と想定でき、穀物などを保管した倉庫であった可能性が考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ018（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の東側、Ｋ24・Ｋ25グリッドに位置する。

【形状・規模】南を中心に大きく撹乱を受けており、カマドのみが部分的に残存する状態であった。東に炭化物が集中する個所（範囲）が見られ、その下層に掘り込みの浅い２ｃ区ＳＫ053（土坑）が見られ、焚口部と想定される。建物本体の形状・規模は不明である。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト(1)が堆積し、支脚の周囲に焼土を含む暗褐色の砂質シルト(3)、焼土と炭化物を含むにぶい黄褐色のシルト(4)・褐色の砂質シルト(5)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から土師器甕の口縁部が出土した（第421図1153・1154）。

【時期】出土遺物から８世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】カマドの状態から、南西の壁面に突出してカマドが付設されていた竪穴建物と想像できる。カマド埋土中から立石が認められ、焚口の袖石ではなくて、燃焼部に甕を設置した支脚と考えられる。支脚周囲の焼土や炭化物と東の焚口と想定される付近に集中する炭化物の状態から、住居としてある一定期間の使用が窺える。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ043（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の東側、Ｋ24グリッドに位置する。

【形状・規模】カマドのみが部分的に残存する状態で、建物本体は既に削平されていた。建物本体の

形状・規模は不明である。２ｃ区ＳＰ040・２ｃ区ＳＰ023は、堆積土の状況から判断して本遺構と一体と考えられる。カマドが壁面内外のどちらに付設されていたのかは不明である。

【堆積土】２ｃ区ＳＰ023には焼土と炭化物を含む褐色や暗褐色のシルト(1・2)が堆積し、２ｃ区ＳＰ040の上層に相当する個所では炭化物を多量に含む砂質シルト(4)が堆積する。カマド本体の掘方埋土には褐色の砂質シルト(6)が堆積する。

【出土遺物】顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位などから判断して７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】カマド平面の形状や掘方の底面が西～東にやや傾斜して下がっていることや、堆積土の状況などから、東西の双方（２ｃ区ＳＰ023・２ｃ区ＳＰ040）に甕を設置した双口カマドであった可能性が想像できる。北の壁面ないしは南の壁面にカマドを付設した竪穴建物であったと想定されるが、詳細は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ045（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の東側、K24グリッドに位置する。

【形状・規模】既に削平され、建物本体の一部分が残存するのみであった。形状・規模は不明である。残存長（南北）4.85m、残存幅（東西）3.65m、深さ0.20mを測る。

底面にはやや凹凸が見られるが平坦で、残存部分は竪穴建物の西側と想定される。掘方底面の南北に位置する平面楕円形の２ｃ区ＳＰ047・２ｃ区ＳＰ050が、本建物の主柱穴と考えられる。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト(4)、下層ににぶい黄橙色の砂質土(6)が堆積する。

【出土遺物】顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位などから７～８世紀と考えられる。また遺構の切り合い関係から、重複する２ｃ区ＳＰ042・２ｃ区ＳＰ046・２ｃ区ＳＰ049より古い時期である。

【特徴・性格】竪穴建物と考えられるが、既に削平されていたため詳細は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ048（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の東側、K24グリッド、２ｃ区ＳＩ045の南に位置する。

【形状・規模】２ｃ区ＳＩ045と同様に既に削平され、建物本体の一部分が残存するのみであった。形状・規模は不明である。残存長（南北）3.80m、残存幅（東西）2.30m、深さ0.20mを測る。

掘方の底面はやや丸底に近い形状で、残存部分は竪穴建物の西側の一部と想定される。底面にピットは確認できなかった。

【堆積土】上層に褐色(4)、下層ににぶい黄褐色(2)の砂質土が堆積する。

【出土遺物】顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位などから７～８世紀と考えられる。また遺構の切り合い関係から、重複する２ｃ区ＳＫ041より古い時期である。

【特徴・性格】竪穴建物と考えられるが、既に削平されていたため詳細は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ117（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の西側南西端、Ｌ13・Ｌ14グリッドに位置する。

【形状・規模】カマド部分のみが残存する状態で、建物本体は既に削平されていた。推定全長（南北）3.80m、推定幅（東西）2.90m、深さ0.15mを測る。建物の主軸方向は推定でN-０°-Ｓである。

南の壁面が突出し、カマドが付設される。掘方の底面は平坦であったと推定され、底面の中央に平面楕円形の２ｃ区ＳＰ109・２ｃ区ＳＰ143（ピット）が位置するが、本建物に伴う主柱穴かどうかはわからない。

【堆積土】カマド焚口の上層には灰黄褐色のシルト(1)が堆積し、下層に黄灰色のシルト(8)、炭を少量含む灰黄褐色のシルト(13)などが堆積する。カマド燃焼部では、上層に黒褐色のシルト(4・6)などが堆積し、下層に黒色のシルト(9)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器坏の底部・甕の胴部、土師器甕の口縁部が出土した。（第421図1155～1157）

【時期】出土遺物から８世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】南の壁面にカマドを付設した小型の竪穴建物と考えられるが、既に建物本体は削平されているため詳細は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ231（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の西側、Ｊ14・Ｊ15・Ｋ15グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形の竪穴建物で、全長（南北）4.50m、幅（東西）2.80m、深さ0.10mを測る。建物の主軸方向はN-35°-Eである。

北東の壁面の内側にカマドが付設され、２ｃ区ＳＤ296（壁際溝：壁溝）と一体となっていた。南や西の壁面にも２ｃ区ＳＤ280・２ｃ区ＳＤ297（壁際溝：壁溝）が確認できた。掘方壁面の残存はとても浅いが斜めで、底面は平坦である。掘方の底面には、２ｃ区ＳＰ281～ＳＰ283・２ｃ区ＳＰ285～ＳＰ292・２ｃ区ＳＰ295（ピット）が多く確認できた。いずれのピットも平面楕円形ないしは不整形で、全てが本建物に伴うものかどうかはわからない。

【堆積土】埋土として全体に黄褐色のシルト(1)が堆積する。カマドでは上層に暗オリーブ褐色の砂質土(1)が堆積し、焚口の直下に位置するピットでは灰黄褐色(2)や暗褐色(3)の砂質土が堆積する。

【出土遺物】南東の主柱穴と想定される２ｃ区ＳＰ282の埋土中から、土錘と土玉が出土した。（第422図1159・1160）

【時期】出土遺物から６世紀と考えられる。

【特徴・性格】北東の壁面の内側にカマドを付設した竪穴建物である。掘方底面での位置と形状・堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ282、南西２ｃ区ＳＰ287、北東２ｃ区ＳＰ295の３本が主柱穴と考えられ、本来は４本の柱で上屋部を支持した建物と想定される。また、２ｃ区ＳＰ292が貯蔵穴であった可能性が考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ240（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の西側、Ｊ15・Ｋ15グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形の竪穴建物で、全長（南北）4.90m、幅（東西）3.80m、深さ0.10mを測る。建物の主軸方向はN-74°-Wである。

カマドは壁面から突出して付設され、当初は南西の壁面の隅に付設された南西カマドで、東の壁面中央の東カマドに付設替えされた可能性が高い。

掘方壁面の残存はわずかで浅いが斜めで、底面は平坦である。壁際溝（壁溝）は確認できなかった。掘方底面の中央に平面楕円形と推定される２ｃ区ＳＫ596（土坑）、さらに底面から２ｃ区ＳＰ439～ＳＰ446・２ｃ区ＳＰ453・２ｃ区ＳＰ455・２ｃ区ＳＰ464～ＳＰ473の多くのピットが確認できた。

いずれのピットも平面楕円形であるが、全てのピットが、本建物に伴うものかどうかはわからない。
【堆積土】埋土として全体に焼土・炭化物を含む褐灰色の砂質土(1)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器坏蓋、土師器甕、北東柱穴２ｃ区ＳＰ469の埋土中から須恵器坏蓋、底面中央付近のやや大きめのピットである２ｃ区ＳＰ474の埋土中から須恵器短頸壺、土師器甕が出土した。（第422図1161～1168）
【時期】出土遺物から７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】当初は南西の壁面隅にカマドが付設されていたようであるが、布設替えして東の壁面にカマドを付設した竪穴建物と考えられ、火処替えが行われた可能性が高い。主柱穴は、掘方底面での位置と形状・堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ473、南西２ｃ区ＳＰ444、北東２ｃ区ＳＰ469の３本と考えられ、本来は北西の柱を含めて４本の柱で上屋部を支持した建物であったと考えられる。掘方の底面中央に位置する２ｃ区ＳＫ596（土坑）が、本建物の貯蔵穴に相当するかどうかは不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ447（竪穴建物）
【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｊ16・Ｋ16・Ｋ17グリッドに位置する。
【形状･規模】平面不整方形の竪穴建物で、全長（南北）4.90m、幅（東西）3.50m、深さ0.20mを測る。建物の主軸方向はＮ-87°-Ｗである。
カマドは長さ1.50m、幅2.20m、掘方の深さ0.48mを測る大型で、東の壁面の北寄りの位置に壁面から突出して付設される。カマドから東に延びる長さ1.30m、幅0.75m、深さ0.09mの溝状の痕跡である２ｃ区ＳＰ278が認められ、煙道と考えられる。
掘方の壁面は直に近い斜めで、底面は平坦である。壁際溝（壁溝）は確認できなかった。底面では、２ｃ区ＳＰ566～ＳＰ572・２ｃ区ＳＰ577・２ｃ区ＳＰ578・２ｃ区ＳＰ590・２ｃ区ＳＰ592・２ｃ区ＳＰ593の多くのピットが確認できた。いずれのピットも平面楕円形であるが、全てのピットが本建物に伴うものかどうかはわからない。
【堆積土】埋土としてほぼ全体に焼土・炭化物を含む灰黄褐色の砂質土(1)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器坏身・長頸瓶・甕、製塩土器、灰釉陶器、２ｃ区ＳＰ566から須恵器瓶か壺の一部、土師器甕の底部が出土した。（第422図1169～1174、第423図1175～1182）
【時期】出土遺物から判断して、８世紀中頃～９世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】東の壁面に大型のカマドを付設した竪穴建物である。カマドの横幅が2.20mあることから、双口以上のカマドであった可能性が高い。主柱穴は、掘方の底面での位置と形状･堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ569、南西２ｃ区ＳＰ570または２ｃ区ＳＰ572、北西２ｃ区ＳＰ577、北東２ｃ区ＳＰ566と考えられ、上屋部を４本柱で支持した建物と考えられる。また、２ｃ区ＳＰ566はやや大型のピットであることから、貯蔵穴であった可能性も考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ517（竪穴建物）
【位置】２ｃ区中央西寄りの北端、Ｊ16・Ｊ17グリッドに位置し、調査区外（北）に延びる。
【形状・規模】平面推定不整方形の竪穴建物で、建物本体の大部分が調査区外（北）となる。全長（東西）5.80m、幅（南北）は残存で1.25m、深さ0.10mを測る。建物の主軸方向はＮ-89°-Ｅである。
南の壁面にカマドは見当たらず、火処があったかどうかは不明である。
掘方の壁面は斜めで、底面は平坦である。西の壁面の直下で、壁際溝（壁溝）と想定される溝状の部分がわずかに確認できたが、他の壁面では壁際溝（壁溝）は確認できなかった。掘方の底面では、

東に２ｃ区ＳＫ609（土坑）が位置し、全体に２ｃ区ＳＰ604～ＳＰ613までの多くのピットが確認できた。ピットの平面は楕円形や不整形であるが、全てのピットが本建物に伴うものかどうかはわからない。

【堆積土】埋土としてほぼ全体に暗灰黄色の砂質土(2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器坏蓋、土師器甕の口縁部、２ｃ区ＳＰ605の埋土中から須恵器平瓶の口縁部、２ｃ区ＳＰ604・２ｃ区ＳＰ605から土師器鍋の口縁部、２ｃ区ＳＰ608から土師器鍋の把手が出土した。（第423図1183～1187）

【時期】出土遺物から、７世紀中頃～後半と考えられる。

【特徴・性格】竪穴建物で、時期的にはカマドの付設が想定されるが、建物本体の大部分が調査区外のため、火処は不明である。主柱穴は、掘方底面での位置と形状・堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ611または２ｃ区ＳＰ613、南西２ｃ区ＳＰ605または２ｃ区ＳＰ606が主柱穴であった可能性が高いと考えられ、４本の柱で上屋部を支持した建物と想定できる。また２ｃ区ＳＫ609（土坑）が、本建物の貯蔵穴であった可能性も考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ666（竪穴建物）

【位置】２ｃ区中央、K18グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形の竪穴建物で、西～北にかけて大きく撹乱を受けていた。残存全長（東西）4.60m、深さ0.15mを測る。建物の主軸方向はN-89°-Wである。

カマドは長さ1.25m、幅2.80mを測る大型で、東の壁面に突出して付設される。カマド底面の中央に平面楕円形で丸底の窪み（２ｃ区ＳＰ1135: 長軸0.65m、短軸0.55m、深さ0.12m）が確認できた。

掘方の壁面は残存が悪くて浅かったが、直ではなく斜めである。底面は平坦で、南壁の一部では壁際溝（壁溝）と考えられる２ｃ区ＳＤ1133（溝状の部分）が確認できた。２ｃ区ＳＰ1124～ＳＰ1128・２ｃ区ＳＰ1131・２ｃ区ＳＰ1132（ピット）は、残存する西の掘方底面を中心に確認でき、平面はいずれも楕円形であった。

【堆積土】全体に残存が悪かった。カマドには炭化物を含む暗褐色の砂質土(1)が堆積する。

【出土遺物】カマドの掘方底面中央に位置する２ｃ区ＳＰ1135の埋土中から、大振りの須恵器坏蓋が出土した。（第423図1188）

【時期】出土遺物から、８世紀前半～中頃と考えられる。壁面の切り合い関係から、重複する２ｃ区ＳＩ667と２ｃ区ＳＩ990よりも新しい時期である。

【特徴・性格】東の壁面に大型のカマドを付設した竪穴建物である。カマドの横幅が2.80mあることから、双口以上のカマドであった可能性が高い。主柱穴は、掘方の底面での位置と形状･堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ1127、南西２ｃ区ＳＰ1124が柱穴と考えられ、北西と北東の柱と合わせた４本の柱で上屋部を支持した建物と想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ667（竪穴建物）

【位置】２ｃ区中央、K18・Ｌ18グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形の竪穴建物で、北を２ｃ区ＳＩ666によって削平され、西～南にかけて撹乱を受けていた。全長（東西）4.25m、深さ0.20mを測る。建物の主軸方向はN-89°-Wである。

カマドは長さ1.00m、幅2.50mを測る大型で、東の壁面に突出して付設される。

掘方の壁面は、直に近い部分もみられたが基本は斜めで、底面は平坦である。掘方底面の北･中央･

南の３カ所に平面不整形の２ｃ区ＳＫ1108・２ｃ区ＳＫ1112・２ｃ区ＳＫ1113（土坑）が位置し、カマド掘方も含めた掘方の底面では、平面楕円形の２ｃ区ＳＰ1100・２ｃ区ＳＰ1109～ＳＰ1111・２ｃ区ＳＰ1114～ＳＰ1118・２ｃ区ＳＰ1130・２ｃ区ＳＰ1139の多くのピットが確認できた。確認できた土坑・ピットの全てが、本建物に伴うものかはわからない。

【堆積土】埋土として全体に、にぶい黄褐色(3)や灰黄褐色(4)及び暗褐色(6)の砂質土が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器甕の体部、土師器鍋の把手、山茶碗が出土したほかに、２ｃ区ＳＰ1109の埋土中から須恵器坏蓋、製塩土器、２ｃ区ＳＰ1117の埋土中から須恵器坏が出土した。埋土中から出土した山茶碗は、後世の周辺遺構からの混入ないしは撹乱による混入と考えられる。（第423図1189～1191、第424図1192～1194）

【時期】出土遺物から７世紀後半と考えられる。壁面の切り合い関係から、重複する２ｃ区ＳＩ666よりも古い時期である。

【特徴・性格】東の壁面に大型のカマドを付設した竪穴建物である。カマドの横幅が2.50ｍあることから、双口以上のカマドであった可能性が高い。主柱穴は、掘方底面での位置と形状・堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ1115、南西２ｃ区ＳＰ1117が主柱穴と考えられ、北西と北東の柱と合わせた４本の柱によって上屋部を支持した建物と想定される。２ｃ区ＳＫ1108は、掘方底面での位置と形状・堆積土から、本建物の貯蔵穴であった可能性が考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ698（竪穴建物）

【位置】２ｃ区の東側、Ｊ23・Ｋ23・Ｋ24グリッドに位置する。

【形状･規模】平面隅丸正方形の竪穴建物で､全長（東西）7.60ｍ､幅（南北）7.60ｍ､深さ0.10ｍを測る。建物の主軸方向はＮ-１°-Ｅである。

東の壁面の南寄り、建物の内側にカマドが付設される。カマドは、推定全長2.00ｍ、最大幅2.30ｍ、掘方深さ0.10ｍを測り、燃焼部が建物の内側に収まる構造と推測できる。煙道は、直に屋根に向かって昇る構造と想定される。

掘方の壁面は､直に近い斜めであるが､検出時の想定よりも残存が悪くて浅かった。掘方の底面は､基本平坦であるが､掘方壁面の南西隅～西中央（長さ3.85ｍ､幅1.95ｍ）までと中心部分を円形状（直径4.00ｍ）に掘り残して、他は一段低く掘り下げて壁際溝（壁溝）状（幅1.50～2.00ｍ）に浅い溝が全体をめぐる構造であった。掘方の底面全体からは、平面楕円形の大小の２ｃ区ＳＰ739～ＳＰ766・２ｃ区ＳＰ796のピットが確認できた。

【堆積土】埋土として全体に黄褐色の砂質土（ａ-ａ’間３、ｂ-ｂ’間６）が堆積する。カマドでは、炭化物や焼土を含むにぶい黄褐色や褐色の砂質土（ｈ-ｈ’間１～３・５）の堆積が確認できた。

【出土遺物】埋土中から須恵器高坏の脚部が出土し、貯蔵穴と考えられる２ｃ区ＳＰ750の埋土中から須恵器甕の体部が出土した。（第424図1195・1196）

【時期】出土遺物から７世紀中頃～後半と考えられる。

【特徴・性格】掘方の底面構造によって、掘方壁面の南西隅～西中央の底面を掘り残した部分が、建物の出入口と想定できた。西中央の掘り残した部分の範囲から確認できた小規模なピットである２ｃ区ＳＰ756と２ｃ区ＳＰ794（平面円形:直径約0.40ｍ以下で深さ0.05ｍ）の中心軸間の距離は1.30ｍを測り、出入口にかけた梯子の痕跡である可能性が考えられた。

主柱穴は、掘方底面での位置と形状･堆積土から、いずれも平面は楕円形の南東２ｃ区ＳＰ749（長軸1.20ｍ、短軸0.95ｍ、深さ0.57ｍ）、南西２ｃ区ＳＰ754（長軸1.20ｍ、短軸1.20ｍ、深さ0.60ｍ）、北

西２ｃ区ＳＰ766（長軸0.98m、短軸0.88m、深さ0.50m）、北東２ｃ区ＳＰ741（長軸1.05m、短軸0.70m、深さ0.40m）の４本と考えられる。貯蔵穴は、南西隅に位置する平面楕円形のＳＰ750（長軸1.28m、短軸1.10m、深さ0.37m）と考えられた。

本建物は、４本の柱によって上屋部を支持した竪穴建物で、東の壁面の内側にカマドを付設していた。またカマド脇に、貯蔵穴を有することが確認できた。本建物は、７世紀中頃の竪穴建物の典型例といえる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ990（竪穴建物）

【位置】２ｃ区中央、K18・K19グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形の竪穴建物で、西の一部分が２ｃ区ＳＩ666と重複して削平され、北東隅の一部が撹乱を受けていた。全長（東西）8.20m、幅（南北）6.50m、深さ0.10mを測る。建物の主軸方向はN-３°-Eである。

カマドは北の壁面に付設され、壁面から突出するタイプである。カマドは、長さ1.58m、幅0.90m、掘方の深さ0.35mを測る。カマド掘方の底面では、中央部分を縦長（南北）の島状に掘り残して、その東西が一段下がるように掘り下げられていた。中央の掘り残し部分に支脚を据えていたことが想定でき、この位置が燃焼部で、その手前（南）が焚口といえる。また、カマドを中心に北の壁面では、東西の壁面隅におよぶ幅0.70m～1.00m、深さ0.15mの２ｃ区ＳＤ1026（壁際溝：壁溝）が認められた。

掘方の壁面は残存が悪くて浅いが斜めで、底面は平坦であった。掘方底面の南を中心に平面楕円形の２ｃ区ＳＰ1027～ＳＰ1032・２ｃ区ＳＰ1034～ＳＰ1047の数多くのピットが確認できた。確認できた全てのピットが、本建物に伴うものかはわからない。

【堆積土】カマドの上層に、焼土を含む炭層の黒褐色の砂質土(1)や焼土を含むにぶい黄褐色の砂質土(3)の堆積が確認できた。

【出土遺物】埋土中から須恵器坏、土師器甕の体部が出土した。（第424図1197・1198）

【時期】出土遺物から８世紀中頃と考えられる。壁面の切り合い関係から、重複する２ｃ区ＳＩ666よりも古い時期である。

【特徴・性格】南の壁面の平面形はとても不整形で、中央に凸部が見られたが、この凸部が本建物の出入口と想定できた。凸部の際に位置する小規模なピットである２ｃ区ＳＰ1031と２ｃ区ＳＰ1035（平面楕円形:長軸0.35m以下で深さ0.20m）の中心軸間の距離は2.50mを測ることから、少し距離があるようには思えたが、出入口にかけた梯子の痕跡である可能性が考えられた。本建物の主柱穴は、掘方底面での位置と形状・堆積土から、平面円形の東２ｃ区ＳＰ1029（直径0.75m、深さ0.60m）と平面楕円形の西２ｃ区ＳＰ1044（長軸0.85m、短軸0.72m、深さ0.35m）の２本で、建物の長軸（東西）中心線上に２本の柱を立てて、上屋部を支持したものと考えられる。

本建物は、北の壁面にカマドを付設し、２本の柱で上屋部を支持した竪穴建物で、南に出入口を設けていたといえる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ1000（竪穴建物）

【位置】２ｃ区中央、Ｊ18・Ｊ19・K18・K19グリッドに位置する。

【形状・規模】平面不整方形の竪穴建物で、全長（東西）6.20m、幅（南北）4.80m、深さ0.25mを測る。建物の主軸方向はN-87°-Wである。

掘方の壁面は直に近く深くてしっかりとしたものであるが、壁面直下の底面において壁際溝（壁溝）

は確認できなかった。掘方底面は平坦で、掘方底面の中央北西寄りに２ｃ区ＳＫ1050（土坑）が位置し、２ｃ区ＳＫ1050に重複してその北に２ｃ区ＳＫ1057（土坑）が位置する。２ｃ区ＳＫ1050は平面楕円形で、長軸4.10m、短軸2.25m、深さ0.20mと規模が大きく、底面は平坦であった。２ｃ区ＳＫ1057は底面にやや凹凸が見られたが、２ｃ区ＳＫ1050同様の形状・規模を有する土坑と想定でき、唯一埋土中から炭の存在が少量であるが確認できた。しかしながら、炉・カマドなどの火処とは想定しがたい。さらに四隅付近を中心に平面楕円形ないしは円形の２ｃ区ＳＰ1051～ＳＰ1068（ピット）が多く確認できた。確認できた土坑・ピットの全てが、本建物に伴うものかどうかはわからない。

【堆積土】全体に上層から黒褐色(4)と暗褐色(5)の砂質土がレンズ状に堆積し、その下層ににぶい黄褐色(6)と褐色(9)の砂質土が堆積する。

【出土遺物】埋土中から土師器坩の口縁部、２ｃ区ＳＫ1050の埋土中から土師器の高坏・台付甕の脚部が出土した。また、２ｃ区ＳＰ1065の埋土中から口縁部を上に向けた正位の状態で、完形の土師器坩１点が見つかっており、埋納されたものと考えられる。（第424図1199～1203）

【時期】出土遺物から５世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】本建物の主柱穴は、掘方底面での位置と形状・堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ1054・南西２ｃ区ＳＰ1063と北の壁面際の北西２ｃ区ＳＰ1059・北東２ｃ区ＳＰ1058の４本で、４本の柱を立てて上屋部を支持したと考えられる。南西に位置する２ｃ区ＳＰ1052・２ｃ区ＳＰ1053は、貯蔵穴であった可能性が考えられ、火処は不明である。

本建物は、２ｃ区はもとより今回発掘調査を実施した全調査区において、竪穴建物としては最も古い時期に相当する。周囲に同時期に相当する土坑などの存在が確認できているが、建物の確認には至っておらず、調査区外（南）に存在した可能性も考えられなくはないが、単独で存在した可能性が高い。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ1049（竪穴建物）

【位置】２ｃ区中央、J18・J19グリッドに位置し、調査区外（北）に延びる。

【形状・規模】平面推定不整方形の竪穴建物で、建物本体の大部分が調査区外（北）となる。全長（東西）5.30m、幅（南北）は残存で2.35m、深さ0.10mを測る。建物の主軸方向はN-89°-Wである。

南の壁面にカマドは見当たらず、火処を有していたかどうかは不明である。

掘方の壁面は残存状態が悪くて浅い掘り込みで、底面は平坦であった。壁際溝（壁溝）は確認できなかった。掘方の底面では、平面楕円形の２ｃ区ＳＰ1069～ＳＰ1071・２ｃ区ＳＰ1073～ＳＰ1077（ピット）が確認できた。全てのピットが本建物に伴うものかどうかはわからない。

【堆積土】調査区の北壁面も含めて堆積状態が悪くて、ピット内の堆積土のみが確認できた状態であった。主柱穴と考えられる２ｃ区ＳＰ1069では掘方の上層全体に灰黄褐色の砂質土(1)が厚く堆積し、その下層に柱痕と推定される暗灰黄色の砂質土(2)と掘方埋土として黄褐色の砂質土(3)とにぶい黄褐色のシルト(4)が堆積する。

【出土遺物】２ｃ区ＳＰ1071の埋土中から須恵器の坏、２ｃ区ＳＰ1069の埋土中から土師器甕の口縁部が出土した。（第424図1204～1207）

【時期】出土遺物から、７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

【特徴・性格】竪穴建物で、時期的にはカマドの付設が想定されるが、建物本体の大部分が調査区外のため、火処は不明である。主柱穴は、掘方底面での位置と形状・堆積土から、南東２ｃ区ＳＰ1069、南西２ｃ区ＳＰ1073が主柱穴であった可能性が高く、４本の柱で上屋部を支持した建物と想定できる。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ001（土坑）
【位置】２ｃ区の東側、Ｊ25グリッド、２ｃ区ＳＢ001の東に位置する。
【形状・規模】平面は横長の楕円形で、長軸（東西）1.90m、短軸（南北）0.80m、深さ0.23mを測る。底面には凹凸が見られる。
【堆積土】上層全体に灰黄褐色の砂質土(1)が堆積し、下層に灰褐色の砂質土(2・3)が堆積する。
【出土遺物】遺物の出土は認められなかった。
【時期】層位から、７～８世紀に相当する。
【特徴・性格】形状から墓坑とも想定されるが、不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ030（土坑）
【位置】２ｃ区の東側、Ｌ24グリッド、２ｃ区ＳＩ048の南に位置する。
【形状・規模】平面は横長の楕円形で、長軸（東西）1.80m、短軸（南北）1.05m、深さ0.24mを測る。底面は平坦である。
【堆積土】全体に褐色の砂質土(1)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身が出土した。（第424図1208）
【時期】出土遺物から、８世紀中頃～後半と考えられる。
【特徴・性格】形状から墓坑とも想定されるが、不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ277（土坑）
【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｋ16・Ｋ17グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は隅丸方形で、長軸（南北）2.80m、短軸（東西）2.69m、深さ0.48mを測る。底面は平底であるが、２ｃ区ＳＰ279・２ｃ区ＳＰ430～ＳＰ433・２ｃ区ＳＰ573・２ｃ区ＳＰ575・２ｃ区ＳＰ589・２ｃ区ＳＰ591（ピット）が重複する。
【堆積土】全体的に上層に暗灰黄色(1)と下層にオリーブ褐色(2)の炭化物・焼土を多量に含む砂質土が堆積する。
【出土遺物】底面の西に位置する２ｃ区ＳＰ591から須恵器蓋が出土した。（第424図1209）
【時期】出土遺物から、７世紀後半以降と考えられる。
【特徴・性格】大型の方形土坑で、堆積土に多量の炭化物・焼土を含むことから、焼成遺構の可能性が高い。何を対象とした焼成なのかはわからない。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ545（土坑）
【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｊ17グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は隅丸方形で、長軸（東西）1.24m、短軸（南北）1.04m、深さ0.20mを測る。底面は平底で、中央付近に２ｃ区ＳＰ602（ピット）が重複する。
【堆積土】全体ににぶい黄褐色の砂質土(1)が堆積し、西の下層にのみ黒色のシルト(2)が堆積する。
【出土遺物】遺物の出土は認められなかった。
【時期】層位から、７～８世紀に相当する。
【特徴・性格】当初は２ｃ区ＳＰ602と一体の掘方と想定し柱穴と判断したが、層位や堆積土から２ｃ区ＳＰ602が重複する別遺構と判断できたため、その性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ767（土坑）

【位置】２ｃ区の中央東寄り、Ｊ21グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は楕円形で、長軸（北東～南西）1.80m、短軸（北西～南東）1.36m、深さ0.12mを測る。底面は平底で、長軸1.28m、短軸1.05mの平面楕円形の範囲に炭化物のまとまりが確認できた。

【堆積土】全体的に上層に焼土を含む黒褐色の粘質土(1)、下層に炭化物を主体とした黄灰色の砂質土(7)が堆積する。

【出土遺物】埋土の上層から土師器高坏の脚部のほかに、甕の口縁部が出土した。（第425図1210～1215）

【時期】出土遺物から、５世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】底面に炭化物がまとまって確認でき、土師器の高坏・甕が出土したことから、竪穴建物ないしは平地建物の火処や屋外炉であった可能性、または火を使用した祭祀などの痕跡とも考えたが、堆積土や土師器の出土状況から判断して、小規模ではあるが、土師器の焼成遺構であった可能性が高い。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ771（土坑）

【位置】２ｃ区の中央東寄り、Ｋ21グリッドに位置する。

【形状・規模】調査区を南北に縦断する２ｃ区ＳＤ770（溝）によって西半分を削平されている。平面は推定楕円形で、長軸（東西）不明、短軸（南北）1.40m、深さ0.15mを測る。底面は、若干の凹凸があるがほぼ平底である。

【堆積土】全体的に灰黄褐色の粘質土(1)が堆積し、下層の一部ににぶい黄褐色の砂質土(2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から、須恵器大甕の体部破片のほかに、土師器の高坏・台付甕などが出土した。（第425図1216～1222）

【時期】出土遺物から、５世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】ほぼ完形の土師器の高坏２点が出土し、共伴遺物として須恵器の大甕破片や土師器の台付甕などが出土したことから、祭祀などの儀礼に使用した土器類を一括廃棄した土坑の可能性が高い。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ268（溝）

【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｊ16グリッドに位置する。

【形状・規模】北東～南に向かってゆるやかに蛇行するような形状で延びる小規模な溝で、北を２ｃ区ＳＩ517、南を２ｃ区ＳＩ447によって削平される。残存全長3.30m、幅0.80m、深さ0.12mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で、底面は丸底に近い形状である。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色の砂質土(2)、下層に灰黄褐色の砂質土(3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の坏、土師器の高坏・台付甕の脚部が出土した。（第426図1223～1226）

【時期】出土遺物から、５世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】規模の小さな溝であるが、２ｃ区ＳＩ1000や２ｃ区ＳＫ767・２ｃ区ＳＫ771と同様に５世紀に相当する遺構と考えられる。残存部分がわずかで、その形状や堆積土・出土遺物・周辺遺構

の状況からは、その性格を判断することができなかった。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ273（溝）

【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｊ17・Ｊ18グリッドに位置する。

【形状・規模】東西に延びる溝で、東が大きく撹乱を受けていた。残存全長7.95m、最大幅1.82m、深さ0.28mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で、底面は丸底に近い形状である。

【堆積土】中央付近（ｃ-ｃ'間）ではほぼ全体に灰黄褐色の砂質土(1)が堆積し、その下層に黒褐色やにぶい黄褐色の砂質土(2～5)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から、須恵器・土師器の破片が出土した。

【時期】層位と出土遺物などから、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】形状や堆積土・周辺遺構の状況から、性格を判断することができなかった。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ530（溝）

【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｋ17・Ｋ18グリッドに位置する。

【形状・規模】東西にやや湾曲しながら延びる溝で、東が大きく撹乱を受けていた。残存全長8.50m、最大幅2.25m、深さ0.20mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で、底面は平坦な形状である。

【堆積土】西（ａ-ａ'間）ではほぼ全体に灰黄褐色の砂質土(2)が堆積するが、中央付近（ｂ-ｂ'間）ではほぼ全体に黒褐色の砂質土(3)が堆積する。

【出土遺物】東の底面付近から、須恵器の高坏･甕、土師器の高坏･甕などがまとまって出土した。（第426図1227～1235、第427図1236～1238）

【時期】出土遺物から、６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】形状や堆積土・周辺遺構の状況から、性格を判断することができなかった。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ693（溝）（１ｃ区ＳＤ693、１ｄ区ＳＤ502、２ｂ区ＳＤ219、Ｒｃ区ＳＤ063）

【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｊ18・Ｋ18グリッドに位置する。北に隣接する２ｂ区ＳＤ219と一体となる。

【形状・規模】南北に延びる溝で、西及び中央・南の３カ所で大きく撹乱を受けていた。２ｂ区のＳＤ219とは違って、２ｃ区では残存状態がとても悪く、２ｃ区では残存全長9.35m、最大幅3.10m、深さ0.40mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で、南に向かって底面が徐々に平坦となる。

【堆積土】残存状態の良好なｂ-ｂ'間では、上層全体に焼土や炭化物を含む灰黄褐色の砂質土(1)が堆積し、その下層に褐灰色の砂質土(4)などが堆積する。

【出土遺物】埋土中から、須恵器の坏・甕の口縁部が出土した。（第427図1239・1240）

【時期】本遺構は１ｃ区ＳＤ693・１ｄ区ＳＤ502・２ｂ区ＳＤ219・Ｒｃ区ＳＤ063と一体となるもので、時期は中世（13世紀）と考えられる。出土遺物については、周辺遺構などからの混入と考えられる。

【特徴・性格】１ｃ区・１ｄ区・２ｂ区・２ｃ区・Ｒｃ区に及ぶ平面方形を呈する大型の溝の一部分で、全体では東西幅60.25m、南北残存37.00mを測る。形状と時期から判断して、屋敷を囲む方形の屋敷溝であった可能性が高い。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ700（溝）

【位置】 ２ｃ区中央～東側の南寄り、Ｌ21～Ｌ25グリッドにかけて位置する。調査当初は２ｃ区ＳＤ032と呼称していたが、一体となることが判明したため２ｃ区ＳＤ700と呼称を統一した。

【形状・規模】 わずかに湾曲しながら東西に延びる溝で、全長45.20m、最大幅2.60m、深さ0.45mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で、底面は丸底に近い形状である。

【堆積土】 残存状態の良好なb-b'間では、上層に褐灰色やにぶい黄褐色の砂質土(1・3～6)や炭化物を含む灰黄褐色の砂質土(2)が堆積し、下層に黒褐色などの砂質土(7～13)が堆積した。

【出土遺物】 西の埋土中から、須恵器高坏の脚部・瓶の底部、石製の巡方（腰帯具）のほかに、山茶碗や古瀬戸の四耳壺の破片などが出土した。(第427図1241～1245)

【時期】 出土遺物から、７世紀中頃～８世紀と考えられる。中世（13世紀以降）の出土遺物については、後世に混入した可能性が高い。

【特徴・性格】 位置や形状などから、７～８世紀にかけての居住域（集落域）と旧五条川との間に掘削された区画溝であった可能性を考えたが、６～７世紀にかけての居住域（集落域）の区画溝と考えられる２ａ区２面ＳＤ166との比較では、時期･形状･遺物の出土状況などに相違が見られることから、その性格は詳らかではない。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ770（溝）

【位置】 ２ｃ区の中央西寄り、Ｊ21・Ｋ21・Ｌ21グリッドにかけて位置する。調査区外（北）に延びると予測できるが、既に削平されて不明である。

【形状・規模】 わずかに湾曲しながら南北に直線的に延びる溝で、残存全長19.00m、最大幅1.50m、深さ0.32mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で、底面は丸底に近い形状である。

【堆積土】 全体に灰黄褐色の砂質土(1)が堆積し、下層にわずかに褐色の砂質土(2)が堆積する。

【出土遺物】 埋土中から須恵器の蹴・瓶・甕の破片のほか、土師器の甕が出土した。また山茶碗や中世土師器の羽窯も出土している。(第428図1246～1255)

【時期】 出土遺物から、７～８世紀と考えられる。壁面の切り合い関係では、南で重複する２ｃ区ＳＤ700よりも古い時期となる。14世紀以降の出土遺物については、後世に周辺の遺構などから混入した可能性が高い。

【特徴・性格】 直線的な溝で、西に位置する２ｃ区ＳＤ805との中心軸間の距離は10.00m（約33尺）で、一体の遺構となる可能性が考えられたが、詳細は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ785（溝）

【位置】 ２ｃ区の中央西寄り、Ｌ20・Ｌ21グリッドに位置する。

【形状・規模】 東を２ｃ区ＳＤ700によって削平される。東西に延びる小規模な溝で、平面形は、西の溝幅は広いが、中央付近～東では極端に溝幅が狭くなる。残存全長6.10m、最大幅1.40m、深さ0.25mを測る。壁面は直に近く、底面は不整形で北～南に向かって下がる。

【堆積土】 上層に炭化物を含むにぶい黄褐色の砂質土(2)が堆積し、下層ににぶい黄橙色や褐灰色の砂質土(3・4)が堆積する。

【出土遺物】 埋土中から、須恵器と土師器の小破片が出土した。

【時期】 壁面の切り合い関係から２ｃ区ＳＤ700より古い時期と判断でき、層位と出土遺物などから７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】 ２ｃ区ＳＤ700の西端部の延長に位置するが、形状から溜まった雨水が流れた流路で

あった可能性が高い。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ805（溝）

【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｊ20・Ｋ20グリッドに位置する。調査区外（北）に延びると予測できるが、既に削平されて不明である。

【形状・規模】わずかに湾曲しながら南北に直線的に延びる溝で、残存全長10.00m、最大幅1.10m、深さ0.20mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で、底面は丸底に近い形状である。

【堆積土】上層に灰黄褐色の砂質土(1)が堆積し、下層に黄褐色の砂質土(7)などが堆積する。

【出土遺物】埋土中からは、須恵器と土師器（高坏の脚部など）の破片が出土した。

【時期】層位と出土遺物などから、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】直線的な溝で、前述の通り東に位置する２ｃ区ＳＤ770との中心軸間の距離は10.00m（約33尺）で、一体の遺構となる可能性が考えられたが、詳細は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ293（ピット）

【位置】２ｃ区の西側、Ｊ15グリッドの北端に位置する。調査区外（北）に続く。

【形状・規模】平面は推定楕円形で、長軸の長さは不明、短軸1.12m、深さ0.18mを測る。底面は平坦で一部に凹みがある。

【堆積土】中央付近に柱痕と想定される炭粒を含むにぶい黄褐色の砂質土(1)が堆積し、掘方の上層には暗灰黄色の砂質土(2)、下層に焼土・炭化物を含む暗褐色の砂質土(3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から、ほぼ完形の須恵器の坏１点が出土した。（第428図1256）

【時期】出土遺物から、８世紀末頃～９世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】形状と堆積土から、柱穴であった可能性が高い。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ294（ピット）

【位置】２ｃ区の西側、Ｊ15グリッドに位置する。

【形状･規模】平面は推定楕円形で、長軸0.45m、短軸0.35m、深さ0.25mを測る。小規模なピットで、底面は平坦である。

【堆積土】上層に褐灰色やにぶい黄褐色のシルト(1～3)が堆積し、下層に暗褐色などの砂質土(4～7)が縞状に堆積する。

【出土遺物】埋土中から、土師器甕の体部片が出土した。（第428図1257）

【時期】出土遺物から、６～７世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】形状と堆積土から、柱穴と想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ348（ピット）

【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｋ16グリッドに位置する。２ｃ区ＳＸ300と重複する。

【形状・規模】平面は楕円形で、長軸0.82m、短軸0.70m、深さ0.50mを測る。深くしっかりとした掘り込みのピットで、掘方の底面はやや丸底となり、北に柱の当たりが残る。

【堆積土】上層に炭化物を含む灰黄褐色やにぶい黄褐色の砂質土(1・4)や焼土と炭化物を含むにぶい黄褐色の砂質土(3)などが堆積し、下層にも炭化物を含む暗褐色の砂質土(7)などが堆積し、最下層には褐灰色の砂質土(9)が全面に堆積する。

【出土遺物】埋土中から、土錘１点が出土した。（第428図1258）
【時期】出土遺物から、６～７世紀と考えられる。壁面の切り合い関係から、２ｃ区ＳＸ300より新しい時期といえる。
【特徴・性格】形状と堆積土から、柱穴と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ363（ピット）
【位置】２ｃ区の中央西寄り、Ｋ16グリッドに位置する。２ｃ区ＳＸ300内に位置する。
【形状・規模】平面は円形で、直径0.35m、深さ0.15mを測る。掘方の底面は丸底である。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色と灰黄褐色の砂質土(1・2)、下層に灰黄褐色の砂質土(3)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から、須恵器高坏の坏部が出土した。（第428図1259）
【時期】出土遺物から、６世紀後半と考えられる。
【特徴・性格】２ｃ区ＳＸ300の掘方底面で確認できた小規模なピットで、性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ1017（ピット）
【位置】２ｃ区の中央南端、Ｌ19グリッドに位置する。
【形状･規模】平面は不整円形で、長軸0.52m、短軸0.50m、深さ0.25mを測る。掘方の底面は平底である。
【堆積土】上層に炭化物を含む灰黄褐色とにぶい黄橙色の砂質土(1・2)、下層に炭化物を含む灰黄褐色の砂質土(5)などが堆積し、底面付近には焼土を含むにぶい黄橙色の砂質土(7)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から、土師器鍋の把手が出土した。（第428図1260）
【時期】出土遺物から、６～７世紀と考えられる。
【特徴・性格】形状と堆積土から、柱穴と想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ122（溝状遺構）
【位置】２ｃ区の西側北端、Ｊ14グリッドに位置し、調査区外（北）に延びる。
【形状・規模】北を撹乱によって壊され、調査区外（北）に延びることが予測できるため、全体像は不明である。残存長（南北）3.72m、幅（東西）1.65m、深さ0.40mを測る。掘方の壁面はなだらかな傾斜で、底面はやや丸みを帯びる。
【堆積土】上層に炭を含む灰黄褐色やにぶい黄褐色のシルト(1・4)が堆積し、下層には粘性の強い黄灰色の粘質土(12)や褐灰色のシルト(13)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは、須恵器の坏蓋・坏身・甕の破片のほかに少量の土師器破片、砂岩などの石塊が出土した。
【時期】層位と出土遺物などから、７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】溝状に南北に延びる遺構で、その性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ300（竪穴状遺構）
【位置】２ｃ区の西側中央寄り、Ｊ15・Ｊ16・Ｋ15・Ｋ16グリッドに位置する。
【形状・規模】２ｃ区ＳＢ007・２ｃ区ＳＢ008・２ｃ区ＳＩ240・２ｃ区ＳＩ447・２ｃ区ＳＫ277と重複する。平面は凸凹のある不整形で、長軸（東西）16.90m、短軸（南北）10.00m、掘方の深さ0.20mを測る。掘方の壁面は緩やかな斜めで、底面は平坦である。底面から数多くのピットが確認できたが、全てが本遺構に伴うものではない。

【堆積土】東を除くほぼ全体に炭化物と焼土を含む砂質土(1)が堆積し、東では灰黄褐色の砂質土(2)などが堆積する。
【出土遺物】埋土中からは、須恵器や土師器の破片が出土した。
【時期】層位と出土遺物などから、７～８世紀と考えられる。壁面の切り合い関係から、重複する２ｃ区ＳＩ240・２ｃ区ＳＩ447・２ｃ区ＳＫ277よりも古い時期である。
【特徴・性格】大規模な竪穴状遺構で、検出時の形状から、複数の竪穴建物の重複と想定して掘り下げ区画を設定して掘り下げを行ったが、形状や地層断面の観察からは、複数の竪穴建物としての認定はできなかった。性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ597（竪穴状遺構）
【位置】２ｃ区の西側、Ｋ15・Ｌ15グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は不整形で、北西の壁面が突出する。長軸（東西）2.39m、短軸（南北）2.30m、掘方の深さ0.05mを測る。掘方の壁面はなだらかで、底面は平坦である。底面から２ｃ区ＳＰ390・２ｃ区ＳＰ391・２ｃ区ＳＰ460・２ｃ区ＳＰ461のピットが確認できたが、本遺構に伴うものかどうかはわからない。
【堆積土】残存状態が悪く不明である。
【出土遺物】遺物の出土は認められなかった。
【時期】層位などから７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】小規模な竪穴状遺構で、性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ671（竪穴状遺構）
【位置】２ｃ区の中央、Ｋ17・Ｋ18・Ｌ17・Ｌ18グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は不整形で、南東隅が撹乱を受けている。長軸（東西）4.50m、短軸（南北）3.00m、掘方の深さ0.05mを測る。掘方の壁面はなだらかで、底面は平坦である。底面から２ｃ区ＳＰ1095～ＳＰ1097のピットが確認できたが、本遺構に伴うものかどうかはわからない。
【堆積土】残存状態が悪く不明である。
【出土遺物】埋土中からは、須恵器の破片よりも土師器の破片が多く出土した。
【時期】層位と出土遺物などから、６～７世紀初頭と考えられる。壁面で２ｃ区ＳＰ664・２ｃ区ＳＰ670・２ｃ区ＳＰ672と重複し、切り合い関係からこれらのピットよりは古い時期である。
【特徴・性格】竪穴状遺構であるが、性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ691（竪穴状遺構）
【位置】２ｃ区の中央南端、Ｌ18グリッドに位置する。調査区外（南）に続く。
【形状・規模】平面は円形ないしは楕円形と推定でき、南が調査区外となるため全体像は不明である。長軸（南北）は不明、短軸（東西）3.05m、掘方の深さ0.12mを測る。掘方の壁面はなだらかで、底面は平坦である。底面から２ｃ区ＳＰ1119・２ｃ区ＳＰ1120（ピット）が確認できたが、本遺構に伴うものかどうかはわからない。
【堆積土】上層に焼土を含む灰黄褐色の砂質土(1)が部分的に堆積し、下層ににぶい黄褐色の砂質土(2)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から遺物の出土は認められなかった。

【時期】層位などから７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】掘方の掘り込みが浅く、平面が大型土坑を想定させる形状の竪穴状遺構であるが、性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ702（竪穴状遺構）
【位置】２ｃ区の東側、Ｊ23グリッドに位置する。調査区外（北）に続く。
【形状・規模】平面は凹凸のある不整形で、北が調査区外となるため全体像は不明である。長軸（東西）4.94m、掘方の深さ0.06mを測る。掘方の壁面はなだらかな傾斜で、底面は平坦である。底面の中央～西にかけて２ｃ区ＳＰ706･２ｃ区ＳＰ708～ＳＰ713･２ｃ区ＳＰ737､東に２ｃ区ＳＰ707のピットが確認できたが、全てのピットが本遺構に伴うものかどうかはわからない。
【堆積土】上層全体に灰黄褐色の砂質土(1)が堆積し、下層ににぶい黄褐色や灰黄褐色の砂質土(2･3)が堆積する。
【出土遺物】埋土中からは、須恵器と土師器の小破片が出土した。
【時期】層位と出土遺物などから７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】全体像がわからないため、性格不明の竪穴状遺構である。しかしながら、平面が不整形ではあるが、規模から想定して竪穴建物の一部分（南壁に相当する個所）であった可能性も考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ723（竪穴状遺構）
【位置】２ｃ区の中央東寄り北端、Ｊ20～Ｊ23･Ｋ20･Ｋ21グリッドに位置する。調査区外（北）に続く。
【形状・規模】平面は凹凸のある不整形で、北が調査区外となるため全体像は不明である。西は重複する２ｃ区ＳＸ934によって削平される。残存長軸（東西）19.80m、掘方の深さ0.10mを測る。掘方の壁面はなだらかな傾斜で、底面は平坦である。
　底面の南西にかけて２ｃ区ＳＰ798・２ｃ区ＳＰ806・２ｃ区ＳＰ807・２ｃ区ＳＰ811～ＳＰ817・２ｃ区ＳＰ879～ＳＰ883・２ｃ区ＳＰ876～ＳＰ878・２ｃ区ＳＰ935～ＳＰ941といった数多くのピットが確認できた。２ｃ区ＳＰ881･２ｃ区ＳＰ883は２ｃ区ＳＢ006の北側柱と考えられるが、他のピット全てが本遺構に伴うものかどうかはわからない。
【堆積土】２ｃ区ＳＸ934との切り合い関係の判断をしたｂ-ｂ’間の地層断面によれば、上層全体に灰黄褐色の砂質土(4)が堆積し、下層に焼土を含む灰黄褐色の砂質土(5)が堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器坏蓋、陶錘、平瓦破片のほかに、焼骨が出土した。（第428図1261～1263、第429図1264）
【時期】出土遺物から、７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】２ｃ区ＳＸ300同様に、検出時には重複する２ｃ区ＳＸ934と併せてとても規模の大きな竪穴状遺構であったため、複数の竪穴建物の重複と想定して掘り下げ区画を設定して掘り下げを行ったが、形状や地層断面の観察からは、複数の竪穴建物としての認定はできなかった。性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ848（竪穴状遺構）
【位置】２ｃ区の中央北端、Ｊ19・Ｊ20グリッドに位置する。調査区外（北）に続く。
【形状・規模】平面は隅丸方形を想定させるが、遺構の大部分が調査区外となるため全体像は不明で

ある。残存長軸（東西）4.65m、掘方の深さ0.12mを測る。掘方の壁面はやや直に近い傾斜で、底面は平坦である。残存部分がわずかであったため、底面からピットなどを確認することはできなかった。

【堆積土】上層に暗褐色の砂質土(1)が堆積し、下層に褐色やにぶい黄褐色・灰黄褐色の砂質土(2～4)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは、須恵器と土師器の小破片が出土した。

【時期】層位と出土遺物などから、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】全体像がわからないため、性格不明の竪穴状遺構としたが、平面形状から想定して竪穴建物の一部分（南壁に相当する個所）であった可能性が高い。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ934（竪穴状遺構）

【位置】２ｃ区の中央東寄り北端、Ｊ20・Ｊ21グリッドに位置する。調査区外（北）に続く。

【形状・規模】平面は不整形で、北が調査区外となるため全体像は不明である。残存長軸（東西）10.00m、掘方の深さ0.14mを測る。掘方の壁面は緩やかな傾斜で、底面は平坦である。

底面の西を中心に２ｃ区ＳＰ838・２ｃ区ＳＰ960～ＳＰ965・２ｃ区ＳＰ1009～ＳＰ1016・２ｃ区ＳＰ1024・２ｃ区ＳＰ1025といった数多くのピットが確認できた。２ｃ区ＳＰ962は２ｃ区ＳＢ006の北側柱の一つ、２ｃ区ＳＰ964は２ｃ区ＳＢ006の北西隅柱と考えられるが、他のピット全てが本遺構に伴うものかどうかはわからない。

【堆積土】２ｃ区ＳＸ723との切り合い関係の判断をしたｂ-ｂ’間の地層断面によれば、上層全体に灰黄褐色の砂質土(4)が堆積し、下層に灰黄褐色の砂質土(10)などが堆積する。

【出土遺物】埋土中からは、須恵器と土師器の破片が出土した。

【時期】層位と出土遺物などから、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】２ｃ区ＳＸ300同様に、検出時には重複する２ｃ区ＳＸ723と併せてとても規模の大きな竪穴状遺構であったため、複数の竪穴建物の重複と想定して掘り下げ区画を設定して掘り下げを行ったが、形状や地層断面の観察からは、複数の竪穴建物としての認定はできなかった。性格は不明である。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ978（竪穴状遺構）

【位置】２ｃ区の中央、Ｌ19グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は不整楕円形で、壁面の西を２ｃ区ＳＰ979、北を２ｃ区ＳＰ973・２ｃ区ＳＰ974、南を２ｃ区ＳＰ981によって切られている。残存長軸2.30m、短軸2.10m、掘方の深さ0.28mを測る。掘方の壁面はやや直に近い傾斜で、底面は平坦であるが、北隅に長軸1.60m、短軸1.20mの平面不整楕円形の範囲が一段低く下がり、その中央付近に２ｃ区ＳＰ1072が位置する。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色の砂質土(1)が堆積し、その下層に黄褐色やにぶい黄褐色・にぶい黄色の砂質土(2～4)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは、数多くの須恵器と土師器の破片のほかに、砂岩製の砥石の破片も出土した。

【時期】層位と出土遺物などから、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】平面不整楕円形の小型の竪穴状遺構であるが、性格は不明である。

（基峰）

（9）２ｄ区（第224～237図、写真図版225～233）

【遺構名】２ｄ区ＳＫ001（土坑）（Ｒｅ区１面ＳＫ002）

【位置】２ｄ区の西端、D28・E28グリッドに跨って位置する。調査区西側へと続き、Ｒｅ区１面ＳＫ002と一体である。

【形状・規模】平面形状は不整円形である。長軸2.12m、短軸1.96m、深さ0.54mを測る。断面形状はすり鉢状で底面の中央に向かって緩やかに傾斜する。

【堆積土】上層に暗オリーブ褐色、下層に黒褐色、底面に薄く灰黄褐色の粘土が堆積する。それぞれ地山の粘土をブロック状に含み、層の境界は曖昧である。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【時期】層位から中世以降である。周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。

【特徴・性格】周辺にある中世の土坑の中では比較的小さく、堆積土の状況から掘削後短時間で埋め戻されたようである。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ006（土坑）（Ｒｅ区１面ＳＫ012）

【位置】２ｄ区の西端、F28グリッドに位置する。調査区西側へと続き、Ｒｅ区１面ＳＫ012と一体である。

【形状・規模】平面形状は不整長方形である。長軸3.80m、短軸1.52m、深さ0.48mを測り、底面は概ね平坦である。

【堆積土】上層にしまりのよい黒褐色粘土(1)、下層に暗褐色粘土(2・3)が堆積する。層位の境界が他の中世土坑と比較して明瞭で、段階を分けて埋め戻されたと考えられる。

【出土遺物】須恵器の小片が出土したのみである。

【時期】層位から中世以降である。周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。

【特徴・性格】性格は不明であるが、土坑墓の可能性がある。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ008（土坑）

【位置】２ｄ区の西端、F28グリッドに位置する。

【形状・規模】平面形状は不整長方形で、長軸6.04m、短軸2.20m、深さ0.16mを測る。浅く大きい土坑である。

【堆積土】上層に黒褐色のシルト質粘土、下層に暗オリーブ褐色の粘土を多く含むオリーブ褐色の粘土が堆積する。上層埋土は周辺に広がる古代の包含層とほぼ同質である。

【出土遺物】須恵器の小片が出土したのみである。

【時期】堆積土から７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】性格不明の土坑である。２ｄ区ＳＫ051と規模や形状が似通っており関連性があると考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ014（土坑）

【位置】２ｄ区の西側、E29グリッドに位置し、２ｄ区ＳＤ002を切る。

【形状・規模】平面形状は長方形である。長軸2.48m、短軸1.40m、深さ0.56mを測る。垂直に近い角度で掘り込まれ、底面は概ね平坦であるが南側が一段低い。

【堆積土】上層に黒褐色、下層にオリーブ褐色の粘土が堆積する。それぞれ地山の粘土がブロック状に混じる。土層の境界は不明瞭で互いの層が混じり合う。
【出土遺物】埋土中から東濃型山茶碗の口縁部が出土した。（第430図1273）
【時期】出土遺物から14世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ015・２ｄ区ＳＫ018・２ｄ区ＳＫ019と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。短期間に掘って埋められたと考えられ、土坑墓の可能性がある。規模は４基の中で最も小さいが、それが時期による差か被葬者の個人差によるものかは不明である。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ015（土坑）
【位置】２ｄ区の西側、Ｄ29・Ｅ29グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は長方形である。長軸3.24m、短軸1.88m、深さ0.80mを測り、掘方はほぼ垂直に掘られており、底面は北側がやや深いが概ね平坦である。
【堆積土】暗褐色や暗赤褐色の粘土が堆積し、黒色やオリーブ褐色の粘土がブロック状に多く入り交じる。土層の境界は不明瞭で互いの層が混ざり合い、掘った土をそのまま短期間のうちに埋め戻したと考えられる。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみである。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ014・２ｄ区ＳＫ018・２ｄ区ＳＫ019と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。４基の中では３番目に大きい。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ018（土坑）
【位置】２ｄ区の西側、Ｄ29・Ｅ29グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は長方形である。長軸4.24m、短軸2.80m、深さ0.52mを測り、底面は平坦である。
【堆積土】黒褐色やオリーブ褐色の粘土が堆積し、オリーブ褐色の粘土がブロック状に含まれる。
【出土遺物】埋土中から東濃型山茶碗の口縁部が出土した。（第430図1274）
【時期】出土遺物から14世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ014・２ｄ区ＳＫ015・２ｄ区ＳＫ019と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。平面規模は４基の中で最大で、周辺にある同様の中世の土坑と比較しても最大である。性格は不明であるが、土坑墓の可能性があり、規模から複数人の埋葬も考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ019（土坑）
【位置】２ｄ区の西側、Ｄ29・Ｄ30・Ｅ29・Ｅ30グリッドに跨って位置し、２ｄ区ＳＤ002を切る。
【形状・規模】平面形状は長方形である。長軸5.12m、短軸1.48m、深さ0.80mを測り、基本層序Ⅻ層の黒ボク土に達する。底面は若干の凹凸はあるが概ね平坦である。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が主に堆積し、底面に薄く褐灰色の極細粒砂が堆積する。それぞれ黒ボク土が多く含まれる。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみである。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ014・２ｄ区ＳＫ015・２ｄ区ＳＫ018と近接し、一つのグループを形成す

るように掘られた土坑である。幅は狭いが４基の中で最も長く深い。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ021（土坑）
【位置】２ｄ区の西側、Ｅ30グリッドに位置し、２ｄ区ＳＤ022を切る。
【形状・規模】平面形状は不整方形である。長軸1.96m、短軸1.48m、深さ0.38mを測り、底面は平坦である。
【堆積土】暗褐色や黒褐色の粘土が主に堆積し、オリーブ褐色の粘土がブロック状に含まれる。最下層の灰黄褐色のシルト質粘土(4)には流入したと考えられる細粒砂が薄く堆積しており、短期間の開口状態があったと考えられる。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】12～13世紀の溝を切って掘られている。周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】周辺の土坑と同様に土坑墓の可能性が考えられるが、形状が整わず規模も小さく簡素である。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ049（土坑）
【位置】２ｄ区の中央西寄り、Ｅ31グリッドに位置し、２ｄ区ＳＤ047や２ｄ区ＳＫ050を切る。
【形状・規模】平面形状は不整長方形である。長軸2.16m、短軸1.38m、深さ0.64mを測り、基本層序Ⅻ層の黒ボク土まで達する。底面は若干の凹凸があるが概ね平坦である。
【堆積土】灰黄褐色や黒褐色の粘土が主に堆積し、それぞれにぶい黄褐色の粘土や黒ボク土が含まれる。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみである。
【時期】12～13世紀の溝を切って掘られている。周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ050・２ｄ区ＳＫ052・２ｄ区ＳＫ053と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。周辺の土坑と同様に土坑墓の可能性が考えられるが、他の方形の土坑が方位に沿うのに対し、若干北側が西に振れる特徴があり、ある程度の時期差がある可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ050（土坑）
【位置】２ｄ区の中央西寄り、Ｅ31・Ｆ31グリッドに位置し、２ｄ区ＳＫ049に切られる。
【形状・規模】平面形状は隅丸長方形である。長軸3.08m、短軸1.60m、深さ0.52mを測り、底面は若干の凹凸がある。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が主に堆積し、にぶい黄橙色の粘土がブロック状に含まれる。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ049・２ｄ区ＳＫ052・２ｄ区ＳＫ053と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。堆積土から、掘った後に短期間で埋められたようであり、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ051（土坑）
【位置】２ｄ区の中央西寄り、Ｆ31グリッドに位置する。
【形状・規模】２ｄ区ＳＤ047や２ｄ区ＳＫ050に大きく削平されているが、平面形状は長方形と推定される。長軸4.32m、短軸2.32m、深さ0.16mを測る。
【堆積土】上層に黒褐色のシルト質粘土、下層に暗オリーブ褐色の粘土を多く含むオリーブ褐色の粘土が堆積する。上層埋土は周辺に広がる古代の包含層とほぼ同質である。
【出土遺物】土師器の小片が出土したのみである。
【時期】堆積土から７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。２ｄ区ＳＫ008と規模や形状が似通っており関連するものと考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ052（土坑）
【位置】２ｄ区の中央西寄り、Ｆ31グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は円形に近い形状である。長軸1.56m、短軸1.48m、深さ0.64mを測り、基本層序Ⅻ層の黒ボク土まで達する。掘方は垂直に近い角度で掘り込まれ、底面は平坦である。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が主に堆積し、オリーブ褐色の粘土や黒ボク土がブロック状に含まれる。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ049・２ｄ区ＳＫ050・２ｄ区ＳＫ053と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。性格は不明であるが、土坑墓の可能性がある。土坑墓とすれば大人を横たえる大きさではないため、体を曲げて埋葬したか子供の墓であったと考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ053（土坑）
【位置】２ｄ区の中央西寄り、Ｆ31グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は隅丸長方形である。長軸2.68m、短軸1.60m、深さ0.32mを測る。掘方の角度は比較的なだらかで、底面は平坦である。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が主に堆積する。上層は若干しまりが強い。
【出土遺物】須恵器の小片が出土したのみである。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ049・２ｄ区ＳＫ050・２ｄ区ＳＫ052と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ091（土坑）
【位置】２ｄ区の東側、Ｅ38グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は楕円形に近い形状である。長軸1.88m、短軸1.04m、深さ0.32mを測る。掘り込みの角度はなだらかで底面は平坦である。
【堆積土】上層ににぶい黄橙色や黒褐色の粘土を含む灰黄褐色の粘土が堆積し、下層に黒褐色の粘土を多く含むにぶい黄橙色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみである。

【時期】周辺の同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】周辺の中世の土坑と同様に土坑墓の可能性が考えられるが、その中で比較的小規模な土坑であり、近接した位置に同様の土坑が無く、単独で立地している。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ092（土坑）
【位置】２ｄ区の東側、Ｆ37グリッドに位置し、南側のＲｇ区に一部かかる。
【形状・規模】平面形状は長方形である。長軸4.44m、短軸1.60m、深さ0.88mを測る。底面は北側がやや深くなっているが概ね平坦である。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色の粘土、下層に灰黄褐色の粘土が堆積する。それぞれ黒褐色やにぶい黄橙色の粘土がブロック状に含まれる。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみである。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ093と近接して掘られた大型の土坑である。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ093（土坑）
【位置】２ｄ区の東側、Ｆ37グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は長方形である。長軸3.48m、短軸1.72m、深さ0.52mを測り、底面は平坦である。
【堆積土】にぶい黄橙色や灰黄褐色の粘土が主に堆積し、黒褐色の粘土が多く混じる。互いの層の境界は不明瞭で、ほぼ一括で埋め戻されたと考えられる。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】周辺の同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ092と近接して掘られた大型の土坑である。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ105（土坑）
【位置】２ｄ区の東端、Ｄ39グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は隅丸方形である。長軸1.48m、短軸1.16m、深さ0.40mを測る。断面形状は緩やかなすり鉢状である。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が主に堆積し、にぶい黄橙色や黒褐色の粘土がブロック状に含まれる。
【出土遺物】山茶碗の小片が出土したのみである。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ106・２ｄ区ＳＫ107・２ｄ区ＳＫ110と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。４基の中で最も小さく浅い。性格は不明であるが、土坑墓の可能性がある。土坑墓の場合は、規模からみて子供が埋葬された可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ106（土坑）
【位置】２ｄ区の東端、Ｅ39グリッドに位置し、２ｄ区ＳＫ107・２ｄ区ＳＤ108を切る。
【形状・規模】平面形状は隅丸長方形である。長軸1.88m、短軸1.04m、深さ0.24mを測る。掘り込

みの角度は緩やかで、底面は平坦である。
【堆積土】灰黄褐色・黒褐色・黄橙色の粘土が混ざり合って堆積する。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ105・２ｄ区ＳＫ107・２ｄ区ＳＫ110と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。４基の中で平面規模は２番目に小さく、最も浅い。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ107（土坑）
【位置】２ｄ区の東端、D39・D40・E39・E40グリッドに跨って位置する。２ｄ区ＳＫ106に切られ、２ｄ区ＳＤ108を切る。
【形状・規模】平面形状は長方形である。長軸3.08m、短軸1.76m、深さ0.52mを測り、底面は概ね平坦である。
【堆積土】黒褐色の粘土が主に堆積し、オリーブ褐色や暗灰黄色の粘土がブロック状に含まれる。
【出土遺物】埋土中から東濃型山茶碗の口縁部が出土した。（第430図1275）
【時期】出土遺物から14世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ105・２ｄ区ＳＫ106・２ｄ区ＳＫ110と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ110（土坑）
【位置】２ｄ区の東端、D40グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は隅丸長方形である。長軸2.72m、短軸1.88m、深さ0.48mを測り、底面は平坦である。
【堆積土】黒褐色の粘土が主に堆積し、上層にオリーブ褐色の粘土が多く含まれる。
【出土遺物】須恵器や山茶碗の小片が出土したのみである。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】２ｄ区ＳＫ105・２ｄ区ＳＫ106・２ｄ区ＳＫ107と近接し、一つのグループを形成するように掘られた土坑である。性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ111（土坑）
【位置】２ｄ区の東端、F39・F40グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は不整円形である。長軸2.08m、短軸1.92m、深さ0.60mを測る。断面はすり鉢状で底面も緩やかに傾斜する。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が堆積する。上層は黄橙色の粘土が多く含まれややしまりがある。
【出土遺物】土師器の小片が出土したのみである。
【時期】周辺にある同様の土坑と同じく14～15世紀と推定される。
【特徴・性格】性格は不明であるが、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ118（土坑）
【位置】２ｄ区の東端、F40グリッドに位置する。

【形状・規模】平面形状は隅丸長方形である。長軸3.44m、短軸2.32m、深さ0.24mを測り、西が２ｄ区ＳＤ120、東が２ｄ区ＳＤ124と接続する。
【堆積土】黒褐色の粘土が主に堆積し、オリーブ褐色の粘土が多少のばらつきがあるものの全体に混じる。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみである。
【時期】堆積土から７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。溝と溝の中間に位置するため水を貯めるための土坑と考えたが、堆積土からは流水の痕跡は確認できず、むしろ全体を人為的に埋めたように思われる。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ022（溝）（２ｅ区１面ＳＤ094、Ｒｇ区１面ＳＤ017）
【位置】２ｄ区の西寄り、Ｄ30・Ｅ30・Ｆ30グリッドに位置し、２ｄ区ＳＫ021に切られる。
【形状・規模】南北方向の方位に沿って掘られた直線的な溝である。南は２ｅ区１面ＳＤ094・Ｒｇ区１面ＳＤ017へと続き、北は調査区外へ延びる。２ｄ区内で全長22.80m、幅2.19m、深さ0.44mを測る。調査区北寄りの位置で東西方向の溝である２ｄ区ＳＤ002と接続するほか、検出面では接続していなかったが東へ延びる２ｄ区ＳＤ045も本来は接続していた可能性がある。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト質粘土、中層に灰黄褐色の粘土、最下層ににぶい黄橙色の粘土がブロック状に混じる黒褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗が出土した。（第430図1276～1278）
【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】本溝は２ｅ区１面ＳＤ094とＲｇ区１面ＳＤ017と一体となる溝である。同様の２ｄ区ＳＤ047が並行することから、道路に伴う側溝（通水路）であった可能性が高い。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ047（溝）（２ｅ区１面ＳＤ095、Ｒｇ区１面ＳＤ013）
【位置】２ｄ区の中央西寄り、Ｄ31・Ｅ31・Ｆ31グリッドに位置し、２ｄ区ＳＫ049に切られる。
【形状・規模】南北方向の方位に沿って掘られた直線的な溝である。南は２ｅ区１面ＳＤ095・Ｒｇ区１面ＳＤ013へと続き、北は調査区外へ延びる。２ｄ区内で全長22.72m、幅1.72m、深さ0.43mを測る。
【堆積土】上層に暗灰黄色のシルト質粘土、下層に鉄分を多く含む黒褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗が出土した。（第430図1279）
【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】本溝は２ｅ区１面ＳＤ095とＲｇ区１面ＳＤ013と一体となる溝である。同様の２ｄ区ＳＤ022が並行することから、道路に伴う側溝（通水路）であった可能性が高い。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ062（溝）
【位置】２ｄ区の中央西寄り、Ｄ32・Ｅ32グリッドに位置する。
【形状・規模】南北方向の溝である。長さ12.48m、幅1.56m、深さ0.21mを測り、北は調査区外へと延びる。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト質粘土、下層に上層よりもやや色の暗い粘土が堆積する。
【出土遺物】古墳時代前期の土師器の高坏・甕が出土した。（第430図1280～1285）
【時期】出土遺物から３世紀後半～４世紀と考えられる。
【特徴・性格】２ｄ区内では唯一確認された古墳時代前期の遺構である。堆積土が検出面の地山の土

と類似し、遺物の出土がなければ確認できなかったほど不明瞭であった。土壌分析の結果によると古墳時代前期段階では周辺が農耕地であった可能性があり、それに伴う溝の可能性がある。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ078（溝）（２ｅ区１面ＳＤ107）
【位置】２ｄ区の中央東寄り、Ｆ34・Ｆ35グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東方向の溝で、Ｒg区を横切り２ｅ区内で完結する。２ｄ区内で長さ16.00m、幅1.20m、深さ0.16mを測る。
【堆積土】上層に黒褐色のシルト質粘土、下層に灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小片が出土したのみである。
【時期】堆積土から７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ119（溝）
【位置】２ｄ区の南東隅、Ｆ39グリッドに位置する。
【形状・規模】南を２ｄ区ＳＤ112に切られる溝で、残存長2.50m、幅1.31m、深さ0.07mを測る。
【堆積土】暗オリーブ褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器高坏の脚部が出土した。（第430図1286）
【時期】出土遺物から７世紀中頃と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝で、自然地形の可能性がある。

（小島）

（10）２ｅ区（第238～254図、写真図版234～248）

①　１面（上層）

【遺構名】２ｅ区１面ＳＢ001（掘立柱建物）
【位置】２ｅ区１面東側、Ｉ40グリッドに位置する。
【形状・規模】平面長方形の２間×１間構成の側柱構造で、建物の主軸方向はN-２°-Eである。桁行3.12m、梁行2.68m、深さ0.30m、柱間は、桁行1.35m、梁行2.28mを測る。隅柱は北西２ｅ区１面ＳＰ004、北東２ｅ区１面ＳＰ005、南西２ｅ区１面ＳＰ002、南東２ｅ区１面ＳＰ001の４本、側柱は西２ｅ区１面ＳＰ003、東２ｅ区１面ＳＰ005の２本である。柱穴は、平面不整円形で掘方はすり鉢状に掘り込まれる。
【堆積土】２ｅ区１面ＳＰ001では２層の褐色粘質シルト(1・2)の下に、にぶい褐色粘質シルト(3)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ002では上層ににぶい黄褐色粘質シルト(1)、中層に褐色粘質土(2)、下層ににぶい黄褐色粘質シルト(3)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ003では２層の褐色粘質シルト(1・2)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ004では褐色粘質シルト(1)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ005では上層に褐灰色粘質シルト(1)、下層に灰褐色粘質土(2)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ006では上層に褐灰色粘質シルト(1)、その下に2層の褐色粘質土(2・3)が堆積する。
【出土遺物】２ｅ区１面ＳＰ001～ＳＰ004から土師器の小破片が出土している。
【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】小型の掘立柱建物で、隅柱を主柱とした簡易な高床倉庫であったと思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＢ002（掘立柱建物）
【位置】２ｅ区１面西側、Ｉ40グリッドに位置する。
【形状・規模】平面正方形の１間×１間構造の側柱構造で、建物の主軸方向はN-４°-Wである。桁行3.08m、梁行2.76m、深さ0.38m、柱間は、桁行2.62m、梁行2.36mを測る。隅柱は北西２ｅ区１面ＳＰ073、北東２ｅ区１面ＳＰ074、南西２ｅ区１面ＳＰ076、南東２ｅ区１面ＳＰ075の４本である。柱穴は平面円形で、直に掘り込まれている。
【堆積土】２ｅ区１面ＳＰ073では上層に灰黄褐色粘質土(1)が堆積し、その下に２層の暗褐色粘質土(2・3)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ074では２層の地山ブロックの混じる褐灰色粘質土(1・2)の下に、２層の黒褐色粘質土(3・4)、暗赤褐色粘質土(5)、灰褐色粘質土(6)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ075では上層に黒褐色粘質土(1)、下層に柱痕と推定される灰黄褐色粘質土(2)、にぶい黄褐色粘質土(3)が堆積する。２ｅ区１面ＳＰ076では上層に暗赤色粘質土(1)と褐灰色粘質土(2)、下層に暗褐色粘質土(3)、掘方埋土として灰黄褐色粘質土(4)が堆積する。
【出土遺物】２ｅ区１面ＳＰ074より山茶碗の小破片が出土した。
【時期】出土遺物から、12世紀以降と思われる。
【特徴・性格】小型の掘立柱建物で、簡易な倉庫状の建物であったと思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＫ018（土坑）
【位置】２ｅ区１面東側、Ｉ39グリッドに位置する。
【形状・規模】平面が楕円形で、平底の土坑である。長軸0.52m、短軸0.32m、深さ0.08mを測る。
【堆積土】上層に褐灰色粘質シルト(1)、下層ににぶい褐色粘質シルト(2)が堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】隣接する２ｅ区１面ＳＢ001（２ｅ区１面ＳＰ006）の埋土と堆積土が類似していることから、７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格については不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＫ070（土坑）
【位置】２ｅ区１面西側、Ｉ29グリッド南壁面寄りに位置する。
【形状・規模】平面が隅丸長方形、断面が半円形の土坑である。長軸1.20m、短軸0.36m、深さ0.18mを測る。
【堆積土】上層に黄褐色粘質シルトと灰色粘質シルトが混じる灰褐色粘質土(1)、下層に灰色粘質シルトが混じる灰褐色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の有台坏身が出土している。（第431図1290）
【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＫ086（土坑）
【位置】２ｅ区１面西側、H28グリッド、２ｅ区１面ＳＢ002の北側に位置する。
【形状･規模】平面が隅丸方形、断面がゆるい傾斜の逆台形状となる土坑である。長軸1.02m、短軸0.90

m、深さ0.10mを測る。
【堆積土】上層に暗灰黄色粘質土(1)、下層に褐色粘質土(3)が堆積し、その中央に直径0.25mほどの黄灰色粘質土(2)がすり鉢状に堆積する。
【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土した。
【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。
【特徴･性格】性格は不明である。中央部分の堆積土に柱痕らしき部分が確認できたため半裁したが、地山を掘り込むことなく底面となったため、意図的に掘削をしたのか、または柱穴であるのかは不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ023（溝）
【位置】２ｅ区１面東側、E39グリッドに位置する。
【形状･規模】南北に延びる溝である。底面は平底で両壁面は緩やかに傾斜する。長さ7.40m、幅0.90m、深さ0.08mを測る。
【堆積土】褐灰色粘質土(1)が底面まで堆積するが、一部底面付近ににぶい橙色粘質シルト(2)が堆積する部分が認められた。
【出土遺物】土師器鍋の把手が出土している。（第431図1291）
【時期】出土遺物より７世紀と思われる。
【特徴・性格】浅く短い溝で、他の遺構との重複も確認できない。性格は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ025（溝）
【位置】２ｅ区１面東側、Ｉ37～Ｉ39グリッドに位置する。
【形状・規模】緩やかに北東～南西へ延びる溝である。底面は平底で、両壁面は底面よりやや外側に開いている。残存長14.90m、幅0.40m、深さ0.10mを測る。
【堆積土】上層に暗赤色粘質シルト(1)、下層ににぶい赤褐色粘質シルト(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土している。
【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。
【特徴・性格】本溝の西端は２ｅ区１面ＳＤ064・２ｅ区１面ＳＤ065によって削られ、東端はI39グリッド西側で消滅する。２ｅ区１面ＳＤ064西側の２ｅ区１面ＳＫ067に削られる２ｅ区１面ＳＤ068が、本溝の延長線上に位置することから、おそらく２ｅ区１面ＳＤ068と一体の溝であったと考えられる。また、東側の２ｅ区１面ＳＤ113も同様に２ｅ区１面ＳＤ025と同一の溝と考えられる。２ｅ区１面ＳＤ113の北側には同じ軸方向で２ｅ区１面ＳＤ114が並行していることから、本溝の北側にも並行する溝があった可能性が高い。２条の溝が並行していることから、この間は道路であった可能性が高く、道路側溝（通水路）であったと考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ026（溝）
【位置】２ｅ区１面東側、Ｉ38グリッド、中央に位置する。
【形状・規模】南北に延びる溝である。底面は丸底で、両壁面は底面から緩やかに外側に傾斜しながら上がっていく。長さ4.26m、幅0.54m、深さ0.18mを測る。
【堆積土】上層に褐灰色粘質土(1)、下層に明褐色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小破片が出土している。

【時期】出土遺物より７世紀と思われる。
【特徴・性格】２ｅ区１面ＳＤ027の東側部分に幅広い地点があるが、本溝の南延長線上に位置するので、おそらく一体の溝であったと考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ027（溝）
【位置】２ｅ区１面東側、Ｉ37・Ｉ38グリッド、南側に位置する。
【形状･規模】東西に延びる溝である。底面は平底で、両壁面は底面よりやや外側に開く形状である。長さ10.06m、幅1.22m、深さ0.07ｍを測る。
【堆積土】にぶい褐色粘質土(1・2)と浅黄色粘質シルト(3)が堆積している。
【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土している。
【時期】出土遺物より７世紀と思われる。
【特徴・性格】２ｅ区１面ＳＤ026と一体になると考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ029（溝）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ39グリッド、南端に位置する。調査区外（南）へ延びる。
【形状･規模】東西に延びる溝と思われるが､全容は不明である。残存長9.70m､残存幅0.62m､深さ0.27ｍを測る。
【堆積土】上層に褐灰色粘質土(1)、中層に灰褐色粘質土(2)、にぶい褐色粘質土(3)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋が出土している。(第431図1292)
【時期】出土遺物より８世紀中頃と思われる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ030（溝）（１ａ区ＳＤ019、１ｂ区ＳＤ117、１ｅ区１面ＳＤ006、２ａ区１面ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028、Ｒｂ区１面ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140、Ｒｆ区１面ＳＤ024）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ28～Ｉ36グリッドに位置する。
【形状・規模】東西に延びる溝で、Ｉ34グリッド内で緩やかに南寄りとなる。壁面は急な傾斜で掘り込まれ、底面は平底である。長さ95.50m、幅1.50m、深さ0.41ｍを測る。
【堆積土】上層に灰褐色粘質土が堆積し、下層に灰色粘質土・灰黄褐色粘質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋・高坏、灰釉陶器の埦・皿、山茶碗の碗、青磁の碗、平瓦が出土している。(第431図1293～1307・第432図1308)
【時期】出土遺物などから13～15世紀と思われる。
【特徴・性格】全調査区に渡って延びる溝である。すぐ南側に２ｅ区１面ＳＤ050が並行することから、本溝と２ｅ区１面ＳＤ050の間は道路であった可能性が高く、道路側溝（通水路）と考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ050（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ003、２ａ区１面ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ28～Ｉ35グリッドに位置する。
【形状・規模】東西に延びる溝で、Ｉ34グリッド内で緩やかに南寄りとなる。壁面は急峻な傾斜で掘

り込まれ、底面は平底である。残存長79.00m、幅0.90m、深さ0.54mを測る。
【堆積土】上層は灰黄褐色粘質シルトが堆積し、下層に褐灰色粘質土・黄灰色シルト細砂・灰色粘質土が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗、丸瓦・平瓦が出土している。（第432図1309～1312）
【時期】出土遺物などから13～15世紀と思われる。
【特徴・性格】全調査区に渡って延びる溝である。すぐ北側に２ｅ区１面ＳＤ030が並行することから、本溝と２ｅ区１面ＳＤ030の間は道路であった可能性が高く、道路側溝（通水路）と考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ064（溝）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ37・H37～H40・G40グリッドに位置する。
【形状・規模】緩やかに北東～南西へ延びる溝で、Ｒｇ区へと続く。H37グリッド内で急激に南に向きを変え、２ｅ区１面ＳＤ030と合流する。壁面は急な傾斜で掘り込まれ、底面は平底である。残存長38.00m、幅1.20m、深さ0.72mを測る。
【堆積土】上層は灰褐色粘質土が堆積し、下層に灰色粘質土・灰黄褐色粘質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の有台坏身、山茶碗の碗が出土している。（第432図1315～1320・第433図1321）
【時期】出土遺物などから13世紀と思われる。
【特徴・性格】南側および東側を並行する２ｅ区１面ＳＤ065とは異なる堆積土であることから、２つの溝の時期は若干異なると考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ065（溝）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ37・H37～H40・G40グリッドに位置する。
【形状・規模】緩やかに北東～南西へ延びる溝で、Ｒｇ区へと続く。H37グリッド内で急激に南の方向に向きを変え、２ｅ区１面ＳＤ030に合流する。壁面は急な傾斜で掘り込まれ、底面は平底である。残存長38.00m、幅1.00m、深さ0.60mを測る。
【堆積土】上層に灰赤色粘質土が堆積し、下層に黄灰褐色粘質土・灰色粘質土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の広口瓶、山茶碗の碗・皿が出土している。（第433図1322～1324）
【時期】出土遺物などから13世紀と思われる。
【特徴・性格】北側および西側に２ｅ区１面ＳＤ064が並行するが、本溝と異なる堆積土であり、本溝から出土した遺物の時期が若干新しいことから、２ｅ区１面ＳＤ064よりも若干新しい時期と考えられる。２ｅ区１面ＳＤ064が何らかの理由により使用できなくなったため、同規模の溝が改めて掘削された可能性が考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ113（溝）
【位置】２ｅ区１面、H39・H40グリッドに位置する。調査区外（東）へ延びる。
【形状・規模】緩やかに北東～南西へ延びる溝で、断面は半円形である。残存長10.40m、幅0.54m、深さ0.15mを測る。
【堆積土】にぶい赤褐色粘質シルト(1)、その下に暗赤褐色シルト細砂(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の広口壺が出土している。（第433図1329）
【時期】出土遺物から７～８世紀と思われる。
【特徴･性格】本溝は、２ｅ区１面ＳＤ025の延長線上に位置することから、おそらく一体の溝であっ

たと考えられる。北側に２ｅ区１面ＳＤ114が並行していることから、本溝と２ｅ区１面ＳＤ114の間は道路であった可能性が高く、道路側溝（通水路）と考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ114（溝）
【位置】２ｅ区１面、H39・H40グリッドに位置する。
【形状･規模】緩やかに北東～南西へ延びる溝で、断面は半円形である。長さ9.14m、幅0.42m、深さ0.08ｍを測る。
【堆積土】にぶい赤褐色粘質シルト(1・2)が堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】並行する２ｅ区１面ＳＤ113と対をなすと考えられるので、７～８世紀と思われる。
【特徴・性格】南側に２ｅ区１面ＳＤ113が並行するので、本溝と２ｅ区１面ＳＤ113の間は道路であった可能性が高く、道路側溝（通水路）と考えられる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ021（ピット）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ39グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は楕円形で、緩やかな傾斜で掘り込まれ、平底である。残存長軸0.64m、短軸0.38m、深さ0.06ｍを測る。
【堆積土】褐色粘質シルト(1)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小破片が出土している。
【時期】出土遺物から７～８世紀と思われる
【特徴・性格】隣接する２ｅ区１面ＳＸ020によって北側端部を削平される。性格については不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ034（ピット）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ33グリッド、南東隅に位置する。
【形状･規模】平面は円形で、急な傾斜で掘り込まれ、平底である。長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.14ｍを測る。
【堆積土】上層に灰赤色粘質土(1)、下層に灰褐色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器・土師器の小破片が出土している。
【時期】出土遺物から７～８世紀と思われる。
【特徴･性格】堆積土が２ｅ区１面ＳＰ037と類似していることから、同一時期と思われる。形状から、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ035（ピット）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ33グリッド、南東隅に位置する。
【形状･規模】平面は不整円形で、断面は半円形である。長軸0.52m、短軸0.48m、深さ0.14ｍを測る。
【堆積土】上層に灰褐色粘質シルト(1)が堆積し、下に灰褐色粘質土(2)・灰黄褐色粘質土(3)・灰黄色粘質土(4)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小片が出土している。
【時期】出土遺物から７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】周辺のピットと比べるとやや大きめであるが、性格は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ037（ピット）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ33グリッド、南東隅に位置する。
【形状・規模】平面は楕円形、急な傾斜で掘り込まれ、平底である。長軸0.30m、短軸0.24m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】上層に灰赤色粘質土(1)、下層に灰褐色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小破片が出土している。
【時期】出土遺物から７～８世紀と思われる。
【特徴･性格】堆積土が２ｅ区１面ＳＰ034と類似していることから､同一時期と考えられる｡形状から、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ054（ピット）
【位置】２ｅ区１面、Ｉ35グリッド、中央に位置する。
【形状･規模】２ｅ区１面ＳＤ030に南側を削平されているため､全体は不明である。平面は楕円形で、緩やかな傾斜で掘られる。長軸1.90m、残存短軸1.02m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】上層に灰褐色粘質シルト(1)、下層に暗灰黄色粘質シルト(2)が堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】２ｅ区１面ＳＤ030によって削平されていることから、13世紀以前と考えられる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ088（ピット）
【位置】２ｅ区１面、H31グリッドに位置する。
【形状・規模】平面は楕円形で、断面はすり鉢状である。長軸0.48m、短軸0.38m、深さ0.09mを測る。
【堆積土】上層に灰褐色粘質シルト、下層ににぶい黄色粘質シルトが堆積する。
【出土遺物】土師器の小破片が出土している。
【時期】２ｅ区１面ＳＤ030の埋没後に掘り込まれていることから、15世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ097（ピット）
【位置】２ｅ区１面、H31グリッドに位置する。
【形状･規模】平面は不整楕円形で、ゆるい傾斜で掘り込まれ、平底である。長軸0.38m、短軸0.30m、深さ0.06mを測る。
【堆積土】上層は黄褐色粘質土(2)に褐灰色粘質土(1)が入り込んだ堆積で、下層は灰黄色粘質シルトが堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】堆積土が２ｅ区１面ＳＰ035に類似していることから、７～８世紀と思われる
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＸ020（不明遺構）

【位置】２ｅ区１面、Ｉ39グリッド、南側に位置する。

【形状･規模】東西に延びる溝状を呈し、断面はゆるい傾斜のすり鉢状である。長さ5.86m、最大幅1.70m、深さ0.13mを測る。

【堆積土】上層に褐灰色粘質シルト(1)、下層に灰黄褐色粘質シルト(2)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の小破片が出土している。

【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】本遺構の東側にある２ｅ区１面ＳＫ019とは途切れてしまっているが、本来は一体のものと思われる。

（後藤秀）

② ２面（下層）

【遺構名】２ｅ区２面ＳＩ121（ＳＬ132）（竪穴建物）

【位置】２ｅ区２面、Ｉ39・Ｉ40グリッド、南端に位置する。調査区外（南）に続く。

【形状・規模】建物の大半が調査区外（南）となる。さらに調査区南壁面との境に沿って２ｅ区２面ＳＤ131が位置するため、壁際溝（壁溝）の一部とカマドを確認するにとどまった。平面隅丸方形の竪穴建物と思われるが、柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。壁際溝（壁溝）がカマド部分を除いた北壁面と東西壁面に掘られる。北壁面の一部が突出しカマドを付設する。規模は長辺4.70m、残存短辺1.40m、壁際溝（壁溝）の深さ0.08mを測り、建物の主軸方向はN-15°-Eである。カマドは地下水の影響と思われる浸食が進んでいた。カマドは残存で長さ0.62m、幅0.98m、幅1.28m、深さ0.16mを測る。

【堆積土】壁際溝（壁溝）には褐灰色粘質シルト(1)が堆積し、床面には灰褐色粘質シルト(3)が堆積する。カマドの上層には明褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状・マーブル状に混じる褐灰色粘質土(3)、中層ににぶい赤褐色粘質シルト(4)、下層に灰褐色粘質シルト(5)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の高坏、土師器の甕が出土した。（第435図1347～1350）

【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と思われる。

【特徴・性格】２ｅ区２面ＳＩ133と重複しており、堆積土の状況から建て替えが考えられる。

【遺構名】２ｅ区２面ＳＩ133（竪穴建物）

【位置】２ｅ区２面、Ｉ39・Ｉ40グリッド、南端に位置する。

【形状・規模】２ｅ区２面ＳＩ121と重複している。２ｅ区２面ＳＩ121と同様にその大半が調査区外（南）となり、調査区南壁面との境に沿って２ｅ区２面ＳＤ131が位置するため、東側の壁際溝（壁溝）の一部分を確認するにとどまった。壁際溝（壁溝）は南北に残存0.70m、東西に残存0.60mを測る。

【堆積土】壁際溝（壁溝）には褐灰色粘質シルト(2)が堆積する。

【出土遺物】特になし。

【時期】２ｅ区２面ＳＩ121の下層にあることから、７世紀前半以前と思われる。

【特徴・性格】２ｅ区２面ＳＩ121と重複しており、堆積土の状況から、本建物から２ｅ区２面ＳＩ121への建て替えがあったと考えられる。

【遺構名】２ｅ区２面ＳＤ117（溝）

【位置】 ２ｅ区２面、Ｈ40・Ｉ40グリッドに位置する。調査区外（東）へ延びる。
【形状・規模】北西～南東へ延びる溝である。壁面は直に掘り込まれ、底面は平底である。残存長13.80m、幅1.28m、深さ0.06mを測る。
【堆積土】暗灰褐色粘質土(1)が堆積する。
【出土遺物】土師器の小破片が出土している。
【時期】出土遺物から６～７世紀と思われる。
【特徴・性格】２ｅ区２面から検出された溝の中で、唯一北西～南東方向に延びる。

【遺構名】２ｅ区２面ＳＤ118（溝）
【位置】２ｅ区２面、Ｇ40・Ｈ38～Ｈ40・Ｉ37～Ｉ39グリッドに位置する。調査区外（東）へ延びる。
【形状･規模】北東～南西へ延びる溝である。壁面はやや急な傾斜で掘り込まれ、底面は平底である。残存長30.00m、幅1.80m、深さ0.18mを測る。
【堆積土】上層には灰褐色粘質土と、それに挟まれ赤灰色粘質土が逆台形状に堆積し、その下層ににぶい赤褐色粘質土が堆積する。
【出土遺物】土師器の有段口縁壺の破片が出土した。（第435図1352・1353）
【時期】出土遺物から４世紀後半～５世紀と考えられる。
【特徴・性格】２ｅ区２面で最も古い時期の遺構である。他に同時期の遺構が確認できなかったことから、この溝の性格や機能については不明である。土層の堆積状況から本溝は一度埋没してから、再度掘削された可能性も考えられる。

（後藤秀）

（11）Ｒａ区（第255～276図、写真図版249～263）

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ001（掘立柱建物）
【位置】Ｒａ区の中央、Ｇ７グリッドに位置する。
【形状･規模】平面長方形の３間×３間の総柱構造で、建物の主軸方向はＮ-５°-Ｅである。推定桁行5.30m、梁行4.70m、柱間は桁行1.50m、梁行1.10m、柱穴の深さ0.30mを測る。
隅柱は南東Ｒａ区ＳＰ102、南西Ｒａ区ＳＰ117、北西Ｒａ区ＳＰ094、北東Ｒａ区ＳＰ063の４本で、側柱は東Ｒａ区ＳＰ053・Ｒａ区ＳＰ069、西Ｒａ区ＳＰ066のみ、南Ｒａ区ＳＰ120・Ｒａ区ＳＰ125、北Ｒａ区ＳＰ064・Ｒａ区ＳＰ065の７本である。重複するＲａ区ＳＩ072によって西の柱穴の一つが削平されており、南西の隅柱であるＲａ区ＳＰ117は痕跡のみが残る状態であった。建物内部の中柱はＲａ区ＳＰ054・Ｒａ区ＳＰ055・Ｒａ区ＳＰ068・Ｒａ区ＳＰ121の４本である。隅柱４本と側柱推定８本、中柱４本の合計16本の柱穴で構成される。
柱穴は、平面が不整楕円形ないしは不整方形に近く、掘り込みは深くしっかりとしていて、底面は平坦なものが多い。Ｒａ区ＳＰ063・Ｒａ区ＳＰ065・Ｒａ区ＳＰ068・Ｒａ区ＳＰ069・Ｒａ区ＳＰ094・Ｒａ区ＳＰ125の底面には柱の当たりが残っていた。
【堆積土】北の柱穴列であるＲａ区ＳＰ063では柱痕に粘性の強い灰黄褐色の粘質土(3・4)、掘方埋土には粘性の強い灰黄褐色・褐色などのシルトや粘質土(5～10)が堆積する。
【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。
【時期】層位と重複するＲａ区ＳＩ072から７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】主軸を南北方位に合わせた掘立柱建物である。総柱構造で、隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱で、穀物などを保管した高床建築の倉庫と考えられる。本建物の北に位置する１ｂ区ＳＢ005、北東に位置する１ｂ区ＳＢ007・Ｒａ区ＳＢ008・１ｂ区ＳＢ010の総柱構造の掘立柱建物と併せて、高床倉庫群を形成していたことが考えられ、所謂「正倉」のひとつであった可能性が高い。

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ002（掘立柱建物）

【位置】Ｒａ区の中央西寄り、Ｇ４・Ｇ５グリッドに位置する。

【形状・規模】平面正方形の２間×２間の総柱構造で、建物の主軸方向はＮ-40°-Ｗである。桁行4.20ｍ、梁行4.00ｍ、柱間は桁行1.75ｍ、梁行1.54ｍ、柱穴の深さ0.25ｍを測る。

隅柱は東Ｒａ区ＳＰ215、西Ｒａ区ＳＰ130、南Ｒａ区ＳＰ140の３本で、北は重複するＲａ区ＳＤ001によって削平されている。側柱は北東Ｒａ区ＳＰ133、南西Ｒａ区ＳＰ131、南東Ｒａ区ＳＰ124、北西Ｒａ区ＳＰ129の４本で、建物内部の中柱はＲａ区ＳＰ132の１本である。隅柱推定４本、側柱４本、中柱１本の９本の柱穴によって構成される。Ｒａ区ＳＰ214・Ｒａ区ＳＰ215は重複するＲａ区ＳＩ160によって削平をうけて、底面のみが残る状態であった。

柱穴の平面は楕円形で、いずれも丸みを帯びた椀状の掘り込みで、底面は丸底である。Ｒａ区ＳＰ140・Ｒａ区ＳＰ214の底面のみ柱の当たりが残っていた。

【堆積土】柱穴には上層に灰黄褐色(1)、下層に灰黄色や褐色など(2)の粘性の弱いシルトが堆積する。

【出土遺物】Ｒａ区ＳＰ129の埋土中から土錘が出土した。（第436図1362）

【時期】層位と重複する遺構（Ｒａ区ＳＩ160）や建物方向・出土遺物から、６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】北東～南西に主軸方位を向けた掘立柱建物である。総柱構造で、隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱で、穀物などを保管した高床建築の倉庫と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ003（掘立柱建物）

【位置】Ｒａ区の西側、Ｆ３・Ｇ３グリッドに位置する。

【形状・規模】平面正方形の２間×２間の総柱構造で、建物の主軸方向はＮ-35°-Ｗである。桁行4.30ｍ、梁行4.20ｍ、柱間は桁行・梁行ともに1.70ｍ、柱穴の深さ0.38ｍを測る。

隅柱は東Ｒａ区ＳＰ181、西Ｒａ区ＳＰ189、南Ｒａ区ＳＰ187、北Ｒａ区ＳＰ183の４本で、側柱は南東Ｒａ区ＳＰ184、南西Ｒａ区ＳＰ188、北東Ｒａ区ＳＰ182、北西Ｒａ区ＳＰ186の４本、中柱はＲａ区ＳＰ185の１本で、合計９本の柱穴で構成される。

柱穴の平面は楕円形で、いずれも丸みを帯びた椀状の掘り込みで、東の隅柱Ｒａ区ＳＰ181の底面は平坦であるが他はいずれも底面は丸底である。Ｒａ区ＳＰ184・Ｒａ区ＳＰ189の底面には柱の当たりが残っていた。

【堆積土】北のＲａ区ＳＰ181・Ｒａ区ＳＰ182では上層ににぶい黄褐色(1)、下層に灰黄褐色(2)や褐灰色(3)の粘性の弱いシルトが堆積する。

【出土遺物】Ｒａ区ＳＰ188の埋土中から土師器甕の口縁部が出土した。（第436図1363）

【時期】出土遺物から６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】北東～南西に主軸方位を向けた掘立柱建物で、Ｒａ区ＳＢ002と同じ方位・構造（２間×２間の総柱構造）である。隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱で、穀物などを保管した高床建築の倉庫と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ004（掘立柱建物）

【位置】Ｒａ区の西側、Ｆ１・Ｆ２・Ｇ１・Ｇ２グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の３間×３間の側柱構造で、建物の主軸方向はN-80°-Wである。桁行9.20ｍ、梁行7.80ｍ、柱間は桁行2.60ｍ、梁行2.40ｍ、柱穴の深さ0.40ｍを測る。

確認できた隅柱は南西Ｒａ区ＳＰ223、北西Ｒａ区ＳＰ206、北東Ｒａ区ＳＰ203の３本で、南東の隅柱は既に削平されていたため不明である。側柱は東Ｒａ区ＳＰ201・Ｒａ区ＳＰ202、西Ｒａ区ＳＰ207・Ｒａ区ＳＰ221、南Ｒａ区ＳＰ210のみ、北Ｒａ区ＳＰ204・Ｒａ区ＳＰ205の７本であるが、本来は隅柱と側柱を合わせて12本の柱穴で構成さていたことが予測できる。

柱穴は、平面が不整長方形ないしは不整楕円形で、掘り込みは深くしっかりとしていて、底面はＲａ区ＳＰ204・Ｒａ区ＳＰ210を除いて平坦である。Ｒａ区ＳＰ063・Ｒａ区ＳＰ065・Ｒａ区ＳＰ068・Ｒａ区ＳＰ069・Ｒａ区ＳＰ094・Ｒａ区ＳＰ125・Ｒａ区ＳＰ210の底面には柱の当たりが残っていた。南西の隅柱Ｒａ区ＳＰ223とその北に位置する西の側柱Ｒａ区ＳＰ221の下位には、双方の柱穴の間を繋ぐように溝（Ｒａ区ＳＤ222）が存在し、一部分ではあるが布掘り構造であった可能性が考えられる。

【堆積土】残存状態の良好であった西中央Ｒａ区ＳＰ207では、上層全体に粘性の強い灰黄褐色の粘質土(1)が堆積し、その下層に柱痕である酸化鉄を含むにぶい黄褐色の粘質土(2)とその周囲に掘方埋土として粘質土やシルト(3～8)が堆積する。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に顕著な遺物の出土はなかった。

【時期】層位や建物方向から判断して７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

【特徴・性格】桁行を東西にとり、梁行をほぼ南北方位に合わせた規模の大きな掘立柱建物である。側柱構造で、隅柱が支柱、側柱が束柱で、高床建築の建物と考えられる。側柱のみの構造であることから、重い穀物類を保管した倉庫の可能性は低いといえる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ005（掘立柱建物）

【位置】Ｒａ区の西側、Ｇ１・Ｇ２グリッド、Ｒａ区ＳＢ004の内側南寄りに位置する。

【形状・規模】平面長方形の２間×２間の総柱構造と推定でき、建物の主軸方向はN-84°-Wである。桁行5.05ｍ、梁行3.98ｍ、柱間は桁行2.30ｍ、梁行1.65ｍ、柱穴の深さ0.20ｍを測る。

北東の隅柱と東の側柱は、既に削平されていて確認できなかった。隅柱は南東Ｒａ区ＳＰ208、南西Ｒａ区ＳＰ200、北西Ｒａ区ＳＰ198の３本で、側柱は西Ｒａ区ＳＰ199、南Ｒａ区ＳＰ195、北Ｒａ区ＳＰ197の３本､建物内部の中柱はＲａ区ＳＰ196の１本である。既に削平されていた２本を含めて、合計10本の柱穴で構成されていたと考えられる。

柱穴は、平面が不整円形で、いずれも掘り込みは浅く、底面は丸底に近く柱の当たりは確認できなかった。

【堆積土】南西隅のＲａ区ＳＰ200では上層ににぶい黄褐色の粘質土(1)､下層に暗灰黄色の粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】柱穴から遺物の出土はなかった。

【時期】層位や建物方向から判断して８世紀初頭以降と考えられる。

【特徴・性格】桁行を東西にとり、梁行をほぼ南北方位に合わせた小型の掘立柱建物である。隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱で、総柱構造であるが中柱Ｒａ区ＳＰ196の規模が小振りであるため、床束

建築の倉庫と考えられる。Ｒａ区ＳＢ004と重複関係にあるが、双方の柱穴の切り合い関係によって新旧関係が判断できる場所はなかった。建物方向からＲａ区ＳＢ004より新しい時期と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ008（１ｂ区ＳＢ008）（掘立柱建物）

【位置】Ｒａ区の東側、Ｆ９・F10・Ｇ９・G10グリッドに位置し、建物の大半は１ｂ区となる。

【形状・規模】平面長方形の６間×３間の総柱構造で、建物の主軸方向はＮ-87° -Ｗである。桁行11.00ｍ、梁行5.60ｍ、柱間は桁行1.60ｍ、梁行1.80ｍ、柱穴の深さ0.40ｍを測る。

１ｂ区での調査では柱穴の形状などの若干の相違から、東西２軒の総柱構造の掘立柱建物として調査を進めたが、Ｒａ区にて建物の南部分の調査を終了し、建物の全体像が把握できた段階で再度検討を行い１軒の建物と判断した。

隅柱は南東Ｒａ区ＳＰ021、南西Ｒａ区ＳＰ027、北西１ｂ区ＳＰ179、北東１ｂ区ＳＰ200の４本で、東西の側柱は東で１ｂ区ＳＰ198・１ｂ区ＳＰ199、西で１ｂ区ＳＰ180・１ｂ区ＳＰ181の東西４本、南北の側柱は南でＲａ区ＳＰ022～ＳＰ026、北で１ｂ区ＳＰ184・１ｂ区ＳＰ187・１ｂ区ＳＰ190・１ｂ区ＳＰ194・１ｂ区ＳＰ197の南北10本で、建物内部の中柱は１ｂ区ＳＰ182・１ｂ区ＳＰ183・１ｂ区ＳＰ185・１ｂ区ＳＰ186・１ｂ区ＳＰ188・１ｂ区ＳＰ189・１ｂ区ＳＰ191・１ｂ区ＳＰ192・１ｂ区ＳＰ195・１ｂ区ＳＰ196の10本である。隅柱・側柱・中柱を合わせて28本の柱穴で構成される。

また北東の隅柱１ｂ区ＳＰ200とその西に位置する側柱１ｂ区ＳＰ197は、いずれも平面が南北に延びる布掘り状の形状を呈するが、他の柱穴の平面は不整楕円形ないしは不整方形で、いずれもしっかりと深く掘り込んである。柱穴の底面は椀状の丸底を呈するものが多いが、平坦な形状のものも認められた。１ｂ区ＳＰ180・１ｂ区ＳＰ181・１ｂ区ＳＰ182・１ｂ区ＳＰ184・１ｂ区ＳＰ185・１ｂ区ＳＰ188では、底面に柱の当たりが残っていた。

【堆積土】西ないし北から２列目で礎板が出土した１ｂ区ＳＰ183では、柱穴全体に黄灰色の粘質土(1・8)が堆積し、底面付近から礎板(3)が出土している。南西の隅柱であるRa区SP027では、中央に柱痕と考えられる灰色粘土ブロックを含む灰黄褐色の粘質土(1)、その周囲の掘方埋土として黒色粘土ブロックを含む灰黄褐色の粘質土(2)、下層にはにぶい黄褐色や黄褐色の粘質土(3・4)が堆積する。

【出土遺物】１ｂ区ＳＰ181の埋土中から須恵器坏身の底部が出土した。また、Ｒａ区ＳＰ025・１ｂ区ＳＰ180・１ｂ区ＳＰ183の底面付近から礎板（ヒノキ）が出土している。（第436図1364～1368）

【時期】柱穴から出土した須恵器坏身や建物方向から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。１ｂ区ＳＰ180出土の礎板（ヒノキ）の放射性炭素年代測定では、４～５世紀の年代観が得られているが、古木効果による測定年代より新しい時期の年代が指摘されており（第４章第１節参照）、時期には相違ないと考えられる。

【特徴・性格】本建物は、桁行を東西にとり、梁行をほぼ南北方位に合わせた大型の掘立柱建物である。総柱構造で、隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱で、穀物などを保管した高床建築の倉庫と考えられ、形状から長倉（横倉）といえる。本建物の東に位置する１ｂ区ＳＢ010、西に位置する１ｂ区ＳＢ005・１ｂ区ＳＢ007、南西に位置するＲａ区ＳＢ001の総柱構造の掘立柱建物と併せて、高床倉庫群を形成していたことが考えられ、形状と配置から本建物がその中心となっていたことが推定される。所謂「正倉」の中心となる高床倉庫と考えられる。また、以下の判断から本建物の南面に出入口があった可能性が高い。

本建物の南東では遺構の存在が認められず、遺構検出面の表面が硬化した範囲（硬化面の広がり）が認められたため、広場状の空間が存在していたことが予想できた。この範囲をＲａ区ＳＤ008南東

硬化面として、トレンチを南北方向に設定して掘り下げを行い、堆積土の確認を実施した。その結果、上層に厚さ0.05～0.10mほどの黒色粘土を少量含んだ粘性としまりの強い灰黄色の粘質土(1)、下層に粘性としまりの強い黒色の粘質土（２・基本層序Ⅴ層相当）が堆積し、上層土(1)がＲａ区遺構検出面の地層（基本層序Ⅳ層）に相当しないため、Ｒａ区ＳＢ008南東にて部分的な土壌改良が行われていたことが考えられた。土壌改良の痕跡や原因などを自然科学の分析方法によって探るために、トレンチ内土壌の微細物分析を実施した結果、土壌中から微細ではあるがアリ科などの昆虫片が確認できた（第４章第８節参照）。昆虫片が、土壌改良とどのように関係するのかは詳らかでないが、土壌改良に伴う土の移動などに関連することも想定される。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ043（竪穴建物）

【位置】Ｒａ区の中央東寄り、Ｆ８・Ｇ８グリッドに位置する。

【形状・規模】北～西にかけての大部分が既に削平されていたが、平面隅丸正方形と推定される竪穴建物で、南壁面が突出しカマドを付設する。建物の主軸方向はN-28°-Eである。残存長2.60m、幅2.50mで、深さ0.10mを測る。

掘方は浅くて、底面は平坦である。壁際溝（壁溝）は認められない。底面の東寄りにＲａ区ＳＰ044・Ｒａ区ＳＰ103・Ｒａ区ＳＰ104が位置する。Ｒａ区ＳＰ103は平面楕円形、Ｒａ区ＳＰ104は平面円形で、いずれも深さ0.10mほどのピットで、本建物に伴う主柱穴と考えられる。

【堆積土】建物本体の埋土はにぶい黄褐色の粘質土(1)で、カマドには焼土や炭化物を含む暗灰黄色の粘質土(8)や焼土を含む褐灰色の粘質土など(3・5～7)が堆積する。

【出土遺物】カマド付近の埋土中から土師器の小型甕が出土した。（第436図1370）

【時期】出土遺物から７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。

【特徴・性格】南の壁面にカマドを付設する小型の竪穴建物で、主柱穴は削平個所を含めて４本あったと推定され、４本の柱を立てて上屋部を支持した建物と考えられる。カマド埋土中の焼土や炭化物の状態から、住居としてのある一定期間の使用が想定される。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ072（竪穴建物）

【位置】Ｒａ区の中央、Ｇ７グリッドに位置する。

【形状・規模】平面隅丸方形の竪穴建物で、建物の主軸方向はN-84°-Wである。全長（東西）2.90m、幅（南北）2.55mで、深さ0.18mを測る。

掘方の壁面は南～東は直に近く、北～西はなだらかな傾斜を呈する。底面は平坦で、壁際溝（壁溝）は認められず、Ｒａ区ＳＰ115～ＳＰ119が存在した。Ｒａ区ＳＰ115・Ｒａ区ＳＰ116・Ｒａ区ＳＰ118・Ｒａ区ＳＰ119の平面はいずれも不整円形で、Ｒａ区ＳＰ115・Ｒａ区ＳＰ116・Ｒａ区ＳＰ119の３本が本建物の主柱穴と考えられる。規模が大きくて掘方の浅いＲａ区ＳＰ118は炉と想定できたが、埋土中から炉と肯定できる焼土や炭化物などは認められなかった。

壁面の東と南東隅で重複するＲａ区ＳＰ120・Ｒａ区ＳＰ121、底面のＲａ区ＳＰ117はＲａ区ＳＢ001の柱穴で、掘方壁面の切り合い関係から、本建物よりも新しい時期のものである。

【堆積土】全体に上層に暗灰黄色の粘質土(1)、下層に灰黄色の粘質土(7)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器坏身の底部が出土した。（第436図1371）

【時期】出土遺物とＲａ区ＳＢ001との重複関係、建物方向から７世紀後半と考えられる。

【特徴・性格】Ｒａ区ＳＰ120によって本建物の主柱穴の一つが削平されたと考えられ、４本の柱で

上屋部を支持した小型の竪穴建物といえる。カマドの付設や炉の設置が認められないことから、住居ではなくて、工房ないしは倉庫であった可能性が考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ110（竪穴建物）

【位置】Ｒａ区の中央、Ｆ６・Ｇ６グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は楕円形に近い不整長方形の竪穴建物で、建物の主軸方向はN-74°-Wである。南はＲａ区ＳＫ127によって削平されているが、推定全長（南北）5.10m、幅（東西）3.60m、深さ0.25mを測る。

西壁の中央が僅かに突出し、堆積土からカマドであった可能性が高い。掘方の壁面は緩やかな傾斜で、底面は平坦である。壁際溝（壁溝）は確認できなかった。底面にはＲａ区ＳＰ126・Ｒａ区ＳＰ128が位置するが、形状や堆積土などから本建物の柱穴になるかは不明である。

壁面での切り合い関係から、重複するＲａ区ＳＫ127及びＲａ区ＳＤ109によって切られていて、両遺構よりも古い。

【堆積土】上層に褐灰色のシルト(4)、下層に灰黄褐色の粘質土(6)が堆積する。西壁の中央では全体に堆積する前述の褐灰色のシルト(4)と灰黄褐色の粘質土(6)以外に炭や焼土を含む層(11～13)の堆積が確認でき、この部分がカマドと考えられる。

【出土遺物】埋土中から須恵器蓋・坏身・鉢、土師器甕、砥石などが出土した。（第436図1372～1374、第437図1375 ～ 1382）

【時期】出土遺物や建物方向から７世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】全長を南北にとる竪穴建物で、西の壁面にカマドが付設されていたと考えられる。Ｒａ区ＳＫ127によって南の大半は削平されており、主柱穴などの詳細は不明である。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ160（竪穴建物）

【位置】Ｒａ区の中央西寄り、Ｇ４・Ｇ５グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は楕円形に近い隅丸方形の竪穴建物で、北壁の中央が突出し、カマドが付設されていた。建物の主軸方向はN-25°-Wである。南は既に削平されていたが、全長（東西）3.85m、幅（南北）は残存で3.10m、深さ0.22mを測る。

掘方の壁面は緩やかな傾斜で、底面は平坦である。壁際溝（壁溝）は確認できなかった。カマドを挟んで本建物の柱穴としてとても良い位置に確認できたＲａ区ＳＰ214・Ｒａ区ＳＰ215は既に報告したＲａ区ＳＢ002の南東面を構成する柱穴で、本建物の柱穴ではない。

底面からは他にＲａ区ＳＰ216～ＳＰ219が確認できたが、平面円形で直径0.42m、深さ0.22mを測るＲａ区ＳＰ217が主柱穴であった可能性が考えられるが、他は掘方がとても浅くて柱穴とは想定しがたい。

【堆積土】全体に粘性の弱いにぶい黄褐色のシルト(2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から土師器甕、土錘などが出土した。（第437図1383・1384）

【時期】出土遺物や建物方向、Ｒａ区ＳＢ002との重複関係から７世紀前半以降と考えられる。

【特徴・性格】西の壁面にカマドを付設した小型の竪穴建物で、カマドの堆積土として焼土や炭化物が確認できなかったことから、長期間の使用はなかった建物と推定される。主柱穴などの詳細は不明である。

【遺構名】Ｒａ区ＳＤ001（溝）

【位置】Ｒａ区の中央、Ｆ３・Ｇ３～Ｇ７グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】西～南東に向かって延びる小規模な溝で、重複するＲａ区ＳＤ101によって大きく削平されている。溝幅は0.60～0.70ｍと一定ではなく、場所によってはそれ以上に溝幅が太くなる。

掘方の壁面は緩やかな傾斜で、底面は場所によって平坦ないしは丸底となる。残存長34.30ｍ、深さ0.12～0.20ｍを測る。水が流れていた場合、底面の高低差から西～南東に向かっていたと考えられる。

【堆積土】場所によって堆積土は異なるが、状態の良好であった東のd地点では、上層に灰黄褐色の粘質土(1)、その下に褐灰色や浅黄色・灰黄褐色の粘質土(2～4)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から多様な器種の須恵器のほかに、土師器、砥石が出土した。（第437図1385～1389、第438図1390～1392）

【時期】出土遺物から７世紀中頃～８世紀前半と考えられるが、本溝の時期については、以下の理由からそれ以降の可能性も考えられる。

【特徴・性格】規模の小さな溝で、直線的であることから道路側溝の可能性が考えられたが、全体的に見て一体となる可能性が高い１ｂ区ＳＤ045やＲａ区ＳＤ004は本溝のようにまとまった遺物の出土は認められず、層位などから本溝よりも新しい時期の可能性が高い。さらに７世紀中頃～８世紀前半の建物群の建物方向や配置と比較しても、本溝の性格は予想できず、後世の道路側溝であった場合は、出土遺物は後世に混入した可能性が考えられる。本溝と一体の道路状遺構と想定できた１ｂ区ＳＤ045との溝中心間の距離は5.00ｍ（約16.5尺）を測る。

【遺構名】Ｒａ区ＳＤ097（溝）（１ｂ区ＳＤ128、１ｃ区ＳＤ181）

【位置】Ｒａ区の中央、Ｆ７・Ｇ６・Ｇ７グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】調査区を南北に縦断する溝で、Ｒａ区内ではＲａ区ＳＤ001・Ｒａ区ＳＤ099・Ｒａ区ＳＰ106・Ｒａ区ＳＰ114・Ｒａ区ＳＸ105と重複する。北は１ｂ区ＳＤ128、南は１ｃ区ＳＤ181と一体となって南北に延びる。１ｂ区・Ｒａ区・１ｃ区での全体像は、南北方向に直線的に延びる溝で、北～南に向かって溝幅が狭くなる。

Ｒａ区では、溝幅は中央付近で0.90ｍ、深さ0.18ｍ、南端では幅0.60ｍと溝幅が狭くなる。掘方の壁面は緩やかな傾斜で、底面は平坦である。

【堆積土】堆積土は粘性の強い粘質土で、上層に黄褐色の粘質土(1)、下層に暗灰黄色の粘質土(2･3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは多様な器種の須恵器のほかに、山茶碗が出土した。（第438図1393～1399）

【時期】出土した須恵器からは７世紀後半～８世紀前半と考えられたが、底面から山茶碗が出土していることや重複する遺構との切り合い関係から、12世紀後半以降の可能性が高い。出土した須恵器は、後世の混入と考えられる。

【特徴・性格】直線的形状から西に位置するＲａ区ＳＤ135と一体となる道路状遺構の可能性を考えたが、Ｒａ区ＳＤ135はＲａ区ＳＤ001と重複し、切り合い関係からＲａ区ＳＤ001よりも古い時期の遺構と判断できたため、単独の溝と理解した。その性格は不明である。

【遺構名】Ｒａ区ＳＤ135（溝）（１ｂ区ＳＤ122）

【位置】Ｒａ区の中央、Ｆ５・Ｇ５グリッドに位置する。

【形状･規模】南北方向の溝で、南は重複するＲａ区ＳＤ001によって切られ、さらに南は撹乱によっ

て削平される。また東はＲａ区ＳＤ134、西はＲａ区ＳＤ136と重複し、東西の一部分が双方の溝によって切られている。

北は１ｂ区ＳＤ122と一体となって延びる。溝幅は１ｂ区との境界で最大となって1.70m、深さ0.30mを測る。掘方の壁面は緩やかな傾斜で、底面は平坦である。

【堆積土】全体に粘性の弱い暗灰黄色の粘質土(1)が堆積し、底面に薄くやや粘性のあるにぶい黄褐色の粘質土(2)が見られた。

【出土遺物】埋土中から砥石が出土した。(第438図1400)

【時期】重複する遺構との切り合い関係から７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】前述の通り、東に位置するＲａ区ＳＤ097と一体となる道路状遺構の可能性を考えたが、Ｒａ区内では遺構の切り合い関係から本溝→Ｒａ区ＳＤ134・Ｒａ区ＳＤ136→Ｒａ区ＳＤ001、またＲａ区ＳＤ001→Ｒａ区ＳＤ097という変遷が明らかであるため、単独の溝と理解した。その性格は不明である。

【遺構名】Ｒａ区ＳＰ028（ピット）

【位置】Ｒａ区の東端、G12グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は円形で、長軸0.65m、短軸0.60m、深さ0.18mを測る。底面は丸底である。

【堆積土】ほぼ全体に粘性の強い褐灰色の粘質土(1)、その下の底面付近に褐灰色や黄灰色の粘質土(2･3)が堆積する。

【出土遺物】須恵器と土師器の小破片のほかに、木材の破片が出土した。

【時期】出土遺物から、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】形状と堆積土から柱穴であった可能性が高い。

【遺構名】Ｒａ区ＳＰ029（ピット）

【位置】Ｒａ区の東側、Ｇ９グリッド、Ｒａ区ＳＢ008の南西に位置する。

【形状･規模】平面は楕円形で、大きくてしっかりとした掘り込みの深いピットで、長軸1.10m、短軸0.80m、深さ0.30mを測る。

平坦な底面の中心には、平面楕円形の大振りの柱の当たり（一段深く下がる）が見られ、その規模は長軸0.58m、短軸0.45mを測る。底面から礎石を思わせるような直径0.18mほどの小振りの扁平な河原石１点が確認できた。

【堆積土】中央の粘性の強い灰黄褐色やにぶい黄褐色の粘質土(1～3)が柱痕で、掘方埋土として粘性の強い褐灰色の粘質土(4)、暗灰黄色・黄褐色の粘質土(9・10)などが堆積する。

【出土遺物】安山岩の扁平な河原石１点が出土したのみである。

【時期】層位と周辺遺構から、７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】大振りの柱穴で、掘方の形状と堆積土及び周囲の状況から考えて一本柱であった可能性が高い。南面を出入口と想定できる総柱構造の大型の掘立柱建物Ｒａ区ＳＢ008の南西約３m、Ｒａ区ＳＢ008南東硬化面の西端に位置することから、幡柱的な機能をもった一本柱であったことも想定できる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＰ035（ピット）

【位置】Ｒａ区の東側、Ｆ９グリッド、Ｒａ区ＳＢ008の西に位置する。

【形状・規模】平面は不整円形で、長軸0.50m、短軸0.45m、深さ0.25mを測る。ピットの上面に礎石状に、直径約0.30m、厚さ0.10mの大振りで扁平な河原石１点が配置されていた。掘方の底面は丸底である。
【堆積土】河原石の直下に粘性の弱い黄褐色の粘質土(1)、その下層ににぶい黄褐色や褐灰色の粘質土(2・3)が堆積する。
【出土遺物】安山岩の扁平な河原石１点が出土したのみである。
【時期】層位と周辺遺構から、７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】小規模なピットであるが、礎石状に河原石が配されていたことから、何らかの建物などに関連した遺構である可能性が高い。

【遺構名】Ｒａ区ＳＰ076（ピット）
【位置】Ｒａ区の中央、Ｇ７グリッド、Ｒａ区ＳＢ001（Ｒａ区ＳＰ066）の西隣に位置する。
【形状・規模】平面は楕円形で、長軸0.40m、短軸0.30m、深さ0.22mを測る。底面は丸底である。
【堆積土】粘性の強い粘質土で、上層に灰黄褐色・褐灰色の粘質土(1・2)、下層に暗灰黄色・灰黄色の粘質土(3・4)が堆積する。
【出土遺物】須恵器と土師器の小破片が出土した。
【時期】出土遺物から、７～８世紀と想定される。
【特徴・性格】小規模なピットで、性格は不明である。

【遺構名】Ｒａ区ＳＰ077（ピット）
【位置】Ｒａ区の中央、Ｇ７グリッド、Ｒａ区ＳＢ001（Ｒａ区ＳＰ094）の北西隣に位置する。
【形状・規模】平面は不整円形で、長軸0.39m、短軸0.31m、深さ0.30mを測る。底面は丸底である。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色・褐灰色の粘質土(1・2)、下層に灰黄褐色の粘質土(3・4)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小破片が１点出土した。
【時期】出土遺物から、７～８世紀と想定される。
【特徴・性格】Ｒａ区ＳＰ076と同様に、Ｒａ区ＳＢ001に隣接する小規模なピットで、性格は不明である。

【遺構名】Ｒａ区ＳＰ083（ピット）
【位置】Ｒａ区の中央、Ｇ７グリッド、Ｒａ区ＳＢ001（Ｒａ区ＳＰ094）の西隣に位置する。
【形状・規模】平面は不整円形で、長軸1.08m、短軸0.95m、深さ0.38mを測る。底面は全体的に平坦で、北掘方の壁面に接する一部分のみが凹む。
【堆積土】中央の粘性の弱い暗灰黄色・暗褐色の粘質土(1・2)が柱痕で、掘方埋土は上層に褐灰色の粘質土(3)、下層ににぶい黄褐色・にぶい黄色の粘質土(4・5)が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋が出土した。（第439図1401）
【時期】出土遺物から、７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】形状と堆積土から柱穴と考えられ、周囲の状況から一本柱であった可能性もある。

【遺構名】Ｒａ区ＳＸ224（竪穴状遺構）
【位置】Ｒａ区の西端、Ｆ１・Ｇ１グリッドに位置し、調査区外（西）に続く。

【形状・規模】平面は東西を全長とする長方形と推定されるが、西は調査区外となるため全体像は不明である。幅（南北）2.15m、深さ0.39mを測る。掘方の壁面はなだらかな傾斜で、底面にはやや凹凸が見られる。

【堆積土】上層に粘性の弱い炭化物を含む暗灰黄色・灰黄色・黄灰色の粘質土(2～4)、底面全体にやや粘性の強いにぶい黄褐色の粘質土(8)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身、土師器の鍋の口縁部が出土した。（第439図1402・1403）

【時期】出土遺物から、７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】平面長方形の竪穴状遺構ではあるが、底面からピットなどは確認できず、その性格は不明である。北に隣接する１ｂ区ＳＤ040とはほぼ同時期であることから、本遺構との関連も考えられる。

（基峰）

（12）Ｒｂ区（第277～283図、写真図版264～268）

①　１面（上層）

【遺構名】Ｒｂ区１面ＳＤ002（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ003、２ａ区１面ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｄ区ＳＤ136、Ｒｆ区１面ＳＤ022）

【位置】Ｒｂ区１面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッドに位置し、１ｂ区ＳＤ087・２ａ区１面ＳＤ002と一体の溝である。

【形状・規模】東西に延びる規模の大きな溝で、壁面～底面にかけて緩やかに傾斜し、底面は平坦に近い。Ｒｂ区での長さ（東西）10.00m、幅（南北）2.48m、深さ0.56mを測る。

【堆積土】上層にしまりが良く酸化鉄を多く含み粘性が強い灰黄褐色の粘質土(1)、下層にはしまりが少し悪く同様に酸化鉄を多く含み粘性が強い灰色の砂質土(5)が堆積する。

【出土遺物】平瓦の破片が出土した。（第440図1408）

【時期】層位などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】７～８世紀の平瓦の破片が出土しているが、後世に混入した可能性が高い。調査範囲の全体から見ると、北に隣接するＲｂ区ＳＤ001（２ａ区１面ＳＤ001）と一緒に並行して延びる形状から、用水路と道路側溝の役割を兼ねていた溝の一部と考えられる。道路幅は側溝の中心で推定5.60m（約18.5尺）、一体の道路ないしは水路の延長であるＲｄ区内（幅4.40m・約14.5尺）と比べると幅広となる。

【遺構名】Ｒｂ区１面ＳＤ003（溝）（１ａ区ＳＤ014、１ｂ区ＳＤ088・ＳＤ256、２ａ区１面ＳＤ003、２ｂ区ＳＤ092）

【位置】Ｒｂ区１面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッドに位置し、１ｂ区ＳＤ256・２ａ区１面ＳＤ003と一体の溝である。Ｒｂ区１面ＳＤ002の南約2.00mに位置する。

【形状・規模】Ｒｂ区１面ＳＤ002同様に東西に延びる規模の大きな溝で、壁面～底面にかけてほぼ直に下がり、底面は平坦である。Ｒｂ区での長さ（東西）10.00m、幅（南北）2.20m、深さ0.24mを測る。

【堆積土】上層にしまりが良く粘性が強い灰黄褐色の粘質土(1)、下層にもしまりが良く粘性が強い黄褐色の粘質土(5)が堆積する。
【出土遺物】山茶碗の碗が出土した。(第440図1409)
【時期】層位などから13世紀と考えられる。
【特徴・性格】埋土中から11世紀と想定される山茶碗が出土しているが、後世に混入した可能性が考えられる。調査範囲の全体から見ると、道路側溝を兼ねた水路と考えられ、Ｒｂ区１面ＳＤ001とＲｂ区１面ＳＤ002で構成される道路よりも古い段階と考えられる。

【遺構名】Ｒｂ区１面ＳＤ008（溝）
【位置】Ｒｂ区１面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッドに位置する。
【形状・規模】北～南西に向かって延びる小規模な溝で、北側の溝幅が狭く南側に向かって溝幅が広くなる。南西壁面は底面にかけて一部段差が見られるが、底面はほぼ全体的に平坦である。南側は撹乱によって削平されているが、残存長（南北）6.90m、幅（東西）1.60m、深さ0.20mを測る。
【堆積土】上層にしまりが良く粘性が強い灰黄褐色の粘質土(1)、下層にはしまりが良く粘性が強い褐灰色と暗灰黄色の粘質土(2・3)などが堆積する。
【出土遺物】埋土中から須恵器の杯蓋の天井部の破片が出土した。(第440図1411)
【時期】出土遺物から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】前述のとおり北側の溝幅が狭く南側に向かって溝幅が広くなる形状であるが、その性格などは不明である。

（首藤）

② ２面（下層）

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＩ023（竪穴建物）
【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の南側の西端、Ｇ12・Ｇ13グリッドに位置する。
【形状・規模】平面が推定隅丸方形の竪穴建物で、南東壁面の一部が突出しカマドを付設する。壁面の掘り込みは緩傾斜で、底面は平坦である。西側半分ほどが削平されているが、推定長軸（東西）4.05m、推定短軸（南北）3.80m、深さ0.16mを測る。建物の主軸方向はＮ-43° -Ｗである。
【堆積土】上層にしまりが強く粘性が少し弱い褐灰色の粘質土(1)、下層にはしまりと粘性が強い黄灰色の粘質土(4)が堆積する。カマドの上層はしまりがあり粘性が弱い灰白色と暗灰黄色の粘質土、しまりと粘性がある灰黄色と褐灰色の粘質土、しまりと粘性が強い黒褐色の粘質土(1・2・5・6)などで、下層はしまりと粘性が強い黄褐色と灰黄褐色･暗灰黄色･褐灰色の粘質土(7～11)などが堆積する。またカマドの堆積土中全体から量の差異はあるが灰の混入が見られた。
【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。
【時期】壁面の切り合い関係から重複するＲｂ区２面ＳＩ025よりも新しい時期であることから、８世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】南東壁面にカマドを付設する小型竪穴建物で、柱穴や貯蔵穴などは不明である。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＩ024（竪穴建物）
【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の南側、Ｆ13・Ｇ13グリッドに位置する。

【形状・規模】平面隅丸不整方形の竪穴建物で、北壁面の一部が突出しカマドを付設する。壁面の掘り込みは緩傾斜で、底面は平坦である。長軸（東西）4.50m、短軸（南北）4.30m、深さ0.10mを測る。建物の主軸方向はN-６°-Wである。また南～西にかけて、本建物の上層から掘り込まれたＲｂ区２面ＳＤ011が重複する。

【堆積土】上層にしまりと粘性が強い黄灰色の粘質土(2)、下層にはしまりと粘性が強い灰黄色の粘質土(3)が堆積する。カマドの堆積土にはしまりと粘性が強い灰黄色の粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】出土遺物から時期の特定をすることが困難なため、層位や建物方向などから判断して７世紀後半～８世紀前半に相当すると考えられる。

【特徴・性格】北壁にカマドを付設する竪穴建物で、底面の北東よりに浅い掘り込みであるがＲｂ区２面ＳＰ026があり、底面に柱の当たりが見られることから、本建物の柱穴のひとつと考えられる。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＩ025（竪穴建物）

【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の南側、G12・G13グリッドに位置する。

【形状・規模】平面が推定隅丸方形の竪穴建物で、南壁面の一部が突出しカマドを付設する。壁面の掘り込みは緩傾斜で、底面は平坦である。長軸（南北）4.05m、推定短軸（東西）3.20m、深さ0.15mを測る。建物の主軸方向はN-10°-Ｅである。

【堆積土】上層にしまりが強く粘性が少し弱い灰黄褐色の粘質土(1)、下層にはしまりと粘性が強い黄褐色の粘質土(7)が堆積する。カマドの上層はしまりと粘性がある灰黄褐色と黄灰色、灰色の粘質土(1・3・5)などで、下層はしまりと粘性が強い黒褐色と灰黄褐色の粘質土(7・8)などが堆積する。またカマドの堆積土中全体から量の差異はあるが、灰の混入が見られた。

【出土遺物】埋土中からは土器の小破片以外に出土した遺物はない。

【時期】壁面の切り合い関係から重複するＲｂ区２面ＳＩ023やＲｂ区２面ＳＤ017よりも古い時期であることや、層位・建物方向などから判断して７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【特徴・性格】南壁にカマドを付設する竪穴建物で、底面の南東隅よりに浅い掘り込みのＲｂ区２面ＳＰ027がある。底面には柱の当たりは見られないが、本建物の柱穴のひとつと考えられる。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＤ017（溝）

【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の南側、G13グリッドに位置する。

【形状・規模】東西に延び東端部が折れ曲がる平面が鈎形状の溝で、壁面～底面にかけて緩傾斜し、底面は丸底である。長さ（東西）5.12m、幅（南北）0.78m、深さ0.16mを測る。

【堆積土】上層にしまりと粘性が強い暗灰黄色の粘質土(1)、下層にはしまりと粘性が強い黒褐色と灰黄褐色の粘質土(3・4)などが堆積する。

【出土遺物】滑石製の臼玉１点が、埋土下層の底面に近い位置から出土した。（第441図1426）

【時期】出土した臼玉は未完成品で５～８世紀と考えられるが、本溝の時期は重複するＲｂ区２面ＳＩ025とＲｂ区２面ＳＤ011との切り合い関係から、Ｒｂ区２面ＳＩ025より新しくＲｂ区２面ＳＤ011より古いことがわかる。層位などから判断して８世紀前半以降と考えられる。

【特徴・性格】小規模の溝であるが、形状・出土遺物からその性格はわからず不明である。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＰ013（ピット）

【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の北側、D13グリッドに位置する。
【形状・規模】平面円形で直にしっかりと掘り込まれており、底面は丸底である。長軸（東西）0.62ｍ、短軸（南北）0.56ｍ、深さ0.46ｍを測る。
【堆積土】上層にしまりと粘性が強い黒褐色の粘質土(1)、下層にはしまりと粘性が強い黒色の粘質土(4)が堆積する。
【出土遺物】残存長0.52mの大型のヒノキの柱根が出土した。（第441図1427）
【時期】層位などから７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】柱根が出土したため柱穴と考えられる。本ピットから南に向かって確認できたＲｂ区２面ＳＰ014・Ｒｂ区２面ＳＰ015・Ｒｂ区２面ＳＰ016のピット列の中では一番掘り込みが深い。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＰ014（ピット）
【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッド、Ｒｂ区２面ＳＰ013の南に位置する。
【形状・規模】平面楕円形で底面は丸底である。長軸（東西）0.50ｍ、短軸（南北）0.42ｍ、深さ0.32ｍを測る。
【堆積土】上層にしまりと粘性が強い黒褐色と暗灰黄色の粘質土(1・2・4)、下層にはしまりと粘性が強い褐灰色と黒褐色・灰色の粘土をわずかに含むオリーブ黒色の粘質土(6～8)などが堆積する。
【出土遺物】出土した遺物はない。
【時期】層位などから判断して７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】底面に柱の当たりはないが、形状から柱穴であった可能性が考えられる。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＰ015（ピット）
【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッド、Ｒｂ区２面ＳＰ014の南に位置する。
【形状・規模】平面不整楕円形で直に掘り込まれており、底面は平坦である。長軸（東西）0.70ｍ、短軸（南北）0.48ｍ、深さ0.45ｍを測る。
【堆積土】上層にしまりと粘性が強い黒褐色の粘質土(1)、下層にはしまりと粘性が強いオリーブ黒色と黄灰色・黒色の粘質土(9～11)などが堆積する。
【出土遺物】出土した遺物はない。
【時期】層位などから判断して７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】底面に柱の当たりはないが、堆積土の中央に位置する黒褐色土(2)が柱痕と考えられ、柱穴であった可能性が高い。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＰ016（ピット）
【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッド、Ｒｂ区２面ＳＰ015の南に位置する。
【形状･規模】平面楕円形で、底面は東からなだらかな傾斜で下がり西を中心に平面円形（直径0.30m程度）に掘り込まれ平坦となる。長軸（東西）0.80ｍ、短軸（南北）0.48ｍ、深さ0.34ｍを測る。
【堆積土】上層にしまりと粘性が強い褐灰色と暗灰黄色・黒褐色の粘質土(1・2・4)、下層にはしまりと粘性が強い暗褐色と黄灰色の粘質土(3・7)が堆積する。
【出土遺物】出土した遺物はない。
【時期】層位などから判断して７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】堆積土の下層に位置する暗褐色土(3)が柱痕で、柱穴と考えられる。Ｒｂ区２面ＳＰ

013～ＳＰ016は柱穴列であるが、個々のピットの堆積土や周辺の遺構の状況からＳＡ（柵列）ないしはＳＢ（掘立柱建物）とは考えられなかったため、一体の遺構として判断しなかった。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＰ019（ピット）

【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッドに位置する。

【形状・規模】平面円形で直にしっかりと掘り込まれ、底面はやや平坦である。長軸（南北）0.42m、短軸（東西）0.40m、深さ0.40mを測る。

【堆積土】上層にしまりと粘性が強い褐灰色の粘質土(1)、下層にはしまりと粘性が強い黒褐色の粘質土(4)が堆積する。

【出土遺物】埋土下層の黒褐色土中(4)から柱根が出土した。

【時期】層位などから７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】柱根が出土したことから柱穴である。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＰ020（ピット）

【位置】Ｒｂ区２面で、Ｒｂ区の北側、Ｅ13グリッド、Ｒｂ区２面ＳＰ019の北に位置する。

【形状・規模】平面円形で底面は丸底である。直径0.46m、深さ0.44mを測る。

【堆積土】上層にしまりと粘性が強い褐灰色とオリーブ黒色の粘質土(1・2)、下層にはしまりと粘性が強い黒褐色の粘質土(4)が堆積する。

【出土遺物】出土した遺物はない。

【時期】層位などから７～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】他の周辺から確認できたピットの状況から判断して、柱穴と考えられる。

（首藤）

（13）Ｒｃ区（第284～294図、写真図版269～276）

【遺構名】Ｒｃ区ＳＢ001（掘立柱建物）

【位置】Ｒｃ区の南側、K12・L12グリッドに位置する。

【形状・規模】平面長方形の３間×２間の側柱構造で、建物の主軸方向はN- 4° -Wである。桁行7.44m、梁行4.63m、柱間は桁行2.45m、梁行2.00m、柱穴の深さ0.60mを測る。

隅柱は北西Ｒｃ区ＳＰ012、南西Ｒｃ区ＳＰ019、南東Ｒｃ区ＳＰ021、北東Ｒｃ区ＳＰ043の４本で、側柱は東Ｒｃ区ＳＰ030、西Ｒｃ区ＳＰ013・Ｒｃ区ＳＰ014・Ｒｃ区ＳＰ016、南Ｒｃ区ＳＰ020、北Ｒｃ区ＳＰ010・Ｒｃ区ＳＰ011の７本である。隅柱４本と推定側柱７本の合計11本の柱穴で構成される。柱穴は平面不整円形もしくは不整楕円形で、掘り込みは深くしっかりした柱穴である。Ｒｃ区ＳＰ014・Ｒｃ区ＳＰ016の底面には柱の当たりが残る。

【堆積土】西面柱穴列の柱穴Ｒｃ区ＳＰ014では、柱痕に粘性のやや弱い暗灰黄色の粘質土(11)、その周囲の掘り方内には粘質土(8～20)が堆積する。

【出土遺物】柱穴Ｒｃ区ＳＰ012・Ｒｃ区ＳＰ030・Ｒｃ区ＳＰ031から須恵器の坏蓋・坏身、柱穴Ｒｃ区ＳＰ010から土師器の甕の口縁部が出土した。（第442図1429～1432）

【時期】柱穴からの出土遺物と本建物と重複するＲｃ区ＳＢ002の時期や建物方向などから、７世紀後半～末頃と考えられる。

【特徴・性格】深くてしっかりとした掘り込みの柱穴列によって構成された掘立柱建物で、南北正位に主軸をとる。重複するＲｃ区ＳＢ002よりも新しい時期の建物である。隅柱が支柱、側柱が束柱と考えられるが、南面と北面の側柱は支柱を兼ねていた可能性も想定できる。高床建築の建物で、側柱構造であることから重い穀物などを保管した倉庫の可能性は低いと考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＢ002（掘立柱建物）

【位置】Ｒｃ区の南側、K12グリッドに位置する。

【形状・規模】平面は正方形に近い長方形で、２間×１間又は２間の側柱構造である。建物の主軸方向はN-３°-Wである。桁行4.42m、梁行3.87m、柱間は桁行4.42m、梁行3.87m、柱穴の深さ0.80mを測る。隅柱は北西Ｒｃ区ＳＰ015、南西Ｒｃ区ＳＰ017、南東Ｒｃ区ＳＰ023、北東Ｒｃ区ＳＰ043の４本である。隅柱４本の柱穴で構成される。柱穴は平面不整円形もしくは不整楕円形で、掘り込みは深くしっかりした柱穴である。

【堆積土】西面柱穴列の中央柱穴Ｒｃ区ＳＰ016では、上層に粘性の弱い暗灰黄色の粘質土(1)と粘性の強い灰黄褐色の粘質土(2)、柱痕に粘性の強い暗灰黄色の粘質土(4)、その周囲の掘り方内には粘質土(5～11)が堆積する。

【出土遺物】特になし。

【時期】重複するＲｃ区ＳＢ001との柱穴の切り合い関係や建物方向などから、７世紀後半以前と考えられる。

【特徴・性格】Ｒｃ区ＳＢ001と同軸方位・同位置のため、Ｒｃ区ＳＢ002（古）からＲｃ区ＳＢ001（新）への建物の建替えがあった可能性が考えられ、Ｒｃ区ＳＢ001と同一建物であった可能性が高い。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＢ003（掘立柱建物）

【位置】Ｒｃ区の北側、H12グリッドに位置する。

【形状・規模】平面正方形の２間×２間の総柱構造で、建物の主軸方向はN-40°-Ｅである。桁行3.80m、梁行3.51m、柱間は桁行1.96m、梁行1.64m、柱穴の深さ0.32mを測る。

隅柱は北西Ｒｃ区ＳＰ079、南西Ｒｃ区ＳＰ066、南東Ｒｃ区ＳＰ054、北東２ｂ区ＳＰ594の４本で、側柱は西Ｒｃ区ＳＰ092、南Ｒｃ区ＳＰ064、東２ｂ区ＳＰ713、北Ｒｃ区ＳＰ056の４本である。建物内部の中柱はＲｃ区ＳＰ078で、重複するＲｃ区ＳＤ046に削平されている。隅柱４本と側柱４本、中柱１本の合計９本の柱穴で構成される。柱穴は平面円形もしくは楕円形である。Ｒｃ区ＳＤ046と重複し、一部の柱穴が削平されている。

【堆積土】西面柱穴列の中央柱穴Ｒｃ区ＳＰ092では、上層に粘性の弱い灰色のシルト(1)、柱痕に粘性の弱い暗灰黄色や黄灰色のシルト(2・3)、その周囲の掘り方内にはシルト(4～6)が堆積する。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に遺物の出土はなかった。

【時期】建物方向などから６世紀末頃～７世紀中頃と考えられる。

【特徴・性格】北東～南西に主軸方位を向けた掘立柱建物で、隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱と推定でき、総柱構造であることから、穀物などを保管した高床倉庫と考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＢ004（掘立柱建物）

【位置】Ｒｃ区中央北寄りのH12･I12グリッド～１ｃ区東側のＨ13･Ｉ13グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】東西に長軸をとる平面横長長方形の５間×１間の側柱構造で、建物の主軸方向は

N-90°-Wである。桁行7.46m、梁行3.95m、柱間は桁行1.51m、梁行3.95m、柱穴の深さ0.50mを測る。

隅柱は北西１ｃ区ＳＰ1104、南西１ｃ区ＳＰ695、南東Ｒｃ区ＳＰ069、北東Ｒｃ区ＳＰ091の４本で、側柱は北１ｃ区ＳＰ1012・１ｃ区ＳＰ915・１ｃ区ＳＰ1006・Ｒｃ区ＳＰ073、南１ｃ区ＳＰ709～ＳＰ711・Ｒｃ区ＳＰ068の８本である。北の側柱である１ｃ区ＳＰ915・１ｃ区ＳＰ1006・１ｃ区ＳＰ1012は１ｃ区ＳＤ693によって削平された柱穴の底面付近のみが残存する。隅柱４本と側柱８本の合計12本の柱穴で構成される。柱穴は平面不整円形もしくは不整楕円形である。

【堆積土】残存状態の良好であった北東隅柱Ｒｃ区ＳＰ091では、上層、柱痕、掘り方に粘性の弱いシルト(1～3)が堆積する。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に遺物の出土はなかった。

【時期】重複するＲｃ区ＳＢ005（１ｃ区ＳＢ014）の柱穴１ｃ区ＳＰ701と本建物の柱穴１ｃ区ＳＰ709の切り合い関係から本建物はＲｃ区ＳＢ005より古い時期で、建物方向などから、７世紀後半～末頃と考えられる。

【特徴・性格】長軸を東西、短軸を南北方位に合わせた隅柱が支柱となる掘立柱建物で、横長形状で桁行柱間の間隔が狭小となる形状と規模から、一般的な高床倉庫などの建物というよりは、糞尿溝（溜め）などの存在は確認できないが、牛馬などの家畜小屋であった可能性が考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＢ005（１ｃ区ＳＢ014）（掘立柱建物）

【位置】Ｒｃ区ＳＢ004同様に、Ｒｃ区中央北寄りのH12・Ｉ12グリッド～１ｃ区東側のH13・Ｉ13グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】平面方形の３間×２間の総柱構造で、建物の主軸方向はN-90°-Wである。桁行5.42m、梁行4.40m、柱間は桁行1.96m、梁行2.22m、柱穴の深さ0.86mを測る。

隅柱は北西１ｃ区ＳＰ791、南西１ｃ区ＳＰ701、南東Ｒｃ区ＳＰ093、北東Ｒｃ区ＳＰ067の４本で、側柱は西１ｃ区ＳＰ703、南１ｃ区ＳＰ923・Ｒｃ区ＳＰ070、東Ｒｃ区ＳＰ090、北１ｃ区ＳＰ788・１ｃ区ＳＰ1000・Ｒｃ区ＳＰ060の７本である。建物内部の中柱は１ｃ区ＳＰ704・Ｒｃ区ＳＰ094（１ｃ区ＳＰ705）の２本である。隅柱４本と推定側柱７本、中柱２本の合計13本の柱穴で構成される。柱穴は平面不整円形もしくは不整楕円形で、掘り込みは深くしっかりとした柱穴である。南西隅柱１ｃ区ＳＰ701の底面のみ柱の当たりが残る。

【堆積土】南面隅柱１ｃ区ＳＰ701では、上層全体ににぶい黄褐色の砂質シルト(1)、柱痕ににぶい黄褐色の極細粒砂(2)、灰黄褐色の粘質土(3)が堆積する。

【出土遺物】柱穴からは土器の小破片以外に遺物の出土はなかった。

【時期】南西隅柱１ｃ区ＳＰ701とＲｃ区ＳＢ004の柱穴である１ｃ区ＳＰ709の切り合い関係から、Ｒｃ区ＳＢ004より新しい時期で、建物方向・層位などから８世紀初頭～中頃と判断する。

【特徴・性格】小型の掘立柱建物で、隅柱が支柱、側柱・中柱が束柱と推定される。総柱構造であることから、高床ないしは床束建築の倉庫と考えられ、穀物などを保管した可能性が高い。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＤ063（溝）（１ｃ区ＳＤ693、２ｂ区ＳＤ219）

【位置】Ｒｃ区の中央北寄り、H12・H13・Ｉ12・Ｉ13グリッドに位置し、西隣の１ｃ区ＳＤ693、東隣の２ｂ区ＳＤ219と一体である。

【形状・規模】東西に延びる溝で、底面はなだらかである。西は１ｃ区へ続き、東は後世の攪乱により壊されており、２ｂ区で溝の続きが現れる。Ｒｃ区で確認できた規模は長さ3.62m、幅1.60m、深

さ0.28mであった。

【堆積土】上層に粘性の強い灰黄褐色の粘質土(1)、下層に粘性の強い褐灰色と暗灰黄色の粘質土(2･3)が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の埦、灰釉陶器の皿が出土した。(第442図1435・1436)

【時期】層位などから13世紀と考えられる。

【特徴・性格】１ｃ区・２ｂ区では南へほぼ直角に曲がり西側では１ｃ区から南の１ｄ区へと続く。方形に巡る規格性を持った規模の大きな溝の一部で、中世以降の屋敷地周囲をめぐる区画溝の一部と考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＸ047(竪穴状遺構)

【位置】Ｒｃ区の中央北寄り、Ｉ12・Ｉ13グリッドに位置する。

【形状･規模】本遺構は後世の攪乱や、Ｒｃ区ＳＤ063･Ｒｃ区ＳＤ046(溝)によって削平されていて、全体の形状･規模は不明である。残存長5.16m、残存幅4.55m、深さ0.10mを測り、底面は平坦である。

【堆積土】主に粘性の弱いにぶい黄褐色と暗灰黄色のシルトが堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器の坏身、土錘が出土した。(第442図1438・1439)

【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃に相当する。

【特徴・性格】底面に炭化物粒・焼土が確認できるが炉やカマドは確認できなかった。全体的に残存状態が悪く詳細は不明であるが、竪穴建物であった可能性も考えられる。

(三島)

(14) Ｒｄ区(第295～313図、写真図版277～286)

【遺構名】Ｒｄ区ＳＢ001(掘立柱建物)

【位置】Ｒｄ区西端、Ｆ14・Ｇ14グリッドに位置する。

【形状・規模】南北を長辺とする２間×２間の平面方形の掘立柱建物で、総柱構造である。建物規模は長辺4.85m、短辺4.32mで、柱穴は平面形状が楕円もしくは不整円形を呈し、深さは柱根の出土したＲｄ区ＳＰ010で0.48mを測り、柱間は桁行1.68m、梁行1.74mである。建物の主軸方向はＮ-３°-Ｅである。

本建物は隅柱４本、側柱４本、中柱１本の合計９本の柱穴で構成され、隅柱は南東Ｒｄ区ＳＰ005、北東Ｒｄ区ＳＰ007、北西Ｒｄ区ＳＰ009、南西Ｒｄ区ＳＰ011、側柱は東Ｒｄ区ＳＰ006、北Ｒｄ区ＳＰ008、西Ｒｄ区ＳＰ010、南Ｒｄ区ＳＰ012、建物内部の中柱はＲｄ区ＳＰ028である。北・東・西の柱穴列Ｒｄ区ＳＰ005～ＳＰ011と中央の柱穴Ｒｄ区ＳＰ028は掘り込みが深いが、南の柱穴Ｒｄ区ＳＰ012は掘り込みが浅く、底面はいずれも丸底である。

【堆積土】本建物を構成する柱穴列の堆積土は砂質粘土や粘土を含む黄色シルトが多い。

【出土遺物】柱穴から須恵器・土師器が出土したがいずれも小片である。西の柱穴列中央に位置するＲｄ区ＳＰ010からは柱根が出土している。

【時期】出土した遺物がいずれも時期の推定に適さないほどの小片であるため、Ｒｄ区とその周囲の他の遺構出土遺物の時期や建物方向などから考えて、７世紀後半～８世紀中頃と推定される。

【特徴・性格】柱間の間隔が狭く総柱構造であることから、隅柱を支柱、側柱・中柱を束柱とした高床ないしは床束建築の小型倉庫と考えられる。南側のＲｄ区ＳＰ012の規模が小さく、北・東・西の

柱穴列Ｒｄ区ＳＰ005～ＳＰ011の規模が大きいため、南を建物の入り口としていた可能性も考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＩ002（竪穴建物）

【位置】Ｒｄ区西側、G14・G15グリッドに位置する。

【形状・規模】北東～南西を長辺とする平面隅丸方形の竪穴建物で、掘り込みは非常に浅いが壁面全体に幅が最大0.48m、深さ0.16mの壁際溝（壁溝）が巡る。底面は平坦で、建物規模は長辺4.32m、短辺4.16m、深さ0.06mを測る。建物の主軸方向はN-46°-Eである。

【堆積土】にぶい黄褐色のシルトが多く堆積している。壁際溝（壁溝）の堆積土は暗灰黄色のシルトである。

【出土遺物】埋土中からは須恵器・土師器が出土したがいずれも小片である。壁際溝（壁溝）からは鉄の小片と思われる遺物も出土した。

【時期】出土した遺物からは時期の推定が困難であったため、Ｒｄ区とその周囲の他の遺構出土遺物の時期や建物方向などから考えて、６～７世紀中頃と推定される。

【特徴・性格】本建物の底面は、検出面からの掘り込みがほとんどないことから平地建物であった可能性も考えられる。底面には多くのピットがあり、Ｒｄ区ＳＰ036・Ｒｄ区ＳＰ048は形状と位置から本建物の主柱穴と考えられる。底面北西に位置するＲｄ区ＳＰ039は表層に炭と焼土を含んでおり炉であった可能性が高い。また、本建物の南西壁面の西端から掘り込みが浅く底面がなだらかな溝であるＲｄ区ＳＤ020が南東に向かって延びており、周囲に位置するＲｄ区ＳＩ035、Ｒｄ区ＳＩ060でも建物に接して同じ方向に延びる同様のＲｄ区ＳＤ013・Ｒｄ区ＳＤ098（溝）が確認できることから、建物の出入り口に通じる通路や排水などの役割を有するものであった可能性が考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＩ003（竪穴建物）

【位置】Ｒｄ区の西側北端、F15・G15グリッドに位置し、２ａ区にまたがる。

【形状・規模】北西～南東を長辺とする平面隅丸方形の竪穴建物である。建物規模は長辺4.34m、残存短辺3.56m、深さ0.12mを測る。底面は平坦で、北西にカマドを有する。建物の主軸方向はN-60°-Wである。

【堆積土】堆積土のほとんどは黄色のシルトである。カマドは最上層を暗褐色のシルトが覆い、その下に暗オリーブ褐色の極細粒砂、にぶい黄橙色の粘土、灰黄褐色のシルトが堆積し、最下層には灰色の粘土を含む極細粒砂が堆積する。

【出土遺物】須恵器・土師器が出土したがいずれも小片である。

【時期】出土遺物からは時期の推定が困難なため、Ｒｄ区とその周囲の他の遺構出土遺物の時期や建物方向などから考えて６～７世紀中頃と推定される。

【特徴・性格】本建物はＲｄ区ＳＩ035やＲｄ区ＳＩ060と重複し、切り合い関係から両建物よりも新しい時期に相当する。さらに底面にＲｄ区ＳＫ050やＲｄ区ＳＤ051が確認でき、Ｒｄ区ＳＫ050底面にＲｄ区ＳＰ058、Ｒｄ区ＳＤ051底面にＲｄ区ＳＰ055があるが、位置から考えて本建物の主柱穴に相当する可能性は低い。カマドから際立って焼土は確認できなかったため、建物の使用期間が短かったことが想定される。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＩ035（２ａ区ＳＬ049）（竪穴建物）

【位置】Ｒｄ区の西側北端、Ｆ14・Ｆ15・Ｇ14・Ｇ15グリッドに位置し、２ａ区にまたがる。
【形状・規模】北東～南西を長辺とする平面方形と推定される竪穴建物である。掘り込みが浅く底面は平坦で、柱穴が少ない。建物規模は長辺不明、短辺5.94m、深さ0.08mを測る。底面は平坦で、北西に２ａ区ＳＬ049（カマド）を有する。建物の主軸方向はN-32°-Eである。
【堆積土】褐灰色・黄褐色・灰黄褐色のシルトが堆積している。カマドは上層に粘性の弱い赤褐色のシルト、下層には粘性がやや強い赤褐色のシルトが堆積している。
【出土遺物】土師器の小片と炭化物が出土した。
【時期】出土遺物からは時期の推定が困難であるため、Ｒｄ区とその周囲の他の遺構出土遺物や建物方向などから考えて６～７世紀中頃と推定され、重複関係からＲｄ区ＳＩ003よりも古い時期である。
【特徴・性格】Ｒｄ区ＳＩ003同様に底面からＲｄ区ＳＫ053が確認できた。埋土中から炭化物は確認できたが、焼土や炉跡などは確認できなかった。Ｒｄ区ＳＩ002とほぼ同様に南西壁面の中央から掘り込みが浅く底面がなだらかなＲｄ区ＳＤ013（溝）が南東に向かって延びており、建物の出入口に通じる通路や排水などの役割を有するものであった可能性が考えられる。本建物の底面は検出面からの掘り込みがほとんどなく、Ｒｄ区ＳＩ002同様に平地建物であった可能性も考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＩ060（竪穴建物）
【位置】Ｒｄ区の西側北端、Ｆ15・Ｆ16・Ｇ15・Ｇ16グリッドに位置する。
【形状・規模】北西～南東を長辺とする平面不整方形の竪穴建物である。底面は平坦で柱穴が少ない。建物規模は長辺4.96m、残存短辺4.62m、深さ0.16mを測る。建物の主軸方向はN-28°-Wである。
【堆積土】暗灰黄色と灰黄褐色のシルトが堆積し､最下層には灰黄色の砂質粘土が若干堆積している。
【出土遺物】須恵器・土師器が出土したがいずれも小片である。
【時期】出土遺物からは時期の推定が困難なため、Ｒｄ区とその周囲の他の遺構出土遺物の時期や建物方向などから考えて６～７世紀中頃と推定され、重複関係からＲｄ区ＳＩ003よりも古い時期である。
【特徴・性格】底面に暗黄灰色のシルトが１層だけ堆積するＲｄ区ＳＰ150が確認された。北西側はＲｄ区ＳＩ003に削平される。南壁面の隅に隣接し南東に延びるＲｄ区ＳＤ098は、西に隣接するＲｄ区ＳＩ002とＲｄ区ＳＤ020、Ｒｄ区ＳＩ035とＲｄ区ＳＤ013と同様に建物の出入り口に通じる通路や排水などの役割を有するものであった可能性も考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＩ109（竪穴建物）
【位置】Ｒｄ区中央、Ｆ17・Ｆ18・Ｇ17・Ｇ18グリッドに位置する。
【形状・規模】東西を長辺とする平面不整方形の竪穴建物と推定される。小型で掘り込みが浅く、底面は平坦である。北壁中央が溝状に突出する。建物規模は長辺3.84m、短辺2.64m、深さ0.04mを測る。建物の主軸方向はN-88°-Eでほぼ正方位である。
【堆積土】黄褐色のシルトが薄く堆積する。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】Ｒｄ区とその周囲の他の遺構出土遺物の時期や建物方向などから、７世紀後半～８世紀中頃と推定する。
【特徴・性格】検出面からの掘り込みが非常に浅く、底面から柱穴に相当するピットなどが確認できなかったため、当初は性格不明のＳＸ（竪穴状遺構）と考えたが、北壁から北東に突出する細い溝状

の痕跡がカマドの煙道部に相当する可能性が考えられたため、平面形状から竪穴建物と判断した。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＩ127（竪穴建物）

【位置】Ｒｄ区中央、G19グリッドに位置する。

【形状・規模】東側部分の確認はできなかったが、平面形状は南北を長辺とする隅丸方形の竪穴建物と推定できる。西壁の中央部が突出し、カマドが付設される。建物規模は長辺3.00m、短辺不明、深さ0.08mを測る。建物の主軸方向はN-86°-Wである。

【堆積土】上層ににぶい黄褐色のシルト、下層に灰黄色の粘土が堆積する。カマドでは焼土の堆積が確認できなかった。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【時期】Ｒｄ区とその周囲の他の遺構出土遺物の時期や建物方向などから考えて、７世紀後半～８世紀中頃と推定される。

【特徴・性格】底面南隅と北隅にＲｄ区ＳＰ128・Ｒｄ区ＳＰ148が存在し、形状や位置から本建物の主柱穴と考えられる。西壁にカマドを付設する小型竪穴建物で、カマドから焼土が確認できなかったことから、Ｒｄ区ＳＩ003と同様に建物としての使用期間が短かったことが想定される。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＩ147（竪穴建物）

【位置】Ｒｄ区東側、F20・G20グリッドに位置する。

【形状・規模】Ｒｄ区ＳＤ140（２ａ区１面ＳＤ001・２ｂ区ＳＤ010）によって本建物の北～南東が削平されている。南北を長辺とする平面長方形の竪穴建物と推定でき、南壁にカマドが付設される。残存長辺3.24m、短辺不明、深さ0.12mを測る。建物の主軸方向はN-11°-Eである。

【堆積土】上層に黒褐色のシルトが多く堆積し、下層では褐灰色のシルトと粘土が堆積する。底面カマド寄りに位置するＲｄ区ＳＰ149では上層～下層にかけて黒褐色の極細粒砂(1・3)、褐灰色の極細粒砂(2・5)、にぶい黄褐色の極細粒砂(4)が堆積する。

【出土遺物】土師器が出土したが小片であった。

【時期】出土した遺物からは時期の推定が困難なため、Ｒｄ区とその周囲の他の遺構や出土遺物の時期と建物方向などから考えて、７世紀後半～８世紀中頃と推定される。

【特徴・性格】南壁にカマドを付設する小型の竪穴建物で、本建物より西に位置するＲｄ区ＳＩ003やＲｄ区ＳＩ127と同様にカマドから焼土の堆積が確認できなかったことから、建物としての使用期間が短かったことが想定される。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＤ136（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ003、２ａ区１面ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区１面ＳＤ002、Ｒｆ区１面ＳＤ022）

【位置】Ｒｄ区中央、F19・G19・G20グリッドに位置し、２ａ区と２ｂ区に延びる。

【形状・規模】２ａ区・Ｒｄ区・２ｂ区へと続く溝の一部で、Ｒｄ区部分の長さ11.40m、壁面～底面にかけてなだらかな薬研状で、深さ0.24mを測る。２ａ区では地層堆積が良好で、１面及び２面調査を実施したためＲｄ区より上層から本溝の検出をおこなっているのでＲｄ区より溝幅が広がるが、Ｒｄ区では２ａ区１面よりも検出面が下位であるため、溝幅が縮小し1.38mを測る。

【堆積土】上層に灰黄褐色と極細粒砂を含む褐灰色のシルトが多く堆積し、下層に褐灰色・黄灰色シ

ルト、最下層に褐灰色粘土が堆積する。

【出土遺物】埋土中から須恵器高坏、土師器鍋の把手、山茶碗が出土した。（第443図1447～1149）

【時期】層位などから判断して13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】調査した範囲全体を東西方向に延びる規模の大きな溝の一部で、Ｒｄ区では方向を変える変化点に相当する。平行して延びる形状からＲｄ区ＳＤ140と一体のものと考えられ、形状や規模から判断して農作業などの用水路と道路側溝の役割もかねていた可能性が考えられる。本溝とＲｄ区ＳＤ140の間を道路面と理解すると双方の溝の中心で幅4.40m（約14.5尺）となる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＤ140（溝）（２ａ区１面ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010）

【位置】Ｒｄ区中央、Ｆ20・Ｇ20に位置し、２ａ区と２ｂ区に延びる。

【形状・規模】Ｒｄ区ＳＤ136と同様に２ａ区・Ｒｄ区・２ｂ区に延びる溝の一部で、Ｒｄ区部分の長さ11.76m、壁面～底面にかけてなだらかな薬研状で、深さ0.24mを測る。溝幅はＲｄ区ＳＤ136と同様に２ａ区１面よりも検出面が下位であるため、２ａ区１面部分よりも縮小し1.20mを測る。

【堆積土】粘性の強い黒褐色のシルトが全体的に堆積し、その下に褐灰色、にぶい黄褐色のシルトが若干堆積する。

【出土遺物】須恵器・土師器が出土しているがいずれも小片であった。

【時期】層位などから判断して13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】Ｒｄ区ＳＤ136に並行して、調査した範囲全体を東西方向に延びる規模の大きな溝の一部で、Ｒｄ区では方向を変える変化点に相当し、Ｒｄ区ＳＤ136とともに用水路と道路側溝の役割を兼ねていた可能性が考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＤ162（溝）（２ａ区２面ＳＤ166、２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027）

【位置】Ｒｄ区東端、Ｆ24・Ｆ25・Ｇ25・Ｇ26グリッドに位置し、２ａ区と２ｂ区にまたがる。

【形状･規模】２ａ区２面ＳＤ166と２ｂ区ＳＤ005と一体となる溝である。Ｒｄ区部分の長さ17.20m、溝幅1.80m、壁面～底面はなだらかに傾斜し、底面の一部に一段低くなる平面楕円形の土坑状の掘り込み（長さ4.00m、幅1.60m）が確認できた。深さは土坑状の掘り込みがある地点で0.42mを測る。

【堆積土】北側上層は粘性の弱い暗オリーブ褐色の粘土(1)が多く堆積し、両端の段にわずかに粘性の強い褐灰色粘土と褐灰色・にぶい黄褐色のシルト(3～5)が堆積する。北側下層は褐色粘土を含んだ粘性の強い黒褐色の粘土(2・6)が堆積する。南側は最上層に暗褐色のシルト(1)が堆積し、その下に大量の粘性の強い黒褐色粘土(2～4)が堆積する。最下層には粘性の強い黄灰色と褐色粘土を含む灰黄褐色の粘土(5・6)が堆積している。

【出土遺物】底面から数地点に渡ってほぼ完形に近い状態の須恵器・土師器が出土した。器種は須恵器が坏類・甑、土師器が高坏・甕である。（第443図1450～1455）

【時期】Ｒｄ区部分の出土遺物と、本溝と一体になる２ａ区２面ＳＤ166、２ｂ区ＳＤ005内ＳＫ027から出土した土器の時期から７世紀前半～後半に相当する。

【特徴・性格】２ａ区・Ｒｄ区・２ｂ区・Ｒｅ区・Ｒｆ区まで続く長大な溝であり、本溝を境としてその西（内側）と東（外側）では集落の様相が大きく変化する。東（外側）では建物などの居住にかかわる遺構が極端に少なくなっており、この溝が生活区域の境界であったと考えられる。２ａ区２面ＳＤ166から出土した土器群と同様に残存状態が良好な土師器を中心とした土器がある程度の間隔をあけて出土しており、溝内に土器を意図的に埋納した可能性が考えられる。本遺構については２ａ区

２面ＳＤ166、２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027と合わせてその特徴・性格についてまとめたい（本書第５章第２節参照）。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＰ081（ピット）
【位置】Ｒｄ区西側、G16グリッドに位置する。
【形状･規模】平面形状は南北を長辺とする不整円形で、長軸1.14m、短軸1.08m、深さ0.40mを測る。
【堆積土】最上層に黄褐色のシルトが堆積し、下層に暗黄灰色のシルト、にぶい黄色の砂質粘土が堆積する。柱の当たりには暗灰黄色・黄灰色のシルトが堆積する。
【出土遺物】底面からほぼ完形の須恵器の坏蓋２点、埋土中から陶錘１点が出土している。（第443図1456～1458）
【時期】出土遺物から７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】北西部分をＲｄ区ＳＩ060によって削平される。柱穴であるが遺物の出土状況から、地鎮祭祀が行われた可能性も考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＰ082（ピット）
【位置】Ｒｄ区西側、G16グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は東西を長辺とする楕円形で、長軸0.80m、短軸0.44m、深さ0.28mを測る。
【堆積土】土器の真下の層は褐灰のシルトが堆積し、柱の当たりには黄灰色のシルトが堆積する。それ以外では灰黄褐色・暗黄灰色・黄灰色・黒褐色・灰黄褐色のシルトと灰黄色の粘質土が堆積する。
【出土遺物】地表面付近からほぼ完形の須恵器の坏身が出土した。（第443図1459）
【時期】出土遺物から、７世紀前半と考えられる。
【特徴・性格】検出面から須恵器の坏身が据えられるような状態で出土していることから、地鎮祭祀が行われた可能性も考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＰ121（ピット）
【位置】Ｒｄ区中央、G18グリッドに位置する。
【形状・規模】平面形状は東西を長辺とする楕円形で、長軸0.70m、短軸0.54m、深さ0.16mを測る。
【堆積土】黄灰色・灰黄褐色のシルトが堆積する。
【出土遺物】木片のみ出土した。
【時期】７世紀後半～８世紀中頃と推定する。
【特徴・性格】堆積土の状況と木片の出土から柱穴と考えられるが、周囲にこのピットに関連する遺構が見られず詳しい性格などは不明である。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＸ166（不明遺構）
【位置】Ｒｄ区中央東寄り、Ｆ21・G21グリッドに位置する。
【形状・規模】平面不整形の土間状の硬化面で、長軸7.38m、短軸6.48m程度の範囲である。
【堆積土】中央部分で東西方向に断ち割りを深さ0.15mほど入れた結果、堆積土の大部分は黄灰色のシルトであり、表面に褐灰色・にぶい黄褐色・黒褐色・暗褐色・黄灰色・灰黄褐色のシルトがまばらに堆積し、下層ににぶい黄褐色・灰黄褐色の粘土、褐灰色のシルトが少量堆積する状態であった。
【出土遺物】土師器が出土したが小片であった。

【時期】出土遺物から時期を特定するのは困難であるが、重複関係からＲｄ区ＳＤ158やＲｄ区ＳＤ155・Ｒｄ区ＳＸ154よりも新しく、Ｒｄ区ＳＤ153やＲｄ区ＳＰ157よりも古い時期と判断でき、層位と周辺の遺構の状況などから７世紀と考えられる。
【特徴・性格】竪穴建物もしくは平地建物などの底面とも考えられたが、平面形状が不整形であることから、その性格などは不明である。

（後藤泰）

（15）Ｒｅ区（第314～316図、写真図版287・288）

①　１面（上層）

【遺構名】Ｒｅ区１面ＳＫ004（土坑）
【位置】Ｒｅ区１面の中央西側に位置する。
【形状･規模】平面形状は東西に長い隅丸長方形の土坑で、長軸2.04m、短軸1.40m、深さ0.64mを測る。底面は平坦で、検出面から0.15m程度の深さの位置にテラス状の段差がある。
【堆積土】上層が灰黄褐色の粘土でにぶい黄橙色の粘土やマンガン粒を含む(1)。下層は灰黄褐色と暗灰黄褐色の粘土で、それぞれ黒色粘土をブロック状に少量含む(2･3)。堆積土全体に鉄分が含まれる。
【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【時期】層位から中世以降であり、周辺にある同様の土坑から14～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】性格不明であるが短期間に掘って埋めたようであり、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】Ｒｅ区１面ＳＫ006（土坑）
【位置】Ｒｅ区１面の中央に位置する。
【形状･規模】平面形状は東西に長い隅丸長方形の土坑で、長軸3.92m、短軸1.94m、深さ0.80mを測る。底面は概ね平坦で、底面から0.20m程度の高さに細いテラス状の段差がある。
【堆積土】堆積土は上層ににぶい黄褐色の粘土、下層に灰黄褐色の粘土、最下層に褐灰色や黒褐色の粘土が堆積する。それぞれ黄橙色・褐灰色・黒褐色の粘土がブロック状に含まれる。層位の境界は不明瞭で、掘って間もなくほぼ一括して埋め戻されたと考えられる。
【出土遺物】土師器の小片が出土したのみである。
【時期】層位から中世以降であり、周辺にある同様の土坑から14～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】周辺に点在する中世の土坑の中でも比較的大型である。性格不明であるが短期間に掘って埋めたような状況からは、土坑墓の可能性が考えられる。

【遺構名】Ｒｅ区１面ＳＫ016（土坑）
【位置】Ｒｅ区１面の南西側に位置する。
【形状・規模】平面形状は南北に長い隅丸長方形の土坑で、長軸1.80m、短軸1.44m、深さ0.38mを測り、底面は概ね平坦である。
【堆積土】堆積土は最上層にマンガン粒を含むにぶい黄褐色の粘土質のシルト、下層に灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の小片が出土したのみである。

【時期】層位から中世以降のものであり、周辺にある同様の土坑から14～15世紀に推定される。
【特徴・性格】性格不明であるが短期間に掘って埋められたと推定され、土坑墓の可能性が考えられる。

（小島）

② ２面（下層）

【遺構名】Ｒｅ区２面ＳＤ024（溝）（２ｅ区２面ＳＤ093、Ｒg区２面ＳＤ036・ＳＤ043）
【位置】Ｒｅ区２面の南側に位置する。
【形状・規模】東西方向の溝で、緩やかに蛇行しながらＲｇ区２面ＳＤ036・ＳＤ043と２ｅ区２面ＳＤ093に続く。Ｒｅ区内で幅1.50m程度、深さ0.20m程度を測る。部分的にテラス状の段差があり、底面は幅0.40m程度の平坦面が続く。
【堆積土】上層に黒褐色の粘土質シルトが堆積し、下層ににぶい黄橙色の粘土をブロック状に含む黒褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片のほか、鉄釘と推定される鉄製品が出土した。（第444図1464）
【時期】堆積土から７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】Ｒｅ区とＲｇ区・２ｅ区に跨る長い溝である。Ｒｅ区２面ＳＤ025とほぼ並行し同時期に存在したか、掘り直された溝の可能性がある。

【遺構名】Ｒｅ区２面ＳＤ025（溝）（２ａ区２面ＳＤ177、Ｒg区２面ＳＤ034）
【位置】Ｒｅ区２面の中央南寄りに位置する。
【形状・規模】東西方向の溝で、緩やかに曲がりながらＲｅ区を横断し、西は２ａ区２面ＳＤ177、東はＲg区２面ＳＤ034に続く。Ｒｅ区内で幅は1.50m程度、深さ0.20m程度を測る。北側にテラス状の段差があり、底面は幅0.40m程度の平坦面が続く。
【堆積土】上層に黒褐色の粘土質シルト、下層ににぶい黄橙色の粘土をブロック状に含む黒褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したのみで図化できる遺物は無かった。
【時期】堆積土から７～８世紀と考えられる。
【特徴・性格】２ａ区～Ｒｇ区へと続く長い溝である。Ｒｅ区２面ＳＤ024とほぼ並行し、同時期に存在したか、掘り直された溝の可能性がある。

（小島）

（16）Ｒｆ区（第317～323図、写真図版289・290）

① １面（上層）

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＫ005（土坑）
【位置】Ｒｆ区１面の南側中央に位置する。
【形状・規模】平面形状は不整円形で、長軸0.92m、短軸0.84m、底面は北東側がやや凹み、深さ0.18mを測る。

【堆積土】にぶい黄橙色のやや締まった細粒砂や極細粒砂(1)と暗褐色の細粒砂(2)が堆積する。
【出土遺物】土師器片が出土したが図化可能なものはなかった。
【時期】時期を特定できる遺物がなく不明である。層位などから13世紀以降と推定される。
【特徴・性格】性格不明の土坑である。

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ004（溝）（１ｅ区２面ＳＤ063）
【位置】Ｒｆ区１面の南側、Ｋ27・Ｌ27グリッドに位置する。
【形状・規模】南西～北東に向かって延びる大きな溝で、東は１ｅ区２面ＳＤ063へと続き、西は２ｃ区へと続くが撹乱により失われている。幅はＲｆ区内で最大2.93m、深さ0.46mを測る。薬研状の断面で底面は幅0.20m程度と狭い。
【堆積土】最上層にシルト質の極細粒砂、下層にシルトや細粒砂が含まれる粘土が堆積する。
【出土遺物】土師器の甕、陶器の皿、磁器の小杯（盃）などが出土した。遺物は後世に混入したものが含まれると考えられる。（第445図1465～1467）
【時期】１ｅ区２面ＳＤ063の時期などから13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】長期間存続した溝である。

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ020（溝）
【位置】Ｒｆ区１面の中央、Ｉ27・Ｊ27グリッドに位置する。
【形状・規模】東西方向の幅が広い溝で、西側が若干北に振れる。幅3.47m、深さ0.36mを測り、傾斜は緩やかで底面は平坦である。東西ともに調査区外へと続くが隣接地区では削平されていたようで確認されていない。
【堆積土】灰黄褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の瓶が出土した。後世に周辺から流入したものと考えられる。（第445図1468）
【時期】層位などから15世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】中世後半以降に掘られた溝である。

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ022（溝）（１ａ区ＳＤ018、１ｂ区ＳＤ087、１ｅ区１面ＳＤ003、２ａ区ＳＤ002、２ｂ区ＳＤ013、２ｅ区１面ＳＤ050、Ｒｂ区ＳＤ002、Ｒｄ区ＳＤ130）
【位置】Ｒｆ区１面、Ｉ27グリッドに位置する。
【形状・規模】東西方向の大きな溝である。Ｒｆ区内で幅2.85m、深さ0.66mを測る。断面はすり鉢状で底面は平坦である。
【堆積土】上層ににぶい黄褐色や灰黄褐色のシルトや粘土が堆積する。下層に流水によって堆積した細粒砂～中粒砂の層があり、最下層に掘削後まもなく埋められたと考えられる地山がブロック状に含まれる粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の埦、平瓦、砥石などが出土した。須恵器や瓦は後世に混入したものと考えられる。（第445図1469～1471）
【時期】出土遺物から13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】道路側溝（通水路）と考えられる。

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ024（溝）（１ａ区ＳＤ019、１ｂ区ＳＤ117、１ｅ区１面ＳＤ006、２ａ区ＳＤ001、２ｂ区ＳＤ010、２ｅ区１面ＳＤ028・ＳＤ030、Ｒｂ区ＳＤ001、Ｒｄ区ＳＤ140）

【位置】Ｒｆ区１面、Ｉ27グリッドに位置する。

【形状・規模】東西方向の大きな溝である。Ｒｆ区内で幅2.30m、深さ0.82mを測る。壁面の掘り込み角度は急峻で、底面が平坦である。

【堆積土】上層にマンガン粒を含む灰黄褐色の粘土質シルトが堆積し、下層に暗褐色や黒褐色の粘土が堆積する。

【出土遺物】山茶碗の碗・小皿が出土した。（第445図1472 ～ 1476）

【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。

【特徴・性格】道路側溝（通水路）と考えられる。

（小島）

② ２面（下層）

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＢ001（掘立柱建物）

【位置】Ｒｆ区２面の中央に位置する。

【形状・規模】東西２間×南北１間の方形の側柱構造の掘立柱建物である。建物の主軸方向をN- 69° -Wとし、規模は桁行3.90m、梁行3.41m、柱間は桁行1.42m、梁行2.84mを測る。北面の柱穴はＲｆ区１面ＳＤ020により上部が削平されている。柱穴は不整円形や隅丸方形で、最も大きい南西隅柱Ｒｆ区２面ＳＰ056 が長辺1.25mを測り、深さ0.50m程度でどの柱穴も概ね均一である。柱穴の底面は柱の当たり（凹み）が見られ、その直径から使用されていた柱の直径は約0.10～0.15m程度と推測される。

【堆積土】堆積土はにぶい黄褐色や黒褐色の粘土や粘土質シルトが主であり、黄橙色粘土をブロック状に含む層が多くみられる。

【出土遺物】須恵器や土師器の小片が出土したが図化できるものは無かった。

【時期】時期を特定できる遺物は無いが、他の掘立柱建物と同様に７世紀後半～８世紀と考えられる。

【特徴・性格】小規模な掘立柱建物であるが、平面規模に比べて柱の掘方が大きく深い。側柱構造のため穀物倉庫ではないと考えられ、軽量物を納めた高床倉庫、あるいは物見櫓のような建物などの可能性も考えられる。

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＢ002（掘立柱建物）

【位置】Ｒｆ区２面の中央やや南寄りに位置し、西は２ｃ区へと延びると考えられるが撹乱により失われている。

【形状・規模】調査で確認された柱穴は４つのみであるが、桁行２間以上×梁行１間の長方形の建物と推定される。建物の主軸方向はN- 78° -Wで西に大きく振れる。規模は桁行1.93m以上、梁行2.90m、柱間は桁行1.36m、梁行2.40mを測る。柱穴は円形で、規模は北東の隅柱Ｒｆ区２面ＳＰ010で直径0.58m、深さ0.44mを測る。隅柱と側柱で柱穴の規模に大きな差はない。

【堆積土】隅柱Ｒｆ区２面ＳＰ010の掘方埋土は、上層がにぶい黄褐色の砂質シルト(1)で下層がにぶい黄褐色のシルト質の粘土(2)である。柱痕が確認された柱穴はなかった。

【出土遺物】須恵器と土師器の小片が出土しているが図化可能なものは無かった。

【時期】時期を特定できる遺物は無いが、Ｒｆ区２面ＳＤ006を切って建てられていることから８世紀前半以降と考えられる。
【特徴・性格】小規模な掘立柱建物であり、柱穴の並びも整然としない簡易な小屋程度の建物と考えられる。

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＤ006（溝）
【位置】Ｒｆ区２面、Ｊ27グリッドに位置する。
【形状・規模】東西方向の溝で、西側が若干北に振れる。西は２ｃ区へと延びるが撹乱により失われている。残存長3.60m、幅0.70m程度で深さ0.12mを測る。
【堆積土】暗褐色やにぶい黄褐色の粘土質シルトが堆積する。
【出土遺物】須恵器の有台坏身が出土した。（第446図1479）
【時期】出土遺物から７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＤ041（溝）
【位置】Ｒｆ区２面、H27・Ｉ27グリッドに位置する。
【形状・規模】南北方向の緩やかに曲がる溝である。Ｒｆ区内で完結し、長さ10.07m、最大幅1.47m、深さ0.30mを測る。
【堆積土】上層に黒褐色の粘土質シルト、下層に灰黄褐色のシルト質粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏蓋・坏身・甕の口縁部、土師器の甕などが出土した。（第446図1480～1484）
【時期】出土遺物から７世紀前半～中頃と考えられる。
【特徴・性格】性格不明の溝である。

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＤ044（溝）（２ｂ区ＳＤ011）
【位置】Ｒｆ区２面、H27・Ｉ27グリッドに位置する。
【形状・規模】２ｂ区ＳＤ011と一体の東西方向の溝である。Ｒｆ区内で幅1.43m、深さ0.43mを測る。東は２ｅ区の西端で消滅する。
【堆積土】黒褐色の粘土が堆積する。
【出土遺物】須恵器の坏身・高坏、土師器の甕などが出土した。（第446図1485～1487）
【時期】出土遺物から７世紀と考えられる。
【特徴・性格】東西方向の蛇行する溝である。集落の外縁付近に掘られており、雨水を流すと共に集落の内外を隔てる溝の一つの可能性がある。

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＤ045（溝）（２ａ区２面ＳＤ166、Ｒｄ区ＳＤ162、２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027）
【位置】Ｒｆ区２面、H27グリッドに位置し、西は２ｂ区ＳＤ005、Ｒｄ区ＳＤ162、２ａ区２面ＳＤ166へと続く。
【形状・規模】東西方向の溝で東に向かって徐々に浅くなり消滅する。Ｒｆ区内で幅1.50m、深さ0.15mを測る。
【堆積土】上層に黒褐色の粘土質シルト、下層に基本層序Ⅷ層を含む黒褐色のシルト質粘土が堆積す

る。
【出土遺物】図化可能な遺物は出土しなかった。
【時期】他地区の同一溝の出土遺物から７世紀前半～後半と考えられる。
【特徴・性格】２ａ区・Ｒｄ区・２ｂ区・Ｒｆ区まで続く長大な溝であり、本溝を境としてその西（内側）と東（外側）では集落の様相が大きく変化する。西（内側）では建物などの居住にかかわる遺構が多く確認されているが、東（外側）では居住にかかわる遺構が極端に少なくなっており、この溝が生活区域の境界であったと考えられる。２ａ区２面ＳＤ166から出土した土器群と同様に残存状態が良好な土師器を中心とした土器がＲｄ区ＳＤ166、２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027からもある程度の間隔をあけて出土しており、溝内に土器を意図的に埋納した可能性が考えられる。本遺構の遺物については、２ａ区２面ＳＤ166、２ｂ区ＳＤ005・ＳＫ027と合わせて、その特徴・性格については別稿にてまとめる（第５章第２節参照）。

（小島）

（17）Ｒg区（第324～337図、写真図版291～298）

①　１面（上層）

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＫ001（土坑）
【位置】Ｒｇ区１面、Ｇ39グリッド、中央北側に位置する。
【形状・規模】平面が隅丸長方形で、平底の土坑である。長軸1.46ｍ、短軸0.94ｍ、深さ0.09ｍを測る。
【堆積土】全体に灰褐色粘質土(1)が堆積するが、底部中央付近に僅かに灰オリーブ色粘質シルト(2)の堆積がみられる。
【出土遺物】須恵器の破片が出土しているが、混入したものと思われる。
【時期】後述するＲｇ区１面ＳＫ027の最上層の堆積土の組成が、本土坑の堆積土と同じで、時期はＲg区１面ＳＫ027と同じく14世紀以降と思われる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＫ002（土坑）
【位置】Ｒｇ区１面、Ｇ38・Ｇ39グリッド境の中央に位置する。
【形状・規模】平面が不整円形で平底の土坑である。長軸1.52ｍ、短軸1.42ｍ、深さ0.31ｍを測る。
【堆積土】上層と中層には灰赤色粘質土(1・2)が堆積し、下層には灰オリーブ色粘質シルトがマーブル状に混じる赤灰色粘質土(3)が堆積する。
【出土遺物】土師器の破片が出土しているが、混入したものと思われる。
【時期】時期は不明である
【特徴・性格】堆積土の下層上面において、一旦埋まった土坑を再掘削して半分ほど埋め戻したようであった。性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＫ007（土坑）
【位置】Ｒｇ区１面、Ｇ34グリッドの北側中央東に位置する。

【形状・規模】平面形状は横長の溝状で、やや丸みのある平底の土坑である。長軸3.92m、短軸1.42m、深さ0.30mを測る。
【堆積土】上層ににぶい褐色粘質土(1)、下層に褐色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】須恵器・土師器の破片が出土しているが、混入したものと思われる。
【時期】時期は不明である。
【特徴・性格】形状と方向から、溝の浸食などによって、一部分だけが残った可能性が高い。性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＫ027（土坑）
【位置】Ｒｇ区１面、G29グリッドの南東隅に位置する。北側の一部は２ｄ区にかかっている。
【形状・規模】平面が長方形で平底の土坑である。長軸3.68m、短軸2.14m、深さ0.76mを測る。
【堆積土】斑土が堆積する。最上層は灰オリーブ色粘質土がマーブル状に混じる灰褐色粘質土(1)であるが、その下は中央辺りで西側と東側で異なった堆積をする。西側では(1)の下に褐灰色粘質土がブロック状に混じる灰褐色粘質土(5)、その下に褐灰色粘質土がブロック状に混じる赤褐色粘質土(6)、さらにその下に褐灰色粘質土がブロック状に混じる灰色粘質土(7)が堆積する。東側では褐灰色粘質土がブロック状に混じるにぶい褐色粘質土(3)、その下に褐灰色粘質土と赤黒色粘質土がブロック状に混じる灰色粘質土(4)が堆積する。
【出土遺物】東濃型の山茶碗片が出土している。
【時期】出土遺物より14世紀以降と考えられる。
【特徴・性格】堆積土(7)から堆積土(6)の順に埋め戻したのち、東半分を再掘削して埋め戻し、さらに堆積土(1)を充填して短期間で埋め戻しを行った状態であったことから、土坑墓と考えられる。２ｄ区でも同様に斑土が堆積した中世の土坑墓が見つかっている。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＤ017（溝）（２ｄ区ＳＤ022、２ｅ区１面ＳＤ094）
【位置】Ｒｇ区１面、G30グリッド、Ｒｇ区１面ＳＸ019・Ｒｇ区１面ＳＤ017の間に位置する。
【形状・規模】南北方向へまっすぐ延びる溝で、壁面は45度ほどの傾斜で平底になる。長さ11.00m、幅2.00m、深さ0.44mを測る。
【堆積土】上層に褐灰色粘質土が２層にわたって堆積し、その下に赤灰色粘質土、にぶい黄褐色粘質土がブロック状に混じる赤灰色粘質土が順に堆積していた。
【出土遺物】山茶碗の碗、片口、叩き石が出土している。（第447図1494～1496）
【時期】出土遺物などから13～15世紀と考えられる。
【特徴・性格】本溝は２ｅ区１面ＳＤ094と２ｄ区ＳＤ022と一体となる溝である。東側のG31グリッド内にも２ｅ区・２ｄ区に繋がっている同様の溝が並行することから、道路に伴う側溝（通水路）であった可能性が高い。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＤ021（溝）
【位置】Ｒｇ区１面、G30グリッド、Ｒｇ区１面ＳＸ019・Ｒｇ区１面ＳＤ017の間に位置する。
【形状・規模】南北方向に延びる短い溝で、長さ6.70m、幅0.90m、深さ0.14mを測る。
【堆積土】上層に灰黄褐色粘質土(1)、下層ににぶい褐色粘質土がブロック状に混じる黒褐色粘質土(3)、中間に一部入り込むような形で灰黄褐色粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の破片が出土しているが、混入したものと思われる。
【時期】時期は不明である
【特徴・性格】Ｒｇ区１面にて消滅する溝である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＤ028（溝）
【位置】Ｒｇ区１面の東南隅Ｇ28・Ｈ28グリッド、Ｒｇ区１面ＳＫ027の西側に位置する。
【形状・規模】南北方向に延びる溝で、長さ2.28m、幅0.88m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】上層はにぶい赤褐色粘質土(1)、下層には西側に赤褐色粘質土(2)、東側にも赤褐色粘質土(3)が分かれて堆積する。
【出土遺物】土師器の破片が出土しているが、混入したものと思われる。
【時期】時期は不明である
【特徴・性格】Ｒｇ区１面にて消滅する溝である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＰ006（ピット）
【位置】Ｒｇ区１面、Ｇ39グリッド、Ｒｇ区１面ＳＫ001の西側に位置する。
【形状･規模】平面が楕円形のピットで、掘方がすり鉢状を呈する。長軸0.42m、短軸0.32m、深さ0.14mを測る。
【堆積土】上層に薄くにぶい赤褐色粘質土(1)、下層には暗赤褐色粘質土(2)が堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】出土遺物もなく時期は不明である
【特徴・性格】形状から柱穴であったと思われる。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＰ011（ピット）
【位置】Ｒｇ区１面、Ｇ34グリッド、中央北寄りに位置する。
【形状・規模】平面が不整円形のピットで、平底である。長軸0.42m、短軸0.32m、深さ0.12mを測る。
【堆積土】上層に灰赤色粘質土(1)、下層ににぶい赤褐色粘質土(2)が堆積する。上層の一部は底面に達していた。
【出土遺物】特になし。
【時期】出土遺物もなく時期は不明である。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＰ018（ピット）
【位置】Ｒｇ区１面、Ｇ30グリッド、Ｒｇ区１面ＳＸ019に内包される。
【形状・規模】平面が隅丸長方形のピットで、長軸0.80m、短軸0.54m、深さ0.14mを測る。
【堆積土】上層は褐灰色粘質土(1)が堆積し、下層は北側に褐灰色粘質土(2)、南側に黒褐色粘質土(3)が分かれて堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】出土遺物もなく時期は不明である。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＸ009（不明遺構）

【位置】Ｒｇ区１面、G34グリッド、東中央に位置する。

【形状・規模】平面不整形で、底面は平坦である。長軸2.50m、短軸1.70m、深さ0.04mを測る。

【堆積土】単層で黄灰色粘質土(1)が堆積する。

【出土遺物】特になし。

【時期】出土遺物もなく時期は不明である。

【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＸ010（不明遺構）

【位置】Ｒｇ区１面、G34グリッド、北東隅に位置する。

【形状・規模】平面不整形で、底面は平底である。長軸2.28m、短軸0.90m、深さ0.04mを測る。

【堆積土】基本的に１層で灰褐色粘質土(2)が堆積するが、北端の飛び出た部分では灰赤色粘質土(1)が堆積する。また中央付近では1層の下に一部灰褐色粘質土(3)の堆積がみられた。

【出土遺物】特になし。

【時期】出土遺物もなく時期は不明である。

【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＸ012（不明遺構）

【位置】Ｒｇ区１面、G32グリッド、中央北側に位置する。

【形状・規模】平面不整形で、底面は平底である。長軸1.02m、短軸0.64m、深さ0.06mを測る。

【堆積土】上層は北側が灰褐色粘質土(1)、中ほどが褐灰色粘質土(2)、南側がにぶい赤褐色粘質土(3)が堆積する。下層は少し凹んだ部分に暗赤褐色粘質土(4)が堆積する。

【出土遺物】特になし。

【時期】Ｒｇ区１面東端（G39グリッド内）で検出した２ｅ区１面から延びるRg区１面ＳＤ045の上層の堆積土と本遺構の堆積土が酷似していることから、同時期の埋没と考えられ、時期は13世紀後半以降と思われる。

【特徴・性格】性格は不明である

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＸ019（不明遺構）

【位置】Ｒｇ区１面、G30グリッド、西側に位置する。

【形状･規模】平面はいびつな台形で、底面は平坦である。長軸5.14m、短軸3.66m、深さ0.10mを測る。

【堆積土】灰赤色粘質土(1)が全面に堆積し、底面の一部凹んだ部分に赤灰色粘質土(2)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身片が出土しているが、混入品と思われる。（第447図1497）

【時期】Ｒｇ区東端（G39グリッド内）で検出した２ｅ区１面から延びるＲｇ区１面ＳＤ045の最下層の堆積土が本遺構の堆積土と酷似していることから、同時期の埋没と考えられる。時期は13世紀後半以降と思われる。

【特徴・性格】本遺構内では、Ｒｇ区１面ＳＤ030とＲｇ区１面ＳＰ018が検出されている。性格は不明である。

（後藤秀）

② ２面（下層）

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＫ032（土坑）

【位置】Ｒｇ区２面、G38グリッド、東側の北寄りに位置する。Ｒｇ区２面ＳＤ031の北壁面の一部を切る。

【形状・規模】平面がいびつな楕円形の土坑で、北側は深く南側は浅い底面形状である。長軸3.14m、短軸1.48m、深さ0.07mを測る。

【堆積土】灰褐色粘質土(1)が堆積する。

【出土遺物】須恵器、土師器、山茶碗の破片が出土しているが、山茶碗は上層から混入したものと思われる。

【時期】出土遺物より７～８世紀と思われる。

【特徴・性格】Ｒｇ区２面ＳＤ031より新しい時期の遺構で、性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＫ049（土坑）

【位置】Ｒｇ区２面、G37～G39グリッドに位置する。

【形状・規模】平面がいびつな楕円形の土坑で、底面には凹凸がみられる。長軸2.82m、短軸1.18m、深さ0.10mを測る。

【堆積土】褐灰色細粒砂(1)が堆積し、その下層の一部に明褐灰色細粒砂(2)が堆積する。

【出土遺物】須恵器の破片が出土している。

【時期】出土遺物より７世紀中頃～８世紀前半と思われる。

【特徴・性格】Ｒｇ区２面ＳＤ050の埋没後に掘削された土坑で、性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＤ031（溝）（２ｅ区２面ＳＤ129）

【位置】Ｒｇ区２面、G37～G40グリッドに位置する。

【形状・規模】北東～南西に緩やかに延びる。G40グリッド内で２条の溝が合流し、G37グリッド内でＲｇ区２面ＳＤ031とＲｇ区２面ＳＤ035に分流する。壁面は緩やかに傾斜する。底面は平底であるが、低くて背を持つ個所もある。残存長34.00m、幅1.00m、深さ0.80mを測る。

【堆積土】上層に黒褐色粘質土、中層ににぶい褐色粘質土、下層に褐灰色粘質土が堆積する。

【出土遺物】須恵器の坏身・細頸瓶、土師器の壺・甕が出土している。土師器の壺は４世紀前半のもので混入したものと思われる。（第448図1501～1506）

【時期】出土遺物より７世紀と思われる。

【特徴・性格】本溝は２ｅ区２面ＳＤ129と一体となる溝である。G37グリッド内では、Ｒｇ区２面ＳＤ036を内包する。

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＰ040（ピット）

【位置】Ｒｇ区２面、G31グリッド、中央南寄りに位置する。

【形状・規模】平面が不整円形のピットである。長軸0.58m、短軸0.54m、深さ0.09mを測る。

【堆積土】上層に灰黄褐色細粒砂(1)、下層ににぶい黄橙色細粒砂(2)が堆積する。

【出土遺物】特になし。

【時期】重複するＲｇ区２面ＳＤ034が７世紀の溝と考えられるので、Ｒｇ区２面ＳＤ034より新しい

時期と考えられ、８世紀以降と思われる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＰ041（ピット）
【位置】Ｒｇ区２面、G31グリッド、中央南寄り、Ｒｇ区２面ＳＤ050内に位置する。
【形状・規模】平面が不整円形のピットである。長軸0.62m、短軸0.58m、深さ0.10mを測る。
【堆積土】にぶい黄橙色細粒砂(1～3)が上中下の３層にわたって堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】重複するＲｇ区２面ＳＤ050が７世紀の溝と考えられるので、Ｒｇ区２面ＳＤ050より新しい時期と考えられ、８世紀以降と思われる。
【特徴・性格】性格は不明である。

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＰ046（ピット）
【位置】Ｒｇ区２面、G29グリッド、西側の中央に位置する。
【形状・規模】平面が不整円形のピットである。長軸0.74m、短軸0.64m、深さ0.28mを測る。
【堆積土】上層に地山ブロックを含む褐灰色細粒砂(1)、下層に灰黄褐色細粒砂(2)が堆積する。
【出土遺物】特になし。
【時期】層位と堆積土から判断して８世紀以降と思われる。
【特徴・性格】性格は不明である。

（後藤秀）

(18) 旧五条川（１ｃ区・１ｄ区・１ｅ区・２ｃ区・Ｒｆ区）（第338 ～ 341図、写真図版113・299）

【遺構名】旧五条川（旧河道・幼川）
【位置】１ｃ区南西端のＩ１・Ｉ２グリッドから１ｄ区西のＪ１～Ｊ４・Ｋ１～Ｋ４・Ｌ１～Ｌ５グリッド、２ｃ区南のＬ16・Ｌ17グリッド、２ｃ区南のＬ23～Ｌ26グリッド、Ｒｆ区南のＬ27グリッド、１ｅ区南のＬ28～Ｌ40グリッドにかけて位置する。全調査区の西南端～南にかけての一帯に位置し、調査区外（西及び東・南）に大きく延びる。
【形状・規模】１ｃ区西端と１ｄ区西では、湾曲して北西に向かって延びることが予測できるが、１ｄ区・Ｒｃ区・２ｃ区・Ｒｆ区・１ｅ区といった東西に連続する調査区の南の調査区外を主体として、東西に延びていることが予測できる。
また１ｄ区と２ｃ区で確認できた状況から、部分的に南に蛇行していたと推測できる。壁面形状は、１号トレンチでは西に向かって、３～５号トレンチでは南に向かって、緩やかな傾斜で徐々に下がって深くなっている。本体部分が調査区外となるため、大規模であることは予測できるが、幅などの詳細は不明である。
【堆積土】１ｄ区で１・２号トレンチ、２ｃ区で３・４号トレンチ、１ｅ区１面で５号トレンチを設定して、堆積土の確認を実施した。
１号トレンチでは東西に長さ26.00mまで拡張して掘り下げを行い、設定トレンチの中で最も多くの堆積土が確認できた。１号トレンチでは、上層に褐灰色～灰褐色におよぶ粘質土(1～4)、中層に褐

色~灰黄褐色の砂質土(5～9)、下層ににぶい黄橙色~灰色の砂質土(10～12)が堆積し、その下に灰色とオリーブ黒色の砂質土(13・14)・黒色の粘質土(15)の堆積が確認できた。１ｄ区の遺構検出面から灰色砂質土(13)上面までの深さは0.90ｍを測る。また上層は東にさらに広がるが、中層はトレンチの東端にて落ち込むことが確認できた。

【出土遺物】 １～４号トレンチの上層を中心に、山茶碗の破片が出土している。

【時期】 層位と出土遺物から中世以降と考えられる。

【特徴・性格】 第１期当初の発掘調査開始の段階では、１ｅ区南の部分が表土層から既に大規模な撹乱を受けていたこともあって、１ｃ区を含めて旧河道である判断ができなかったが、第１期後半に１ｄ区の発掘調査を開始してから、旧河道である可能性が高くなった。

第２期の２ｃ区の発掘調査では、２ｃ区南のＬ16・Ｌ17グリッドにて部分的ではあるが、護岸杭を思わせるような木杭を伴う小規模なピット列（２ｃ区ＳＰ054～ＳＰ068）が確認でき、旧河道の右岸に沿って設置されたものと考えられる。また２ｃ区東の南端にて、旧河道としての特徴・性格を把握するために設定した３・４号トレンチの調査結果から、東西に延びる旧河道の一部分であることがわかった。

現在の五条川は調査区の南20～70ｍほどの地点に右岸の堤防が位置しており、東から西に向かってやや蛇行しながら流れている。この旧河道は、地理・地形及び層位などの地勢から、現在の五条川として河川改修が実施される以前の旧五条川と考えられ､五条川はかつて青木川との合流地点までは｢幼川」と呼ばれていたようで、発掘調査によってその右岸の一部分が確認できた。

１ｄ区１号トレンチ（調査時の呼称: １ｄ区西側トレンチ）内での堆積土の珪藻及び花粉分析の結果からは、湿地的環境の広がりから河川への変遷が推定され、周辺では水田やソバ・ベニバナ栽培が行われていた可能性が指摘されている（詳細は第４章参照)。

（基峰）

第３節　遺物

（１）１ａ区（第342～346図、写真図版300～303）

【遺構名】１ａ区ＳＩ067（竪穴建物）

１は１ａ区ＳＩ067から出土した須恵器の坏身である。口縁部と体部が受部で区分される器形で、底部２分の１に回転ヘラケズリが施される。時期は６世紀後半と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＫ022（土坑）

２は１ａ区ＳＫ022から出土した土師器甕の口縁部で、端部が上へつまみ上げられている。内外面ともヨコナデである。器形から、６世紀末頃～７世紀前半と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＫ049（土坑）

３は１ａ区ＳＫ049から出土した土師器甕の口縁部とそれに続く体部の一部で、口縁端部が上へつまみ上げられている。調整については、口縁部はヨコナデと思われるが、体部を含め内外面ともに摩滅が激しいため不明瞭である。時期は６世紀末頃～７世紀前半と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＫ051（土坑）

４は１ａ区ＳＫ051から出土した土師器甕の口縁部と体部の一部で、口縁端部が上へつまみ上げられている。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整される。内面については口縁部・体部ともにヨコハケである。時期は６世紀末頃～７世紀前半と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＤ002（溝）

５は１ａ区ＳＤ002から出土した砥石である。粘板岩製で表面と両側面が滑らかになっている。時期は９～10世紀と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＤ014（溝）

６～15は１ａ区ＳＤ014から出土した遺物である。６は須恵器の高台付坏で、時期は８世紀前半と思われる。７・８は尾張型の山茶碗である。７は糸切底に高台を貼付している。高台にはわずかに砂粒痕が残る。８は高台貼付後に内外面をナデているので、糸切痕の一部がナデ消しとなっている。高台の３分の１は剥離している。７・８ともに胎土に砂粒を少し含んでいる。時期は７・８とも12世紀中頃と思われる。９～12は東濃型の山茶碗である。緻密な胎土を用いて体部は薄めに仕上げられている。高台には籾殻痕が残る。９には内面底部に軽く指圧痕と、重ね焼きの籾殻痕が残る。10の内面底部には軽く指圧痕が残る。不整円の三角高台で籾殻痕は少ない。体部は丸みをもって立ち上がる。11は口縁部がやや外反する。12の底部外面に不整円の高台が貼付されている。体部は外側に向かって大きく開く。底部内面は凹んでいる。時期については、９は13～14世紀、10・11は14世紀中頃、12は15世紀前半と思われる。13は古瀬戸で、灰釉尊式仏花瓶の頸部である。古瀬戸後期様式期の製品と思われる。14は土錘である。残存長2.7㎝、孔径0.3㎝、重量2.1ｇで、一方の端部を欠損する。中央の幅が膨らみ、両端部は擦り減っている。時期については供伴土器から、９世紀後半～10世紀と思われる。15は鉄製品で、釘か鎹と思われる。時期は供伴土器から、９～10世紀と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＤ018（溝）

16～37は１ａ区ＳＤ018から出土した遺物である。16～20は須恵器で、16～18は高台付の坏身である。16の底面は回転ヘラ切り、体部は内外面ともに回転ナデである。17の底面は回転ヘラ切り、体部は内外面ともに回転ナデである。18の底面は回転ヘラケズリで角高台が付き、体部は内外面ともに回転ナデである。赤みの強い焼きとなっている。19は鉢で、内外面とも回転ナデ調整が施される。20は合子で、内外面ともに回転ナデが施される。時期については、16・19は８世紀前半、17は７世紀後半～８世紀初頭、18は９世紀、20は８世紀後半と思われる。21は灰釉陶器で、瓶類の底部である。体部内面にはロクロ目が残り、外面は回転ヘラケズリされ、底部はヘラケズリ後に高台が貼付される。底部内面に降灰がある。時期は９～10世紀である。22～32は山茶碗類である。32の東濃型の山茶碗を除き、尾張型の山茶碗である。22は小碗底部で、底部内面に浅い沈線が一周する。底面の糸切痕はナデ消しされている。23は小碗と思われる。底面の糸切痕はナデ消しされている。24は小皿である。胎土に粗砂を含み表面がやや荒くなっている。口縁部外面はヘラが当てられ角張っている。底部には糸切痕が残る。25は山茶碗の底部である。高台内外面には回転ナデが施されているが、糸切痕は残る。内面は使用により摩滅している。26は山茶碗の底部である。内面は使用により摩滅している。底面には重ね焼き高台痕が残っている。体部外面には煤もしくは墨のようなものが付着している。高台外面はヘラ調整され、内側は指ナデが施されるが糸切痕が残る。27は山茶碗の底部である。高台内側の指ナデ部

分を除き糸切痕が残る。内面は使用により摩滅しており、重ね焼き高台痕が残る。高台は台形に潰れており籾殻痕が残る。28は山茶碗の底部である。内面は使用により摩滅している。外面には糸切痕が残る。29は山茶碗の底部である。糸切痕はナデ消しされている。内面は使用により摩滅している。高台先端はつぶれている。30は山茶碗の底部である。内面の底部と体部の境が丸く凹んでいる。また見込みには指圧痕が残る。糸切痕はナデ消しされている。高台には籾殻痕が残る。31は山茶碗の底部である。内面の底部と体部の境が丸く凹んでいる。32は東濃型の山茶碗である。緻密な胎土で薄めに仕上げられている。口縁部はすこし外反している。内面はコテがあてられ、外面は回転ナデである。時期については、22・23・25・26は12世紀前半、27は12世紀中頃、28・29は12世紀後半、30・31は13世紀前半、24は13世紀中頃、32は13世紀後半と思われる。33は鉢である。底部片のため全体像は判らない。外面はヘラケズリである。高台には籾殻痕が残る。内面には降灰、窯ぼろが付着している。時期は14世紀前半と思われる。34は錆釉の擂鉢片である。摺り目は９条が確認できる。破面の１面に研磨痕が残る。時期は15～16世紀と思われる。35は土錘で、長さ4.9㎝、孔径0.6㎝で、重量は11.7ｇである。中央の幅が膨らんでいる。土錘の両端部は平坦に整えられている。時期について供伴土器から、７世紀と思われる。36・37は砥石である。36は表面・裏面・上面・両側面の５面に研磨痕が残る。37は表面・側面一部の２面に研磨痕が残る。材質は36・37ともに砂岩である。時期については36・37ともに16世紀以前と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＤ019（溝）

38～42は１ａ区ＳＤ019から出土した遺物である。38～43は尾張型の山茶碗類である。38は小碗である。糸切痕はナデ消しされている。39は山茶碗の底部である。内面はコテアテされている。外面は回転ナデが施され、糸切痕もナデ消しされている。高台は外側に向かって湾曲している。40の山茶碗の高台内側は指ナデが施されている。内面は使用により摩滅している。41の山茶碗は、高台の内側は指ナデの範囲が広く、底面の糸切痕の外側が消えている。また、高台にはわずかに籾殻痕が残る。42の山茶碗の底部内面には指圧痕、外面には板状押圧痕が残る。高台には籾殻痕が残る。体部下方は少し丸みを帯びる。43の山茶碗は、見込み部分まで滑らかにコテアテされている。底面の糸切痕はナデ消しされている。胎土は荒く長石の吹き出しもみられる。高台は低く、籾殻痕が残る。44は東濃型の山茶碗である。緻密な胎土を用い、体部は丸みを帯び、体部内面は薄く仕上げられている。時期については、39は11世紀後半～12世紀前半、38は12世紀、40・41は12世紀中頃、42は12世紀後半、43は13世紀前半～中頃、44は14世紀中頃と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＤ024（溝）

45は１ａ区ＳＤ019の東端に切り込む１ａ区ＳＤ024から出土した須恵器高坏の坏部である。外面の下部４分の１に回転ヘラケズリが施される。脚部の透孔は２方向と思われる。時期は７世紀中頃と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＰ057（ピット）

46は１ａ区ＳＰ057から出土した須恵器の坏蓋である。天井部外面３分の１に回転ヘラケズリが施される。天井部と口縁部が陵で区画される。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と思われる。

【遺構名】１ａ区ＳＸ060（溝状遺構）

47～69は１ａ区ＳＸ060から出土した遺物である。47～63は須恵器である。47～49は坏蓋である。47の坏蓋の天井部は丸みを帯び器高が高い。天井部と口縁部が陵で区画され、天井部外面３分の２に回転ヘラケズリが施される。48・49も坏蓋で、47と同様に天井部と口縁部が陵で区画され、天井部外面３分の１に回転ヘラケズリが施される。49は焼成不良のためにぶい黄橙色をしている。50～56は坏身である。50の坏身のたちあがりは内傾しており、受部から下の底部外面３分の２に回転ヘラケズリが施される。51の坏身は口縁部と体部の一部である。たちあがりは内傾し受部で口縁部と底部が区画される。52の坏身のたちあがりも内傾し、底部外面３分の１に回転ヘラケズリが施される。53の坏身は底部のみが残っていた。底部外面は回転ヘラケズリ後に、ヘラ記号（線刻）が施される。54の坏身は口縁部を欠いている。受部の直下に段を有する。底部外面３分の１に回転ヘラケズリ、ヘラ記号（線刻）が施される。55の坏身のたちあがりは内傾し、受部から下の底部外面３分の２にヘラケズリが施される。底部内面には指で押しナデ消したような痕跡が残る。56の坏身は受部直下に段を有する。底部外面３分の１が回転ヘラケズリされ、ヘラ記号（線刻）が施される。57～60は高坏である。57の高坏は坏部の一部のみが残っていた。口縁部の下に１条の隆起する線が入り、その下にヘラ描きの波状文、さらにその下に沈線が２条施される。58の高坏は脚部に長方形の２段透かしを３方向に配し、２条の沈線が施される。59･60は高坏の脚部のみである。59の脚部は透孔を有し、２条の沈線が施される。61は壺である。体部外面にはタタキ、底部にはカキメが残る。肩部にはヘラによる連続刺突文、体部に沈線文が施される。62は把手付の鍋である。体部外面はタタキで、底部に葉脈痕がある。63は甕である。体部は丸みを帯びる形で、肩部には櫛描連続刺突文、その下に沈線が施される。時期については、47は６世紀後半～末頃、51は６世紀後半、57は６世紀後半～７世紀初頃、48・49・58は６世紀末頃～７世紀初頃、50は６世紀末頃～７世紀前半、53は６～７世紀、54～56は７世紀前半、59～61は７世紀中頃、62･63は７世紀と思われる。64～68は土師器である。64は台付甕である。体部内外面は指ナデ･指オサエ、台部内面はハケ調整である。65は甕である。長胴丸底で体部内面の底部にヘラケズリが施される。66の甕は摩滅が激しい。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデが施される。67の甕は口縁部がヨコナデされ、体部の内外面はナデ調整である。68の甕の外面はナデ調整、口縁部・体部の内面はハケ調整である。時期については、64は３世紀、65・66は６世紀後半～７世紀前半、68は６世紀末頃～７世紀前半、67は７世紀前半～中頃と思われる。69は山茶碗の底部である。内面に指圧痕、高台部には籾殻痕がみられる。時期は13世紀と思われる。この山茶碗は上層より混入したものと思われる。

【１ａ区遺構外】

70～74は１ａ区遺構外から出土した遺物である。70は須恵器の甕の口縁部である。推定口径46.6㎝を測る大型の甕で、時期は７世紀と思われる。71は山茶碗である。高台の内側には籾殻痕が残る。時期は14世紀後半～15世紀前半である。72は古瀬戸四耳壺である。肩部沈線の上に、４本の篦刻沈線が施された平紐の耳がつけられている。時期は13世紀と思われる。73は羽釜の口縁部である。時期は13世紀中頃～14世紀初頭と思われる。74はサイコロである。数字の３・４に黒着色、２・５に赤着色、１・６は無着色となっている。表裏の目の着色が同じで、和が７になるように配置されている。時期は13～16世紀と思われる。

（後藤秀）

（２）１ｂ区（第347～353図、写真図版304～309）

【遺構名】１ｂ区ＳＢ007（掘立柱建物）

75は１ｂ区ＳＢ007を構成する１ｂ区ＳＰ160から出土した土師器甑の口縁部～体部上半である。体部外面に把手（逆鍵状）が付き、体部内外面にハケ調整が施される。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＩ027（竪穴建物）

76～78は１ｂ区ＳＩ027から出土した遺物である。76は須恵器の坏蓋である。天井部３分の１に回転ヘラケズリが施される。肩部はしっかりとした陵を持つ。時期は６世紀中頃～後半と思われる。77はＳＩ027に付設されたＳＬ048（カマド）から出土した土師器の甕である。体部外面にはハケメ、内面にはハケメ・指オサエ痕が残る。時期は７世紀前半～中頃と思われる。78はＳＬ048から出土した土師器の甕である。体部外面はハケメが施され、底部は無調整で葉脈痕が残る。時期は８世紀と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＩ230（竪穴建物）

79～87は１ｂ区ＳＩ230から出土した遺物である。79～81は須恵器である。79は床面から出土した坏蓋である。肩部に陵を持つ。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と思われる。80は坏身である。外面の体部中央辺りに回転ヘラケズリが施されるが、底部の中央は未調整である。時期は７世紀前半～中頃と思われる。81は坏身である。底部外面はヘラナデ、内面は回転ナデが施される。赤みを帯びた焼き色を呈している。時期は８世紀初頭～前半と思われる。82～84は土師器の甕である。83・84の甕はＳＬ236（カマド）から出土した。83・84ともに、口縁端部の摘まみ上げは短く、口縁部の外面はヨコナデ、体部内外面はハケが施される。時期は83･84とも７世紀中頃と思われる。85は鞴の羽口である。直径5.2㎝、通風管内径2.2㎝と推定される。時期は７～８世紀と思われる。86には鉄の付着がみられ、鞴の羽口か坩堝と思われる。時期は７～８世紀と思われる。87は１ｂ区ＳＩ230内１ｂ区ＳＰ263から出土した砥石である。長さ11.2㎝、厚さ4.0㎝、重さ323.6ｇで、表・裏・両側面の４面が摩滅している。時期は７～８世紀である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ040（溝）

88～92は１ｂ区ＳＤ040から出土した遺物である。88～90は須恵器の坏身である。88の底部外面は回転ヘラケズリが施される。89の底部外面は静止糸切後ヘラナデされる。90の底部外面は回転ヘラ切りされる。時期については、88は６世紀末頃～７世紀初頭、89は８世紀、90は７世紀中頃と思われる。91の器種は不明であるが、土師製の移動式カマドかと思われる。内外面に指頭圧痕が残る。焼成はやや不良である。時期は７世紀と思われる。92は形状より鞴の羽口と思われる。通風管内側に鉄滓の付着が残る。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ042（溝）

93～96は１ｂ区ＳＤ042から出土した遺物である。93は須恵器の瓶の口縁部である。時期は７世紀末頃～８世紀初頭と思われる。94は壺の台部であるが、焼けひずみが激しい。時期は７世紀後半と思われる。95は土錘である。長さ4.6㎝、孔径0.4㎝、重量は4.7gで、中央の幅が膨らむ。時期は７～８世紀と思われる。96は鞴の羽口である。直径6.8㎝、通風管内径2.5㎝と推定される。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ043（溝）

97～101は１ｂ区ＳＤ043から出土した遺物である。97～100は須恵器である。97は坏蓋で、天井部に重ね焼き痕が残る。肩部の陵は残っているが弱々しい。時期は７世紀前半と思われる。98は坏身で、底部外面の３分の１に回転ヘラケズリが施される。内面には粘土紐状の渦巻き痕が残る。外面底部には２条のヘラ記号（線刻）が施される。時期は６世紀後半と思われる。99・100は高坏の坏部である。99・100は口縁端部が外反する器形で、口縁部の下には隆起した線が１条巡る。時期は99・100ともに６世紀末頃～７世紀前半と思われる。101は土師器の甕である。表面のほとんどが摩滅しており、口縁部のヨコナデが確認できる程度で、口縁端部はつまみ上げられている。時期は７世紀である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ046（溝）

102は１ｂ区ＳＤ046から出土した須恵器で、角高台の付く坏身の底部である。時期は８世紀中頃と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ086（溝）

103は１ｂ区ＳＤ086から出土した須恵器の甕である。推定口径16.5㎝、器高28.9㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部上方はタタキ、下方はカキメ、体部内面は横ナデである。時期は８世紀前半～中頃である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ087（溝）

104～115は１ｂ区ＳＤ087から出土した遺物である。104は須恵器の高坏の脚部である。時期は７～８世紀である。105は土師器の器台の基部～脚部上半である。外面は指オサエ・ナデ、内面はナデである。時期は３～４世紀と思われる。106～115は山茶碗類である。106～109は尾張型の山茶碗、110～115は東濃型の山茶碗である。106は小皿である。内面に指圧痕が残る。107の底部内面は使用により摩滅している。外面には糸切痕が残る。108の内面は使用により摩滅している。底部外面には糸切痕が残る。109の底部内面は使用により摩滅している。底部外面には糸切痕が残るが、薄くナデ消しされる。110の底部内面は指オサエにより薄くなっている。高台は不整円で籾殻痕が残る。111の内面には重ね焼き高台痕が残り、外面の高台には籾殻痕が残る。112の底部内面には薄い指圧痕が残る。底部外側には板状押圧痕が残る。糸切痕はナデ消しされる。113の高台には籾殻痕が残る。114の外面には墨痕が残る。内面体部と底部の境には浅いくぼみが巡り、底部中央には指圧痕が残る。115の高台の内側はナデ仕上げである。時期については、107は12世紀前半、108・109は12世紀中頃、106は13世紀前半、111・112は13世紀中頃、113は13世紀中頃～後半、110・114・115は14世紀前半～中頃である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ088（溝）

116～121は１ｂ区ＳＤ088から出土した遺物である。116は須恵器の坏身である。たちあがりは内傾している。外面は降灰による自然釉が付着している。時期は７世紀前半～中頃と思われる。117は須恵器の高坏脚部である。回転ナデにより仕上げられる。内側端部に自然釉の付着がみられる。時期は７世紀中頃～後半と思われる。118～122は山茶碗類である。118は東濃型の小皿である。緻密な胎土を用い、体部を薄く仕上げている。内面体部と底部の境が環状にくぼむ。時期は13世紀中頃である。119は東濃型の山茶碗である。体部外面にはロクロ目が残る。内面はコテアテされるが底部には至らないためロクロ目が残る。高台は不整円で籾殻痕が残る。時期は14世紀後半～15世紀前半である。

120は尾張型の山茶碗である。底面内部は使用により摩滅している。高台はナデ付けされるが、雑な貼り付けである。時期は12世紀後半である。121は東濃型の山茶碗である。口縁部は外反し、口縁部の所々が黒く染まっている。時期は13世紀中頃である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ117（溝）

122～125は１ｂ区ＳＤ117から出土した遺物である。122は須恵器の瓶の底部で、長頸瓶と考えられる。時期は８世紀と思われる。123は須恵器の甕の口縁部である。大型の甕で、口縁直下には２条の波状文が施されている。時期は７世紀中頃～後半と思われる。124は尾張型の山茶碗である。堆積土下層の粘土層直上より出土している。内面は使用により摩滅している。高台は内側をナデ、貼付しているので、糸切痕がうっすらと残る。時期は12世紀前半と思われる。125は同安窯系の青磁小皿である。内面にヘラ描紋・ジグザグ状櫛点描文が施される。底面を除き全面に施釉される。時期は12世紀中頃～後半と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ120（溝）

126は１ｂ区ＳＤ120から出土した須恵器の坏身である。口縁部のたちあがりは長くやや内傾している。底部外面の３分の２に回転ヘラケズリが施される。時期は６世紀後半と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ128（溝）

127は１ｂ区ＳＤ128から出土した山茶碗で、尾張型の小碗である。内面は使用により摩滅している。高台はナデ付けされるが、雑なため剥離している。時期は12世紀中頃である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ151（溝）

128～137は１ｂ区ＳＤ151から出土した遺物である。128・129は須恵器の坏身である。128のたちあがりは、中ほどまで内傾し端部に向けて直立する。底部外面３分の２に回転ヘラケズリが施される。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と思われる。129のたちあがりは内傾し、焼色は赤褐色である。底部外面３分の１に回転ヘラケズリが施される。また底部にはヘラ記号（線刻）がみられる。時期は７世紀前半と思われる。130～132は高坏である。130には方形の透孔が３方向にあり、坏部内面にはヘラ記号（線刻）がみられる。時期は７世紀前半と思われる。131の口縁部下には、隆起した線が１条入る。口縁端部内側に段を有する。時期は７世紀前半と思われる。132の口縁部下には、隆起した線が１条入るが131よりも丸みを帯びている。口縁端部内側に段を有する。時期は７世紀前半～中頃と思われる。133～136は土師器である。133は甕の口縁部である。外面はヨコナデ、内面はハケメが施される。口縁部の端部はつまみ上げられる。時期は６世紀後半～７世紀前半と思われる。134は甕である。口縁部はヨコナデ、体部はハケが施される。口縁部はつまみ上げられるがシャープさはない。時期は７世紀中頃～後半と思われる。135は甑である。内外面にハケメが施される。時期は７世紀と思われる。136は鍋である。体部外面に把手（逆鍵状）が付き、体部が球状に膨らむ器形である。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面上方はハケ、下方はヘラケズリである。時期は７世紀中頃～後半と思われる。137は砥石である。材質は砂岩で長さ12.3㎝、幅9.8㎝、厚さ8.7㎝、重さ1179.8ｇである。使用面は１面である。時期については不明である。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ152（溝）

138は１ｂ区ＳＤ152から出土した須恵器の坏身である。焼成不良で崩れやすく、底部外面は摩滅する。時期は７世紀末頃～８世紀初頭と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＤ243（溝）

139～141は１ｂ区ＳＤ243から出土した須恵器である。139は坏蓋である。口縁端部を折り返す。時期は８世紀後半と思われる。140は有台坏身である。体部は外へ向けて直線的に開く。時期は８世紀初頭～前半と思われる。141は壺の蓋である。外面天井部にヘラケズリが施される。時期は８世紀と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＰ012（ピット）

142・143は１ｂ区ＳＰ012から出土した遺物である。142は須恵器の坏蓋である。黄橙色を呈する。８世紀前半と思われる。143は椀形滓である。裏面全面に炉材が付着する。大小の気泡がみられ、見た目に比べ軽量で169.4ｇを量る。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＰ039（ピット）

144は１ｂ区ＳＰ039から出土した須恵器の坏蓋である。口縁端部を折り返す。天井部は扁平で２分の１に回転ヘラケズリが施される。時期は８世紀初頭～前半と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＰ070（ピット）

145は１ｂ区ＳＰ070から出土した須恵器の短頸鉢である。頸部が「く」の字状に外反する。時期は７世紀後半と思われる。

【遺構名】１ｂ区ＳＸ092（不明遺構）

146は１ｂ区ＳＸ092から出土したかえりを持つ須恵器の坏蓋である。外面に回転ヘラケズリ痕が残る。時期は７世紀中頃と思われる。

【１ｂ区遺構外】

147～165は１ｂ区遺構外より出土した遺物である。147～156は須恵器である。147は無台坏の底部片である。外面にヘラ記号（線刻）が入る。時期は７世紀と思われる。148は包含層より出土した。148は坏身で、底部外面はヘラケズリである。時期は８世紀前半と思われる。149は高坏の脚部である。三角透孔が２段、２方向に入る。脚部中央には沈線文が２条施される。時期は７世紀前半～中頃と思われる。150は横瓶と推定される。体部にはタタキメが施されて、体部内面には指オサエ痕が残る。時期は７世紀中頃～８世紀前半と思われる。151は坏身か瓶の底部である。内面には自然釉が厚く付着する。外面は回転ヘラケズリ、ヘラ記号（線刻）が施される。時期は６世紀後半～７世紀である。152は肩部に耳の付く短頸壺である。時期は８世紀前半と思われる。153～155は甕である。153～155の体部外面にはタタキメが残る。155には沈線で３段に区画された中に櫛による連続刺突が施される。153・155は７世紀、154は７世紀後半と思われる。156は甕である。体部には沈線による区画内に刺突文が施される。６世紀中頃～後半と思われる。157・158は土師器甕である。157の体部内面はヨコハケ調整である。158の体部外面はナナメハケ調整である。157・158ともに時期は７世紀末頃～８世紀前半と思われる。159・160は尾張型の山茶碗である。159の内面は使用により摩滅している。160

の底面内側にうすく指圧痕が残る。159・160は12世紀中頃である。161・162は東濃型の山茶碗である。161の底部内面に指圧痕が残る。時期は13世紀中頃である。162の糸切痕はナデ消しされる。時期は14世紀前半～中頃である。163は瀬戸美濃産のおろし皿である。ロクロ成型後に口縁をカットした後に端部を起こしている。中央には穴が穿たれている。時期は18世紀と思われる。164･165は砥石である。164は凝灰岩製と思われ、長さ10.3㎝、幅4.4㎝、厚さ3.3㎝で、表・裏・両側面の４面が摩滅している。時期は７～８世紀と思われる。165は、長さ3.6㎝、幅1.9㎝、厚さ0.6㎝の長方形で均一な作りである。時期は17世紀以降と考えられる。

（後藤秀）

（３）１ｃ区（第354～373図　写真図版310～327）

【遺構名】１ｃ区ＳＢ001（掘立柱建物）

出土遺物は166～168で、須恵器である。166は１ｃ区ＳＰ078出土の須恵器坏蓋の口縁部である。推定口径16.0㎝の大型のものである。167は１ｃ区ＳＰ075出土の有台坏身の底部である。168は１ｃ区ＳＰ073出土の高坏の脚部で透孔が無い。時期は７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ002（掘立柱建物）

出土遺物は169～171で、須恵器である。169は１ｃ区ＳＰ113出土の坏蓋である。推定口径10.6㎝で口縁部の稜が弱い。170は１ｃ区ＳＰ116出土の坏蓋で、推定口径13.0㎝である。171は１ｃ区ＳＰ116出土の坏身で推定口径9.2㎝、口縁部が内傾する。時期は７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ003（掘立柱建物）

172は１ｃ区ＳＰ120出土の須恵器甕の口縁部である。口縁端部を内側に折り返す。７世紀と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ005（掘立柱建物）

173は１ｃ区ＳＰ232出土の須恵器坏蓋である。推定口径11.2㎝で口縁部の稜が不明瞭で沈線に近い。７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ006（掘立柱建物）

出土遺物は174・175である。174は１ｃ区ＳＰ357出土の須恵器高坏の坏部である。推定口径11.4㎝、口縁端部が外反する。７世紀前半と考えられる。175は土錘である。幅1.5㎝の細身のもので両端は欠損している。建物の時期よりも古い時期の遺物が混入した可能性が高い。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ007（掘立柱建物）

出土遺物は176～184である。176～181は須恵器である。176は坏蓋の口縁部で端部を垂直に折り返す。178～179は有台坏身である。高台の形状は方形や細長いものがある。180は短脚の高坏の脚部である。181は須恵器短頸壺の口縁部で、直立した短い口縁部の器形である。182～184は土師器である。182・183は畿内系の皿と坏である。182には内面に放射状暗文が確認できる。184は製塩土器の脚部である。先端部が僅かに欠損し、残存長5.4㎝である。時期は182・183が７世紀末頃～８世紀前半、184は７～

８世紀と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ010（掘立柱建物）

185は１ｃ区ＳＰ319出土の有台坏身の底部である。高台の内側で接地する。７世紀後半～末頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ012（掘立柱建物）

出土遺物は186～188である。186は１ｃ区ＳＰ680出土の須恵器坏身の口縁部である。推定口径8.5㎝である。７世紀中頃と考えられる。187は鞴の羽口と推定される。小片で、外面に鉄滓が付着する。188は種別不明の鉄製品である。残存長3.4㎝、幅0.5㎝、細い棒状で断面が丸く先端がやや屈曲する。

【遺構名】１ｃ区ＳＢ013（掘立柱建物）

189は１ｃ区ＳＰ720から出土した須恵器の坏蓋である。推定口径12.0㎝で、口縁部の稜がやや弱い。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ169（ＳＬ110）（竪穴建物）

出土遺物は190～193である。190・191は須恵器である。190は建物内東側より出土した坏蓋で推定口径14.2㎝、口縁部の稜が明瞭である。191は壁際溝（壁溝）から出土した甕の口縁部で、口縁端部が外反する。192・193は土師器である。192はＳＬ110（カマド）から出土した甕である。口径15.4㎝、器高18.3㎝で、口縁部は強く外反し端部は明瞭につまみ上げる。体部外面は全面に縦方向のハケで、内面は体部の下半がヘラケズリ、上半はナデ調整で口縁部に横方向のハケを施す。193は甑の口縁部で、外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。時期は６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ195（ＳＬ195）（竪穴建物）

194は土師器の小型の甕で、推定口径15.4㎝、口縁部は外反し端部をつまみ上げる。内外面ハケ調整である。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ199（ＳＬ199）（竪穴建物）

出土遺物は195～197である。195・196は土師器の甕の口縁部である。直線的に伸び、端部のつまみ上げはやや小さい。７世紀中頃～後半と考えられる。197は鉄製品で全長5.8㎝、幅2.9㎝、先端がやや薄くなり、頭は少し折れ曲がる。鏨の可能性が考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ223（竪穴建物）

出土遺物は198～203である。198～201は須恵器である。198は坏蓋で、推定口径10.6㎝、口縁部の稜が痕跡程度の沈線状になっている。７世紀中頃と考えられる。199は坏身で推定口径12.0㎝である。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。200・201は高坏である。200は短脚で透孔が無い。７世紀前半と考えられる。201は脚部の下半である。長方形の透孔を２段３方向に持つ。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。202は土錘である。幅1.4㎝の細身のもので歪みがある。203は椀形滓の破片である。大きい気泡が多数あり、炉材が薄く付着する。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ226（竪穴建物）

出土遺物は204～212である。204・207・210は壁際溝（壁溝）内、205・206・208は検出面、他は竪穴の埋土中からの出土である。204～208は須恵器である。204は坏蓋の完形品である。口径12.2㎝で口縁部の稜が不明瞭である。205は坏身である。推定口径10.2㎝で口縁部が内傾する。206は高坏の坏部で推定口径18.6㎝のやや大型である。207は高坏の脚部である。208は甕の口縁部で、ヘラ描波状文が施されている。209・210は土師器の甕である。ともに口縁部屈曲が弱く、端部を小さくつまみ上げる。211は土錘の破片である。212は鉄滓の付着した土製品で、鞴の羽口の一部と推定される。時期は６世紀末頃～７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ251（ＳＬ507）（竪穴建物）

出土遺物は213～222である。213･216･220･221はＳＬ507（カマド）､218は壁際溝（壁溝）から出土し､他は竪穴の埋土から出土した。213 ～ 219は須恵器である。213は坏蓋である。推定口径11.0㎝である。214～217は坏身である。口縁部がやや内傾する器形である。218は高坏の坏部である。口縁端部が外反し、沈線の間に櫛連続刺突が施される。219は甕の口縁部で、板連続刺突が施される。220・221は土師器である。220は甕である。推定口径18.2㎝、口縁部の屈曲は弱く、端部のつまみ上げは小さい。221は甑の口縁部である。内外面を細かいハケで調整する。222は凝灰岩の砥石である。紐孔と思われる穿孔があり携行品と考えられる。４面が使用されている。時期は６世紀末頃～７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ307（ＳＬ178・１ｃ区ＳＫ500）（竪穴建物）

出土遺物は223～233である。223～227は須恵器である。223は坏蓋の口縁部で、推定口径13.0㎝で、稜が明瞭である。224・225は口縁端部がやや短い。226は１ｃ区ＳＫ500（炭溜まり遺構）から出土した無台坏である。推定口径11.6㎝、底部は静止ナデである。内面の底部に煤が付着する。227は高坏の脚部である。短脚で透孔が無い。228・229は土師器である。228はＳＬ178（カマド）から出土した土師器の甕である。推定口径20.0㎝、口縁部が強く外反し端部をつまみ上げる。229は土師器の鍋の口縁部である。口縁部が緩やかに外反し端部をつまみ上げる。230・231は滑石製の臼玉である。231は側面を研磨した際の面が残った状態で仕上げられている。両者とも出土位置が１ｃ区ＳＰ363と重なっているが、１ｃ区ＳＰ363と１ｃ区ＳＩ307の新旧関係が判別できなかったため１ｃ区ＳＩ307とは直接の関係が無い可能性がある。232は１ｃ区ＳＫ500から出土した石で、炉石と推定される。安山岩で半分に割れており、裏面全体が被熱し煤で黒くなっている。233は鉄製品で鉄釘の可能性がある。断面は方形で幅0.5㎝である。時期は226が７世紀中頃、他が６世紀末頃～７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ389（竪穴建物）

234は用途不明の鉄製品である。完形品で長さ5.7㎝、幅2.1㎝、厚さ1.1㎝を測り、重さは16.6ｇである。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ546（ＳＬ403）（竪穴建物）

出土遺物は235～238である。235・236はＳＬ403（カマド）、237は壁際溝（壁溝）、238は検出面から出土した遺物である。235は須恵器の坏蓋の口縁部で、推定口径12.0㎝、器壁が薄く、口縁部の稜が明瞭である。235～238は土師器である。236は甕の口縁部で、口縁部が外反し端部を明瞭につまみ上げる。237は鍋である。口縁部はやや屈曲し、端部を小さくつまみ上げる。238は甑の口縁部で、外

面は細かいハケ調整で、内面はナデやユビオサエで仕上げられる。遺物の時期は235が６世紀中頃～後半、236～238が６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＩ813（ＳＬ201）（竪穴建物）

239は１ｃ区ＳＩ813内のＳＬ201（カマド）から出土した土師器の鍋の口縁部である。推定口径35.2㎝で口縁部が直線的に伸び、端部をつまみ上げる。７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ092（土坑）

240は土師器の甕の口縁部である。推定口径15.0㎝の小型のもので、端部につまみ上げの痕跡とヨコナデがある。７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ254（炭溜まり土坑）

241は須恵器の坏蓋である。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ622（土坑）

出土遺物は242～245である。242・243は須恵器有台坏身で、高台が長方形を呈する。244は須恵器鉢で、推定口径12.4㎝の小ぶりな鉄鉢状の器形を呈する。245は須恵器の蹄脚円面硯である。硯部と脚部を分けて成形されたもので、硯部の一部のみである。外堤部径が推定22.0㎝、硯部径15.2㎝、残存高6.5㎝で、硯面に墨が付着している。脚柱の数は推定21本で、内面に降灰があることから倒置状態で焼成されたと考えられる。時期は８世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ666（土坑）

出土遺物は246～248である。246は須恵器鉢の口縁部で、推定口径33.8㎝、体部外面をタタキ、内面はナデ調整で仕上げられる。247は須恵器長頸瓶の底部と考えられる。焼成時に他の土器が融着している。248は須恵器甕の頸部で、口縁部が外に広がる器形である。時期は７世紀後半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ753（土坑）

249は須恵器の坏身である。口径10.5㎝、器高4.5㎝で口縁部がやや内傾する。底部に４本線のヘラ記号（線刻）が刻まれる。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ868（竪穴状土坑）

250は石製の紡錘車である。直径3.5㎝、厚さ0.6㎝の扁平な形状である。片面のみ研磨して作られている。６世紀後半～７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＫ967（土坑）

出土遺物は251・252で、須恵器である。251は完形品に近い無台坏で、口径9.8㎝、器高3.7㎝である。底部を回転ヘラケズリし、ヘラ記号（線刻）が刻まれている。252は長頸瓶の頸部～底部である。体部径16.6㎝、肩部に１条と体部に３条の沈線が巡り、その間に櫛連続刺突が施されている。時期は７世紀後半～末頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ048（溝）

出土遺物は253～255である。253は本業焼の反り皿である。推定口径12.6㎝、器高2.6㎝である。254は陶器の丸碗で、灰釉が漬けがけされたものである。255は陶錘である。細身のもので両端が欠損している。253が17世紀以降、254が19世紀、255が６～８世紀と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ051（溝）

256は山茶碗の碗である。推定底径4.3㎝で逆三角形の小さい高台である。底部内面にユビオサエ痕がある。時期は13世紀後半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ061（溝）

出土遺物は257～277である。257～263は須恵器である。257・258は無台坏身である。257は平底で底部を回転糸切りされたものである。258は推定口径13.0㎝、底部を回転ヘラケズリする。259は有台坏身である。推定口径14.7㎝で口縁部はやや外反し、高台の外側で接地する。260は高坏で、透孔の無い短脚のものである。261は小型壺である。262は瓶の体部である。丸みのある体部に櫛描波状文が２段ある。263は双耳瓶の耳である。時期は257が８世紀前半、258・262が７世紀後半、259が８世紀中頃、260が７世紀末頃～８世紀初頭、261が８世紀後半、263が８世紀後半～９世紀前半と考えられる。264～266は土師器である。264は甕である。推定口径18.6㎝で屈曲した口縁部の端部を明瞭につまみ上げる。265は羽釜の破片である。266は製塩土器の脚部である。267は灰釉陶器の皿で、底部を回転ヘラケズリし方形の高台を付け、灰釉が内面の全体にかけられる。時期は264が６世紀後半～７世紀前半、265が13～14世紀、266が７～８世紀、267が９世紀前半と考えられる。268～273は山茶碗の碗である。268は高台が細長く、底部の回転糸切りがナデ消しされる。269は器高5.5㎝で体部が直線的に伸びる。270は体部にやや丸みがあり、たちあがりが緩やかである。271は器高5.1㎝で高台が縮小化している。272は推定口径10.8㎝、器高2.6㎝の高台の無い小型のもので、内面にロクロ目の明確な凹凸を形成する。273は推定口径12.4㎝、器高2.4㎝の扁平なもので、内面の底部と体部の境界に凹凸がある。274は古瀬戸の四耳壺である。275は陶器の鍋と考えられる。276・277は砥石である。276は凝灰質砂岩製で３面が使用されており、その内の１面に溝状の凹みがある。277は凝灰岩製で３面が使用されており、その内の１面に尖ったものでつけられた傷のような線が入る。時期は268が12世紀前半、269・271が13世紀中頃、270が13世紀後半～14世紀初頭、272が15世紀後半、273が15世紀中頃、274が13世紀、275が16世紀以降と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ096（溝）

出土遺物は278・279で共に山茶碗の皿である。278は推定口径8.0㎝、器高1.6㎝で高台が無く口縁部がやや外反する。279は推定口径8.8㎝、器高1.6㎝の扁平なもので、器壁が薄い。内面に薄く降灰がみられる。時期は278が13世紀後半、279が14世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ135（溝）

出土遺物は280～284である。280は須恵器の蹄脚円面硯の硯部の破片である。外堤部径20.0㎝で脚柱17本と推定したが、小片のため多少の誤差がある可能性が高い。脚部と硯部を一体成形するもので、内面に降灰があり倒置焼成されたと考えられる。時期は８世紀中頃と考えられる。281は土師器の製塩土器の脚部である。長さ3.5㎝の短いものである。282・283は山茶碗の碗である。282は底径が6.0㎝、

体部のたちあがりが急で内面に重ね焼き高台痕がある。283は高台径が5.5㎝で体部のたちあがりが緩やかである。284は山茶碗の小皿である。口径8.1㎝、器高1.2㎝の扁平なものである。山茶碗類は13～14世紀前半のものである。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ154（溝）

285は須恵器鉢の口縁部である。推定口径21.0㎝、口縁部が内傾する。７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ181（溝）

286は山茶碗の碗の底部である。高台が低く体部が直線的に急な角度で立ち上がる。13世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ249（溝）

出土遺物は287・288である。287は須恵器有台坏身の底部である。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。288は土師器の甕の口縁部で、屈曲して端部を大きくつまみ上げる。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ250（溝）

出土遺物は289・290である。289は須恵器坏蓋である。扁平なつまみを有する。７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。290は長脚の須恵器高坏の脚部で、長方形の透孔が２方向に配置される。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ288（溝）

出土遺物は291～293で全て須恵器である。291は坏身の口縁部で、推定口径12.0㎝である。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。292は小型の短頸壺で、体部に３条の沈線が巡る。７世紀前半～中頃と考えられる。293は高坏の脚部である。にぶい橙色の色調を呈しており、２条の沈線の下にヘラ描波状文がある。７世紀と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ512（溝）

出土遺物は294～344である。294～336は須恵器である。294～303は坏蓋で、笠型のものと扁平なものがある。303は内面に墨が付着し、滑らかになっていることから転用硯と考えられる。坏蓋の時期は７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。304～325は坏身である。304・305は口縁部に受部があるものである。306～313は返りの無い無台坏で、底部が小平底の306～309と平底の310～313がある。314～325は有台坏身である。320～322は底部が高台より下に張り出すものである。323～325は口径が小さく深さがある器形である。坏身の時期は304・305が７世紀前半、306が７世紀後半、307～325が７世紀後半～８世紀前半と考えられる。326・327は盤である。326は推定口径29.0㎝、器高3.0㎝の大型品である。７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。328は透孔の無い高坏の脚部である。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。329は長頸瓶の体部である。体部推定径30.0㎝の大型品で、２条の沈線の間に櫛連続刺突が施される。７世紀後半～８世紀前半と考えられる。330は壺か瓶の底部である。331・332は壺の口縁部である。331は肩部がなだらかで、体部に沈線とヘラ連続刺突が施される。332

は肩部が張り、体部外面にタタキが施される。333は甕の口縁部～体部で、内面に墨のようなものが擦れたり、飛び散ったように付着する。334は短頸鉢である。推定口径16.0㎝で体部外面下半～底部にタタキを残す。335は鉢の口縁部で推定口径32.0㎝の大型品である。336は甕である。高台を有し、注口部が突出する。337～344は土師器の甕である。337は口縁部が外反し端部をつまみ上げるもので、６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。338・339は口縁端部のつまみ上げが痕跡程度のもので、７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。340～343は口縁部のつまみ上げをせず、外面調整が粗いハケ調整である。８世紀前半～中頃と考えられる。344は平底のもので外面を粗いハケで調整する。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ527（溝状遺構）

出土遺物は345～393である。345～387は須恵器である。345～347は口縁部に稜を持つ坏蓋で、稜が明瞭なもの、やや不明瞭なもの、消失しかけているものがある。345は６世紀末頃～７世紀初頭、346は７世紀前半、347は７世紀中頃～後半と考えられる。348・349は笠形の坏蓋である。348が８世紀中頃、349が７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。350・351は扁平な蓋で、350は最大径30.0㎝の大型品である。350は８世紀初頭～前半、351は７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。352～364は坏身である。354は壺の可能性がある。352・353は受部を持つものである。354・355は底部の破片でヘラ記号（線刻）を有する。356～359は無台坏身である。356・357は底部をヘラケズリする。７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。358は底部をヘラ切り後未調整で仕上げる。359は底部を板ナデした後にヘラ記号（線刻）が刻まれている。361～364は有台坏身である。361・362は底部が高台より下に膨れるもので、７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。363は８世紀前半、364は高台が外側に踏ん張るもので７世紀後半と考えられる。365～375は高坏である。365は坏部が深いものである。366は口縁部が外に広がるもので、焼成が悪く土師質に近い。367は推定口径26.0㎝の盤状の坏部である。368・369は２段の透孔を有するものである。370～374は透孔の無い短脚のものである。372は直線的に裾が広がるものである。時期は367が７世紀末頃～８世紀初頭、他は７世紀前半～後半と考えられる。376は平瓶である。７世紀後半と考えられる。377は壺の底部である。８世紀と考えられる。378は甕の口縁部で、推定口径51.6㎝の大型品である。７世紀後半と考えられる。379～381は鉢である。379は推定口径28.0㎝の大型で、体部外面はタタキ調整を残し、２条の沈線が巡る。７世紀中頃～後半と考えられる。380は短頸鉢で、７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。381は鉄鉢状の器形で、８世紀前半と考えられる。382は甕である。体部にやや丸みがあり、沈線と櫛連続刺突文が施される。７世紀前半～中頃と考えられる。383～392は土師器である。383は畿内系の坏である。推定口径19.0㎝、外面は幅広の工具でミガキ調整され、内面には２段の放射状暗文が施される。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。384～391は甕である。384～386・391は口縁端部のつまみ上げが比較的明瞭なもので、７世紀前半～中頃と考えられる。387～389は口縁端部のつまみ上げが痕跡程度になったもので、７世紀後半～末頃と考えられる。390は口縁端部のつまみ上げを行わないもので、体部内面を強くヘラケズリして器壁が薄く仕上げられている。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。392は鍋の口縁部で端部のつまみ上げを行わないものである。393は凝灰岩製の砥石と推定される。２面が平滑になっているが、角に丸みがあるため別用途の石材もしくは転用砥石の可能性がある。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ600（溝）

出土遺物は394～397である。394～396は須恵器である。394は坏蓋で、扁平なつまみが付けられている。395は有台坏身の底部で、高台の外側で接地する。396は無台坏身で、底部を静止糸切り後に

ヘラ記号（線刻）が刻まれている。397は凝灰岩製の砥石の破片である。２面の使用が確認できる。394・396が７世紀末頃～８世紀前半、395が８世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ621（溝）

398は土師器の甕である。体部外面はやや粗めのハケで、内面は板ナデで調整する。口縁端部を僅かにつまみ上げる。７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ637（溝）

出土遺物は399・400で共に須恵器である。399は有台坏身である。推定口径15.0㎝で高台の形状は三角形、底部にヘラ記号（線刻）が刻まれている。400は壺である。推定口径9.6㎝と小型のもので、口縁部～肩部にかけて自然釉が付着する。399が８世紀前半～中頃、400が８世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ673（溝）

出土遺物は401･402で共に須恵器である。401は水瓶の口縁部～頸部である。口縁部に向かって徐々に狭まり、端部がほぼ直角に屈曲する。８世紀後半～末頃と考えられる。402は甕の頸部である。頸部は垂直気味にたちあがり、口縁部にかけて緩やかに広がる。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。８世紀と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ674（溝）

出土遺物は403～407である。403～406は須恵器である。403・404は坏身である。403は口径9.4㎝、404は推定口径9.9㎝で、口縁部が内傾し底部が回転ヘラケズリされる。404の外面に墨痕がある。405は高坏の脚部である。長脚のもので透孔が２段３方向にある。裾部の内面に自然釉がかかっている。406は長頸瓶である。体部に丸みがあり、脚部に３方向の透孔がある。407は土師器の鍋である。口縁部は屈曲し、端部を明瞭につまみ上げる。403・404・406は７世紀前半～中頃、405・407は６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ693（溝）

出土遺物は408～412である。408～410は須恵器である。408・409は坏身の底部である。回転ヘラケズリされた外面にヘラ記号（線刻）が刻まれている。410は長頸瓶の口縁部～頸部である。口縁部が強く外反する。411は山茶碗の碗である。底径9.5㎝で台形の高台で体部に丸みがある。412は山茶碗の鉢である。推定底径15.0㎝で体部のたちあがりが急であるが若干の丸みを残す。遺物の時期は408・409が６～７世紀、410が８世紀後半、411が13世紀前半、412が12世紀後半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＤ866（溝）

413は土師器の甕である。推定口径17.6㎝で口縁端部を僅かにつまみ上げる。体部の内外面をハケで調整する。７世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ001（ピット）

出土遺物は414～416である。414・415は須恵器である。414は須恵器坏身で、推定口径14.0㎝の大型のものである。415は壺の口縁部で、推定口径16.0㎝の広口のものである。416は畿内系土師器の坏

である。内面に螺旋状暗文と放射状暗文がある。414が６世紀後半、415が７世紀前半～中頃、416が７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ006（ピット）

出土遺物は417・418である。417は須恵器短頸壺である。推定口径10.8㎝で口縁端部が玉縁状で体部に沈線が巡る。418は土師器の甕である。推定口径18.2㎝で口縁部に稜がある。体部外面は細かいハケ調整である。417は７世紀前半、418は５世紀前半と考えられ、混入品と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ069（ピット）

419は陶錘である。幅1.1㎝の細身である。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ152（ピット）

420は須恵器坏蓋である。笠形で推定口径19.0㎝を測る。７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ212（ピット）

421は須恵器長頸瓶である。肩部がやや張り、沈線とヘラ連続刺突が施される。７世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ248（ピット）

422は土師器の甑である。推定口径18.4㎝で内外面をハケで調整する。６世紀後半～７世紀と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ266（ピット）

423は鞴の羽口の破片である。タール状で光沢のある鉄滓が付着している。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ291（ピット）

424は土師器甕の口縁部である。口縁部が直線的に伸び、端部をつまみ上げる。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ347（ピット）

425は土師器甕の口縁部である。口縁部の屈曲が強く、端部のつまみ上げも大きい。６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ370（ピット）

426は須恵器坏身である。受部径が推定17.0㎝の大型のものである。６世紀後半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ431（ピット）

427は土師器高坏の基部である。５世紀と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ453（ピット）

428は須恵器坏蓋である。推定口径13.0㎝で稜が明瞭である。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ529（ピット）

429は陶錘である。幅1.2㎝の細身である。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ576（ピット）

430は土師器甕である。口縁部が屈曲し、端部を小さくつまみ上げる。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ618（ピット）

431は須恵器長頸瓶の頸部である。頸部の中央に２条の沈線が巡り、内外面に自然釉が付着する。７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ626（ピット）

432は土師器の鍋である。推定口径30.6㎝で口縁端部のつまみ上げは行われず、内外面をやや細かいハケで調整する。７世紀後半～末頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ628（ピット）

433は須恵器有台坏身の底部である。高台は外側に張り出す形状で、底部にヘラ記号（線刻）がある。７世紀後半～末頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ676（ピット）

434は須恵器有台坏身である。推定口径10.4㎝、方形の高台が内側で接地する。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ778（ピット）

435は須恵器𤭯である。やや肩部が張る器形であるが注口はあまり突出しない。体部に２条の沈線が巡り、その間にヘラ連続刺突が施される。底部にはヘラ記号（線刻）が刻まれる。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ819（ピット）

436は須恵器壺である。直立したやや長い頸部で、体部には沈線が巡る。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ822（ピット）

437は須恵器壺である。直立したやや長い頸部で、器壁が薄い。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ871（ピット）

438は須恵器坏身の底部である。器壁が厚く、内面に重ね焼き痕、外面に１条のヘラ記号（線刻）

がある。６世紀後半と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ879（ピット）

439は須恵器坏身の完形品で、口径10.6㎝、器高4.5㎝で口縁部のたちあがりがやや内傾する。底部は回転ヘラケズリで、１条のヘラ記号（線刻）がある。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ927（ピット）

出土遺物は440･441である。440は須恵器坏身で、推定口径11.2㎝で口縁部のたちあがりがやや短い。441は土師器甕の口縁部である。やや直線的に伸びた口縁部で、端部のつまみ上げは小さい。内面にハケを施す。440は７世紀初頭～前半、441は７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ934（ピット）

出土遺物は442･443である。442は須恵器坏身である。推定口径10.2㎝で口縁部がやや短く内傾する。443は土師器の甕である。口縁部が直線的に伸び端部のつまみ上げが小さい。内面の調整は体部上半が横方向のハケで、下半が縦方向のヘラケズリである。442が６世紀末頃～７世紀初頭、443が７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ971（ピット）

444は山茶碗の碗の底部である。体部に丸みがあり、底部には三角形の大きめの高台が付く。内面の底部には重ね焼き高台痕がある。11世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ1008（ピット）

445は須恵器高坏の脚部である。透孔が２段２方向にあるが、内側まで貫通しない。７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｃ区ＳＰ1028（ピット）

446は畿内系土師器の皿である。口縁端部が外側に折れ曲がり、内面に放射状暗文がある。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。

（小島）

【１ｃ区遺構外】

447～492は１ｃ区の遺構外から出土した遺物である。449・451・452・456・458・459・461・463・465・467～469・471・477・478・481・483・484・486は表土から出土した遺物である。455・472はＩ８グリッド、464は南壁面、476はＨ６グリッド、487はＩ４・Ｉ５グリッド、492はＩ６グリッドの各包含層から出土した遺物である。448・470・480・489・491はＩ８グリッド、450・457はＩ10グリッド、453はＨ11グリッド、454・474はＩ６グリッド、460・473はＨ10グリッド、462はＩ５グリッド、466・475はＩ11グリッド、482・485はＩ４グリッド、488はＨ２グリッド、490はＨ５グリッドの遺構検出の際に出土した遺物である。447・464は調査区壁面から出土した遺物である。479はＨ５グリッドの攪乱から出土した遺物である。447は土師器の高杯の坏部で、磨滅により坏部の内面の調整が不明瞭である。時期は４世紀と考えられる。448～477は須恵器である。448・449はつまみがない坏蓋

で、448は推定口径が10.8㎝で天井部の稜が残り、449は推定口径が10.6㎝で天井部の稜が不明瞭である。時期は448が７世紀前半、449が７世紀後半と考えられる。450～454は扁平なつまみを有する坏蓋で、扁平な形状と笠形の２種類がある。450は口縁端部に返りが付く。451は天井部内面中央が滑らかになっており転用硯であったと考えられる。454は坏蓋の口縁部～天井部で口縁端部がやや屈曲し、口縁部の復元径が22.2㎝の大型の器形と推定される。時期は、450が７世紀前半～中頃、451・452が７世紀後半～末頃、453が７世紀末頃～８世紀初頭、454が８世紀後半～末頃と考えられる。455は受部のある坏身で、時期は７世紀前半である。456～459は無台坏身で、457は底部外面にヘラ記号（線刻）が施され、458は底部がヘラ切り後未調整である。時期は456・457が７世紀後半～８世紀初頭、458が７世紀末頃～８世紀初頭、459が７世紀後半である。460～463は有台坏身で、461･462は口縁部の復元径が15.0㎝、463は底部の復元径が22.0㎝で大型の器形と推定される。時期は460は７世紀末頃、461は８世紀末頃、462は７世紀末頃～８世紀初頭、463は８世紀初頭と考えられる。464は坏身と推定される破片で、外面に墨書らしき墨痕がある。465～470は高坏である。465は２段２方向の透孔を持ち、466は透孔を持たない。467・469は坏部内面にヘラ記号（線刻）が施される。時期は465が７世紀前半～中頃、466が７世紀後半、467・469が７世紀中頃～後半、468が７世紀前半、470が７世紀中頃である。471は小型の鉢で、時期は７世紀中頃～後半と考えられる。472は小型の壺の口縁部～体部で、時期は７世紀後半である。473は鉢の口縁部～体部で、時期は７世紀末頃～８世紀初頭である。474は瓶の口縁部で、時期は７世紀前半～中頃と考えられる。475は瓶または壺の底部で、底部外面に「大」と線刻されている。時期は７～８世紀と考えられる。476は壺の口縁部で、時期は７世紀中頃と考えられる。477は甕の口縁部で、推定口径が26.0㎝、ゆるやかに外反する口縁部の外面に沈線が３条巡り、その間に櫛連続刺突が施される。時期は７世紀後半と考えられる。478～480は土師器甕の口縁部～体部で、478･479は口縁部が屈曲してたちあがり、口縁端部がつみ上げられることから時期は７世紀前半と考えられる。480は口縁部～体部に細かいハケ目が施されていることから時期は７世紀と考えられる。481～486は山茶碗の碗である。481は体部外面にロクロ目が残り、内面には重ね焼き高台痕と降灰、底部には摩滅痕が確認できる。底部外面には糸切り痕が確認でき、高台は正円に近い形状で丁寧にナデている。時期は12世紀前半と考えられる。482は口縁部内外面に煤痕、内面底部にユビオサエ痕と摩滅痕が確認できる。高台は籾殻痕が確認でき、丁寧にナデている。時期は14世紀前半と考えられる。483･484は体部～底部で、483は内面に重ね焼き高台痕と降灰が確認できる。高台は外面の継ぎ目が残っている。484は底部外面に籾殻痕が見られ、糸切り痕が明瞭に残る。内面底部にユビオサエ痕が残り、高台は丁寧にナデが施される。どちらも時期は14世紀前半と考えられる。485は高台径が小さく、時期は14世紀中頃と考えられる。486は高台がつぶれ、底部との継ぎ目がナデ消しされずに残っている。時期は13世紀前半と考えられる。487は天目茶碗の口縁部～体部である。高台付近を除く外面と内面全体に鉄釉が漬け掛けされる。時期は14世紀前半と考えられる。488は陶錘である。489は羽口と推定される土製品の破片で、外面の一部に鉄滓が付着する。490は凝灰質砂岩製の砥石で、表裏面と両側面の４面が使用されている。491はⅠ８グリッドから出土した滑石製の臼玉である。穿孔面、側面とも研磨しておらず、起伏や粗削り痕が残る。時期は７世紀と推定される。492は鉄釘と推定される鉄製品の先端部で、錆膨れしているが遺物の断面幅0.8㎝、厚さ0.7㎝である。

（後藤泰）

（４）１ｄ区（第374～389図　写真図版328～342）

【遺構名】１ｄ区ＳＢ503（掘立柱建物）

出土遺物は493～495である。493は１ｄ区ＳＰ749から出土した須恵器壺の口縁部である。外に広がる短い口縁部で、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。494は１ｄ区ＳＰ760から出土した弥生土器の深鉢の口縁部である。外面は条痕文で内面に櫛描列点文が施される。時期は弥生時代中期と考えられる。495は１ｄ区ＳＰ541から出土した陶錘で、幅1.0㎝の細い円筒状である。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ504（掘立柱建物）

出土遺物は496～500である。496～499は須恵器である。496は１ｄ区ＳＰ644から出土した口縁端部を下に折り返す坏蓋である。８世紀初頭と考えられる。497は１ｄ区ＳＰ868から出土した坏蓋で、内側に小さな返りが付く。７世紀後半と考えられる。498は１ｄ区ＳＰ649から出土した高坏の脚部で、透孔は無く沈線が３条巡る。７世紀前半と考えられる。499は甕の口縁部である。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。500は鉄製品で、鉄釘と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ506（掘立柱建物）

501は１ｄ区ＳＰ736から出土した透孔の無い短脚の須恵器高坏で、７世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ508（掘立柱建物）

出土遺物は502～511である。502は１ｄ区ＳＰ718、503・510は１ｄ区ＳＰ722、504・507～509は１ｄ区ＳＰ887、505は１ｄ区ＳＰ695、506は１ｄ区ＳＰ883、511は１ｄ区ＳＰ788から出土した。502～509は須恵器である。502・503は笠形の坏蓋で、502が８世紀初頭、503が８世紀前半と考えられる。504は扁平な坏蓋である。７世紀後半と考えられる。505は受部のある坏身である。口径9.4㎝、時期は７世紀前半と考えられる。506は長方形の透孔をもつ高坏の脚部である。７世紀前半と考えられる。508・509は甕の口縁部である。口縁部が短く外に広がる器形である。７世紀後半～８世紀前半と考えられる。510は土師器甑の把手である。511は凝灰質砂岩製の砥石で、１面が使用されている。

【遺構名】１ｄ区ＳＢ510（掘立柱建物）

出土遺物は512・513である。512は１ｄ区ＳＰ661から出土した須恵器有台坏身である。８世紀前半と考えられる。513は凝灰岩製の砥石である。表と裏の２面が使用されている。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ251（竪穴建物）

出土遺物は514・515である。514は土師器甕である。口縁部が直線的で端部をつまみ上げる。７世紀前半～中頃と考えられる。515は鞴の羽口である。推定直径5.7㎝で外面にタール状の鉄滓が付着する。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ401（竪穴建物）

出土遺物は516～518である。516は土師器高坏の脚部である。外面にミガキ調整が僅かに確認できる。時期は５世紀と考えられる。517・518は土師器甕の口縁部である。７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ609（竪穴建物）

出土遺物は519～538である。519～529は須恵器である。519は扁平な坏蓋で、口縁端部を弱く折り

返す。７世紀末頃と考えられる。520は１ｄ区ＳＰ859から出土した笠形の蓋である。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。521は坏身の底部で大きく「×」のヘラ記号（線刻）がある。522～526は有台坏身である。７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。527は鉢で、推定口径22.0㎝の鉄鉢形である。528は検出面から出土した盤の口縁部で、推定口径26.8㎝の大型品である。529は壺の口縁部である。緩やかに外に広がる器形である。530は製塩土器の脚部である。531は埋土の下層から出土した畿内系土師器の暗文土器で、内面に螺旋状暗文と放射状暗文がある。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。532は埋土最上層から出土した土錘で、細い円筒状である。533・537は１ｄ区ＳＰ829から出土した礎板である。533は長さ38.0㎝、幅29.6㎝、厚さ5.9㎝のスギの板材である。木取りは追柾目で加工痕ははっきりとしない。537は長さ59.3㎝、幅21.0㎝、厚さ3.7㎝のヒノキの板材である。木取りは追柾目で、裏面に鑿痕が少し確認できる。534～536・538は１ｄ区ＳＰ831出土の礎板である。534は長さ20.4㎝、幅15.0㎝、厚さ2.8㎝の板材で木取りは板目である。535は長さ39.7㎝、幅12.1㎝、厚さ4.8㎝の板材で裏面に鑿痕が確認できる。536は長さ70.8㎝、幅28.6㎝、厚さ4.2㎝の半円形のヒノキの板材である。加工痕は判別できない。538は長さ32.1㎝、幅17.5㎝、厚さ4.0㎝の板材で木取りは板目である。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ750（竪穴建物）

出土遺物は539・540である。539は須恵器坏蓋である。推定口径12.0㎝で端部を垂直に折り返す。８世紀初頭～前半と考えられる。540は椀形滓の破片である。鉄滓部分はガラス質で青緑がかっており、炉材との境界に大小の気泡が多くある。

【遺構名】１ｄ区ＳＩ795（竪穴建物）

出土遺物は541～593である。541～570は須恵器である。541はつまみの無い坏蓋で、７世紀初頭～前半と考えられる。542～548は笠形の蓋である。口縁端部が確認できるものは全て強く折り返されている。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。549は壺の蓋である。推定口径8.2㎝、器高4.7㎝で丸く小さいつまみが付く。550～555は無台坏身である。550は未調整の底部にヘラ記号（線刻）が入る。552・553は底部に「⋈」形のヘラ記号（線刻）がある。555は器高7.3㎝の深い器形である。556～561は有台坏身である。高台は台形や端部が丸い形状である。562は短脚の透孔の無い高坏である。563は盤である。564・565は鉢である。口縁部が内傾し、端部を外に折り返す。566は片口鉢である。体部外面をタタキ、内面をナデやユビオサエで調整する。567は平瓶の頸部である。肩部にやや丸みがある。568・569は甕である。568は口縁部の稜が不明瞭で、569は高台を持ち肩部がやや張る。570は広口の甕の口縁部である。沈線とヘラ描波状文が施される。571～580は土師器甕、581は土師器鍋である。口縁部のつまみ上げが僅かに残るか、全く行わない。調整は荒いハケのものが含まれる。582は細い樽形の土錘である。583～586は鞴の羽口で、全て竪穴建物の北側から出土している。583は推定直径6.1㎝で、付着する鉄滓は緑色がかったガラス質である。584は推定直径4.8㎝で、付着する鉄滓の密度が高く大きな気泡が多数ある。585は推定直径8.0㎝でやや太く、緑色がかったガラス質の鉄滓が付着する。586は推定直径6.0㎝で送風口付近が被熱して赤褐色に変色している。付着する鉄滓は白っぽい部分と黒っぽい部分があり、大小の気泡がある。587・588は砥石である。587は流紋岩製で、表と両側面に細かな面があり５面以上で使われている。588は凝灰質砂岩製で、表裏の２面が使用されている。589～593は椀形滓である。最大のもので重量52.8ｇである。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ016（土坑）

594は須恵器坏蓋である。推定口径16.0㎝の笠形の器形である。８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ032（土坑）

595は須恵器甕である。体部に丸みがあり注口が少し突出する。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ167（土坑）

596は棒状の鉄製品である。２つに分断され接合不可能であるが同一個体である。残存長9.7㎝で片側の先端が残存する。断面形状は二等辺三角形に近いが刃物のように鋭利ではない。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ548（土坑）

597は山茶碗の小皿である。推定口径8.5㎝、底径4.0㎝、器高1.5㎝である。時期は14世紀と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ625（土坑）

598は須恵器無台坏身である。７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＫ726（土坑）

出土遺物は599～602である。599は須恵器坏蓋で、口縁部の稜が小さい。600は須恵器坏身である。口縁端部がやや短く内傾する。601は須恵器浅鉢である。底部に２条のヘラ記号（線刻）がある。602は須恵器鉢である。底部に重ね焼き時に融着した別の土器片が付く。時期は７世紀前半～後半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ001（溝）

出土遺物は603・604である。603は山茶碗の碗の底部である。高台が低く体部に丸みがある。604は玄武岩製の砥石である。断面三角形で１面が使用されている。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ075（溝）

出土遺物は605～609である。605は土師器高坏の坏部である。推定口径22.0㎝の皿形の坏部で、口縁部が強く外反する。時期は３世紀と考えられる。606は製塩土器の脚部である。短い脚部で、７世紀と考えられる。607･608は土錘である。中央が膨らむ細長い樽形である。609は土馬の脚部であるが、製塩土器の脚部の可能性もある。幅2.8㎝の円柱状の脚部で、上部が欠損している。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ089（溝）

出土遺物は610～617である。610は灰釉陶器の皿である。内面全面に灰釉がかけられており、底部外面には墨書が記される。611・612は山茶碗の碗である。それぞれ13世紀中頃、14世紀中頃と考えられる。613・614は山茶碗の小皿である。613は扁平で口縁部がやや反る。13世紀後半と考えられる。614は器壁がやや厚く底部内面にユビオサエ痕がある。13世紀中頃と考えられる。615は龍泉窯系の青磁碗である。616・617は土錘である。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ201（溝）

出土遺物は618～630である。618～621は中世土師器である。618～620は非ロクロ成形の小皿で、13

世紀と考えられる。621はロクロ成形の皿である。時期は14～15世紀と考えられる。622は製塩土器の脚部である。623～628は山茶碗の碗である。623は底径4.4㎝とやや狭い。624は体部のたちあがりが直線的である。625は逆三角形の高台で口縁端部が尖る。626は底径5.8㎝で内面の体部と底部の境界に凹みがある。627は体部のたちあがりがやや緩やかである。628は底径4.1㎝と狭い。時期は624・626・628が13世紀中頃、623・625・627が13世紀後半～14世紀前半と考えられる。629は山茶碗の小皿である。尾張型で、時期は13世紀中頃と考えられる。630は土錘の小片である。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ245（溝）

出土遺物は631～633である。631は須恵器高坏の口縁部である。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。632は土師器甕で、口縁部がやや直線的で端部をつまみ上げる。体部外面はやや粗いハケで調整する。時期は７世紀中頃と考えられる。633は製塩土器の脚部である。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ254（溝）

出土遺物は634～665である。634～638は須恵器である。634は坏蓋で、推定口径10.2㎝で口縁部の稜が小さい。７世紀中頃と考えられる。635・636は笠形の坏蓋である。635は８世紀初頭、636は７世紀後半～８世紀前半と考えられる。637は有台坏身で、高台の外側で接地する。８世紀中頃と考えられる。638は甕の口縁部である。639～652は山茶碗の碗である。646は尾張型で他は東濃型である。647・648・652の底部には墨痕や墨書があり、647は「大」の文字が判読できる。639は口縁端部がやや尖り、底部内面に凹みがある。640は高台が薄く、内面の底部と体部の境界に浅い凹みがある。641は高台が無く体部のたちあがりが緩やかで、外面にロクロ目が残る。642は小さい高台が付き、口縁部が僅かに外反する。643は高台が無い。644・645は底径4.4㎝と狭く、器壁が薄い。646は高台が薄く体部が直線的である。647・648は器壁が薄く口縁部が僅かに外反する。649・650は逆三角形のやや小さい高台が付く。651・652は高台が狭く体部は器壁が薄くたちあがりが緩やかである。時期は649・650が13世紀前半～中頃、639・646が13世紀中頃、640が14世紀前半、644・645・648が14世紀前半～中頃、642が14世紀後半、641・652が15世紀前半、643が15世紀中頃と考えられる。653～659は山茶碗の小皿である。656・658・659は底部外面に墨書があり、658・659は「大」の文字が判読できる。653は口径8.3㎝、器高1.5㎝で底部に板目状圧痕があり、体部と底部の境界に凹みがある。654は尾張型で口縁端部が尖る。655・658・659はやや扁平な器形で器壁はやや厚い。656・657は扁平な器形で器壁が薄い。時期は654が13世紀中頃、655・658・659が13世紀後半～14世紀前半、653が14世紀中頃、656・657が15世紀前半と考えられる。660は龍泉窯系の青磁碗である。時期は13世紀と考えられる。661は古瀬戸の折縁深皿である。15世紀初頭と考えられる。662・663は土錘である。664は砂岩製の砥石である。表裏と両側面の４面が使用されている。665は鉄釘である。長さ3.0㎝で断面は方形である。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ502（溝）

出土遺物は666～674である。666～669は須恵器無台坏身である。669は底部に「―」のヘラ記号（線刻）がある。670は有台坏身である。推定口径19.0㎝のやや大型品である。666～670の時期は７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。671は鉢である。底部に穿孔は無く、体部のたちあがりは直線的である。時期は８世紀と考えられる。672は山茶碗の小皿である。口縁部に油煙煤が付着しており灯明皿として使用したと考えられる。時期は13世紀中頃と考えられる。673は種別不明の土製品の一部である。一面に溝状の凹みがあり、その側面にはいくつかの平坦面がある。ところどころに被熱で赤褐

色に変色した部分があり、鞴の一部などの製鉄に関連した遺物の可能性がある。674は花崗岩の石材で、１面が滑らかになっており砥石として使用した可能性がある。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ551（溝）

出土遺物は675～683である。675～677は須恵器である。675は坏蓋で天井部に「×」のヘラ記号（線刻）がある。676・677は有台坏身である。676は推定口径19.4㎝のやや大型品で高台が腰部からやや離れた位置に付く。時期は７世紀後半～末頃と考えられる。677は推定口径13.8㎝で高台が腰部に付く。７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。678～682は山茶碗の碗である。678は底径4.4㎝と高台が狭く器壁が薄い。679は尾張型で高台が痕跡程度になったものである。680は東濃型で口縁部が外反する。681は三角形の高台で器壁が薄い。底部外面に墨書がある。682は尾張型で高台は潰れて籾殻痕があり、底部外面には墨書がある。683は山茶碗の小皿である。やや扁平な器形で底部外面に「大」の墨書がある。山茶碗の時期は682が12世紀中頃、680が12世紀後半～13世紀前半、679・683が13世紀後半～14世紀前半、678・681が14世紀中頃と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ552（溝）

出土遺物は684・685である。684は古瀬戸の尊式花瓶である。15世紀と考えられる。685は土師器鍋である。体部にスタンプ文がある。15世紀以降と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ597（溝）

686は古瀬戸の直縁大皿である。時期は15世紀と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ663（溝）

出土遺物は687～689である。687は須恵器埦で、腰部に２条の沈線が巡る。688は須恵器高坏である。短脚で三角形の透孔が３方向にある。689は土師器甕の口縁部である。これらの時期は７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＤ725（溝）

690は須恵器甕である。体部外面をタタキ、体部内面をナデで調整し、体部内面下半に工具痕とみられる傷がある。時期は７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ012（ピット）

691は笠形の須恵器坏蓋で、つまみが付き口縁端部を垂直に折り返す。８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ033（ピット）

692は須恵器坏身である。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ158（ピット）

693は須恵器坏蓋である。口径10.0㎝で口縁部の稜が痕跡程度である。７世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ178（ピット）

694は須恵器坏身で、口径9.6㎝を測る。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ181（ピット）

695は須恵器坏身である。推定口径12.0㎝で外面に降灰が付着する。６世紀後半～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ182（ピット）

696・697は須恵器坏蓋である。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ214（ピット）

698は須恵器坏身である。口径9.8㎝で口縁部が内傾する。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ216（ピット）

699は須恵器坏身である。口径12.2㎝で全体的に焼き歪みがある。時期は６世紀後半～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ511（ピット）

700は須恵器𤭯である。肩部に丸みがあり２条の沈線の間に連続刺突が施される。時期は７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ570（ピット）

701は須恵器無台坏身である。体部のたちあがりが緩やかで直線的である。時期は８世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ636（ピット）

702は須恵器坏身である。時期は７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ658（ピット）

703は須恵器無台坏身である。器高2.9㎝の扁平な器形で、時期は８世紀後半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ668（ピット）

704は須恵器坏蓋である。時期は７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ739（ピット）

705は土師器甕で、口縁端部を小さくつまみ上げる。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ741（ピット）

706は須恵器鉢である。推定口径17.7㎝で口縁部が内傾し、口縁部内面に墨が付着する。７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ748（ピット）

707は須恵器壺である。体部外面に降灰が付着しており、底部は静止糸切りの後に燻されて黒く変色している。時期は８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ852（ピット）

708は完形品の須恵器坏身で、底部に「ω」のヘラ記号（線刻）がある。709は須恵器高坏の坏部である。時期は７世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＰ920（ピット）

710は須恵器台付壺の底部である。８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＸ073（竪穴状遺構）

711は須恵器坏蓋である。扁平気味な器形で口縁部に小さい稜がある。７世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＸ258（竪穴状遺構）

出土遺物は712・713である。712は須恵器高坏の坏部で、内面に「＊」のヘラ記号（線刻）がある。713は土師器甕の口縁部である。時期は712が７世紀前半、713が８世紀前半と考えられる。

【遺構名】１ｄ区ＳＸ400（竪穴状遺構）

出土遺物は714～718である。714～717は須恵器である。714は有台坏身で、方形の高台の内側で接地する。７世紀後半～末頃と考えられる。715は有台坏身もしくは盤の口縁部である。７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。716・717は高坏の脚部である。716は透孔が２方向にあるが、貫通しない線刻状である。717は短脚で透孔が無い。時期は７世紀中頃と考えられる。718は土師器甑の口縁部である。内外面を細かいハケで調整する。７世紀前半～中頃と考えられる。

（小島）

【１ｄ区遺構外】

719～752は１ｄ区の遺構外から出土した遺物である。719・724・728・730・731・733・743・750・752は表土層、722・727・735・742・744・739・745・748は調査区壁面、732・739・741・749・751は包含層、723はK12グリッド、740はK７グリッドの遺構検出の際、721・726・729・734・738・736・746は西側の自然流路、720・725・737は排土中やその周辺で表採された遺物である。719～730は須恵器である。719はつまみを有する扁平な坏蓋である。720・721は笠形の坏蓋で、天井部内面が摩耗しており、転用硯であったと考えられる。時期は719が７世紀後半、720が８世紀中頃、721が８世紀後半と考えられる。722は受部のある坏身で、時期は６世紀前半と考えられる。723・724は無台坏身、725は有台坏身である。725は底部を静止ヘラケズリし、底部外面に粘土紐の巻き上げ痕が見られる。時期は723が７世紀末頃～８世紀初頭、724が８世紀後半、725が７世紀後半と考えられる。726は高坏の坏部～脚部で、坏部内面にヘラ記号（線刻）が見られる。時期は７世紀と考えられる。727は鉢の口縁部～体部で、時期は８世紀後半と考えられる。728は鉢の体部～底部で、底部と底部側面に穿孔がある。時期は９世紀前半と考えられる。729は甕の口縁部で、時期は７世紀前半と考えられる。

730は圏足円面硯の硯部で、外堤部の推定径23.7㎝、硯部の推定径17.6㎝で、倒置焼成で焼かれている。復元した脚部では脚数は38本と推定でき、時期は８世紀前半～後半と考えられる。731は製塩土器の脚部である。732～739は山茶碗である。732～734は碗である。732は底部外面に板目状圧痕、底部内面にユビオサエがある。733は尾張型で内面に墨痕が見られる。734は底部内面が全体に凹み、高台の内側を棒先で凹ませて調整している。時期は732が13世紀中頃、733が12世紀末頃～13世紀前半、734が14世紀後半と考えられる。735～739は小皿である。735は底部外面に薄く板目状圧痕が残り、「イ」の墨書が見られる。738は底部に糸切り痕が明瞭に残り、内面に自然釉がまばらに付着している。737は底部に糸切り痕が明瞭に残り､内面に自然釉が付着している｡738は底部内面にユビオサエが見られ、底部外面に板目状圧痕が残る。739は底部内面にユビオサエが見られ、底部外面に板目状圧痕が残る。時期は735・738が14世紀前半、736が13世紀、737が14世紀、739が13世紀中頃と考えられる。740は古瀬戸の内耳鍋で、内外面に錆釉が掛けられている。時期は15世紀初頭と考えられる。741～744は土馬の脚部である。741は製塩土器の脚部の可能性も考えられる。743は左の後脚で、胴部が中空であり、外面の一部に黒斑がある。744は右の脚で、胴部が中空であり、表面に剥離が見られる。745～748は細長い円筒形の土錘である。749は鞴の羽口で、色の濃いタール状の鉄滓が付着し、気泡は少量で小さい。750は石灰岩製の紡錘車で、扁平な形状で上面と下面に剥離が見られる。751・752は凝灰岩製の砥石である。751の使用面は表裏２面で片方は部分的に擦痕や溝状の凹みがある。752の使用面は表裏と両側面の４面である。

（後藤泰）

（５）１ｅ区（第390～394図、写真図版343～346）

①　１面（上層）

【遺構名】１ｅ区１面ＳＩ032（ＳＬ032）（竪穴建物）

753は１ｅ区１面ＳＩ032の出土遺物で、土師器甕の口縁部～体部上半である。口縁部は「く」の字状に開く器形である。７世紀前半～中頃に相当する。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＫ023（土坑）

754は１ｅ区１面ＳＫ023の出土遺物で、土師器甕の口縁部である。口縁部はやや「く」の字状に開く器形である。７世紀後半～８世紀前半に相当する。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ001（溝）

755は１ｅ区１面ＳＤ001の出土遺物で、土師器の高坏である。焼成やや不良で、脚部外面の調整はミガキと思われるが摩滅して不明瞭である。４～５世紀前半に相当する。１ｅ区１面ＳＤ001は層位から中世に相当し、古墳時代の土器が混入したと考えられる。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ002（溝）

756は１ｅ区１面ＳＤ002の出土遺物で、須恵器の短頸壺の口縁部～体部上半である。口縁部は外反せず、丸みを帯びてやや内傾する器形で、摩滅も著しい。７世紀中頃に相当する。１ｅ区１面ＳＤ002は層位から鎌倉時代以降に相当し、飛鳥時代の土器が混入したと考えられる。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ003（溝）

757～766が１ｅ区１面ＳＤ003から出土した遺物である。757～760は須恵器である。757は坏身の底部で底面には高台が貼り付けられ、高台径17.8㎝と大振りの器形である。758は壺の口縁部で、「く」の字状に開く器形である。内外面に一部自然釉が付着する。759は水瓶の頸部で、外面中央に２条の沈線がめぐり、自然釉が付着する。760は甕の口縁部である。有段状の口縁部で、端部が立ち上がり、内面は自然釉が付着する。761は灰釉陶器の埦の底部で、底面は糸切り後、高台が貼り付けられる。762・763は山茶碗である。762は碗の底部で底面は糸切り後ナデ消しされ、高台が貼り付けられるが潰れている。763は皿で底面は糸切りである。764は平瓦の破片で、表面（凹面）は布目痕、側面はヘラケズリである。裏面（凸面）は摩滅が激しく不明瞭である。765は凝灰岩製、766は凝灰質砂岩製の砥石である。757・758は８世紀中頃、759は８世紀前半、760は８世紀前半～中頃、761は11世紀前半、762は13世紀中頃、763は13世紀後半、764は８世紀に相当する。765・766は時期不明である。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ006（溝）

767～779が１ｅ区１面ＳＤ006から出土した遺物である。767～775は須恵器である。767は坏蓋で天井部とつまみ部が欠損する。768～770は坏身である。768は底面が回転ヘラケズリで、一部自然釉が付着する。769は底面にヘラ記号（線刻）があるが欠損しているため全体は不明である。770の底部は未調整である。771は瑞の体部～底部である。772は鉢で口縁部が「く」の字状に開く器形である。773は器台の脚部で４条の沈線文、３段のヘラ描波状文が巡る。透孔は台形もしくは三角形で３方向と思われる。774・775は甕の口縁部で、774は焼成不良で内面の摩滅が激しい。775は体部外面にタタキが見られる。776～779は山茶碗の碗である。776・778の底面には高台が貼り付けられる。776・777・779は糸切り痕ナデ消しで、778の底面は糸切りである。776・777の底面には籾殻痕が見られる。767は８世紀前半、768は７世紀前半、769は６世紀末頃～７世紀初頭、770は７世紀中頃、771は７世紀後半、772は７世紀後半～８世紀前半、773は６世紀中頃～後半、774は８世紀前半、775は８世紀中頃～後半、776は13世紀前半、777・778は13世紀中頃、779は12世紀前半に相当する。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ008（溝）

780は１ｅ区１面ＳＤ008の出土遺物で、平瓦の破片である。表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）にタタキが見られる。８世紀に相当する。１ｅ区１面ＳＤ008は層位から中世に相当し、奈良時代の遺物が混入したと考えられる。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ025（溝）

781は１ｅ区１面ＳＤ025の出土遺物で、山茶碗の碗の底部である。底面は糸切り後、高台が貼り付けられる。籾殻痕が見られる。14世紀中頃に相当する。

【遺構名】１ｅ区１面ＳＤ038（溝）

782～786は１ｅ区１面ＳＤ038の出土遺物である。782は天目茶碗の底部である。底面は削り出し高台で糸切りされ、内面には鉄釉が施される。783は土馬の脚部である。端部は未調整である。784は羽口か取瓶と考えられる。一部鉄が付着する。785は加工円盤で、786は凝灰質砂岩製の砥石である。782は16世紀中頃、783は８世紀、784は７～８世紀に相当する。785・786は時期不明である。

【１ｅ区１面遺構外】

787～805は１ｅ区１面遺構外からの出土遺物である。787～793は須恵器である。787は包含層から出土した坏蓋で、つまみ部分は欠損している。788は遺構検出の際に調査区中央から出土した坏蓋で、つまみは大きくてしっかりとした宝珠形である。内面は一部自然釉が付着する。789・790は遺構検出の際に出土し、790は調査区東側から出土した。２点とも坏身で、789の底面はしっかりとした高台が貼り付けられる。790は完形品に近いが、焼成不良で底面は静止糸切り後一部回転ヘラケズリが施される。791は表土中から出土した水瓶の口縁部で、４条の沈線が巡る。外面には一部自然釉が薄く付着し、内面には一部自然釉が厚く付着する。792は遺構検出の際に出土した瓶の底部（脚部）である。脚端部に自然釉が付着する。793は遺構検出の際に出土した遺物で、托の底部で高台が貼り付けられる。787は８世紀後半～末頃、788は８世紀後半、789は７世紀後半～８世紀前半、790は７世紀後半～末頃、791は７世紀末頃～８世紀前半、792は７世紀前半、793は８世紀中頃に相当する。

794は遺構検出の際に調査区東側の南壁から出土した弥生土器の壺の口縁部で、内傾する器形である。外面には沈線文・棒状浮文・赤採の痕跡が見られ、内面端部には櫛連続刺突文が見られる。弥生中期に相当する。

795はＬ34グリッドから出土した土師器高坏の脚部である。４世紀後半に相当する。

796～800は遺構検出の際に出土した山茶碗である。796～799が碗で、796の底面は糸切り後ナデ消しされる。797の底面は糸切りで籾殻痕が見られる。798の底面は糸切りである。799の底面は籾殻痕が見られる。800は小皿の底部で、底面は糸切りである。796・797は12世紀中頃、798は12世紀後半、799は15世紀中頃、800は13世紀前半に相当する。

801は表土から出土した平瓦の破片で、表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）に縄目タタキが見られる。802・803は遺構検出の際に、調査区東側から出土した平瓦の破片である。802は表面（凹面）に不明瞭ながら布目痕・糸切り痕、裏面（凸面）に縄目タタキが見られる。803は表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）はナデである。804は包含層から出土した凝灰岩製の砥石である。801･803は７～８世紀、802は８世紀に相当する。804は時期不明である。

805は遺構検出の際に調査区東側から出土したウマの上顎臼歯である。動物遺体同定の結果（第４章自然科学分析参照）左上顎の第３前臼歯から第２後臼歯のいずれかの臼歯と考えられる。時期は出土地点の周辺遺構からの遺物を見ると飛鳥・奈良時代以降の可能性も考えられるが、出土した層位から鎌倉時代以降の可能性が高い。

（三島）

② ２面（下層）

【遺構名】１ｅ区２面ＳＤ039（道路状遺構）

806～808は１ｅ区２面ＳＤ039の埋土中から出土した遺物である。806は須恵器坏身の口縁部～体部で、受部が付きたちあがりは直に近い器形である。807は須恵器の埦で、推定口径9.6㎝、底径5.8㎝、器高4.8㎝を測る。底面に高台が付き、小振りでやや深底の器形である。808は平瓦の破片で表面（凹面）に布目痕と桶板痕が残る。時期は器形・調整などの特徴から、806は６世紀後半～７世紀前半、807は８世紀前半、808は７世紀と考えられる。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＤ042（溝）

809～816は１ｅ区２面ＳＤ042の埋土中から出土した遺物である。809～811は須恵器の坏身の底部で、809の底面にはヘラ記号（線刻）が施される。810・811は高台付きで、810は底径12.2㎝、811は底径14.2㎝と大振りの器形である。812～815は山茶碗の碗で、812・813は底部のみである。816は平瓦の破片で裏面（凸面）に縄目タタキの痕跡が残る。時期は器形･調整などの特徴から､809は６世紀、816は７～８世紀、810・811は８世紀前半～中頃、812は12世紀前半、813～815は12世紀後半と考えられる。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＤ063（溝）

817は１ｅ区２面ＳＤ063の埋土中から出土した遺物である。古瀬戸の緑釉小皿の口縁部で、器形などの特徴から、時期は14世紀末頃～15世紀初頭と考えられる。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＰ066（ピット）

818は１ｅ区２面ＳＰ066の埋土中から出土した土師器台付甕の体部下半～台部である。口縁部～体部上半を欠損する。器壁の薄い器形で、体部と台部の外面はハケ調整、台部内面にはユビオサエの痕跡が残る。時期は３世紀と考えられる。

【遺構名】１ｅ区２面ＳＸ055（溝状遺構）

819は１ｅ区２面ＳＸ055の埋土中から出土した土師器高坏の坏部下半～脚部上半である。口縁部と裾部を欠損する。坏部下半の基部に近い位置に稜が見られ口縁部に向けて外傾しながら立ち上がる器形で、脚部に円形透孔が３方向に配される。坏部と脚部の外面はミガキ調整を基本とし、坏部外面に沈線と刺突文が巡る。時期は３世紀と考えられる。

【１ｅ区２面遺構外】

820は１ｅ区２面遺構外から出土した遺物である。検出の際に包含層中から出土した平瓦の破片で、表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）に縄目タタキの痕跡が残る。調整などの特徴から、時期は７～８世紀と考えられる。

（基峰）

（６）２ａ区（第395～406図、写真図版347～356）

①　１面（上層）

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ048（土坑）

821は２ａ区１面ＳＫ048から出土した須恵器瓶の底部である。推定底径12.6㎝、残存器高4.0㎝を測り、内面は回転ナデで、底部外側は回転ナデと回転ヘラケズリが施される。時期は７世紀後半と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ050（土坑）

822は２ａ区１面ＳＫ050から出土した須恵器甕である。推定底径4.5㎝、残存器高7.8㎝を測り、上

２条・下１条の沈線の間にヘラによる連続刺突が施される。底部の外面の剥離が激しい。時期は７世紀前半と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ051（土坑）

823･824は２ａ区１面ＳＫ051から出土した須恵器である。823は埦の底部片である。推定底径4.9㎝、残存器高1.5㎝を測り、内面に自然釉が付着する。時期は７世紀後半と思われる。824は鉢の底部である。推定底径8.6㎝、残存器高3.4㎝を測り、高台は貼り付けの後ナデが施される。床面直上より出土しており、時期は８世紀後半と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ077（土坑）

825･826は２ａ区１面ＳＫ077から出土した須恵器の坏身である。825は推定口径9.0㎝、残存器高3.0㎝を測り、たちあがりは内傾している。826は推定底径3.0㎝、残存器高1.6㎝を測り、底部外面はヘラケズリが施されている。時期は825は７世紀前半～中頃、826は７世紀前半である。

【遺構名】２ａ区１面ＳＫ126（土坑）

827は２ａ区１面ＳＫ126から出土した須恵器甕である。推定口径17.2㎝、残存器高5.0㎝を測り、口縁端部がつまみ上げられているが、ややシャープさに欠ける。時期は７世紀前半と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ001（溝）

828～836は２ａ区１面から出土した遺物である。828～832は須恵器である。828は坏蓋で、推定口径18.0㎝、残存器高2.7㎝を測る。天井部の２分の１に回転ヘラケズリが施され、口縁端部は折り返されている。時期は８世紀後半と思われる。829は坏身で推定口径8.9㎝、推定底径4.4㎝、器高3.9㎝を測り、底部外面は回転ヘラケズリ、ヘラ記号（線刻）が施される。時期は７世紀初頭と思われる。830は埦で推定底径8.1㎝、残存器高2.2㎝を測り、底部外面にヘラ記号（線刻）が施される。時期は７世紀中頃と思われる。831は壺で残存器高7.3㎝を測り、時期は７世紀中頃と思われる。832は鉢で推定口径25.6㎝、残存器高9.3㎝を測り、口縁部は外反し口縁の基部に沈線が施される。時期は７世紀と思われる。833～836は山茶碗類である。833は尾張型の小皿で口径8.0㎝、底径4.8㎝、器高1.7㎝を測る。底部内面には指圧痕、外面には板目状圧痕が施され、内面は使用により摩滅している。時期は12世紀後半～13世紀前半と思われる。834は東濃型の小皿で口径8.2㎝、底径4.8㎝、器高1.1㎝を測る。底部内面には指圧痕、外面には板目状圧痕が施され、体部と底部の境に浅い溝が一巡する。時期は14世紀中頃と思われる。835は尾張型の山茶碗で推定底径8.6㎝、残存器高3.1㎝を測る。内面は使用により摩滅し、糸切痕がナデ消しされる。時期は12世紀後半～13世紀前半と思われる。836は東濃型の山茶碗で推定口径13.8㎝、推定底径6.0㎝、器高5.7㎝を測り、底部内面に指圧痕が残る。時期は13世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ002（溝）

837～860は２ａ区１面ＳＤ002から出土した遺物である。837～839は須恵器である。837は甕で、タタキ調整後沈線が施される。推定口径18.8㎝、残存器高8.8㎝を測り、時期は７世紀中頃と思われる。838は有台坏で推定底径12.8㎝、残存器高3.8㎝を測る。839は底径8.1㎝、残存器高3.6㎝を測る瓶の底部である。838・839の時期は８世紀後半と思われる。840は土師器甕で推定口径13.6㎝、残存器高4.5㎝を測る。口縁部はつまみ上げられ、内面はハケ調整が施されている。時期は７世紀前半と思われる。

841は清郷型の鍋で推定口径25.0cm、残存器高3.8cmを測り、時期は11世紀と思われる。842～854は山茶碗類である。842は尾張型の小碗で推定口径8.9cm、底径5.0cm、器高2.9cmを測り、内面全面に降灰が認められる。時期は12世紀中頃と思われる。843･844は東濃型の小皿である。843は口径8.5cm、底径5.0cm、器高1.5cmを測り、底部内面に指圧痕、外面には板目状圧痕が残る。時期は13世紀中頃と思われる。844は口径8.0cm、底径4.8cm、器高1.5cmを測り、内面底部と体部の境には浅い溝が一巡する。時期は13世紀後半と思われる。845～848は尾張型の山茶碗である。845は推定底径8.6cm、残存器高2.7cmを測る。846は底径8.3cm、残存器高2.9cmを測る。847は推定底径8.6cm、残存器高2.4cmを測る。845～847の内面に使用による摩滅がみられる。848は推定口径14.1cm、底径6.8cm、器高5.0cmを測り、長石の吹き出しがみられる。845～847の時期は12世紀前半、848は13世紀中頃と思われる。849～854は東濃型の山茶碗の碗で、850は小碗である。849は推定口径14.0cm、推定底径6.2cm、器高5.2cmを測る。850は推定口径11.3cm、底径4.7cm、器高4.7cmを測る。851は推定底径5.4cm、残存器高2.8cmを測る。852は底径5.2cm、残存器高2.3cmを測る。853は推定口径13.8cm、推定底径4.2cm、器高5.5cmを測る。854は推定底径4.6cm、器高1.8cmを測る。849～851の高台内側には指ナデが施される。852の高台は外側が指ナデされ角張っている。853・854の底部内面には指圧痕が残る。いずれの山茶碗も籾殻痕が残る。849～852の時期は13世紀中頃、853・854は13世紀後半～14世紀前半と思われる。855は凝灰岩製の砥石で、表面と両側面の３面を使用している。残存最大長7.0cm、最大幅3.9cm、最大厚1.3cmを測る。時期は不明である。856～860は瓦である。全て小片のため全体像はつかめない。全て平瓦と思われる。857・858・860では裏面（凸面）に縄タタキ痕、表面（凹面）に布目があるものは858～860である。856は焼成不良のため、調整痕は摩滅しているが、表面（凹面）にわずかに布目が残る。857の布目はナデ消しされている。859のタタキ目はナデ消しされている。856・857は黒褐色、858・860は灰白色、859は黒色を呈する。856は残存最大長6.4cm、残存最大幅4.8cm、最大厚2.1cmを測る。857は残存最大長6.3cm、残存最大幅6.3cm、最大厚1.9cmを測る。858は残存最大長5.4cm、残存最大幅4.1cm、最大厚2.1cmを測る。859は残存最大長4.7cm、残存最大幅6.5cm、最大厚1.8cmを測る。860は残存最大長4.5cm、残存最大幅6.7cm、最大厚1.9cmを測る。856～860の時期は８世紀と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ003（溝）

861～863は２ａ区１面ＳＤ003から出土した遺物である。861・862は須恵器の坏身底部である。861の底部外面にはヘラ記号（線刻）が施される。861・862ともに時期は７世紀前半と思われる。863は東濃型の山茶碗の小皿である。底部内面の周縁に浅い溝が一巡する。861は推定底径3.4cm、残存器高1.8cmを測る。862は推定底径5.2cm、残存器高1.6cmを測る。863は推定口径9.2cm、推定底径6.3cm、器高0.9cmを測る。時期は14世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ004（溝）

864～871は２ａ区１面ＳＤ004から出土した遺物である。864は須恵器の壺である。底部にヘラ記号（線刻）が入る。864は残存器高3.1cmを測る。時期は７～８世紀と思われる。865・866は尾張型の山茶碗である。865の内面は使用により摩滅している。865は推定底径7.9cm、残存器高3.3cmを測る。時期は12世紀前半と思われる。866の高台は潰れ、雑に取り付けられたためか、半分ほどが剥離している。866は推定底径8.2cm、残存器高5.0cmを測り、時期は12世紀中頃である。867は古瀬戸の皿である。内面に重ね焼きのトチン跡がみられる。推定底径10.8cm、残存器高2.4cmを測り、時期は15～16世紀と思われる。868は古瀬戸の折縁深皿である。推定口径27.6cm、残存器高5.1cmを測る。時期は15世紀中

頃と思われる。869は古瀬戸の錆釉内耳鍋で推定口径26.2㎝、残存器高5.5㎝を測る。時期は15世紀中頃と思われる。870は土馬の脚部と思われ、縦筋目が入る。残存最大長7.8㎝、最大幅2.8㎝を測り、時期は８世紀と思われる。871は陶錘である。長さ3.3㎝、幅1.6㎝、孔径0.5㎝を測り、重さ10.8ｇである。手捏ねで両端は平坦に調整されている。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ045（溝）

872～876は２ａ区１面ＳＤ045から出土した遺物である。872～874は須恵器である。872は坏蓋で、扁平なつまみが付く。残存器高1.8㎝を測り、時期は７世紀後半と思われる。873は高坏である。推定最小径2.7㎝、残存器高5.4㎝を測り、時期は７世紀後半と思われる。874は埦である。静止糸切の底部は少し突出している。推定底径4.8㎝、残存器高2.0㎝を測り、時期は９世紀前半と思われる。875は古瀬戸の灰釉卸皿で、推定口径16.1㎝、推定底径9.8㎝、残存器高3.0㎝を測る。876は古瀬戸錆釉の内耳鍋で、推定口径23.0㎝、残存器高5.1㎝を測る。時期は875・876ともに15世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ083（溝）

877は２ａ区１面ＳＤ083から出土した須恵器の坏身である。たちあがりは内傾気味で、受部の下に段を有する。推定口径10.8㎝、残存器高2.8㎝を測る。時期は７世紀初頭と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ142（溝）

878は２ａ区１面ＳＤ142から出土した須恵器の坏身である。たちあがりは長く、直立する。推定口径12.0㎝、残存器高4.2㎝を測る。時期は６世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＤ143（溝）

879・880は２ａ区１面ＳＤ143から出土した遺物である。879は須恵器の坏身で推定口径16.3㎝、残存器高4.0㎝を測る。時期は７世紀前半と思われる。880は土師器の甕で、体部外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整が施される。推定口径23.0㎝、残存器高12.8㎝を測る。時期は７世紀後半と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ070（ピット）

881は２ａ区１面ＳＰ070から出土した刀子と思われる鉄製品である。長さ5.1㎝、幅1.7㎝、厚さ0.4㎝を測る。時期は供伴土器片から、７世紀と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ120（ピット）

882は２ａ区１面ＳＰ120から出土した土師器高坏の脚部である。推定底径9.9㎝、残存器高2.1㎝を測る。時期は５～６世紀と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ128（ピット）

883は２ａ区１面ＳＰ128から出土した土師器の甕である。口縁端部が上につまみ上げられ、丸みをおびている。推定口径12.6㎝、残存器高3.0㎝を測る。時期は７世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ147（ピット）

884は２ａ区１面ＳＰ147から出土した須恵器の坏身である。底部外面の２分の１に回転ヘラケズリ

が施され、たちあがりは内傾する。推定口径9.8㎝、底径3.8㎝、器高2.9㎝を測る。時期は７世紀前半と思われる。

【遺構名】２ａ区１面ＳＰ155（ピット）

885は２ａ区１面ＳＰ155から出土した須恵器の坏蓋である。天井部外面の３分の２に回転ヘラケズリが施される。口径11.4㎝、器高4.3㎝を測る。時期は７世紀前半と思われる。

（後藤秀）

【２ａ区１面遺構外】

886～923は２ａ区１面の遺構外から出土した遺物である。886～903は須恵器である。886～888は坏蓋である。886の天井部は平坦でヘラケズリが施されている。推定口径10.7㎝、器高3.6㎝を測る。時期は７世紀前半と思われる。887は推定口径17.6㎝、残存器高2.7㎝、888は推定口径16.4㎝、器高3.7㎝を測る大型の坏蓋で、口縁端部が折り返されている。887の天井部には重ね焼き痕が残る。時期は887･888とも８世紀前半と思われる。889～893は坏身である。889は底部片で､外面にヘラ記号（線刻）が入る。時期は７世紀前半と思われる。890の底部外面３分の１に回転ヘラケズリが施される。時期は７世紀前半と思われる。891の受部直下には沈線が施される。時期は７世紀前半～中頃と思われる。892・893は底部片で、892・893ともにヘラ記号（線刻）が施される。時期は７世紀と思われる。894は埦である。底部外面は回転ヘラケズリが施される。推定口径13.6㎝､推定底径9.9㎝､器高5.7㎝を測る。時期は７世紀後半と思われる。895は皿である。突出した底部は回転ヘラケズリされ、端部は高台を意識して三角に削り出されている。推定底径14.0㎝、残存器高1.1㎝を測る。時期は８世紀後半～末頃である。896・897は高坏の脚部である。896は短脚で、推定底径10.9㎝、残存器高7.0㎝を測る。２段の長方形透孔が２方向に配し、透孔と透孔の間に沈線が施される。897も２条の沈線が施され、推定底径11.2㎝、残存器高2.4㎝を測る。時期は896が７世紀前半、897が７世紀前半～中頃である。898は高盤の脚部である。外面には荒いナデ痕が残る。推定底径13.2㎝、残存器高10.2㎝を測る。時期は８世紀後半～９世紀前半である。899～901は壺である。899の口縁部はやや内傾し直立する。体部には沈線が施され、底部は回転ヘラケズリ調整である。推定口径5.8㎝、推定底径3.5㎝、器高5.5㎝を測る。時期は７世紀前半である。900は、底部に板状の圧痕がみられる。また体部には、木の板で叩いたような筋状の痕がみられる。底径15.6㎝、残存器高17.4㎝を測る。時期は７世紀後半である。901の体部内面には、粘土紐の巻上げ痕がみられる。底部は回転ヘラケズリで、ヘラ記号（線刻）が施される。底径4.8㎝、残存器高5.6㎝を測る。時期は８世紀前半と思われる。902は短頸壺である。肩部中位と下位に沈線が入り、その間に右下がり斜行ヘラ描文が施される。残存器高8.3㎝を測る。時期は７世紀後半である。903の小鉢で、金属鉢を模したと思われる。底部外面は回転ヘラケズリ、その後ヘラ記号（線刻）が施される。内面には粘土紐の巻き上げ痕が残り、中央は指オサエにより凹んでいる。口径8.4㎝、底径8.5㎝、器高3.6㎝を測る。時期は８世紀前半である。904～908は土師器である。904は高坏の脚部である。外面はナデ調整が施され､脚内面にはしぼり痕が見られる。残存器高5.6㎝を測る。時期は５世紀である。905～907は甕である。905～907の口縁端部はつまみ上げられている。905の内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部はハケメ調整が施される。推定口径16.6㎝、残存器高4.7㎝を測る。906の表面は所々摩滅しているが、内面はヨコハケ、体部はナデ調整されている。推定口径18.9㎝、残存器高4.6㎝を測る。907の体部内面はヨコナデ、口縁部外面はナデ、体部外面はヨコハケ調整が施される。推定口径14.7㎝、残存器高5.5㎝を測る。時期は、905～907は６世紀後半～７世紀

前半である。908は鍋である。内外面ともにナデが施されており、清郷型と思われる。推定口径25.3㎝、残存器高4.7㎝を測る。時期は11世紀である。909は灰釉陶器の埦である。内面はコテアテと灰釉がハケ塗りされ、直接重ね焼きされている。外面にはヘラケズリが施されている。推定底径8.7㎝、残存器高3.2㎝を測り、時期は９世紀後半である。910～914は山茶碗類である。910は尾張型の山茶碗である。底部外面には糸切痕が残る。高台は丸く潰れているように見えるが、籾殻痕はない。底径8.4㎝、残存器高3.7㎝を測る。時期は12世紀前半である。911～913は東濃型の山茶碗の碗である。911の底部内面には指圧痕が残り、底部は体部より薄くなっている。高台・底部内面には籾殻痕が残る。推定底径6.7㎝、残存器高2.9㎝を測り、時期は13世紀中頃である。912の口縁端部は、ヘラアテ後調整されていないため内側に角張っている。高台の取り付けも雑である。推定口径11.7㎝、推定底径4.0㎝、器高3.3㎝を測り、時期は14世紀中頃である。913は高台を有さない碗である。体部外面にはロクロメ、底部外面には糸切痕が残る。推定口径13.0㎝、底径4.7㎝、器高2.9㎝を測り、時期は15世紀中頃である。914は東濃型の山茶碗の小皿である。底部内面には薄く指圧痕、外面には糸切痕が残る。推定口径8.0㎝、推定底径4.5㎝、器高1.5㎝を測り、時期は13世紀中頃である。915・916は陶錘で、ともに中央部が膨らむ。915は長さ4.9㎝、幅1.1㎝、孔径0.3㎝を測り、重さ5.4ｇである。916は長さ7.8㎝、幅1.1㎝、孔径0.4㎝を測り、重さ7.9gである。915・916ともに時期は７世紀である。917は釘と思われる鉄製品である。長さ4.3㎝、重さ8.1ｇである。時期は不明である。918は石製品で、石鏃である。表土掘削時に、鉄分を多く含む土中より出土しており、表面には鉄分により固くなった土が付着している。時期は縄文時代と思われるが、調査区には該当するような遺構はない。919～921は平瓦である。919の表面（凹面）には布目痕、裏面（凸面）には縄タタキ痕が残る。灰褐色を呈する。残存最大長13.5㎝、残存最大幅9.4㎝、最大厚1.9㎝を測る。920は焼成不良のため、表面は摩滅しており表面（凹面）の調整は不明である。裏面（凸面）には縄目タタキ痕が見られる。残存最大長6.0㎝、残存最大幅6.0㎝、最大厚2.6㎝を測る。921の表面（凹面）には布目痕が残り、裏面（凸面）はナデ調整される。焼成は良好で黒色を呈する。残存最大長5.4㎝、残存最大幅4.7㎝、最大厚1.9㎝を測る。919～921の時期は７世紀後半～８世紀である。922・923は鞴の羽口である。922の直径は4.9㎝、通風管内径は1.9㎝と推定される。外面全面に鉄が付着し、一部黒色のガラス質を含んでいる。923の直径は4.9㎝、通風管内径は2.0㎝と推定される。通風口にガラス質が付着する。922・923の時期は７～８世紀である。

（首藤）

② ２面（下層）

【遺構名】２ａ区２面ＳＢ001（掘立柱建物）

924～926は２ａ区２面ＳＢ001から出土した遺物である。924は２ａ区２面ＳＰ194から出土した遺物で、須恵器坏蓋の口縁部である。口縁端部が折り返される器形で、時期は８世紀前半と考えられる。925･926は２ａ区２面ＳＰ200から出土した木製品で、礎板である。925の端に926が重なった状態で出土した。木目を見ると直交していることから、それぞれ別の板材と考えられる。925は側面と裏面に不明瞭ながら加工痕が残る。926は針葉樹のサワラである。時期は７～８世紀と考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＢ002（掘立柱建物）

927・928は２ａ区２面ＳＢ002から出土した遺物である。いずれも２ａ区２面ＳＰ194から出土した遺物で、927は土師器甕の口縁部～体部（頸部）で、口縁端部がつまみ上げられている。時期は６世

紀末頃～７世紀前半と考えられる。928は木製品で、針葉樹のコウヤマキの柱根である。時期は７～８世紀と考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＩ230（ＳＬ230）（竪穴建物）

929は２ａ区２面ＳＩ230（ＳＬ230）から出土した陶錘である。細長く中央が膨らむ形状で、長さ5.2㎝、幅1.1㎝、孔径0.3㎝、重さ5.8ｇである。時期は７世紀と考えられる。２ａ区２面ＳＩ230（ＳＬ230）はカマドの煙道部分のみが確認された程度で、929は混入したものとも考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ166（溝）

930～956は、２ａ区２面ＳＤ166から出土した遺物である。930～945は須恵器である。930・931は坏蓋である。930の天井部３分の１は回転ヘラケズリが施され、天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。931は天井部の大部分が回転ヘラケズリで、天井部と口縁部の境に稜はあるが、明瞭ではない。内面は２箇所の指による押圧痕が見られる。時期は７世紀初頭と考えられる。932～936は坏身である。932～936の口縁部のたちあがりは短く内傾し、底部外面の３分の１に回転ヘラケズリが施される。932は底部外面に降灰が見られる。933・934は丸底、932・935・936は平底である。時期は932が６世紀末頃～７世紀中頃、933・934が７世紀初頭、935が７世紀前半､936が７世紀前半～中頃と考えられる。937･938は高坏である。共に脚部は欠損している。937の口径は12.8㎝、体部に２条の沈線が巡る。938の口径は15.4㎝、口縁部下に隆起した線が１条巡り、その下に２条の沈線が巡る。また、透孔が三方向に配置される。時期は937・938ともに７世紀前半と考えられる。939は提瓶である。底部外面にはヘラケズリが施され、ヘラ記号（線刻）が認められる。体部には沈線２条が施され、体部上面は自然釉がかかっている。時期は７世紀前半～中頃と考えられる。940は甕である。体部は２条の沈線で区画され、その間にヘラによる連続刺突文が施される。体部には回転ヘラケズリが施され、下段の沈線より上はナデ調整が施される。時期は７世紀前半～中頃と考えられる。941～944は壺類である。941の口縁部は欠損しているが、体部・底部の残りは良い。体部にはタタキが残るが、肩から上はナデ調整され、調整の境目あたりに沈線が巡る。沈線は体部中央に２条、肩部の中央にも２条巡る。内面は丁寧に回転ナデが施されている。942は口縁部～体部の中ほどまでが残存する。口縁部は内外面ともにナデ調整され、端部は面取される。頸部の１か所に穿孔が施され、体部外面にはタタキが残り、肩部に２条、体部に１条の沈線が巡る。内面は丁寧にナデ調整が施される。943は長頸壺である。底部はヘラ切り後未調整で、ヘラ記号（線刻）がみられる。体部に２条、頸部に２条の沈線が巡る。頸部は少し外反して伸び、口縁部に続く。内外面とも回転ナデ調整が施される。944の体部にはタタキが残る。肩部に巡る２条の沈線より上の頸部～口縁部、体部内面にはナデ調整が施される。口縁端部は面取される。焼成時に横倒しになったのか、自然釉が横に流れ、他の個体との融着痕が見られる。時期は941・944が７世紀中頃、942・943が７世紀前半と考えられる。945は甕の口縁部である。一部残った体部にタタキが見られる。口縁部に段を有する。また、口縁部内外面ともに丁寧にナデ調整が施される。時期は７世紀中頃と考えられる。946～954は土師器甕である。946の体部はほぼ球形状で、口縁端部は上につまみ上げられる。口縁部外面はナデ、体部外面上半はタテハケ、下半はナデ調整が施される。内面は口縁部～体部上半がヨコハケ、下半はナデ調整が施される。947は長胴の甕で、口縁端部はつまみ上げられる。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整が施される。口縁部内面はヨコナデ、体部内面上半はハケ、下半は工具ケズリで調整が施される。948の体部は球形状で、口縁端部は上につまみ上げられる。口縁部外面はナデ、体部

外面はハケ調整が施される。内面は口縁部～体部上半がヨコハケ、下半がナデ調整される。949・950は甕の口縁部である。どちらも口縁端部はつまみ上げられている。949の口縁部外面はナデ、内面はハケ調整が施される。950の口縁部外面はナデ、体部外面はハケ調整が施される。内面は口縁部～体部上半がハケ調整である。951・953は体部が球形状の甕、952は平底の小型の甕である。いずれも全体的に摩滅し、口縁部は緩く「く」の字に屈曲する。また、口縁端部はつまみ上げがなく、面取もされていない。外面の調整はいずれも口縁部がヨコナデ、体部はハケ調整である。また、952は底部がナデ調整される。内面の調整は951がナデ、952はナデと指オサエで調整されるが、摩滅して不明瞭である。953の内面は口縁部がヨコナデ､体部がケズリ調整される。954は長胴の甕で､口縁部は緩く「く」の字に屈曲し、口縁端部のつまみ上げは見られない。口縁部は内外面ともにナデ、体部外面はハケ、内面はナデ・板によるナデ調整が施される。時期は946・948が７世紀前半～中頃、947が７世紀前半、949・950が７世紀中頃、951～953が７世紀中頃～後半、954が７世紀後半と考えられる。955は土錘である。細長く中央が少し膨らむ形状で、長さ5.4㎝、幅1.4㎝、孔径0.4㎝、重さ9.6gである。時期は７世紀と考えられる。956は砥石である。縦幅10.7㎝、横幅8.2㎝、厚さ6.6㎝、重量846.6gで、凝灰岩製である。４面に使用痕がある。時期は共伴遺物から７世紀と考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＤ171（溝）

957～961は２ａ区２面ＳＤ171の出土遺物である。957～960は須恵器である。957・958は坏蓋で、天井部と口縁部境の稜が明瞭である。958は稜線直上に段を有する。時期は957が７世紀初頭、958が７世紀前半と考えられる。959・960は高坏である。959は坏部小片で、内外面とも回転ナデ調整される。口縁部と体部の境に稜を有する。960は脚部で、回転ナデ調整が施される。外面には透孔痕が見られ、透孔上には沈線が巡る。時期はどちらも７世紀前半と考えられる。961は土師器甕の口縁部小片で、わずかに体部も残存するが、摩滅が激しい。口縁端部はつまみ上げられるが、摩滅が激しい。口縁部外面はナデ、体部外面と口縁部～体部内面はハケ調整が施されている。時期は７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＰ227（ピット）

962は２ａ区２面ＳＰ227から出土した須恵器の坏身である。たちあがりは短く内傾し、内面に段を有する。底部外面４分の１に回転ヘラケズリが施される。有蓋で焼成しているので、受部に融着痕が見られる。また、体部～底部にかけて他の個体の融着がみられる。内面は丁寧に回転ナデ調整が施される。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】２ａ区２面ＳＸ169（不明遺構）

963は２ａ区２面ＳＸ169から出土した山茶碗で、東濃型の小皿である。器壁は薄く仕上げられ、底部内面に指圧痕、外面に板目状圧痕が残る。時期は13世紀中頃と考えられる。

【２ａ区２面遺構外】

964～966は２ａ区２面遺構外から出土した遺物である。964・965は山茶碗類で、964は尾張型山茶碗の碗である。内面はコテアテされ、底部内面には重ね焼き高台痕が残る。高台には籾殻痕が残り、一部剥離している。高台の形状は潰れているが三角高台と思われる。時期は12世紀中頃と考えられる。965は小碗である。内面はコテアテされ、外面は回転ナデ調整が施される。高台は底部よりずれて付

けられており、一部は体部下方に至る。高台は潰れ気味で、籾殻痕が残る。時期は12世紀中頃と考えられる。966は土錘である。細長い形状で長さ4.8㎝、幅1.0㎝、孔径0.5㎝、重さ4.6ｇで、時期は７世紀と考えられる。

（後藤泰）

（７）２ｂ区（第407～420図、写真図版357～368）

【遺構名】２ｂ区ＳＢ001（掘立柱建物）

967は２ｂ区ＳＰ074から出土した土師器甕である。口縁部が弱く屈曲し端部をつまみ上げる。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ002（掘立柱建物）

968は２ｂ区ＳＰ060から出土した須恵器坏身である。推定口径11.0㎝で口縁部がやや内傾する。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ003（掘立柱建物）

出土遺物は969～972である。969は２ｂ区ＳＰ583から出土した須恵器坏蓋である。口縁端部を垂直に折り返す器形で、８世紀初頭～前半と考えられる。970は２ｂ区ＳＰ145から出土した須恵器無台坏身である。７世紀中頃～８世紀初頭と考えられる。971・972は２ｂ区ＳＰ142から出土したサワラ製の礎板である。971は長さ22.6㎝、幅13.4㎝、厚さ4.3㎝を測り、木取りは板目である。裏面に鑿痕が確認できる。972は長さ21.4㎝、幅8.8㎝、厚さ3.7㎝を測り、木取りは板目である。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ004（掘立柱建物）

出土遺物は973・974で、ともに２ｂ区ＳＰ278からの出土である。973は須恵器坏蓋である。笠形で口縁部がやや屈曲して伸びる。時期は８世紀後半と考えられる。974は滑石製の勾玉である。長さ2.9㎝で、研磨した面が残る粗雑な作りで、紐孔周辺に凹みがある。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ005（掘立柱建物）

出土遺物は975・976である。975は２ｂ区ＳＰ557から出土した笠形の須恵器坏蓋である。７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。976は２ｂ区ＳＰ385から出土した土師器甕で、口縁端部のつまみ上げを行わない器形である。７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ006（掘立柱建物）

977は２ｂ区ＳＰ582から出土した須恵器蓋である。乳頭状のつまみを有する。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ007（掘立柱建物）

978は２ｂ区ＳＰ583から出土した礎板である。コウヤマキ製で長さ19.2㎝、幅16.5㎝、厚さ6.3㎝を測る。加工痕は判別できない。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ008（掘立柱建物）

出土遺物は979～981である。979は２ｂ区ＳＰ541から出土した須恵器坏蓋の口縁部である。推定口径13.6㎝で口縁端部を垂直に鋭く折り返す。時期は８世紀前半と考えられる。980・981は２ｂ区ＳＰ499から出土したサワラ材の柱根である。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ009（掘立柱建物）

出土遺物は982～985である。982 ～ 984は須恵器である。982は２ｂ区ＳＰ690から出土した有台坏身で、７世紀後半～末頃と考えられる。983は２ｂ区ＳＰ657から出土した無台坏身で、底部がヘラ切り未調整である。７世紀後半と考えられる。984は２ｂ区ＳＰ659から出土した短脚の高坏の脚部である。７世紀中頃～後半と考えられる。985は２ｂ区ＳＰ684から出土したヒノキ材の柱根である。残存長26.2㎝、幅20.6㎝を測る。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ010（掘立柱建物）

出土遺物は986～988で全て須恵器である。986は２ｂ区ＳＰ494から出土した笠形の坏蓋である。口縁部が屈曲して伸びる器形で、８世紀末頃～９世紀初頭と考えられる。987は２ｂ区ＳＰ436から出土した小さい返りを有する坏蓋である。７世紀後半と考えられる。988は２ｂ区ＳＰ501から出土した有台坏身である。８世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ011（掘立柱建物）

989は２ｂ区ＳＰ471から出土した小型の須恵器鉢である。７世紀と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ012（掘立柱建物）

出土遺物は990・991である。990は２ｂ区ＳＰ234から出土した須恵器坏蓋で、推定口径12.5㎝を測る。６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。991は２ｂ区ＳＰ233から出土した須恵器坏身で、推定口径12.0㎝である。６世紀後半～末頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ013（掘立柱建物）

992は２ｂ区ＳＰ558から出土した製塩土器で、体部が薄手で縦に長い器形である。８世紀と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＢ014（掘立柱建物）

出土遺物は993・994である。993は２ｂ区ＳＰ123から出土した須恵器有台坏身の底部である。高台がやや細長い形状である。７世紀後半～末頃と考えられる。994は２ｂ区ＳＰ125から出土した須恵器𤭯である。肩部の張りが弱く注口が若干突出し、体部にはヘラ連続刺突が施される。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ112（ＳＬ140）（竪穴建物）

出土遺物は995～999である。995～997は須恵器である。995は坏蓋の口縁部で、推定口径13.6㎝である。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。996・997は坏身の口縁部である。996は推定口径13.0㎝を測る。997は推定口径9.4㎝で口縁部が内傾する。996は７世紀前半、997は７世紀前半～中頃と考

えられる。998はＳＬ140（カマド）から出土した土師器鍋で、体部内面に細かいハケが施される。７世紀と考えられる。999は凝灰岩製の砥石である。表と裏の２面が使用されている。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ170（竪穴建物）

出土遺物は1000・1001である。1000は須恵器坏蓋である。推定口径12.4㎝で口縁部の稜がやや不明瞭である。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。1001は土師器甕である。推定口径14.8㎝で口縁部が屈曲し、端部を明瞭につまみ上げる。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ174（竪穴建物）

1002は須恵器坏蓋で、口縁部の稜がやや不明瞭な器形である。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ184（ＳＬ192）（竪穴建物）

出土遺物は1003・1004である。いずれもＳＬ192（カマド）から出土した。1003は須恵器坏身の体部である。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。1004は土師器甕の底部である。外面を細かいハケ、内面をヘラケズリで調整する。６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ257（竪穴建物）

出土遺物は1005～1007である。1005は須恵器鉢で、僅かに片口状となる。体部外面がタタキ調整で、２条の沈線が巡る。時期は７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。1006･1007は土師器甕である。1006は７世紀前半～中頃、1007は７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ258（竪穴建物）

1008は土師器甕の口縁部で、口縁端部を僅かにつまみ上げる。７世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ289（竪穴建物）

出土遺物は1009～1011である。1009は須恵器坏蓋である。７世紀前半と考えられる。1010・1011は凝灰岩製の砥石である。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ302（竪穴建物）

1012は須恵器坏身である。推定口径10.8㎝で口縁部が内傾する。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ309（竪穴建物）

出土遺物は1013～1015である。1013は須恵器坏身である。６世紀後半と考えられる。1014は短脚の須恵器高坏である。脚部内面に自然釉が付着する。７世紀前半と考えられる。1015は土師器甕である。口縁部の屈曲が弱く、端部を明瞭につまみ上げる。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ314（竪穴建物）

1016は須恵器坏蓋で、扁平なつまみが付く器形である。６世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ362（ＳＬ286）（竪穴建物）

出土遺物は1017～1020である。1017・1018は須恵器坏身である。1017は６世紀前半～中頃、1018は７世紀前半と考えられる。1019は土師器甕である。口縁部が直線的で端部を僅かにつまみ上げる。７世紀中頃と考えられる。1020はＳＬ286（カマド）から出土した椀形滓である。ガラス質で小さい気泡を有する。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ363（ＳＬ288）（竪穴建物）

出土遺物は1021～1024である。1021～1023は須恵器である。1021は２ｂ区ＳＰ364から出土した完形品の坏身で、口径9.2㎝を測り、底部を回転ヘラケズリする。1022はＳＬ288（カマド）から出土した坏身で、推定口径9.8㎝を測り、底部を回転ヘラケズリする。時期は共に７世紀中頃と考えられる。1023は２ｂ区ＳＰ364から出土した大型の須恵器甕の破片である。1024はＳＬ288（カマド）から出土した土師器長胴甕の体部である。体部外面と内面上部を細かいハケ、体部内面下半をヘラケズリで調整する。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ372（竪穴建物）

出土遺物は1025～1029である。1025は２ｂ区ＳＰ370から出土した須恵器坏蓋で、推定口径11.6㎝を測り、口縁部の稜が弱く沈線状である。７世紀中頃～後半と考えられる。1026は須恵器坏身である。受部径11.8㎝で、時期は７世紀前半～中頃と考えられる。1027は土師器甕の口縁部である。口縁端部を明瞭につまみ上げる。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。1028は土師器鍋の把手である。1029は凝灰質砂岩製の砥石である。４面が使用され、裏面には複数の小さい面があり様々な方向で使用されている。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ416（ＳＬ338）（竪穴建物）

出土遺物は1030～1037である。1030～1032は須恵器である。1030は坏身で、推定口径9.8㎝を測り口縁部が内傾する。1031はＳＬ338（カマド）から出土した短脚の高坏である。時期は共に７世紀中頃と考えられる。1032は長頸瓶の脚台と推定される。三角形の透孔を３方向に持つ。７世紀前半～中頃と考えられる。1033～1035は土師器甕である。1033はＳＬ338（カマド）から出土した小型の甕で、口縁部がやや屈曲し端部をつまみ上げる器形で、内外面をやや荒いハケで調整する。1034は竪穴埋土からの出土で、口縁端部を弱くつまみ上げる器形である。1035はＳＬ338（カマド）からの出土で、口縁部が直線的な器形である。1033～1035の時期は７世紀前半～中頃と考えられる。1036は安山岩製の紡錘車である。直径3.4㎝、厚さ1.5㎝とやや厚く、片面に刻み目があり擦痕が残る。1037は鉄製品で、刀子の茎の可能性がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ417（竪穴建物）

出土遺物は1038・1039である。1038は須恵器坏蓋で、６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。1039は瑪瑙製の勾玉の破片である。明赤褐色を呈しており全面を精緻に研磨している。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ577（竪穴建物）

出土遺物は1040・1041である。1040は須恵器坏蓋である。推定口径10.4㎝で、口縁部の稜がやや不明瞭である。７世紀前半～中頃と考えられる。1041は須恵器坏身である。受部径12.0㎝で、６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ622（ＳＬ399）（竪穴建物）

出土遺物は1042～1046である。1042～1044は須恵器である。1042・1043は坏身で、口径が小さく内傾する。時期は７世紀前半と考えられる。1044は高坏の坏部である。浅い皿状の坏部で、７世紀中頃～後半と考えられる。1045・1046はＳＬ399（カマド）から出土した土師器長胴甕である。1045は外面を縦方向の細かいハケ、内面を横方向のやや粗いハケで調整する。1046は外面を横や縦方向の細かいハケ、内面をヘラケズリで調整する。時期は共に７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＩ696（竪穴建物）

出土遺物は1047・1048である。1047は須恵器坏蓋で、口径11.0㎝を測る。７世紀前半～中頃と考えられる。1048は凝灰岩製の砥石である。表と両側面の３面が使用されており、側面には複数の小さい使用面がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ027（２ｂ区ＳＤ005内土坑）

出土遺物は1049～1063である。1049～1057は須恵器である。1049～1052は坏蓋で、口縁部の稜が明瞭なものとほぼ消失したものがある。1053～1056は坏身である。口径10.7㎝～11.0㎝で、1053・1054の底部にヘラ記号（線刻）がある。1057は最大径47.5㎝の大型の甕である。体部外面はタタキ調整で底部にカキメを施し、沈線が２条巡る。成形時のタタキ締めが弱く、激しく剥離した状態である。1058～1062は土師器甕である。1058は口縁部が屈曲し、端部を強くつまみ上げる。体部外面を縦方向のハケ、体部内面上半を横方向のハケ、下半をユビオサエで調整する。1059は口縁部の屈曲がやや弱い器形で、体部内面下半をヘラケズリで調整する。1060は口縁部が直線的で端部のつまみ上げをほとんど行わない器形である。1061は長胴甕である。口径19.9㎝、器高36.8㎝を測り、体部外面を縦方向のハケ、体部内面上半を横方向のハケ、下半をヘラケズリで調整する。1062は小平底の長胴甕である。口径14.8㎝、器高28.5㎝で体部外面を縦方向のハケ、底部を横方向のハケで調整し、一部がナデやユビオサエで消される。内面は口縁部がハケ、体部をナデやユビオサエで調整する。1063は土師器鍋である。推定口径34.6㎝、器高23.5㎝で直線的な口縁部を持つ。体部外面を縦方向のハケ、体部内面上半を横方向のハケ､下半をヘラケズリで調整する。これらの時期は７世紀前半～後半を中心とし、1062は７世紀後半～８世紀初頭である。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ084（土坑）

出土遺物は1064・1065である。1064は須恵器坏身である。推定口径9.1㎝で口縁部が内傾する器形である。７世紀前半と考えられる。1065は土師器甕の口縁部である。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ179（土坑）

出土遺物は1066～1069である。1066は須恵器坏身である。推定口径11.0㎝で口縁部が内傾し、底部をヘラケズリする。1067は須恵器短頸鉢で、体部に明瞭な凹凸を持つ。1066・1067は７世紀前半～中頃と考えられる。1068・1069は土師器甕である。６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ256（土坑）

出土遺物は1070・1071である。1070は笠形の須恵器坏蓋である。口縁部が屈曲して伸びる器形で、

８世紀後半と考えられる。1071は鉄滓である。気泡が少なく重量感がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ259（土坑）

出土遺物は1072～1078である。1072は須恵器坏身である。推定口径10.4㎝で体部下半をヘラケズリする。７世紀前半と考えられる。1073～1077は土師器甕である。1073は「宇田型甕」の口縁部で、口縁端部が若干肥厚し、内面に浅い凹みがあり、体部外面をきつくハケ調整をする。５世紀前半と考えられる。1074～1077は口縁部が直線的で端部をつまみ上げる器形である。７世紀前半～中頃と考えられる。1078は陶錘である。長さ5.3㎝、幅1.3㎝で細長い円筒形である。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ301（土坑）

出土遺物は1079～1081である。1079は須恵器坏身である。口径9.7㎝で底部にヘラ記号（線刻）がある。７世紀前半～中頃と考えられる。1080は須恵器長頸瓶の体部である。肩部に若干張りがあり、沈線が１条巡る。７世紀中頃と考えられる。1081は土師器鍋で、直線的な口縁部で端部をつまみ上げる器形である。体部外面を斜め方向のハケ、体部内面を横方向のハケで調整する。７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＫ426（土坑）

出土遺物は1082～1084である。1082は須恵器短頸壺である。推定口径9.4㎝で外面に降灰が付着する。８世紀中頃と考えられる。1083は土師器の「宇田型甕」である。口縁部の厚さが一定な器形で、体部外面はきつくハケ調整を施す。５世紀前半～中頃と考えられる。1084は土師器のミニチュア土器である。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ010（溝）

出土遺物は1085～1088である。1085～1087は山茶碗の碗である。1085は推定口径17.0㎝、器高5.7㎝で、口縁端部がやや外反する。12世紀中頃と考えられる。1086は底径7.0㎝で、高台がやや低く、籾殻痕がある。12世紀中頃～後半と考えられる。1087は内面の体部と底部の境界に僅かに凹みがある。12世紀後半～13世紀前半と考えられる。1088は山茶碗の小皿である。口径8.2㎝、器高2.3㎝、厚手で高台の痕跡が残る。12世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ013（溝）

出土遺物は1089～1091で、全て山茶碗の碗である。1089は底部が潰れ気味で籾殻痕があり、内面に墨痕が付着する。12世紀後半と考えられる。1090は口径13.6㎝、器高5.6㎝で口縁端部がやや尖る。13世紀後半と考えられる。1091は高台が薄く、体部が直線的にたちあがる器形で、内面に墨痕が付着する。13世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ054（溝）

出土遺物は1092～1096で、全て須恵器である。1092は坏身で、焼き歪みが激しく変形している。1093・1094は高坏である。共に透孔を３方向に有する。1095は壺の口頸部と推定される。1096は提瓶の頸部～体部である。肩部に耳が付き、体部外面はタタキ調整で自然釉が厚くかかる。これらの時期は６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ055（溝）

1097は山茶碗の碗である。推定口径16.9㎝、底径8.3㎝、器高5.0㎝で体部に丸みがあり口縁部が外反する。12世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ070（溝）

1098は笠形の須恵器坏蓋である。口径16.0㎝、器高3.2㎝を測り、口縁部がやや屈曲しながら伸びる。内面が摩耗し滑らかになっており、転用硯の可能性がある。時期は８世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ080（溝）

出土遺物は1099～1101である。1099は山茶碗の碗である。高台が小さく、体部はたちあがりが緩やかで丸みがある。14世紀後半と考えられる。1100は山茶碗の小皿である。口径8.0㎝、器高1.1ｍの扁平な器形で、底部に墨書がある。14世紀前半と考えられる。1101は古瀬戸の折縁深皿である。灰釉が底部外面を除きハケ塗りされる。14世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ219（溝）

出土遺物は1102～1104である。1102は須恵器坏身である。底部に「Ｄ」形のヘラ記号（線刻）がある。７世紀中頃と考えられる。1103は古瀬戸の花瓶の底部である。14世紀と考えられる。1104は細い円筒状の土錘である。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ290（溝）

1105は平瓦の小片である。表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）に縄目タタキがある。

【遺構名】２ｂ区ＳＤ613（溝）

1106は平瓦の小片である。表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）に縄目タタキ、端面に櫛目がある。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ239（ピット）

1107は須恵器坏身である。推定口径9.8㎝で口縁部が内傾する。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ328（ピット）

1108は瓦塔の小片と推定される。長さ6.3㎝、幅1.9㎝で裏面に剥離痕がある。８世紀末頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ413（ピット）

出土遺物は1109・1110である。1109は須恵器坏蓋である。口径11.2㎝で口縁部の稜がやや不明瞭である。７世紀前半と考えられる。1110は須恵器坏身で、口径9.1㎝である。７世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ503（ピット）

1111は須恵器の小型の鉢である。口径11.5㎝、器高4.1㎝で底部を回転ヘラケズリする。７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ521（ピット）

出土遺物は1112・1113である。1112は須恵器埦である。器壁が厚く体部に丸みがある器形である。８世紀後半と考えられる。1113は須恵器高坏である。脚部が太く、２条の沈線が巡る。８世紀と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ566（ピット）

1114は２ｂ区ＳＰ566から出土した滑石製の紡錘車である。断面形状が笠形を呈する。

【遺構名】２ｂ区ＳＰ719（ピット）

1115は須恵器坏蓋である。口径10.5㎝で口縁部の稜が不明瞭である。７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｂ区ＳＸ001（不明遺構）

出土遺物は1116～1122である。1116は須恵器坏身の底部である。外面を静止ヘラケズリし、ヘラ記号（線刻）を刻む。1117～1122は全て平瓦の小片である。表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）に縄目タタキがある。

【遺構名】２ｂ区ＳＸ163（竪穴状遺構）

出土遺物は1123～1130である。1123は須恵器坏身である。６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。1124は須恵器短頸鉢で、外面はヘラをあてて成形している。７世紀と考えられる。1125は土師器埦である。外面をユビオサエ、内面をナデ調整する。５世紀後半～６世紀と考えられる。1126～1129は土師器甕である。体部の内外面をハケ調整する。７世紀前半～後半と考えられる。1130は陶錘で、細い円筒形である。

【２ｂ区遺構外】

1131～1148は２ｂ区の遺構外から出土した遺物である。1131･1134･1137～1142･1146･1148は包含層、1132・1133・1136・1144は検出面、1135・1145は南壁面、1143は北壁面、1147は表土層から出土した。1131は土師器高坏の脚部である。外面は脚柱部をミガキ、裾部をヨコナデ、内面は脚柱部をヘラケズリ、裾部をヨコナデで調整する。４世紀後半～５世紀前半と考えられる。1132は土師器坩である。外面は口縁部～体部をミガキ、底部をヘラケズリし、内面は口縁部～体部をユビナデ、底部を板ナデで調整する。４世紀末頃～５世紀初頭と考えられる。1133～1135は須恵器坏蓋である。1133は口縁部の稜が小さく、天井部に自然釉が厚く付着する。1134は口縁部に稜が無い器形である。1135は笠形で口縁部が強く屈曲して伸びる器形である。1133は６世紀末頃～７世紀前半、1134は７世紀後半、1135は８世紀後半と考えられる。1136～1139は須恵器坏身である。1136～1138は返りのある器形で、７世紀前半～中頃と考えられる。1139は盤に近い形状の無台坏身で、７世紀中頃～後半と考えられる。1140は須恵器横瓶の口頸部と推定される。７世紀前半と考えられる。1141は須恵器鉢である。沈線の間に波状文が施され、底部にヘラ記号（線刻）がある。７世紀後半～８世紀前半と考えられる。1142は尾張型山茶碗の碗である。12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。1143～1146は土錘である。樽型のものとまっすぐな円筒形のものがある。1147は陶丸である。1148は礫岩製の紡錘車の破片で、扁平な形状と推定される。

（小島）

（８）２ｃ区（第421～429図、写真図版369～376）

【遺構名】２ｃ区ＳＢ001（掘立柱建物）

1149～1151は２ｃ区ＳＢ001から出土した遺物である。1149は北西の隅柱２ｃ区ＳＰ069の埋土中から出土した須恵器の甕で、ほぼ完形であるが口縁部のみ欠損する。口縁部が大きく外反し肩部が張り出して、注口部が粘土貼り付けによって突出し、底面には張り付け高台を有する器形である。時期は８世紀中頃と考えられる。1150・1151は、東の側柱２ｃ区ＳＰ004の埋土中から出土した。1150は土師器高坏の口縁部で、推定口径12.0㎝を測る。時期は、器形から６世紀と考えられる。1151は縦幅12.2㎝、横幅9.6㎝、厚さ4.4㎝を測る安山岩製の磨石で、表裏の両面に摩擦痕が残り、重さ818.2ｇである。２ｃ区ＳＰ004から出土した共伴遺物である1150は、前代の遺物が柱の掘方に混入した可能性が高く、1151の時期は８世紀と想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＢ003（掘立柱建物）

1152は２ｃ区ＳＢ003の西の側柱の一つである２ｃ区ＳＰ103の埋土中から出土した土錘である。樽形（細型）の形状で、一方の端部を欠損し、残存長4.6㎝、幅1.2㎝、孔径0.4㎝を測る。重さは5.7ｇである。時期は７～８世紀と想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ018（竪穴建物）

1153・1154は、２ｃ区ＳＩ018の埋土中から出土した土師器甕の口縁部である。いずれも外反する口縁部～頸部にかけてやや器壁が増し、体部の器壁が薄くなる。1153は頸部～体部の内外面にかけてハケ調整、1154は頸部～体部の外面のみにハケ調整が施される。器形と調整の特徴から、時期はいずれも８世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ117（竪穴建物）

1155～1158は２ｃ区ＳＩ117から出土した遺物である。1155～1157は埋土中から出土した須恵器で、1155・1156は坏身の底部、1157は甕の胴部である。1155の底面は静止糸切りで、わずかに墨痕が付着する。1156の底面はナデ調整後に、丁寧に高台が貼り付けされている。1157の外面にはタタキ痕が明瞭に残る。器形や調整の特徴から時期は、1155・1157は８世紀、1156は８世紀後半と考えられる。1158は２ｃ区ＳＰ109の埋土中から出土した土師器甕の口縁部である。口縁部が大きく外側に反り出す器形で、端部はやや丸みを帯びる。器壁は頸部が最も厚くなり、体部の器壁は薄くなる。体部外面と頸部～体部内面にかけてハケ調整が施される。器形や調整の特徴から時期は、８世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ231（竪穴建物）

1159・1160は２ｃ区ＳＩ231から出土した遺物である。いずれも２ｃ区ＳＩ231内２ｃ区ＳＰ282の埋土中からの出土で、1159は土錘、1160は土製の臼玉である。1159は約半分程度を欠損し、残存長3.9㎝、幅1.8㎝、孔径0.7㎝を測る。形状はやや大振りの樽形（中型）で、重さ11.6ｇである。1160は両端が平坦で中央部が膨らむ太鼓（臼）状の形状で、最大幅1.1㎝、厚さ1.0㎝、孔径0.2㎝を測る。重さは1.0

ｇである。時期は形状から判断して、1159が６～７世紀、1160が５～６世紀と想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ240（竪穴建物）

1161～1168は２ｃ区ＳＩ240から出土した遺物である。1161・1163・1164・1167・1168は埋土中から出土したもので、1161～1164は須恵器の坏蓋で、1167は土師器甕の体部、1168は土師器甕の底部である。1161は口径16.7㎝、器高3.5㎝を測るやや大振りの器形で、つまみ部は扁平な擬宝珠つまみ、天井部にはヘラ記号（線刻）が施される。器形から時期は、７世紀後半と考えられる。1163はつまみ部を含めた天井部を欠損する。器形から時期は７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。1164は口径13.0㎝、器高3.4㎝を測る小振りの器形で、つまみ部が形骸化した扁平な擬宝珠つまみで、わずかに宝珠状の形状を残したものであるが、器高が高く1161とほぼ同じ高さである。器形から時期は、８世紀前半と考えられる。1167は外面にハケ調整が施され、時期は７世紀と想定される。1168は内外面ともにナデ調整で、底面は平坦である。時期は６～７世紀と想定される。1162は２ｃ区ＳＩ240内２ｃ区ＳＰ469の埋土中から出土した須恵器の坏蓋で、口径14.8㎝、器高3.1㎝を測るやや器高の低い器形であるが、つまみ部は1161と同様に扁平な擬宝珠つまみである。器形から時期は７世紀後半～８世紀前半と考えられる。1165は２ｃ区ＳＩ240内２ｃ区ＳＰ443と２ｃ区ＳＰ474の埋土中から出土した須恵器短頸壺の口縁部～体部で、推定口径7.4㎝、残存高5.3㎝を測り、小振りの器形である。器形から判断して時期は、８世紀前半と考えられる。1166は２ｃ区ＳＩ240内２ｃ区ＳＰ474の埋土中から出土した土師器の小型甕で、口縁部の一部が欠損するだけでほぼ完形である。口縁部が外側に反り出す器形で、端部はやや丸みを帯びる。口径10.4㎝、底径5.0㎝、器高9.6㎝を測り、体部外面と口縁部内面にハケ調整、体部の中央よりやや上方に外面から穿孔が施されている。時期は器形と調整から判断して、８世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ447（竪穴建物）

1169～1182は２ｃ区ＳＩ447から出土した遺物である。1169～1171・1174・1175・1177・1179～1182は埋土中から出土したもので、1169～1175は須恵器、1177・1178は製塩土器、1179～1182は灰釉陶器である。1169は坏蓋の口縁部で、天井部を欠損する。天井部と口縁部が区画され、口縁端部が直にたちあがり、器高が低い（残存器高2.0㎝）器形で、時期は８世紀中頃～後半と考えられる。1170は坏身で、推定口径14.0㎝、推定底径7.4㎝、器高3.6㎝を測る。底部～口縁部にかけて丸みの無い直な傾斜で立ち上がる器形で、底面にはヘラ記号（線刻）がある。時期は８世紀後半と考えられる。1171は埦で、口径13.2㎝、底径6.2㎝、器高4.2㎝を測る。体部に丸みを有し口縁端部が外反する器形で、底面は回転糸切り痕が明瞭に残る。1174は台付長頸瓶の底部（台部）で、底径9.6㎝を測る。外面に自然釉が付着し、時期は８世紀後半～末頃と考えられる。1175は甕の体部で、外面にタタキ痕が残る。時期は８世紀と考えられる。1177は脚部片で、残存長3.7㎝を測る。時期は形状から８世紀と考えられる。1179～1181は埦で、いずれも内面施釉、体部に丸みを有し口縁端部がやや外反する器形で、底面には高台が付いている。1179は口径16.8㎝、底径7.8㎝、器高5.2㎝、1180は口径15.0㎝、底径7.7㎝、器高5.1㎝、1181は推定口径13.6㎝、推定底径7.0㎝、器高4.1㎝を測る。1180の底面には墨痕が見られる。1182は皿の底部で、内面施釉、推定底径7.4㎝を測る。1179～1182の時期は９世紀前半と考えられる。1172は２ｃ区ＳＩ447内２ｃ区ＳＰ593の埋土中から出土した須恵器埦の底部で、底面に回転糸切り痕が明瞭に残る。時期は８世紀後半～９世紀初頭と考えられる。1173・1176・1178は２ｃ区ＳＩ447内２ｃ区ＳＰ566の埋土中から出土した遺物である。1173は須恵器の壺か瓶の体部下半～底部で、外面

にヘラ記号（線刻）が見られる。時期は８世紀と考えられる。1176は土師器甕の底部で、底径6.3㎝を測り、内外面ともにハケ調整が施される。時期は８世紀中頃と考えられる。1178は脚部片で、残存長6.3㎝を測る。時期は形状から８世紀と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ517（竪穴建物）

1183～1187は２ｃ区ＳＩ517から出土した遺物である。1184は埋土中から出土した土師器甕の口縁部で、「く」の字状に口縁部がしっかりと外反し、端部が整形される。焼成がやや不良で内外面ともに灰白色を呈し、内外面ともにナデ調整を基本とする。時期は７世紀中頃～後半と考えられる。1183・1185は２ｃ区ＳＩ517内２ｃ区ＳＰ605の埋土中から出土した遺物である。1183は須恵器平瓶の口縁部で、推定口径7.0㎝、推定基部径3.8㎝を測り、外面に２条の沈線が巡る。1185は土師器甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整を基本とする。いずれも時期は７世紀後半と考えられる。1186は２ｃ区ＳＩ517内２ｃ区ＳＰ604と２ｃ区ＳＰ605の埋土中から出土した土師器鍋の口縁部で、推定口径33.0㎝を測る。体部外面と口縁部～体部内面にハケ調整が施され、時期は７世紀前半～中頃と考えられる。1187は２ｃ区ＳＩ517内２ｃ区ＳＰ608の埋土中から出土した土師器鍋の把手（逆鍵状）で、時期は７世紀と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ666（竪穴建物）

1188は２ｃ区ＳＩ666内２ｃ区ＳＰ1135の埋土中から出土した遺物である。須恵器の坏蓋で、口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。大振りな器形で、口径22.0㎝、器高4.0㎝を測り、つまみ部は扁平な宝珠形である。時期は８世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ667（竪穴建物）

1189～1194は２ｃ区ＳＩ667から出土した遺物である。1192・1194は埋土中から出土した土師器と山茶碗である。1192は土師器鍋の把手(逆鍵状)で､時期は７世紀と考えられる。1194は山茶碗の碗で､時期は15世紀前半と考えられ、周辺遺構などからの混入と想定される。1189は２ｃ区ＳＩ667内２ｃ区ＳＰ1109の埋土中から出土した須恵器の坏蓋で、口径15.7㎝、器高3.5㎝を測り、つまみ部は扁平な擬宝珠つまみである。時期は７世紀後半と考えられる。1190は２ｃ区ＳＩ667内２ｃ区ＳＰ1117の埋土中から出土した須恵器の坏身で、推定口径18.0㎝、推定底径13.0㎝、器高4.2㎝を測る大振りな器形である。底面には高台が貼り付けされる。時期は７世紀後半と考えられる。1191は２ｃ区ＳＩ667内２ｃ区ＳＰ1115の埋土中から出土した須恵器甕の体部で、外面にはタタキ痕、内面にユビオサエの痕跡が残る。時期は７～８世紀と考えられる。1193は２ｃ区ＳＩ667内２ｃ区ＳＰ1109の埋土中から出土した製塩土器の口縁部で、器壁は0.2㎝と薄く、推定口径11.0㎝を測る。時期は形状から７世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ698（竪穴建物）

1195・1196は２ｃ区ＳＩ698から出土した遺物である。1195は埋土中から出土した須恵器高坏の脚部で、時期は７世紀中頃と考えられる。1196は２ｃ区ＳＩ698内２ｃ区ＳＰ750の埋土中から出土した須恵器鼈の体部～底部で、体部は丸みを持つが底面は平底となる。時期は７世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ990（竪穴建物）

1197・1198は２ｃ区ＳＩ990の埋土中から出土した遺物である。1197は須恵器の坏身で、推定口径12.8㎝、推定底径10.0㎝、器高3.4㎝を測る。口径と底径が広くて器高が低い器形で、底面には高台が貼り付けられる。外面全面に施釉され、時期は８世紀中頃と考えられる。1198は土師器の甕の体部で、外面にハケ調整が施される。時期は８世紀と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ1000（竪穴建物）

1199～1203は２ｃ区ＳＩ1000から出土した遺物である。1199は埋土中から出土した土師器坩の口縁部で、時期は５世紀と考えられる。1200は２ｃ区ＳＩ1000内２ｃ区ＳＰ1065の埋土中から正位の位置で出土した土師器の坩である。完形で、口径8.0㎝、器高13.5㎝を測る。内外面ともに口縁部はヨコナデ、体部外面はミガキ、底部外面はヘラケズリ、体部内面はナデで調整される。時期は４世紀末頃～５世紀前半と考えられる。1201～1203は２ｃ区ＳＩ1000内２ｃ区ＳＫ1050の埋土中から出土した土師器で、1201・1202は高坏の脚部、1203は台付甕の台部である。いずれの時期も５世紀と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＩ1049（竪穴建物）

1204～1207は２ｃ区ＳＩ1049から出土した遺物である。1204・1205は２ｃ区ＳＩ1049内２ｃ区ＳＰ1071の埋土中から出土した須恵器である。1204は坏身で、推定口径12.3㎝、推定底径6.2㎝、器高3.8㎝を測り、底面は静止ヘラケズリである。時期は７世紀後半と考えられる。1205は坏身の底部で、推定底径12.0㎝を測る大振りな器形で、底面には高台が貼り付けられる。時期は７世紀後半～８世紀前半と考えられる。1206・1207は２ｃ区ＳＩ1049内２ｃ区ＳＰ1069の埋土中から出土した土師器甕の口縁部である。1206は推定口径20.2㎝を測る大振りな器形で、内外面ともにハケ調整を基本とし、時期は７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。1207は推定口径11.0㎝を測る小振りな器形で、外面はハケ調整を基本とし、時期は７世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ030（土坑）

1208は２ｃ区ＳＫ030の埋土中から出土した須恵器の坏身である。推定口径18.4㎝、推定底径12.8㎝、器高3.5㎝を測り、底面は回転ヘラケズリである。体部下半の底面に近い位置に稜が見られ、口縁部～体部と底部を区画する器形で、内外面の一部に自然釉が付着する。時期は８世紀中頃～後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ277（土坑）

1209は２ｃ区ＳＫ277内２ｃ区ＳＰ591の埋土中から出土した須恵器の坏蓋である。推定口径12.6㎝、器高3.2㎝を測る小振りの器形で、つまみ部は宝珠つまみである。時期は７世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ767（土坑）

1210～1215は２ｃ区ＳＫ767の埋土中から出土した遺物である。1210～1214はいずれも土師器の高坏の脚部で、いずれも裾部が外側に向かって平坦に開く器形で、内面に絞り痕が残る。いずれも坏身部を欠損するため不確定ではあるが、時期は５世紀後半～６世紀と考えられる。1215は土師器甕の口縁部で、推定口径13.5㎝、頸部の器壁が厚くて直立し口縁端部がわずかに外反する器形である。外面にハケ調整が施され、内面にユビオサエ痕が残る。時期は５世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＫ771（土坑）

1216～1222は２ｃ区ＳＫ771の埋土中から出土した遺物である。1216･1217は須恵器甕の体部である。内外面ともにナデ調整を基本とし、外面にわずかに工具痕が残る。大甕と推定でき、時期は５世紀と考えられる。1218は土師器の高坏で、口径13.4㎝、脚部底径9.3㎝、器高12.3㎝を測り、全体的に器壁がとても薄い成形である。坏部の外面はヨコナデとハケ､内面はヨコナデとナデによる調整が施され、脚部の外面はミガキ、内面は裾部にハケ調整が施され、絞り痕が残る。脚部の透孔は円形で３方向に配される。時期は５世紀前半～中頃と考えられる。1219は土師器の高坏の脚部で、外面はミガキ、内面は裾部にナデ・ヘラケズリで整形されるが中央に絞り痕が残る。時期は５世紀と考えられる。1220も土師器の高坏で、口径14.0㎝、脚部底径9.1㎝、器高9.0㎝を測り、坏部はロクロ未使用で須恵器を模倣したような器形である。坏部は口縁部と体部を稜で区画し、外面は上半がヨコナデ、下半がヘラケズリ、内面は上半が回転ナデ、下半がナデで調整される。脚部はロクロ使用で、内外面ともに回転ナデで絞り痕が残る。時期は５世紀前半～中頃と考えられる。1221は土師器の甕の口縁部で、推定口径15.2㎝、内外面ともにヨコナデ・ハケによる調整を基本とする。時期は５世紀と考えられる。1222は土師器の台付甕の底部～台部で、内外面ともにナデ調整を基本とし台部の内面にユビオサエの痕跡が残る。時期は５世紀前半と考えられる。1221と1222は同一個体であった可能性も考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ268（溝）

1223～1226は２ｃ区ＳＤ268の埋土中から出土した遺物である。1223は須恵器の坏身の体部～底部で、時期は５世紀後半～６世紀初頭と考えられる。1224は土師器の高坏の坏部で、時期は４世紀末頃～５世紀と考えられる。1225は土師器の高坏の脚部で、器壁がとても厚い成形である。時期は４～５世紀と考えられる。1226は台付甕の台部と考えられる。甕部との接合部に粘土塊の痕跡が窺えることから高坏とも想定されるが、台部の器形から台付甕と判断した。時期は５世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ530（溝）

1227～1238は２ｃ区ＳＤ530の埋土中から出土した遺物である。1227は須恵器の高坏の脚部で、透孔が２段３方向に配されるが、上下の段で方向がずれるように配置される。時期は５世紀後半～６世紀と考えられる。1228は須恵器甕の口縁部で、外反する口縁は口径21.7㎝を測り、外面には櫛描波状文が上下２段の区画に分かれて巡る。時期は６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。1229は須恵器甕の口縁部の破片で、外面に櫛描波状文が施文され、内外面ともに自然釉が付着する。時期は７世紀前半と考えられる。1230は甕の体部～底部で、口縁部を欠損し、残存器高35.0㎝を測る。外面にはタタキ痕が良く残るが、焼成がやや不良で外面の剥離が著しい。内面はナデ調整である。時期は６世紀後半～７世紀と考えられる。1231は甕の体部破片で、外面にタタキ痕がよく残る。時期は７世紀と考えられる。1232は土師器の高坏の坏部下半～脚部、1233は土師器の甕ないしは壺の底部で、いずれも時期は６～７世紀と考えられる。1234は土師器の甕の口縁部で、推定口径21.6㎝と大振りで、内外面ともにハケ調整を基本とする。時期は７世紀前半と考えられる。1235は台付甕の体部で、外面はハケ調整､内面は摩滅して不明瞭ではあるがヘラケズリが施される。時期は５世紀前半～中頃と考えられる。1236・1237は土師器甕の口縁部で、1236は推定口径17.8㎝、1237は推定口径16.3㎝を測る。いずれも内外面ともにハケ調整が施され、時期は７世紀前半～中頃と考えられる。1238は土師器甕の体部で、内外面ともにハケ調整が施され、時期は６～７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ693（溝）

1239･1240は２ｃ区ＳＤ693の埋土中から出土した遺物である。1239は須恵器の坏身で、口径10.7㎝、底径3.7㎝、器高4.0㎝を測る。口縁部と体部を受部で区画し、たちあがりはやや内傾する器形である。1240は須恵器甕の口縁部で、外反する口縁は推定口径58.4㎝を測り、大型の大甕である。外面には櫛描波状文が上下２段の区画に分かれて巡る。いずれも時期は６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ700（溝）

1241～1245は２ｃ区ＳＤ700の埋土中から出土した遺物である。1241は須恵器の高坏の坏部下半～脚部上半で、残存高7.4㎝を測る。時期は７世紀中頃～後半と考えられる。1242は須恵器の瓶の底部で、底面に厚さ1.2㎝を測る厚みのあるしっかりとした高台が貼り付けられる。時期は８世紀後半と考えられる。1243は腰帯具の巡方で、石製である。石材にはむらなく緻密で黒色の色あいが均一（表面:黒 Ｎ1.5/０、裏面:黒 Ｎ２/０）な硬質の粘板岩が使用される。形状は正方形に近いやや横長の方形と推定され、残存高3.1㎝、残存幅3.2㎝、厚さ0.7㎝を測り、重さ13.0ｇである。無孔で、表面は磨かれて角を丁寧に面取り仕上げされ、裏面は磨きが無く潜り穴が見られる。時期は、腰帯具田中編年第Ⅳ期（田中広明2003）に相当し、８世紀後半～10世紀後半と考えられる。1244は山茶碗の碗で、推定口径12.5㎝、底径3.8㎝、器高3.4㎝を測り、底面は回転糸切りで高台が貼り付けられる。時期は14世紀後半と考えられる。1245は古瀬戸の四耳壺の体部で、推定体部径26.0㎝を測る。外面に櫛目４条が巡り、時期は13世紀後半と考えられる。1244・1255は、何らかの要因で中世（13世紀）以降に混入した遺物と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＤ770（溝）

1246～1255は２ｃ区ＳＤ770の埋土中から出土した遺物である。1246は須恵器𤭯の注口部の破片で、時期は８世紀前半と考えられる。1247は須恵器瓶の口縁部で、推定口径6.0㎝を測り、時期は８世紀後半～９世紀と考えられる。1248は須恵器甕の破片で、外面に沈線と櫛描波状文が施文され、時期は７～８世紀と考えられる。1249は土師器甕の口縁部～体部上半で、体部外面にハケ調整が施される。口縁部外面に煤が付着し、時期は７世紀前半と考えられる。1250は土師器甕の体部で器壁が薄く、外面は煤が付着して調整は不明である。時期は７～８世紀と考えられる。1251は山茶碗の皿で、推定口径8.6㎝、器高0.9㎝を測る。底面は回転糸切りで、板目状圧痕が残り、時期は14世紀中頃と考えられる。1252は山茶碗の碗の底部で、底面に高台が貼り付けられ、内面に自然釉が付着し内外面に墨痕らしき痕跡が残る。時期は14世紀中頃と考えられる。1253は古瀬戸の平碗の破片で、内外面に施釉される。時期は15世紀と考えられる。1254は古瀬戸の内耳鍋の口縁部で、推定口径22.0㎝を測る。口縁端部～内面にかけて錆釉が施される。1255は中世土師器の羽釜の口縁部で、推定口径24.0㎝を測り、口縁端部に穿孔が施される。1254・1255の時期は15世紀中頃と考えられる。1251～1255については、何らかの要因で中世（14世紀以降）に周辺の遺構などから混入した可能性が考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ293（ピット）

1256は２ｃ区ＳＰ293の埋土中から出土した須恵器の坏身で、口縁部を一部欠損するがほぼ完形である。口径16.4㎝、底径11.2㎝、器高5.7㎝を測り、やや大振りな器形である。底面は回転糸切り後に高台が貼り付けられ、底面の周囲を含めて丁寧にナデ調整が施される。外面の一部に自然釉が見られ、

時期は８世紀末頃～９世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ294（ピット）

1257は２ｃ区ＳＰ294の埋土中から出土した土師器甕の体部破片で、内外面ともにハケ調整が施される。時期は６～７世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ348（ピット）

1258は２ｃ区ＳＰ348の埋土中から出土した土錘である。形状は寸胴形（細型）で、中央から約半分程度を欠損し、残存長2.1㎝、幅0.9㎝、孔径0.3㎝を測る。重さは1.5ｇである。時期は６～７世紀と想定される。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ363（ピット）

1259は２ｃ区ＳＰ363の埋土中から出土した須恵器の有蓋高坏の坏部下半である。坏部に受部の痕跡、脚部と接合する基部に方形の透孔が３方向に配されていた痕跡が残る。時期は６世紀後半と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＰ1017（ピット）

1260は２ｃ区ＳＰ1017の埋土中から出土した土師器鍋の把手（逆鍵状）である。時期は６～７世紀と考えられる。

【遺構名】２ｃ区ＳＸ723（竪穴状遺構）

1261～1264は２ｃ区ＳＸ723の埋土中から出土した遺物である。1261は須恵器の坏蓋で、口縁部を欠損する。焼成は不良で全体に褐色を呈するが、天井部外面に「コ」の字状のヘラ記号（線刻）が見られる。つまみ部はしっかりとした宝珠つまみで、時期は８世紀後半と考えられる。1262は陶錘で、両方の端部をわずかに欠損する。形状は中央部にふくらみを持つ提灯形で、残存長3.9㎝、最大幅1.3㎝、孔径0.3㎝を測る。重さは5.0ｇである。時期は７世紀と想定される。1263は焼骨である。形状は一面が扁平となる不整形の塊で、縦幅3.1㎝、横幅3.1㎝、厚さ1.7㎝を測る。重さは5.5ｇである。小破片であるため、獣骨か人骨かも含めて部位と時期も不明である。1264は平瓦の破片で、表面（凹面）に布目痕、裏面（凸面）にタタキ痕が残る。時期は７～８世紀と考えられる。

【２ｃ区遺構外】

1265～1272は２ｃ区遺構外から出土した遺物である。1265は包含層から出土した須恵器の坏身の底部、1266は表土掘削の際に出土した須恵器の坏身の底部で、いずれも底面にヘラ記号（線刻）が施される。1267は包含層から出土した須恵器の短頸壺で、口径5.0㎝、底径5.8㎝、器高6.1㎝を測り、小型である。口縁部～体部上半の一部を欠損するが、ほぼ完形で、外面と内面の一部に自然釉が付着する。1268は表土掘削の際に出土した須恵器の甕で、口縁部を欠損する。残存器高11.9㎝、体部幅4.1㎝を測る。体部は丸みを持つ器形で、注口部は突出せず、肩部に沈線が巡り、底面は丸底である。1269は表土掘削の際に出土した須恵器の平瓶で、口縁部と体部～底部の一部を欠損する。残存器高11.9㎝、体部（肩部）幅9.3㎝を測る。底面に「×」状のヘラ記号（線刻）が見られる。1270は包含層から出土した灰釉陶器の皿で、口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。口径15.4㎝、底径7.5㎝、器高2.6㎝を測る。

内面は施釉、底面は回転ヘラ削り後に高台が貼り付けられ、丁寧に回転ナデによって調整され、不明瞭ではあるが「×」状のヘラ記号（線刻）が施されている。1271は包含層から出土した陶錘である。形状は寸胴形（細型）で、一方の端部を欠損する。残存長4.3㎝、幅1.1㎝、孔径0.5㎝を測る。重さは4.0ｇである。1272は表土掘削後の壁面整形の際に出土した土製の紡錘車で、上面の半分程度を欠損する。やや大型で、上面径4.5㎝、下面径5.2㎝、厚さ2.4㎝を測る。重さは59.5ｇである。時期は器形・成形・調整などの特徴から、1265は６～７世紀、1266は７世紀中頃、1267は８世紀末頃～９世紀初頭、1268は７世紀中頃～後半、1269は７世紀末頃～８世紀初頭、1270は９世紀後半、1271は７世紀、1272は５世紀と考えられる。

（基峰）

（９）２ｄ区（第430図、写真図版377）

【遺構名】２ｄ区ＳＫ014（土坑）

1273は東濃型の山茶碗の碗である。口縁端部の器壁が薄く外反する器形である。時期は14世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ018（土坑）

1274は東濃型の山茶碗の碗である。口縁端部が外反する器形である。時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＫ107（土坑）

1275は東濃型の山茶碗の碗である。口縁端部が外反して玉縁状に作られている。時期は14世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ022（溝）

出土遺物は1276～1278で全て尾張型山茶碗の碗である。高台が低く体部は直線的に広がる。時期は1276が12世紀後半～13世紀前半、1277が12世紀後半、1278が13世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ047（溝）

1279は山茶碗の碗で、口縁端部が肥厚して外反する。時期は13世紀中頃と考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ062（溝）

出土遺物は1280～1285である。1280・1281は土師器の高坏で、同一個体の可能性がある。坏部上半は直線的に広がり、裾部は内湾志向を僅かに残しつつ開脚する。1282～1284は土師器の甕である。1282と1283はS字状口縁甕で、同一個体の可能性がある。口縁部は外に開き、端部に面を持たない。体部は斜め方向のハケ調整である。1284はくの字状口縁甕で、口縁端部をやや丸く仕上げる。1285は脚台部で、器壁が薄く端部を内側に折り返す。時期は全て３世紀後半～４世紀前半と考えられる。

【遺構名】２ｄ区ＳＤ119（溝）

1286は須恵器高坏の脚部である。時期は７世紀中頃と考えられる。

【２ｄ区遺構外】

1287～1289は２ｄ区の遺構外からの出土遺物である。1287は下層確認のために北壁沿いに設定したトレンチから、1288・1289は調査に伴う事前確認の際に出土した。1287は土師器高坏の口縁部で坏部が椀形のものである。時期は３世紀後半～４世紀と考えられる。1288は瓦の小片で、平瓦と推定される。片面に布目が残り、薄手で焼成が悪く土師質である。時期は７世紀後半以降と考えられる。1289は陶器の碗で内外面に灰釉を塗る。時期は18～19世紀と考えられる。

（小島）

（10）２ｅ区（第431～435図、写真図版378～381）

①　１面（上層）

【遺構名】２ｅ区１面ＳＫ070（土坑）

1290は２ｅ区１面ＳＫ070から出土した有台坏身の底部片である。焼成不良のため灰白色を呈する。時期は７世紀中頃～８世紀中頃である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ023（溝）

1291は２ｅ区１面ＳＤ023から出土した土師器の鍋の把手（逆鍵状）である。残存高5.0㎝、幅3.8㎝を測る。手捏ねのため指オサエ痕が明瞭に残る。時期は６～７世紀と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ029（溝）

1292は２ｅ区１面ＳＤ029から出土した須恵器の坏蓋片である。口縁端部が折り返される。時期は８世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ030（溝）

1293～1308は２ｅ区１面ＳＤ030から出土した遺物である。1293・1294は須恵器である。1293は坏蓋である。天井部と口縁部境の陵はしっかりしており、口縁部は少し外反する。時期は７世紀中頃～後半と思われる。1294は高坏の脚部である。回転ナデ調整が施され、内外面ともに自然釉が付着する。時期は７世紀後半～８世紀前半と思われる。1295は灰釉陶器の皿と思われる。角高台を有し、内面は使用により摩滅している。見込み部分を除き薄っすらと灰釉がかかるが、施釉か自然降灰かは判らない。時期は９世紀中頃～後半と思われる。1296は灰釉陶器の埦の高台片である。三角高台を有し、見込み部分を除き施釉される。時期は11世紀後半である。1297～1306は尾張型の山茶碗の碗である。1297の内面には煤痕がみられる。1298～1302の高台は丁寧にナデ付けされているが、糸切痕は残っている。1300を除き、高台端部には砂粒痕･籾殻痕が残る。1302～1306の山茶碗の胎土は砂粒を多く含み、高台は潰れ気味である。時期は、1298・1299は12世紀前半、1297・1300・1301は12世紀中頃、1302～1306は13世紀前半である。1307は青磁碗片である。時期は15世紀と思われる。1308は平瓦である。厚さ2.5㎝で表面（凹面）には布目痕、裏面（凸面）には縄目タタキ痕が見られる。裏面（凸面）は青灰色を呈する。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ050（溝）

1309～1312は２ｅ区１面ＳＤ050から出土した遺物である。1309･1310は尾張型の山茶碗の碗である。1309は内面に漆の付着がある。潰れ気味の高台端部には籾殻痕が残る。1310の高台も潰れ気味で端部には籾殻痕が残る。高台の一部は剥離している。時期は1309･1310とも12世紀後半～13世紀前半である。1311は平瓦である。厚さ2.0㎝で表面（凹面）には布目痕、裏面（凸面）には縄目タタキ痕が見られる。両面とも黒色を呈し、しっかり焼き締められている。時期は７～８世紀と思われる。1312は丸瓦である。表面（凹面）には縄目タタキ痕、裏面（凸面）には布目痕が残っているが、摩滅しているので不明瞭である。端面・側面はヘラケズリが施されている。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ052（溝）

1313は２ｅ区１面ＳＤ052から出土した須恵器の高坏の脚部片である。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ062（溝）

1314は２ｅ区１面ＳＤ062から出土した土師器の甕である。口縁部と体部の境に沈線が１条巡る。口縁部はヨコナデされ、口縁端部はつまみ上げられる。体部内面はヨコハケ調整である。時期は７世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ064（溝）

1315～1321は２ｅ区１面ＳＤ064から出土した遺物である。1315は須恵器で有台坏の底部片である。高台内側は丁寧にナデ付けされている。時期は８世紀前半と思われる。1316～1321は尾張型の山茶碗の碗である。1319は焼成不良で橙色を呈する。1316～1318の内面は使用により摩滅している。高台端部の籾殻痕は1316～1319ではほとんど見られないが、1320・1321には多く見られる。1320の三角高台はしっかりしているが、1321の高台は潰れている。1316～1318の底部外面の糸切痕はナデ消しされているが、1319～1321には残っている。時期は、1316・1319は12世紀前半、1317・1320は12世紀中頃、1321は12世紀後半～13世紀前半に属する。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ065（溝）

1322～1324は２ｅ区１面ＳＤ065から出土した遺物である。1322は須恵器の広口瓶の口縁部である。口縁端部が外反し外側に開く器形である。外側には２条の沈線が施される。時期は７世紀中頃と思われる。1323は尾張型の山茶碗の小皿である。胎土はやや荒めである。時期は13世紀前半と思われる。1324は尾張型の山茶碗の碗である。底部内面には重ね焼き高台痕、底部外面には糸切痕が残る。時期は12世紀中頃である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ089（溝）

1325は２ｅ区１面ＳＤ089から出土した須恵器の甕である。口縁部は面取りされ直下に段を有する。外面はタタキ、内面はナデ調整が施される。時期は６世紀後半～７世紀初頭と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ094（溝）

1326・1327は２ｅ区１面ＳＤ094から出土した遺物である。1326は尾張型の山茶碗の小碗である。

高台は潰れている。時期は13世紀である。1327は尾張型の山茶碗の碗である。三角高台の端部には籾殻痕が残る。胎土は砂粒を多く含む。時期は13世紀前半である。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ095（溝）

1328は２ｅ区１面ＳＤ095から出土した須恵器の坏蓋片である。天井部外面はヘラケズリが施される。口縁は折り返されている。時期は８世紀前半～中頃と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＤ113（溝）

1329は２ｅ区１面ＳＤ113から出土した須恵器の広口壺である。外面はタタキ、内面はナデ調整が施される。時期は７～８世紀と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＰ099（ピット）

1330は２ｅ区１面ＳＰ099から出土した須恵器瓶の口縁部である。外面は回転ナデ調整が施される。口縁端部外面が面取りされ、直下に段を有する。時期は６～７世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ｅ区１面ＳＸ053（不明遺構）

1331は２ｅ区１面ＳＸ053から出土した土師器のS字状口縁甕の口縁端部である。時期は４世紀後半～末頃であるが、２ｅ区１面ＳＸ053の上層から出土しており、後世の混入と思われる。

【２ｅ区１面遺構外】

1332～1346は２ｅ区１面の遺構外から出土した遺物である。1332は須恵器の坏蓋である。天井部外面の２分の１に回転ヘラケズリが施される。天井部と口縁部境の陵はなく、沈線状となっている。時期は７世紀中頃～後半と思われる。1333は土師器甕の口縁部である。残存する体部の器壁は薄く仕上げられているが、胎土には砂粒を多く含む。体部は荒いハケで調整される。時期は８世紀後半と思われる。1334～1338は尾張型の山茶碗の碗である。1334の三角高台は丁寧に取り付けられているが焼割れし、底部外面の糸切痕はナデ消しされている。1335の内面は使用により摩滅し、高台の先端は丸くなっている。底部外面には糸切痕が残る。1336・1337の内面は使用により摩滅している。1336の底部外面には糸切痕が残る。1336・1337ともに高台は潰れているが、1336の高台端部には籾殻痕、1337には砂粒痕が残る。1338の底部内面にはうすく指圧痕が見られ、潰れ気味の高台端部には籾殻痕が残り、底部外面には墨書がみられる。時期は、1334は11世紀中頃～後半、1335は12世紀前半、1336・1337は12世紀中頃、1338は12世紀後半～13世紀前半と思われる。1339～1342は東濃型の山茶碗の碗である。全ての底部外面には糸切痕が残り、高台端部には籾殻痕が多くみられる。1339の体部は直線的に開き、三角高台はやや雑に取り付けられる。1340～1342の底部内面には指圧痕が残る。1340の底部外面には板目状圧痕が残る。1341の底部外面には墨書（１条の直線）がみられる。時期は、1339は13世紀前半、1340は13世紀後半、1342は14世紀前半である。1343は加工円盤である。縦幅2.4㎝、横幅2.7㎝、厚さ1.0㎝を測り、黄瀬戸の碗を加工したものとみられる。時期は16世紀以降と思われる。1344は砥石である。縦幅3.8㎝、横幅4.0㎝、厚さ3.0㎝を測り、重量45.4ｇである。表面・裏面の２面を使用しおり、凝灰岩製である。遺構外出土のため共伴遺物からの時期の推定ができないが、他調査区から出土した砥石から考えて、７～９世紀と思われる。1345・1346は平瓦である。1345の表面（凹面）は摩滅しているが、裏面（凸面）には浅く縄目タタキ痕が残る。1346では表面（凹面）に布目痕が浅く残り、裏面（凸

面）は摩滅により確認できない。共に厚さ1.6㎝を測る。時期は７～８世紀と思われる。

（後藤秀）

② ２面（下層）

【遺構名】２ｅ区２面ＳＩ121（竪穴建物）

1347～1350は２ｅ区２面ＳＩ121から出土した遺物である。1347～1349は須恵器の高坏である。1347は体部下方に２条の沈線が巡り、内外面ともに降灰がみられる。1348は大型高坏の坏部で、口縁下に隆起した線が巡り、外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が施される。1349は高坏の脚部片で、回転ヘラケズリ後に回転ナデが施される。時期は、1347・1348は７世紀前半、1349は７世紀中頃と思われる。1350は土師器甕の口縁部である。壁際溝（壁溝）の埋土中から出土した。口縁端部はつまみ上げられ、口縁部外面はナデ、体部外面は荒いナナメハケ、口縁部内面および体部内面は荒いヨコハケで調整される。時期は７世紀前半と思われる。

【遺構名】２ｅ区２面ＳＤ049（溝）

1351は２ｅ区２面ＳＤ049から出土した東濃型の山茶碗の小皿である。底部内面には指圧痕が残る。また、体部との境に浅い凹みが一巡する。底部外面には墨書がみられる。時期は14世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ｅ区２面ＳＤ118（溝）

1352･1353は２ｅ区２面ＳＤ118から出土した土師器である。1352は壺の口縁部で、有段口縁である。口縁部が逆八字に伸び、中間に段を有し、口縁端部に向かって斜め上方に伸びる。口縁部外面の上段には羽状の刺突がみられる。時期は４世紀後半と思われる。1353は壺の底部で、内面は青灰色を呈する。時期は５～６世紀と思われる。

【遺構名】２ｅ区２面ＳＤ119（溝）

1354は２ｅ区２面ＳＤ119から出土した大型の須恵器の坏蓋片である。端部がやや外反して折り曲げられる。時期は８世紀中頃と思われる。

【遺構名】２ｅ区２面ＳＤ120（溝）

1355は２ｅ区２面ＳＤ120から出土した尾張型の山茶碗の碗である。底部内面には重ね焼き高台痕がみられるが、使用により摩滅している。高台はヘラで丁寧に仕上げられ、高台の端部にはわずかに砂粒痕が見られる。時期は12世紀前半である。

【２ｅ区２面遺構外】

1356～1361は２ｅ区２面の遺構外から出土した遺物である。1356は須恵器の壺の底部である。底部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデが施される。時期は７世紀前半～中頃と思われる。1357は須恵器の鉢で、鉄鉢を模したものである。体部下方には回転ヘラケズリが施される。時期は８世紀前半である。1358は須恵器の鍋である。口縁端部は面取りされ、すぐ下にはヘラケズリによる凸線が巡る。体部はタタキ調整で、１条の沈線が施される。時期は７世紀後半～８世紀前半と思われる。1359は土師器の台付甕の台部である。時期は４～５世紀と思われる。1360は尾張型の山茶碗の小皿である。底

部内面に指圧痕、底部外面には摩滅痕が見られる。時期は13世紀前半である。1361は形状から鞴の羽口と思われる。通風管の直径5.9㎝、内径は2.4㎝と推定される。外面と破断面の一部に鉄滓の付着がみられる。時期は７～８世紀と思われる。

（後藤秀）

（11）Ｒａ区（第436～439図、写真図版382～384）

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ002（掘立柱建物）

1362はＲａ区ＳＢ002（Ｒａ区ＳＰ129）から出土した土錘である。樽形（細型）形状で、一方の端部を欠損する。重さ5.7ｇである。時期は６世紀後半～７世紀前半と想定される。

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ003（掘立柱建物）

1363はＲａ区ＳＢ003（Ｒａ区ＳＰ188）から出土した土師器の甕の口縁部である。口縁の端部が直に立ち上がり、頸部の器壁がやや厚みをもつ器形で、内面にハケ調整が残る。時期は器形・調整などの特徴から、６世紀後半～７世紀前半と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＢ008（掘立柱建物）

1364～1368はＲａ区ＳＢ008出土の遺物である。1364は１ｂ区ＳＰ181から出土した須恵器の坏身の底部で、底面にヘラ記号（線刻）が見られる。1365～1368は木製の大型部材で、針葉樹のヒノキを加工した礎板である。1365･1366はＲａ区ＳＰ025の底面から出土したもので、1365は残存長45.6㎝、幅8.3㎝、厚さ2.8㎝、1366は残存長39.6㎝、幅6.1㎝、厚さ2.5㎝を測り、本来は一つの板材である。1367・1368は１ｂ区ＳＰ183からの出土である。1367は残存長55.8㎝、幅6.9㎝、厚さ4.0㎝の板材で、とても脆くて残存状態がよくない。1368は残存長55.5㎝、幅20.6㎝、厚さ18.6㎝を測り、形状から柱根であった可能性も考えられる。時期は、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ043（竪穴建物）

1369・1370はＲａ区ＳＩ043から出土した遺物である。1369はＲａ区ＳＩ043の底面にあるＲａ区ＳＰ044の埋土中から出土した須恵器の坏身の底部である。1370は埋土中から出土した土師器の甕で、体部下半～底部を欠損する。頸部の器壁がやや厚くて、外反口縁で体部に膨らみをもつ器形で、内外面ともにハケ調整が施される。時期は器形・調整などの特徴から、1369は８世紀前半、1370は７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。Ｒａ区ＳＰ044がＲａ区ＳＩ043に伴うピットかどうかは不明であるが、時期的には問題ない。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ072（竪穴建物）

1371はＲａ区ＳＩ072の埋土中から出土した須恵器の坏身の底部である。底面に張り付け高台をもつやや大振りの器形で、推定底径10.2㎝を測る。底面の中央にはややゆがみがある。時期は器形などの特徴から、７世紀後半と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ110（竪穴建物）

1372～1382はＲａ区ＳＩ110の埋土中から出土した遺物である。1372～1377は須恵器で、1372・

1373は天井部を欠損する坏蓋の口縁部、1374は坏身、1375は小型の鉢の口縁部～体部、1376・1377は鉢の口縁部である。1372・1373は天井部と口縁部が明確な稜で区画され、1374は受部が付き、たちあがりと底部が区画される器形である。1377は推定口径14.4㎝を測り、やや大振りではあるが、口縁部がやや内傾し、托鉢の鉢に近い器形である。1378～1381は土師器の甕の口縁部～体部上半で、1379は口縁部が大きく外反する。いずれも口縁部の器壁が厚くなり、口縁の端部が直に立ち上がる器形で、1378の外面を除いて内外面にハケ調整が施される。1382は凝灰質砂岩製の砥石の破片で、残存長5.0㎝、幅7.0㎝、厚さ4.4㎝を測り、表裏・側面の４面ともに使用されている。重さ161.4gである。時期は器形・調整などの特徴から、1374は７世紀初頭、1372・1373・1375～1377は７世紀前半、1378～1380は６世紀後半～７世紀前半、1381は７世紀前半～中頃、1382は７世紀と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＩ160（竪穴建物）

1383・1384はＲａ区ＳＩ160の埋土中から出土した遺物である。1383は土師器の甕の口縁部～体部である。頸部の器壁が厚く、外反する口縁の端部が直に立ち上がり、体部は長胴で器壁が薄くなる器形で、内外面ともにハケ調整が施される。1384は土錘で、樽形（細型）形状である。一方の端部を欠損し、重さ8.5ｇである。時期は器形・調整などの特徴から、1383は７世紀前半、1384は７世紀と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＤ001（溝）

1385～1392はＲａ区ＳＤ001の埋土中から出土した遺物である。1385～1390は須恵器である。1385は坏蓋の天井部で、つまみ部は上面がゆがんで凹み擬宝珠の形状すら保っていない。1386は口径13.2㎝、底径10.9㎝、器高7.1㎝を測る寸胴状器形の埦で、底面には葉脈痕が残る。1387は平瓶の口縁部～体部上半である。1388は推定口径45.2㎝と大振りの甕の口縁部で、外面は連続刺突後に沈線を巡らせて上下に区画している。1389は甕の頸部～体部上半で、体部外面には格子状のタタキが施される。1390は推定口径15.0㎝、底径4.2㎝、器高9.8㎝を測る短頸鉢である。1391は土師器の鍋などの外面に取り付けられた把手（逆鍵状）である。1392は泥岩製の砥石で、残存長7.2㎝、幅4.7㎝、厚さ3.8㎝を測り、表裏・側面の４面ともに使用されている。重さ113.6ｇである。時期は器形・調整などの特徴から、1388は７世紀中頃、1387は７世紀後半、1389は７世紀、1385・1386・1390は８世紀前半、1392は７～８世紀と考えられる。1391は６世紀後半以降と考えられるが、その時期は詳らかではない。

【遺構名】Ｒａ区ＳＤ097（溝）

1393～1399はＲａ区ＳＤ097の埋土中から出土した遺物である。1393～1396は須恵器である。1393は坏蓋の天井部で扁平な擬宝珠つまみが付き、1394は平瓶の頸部～体部上半で推定基部径5.4㎝を測る。1395は甕の口縁部で、外に大きく外反する器形で、推定口径27.8㎝、外面には沈線を巡らせて区画した後に上下２段の櫛描波状文が施されている。1396は鉢の体部下半～底部で、底部に直径9.0㎝、高さ1.0㎝ほどの扁平な高台が付き、その底面にはヘラ記号（線刻）が見られる。1397～1399は山茶碗の碗の底部で、底面は回転糸切り後に高台が貼り付けられ、ナデ調整が施される。1397・1399の内面に摩滅痕と重ね焼き痕、1398・1399の高台には砂粒痕や籾殻痕が残る。時期は器形・調整などの特徴から、1395は７世紀前半、1393・1396は７世紀後半、1394は８世紀前半、1397・1398は12世紀後半、1399は13世紀前半と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＤ135（溝）

1400はＲａ区ＳＤ135の埋土中から出土した砂岩製の砥石で、残存長9.9㎝、幅4.9㎝、厚さ5.8㎝を測り、表面のみが使用されている。重さ232.5gである。特徴などから、時期は７～８世紀と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＰ083（ピット）

1401はＲａ区ＳＰ083の埋土中から出土した須恵器の坏蓋で、推定口径11.8㎝、器高4.0㎝を測る。天井部と口縁部が稜で明確に区画される器形で、時期は７世紀前半と考えられる。

【遺構名】Ｒａ区ＳＸ224（竪穴状遺構）

1402・1403はＲａ区ＳＸ224の埋土中から出土した遺物である。1402は須恵器の埦で、推定口径11.8㎝、器高4.1㎝を測る。底面にヘラ記号（線刻）が見られる。1403は土師器の鍋の口縁部～体部上半で、推定口径32.0㎝を測り、摩滅が著しいが内外面にハケ調整が施されている。時期は器形・調整などの特徴から、1402は８世紀前半、1403は７世紀末頃～８世紀前半と考えられる。

【Ｒａ区遺構外】

1404～1407はＲａ区遺構外から出土した遺物である。1404は調査区（Ｒａ区）の南端にて雨水の排水溝を掘削した時に出土した須恵器で、高坏の脚部である。方形の透孔が２段２方向に配される。1405は表採遺物で、須恵器の長頸瓶の体部である。肩部が張り出す器形で、肩部には沈線が巡る。1406・1407は遺構検出の際に出土した遺物で、1406は須恵器の長頸壺（瓶）の頸部、1407は土師器の甕の口縁部～体部上半である。1407は口縁部の器壁が厚く、外反する口縁の端部が直に立ち上がり、長胴になる器形で、内外面ともにハケ調整が施される。時期は器形・調整などの特徴から、1407は７世紀前半、1404は７世紀前半～中頃、1406は７世紀中頃、1405は７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

（基峰）

（12）Ｒｂ区（第440・441図、写真図版385・386）

①　１面（上層）

【遺構名】Ｒｂ区１面ＳＤ002（溝）

1408は、Ｒｂ区１面ＳＤ002から出土した平瓦の破片である。残存最大幅4.4㎝、最大厚2.3㎝を測る。焼成不良で表面（凹面）には布目痕、裏面（凸面）にはタタキ痕がみられ、胎土には0.6㎝以下の砂粒が含まれている。時期は７～８世紀と考えられる。

【遺構名】Ｒｂ区１面ＳＤ003（溝）

1409はＲｂ区１面ＳＤ003から出土した山茶碗の碗である。推定口径14.2㎝、推定底径7.8㎝、器高5.1㎝を測る。胎土は緻密で、焼成は良く、口縁部に釉が施される。底部外面は回転糸切り痕がなでて消されており、その上から高台が貼り付けられている。体部内外面ともに回転ナデ調整で、ヘラケズリによる調整痕が内面のみに見られる。底面には２条のヘラ記号（線刻）がある。高台がやや「八」の字に開いているため東山72号窯式と考えられる。時期は11世紀である。

【遺構名】Ｒｂ区１面ＳＤ007（溝）

1410はＲｂ区１面ＳＤ007から出土した鉄滓で、残存長2.1㎝、幅1.6㎝、厚さ1.4㎝、重さ4.1ｇである。時期は不明である。

【遺構名】Ｒｂ区１面ＳＤ008（溝）

1411はＲｂ区１面ＳＤ008から出土した須恵器の坏蓋である。推定口径14.1㎝、器高1.6㎝を測る。胎土は緻密で、焼成は良い。内外面ともに回転ナデ後、内面中心部のみに指オサエが施されている。つまみ部は上面がつぶれた擬宝珠形で、天井部中心に張り付けてある。時期は７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

【Ｒｂ区１面遺構外】

1412～1425はＲｂ区１面遺構外から出土した遺物である。1412は検出時に出土した須恵器の坏蓋である。残存器高2.2㎝を測る。胎土は緻密で白色粒を含み、焼成はやや不良である。外面には回転ヘラケズリ、内面の調整痕は明瞭で回転ナデが施される。口縁部は欠損しているが、つまみ部は扁平な擬宝珠形である。時期は７世紀後半と考えられる。1413は表採遺物で、須恵器の坏蓋である。残存器高2.7㎝で、焼成は良く、胎土に黒色粒・白色粒・石英を含む。体部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデが施される。つまみ部は扁平な宝珠形をしている。時期は７世紀後半～８世紀中頃と考えられる。1414は調査区の西側からの表採遺物で、須恵器の坏蓋である。残存器高2.4㎝で、焼成は良く、胎土は緻密で黒色粒を含む。体部外面に回転ナデと回転ヘラケズリ､内面に回転ナデが施されている。つまみ部は貼り付けされた後ナデ調節が施されており、上面がつぶれた擬宝珠形で中心部分が少し盛り上がっている。時期は８世紀後半と考えられる。1415は表土掘削時に表土下から出土した須恵器の坏蓋である。口径15.8㎝、器高4.0㎝で、胎土は緻密で白色粒を含み、焼成はやや不良である。内外面ともに回転ナデ、回転ヘラケズリが外面のみに施されている。つまみ部は扁平な上面がつぶれた擬宝珠形で、内面口縁部に自然釉が付着している。時期は８世紀後半と考えられる。1416は検出時に出土した須恵器の壺の蓋である。推定口径10.4㎝､残存器高1.5㎝である。胎土は緻密で白色粒を少量含み、焼成は良い。内外面ともに回転ナデが施されている。外面の天井部に摩滅痕がみられる。時期は７世紀中頃と考えられる。1417は検出時に出土した須恵器の坏身である。推定口径10.0㎝、残存器高3.3㎝である。胎土は緻密で白色粒が少量含まれ、焼成は良い。底部内外面ともに回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリが施されている。時期は６世紀後半～７世紀初頭と考えられる。1418は検出時に出土した須恵器の坏身の底部である。底径9.4㎝、残存器高2.0㎝である。胎土は白色粒を含み焼成は良い。底部内外面は回転ナデが施されており、断面三角形の高台が貼り付けてある。時期は７世紀後半～８世紀前半と考えられる。1419は調査区の西側からの表採遺物で、須恵器の坏身の底部である。推定底径11.9㎝、残存器高1.5㎝である。胎土は緻密で焼成は良い。内外面ともに回転ナデが施され、高台はしっかりと貼り付けされている。底部に１条のヘラ記号（線刻）がある。時期は７世紀後半～８世紀前半と考えられる。1420は検出時に出土した須恵器の埦である。推定口径12.4㎝、推定底径5.9㎝、器高4.2㎝である。胎土は緻密で白色粒を少量含み、焼成はやや不良である。体部内外面ともに回転ナデが施され、底面は回転糸切りを未調整で残す。底面の中央部が少し凹んでいる。時期は８世紀後半と考えられる。1421は調査区の西側からの表採遺物で､須恵器の有台皿か有台盤の底部と考えられる。推定底径7.6㎝、残存器高1.9㎝である。胎土には白色粒を多く含み、焼成は良い。内外面ともに回転ナデが施され、高台は貼り付けである。底面にヘラ記号（線刻）と思われる痕がある。時期は８世紀

後半と考えられる。1422は検出時にＥ13グリッドから出土した須恵器の甑の把手と思われる。残存している高さは3.9㎝を測る。胎土は緻密で0.2㎝以下の白色粒を含み、焼成は良い。外面にはヘラケズリとタタキ痕があり自然釉が付着している。内面にはナデ痕が残る。時期は７世紀前半と考えられる。1423は検出時に出土した土師器の鍋の把手である。胎土は緻密で焼成は良い。内外面にはナデ調整が施される。時期は６～７世紀と考えられる。1424は表採遺物の土錘である。長さ5.0㎝、幅1.6㎝、孔径0.4㎝、重さ11.1ｇである。調整にはナデが施されている。管状で中心部が膨らんでおり、胎土は緻密で焼成は良い。時期は７世紀と考えられる。1425は表採遺物の古瀬戸の花瓶の底部と思われる。底径8.4㎝、残存器高2.1㎝である。胎土は緻密で焼成は良い。内外面ともに回転ナデが施され、底面には回転糸切り痕がある。時期は15世紀前半と考えられる。

（首藤）

②　２面（下層）

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＤ017（溝）

1426はＲｂ区２面ＳＤ017から出土した臼玉である。滑石製で、最大幅1.5㎝、最大厚0.7㎝、孔径0.2㎝、重さ2.0ｇである。外面は未調整で、製作途中の未完成品であった可能性がある。時期は５世紀末頃～８世紀と考えられる。

【遺構名】Ｒｂ区２面ＳＰ013（ピット）

1427はＲｂ区２面ＳＰ013から出土した大型の柱根である。残存長52.0㎝、幅20.0㎝、厚さ7.8㎝を測る。材質は丸柱のヒノキで、色調は褐色（7.5YR ４／３）である。木取りは半割で、加工痕は不明である。時期は７～８世紀と考えられる。

【Ｒｂ区２面遺構外】

1428はＲｂ区２面遺構外から出土した遺物で、包含層から出土した須恵器の坏身の底部である。底径10.2㎝、残存器高3.0㎝を測る。胎土には白色粒を多く含み、焼成は良い。内外面ともに回転ナデが施され、底面には高台が貼り付けされている。時期は７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

（首藤）

（13）Ｒｃ区（第442図、写真図版387）

【遺構名】Ｒｃ区ＳＢ001（掘立柱建物）

Ｒｃ区ＳＢ001の柱穴から出土した遺物は、1429～1432である。1429はＲｃ区ＳＰ012から出土した須恵器の坏蓋である。内外面に回転ナデが施される。８世紀前半と考えられる。1430・1431はＲｃ区ＳＰ030から出土した須恵器である。1430は坏蓋で、器形は扁平でつまみは扁平な宝珠形である。1431は坏身で、底面にヘラ記号（線刻）がある。いずれも７世紀後半～末頃と考えられる。1432はＲｃ区ＳＰ010から出土した土師器甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状に開く器形で端部が立ち上がる。７世紀後半と考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＤ001（溝）

1433はＲｃ区ＳＤ001の出土遺物で、山茶碗の碗である。底面は糸切り後に高台が貼り付けられる。高台に籾殻痕が見られる。13世紀前半と考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＤ004（溝）

1434はＲｃ区ＳＤ004の出土遺物で、山茶碗の鉢である。底面は高台が貼り付けられる。13世紀後半と考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＤ063（溝）

1435・1436はＲｃ区ＳＤ063から出土した遺物である。1435は須恵器の埦で、底面は高台が貼り付けられる。内面端部に白色釉が付着する。７世紀後半～末頃と考えられる。1436は灰釉陶器の皿で、底面は高台が貼り付けられる。内面はハケにより灰釉が施されている。９世紀前半と考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＰ053（ピット）

1437はＲｃ区ＳＰ053から出土した陶錘である。端部は面取りされる。７世紀と考えられる。

【遺構名】Ｒｃ区ＳＸ047（竪穴状遺構）

1438･1439はＲｃ区ＳＸ047から出土した遺物である。1438は須恵器の坏身で､焼成やや不良である。底部はやや丸みをおびている。７世紀前半～中頃と考えられる。1439は土錘で、やや膨らみを持った寸胴形である。７世紀と考えられる。

【Ｒｃ区遺構外】

1440～1446はＲｃ区遺構外からの出土遺物である。1440～1442は須恵器である。1440は表土掘削の際に出土した坏蓋で、つまみはしっかりとした宝珠形である。外面に自然釉がかかる。1441は表採遺物で、坏蓋である。つまみは扁平でつぶれたような形状の宝珠形である。1440・1441は８世紀前半と考えられる。1442は表土掘削の際に出土した遺物で、坏身である。口縁部は内面に傾き端部は丸みをおびる。７世紀前半と考えられる。1443・1444は山茶碗で、1443は表採遺物で皿である。底面は糸切り後ナデ消しされる。13世紀前半と考えられる。1444は表土掘削の際に出土した花瓶の脚部である。底部内面にロクロ目が見られる。12世紀後半と考えられる。1445・1446は表採遺物で、土錘である。1445は焼成やや不良である。２点ともに７世紀と考えられる。

（三島）

（14）Ｒｄ区（第443図、写真図版388）

【遺構名】Ｒｄ区ＳＤ136（溝）

1447～1449はＲｄ区ＳＤ136から出土した遺物である。1447は短脚の須恵器の高坏で、坏部の底面と脚部のみ残存し、内面に重ね焼き痕と降灰痕が見られる。時期は７世紀前半と考えられる。1448は土師器の鍋の把手で、把手のみ残存しているため正確な時期は不明であるが、共伴遺物から７世紀前半と推定される。1449は山茶碗の碗で、体部内面に自然釉と黒色付着物が見られ、時期は12世紀と考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＤ162（溝）

1450～1455はＲｄ区ＳＤ162から出土した遺物である。1450～1452は須恵器である。1450は坏蓋で、天井部と口縁部の境が明瞭な器形で、口縁部はまっすぐに伸びる。外面には粘土紐巻き上げの継ぎ目部分に亀裂が見られる。時期は６世紀末頃～７世紀初頭と考えられる。1451は坏身の体部～底部で、外面の全体に自然釉が付着する。時期は７世紀前半と考えられる。1452は甑の体部～底部で、底面はほとんど失われており、内面に粘土紐の継ぎ目が消えずに残っている。時期は７世紀前半～中頃と考えられる。1453～1455は土師器である。1453は高坏の脚部で、端部が欠損している。内外面ともナデ調整で内面には絞り痕が見られる。時期は５世紀中頃と考えられる。1454・1455は甕で口縁部が屈曲して開く器形である。1454は底部を欠損している。1454･1455ともに口縁端部につまみ上げが見られ、どちらも「伊勢型甕」で、時期は７世紀前半～中頃と考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＰ081（ピット）

1456～1458はＲｄ区ＳＰ081から出土した遺物である。1456・1457はＲｄ区ＳＰ081の西側からまとまって出土した須恵器の坏蓋で、天井部と口縁部の境が明瞭である。1457は天井部全体に降灰がかかり、口縁端部内面に段がある。1456・1457ともに時期は７世紀前半と考えられる。1458は細長い円筒形の陶錘である。時期は共伴遺物から７世紀前半と推定される。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＰ082（ピット）

1459はＲｄ区ＳＰ082から出土した須恵器の坏身で、７世紀前半と考えられる。

【遺構名】Ｒｄ区ＳＸ163（不明遺構）

1460はＲｄ区ＳＸ163から出土した須恵質の土製紡錘車である。上面～側面にかけてヘラケズリ後に丁寧にナデ調整されており、底面には斜格子文が施される。時期は７世紀と推定される。

（後藤泰）

（15）Ｒｅ区（第444図、写真図版389）

①　１面（上層）

【Ｒｅ区１面遺構外】

1461～1463はＲｅ区１面の遺構外から出土した遺物である。1461・1463は包含層、1462は表土層から出土した。1461・1462は須恵器坏蓋である。1461は推定口径17.2㎝で、口縁端部近くがやや屈曲して伸びる。1462は推定口径16.4㎝で、口縁端部を垂直に折り返す。1463は須恵器有台坏身の底部である。高台は腰部から離れた位置に付き、外端面で接地する。時期は1462が８世紀前半、1461・1463が８世紀中頃と考えられる。

（小島）

②　２面（下層）

【遺構名】Ｒｅ区２面ＳＤ024（溝）

1464は鉄釘と推定される鉄製品である。残存長10.3㎝、幅1.0㎝、厚さ0.6㎝で断面が長方形である。

（小島）

（16）Ｒｆ区（第445・446図、写真図版389・390）

①　１面（上層）

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ004（溝）

出土遺物は1465～1467である。1465は土師器甕である。口縁端部をつまみ上げ、体部の内外面をハケ調整する。７世紀前半と考えられる。 1466は陶器の皿の底部で、高台は三角形に削り出し、内外面は灰釉で施釉される。16世紀中頃～後半と考えられる。1467は磁器の小杯（盃）で、時期は19世紀以降と考えられる。

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ020（溝）

1468は須恵器甕である。やや肩部が張る器形で、７世紀後半と考えられる。

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ022（溝）

出土遺物は1469～1471である。1469は須恵器埦である。推定口径10.4㎝で口縁部が反り返り、底部を回転糸切りする。８世紀末頃～９世紀前半と考えられる。1470は平瓦の小片で、表面（凸面）はナデ調整、裏面（凸面）は縄目タタキが残る。1471は凝灰岩製の砥石で、４面を使用している。

【遺構名】Ｒｆ区１面ＳＤ024（溝）

出土遺物は1472～1476である。1472～1475は尾張型山茶碗の碗、1476は尾張型山茶碗の皿である。1472は断面三角形の高台で体部が緩くたちあがる。12世紀後半と考えられる。1473・1474は台形の高台で、時期は12世紀中頃～後半と考えられる。1475は高台が低く、体部のたちあがりが急で口縁端部が丸い。13世紀初頭と考えられる。1476は推定口径8.6㎝、器高2.6㎝、口縁部が緩やかに外反する。12世紀後半～ 13世紀前半と考えられる。

【Ｒｆ区１面遺構外】

1477･1478はＲｆ区１面の遺構外から出土した遺物である。1477は検出時に出土した須恵器坏身で、底部をヘラケズリ後にヘラ記号（線刻）がある。1478は撹乱から出土した平瓦の小片で､表面（凹面）に布目痕が残る。

（小島）

②　２面（下層）

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＤ006（溝）

1479は須恵器有台坏身である。推定口径14.4㎝で高台の断面は三角形、体部のたちあがりがやや急な器形である。時期は７世紀末頃～８世紀初頭と考えられる。

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＤ041（溝）

出土遺物は1480～1484である。1480～1482は須恵器である。1480は坏蓋で、推定口径10.0㎝で口縁部の稜が明瞭である。1481は坏身である。1482は甕の口縁部で直線的にたちあがる。1483は土師器甕で、口縁部が屈曲し端部をつまみ上げる。体部外面を縦方向のハケ、体部内面はユビオサエ、頸部～口縁部内面を横方向のハケで調整する。1484は種別不明の鉄製品である。残存長3.3㎝、幅0.9㎝、断面がやや扁平で先端が尖る。時期は全て７世紀初頭～中頃と考えられる。

【遺構名】Ｒｆ区２面ＳＤ044（溝）

出土遺物は1485～1487である。1485は須恵器坏身である。小平底の器形で推定口径が9.6㎝、底部を回転ヘラケズリする。1486は須恵器高坏の脚部で長方形の透孔を２段３方向に有する。1487は土師器甕の口縁部で、口縁端部をつまみ上げる。時期は６世紀末頃～７世紀前半と考えられる。

【Ｒｆ区２面遺構外】

1488～1490はＲｆ区南端の自然流路内に設定した東側のトレンチ内からの出土遺物である。1488は灰釉陶器の埦で、口縁部が外反する器形で体部下半を回転ヘラケズリする。時期は９世紀前半と考えられる。1489は山茶碗の碗で、高台がやや低く体部は丸みを持つ。底部内面にはユビオサエ痕がある。1490は山茶碗の小碗で口径9.5㎝、器高4.8㎝で高台を持つ。1489・1490の時期は12世紀後半と考えられる。1491・1492はＲｆ区２面の包含層掘り下げの際に出土した山茶碗の碗である。1491は断面三角形のやや高い高台で、内面に重ね焼き痕がある。時期は11世紀中頃と考えられる。1492は高台が断面台形で低く、体部にやや丸みがある。時期は12世紀後半と考えられる。

（小島）

（17）Ｒｇ区（第447・448図、写真図版391・392）

①　１面（上層）

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＤ013（溝）

1493はＲｇ区１面ＳＤ013から出土した尾張型の山茶碗の底部である。内面に使用による摩滅と重ね焼き高台痕が残る。三角高台は先端がつぶれて台形になり、籾殻痕が残る。時期は12世紀中頃と思われる。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＤ017（溝）

1494～1496はＲｇ区１面ＳＤ017から出土した遺物である。1494は尾張型の山茶碗の底部である。高台は雑に取り付けられている。三角高台は先端がつぶれて台形になり、籾殻痕が残る。内面は使用により摩滅している。時期は12世紀中頃と思われる。1495は陶器の片口鉢である。体部外面の下方はヘラケズリされている。底部外面には砂粒痕が残る。底部内面には重ね焼き高台痕が残る。時期は13世紀中頃と思われる。1496は叩き石と思われる。長さ13.8㎝、幅6.2㎝、厚さ4.3㎝、重さ619.7ｇで、安山岩製である。被熱により黒くなっている部分がある。時期は13世紀以前に使われていたと思われる。

【遺構名】Ｒｇ区１面ＳＸ019（不明遺構）

1497はＲｇ区１面ＳＸ019から出土した須恵器の坏身である。焼成不良で、素焼き状態である。底部外面には回転ヘラケズリが施される。時期は８世紀前半～中頃と思われる。

【Ｒｇ区１面遺構外】

1498～1500はＲｇ区１面遺構外から出土した遺物である。1498は須恵器の有台坏である。体部は外側に向け開き、口縁は少し外反する。高台端部は丸く外側へ開く。底部は中心に向けて厚みを増す。底部外面はヘラケズリが施される。時期は７世紀後半と思われる。1499は尾張型の山茶碗である。胎土は少し荒く、焼き色はにぶい橙色を呈する。三角高台の先端がつぶれて台形になる。また、端部には砂粒痕が残る。内面には使用による摩滅と重ね焼き高台痕が残る。時期は12世紀中頃と思われる。1500は包含層から出土した軒丸瓦の瓦当部分である。文様は単弁（重弁）蓮華文で、花弁に連なる子葉がある。調査区より東へ500ｍほど先には薬師堂廃寺跡があり、同文様の瓦が出土しており、関連が窺える。時期は７世紀末頃である。

（後藤秀）

② ２面（下層）

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＤ031（溝）

1501～1506はＲｇ区２面ＳＤ031から出土した遺物である。1501は須恵器の坏身である。口縁部下部（受部との境）は面取りされ、たちあがりは短く内傾する。底部外面の２分の１は回転ヘラケズリが施される。時期は７世紀中頃と思われる。1502は須恵器の細頸瓶で、内面の剥離が激しい。体部には２段にわたり２条の沈線が巡り、その間をヘラによる連続刺突が施される。時期は７世紀後半と思われる。1503は土師器の壺である。内面に頸部接合痕が明瞭に残る。体部外面はヘラミガキ、体部内面はナデ調整である。時期は４世紀前半と思われる。1504～1506は土師器の甕である。1504は長胴甕である。推定口径18.0㎝、推定器高34.9㎝を測る。口縁端部はつまみ上げられている。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ調整が施される。口縁部内面はヨコナデ、体部内面上半はヨコハケ、下半はケズリで調整される。1505も長胴甕で、口縁部を欠損する。全体的に少し煤けている。体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケで一部ユビオサエ痕が残り、底部はナデ調整である。1506の甕の外面は摩滅が激しい。口縁端部がつまみ上げられている。口縁内面はヨコナデ、体部はハケメ調整が施される。時期については、1504・1506は７世紀中頃、1505は７世紀前半～中頃と思われる。

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＤ035（溝）

1507はＲｇ区２面ＳＤ035から出土した遺物で、鉄製品である。長さ6.3㎝、幅2.1㎝、厚さ0.3㎝を測る。断面形状から刀子のようなものと思われる。時期については不明である。

【遺構名】Ｒｇ区２面ＳＤ064（溝）

1508・1509はＲｇ区２面ＳＤ064から出土した遺物で、山茶碗である。1508は尾張型の小皿である。粗雑な胎土で、雑な作りである。時期は13世紀中頃と思われる。1509は尾張型の碗で、高台の取り付けは雑で潰れている。籾殻痕が残る。内部底面には重ね焼き・籾殻痕が残る。時期は13世紀中頃である。

【遺構名】 Ｒｇ区２面ＳＤ065（溝）

1510はＲｇ区２面ＳＤ065から出土した尾張型の山茶碗である。体部内外面に煤痕が残る。高台は低く、内側の仕上げの際に糸切痕がナデ消しされている。時期は12世紀中頃と思われる。

（後藤秀）

第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・森　将志

（１）はじめに

下田南遺跡より出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（本章第５節参照）。

（２）試料と方法

測定試料は、古代の掘立柱建物と考えられている１ｂ区ＳＢ005（１ｂ区ＳＰ150）、１ｂ区ＳＢ007（１ｂ区ＳＰ173）、Ｒａ区ＳＢ008（１ｂ区ＳＢ008：１ｂ区ＳＰ180）、１ｃ区ＳＢ001（１ｃ区ＳＰ075）、１ｄ区ＳＢ508（１ｄ区ＳＰ791）、２ａ区２面ＳＢ002（２ａ区２面ＳＰ187）から出土した生材６点（試料No. １～６：PLD-44309～44314）である。測定試料の情報、調製データを４－表１に示す。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

４－表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD－44309	遺構：SP150 調査区：１ｂ区 試料 No.1 遺物 No.364	種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 器種：礎板 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD－44310	遺構：SP173 調査区：１ｂ区 試料 No.2 遺物 No.365	種類：生材（コウヤマキ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 器種：礎板 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD－44311	遺構：SP180 調査区：１ｂ区 試料 No.3 遺物 No.368"	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 器種：礎板 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD－44312	遺構：SP075 調査区：１ｃ区 試料 No.4 遺物 No.271	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：最終形成年輪 器種：柱根 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD－44313	遺構：SP791 調査区：１ｄ区 試料 No.5 遺物 No.1044	種類：生材（コウヤマキ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 器種：柱根 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD－44314	遺構：SP187 調査区：２ａ区２面 試料 No.6 遺物 No.187	種類：生材（コウヤマキ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 器種：柱根 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

（3）結果

４－表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、４－図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ:IntCal20）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範

４－表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-44309 試料 No.1 遺物 No.364	−23.72 ± 0.18	1592 ± 19	1590 ± 20	433−442 cal AD (8.26%) 449−479 cal AD (26.33%) 495−523 cal AD (24.70%) 525−535 cal AD (8.98%)	425−540 cal AD (95.45%)
PLD-44310 試料 No.2 遺物 No.365	−24.61 ± 0.21	1313 ± 18	1315 ± 20	664−683 cal AD (30.69%) 744−760 cal AD (27.92%) 766−772 cal AD (9.66%)	660−704 cal AD (48.59%) 740−773 cal AD (46.86%)
PLD-44311 試料 No.3 遺物 No.368	−24.53 ± 0.20	1674 ± 19	1675 ± 20	366−368 cal AD (2.60%) 377−417 cal AD (65.67%)	263−275 cal AD (7.06%) 348−420 cal AD (88.39%)
PLD-44312 試料 No.4 遺物 No.271	−27.50 ± 0.18	1248 ± 19	1250 ± 20	691−695 cal AD (2.51%) 703−740 cal AD (46.98%) 773−775 cal AD (2.13%) 791−802 cal AD (9.31%) 811−820 cal AD (7.34%)	678−746 cal AD (60.28%) 759−767 cal AD (2.41%) 771−775 cal AD (2.72%) 787−830 cal AD (26.53%) 854−874 cal AD (3.51%)
PLD-44313 試料 No.5 遺物 No.1044	−21.94 ± 0.20	1445 ± 18	1445 ± 20	604−611 cal AD (15.26%) 615−641 cal AD (53.01%)	591−649 cal AD (95.45%)
PLD-44314 試料 No.6 遺物 No.187	−25.56 ± 0.19	1560 ± 19	1560 ± 20	438−461 cal AD (21.91%) 477−497 cal AD (22.63%) 533−554 cal AD (23.73%)	433−468 cal AD (26.83%) 473−521 cal AD (35.25%) 524−566 cal AD (33.36%)

囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（4）考察

以下では、各試料の暦年較正結果のうち、２σ暦年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。なお、古墳時代の暦年代については、岸本（2011）を参照した。

１ｂ区ＳＰ150から出土した礎板（PLD-44309）は、425-540 cal AD（95.45%）であった。これは、古墳時代中期～後期に相当する。

１ｂ区ＳＰ173から出土した礎板（PLD-44310）は、660-704 cal AD（48.59%）および740-773 cal AD（46.86%）であった。これは、飛鳥時代～奈良時代に相当する。

１ｂ区ＳＰ180から出土した礎板（PLD-44311）は、263-275 cal AD（7.06%）および348-420 cal AD（88.39%）であった。これは、古墳時代前期～中期に相当する。

１ｃ区ＳＰ075から出土した柱根（PLD-44312）は、678-746 cal AD（60.28%）、759-767 cal AD（2.41%）、771-775 cal AD（2.72%）、787-830 cal AD（26.53%）、854-874 cal AD（3.51%）であった。これは、飛鳥時代～平安時代前期に相当する。

１ｄ区ＳＰ791から出土した柱根（PLD-44313）は、591-649 cal AD（95.45%）であった。これは、古墳時代終末期～飛鳥時代に相当する。

２ａ区２面ＳＰ187から出土した柱根（PLD-44314）は、433-468 cal AD（26.83%）、473-521 cal AD（35.25%）、524-566 cal AD（33.36%）であった。これは、古墳時代中期～後期に相当する。

試料はいずれも古代の掘立柱建物と推定されている遺構から出土しており、試料No.2、４、５は整合的な暦年代を示した。一方、試料No.1、３、６は、やや古い古墳時代の暦年代を示した。ただし木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料のうち、１ｃ区ＳＰ075から出土した柱根（試料No.4：PLD-44312）は最終形成年輪を測定しているため、試料No.4の測定結果は樹木が枯死もしくは伐採された時期を示していると考えられる。それ以外の５点については、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

【引用・参考文献】

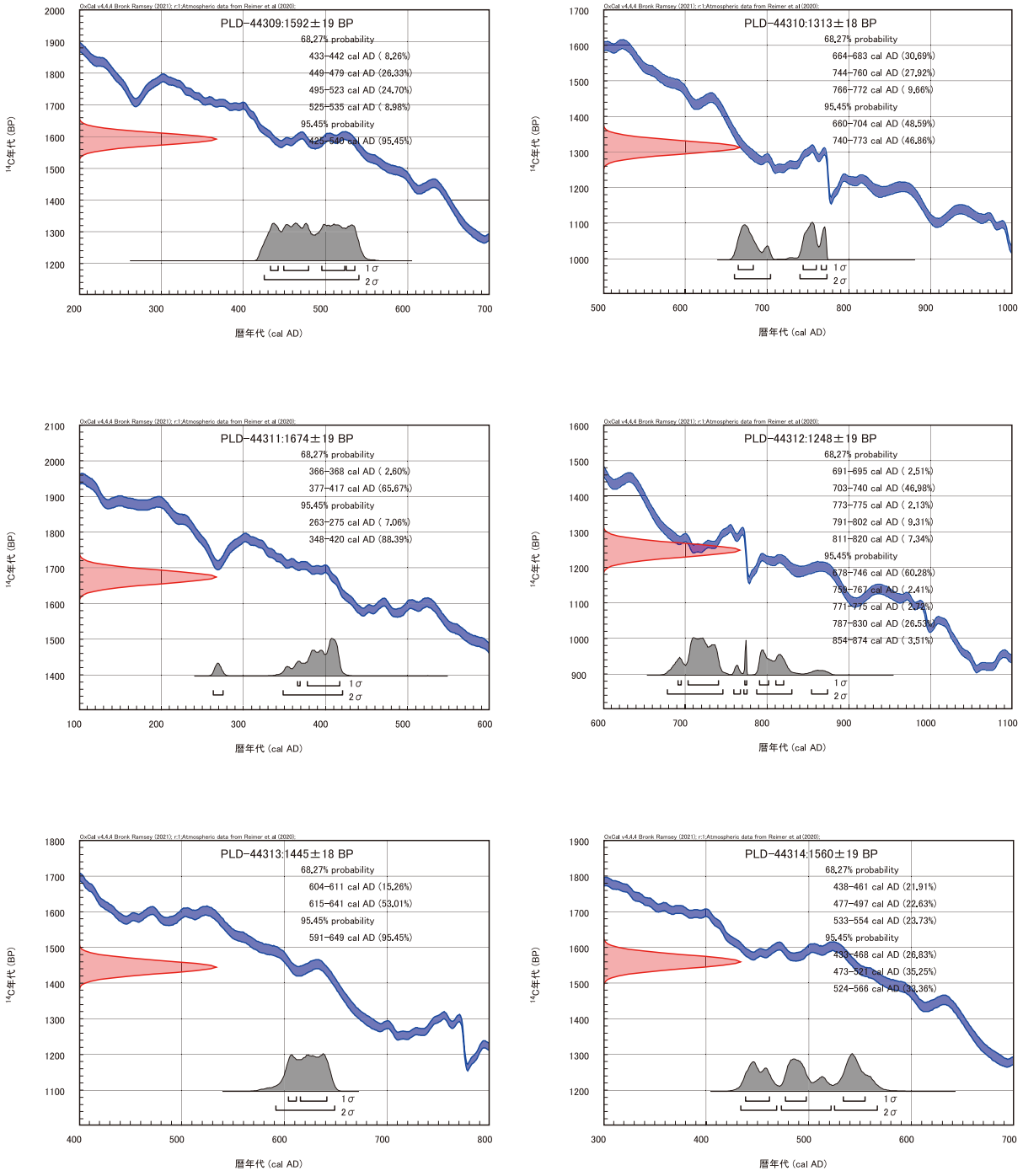
Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

岸本直文（2011）古墳編年と時期区分．一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編「古墳時代史の枠組み」:34-44，同成社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」:3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.（2020）The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve（0-

55 cal kBP) . Radiocarbon, 62 (4) , 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)



4－図1　暦年較正結果

第２節　珪藻分析

藤根　久・森　将志（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

五条川右岸に立地する下田南遺跡では、古代～中世にかけての遺構が検出されている。これらの遺構から採取された試料を対象に、古環境復元を目的として珪藻分析を行った。なお、同一試料を用いて花粉分析も行われている（本章第３節参照）。

（２）試料と分析方法

分析試料は、１ｄ区の西側トレンチ（旧五条川１号トレンチ、本章では調査時の呼称を優先して以下、１ｄ区の西側トレンチと呼ぶ）と２ｂ区SD005、２ｃ区東側で設定した深掘トレンチから採取された計19試料である（４－表３）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

４－表３　　分析試料一覧

区	遺構	No.	時期	特徴	備考
１ｄ区	西側トレンチ	2468	中世以降	褐灰色（7.5YR4/1）粘質土	旧五条川
		2467		灰褐色（7.5YR5/2）粘質土	
		2466		明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土	
		2465		灰褐色（5YR4/2）粘質土	
		2464		褐色（7.5YR4/3）砂質土	
		2463		明黄褐色（10YR6/8）砂質土	
		2462		灰色（5Y5/1）砂質土	
		2461		灰色（5Y4/1）砂質土	
		2460		オリーブ黒色（5Y3/2）砂質土	
		2459		黒色（5Y2/1）粘質土	
２ｂ区	SD005	203	古代	黒褐色（10YR3/2）粘土	区画溝埋土
		204		にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土	
		205		灰黄褐色（10YR4/2）粘土	
２ｃ区	東側深掘トレンチ	1993		灰黄色（2.5Y6/2）粘土	
		1994		褐灰色（10YR5/1）粘土	
		1995	古代以前	にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土	検出面の下層
		1996		灰黄色（2.5Y6/2）粘土	
		1997		黒色（10YR2/1）粘土	
		1998		灰色（5Y5/1）シルト	

湿重約５gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け、永久プレパラートを作製した。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用いて、任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損した珪藻化石については、誤同定を避けるため、同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるよう努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Lange-Bertalot（2000）、Hustedt（1930, 1937-1938, 1959, 1961-1966）、Krammer and Lange-Bertalot（1985, 1986, 1988, 1991a, 1991b）、Desikachiary（1987）などを参考にした。

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）、安藤（1990）、伊藤・堀内（1991）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、汽水種は汽水不定・不明種（？）、淡水種は広布種（W）、その他破片は不明種（？）として扱った。

以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群、安藤（1990）が設定した淡

水域における環境指標種群、伊藤・堀内（1991）が設定した陸生珪藻の概要を示す。

［外洋指標種群（A）］：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

［内湾指標種群（B）］：塩分濃度が26 ～ 35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

［海水藻場指標種群（Ｃ１）］：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

［海水砂質干潟指標種群（Ｄ１）］：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

［海水泥質干潟指標種群（Ｅ１）］：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

［汽水藻場指標種群（Ｃ２）］：塩分濃度が4～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

［汽水砂質干潟指標種群（Ｄ２）］：塩分濃度が５～26パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

［汽水泥質干潟指標種群（Ｅ２）］：塩分濃度が２～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

［上流性河川指標種群（Ｊ）］：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため､流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K）］：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防､後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（Ｌ）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：水深１m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P）］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群であり、以下のＡ群とＢ群に区分される。

［陸生珪藻Ａ群（Ｑａ）］：耐乾性の強い特定のグループである。

［陸生珪藻Ｂ群（Ｑｂ）］：Ａ群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

（3）結果

分析結果を４－表４と４－図２に示した。分析した19試料すべてから珪藻化石が産出した。珪藻化石が産出した試料のうち、１ｄ区の西側トレンチの2461および2460からは､100個体以上が産出したが、

その他の試料は産出数が少なかった。保存状態は不良で、全体的に壊れた殻が多く、一部の殻には溶解の痕跡が認められた。

以下、試料ごとに結果を記す。

・１ｄ区の西側トレンチ

2468では、淡水種７個体が検出された。

2467では、淡水種１個体が検出された。

2466では、淡水種78個体が検出された。産出した珪藻化石は、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*、沼沢湿地付着生指標種群の*Gomphonema acuminatum*が産出した。

2465では、淡水種29個体が検出された。産出した珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群の*Stauroneis phoenicenteron*などである。

2464では、淡水種41個体が検出された。産出した珪藻化石は、広布種の*Encyonema silesiacum*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia microstauron*、*Gomphonema truncatum*などである。

2463では、淡水種70個体が検出された。産出した珪藻化石は、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*、広布種の*Navicula viridula*、*Cymbella tumida*、*Encyonema silesiacum*などである。

2462では、海水種1個体、淡水種68個体が検出された。産出した珪藻化石は、広布種の*Achnanthes japonica*、*Cymbella tumida*、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、陸生珪藻B群の*Pinnularia subcapitata*などである。

2461では、淡水種119個体が検出された。産出した珪藻化石は、広布種の*Rhopalodia gibberula*、*Cymbella tumida*、*Pinnularia brevicostata*、沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*と*Stauroneis phoenicenteron*などである。

2460では、汽水種3個体、淡水種136個体が検出された。産出した珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*、*Cymbella subaequalis*、広布種の*Rhopalodia gibberula*、*Cymbella tumida*、*Gomphonema truncatum*などである。

2459では、淡水種24個体が検出された。産出した珪藻化石は、広布種の*Cymbella tumida*などである。

・２ｂ区ＳＤ005

203では、淡水種25個体が検出された。産出した珪藻化石は、広布種の*Cocconeis placentula var. euglypta*、沼沢湿地付着生指標種群の*Cymbella subaequalis*、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*などである。

204では、淡水種５個体が検出された。

205では、淡水種35個体が検出された。産出した珪藻化石は、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*、沼沢湿地付着生指標種群の*Cymbella subaequalis*、陸生珪藻A群の*Luticola mutica*などである。

・２ｃ区東側の深掘トレンチ

1993では、淡水種40個体が検出された。産出した珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群の*Cymbella subaequalis*、陸生珪藻A群の*Luticola mutica*、陸生珪藻B群の*Pinnularia subcapitata*、広布種の*Cymbella tumida*などである。

1994では、淡水種２個体が検出された。

1995では、淡水種３個体が検出された。
1996では、淡水種１個体が検出された。
1997では、淡水種５個体が検出された。
1998では、淡水種３個体が検出された。

（4）考察

３地点から採取された19試料の珪藻化石は、全体的に少なかった。珪藻化石が少なかった原因としては、堆積後に好気的環境下に曝され、分解消失した可能性が考えられる。そうしたなかでも、１ｄ区の西側トレンチでは、2460と2461、2462、2463、2466で比較的多くの珪藻化石が得られた。以下では、珪藻化石群集に基づいて、中世以降の西側トレンチ周辺の堆積環境について検討した。

2460と2461、2462は、分類群によって多少の差異はあるものの、ほぼ同様の産出傾向を示す。沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia gibba*、*Cymbella subaequalis*、*Stauroneis phoenicenteron*が特徴的であり、広布種の*Rhopalodia gibberula*、*Cymbella tumida*、*Pinnularia brevicostata*、*Gomphonema truncatum*などを伴う。こうした環境指標種群の特徴から、2460と2461、2462の堆積時は閉鎖的な湿地環境であったと推定される。

その上位の2463では、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*の産出が特徴的であり、河川環境が優勢であったと推定される。

さらに上位の2466では、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*と沼沢湿地付着生指標種群*Gomphonema acuminatum*の産出が特徴的であり、河川の流れ込みを伴う沼沢湿地環境が推定される。

以上をまとめると、2460と2461、2462堆積時は湿地的環境が広がっていたが、2463より上位層になると河川の流れ込みがあったと考えられる。

【引用・参考文献】

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

千葉　崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新．Diatom，30，7-30.

Cholnoky, B. J.（1968）Die Oekologie der Diatomeen in Binnengewassern.　699p，Lehre（Cramer）.

Desikachary, T. V.（1987）Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean Region. 221p, Madras Science Foundation.

Hustedt, F.（1930）Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. L. Rabenhorst（ed.）Kryptogamen-Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz, 7（1），609-920, Akademische Verlagsgesellschaft m. b. h.

Hustedt, F.（1937-1938）Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra: nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Ⅰ～Ⅲ. Archiv. Hydrobiologie. Suppl. 15, 131-809, 1-155, 274-349, E. Schweizerbart'sche Verlagsbuchhandlung.

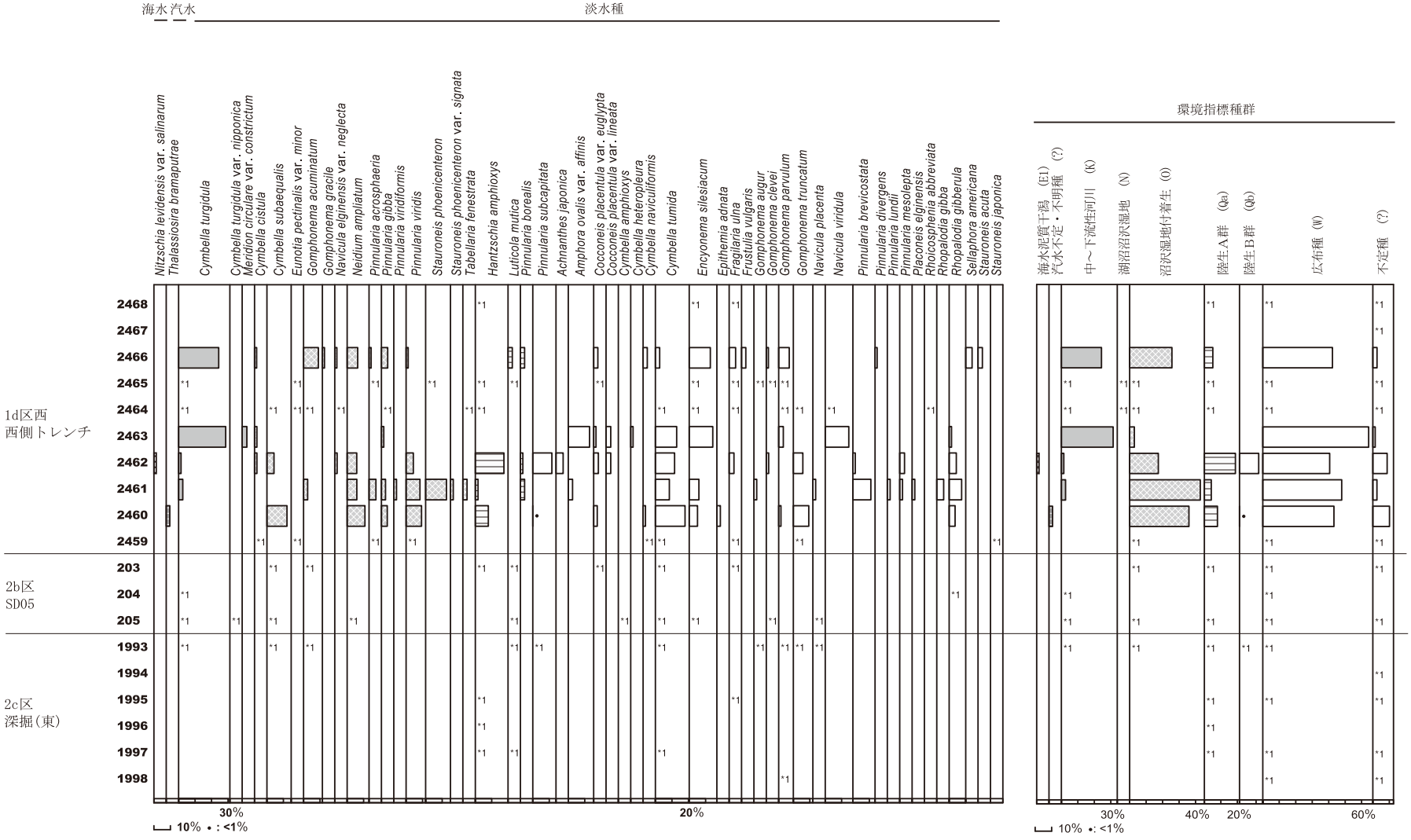
Hustedt, F.（1959）Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. L. Rabenhorst（ed.）Kryptogamen-Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz. 7（2），737-845, Akademische Verlagsgesellschaft m. b. h.

Hustedt, F.（1961-1966）Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. L. Rabenhorst（ed.）Kryptogamen-Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz, 7（3），1-816, Akademische Verlagsgesellschaft m. b. h.

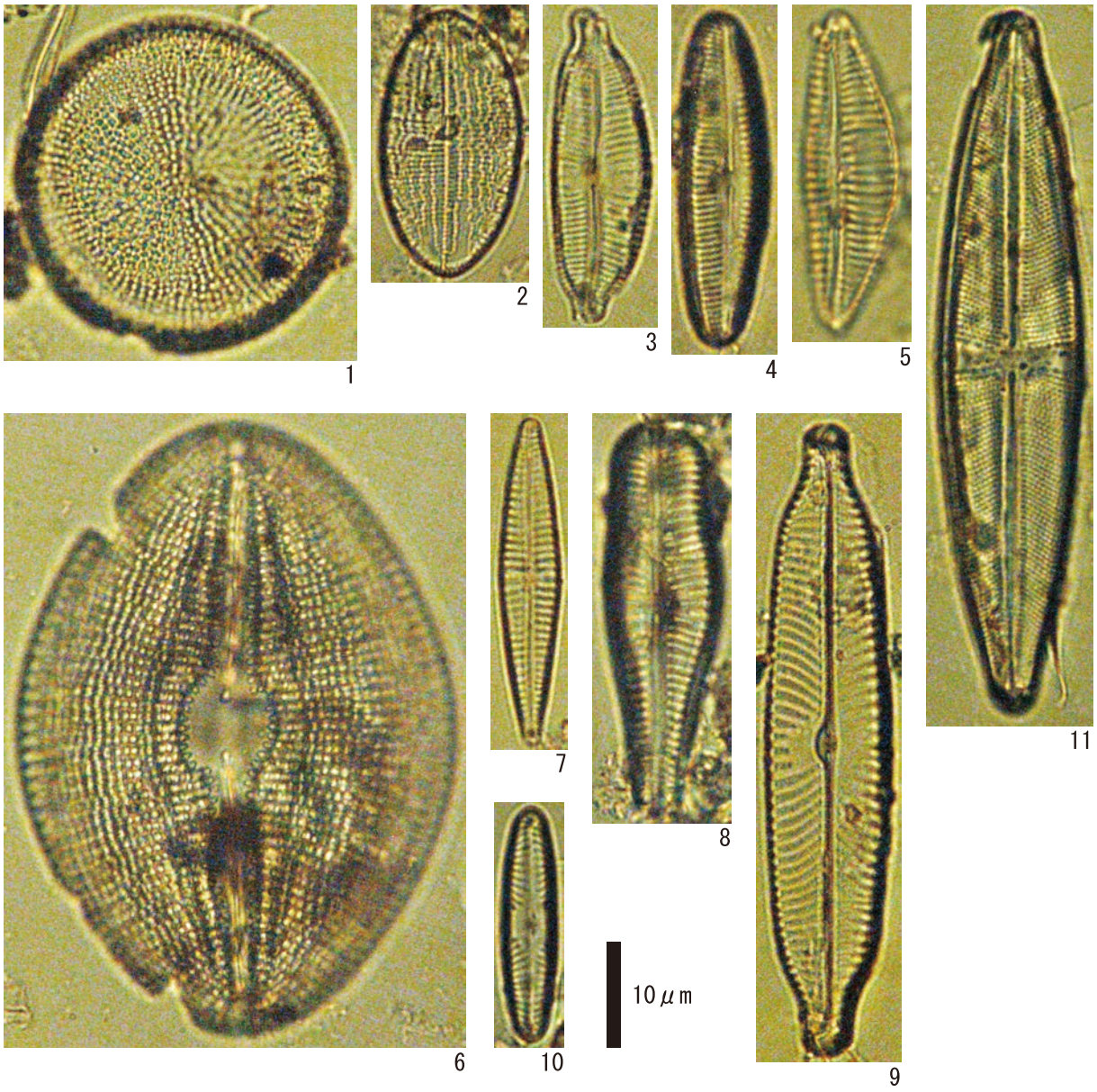
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．日本珪藻学誌，6，23-44.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1985）Naviculaceae. Neue und wenig bekannte Taxa, neue Kombinationen und Synonyme sowie Bemerkungen zu einigen Gattungen. Bibliotheca Diatomologica, 9, 230p, J. Cramer.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1986）Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. Ettl, H., Gerloff, J., Heynig, H. and Mollenhauer, D.（eds.）Süsswasserflora von Mitteleuropa, 2（1），876p, Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1988）Bacillariophyceae. 2. Teil: Bacillariaceae, Epithemiaceae, Surirellaceae. Ettl, H., Gerloff, J., Heynig, H. and Mollenhauer, D.（eds.）Süsswasserflora von Mitteleuropa, 2（2），596p, Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1991a）Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Ettl, H., Gerloff, J., Heynig, H. and Mollenhauer, D.（eds.）Süsswasserflora von Mitteleuropa, 2（3），576p, Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1991b）Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. Ettl, H., Gerloff, J., Heynig, H. and Mollenhauer, D.（eds.）Süsswasserflora von Mitteleuropa, 2（4），437p, Gustav Fischer Verlag.
Lange-Bertalot, H.（2000）Diatom Flora of Marine Coasts 1. Iconographia Diatomologica: Annotated Diatom Micrographs, vol.7, 925p, Scientific Books.

4－表4　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

No.	分類群	種群	2468	2467	2466	2465	2464	2463	2462	2461	2460	2459	203	204	205	1993	1994	1995	1996	1997	1998
1	*Nitzschia levidensis* var. *salinarum*	E1							1												
2	*Thalassiosira bramaputrae*	?									3										
3	*Achnanthes crenulata*	W													1						
4	*A.* *japonica*	W							3												
5	*A.* spp.	?		1																	
6	*Actinella brasiliensis*	O														2					
7	*Amphora ovalis* var. *affinis*	W						9		3											
8	*Aulacoseira ambigua*	N					1														
9	*Cocconeis placentula* var. *euglypta*	W			2	1		1	2		3		3								
10	*C.* *placentula* var. *lineata*	W						2	2												
11	*C.* spp.	?							2				2								
12	*Cymbella amphioxys*	W													2						
13	*C.* *aspera*	O								1											
14	*C.* *cistula*	O			1			1	1			2									
15	*C.* *heteropleura*	W						1													
16	*C.* *naviculiformis*	W			2						2	2									
17	*C.* *subaequalis*	O					3		3		17		3		7	8					
18	*C.* *tumida*	W			2		2	9	8	10	25	4	2		5	10				1	
19	*C.* *turgidula*	K			19	1	1	20	1	3				2	3	2					
20	*C.* *turgidula* var. *nipponica*	K													2						
21	*C.* spp.	?				1	1	1	1		4		3								1
22	*Diatoma* spp.	?															1				
23	*Diploneis yatukaensis*	W												1							
24	*Encyonema gracile*	W	1																		
25	*E.* *silesiacum*	W	1		10	1	4	10		7	7				1						
26	*Epithemia adnata*	W									3										
27	*Eunotia formica*	W													1						
28	*E.* *pectinalis* var. *minor*	O				1	2					1									
29	*E.* *serra*	P				1															
30	*E.* spp.	?	1								2							1			
31	*Fragilaria capucina*	N				4															
32	*F.* *ulna*	W	1		3	3	3		2			2	4					1			
33	*F.* *ulna* var. *arcus*	W													3						
34	*F.* spp.	?			1	1	1										1			1	1
35	*Frustulia vulgaris*	W			2																
36	*Gomphonema acuminatum*	O			7		1			3			3			3					
37	*G.* *augur*	W				1				2						1					
38	*G.* *clevei*	W			1	1			1						2						
39	*G.* *gracile*	O			1																
40	*G.* *parvulum*	W			5	2	4	2			2					3					1
41	*G.* *truncatum*	W					4		4		13	2				3					
42	*G.* spp.	?									4				1						
43	*Gyrosigma acuminatum*	W				3															
44	*G.* *scalproides*	W					1														
45	*Hantzschia amphioxys*	Qa	1			1	2		12	2	11		3					1	1	1	
46	*Luticola mutica*	Qa			2	1							2		4	3				1	
47	*Meridion circulare* var. *constrictum*	K						2													
48	*Navicula confervacea*	W	1																		
49	*N.* *elginensis* var. *neglecta*	O			1		1		1												
50	*N.* *placenta*	W								2					1	2					
51	*N.* *pseudolanceolata*	W	1																		
52	*N.* *viridula*	W					1	10													
53	*Neidium ampliatum*	O			5				4	7	15				2						
54	*Pinnularia acrosphaeria*	O			1	1				5		2									
55	*Pinnularia borealis*	Qa			2				1	3											
56	*P.* *brevicostata*	W							1	13											
57	*P.* *divergens*	W			1																
58	*P.* *gibba*	O			3		1	1		3	5										
59	*P.* *karelica*	W				1															
60	*P.* *lundii*	W								2											
61	*P.* *mesolepta*	W							2	2											
62	*P.* *microstauron*	W					5														
63	*P.* *subcapitata*	Qb							8		1					3					
64	*P.* *viridiformis*	O								2											
65	*P.* *viridis*	O			1				3	10	13	3									
66	*P.* spp.	?							2	3	4	1								1	
67	*Placoneis elginensis*	W								2											
68	*Rhoicosphenia abbreviata*	W					1														
69	*Rhopalodia gibba*	W								5											
70	*R.* *gibberula*	W						1	3	9	5			2							
71	*R.* *quisumbirgiana*	W					1														
72	*Sellaphora americana*	W			3																
73	*Stauroneis acuta*	W			2																
74	*S.* *japonica*	W										5									
75	*S.* *phoenicenteron*	O				5				15											
76	*S.* *phoenicenteron* var. *signata*	O								2											
77	*Synedra* spp.	?			1																
78	*Tabellaria fenestrata*	O					1			3											
79	*T.* spp.	?							1												
1	外　洋	A																			
2	内　湾	B																			
3	海水藻場	C1																			
4	海水砂質干潟	D1																			
5	海水泥質干潟	E1							1												
6	海水不定・不明種	?																			
7	海～汽水不定・不明種	?																			
8	汽水藻場	C2																			
9	汽水泥質干潟	D2																			
10	汽水泥質干潟	E2																			
11	汽水不定・不明種	?									3										
14	上流性河川	J																			
12	中～下流性河川	K			19	1	1	22	1	3				2	5	2					
13	湖沼沼沢湿地	N				4	1														
14	最下流性河川	L																			
15	湖沼浮遊性	M																			
16	沼沢湿地付着生	O			20	7	9	2	12	51	50	8	6		9	13					
17	陸生A群	Qa	1		4	2	2		13	5	11		5		4	3		1	1	2	
18	陸生B群	Qb							8		1					3					
19	広布種	W	5		33	13	26	45	28	57	60	15	9	3	16	19		1		1	1
20	不定種	?	1	1	2	2	2	1	6	3	14	1	5		1		2	1		2	2
21	不明種	?																			
	海水種								1												
	海～汽水種																				
	汽水種										3										
	淡水種		7	1	78	29	41	70	68	119	136	24	25	5	35	40	2	3	1	5	3
	不明種																				
	合　計		7	1	78	29	41	70	69	119	139	24	25	5	35	40	2	3	1	5	3



４－図２　各地点の珪藻化石分布図（50個体以上出現した試料を表示）



４－図版１　産出した珪藻化石

1. *Thalassiosira bramaputrae*（1d区 西側トレンチ；2460）
2. *Cocconeis placentula* var. *lineata*（1d区 西側トレンチ；2462）
3. *Cymbella naviculiformis*（1d区 西側トレンチ；2466）
4. *Cymbella subaequalis*（2c区 東側深掘トレンチ；1993）
5. *Cymbella turgidula*（1d区 西側トレンチ；2463）
6. *Diploneis yatukaensis*（2b区 SD005；204）
7. *Gomphonema parvulum*（1d区 西側トレンチ；2466）
8. *Gomphonema truncatum*（1d区 西側トレンチ；2460）
9. *Navicula viridula*（1d区 西側トレンチ；2463）
10. *Pinnularia subcapitata*（1d区 西側トレンチ；2462）
11. *Stauroneis phoenicenteron*（1d区 西側トレンチ；2461）

第３節　花粉分析

森　将志（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

五条川右岸に立地する下田南遺跡では、古代～中世にかけての遺構が検出されている。これらの遺構から採取された試料を対象に、古環境復元を目的として花粉分析を行った。なお、同一試料を用いて珪藻分析も行われている（本章第２節参照）。

（２）試料と分析方法

分析試料は、１d区の西側トレンチと２ｂ区ＳＤ005、２ｃ区東側の深堀トレンチから採取された計19試料である（４－表５）。これらの試料について、以下の方法で花粉分析を実施した。

４－表５　　分析試料一覧

区	遺構	No.	時期	特徴	備考
１ｄ区	西側トレンチ	2468	中世以降	褐灰色（7.5YR4/1）粘質土	旧五条川
		2467		灰褐色（7.5YR5/2）粘質土	
		2466		明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土	
		2465		灰褐色（5YR4/2）粘質土	
		2464		褐色（7.5YR4/3）砂質土	
		2463		明黄褐色（10YR6/8）砂質土	
		2462		灰色（5Y5/1）砂質土	
		2461		灰色（5Y4/1）砂質土	
		2460		オリーブ黒色（5Y3/2）砂質土	
		2459		黒色（5Y2/1）粘質土	
２ｂ区	SD005	203	古代	黒褐色（10YR3/2）粘土	区画溝埋土
		204		にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土	
		205		灰黄褐色（10YR4/2）粘土	
２ｃ区	東側深掘トレンチ	1993		灰黄色（2.5Y6/2）粘土	
		1994		褐灰色（10YR5/1）粘土	
		1995	古代以前	にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土	検出面の下層
		1996		灰黄色（2.5Y6/2）粘土	
		1997		黒色（10YR2/1）粘土	
		1998		灰色（5Y5/1）シルト	

試料（湿重量約３g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、十分な量の花粉化石が含まれていない試料については、プレパラート１枚の全面を検鏡するに留めた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.3461～3468）を作製し、写真を４－図版２に載せた。

（３）結果

19試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉32、草本花粉25、形態分類を含むシダ植物胞子４の、総計61である。これらの花粉・胞子の一覧表を４－表６に、花粉分布図を４－図３に示した。花粉分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科とマメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、十分な量の花粉化石が得られた試料は、１ｄ区の西側トレンチの５試料（2459～

2463）のみであった。これらの５試料は同様な花粉組成を示しており、樹木花粉ではマツ属（不明）やコウヤマキ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属－マテバシイ属などの産出が目立つ。草本花粉では、いずれの試料においてもイネ科が突出する。また、栽培植物のソバ属やベニバナ属も産出している。

（４）考察

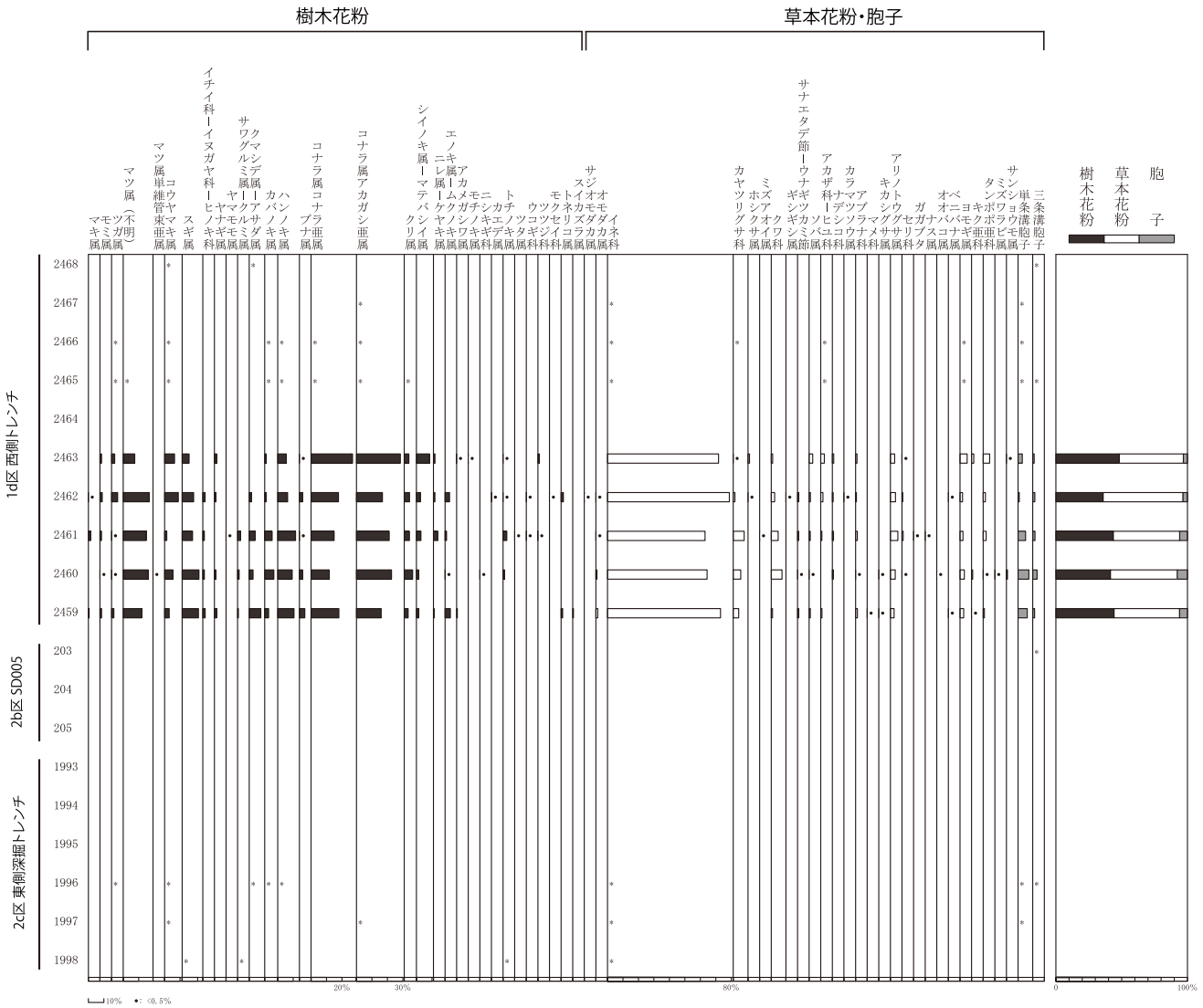
今回の分析試料は、花粉化石の保存状態が総じて良好ではなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では、花粉化石が残りにくい。今回の多くの試料は、採取層準が酸化的環境に晒されたために、花粉化石が分解・消失してしまった可能性がある。なお､珪藻分析においてもほとんどの試料で十分な量の珪藻化石が得られていないが､湿地や河川といった湿潤な環境を示す指標種群が得られている。よって、堆積時は湿潤な環境であったと推測されるが、その後に酸化的環境になった時期があったと考えられる。そうしたなか、１d区の西側トレンチのNo.2459～No.2463からは十分な量の花粉化石が得られたため、以下では中世以降のNo.2459～No.2463の堆積時の旧五条川周辺の古植生について検討する。

No.2459～No.2463では､いずれの試料においてもマツ属(不明)やコウヤマキ属､スギ属､ハンノキ属､コナラ属コナラ亜属､コナラ属アカガシ亜属､クリ属､シイノキ属-マテバシイ属などの産出が目立つ。これらの分類群から周辺の古植生を推測すると、周辺の丘陵地などにはコウヤマキ属やスギ属といった温帯性針葉樹林や、コナラ属アカガシ亜属とシイノキ属-マテバシイ属からなる照葉樹林が分布していたと考えられる。また、マツ属（不明）やコナラ属コナラ亜属、クリ属は二次林要素の植物を含む分類群であり、遺跡周辺の開けた明るい場所には、ニヨウマツ類やコナラ、クリなどの樹木が分布していた可能性がある。さらに、湿地林要素のハンノキ属も産出した。同一試料の珪藻分析の結果によれば、試料採取地点は2460～2462の堆積時には湿地的環境が広がっていたが、その後、2463より上位層になると河川が流入するようになったと推測されており、こうした湿潤な場所にハンノキ属が生育していたと考えられる。

草本花粉ではイネ科が突出しており、旧五条川周辺ではイネ科が分布を広げていた可能性がある。また、サジオモダカ属やオモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ガガブタ、ミズワラビ属、サンショウモ属といった好湿性植物が産出している層準があり、ハンノキ属の湿地林が分布するような場所に生育していた可能性がある。あるいは、好湿性植物のうちサジオモダカ属やオモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属は水田雑草を含む分類群としても知られており、イネ科の多産と合わせて考えると、旧五条川周辺には水田が存在し、そこから花粉がもたらされた可能性も考えられる。その他では、栽培植物のソバ属やベニバナ属が産出した。中世以降の旧五条川周辺ではソバ栽培やベニバナ栽培が行われていた可能性がある。

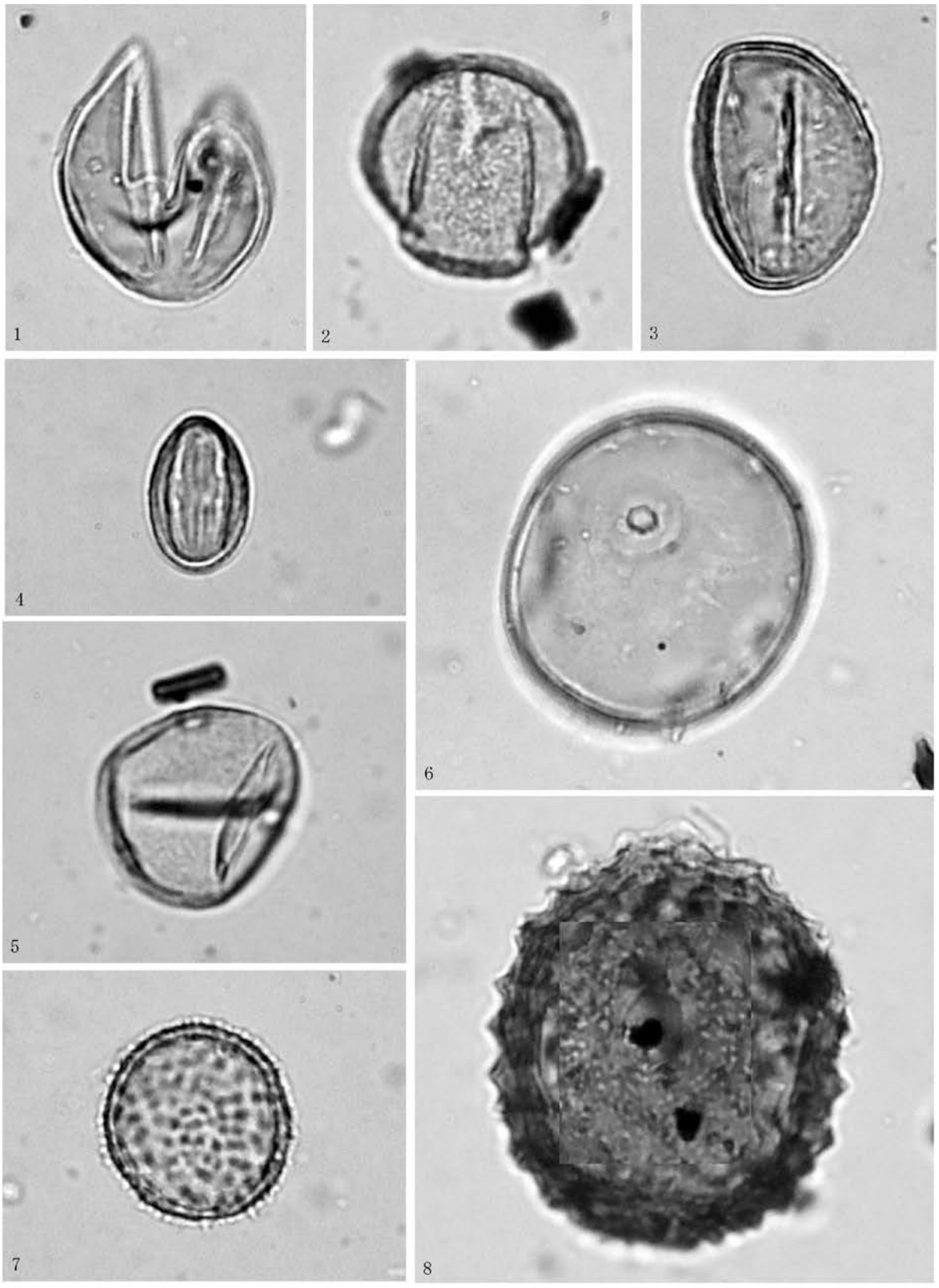
4－表6　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	2468	2467	2466	2465	2464	2463	2462	2461	2460	2459	203	204	205	1993	1994	1995	1996	1997	1998
樹木																				
Podocarpus	マキ属	－	－	－	－	－	－	1	3	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Abies	モミ属	－	－	－	－	－	2	3	2	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tsuga	ツガ属	－	－	1	1	－	4	8	1	1	3	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Pinus (unknown)	マツ属（不明）	－	－	－	3	－	15	34	31	33	24	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Pinus subgen. *Haploxylon*	マツ属単維管束亜属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Sciadopitys	コウヤマキ属	1	－	2	3	－	13	18	3	11	6	－	－	－	－	－	－	25	2	－
Cryptomeria	スギ属	－	－	－	－	－	9	15	14	22	21	－	－	－	－	－	－	－	－	1
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	－	－	－	－	－	－	3	2	2	3	－	－	－	－	－	－			－
Salix	ヤナギ属	－	－	－	－	－	3	2	－	2	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Myrica	ヤマモモ属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	－	－	－	－	－	－	－	4	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	1	－	－	－	－	－	3	8	5	15	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Betula	カバノキ属	－	－	2	1	－	2	2	10	12	5	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Alnus	ハンノキ属	－	－	2	3	－	11	13	24	19	21	－	－	－	－	－	－	3	－	－
Fagus	ブナ属	－	－	－	－	－	1	4	1	4	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	－	－	4	4	－	54	36	31	24	36	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	－	1	1	4	－	57	34	44	46	32	－	－	－	－	－	－	－	1	－
Castanea	クリ属	－	－	－	2	－	6	7	7	11	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Castanopsis－Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	－	－	－	－	－	17	5	6	3	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	－	－	－	－	－	2	2	6	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Celtis－Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	－	－	－	－	－	－	6	2	1	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Mallotus	アカメガシワ属	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Ilex	モチノキ属	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Celastraceae	ニシキギ科	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Acer	カエデ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Aesculus	トチノキ属	－	－	－	－	－	1	1	5	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
Parthenocissus	ツタ属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Araliaceae	ウコギ科	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Ericaceae	ツツジ科	－	－	－	－	－	2	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Oleaceae	モクセイ科	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Fraxinus	トネリコ属	－	－	－	－	－	－	3	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Lonicera	スイカズラ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
草本																				
Alisma	サジオモダカ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Sagittaria	オモダカ属	－	－	－	－	－	－	1	1	2	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Gramineae	イネ科	－	2	11	3	－	155	285	169	184	184	－	－	－	－	－	－	1	1	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	－	－	2	－	－	1	4	19	14	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Eriocaulon	ホシクサ属	－	－	－	－	－	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Monochoria	ミズアオイ属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Moraceae	クワ科	－	－	－	－	－	2	8	12	20	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Rumex	ギシギシ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Polygonum sect. *Persicaria－Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	－	－	－	－	－	3	2	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Fagopyrum	ソバ属	－	－	－	－	－	5	3	2	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	－	－	1	1	－	5	5	2	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Caryophyllaceae	ナデシコ科	－	－	－	－	－	2	2	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Thalictrum	カラマツソウ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Brassicaceae	アブラナ科	－	－	－	－	－	2	2	3	1	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Leguminosae	マメ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Rotala	キカシグサ属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Haloragis	アリノトウグサ属	－	－	－	－	－	6	12	13	9	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Apiaceae	セリ科	－	－	－	－	－	1	2	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Nymphoides indica	ガガブタ	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Solanum	ナス属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Plantago	オオバコ属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Carthamus	ベニバナ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Artemisia	ヨモギ属	－	－	1	1	－	10	6	5	8	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tubuliflorae	キク亜科	－	－	－	－	－	3	－	－	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Liguliflorae	タンポポ亜科	－	－	－	－	－	9	5	5	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
シダ植物																				
Ceratopteris	ミズワラビ属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Salvinia	サンショウモ属	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
monolete type spore	単条溝胞子	－	1	2	2	－	6	3	13	20	15	－	－	－	－	－	－	218	157	－
trilete type spore	三条溝胞子	1	－	－	3	－	2	5	4	8	3	1	－	－	－	－	－	5	－	－
Arboreal pollen	樹木花粉	2	1	12	21	－	201	203	208	203	200	－	－	－	－	－	－	31	3	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	－	2	15	5	－	203	343	240	248	225	－	－	－	－	－	－	1	1	1
Spores	シダ植物胞子	1	1	2	5	－	8	8	17	31	18	1	－	－	－	－	－	223	157	－
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	3	4	29	31	－	412	554	465	482	443	1	－	－	－	－	－	255	161	4
unknown	不明	－	－	1	－	－	4	11	11	7	9	－	－	－	－	－	－	1	－	－



４－図３　花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。
＊は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。



4－図版２　１d区の西側トレンチの2459から産出した花粉化石

1．スギ属（PLC.3461）
2．コナラ属コナラ亜属（PLC.3462）
3．コナラ属アカガシ亜属（PLC.3463）
4．シイノキ属-マテバシイ属（PLC.3464）
5．エノキ属-ムクノキ属（PLC.3465）
6．イネ科（PLC.3466）
7．オモダカ属（PLC.3467）
8．ベニバナ属（PLC.3468）

第４節　プラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

五条川右岸に立地する下田南遺跡において、中世の水田の有無を調べるために堆積物試料が採取された。以下では、試料についてプラント･オパール分析を行い、中世の水田の有無や当時の試料採取地点周辺のイネ科植物相について検討した。

（２）試料と方法

分析試料は、２ｄ区の北壁面の基本土層から採取された９試料（遺物No.137～145）である（４－表７）。時期は古代～中世とされている。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、４－図版３に載せた。

４－表７　分析試料一覧

遺物 No.	調査区	位置	層位	時期	特徴	備考
137	2d 区	基本土層　北壁面	3	古代～中世	にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト	
138			4		にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質シルト	
139			5		灰黄褐色（10YR5/2）シルト	SD
140			6		暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト	SD
141			7		灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土	
142			8		暗褐色（10YR3/3）シルト質粘土	
143			9		にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土	
144			10		暗褐色（10YR3/3）粘土	
145			11		にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土	

（３）結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１g当りの各プラント・オパール個数を求め（４－表８）、分布図を示した（４－図４）。

９試料から検出された機動細胞珪酸体は、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の７種類である。また、イネの籾殻に形成される珪酸体の破片（イネ穎破片）もNo.144で検出されている。

イネ機動細胞珪酸体は全ての試料で産出しており、3,800～76,500個/gとばらつきがある。ヨシ属やキビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体についても、試料によって産出量にばらつきがある。一方で、ネザサ節型機動細胞珪酸体は上位層準に向かって増加傾向が認められ、ササ属型機動細胞珪酸体は上位層準に向かって減少傾向を示している。

4－表８　試料１g当りのプラント・オパール個数

遺物 No.	イネ（個／g）	イネ穎破片（個／g）	ネザサ節型（個／g）	ササ属型（個／g）	ヨシ属（個／g）	シバ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	不明（個／g）
137	21,000	0	61,000	0	3,800	0	7,600	11,400	9,500
138	49,000	0	12,700	0	0	1,000	11,800	5,900	6,900
139	25,000	0	25,000	1,000	4,000	1,000	25,000	10,000	13,000
140	38,000	0	8,000	6,000	4,000	0	17,000	5,000	5,000
141	76,500	0	21,600	7,800	0	0	10,800	7,800	1,000
142	19,600	0	12,700	2,000	0	1,000	10,800	2,900	5,900
143	10,900	0	7,900	5,000	0	0	5,000	0	1,000
144	74,300	1,000	4,000	1,000	2,000	0	20,800	7,900	3,000
145	3,800	0	1,000	9,600	1,000	0	2,900	1,000	1,000

（４）考察

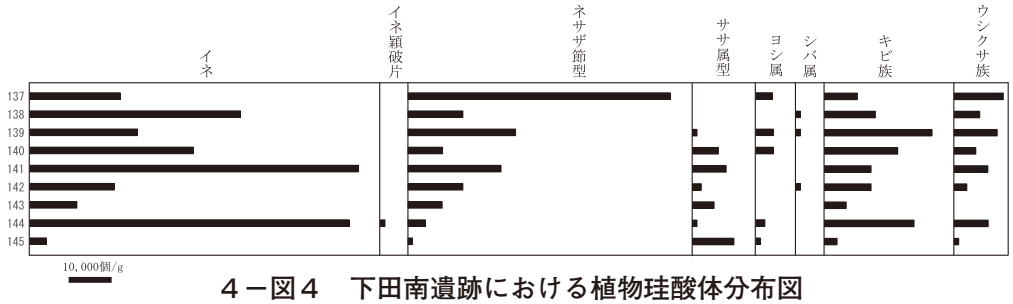
基本土層の各層準からは、イネ機動細胞珪酸体が産出した。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料１g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており（藤原1984）、試料１g当り5,000個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。この目安と比べると、３層（No.137）～10層（No.144）の層準では水田土壌の目安を上回っている。よって、３層～10層堆積時の２d区周辺に水田が存在し、そこからイネの葉身がもたらされた可能性や、この場所が水田であった可能性、人為的な要因で運ばれたイネの葉身が２d区に堆積していた可能性など、いくつかの可能性が考えられる。さらに、10層（No.144）ではイネ機動細胞珪酸体とともにイネ穎破片も検出されており、10層（No.144）の堆積時にはイネの籾殻も堆積していたと考えられる。なお、11層（No.145）では、水田土壌の目安より少ないため、他の層準に比べるとイネの葉身の堆積が少なかった可能性がある。

また、タケ亜科についてはある産出傾向が確認できた。ネザサ節型機動細胞珪酸体は上位層準に向かって増加傾向を示し、ササ属型機動細胞珪酸体は上位層準に向かって減少傾向を示すため、２ｄ区周辺では、ネザサ節型のササ類が次第に分布を拡大し、ササ属型のササ類は次第に分布を縮小していた可能性がある。

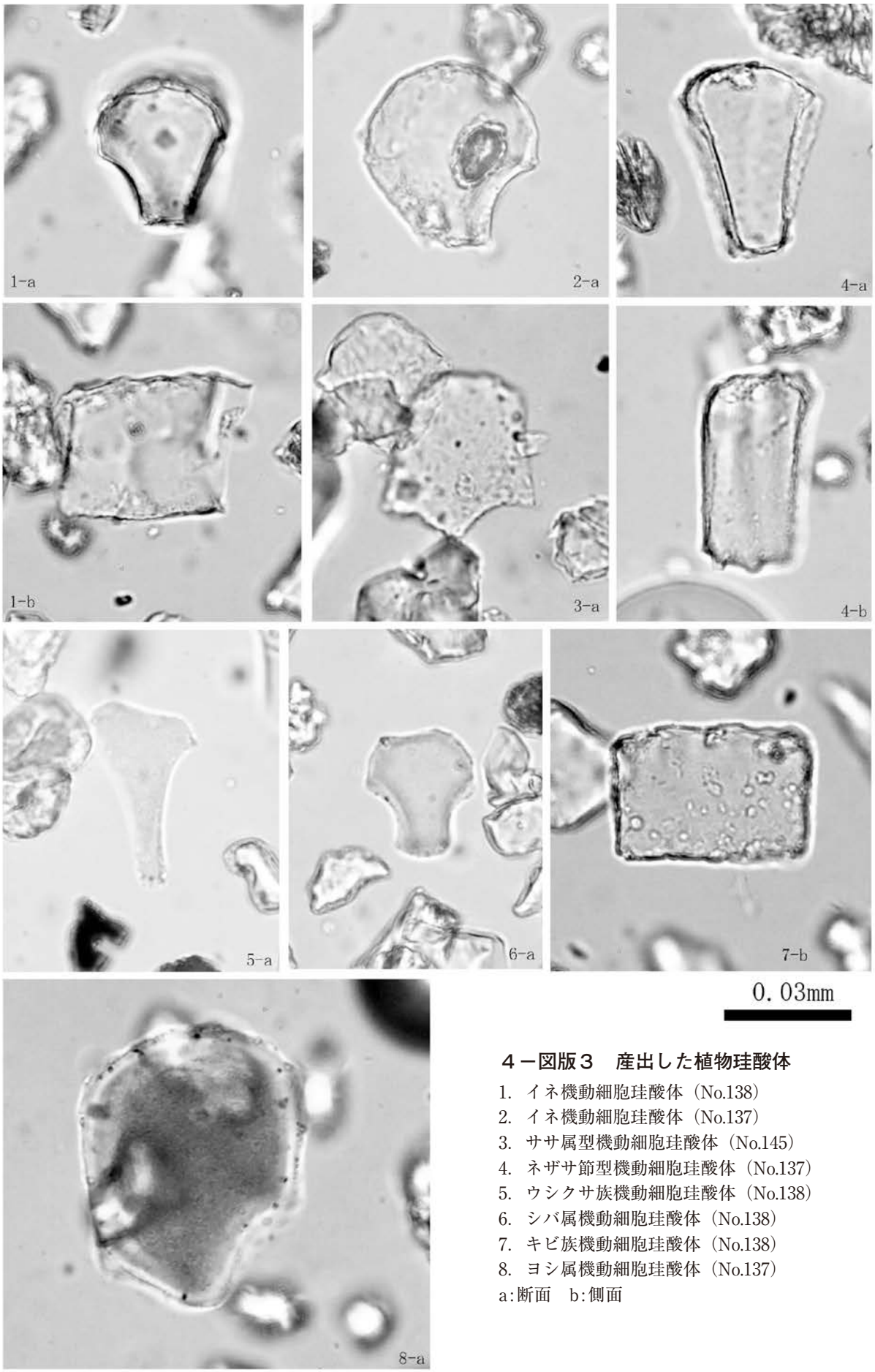
その他にも、２ｄ区周辺にはヨシ属やキビ族、ウシクサ族といったイネ科植物が生育していたと考えられる。このうち、抽水植物のヨシ属については、６層（No.140）より上位層準において産出量が多い傾向がある。基本土層の上位層準の堆積時には、抽水植物のヨシ属が生育できるような湿潤な環境が広がっていたと考えられる。

【引用文献】

藤原宏志（1984）プラント･オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル, 227, ２－７.



４－図４　下田南遺跡における植物珪酸体分布図



４－図版３　産出した植物珪酸体

1. イネ機動細胞珪酸体（No.138）
2. イネ機動細胞珪酸体（No.137）
3. ササ属型機動細胞珪酸体（No.145）
4. ネザサ節型機動細胞珪酸体（No.137）
5. ウシクサ族機動細胞珪酸体（No.138）
6. シバ属機動細胞珪酸体（No.138）
7. キビ族機動細胞珪酸体（No.138）
8. ヨシ属機動細胞珪酸体（No.137）

a:断面　b:側面

第５節　出土木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

下田南遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。

（２）試料と方法

試料は、柱穴から出土した礎板３点と柱根３点の、計６点である。時期については、古代と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

（３）結果

同定の結果、針葉樹のコウヤマキとスギ、ヒノキの３分類群がみられた。コウヤマキが３点で最も多く、ヒノキが２点、スギが１点であった。同定結果を４－表９に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、４－図版４に光学顕微鏡写真を示す。

（１）コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Siebold et Zucc.　コウヤマキ科　４－図版４　１a-１c（No. ６）

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～５列となる。分野壁孔は窓状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布している１科１属１種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

（２）スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　ヒノキ科　４－図版４　２a-２c（No. １）

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

（３）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　４－図版４　１a-１c（No. ３）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

（４）考察

同定の結果、柱根はコウヤマキとヒノキ、礎板はコウヤマキとスギ、ヒノキであった。コウヤマキ、スギ、ヒノキは、いずれも木理通直で真っすぐに生育する加工性の良い樹種で、特にコウヤマキは水

湿に強く、耐朽性が高い（伊東ほか2011）。

愛知県内で確認されている柱には、マツ属複維管束亜属やヒノキといった針葉樹や、サクラ属やコナラ属クヌギ節といった広葉樹が利用され、礎板ではヒノキの利用が確認されている（伊東・山田編2012）。今回の下田南遺跡でも、柱根や礎板にはヒノキが確認され、傾向は一致するが、コウヤマキやスギも利用されているのが特徴的である。

【引用文献】

平井信二（1996）木の大百科－解説編－．642p，朝倉書房.

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社.

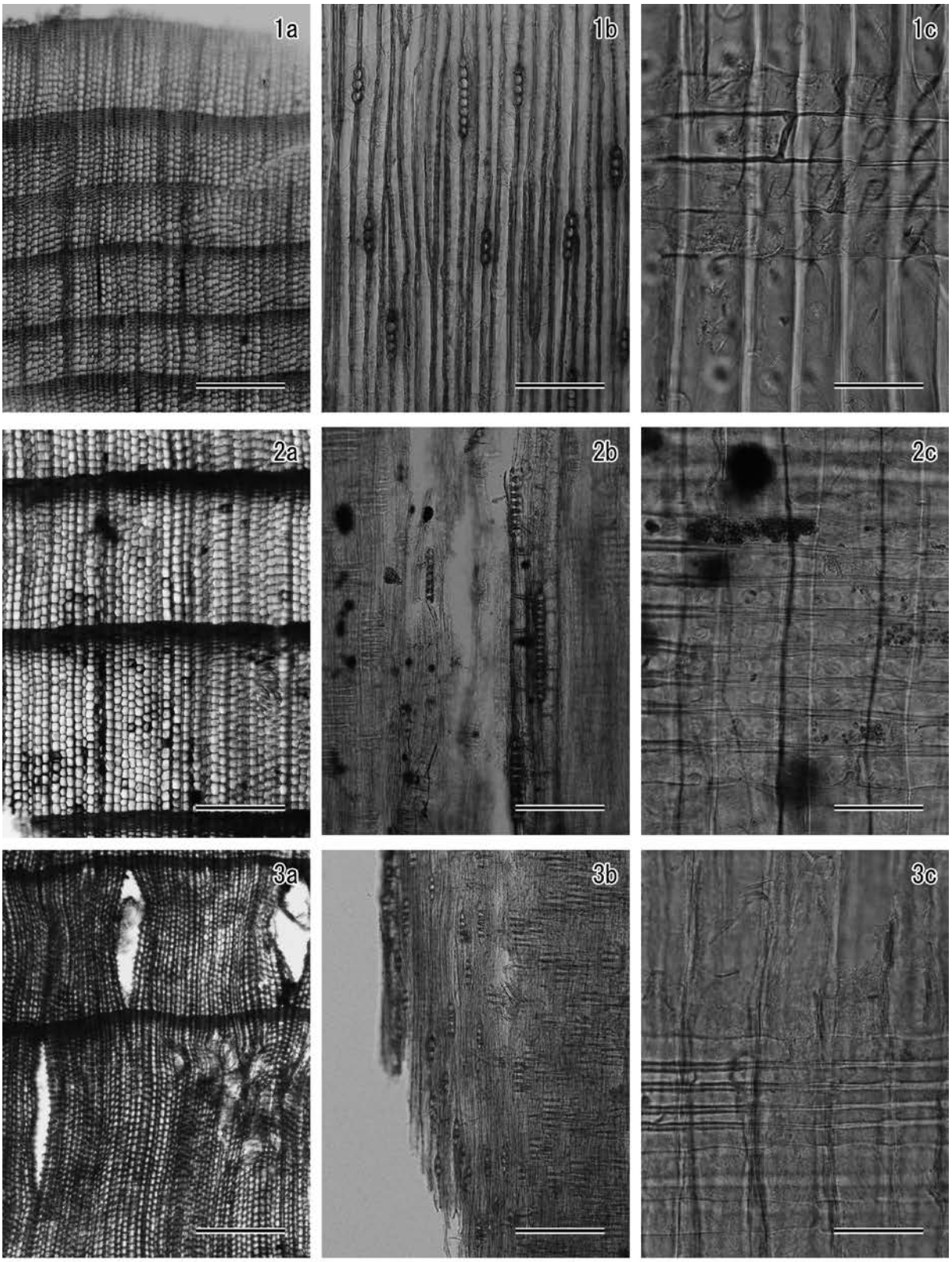
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社.

4－表9　樹種同定結果

樹種／器種	柱根	礎板	合計
コウヤマキ	2	1	3
スギ		1	1
ヒノキ	1	1	2
合計	3	3	6

4－表10　下田南遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

試料 No.	調査区	遺物 No.	出土遺構	器種	樹種	木取り	時期	年代測定番号
1	1b区	364	SP150（SB005）	礎板	スギ	割れ	古代	PLD-44309
2	1b区	365	SP173（SB007）	礎板	コウヤマキ	半割	古代	PLD-44310
3	1b区	368	SP180（SB008）	礎板	ヒノキ	みかん割り	古代	PLD-44311
4	1c区	271	SP075（SB001）	柱根	ヒノキ	半割	古代	PLD-44312
5	1d区	1044	SP791（SB508）	柱根	コウヤマキ	半割	古代	PLD-44313
6	2a区2面	187	SP187（SB002）	柱根	コウヤマキ	半割	古代	PLD-44314



４－図版４　下田南遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

１a-１c.コウヤマキ（No. 6）、２a-２c.スギ（No. 1）、３a-３c.ヒノキ（No. 3）
a:横断面（スケール＝500 μm）、b:接線断面（スケール＝200 μm）、c:放射断面（スケール＝50 μm）

第６節　出土した大型植物遺体（２ｃ区）

バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

下田南遺跡は、古代から中世の遺跡である。ここでは、２ｃ区で取り上げられた大型植物遺体（種実）の同定を行い、当時の利用植物について検討した。

（２）試料と方法

分析試料は、古代の２ｃ区ＳＰ726の埋土から、発掘調査中に肉眼で確認され、採取された種実１点である。

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

（３）結果

同定の結果、木本植物のモモ核の１分類群のみが得られた（４－表11）。

以下に、得られた分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠した。

（１）モモ　*Amygdalus persica* L.　核　バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。高さ30.7㎜、幅25.8㎜、厚さ17.0㎜。

（４）考察

古代の２ｃ区ＳＰ726の埋土から出土した大型植物遺体（種実）を同定した結果、栽培植物で果樹のモモが得られた。モモは、果肉を食べた後に捨てられた可能性がある。あるいは、モモは観賞用や薬用、呪術用、祭祀用などさまざまな目的でも利用されるため（那須，2015）、食利用以外でも何らかの用途で用いられた後に堆積した可能性もある。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には核長は24.6～26.5㎜と比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は23.6～26.6㎜で、鎌倉期には大きさの変異幅が大きくなり、江戸時代後期になると大型になって、平均核長26.9㎜、最大で38.0㎜程度の核がみられるとしている。今回の２ｃ区ＳＰ726のモモは高さ30.7㎜で、山梨県で出土している弥生時代や奈良・平安時代のモモと比較すると、かなり大きめの核であった。

【引用文献】

那須浩郎（2015）古代のモモ．BIOSTORY，22，58-61.

新津　健（1999）遺跡から出土するモモ核について－山梨県内の事例から－．山梨考古学論集IV，361-374，山梨県考古学協会.

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

4－表 11　下田南遺跡出土の大型植物遺体(種実)

		調査区	２ｃ区
		遺構	SP726
		層位	埋土
		遺物 No.	1348
分類群		時期	古代
モモ	核		1

スケール 1:5mm

４－図版５　下田南遺跡から出土した大型植物遺体

１．モモ核（２ｃ区西、SP726、No.1348）

第７節　出土した大型植物遺体（２ｃ区以外）

バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

下田南遺跡は、古代から中世の遺跡である。ここでは、２ｃ区を除く調査区内で検出された古代および古代～中世の可能性が検討されている竪穴建物などから得られた大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、同一試料を用いて昆虫同定も行われている（本章第８節参照）。

（２）試料と方法

試料は、発掘調査時に採取された堆積物25試料である。試料内訳は、古代の１ｄ区ＳＩ609（大型竪穴建物）埋土から7試料、１ｄ区ＳＩ795（小型竪穴建物）埋土から13試料、１ｄ区ＳＰ884から１試料、１ｂ区・Ｒａ区の堀立柱建物群の南東側硬化面（広場状空間）に設定したトレンチ埋土から３試料、古代以降の１ｃ区ＳＫ448（炭多量の方形土坑）から１試料である。

試料の水洗は、パレオ・ラボにて最小0.5㎜目の篩を用いて10～300ccを水洗した。各試料の水洗量は４－表12と４－表13を参照されたい。同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。イネの籾殻は、小穂軸が残っている場合に1個体とした。その他の同定困難な微細な破片、小穂軸以外の籾殻、籾殻（灰状）、動物遺体の破片はおおよその数を記号（＋）で示した。

（３）結果

同定の結果、木本植物では広葉樹のブドウ属種子の１分類群、草本植物ではスゲ属果実とイネ籾殻･籾殻（灰状）･炭化籾殻、キケマン属種子、カラムシ属果実の４分類群の、計５分類群が得られた。このほかに、残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な種実の一群を同定不能炭化種実とした。また、大型植物遺体以外には、不明動物遺体も得られたが、同定の対象外とした（４－表12、４－表13）。

以下に、大型植物遺体の産出傾向を時期ごと、遺構別に記載する（同定不能炭化種実は除く）。

［古代］

１ｄ区ＳＩ609：同定可能な種実は得られなかった。

１ｄ区ＳＩ795：イネが少量、スゲ属がわずかに得られた。

１ｄ区ＳＰ884：イネが少量、ブドウ属とキケマン属、カラムシ属がわずかに得られた。

Ｒａ区トレンチ：同定可能な種実は得られなかった。

［古代以降］

１ｃ区ＳＫ448：同定可能な種実は得られなかった。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、４－図版６に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

（１）ブドウ属　*Vitis* sp.　種子　ブドウ科

暗茶色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は倒心形に近い倒卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点がある。両側に細く深い溝孔が2つあるが、残存していない。残存長3.4㎜、残存幅2.5㎜。

（２）スゲ属　*Carex* sp.　果実　カヤツリグサ科

黒色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は下端が窄まる楕円形。表面には微細な網目状

隆線がある。残存長0.9㎜、残存幅0.9㎜。

（３）イネ　*Oryza sativa* L.　籾殻・籾殻（灰状）・炭化籾殻　イネ科

黄褐色で、完形ならば上面観が楕円形で、側面観が長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長2.3㎜、残存幅1.9㎜。籾殻の一部は灰状であった。炭化籾殻は、残存長2.0㎜、残存幅0.5㎜。

（４）キケマン属　*Corydalis* sp.　種子　ケシ科

黒色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は腎臓状円形。表面は平滑で、強い光沢がある。残存長0.7㎜、残存幅0.7㎜。

（５）カラムシ属　*Boehmeria* sp.　果実　イラクサ科

淡茶色で、上面観は両凸レンズ形、 側面観は上下が尖ったゆがんだ円形。 表面はざらつく。 長さ1.1㎜、幅0.8㎜。

（４）考察

古代の１ｄ区ＳＩ795（小型竪穴建物）の埋土からは栽培植物のイネと野生植物のスゲ属が得られた。１ｄ区ＳＰ884からは、栽培植物のイネと野生植物で食用可能なブドウ属のほか、キケマン属とカラムシ属が得られた。イネは籾殻と炭化籾殻、灰状の籾殻が産出しており、籾摺り後に廃棄され、一部は被熱した可能性がある。スゲ属やキケマン属、カラムシ属は周辺の道端に生育していたと考えられる。

【引用文献】

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

4－表 12　下田南遺跡から出土した大型植物遺体（1）（括弧内は破片数）

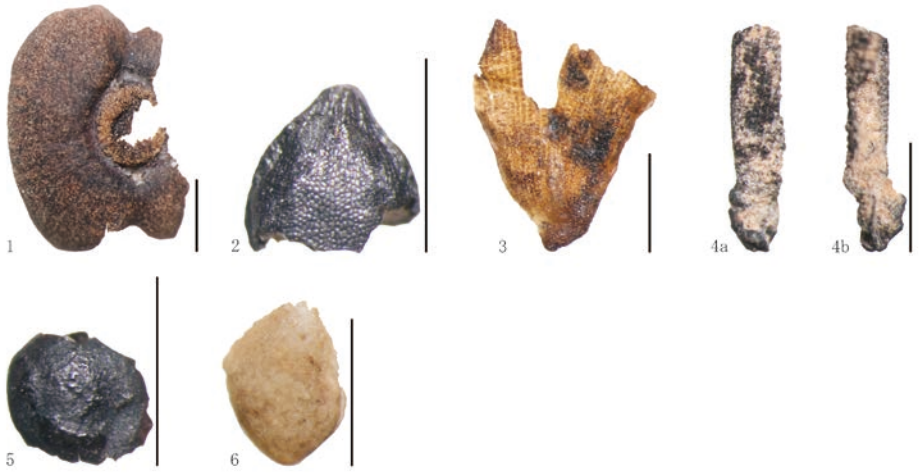
	調査区	1c区	1d区											
	遺物No.	821	1508	1509	1510	1512	1513	1514	1515	1659	1660	1661	1662	1663
	遺構	SK448	SI609							SI795				
		炭多量の方形土坑	大型竪穴建物埋土							小型竪穴建物埋土				
	層位	－	土層①	土層③	土層⑥	土層①	土層③	土層⑦	土層⑨	土サンプル①	土サンプル②	土サンプル③	土サンプル④	土サンプル⑤
	時期	古代以降	古代											
分類群	水洗量(cc)	200	50	30	50	20	50	25	60	20	10	10	40	25
イネ	籾殻(灰状)									(+)	(+)		(+)	
同定不能	炭化種実					(1)								
不明	動物遺体		(+)							(+)				
備考		種実なし		種実なし	種実なし		種実なし	種実なし	種実なし			種実なし		種実なし

+:1-9

4－表 13　下田南遺跡から出土した大型植物遺体（2）（括弧内は破片数）

	調査区	1d区									Ra区		
	遺物No.	1664	1665	1666	1667	1668	1669	1670	1673	1818	402	403	404
	遺構	SI795								SP884	トレンチ		
		小型竪穴建物埋土								－	堀立柱建物群の南東側硬化面(広場状空間)埋土		
	層位	土サンプル⑥	土サンプル⑦	土サンプル⑧	土サンプル⑨	土サンプル⑩	土サンプル⑪	土サンプル⑫	土サンプル⑬	土サンプル	1層	2層	3層
	時期	古代											
分類群	水洗量(cc)	30	100	30	50	60	75	75	15	300	75	100	45
ブドウ属	種子									(1)			
スゲ属	果実		(1)										
イネ	籾殻									(+)			
	籾殻(灰状)				(+)								
	炭化籾殻				1	1		(+)		7(++)			
キケマン属	種子									(1)			
カラムシ属	果実									1			
同定不能	炭化種実				(2)							(1)	
不明	動物遺体			(+)				(+)					
備考		種実なし					種実なし		種実なし		種実なし		種実なし

+:1-9,++:10-49



スケール 1-6：1mm

4－図版 6　下田南遺跡から出土した大型植物遺体

1．ブドウ属種子（1 d 区東、SP884、No.1818）、2．スゲ属果実（1 d 区東、SI795、No.1665）、3．イネ籾殻（1 d 区東、SP884、No.1818）、4．イネ炭化籾殻（1 d 区東、SI795、No.1667）、5．キケマン属種子（1 d 区東、SP884、No.1818）、6．カラムシ属果実（1 d 区東、SP884、No.1818）

第８節　1b区・Ra区掘立柱建物群の南東側硬化面埋土から得られた昆虫片

森　勇一（東海シニア自然大学）・株式会社パレオ・ラボ

（1）はじめに

下田南遺跡は、古代から中世の遺跡である。ここでは、古代の１ｂ区・Ｒａ区掘立柱建物群の南東側硬化面の埋土から得られた昆虫の同定を行い、当時の古環境について検討した。

（2）分析試料と方法

分析試料は、Ｒａ区のトレンチ内から採取された古代の掘立柱建物群の南東側硬化面の埋土である。この埋土75ccを、株式会社パレオ・ラボで水洗浮遊選別し、得られた昆虫片の同定を行った。

（3）分析結果

水洗の結果、計５点の昆虫片が検出された。いずれも大変微細であり、最も大きな昆虫片で長さ1.1㎜、最小の昆虫片は0.6㎜であった。いずれも暗褐色のキチン質よりなる体節片である。

試料１（４－図版７－１）は、最大幅0.6㎜のアリ科 Formicidae gen. et sp. indet.の腹部である。赤褐色ないし飴色の腹部を有する特徴から、アミメアリ*Pristomyrmex punctatus*やトビイロシワアリ*Tetramorium tsushimae*の可能性があるが、アリの腹部には識別可能な特徴が認められず、これ以上の分類・同定は困難である。

試料２（４－図版７－２）は最大幅0.7㎜であり、ハネカクシ科の小型種の頭部であると考えられるが、複眼の部分を欠くため、前胸背板の可能性もある。

試料３（４－図版７－３）と試料４（４－図版７－４）は、ともに同一分類群に属する体節である。長さ0.8㎜、最大幅0.5㎜のリング状の環節で、特徴に乏しく、同定は難しい。試料３、試料４ともに、キチン化し硬化した黒褐色の部分からはみ出るように、明褐色でキチン化の乏しい部位が認められる。この部分は体節どうしを連結する関節部にあたる可能性が高い。昆虫の成虫では通常このような部位は存在せず、また背面と腹面は異なる体節で構成され、本標本のような連続した環節とはならないため、昆虫を含めた節足動物の体節であるとした。

ムカデ Chilopodaやヤスデ Diplopodaなどを含む多足類の体節片である可能性や、昆虫であるとすれば、幼虫ならこのような体節および関節部を有する可能性がある（梅谷編，1994）。たとえば、キマワリ*Plesiophthalmus nigrocyaneus*の幼虫やハサミムシ類 Dermapteraの幼虫は、本標本とも似たキチン化した構造の体節を有するため、採取された試料が水分の多いじめじめした堆積環境であったとすれば、後者の可能性も十分に考えられる。

試料５（４－図版７－５）は長さ1.1㎜で、２ないし３節からなる微小体節が癒合した構造を有し（皆越，2005）、歩脚を連結する基節の部分が確認される点から、アリ科の胸部と考えられる。

（4）昆虫が示す古環境

得られた計５点の昆虫ないし昆虫をも含めた節足動物の体節片の情報から下田南遺跡の古代における古環境を推定・復元するのは、残念ながら難しい。その理由としては、出現昆虫があまりにも少ない点や、出現昆虫の部位が微細で、特徴に乏しい部位のみで占められたため、種の同定に至らなかった点が挙げられる。

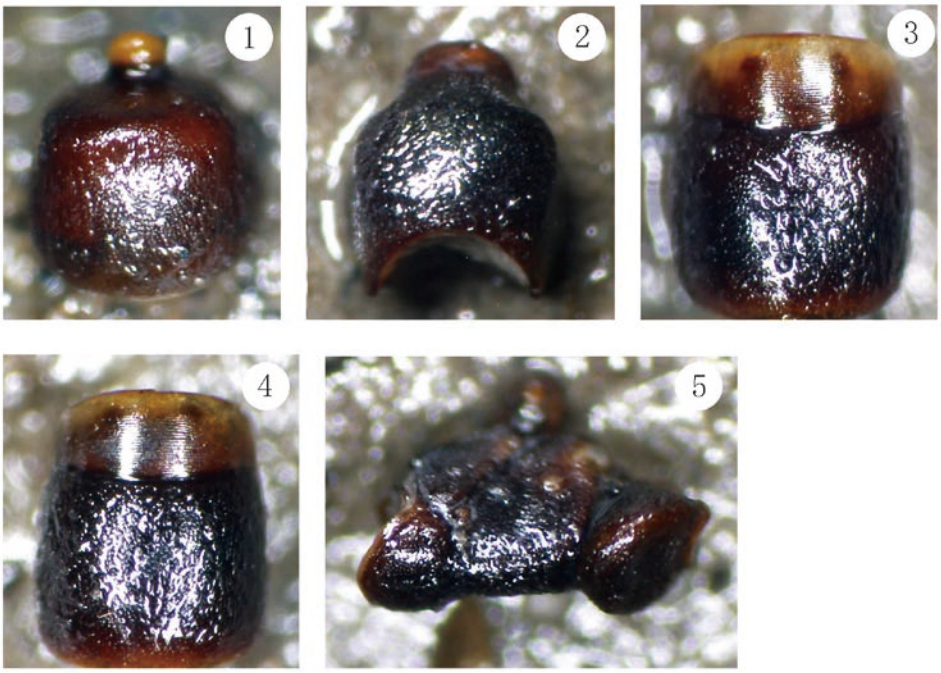
検出された昆虫のうち、アリ科（試料１および試料５）は、乾燥した砂地盤を好む地表性歩行虫で

ある。またハネカクシ科（試料２）は、アリ科同様、地表性歩行虫の仲間であるが、動物の屍体や生活ゴミなどに集まることが多い昆虫である。試料３および試料４は同一分類群に属する体節片であるが、仮にこれがキマワリやハサミムシ類に同定されるとすれば、前者からは森林植生の存在が、後者からは生活ゴミなどが堆積した湿潤地表面の存在が指摘される。しかし、これらはあくまでも可能性を示したに過ぎない。種の同定が可能な追加試料が望まれる。

【引用文献】

皆越ようせい（2005）土の中の小さな生き物ハンドブック．78p，文一総合出版.

梅谷献二編（1994）原色図鑑野外の毒虫と不快な虫．331p，全国農村教育協会.



４－図版７　下田南遺跡から得られた昆虫化石

１．アリ科　Formicidae gen. et sp. indet.　腹部　最大幅0.6㎜
２．ハネカクシ科　Staphylinidae gen. et sp. indet.　頭部　最大幅0.7㎜
３．節足動物　Arthropoda fam., gen. et sp. indet.　体節片 長さ0.8㎜
４．節足動物　Arthropoda fam., gen. et sp. indet.　体節片 長さ0.8㎜
５．アリ科　Formicidae gen. et sp. indet.　部片　長さ1.1㎜

第９節　出土した動物遺体

三谷智広（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

下田南遺跡の発掘調査において出土した動物遺体の同定結果を報告する。

（２）試料と方法

試料は、下田南遺跡から出土した臼歯１点である。１ｅ区１面から出土し、所属時期は中世以降と考えられている。顎骨に植立しない遊離歯であるため、歯冠部や歯根部の形態を観察し、標本との比較により分類群を同定した。

（３）結果

頬側のエナメル質の特徴や咬合面の形状などから、ウマの上顎臼歯と判断される。ウマの上顎臼歯は、咬合面の形状や歯根部の形態から大まかに歯種の特定が可能であるが、試料は咬合面の舌側が欠損しており、歯種の特定には至らなかった。左上顎の第３前臼歯から第２後臼歯のいずれかの臼歯と考えられる。

4－表 14　下田南遺跡の動物遺体同定結果

No.	地区 遺物 No.	層位	分類群	部位	左右	点数	状態	備考
1	1ｅ区１面 № 0036	遺構検出面	ウマ	上顎第３前臼歯～第２後臼歯のいずれか	左	1	舌側欠損	歯冠長 :27.9㎜ 歯冠幅 :19.5㎜（残存部） 歯冠高 :52.5㎜

４－図版８　下田南遺跡出土の動物遺体

１．ウマ左上顎臼歯（舌側面）

第10節　出土須恵器の蛍光Ｘ線分析

竹原弘展（パレオ･ラボ）

（1）はじめに

下田南遺跡より出土した古代の須恵器について、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行った。

（2）試料と方法

分析対象は、遺跡より出土した須恵器３点である（４－表15、４－図版９）。時期は、いずれも古代とみられている。

４－表 15　分析対象一覧

分析 No.	調査区	グリッド	遺物 No.	出土遺構	層位	種別	器種	時期	備考
1	1ｃ区	Ｈ８	1222	SI251	埋土	須恵器	坏？	古代	ヘラ記号
2	1ｃ区	Ｈ５	1242	SP815	埋土		坏？		ヘラ記号
3	2ａ区２面	E21	006	SD166	埋土		甕		

蛍光X線分析には、須恵器よりガラスビードを作製して分析試料とする、ガラスビード法を用いた。試料採取には、岩石カッターを使用した。採取の際には、ヘラ記号や口縁部を避けるよう留意した。採取した須恵器は、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面や破断面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をアルミナ製乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で750℃、６時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム$Li_2B_4O_7$と、メタホウ酸リチウム$LiBO_2$を８：２の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型）にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料、計15種類を用いた。定量元素は、ナトリウム（Na_2O）、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al_2O_3）、ケイ素（SiO_2）、リン（P_2O_5）、カリウム（K_2O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO_2）、マンガン（MnO）、鉄（Fe_2O_3）の主成分10元素と、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の微量成分４元素の、計14元素である。

（3）結果

４－表16に、蛍光X線分析の測定結果を示す。

分析の結果、ナトリウム（Na_2O）が0.23～0.44%、マグネシウム（MgO）が0.29～0.50%、アルミニウム（Al_2O_3）が18.2～22.7%、ケイ素（SiO_2）が68.9～76.3%、リン（P_2O_5）が0.044～0.068%、カリウム（K_2O）が1.92～2.29%、カルシウム（CaO）が0.06～0.20%、チタン（TiO_2）が0.84～0.94%、マンガン（MnO）が0.009～0.017%、鉄（Fe_2O_3）が3.03～5.59%、ルビジウム（Rb）が101～141ppm、ストロンチウム（Sr）が49～66ppm、イットリウム（Y）が24～34ppm、ジルコニウム（Zr）が291～371ppmであった。

4－表16　蛍光X線分析結果（mass%）

分析No.	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)
1	0.27	0.50	18.2	75.5	0.068	2.29	0.08	0.94	0.017	3.09	101.0	141	55	34	291
2	0.44	0.44	22.7	68.9	0.044	2.23	0.20	0.84	0.016	5.59	101.4	109	66	24	371
3	0.23	0.29	18.6	76.3	0.058	1.92	0.06	0.94	0.009	3.03	101.4	101	49	30	338
最小	0.23	0.29	18.2	68.9	0.044	1.92	0.06	0.84	0.009	3.03	101.0	101	49	24	291
最大	0.44	0.50	22.7	76.3	0.068	2.29	0.20	0.94	0.017	5.59	101.4	141	66	34	371

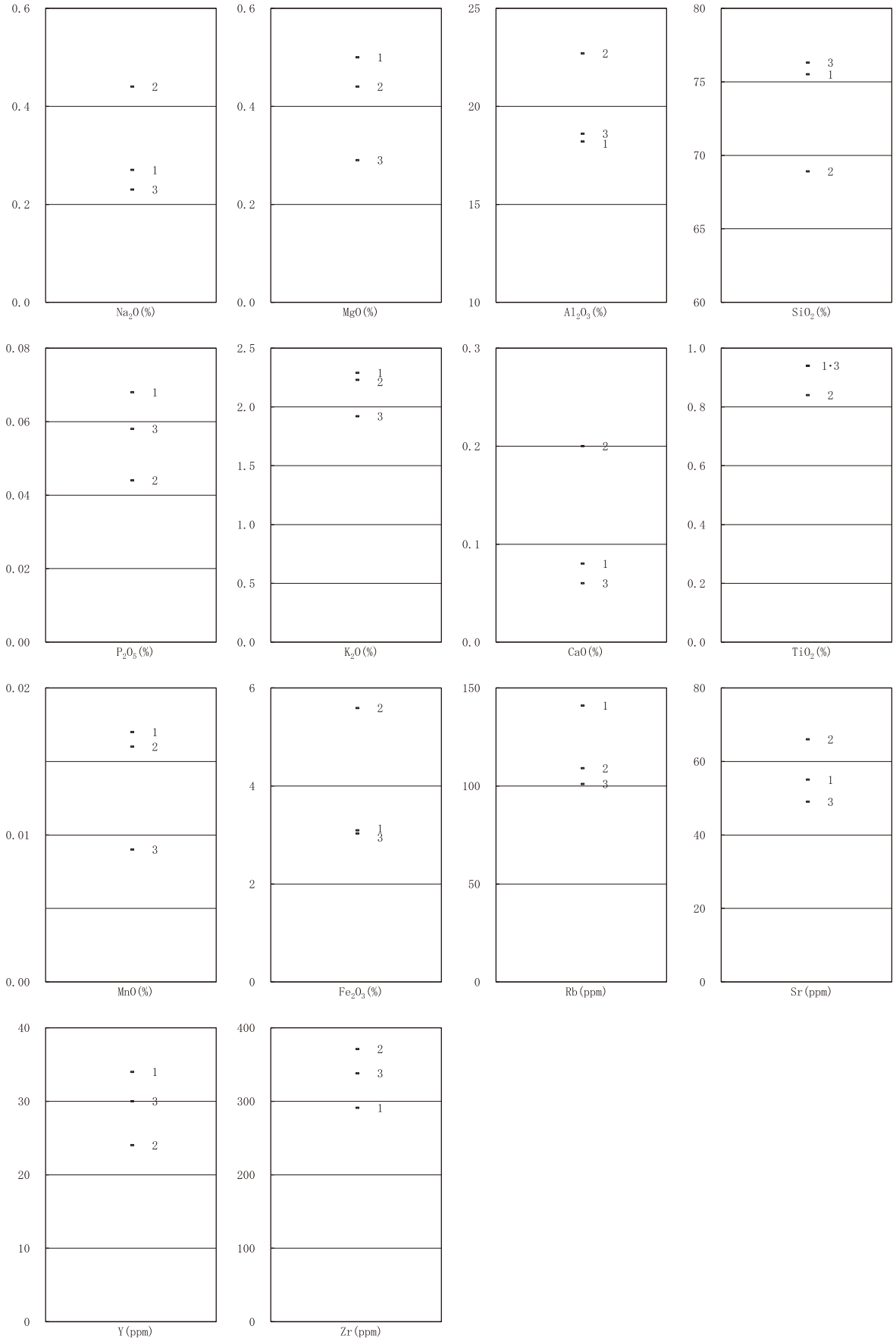
4－図5に、各元素の分布図を示す。

今回分析した3点の試料間を比較すると、試料点数が少ないため判断が難しいが、元素によって異なる傾向がみられ、特定の試料間で特に似た化学組成を示すなどの傾向は認められなかった。極端な化学組成を持つ試料もなく、材料的にそれほど大きな差がない3点と考えられる。

【参考文献】

中井泉編（2005）蛍光X線分析の実際．242p，朝倉書店．

4－図版9　分析対象須恵器


0.6
0.4
0.2
0.0
Na2O(%)
MgO(%)
Al2O3(%)
SiO2(%)
P2O5(%)
K2O(%)
CaO(%)
TiO2(%)
MnO(%)
Fe2O3(%)
Rb(ppm)
Sr(ppm)
Y(ppm)
Zr(ppm)

４－図５　各元素分布図

第11節　【補足】出土木製品の保存処理作業に伴う樹種同定

パリノ・サーヴェイ（株）

（1）はじめに

下田南遺跡から出土した木製品の保存処理作業に伴い樹種同定を行った。

（2）試料と方法

試料は、下田南遺跡から出土した保存処理を行う木製品13点である。発掘調査所見では、時期については古代と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

（3）結果

同定の結果、針葉樹のコウヤマキとスギ、ヒノキ、サワラの４分類群がみられた。ヒノキが最も多く７点で、サワラが３点、コウヤマキが２点、スギが１点であった。同定結果を４－表17に、一覧を表示す。

４－表17　出土木製品の樹種同定（保存処理）結果

樹種／器種	柱根	礎板	礎板か	合計
コウヤマキ	1	1	1	2
スギ		1		1
ヒノキ	2	4	1	7
サワラ	1	2		3
合計	4	8		13

以下に、同定された材の特徴を記載し、４－図版10に光学顕微鏡写真を示す。

（1）コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Siebold et Zucc.　コウヤマキ科　４－図版10　１a-１c（No. 9）

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～５列となる。分野壁孔は窓状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている１科１属１種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

（2）スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　ヒノキ科　４－図版10　２a-２c（No. 2）

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

（3）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　４－図版10　３a-３c（No. 7）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

（4）サワラ　*Chamaecyparis pisifera*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　4－図版10　4a-4c（No. 8）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1～6細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

（4）考察

同定の結果、柱根はコウヤマキとヒノキ、サワラ、礎板と、礎板と考えられる木製品はコウヤマキとスギ、ヒノキ、サワラであった。いずれの樹種も、木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良い樹種である。またコウヤマキとサワラは、水湿に強い、という材質も持つ（伊東ほか，2011）。

愛知県内では、古代の柱にはマツ属複維管束亜属やヒノキといった針葉樹や、コナラ属クヌギ節などの広葉樹が多く、礎板ではヒノキの利用が確認されている（伊東・山田編2012）。下田南遺跡でも、柱根や礎板には主に針葉樹が利用され、傾向は一致する。

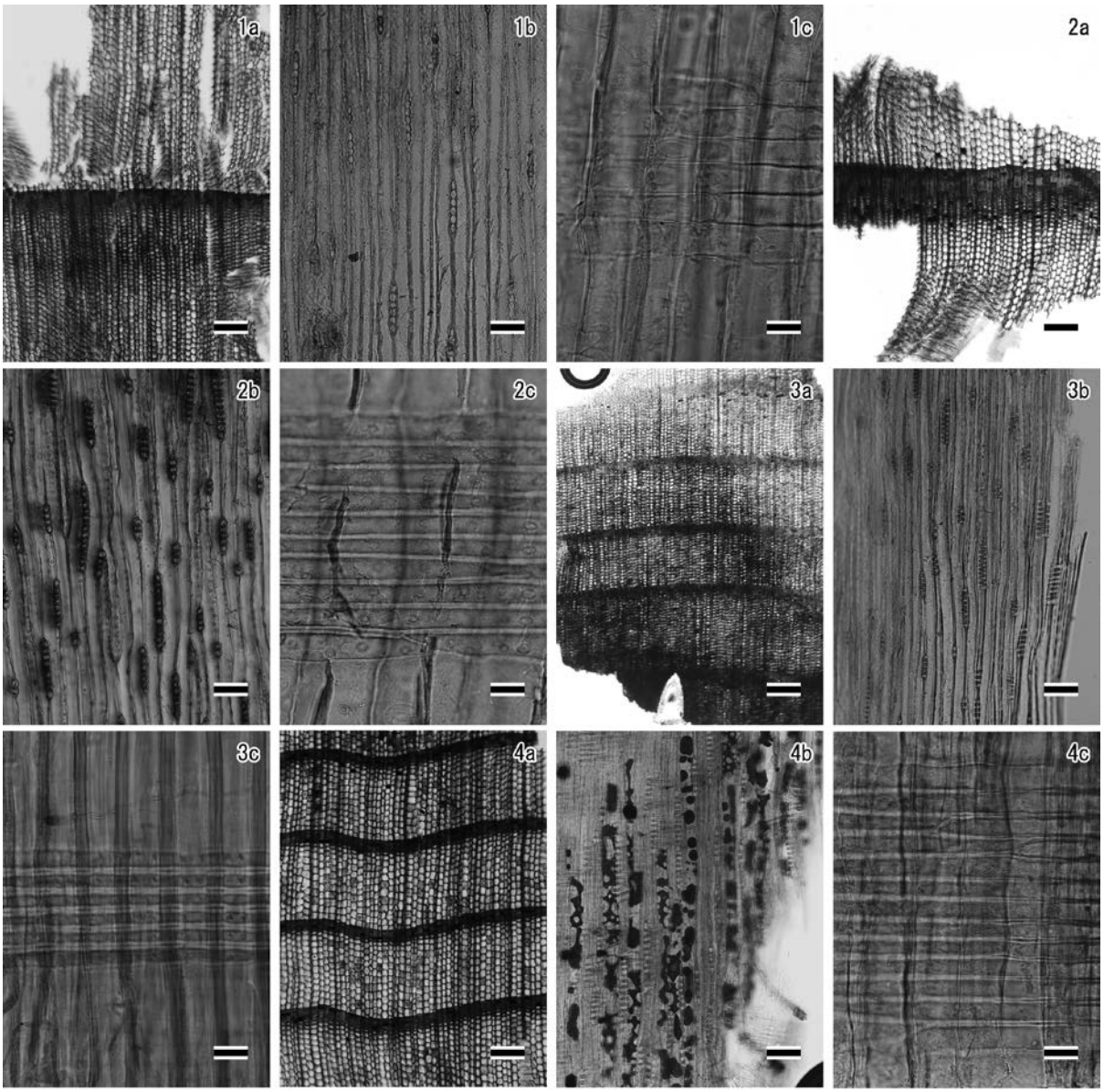
【引用文献】

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社．

4－表18　出土木製品の樹種同定（保存処理）結果一覧

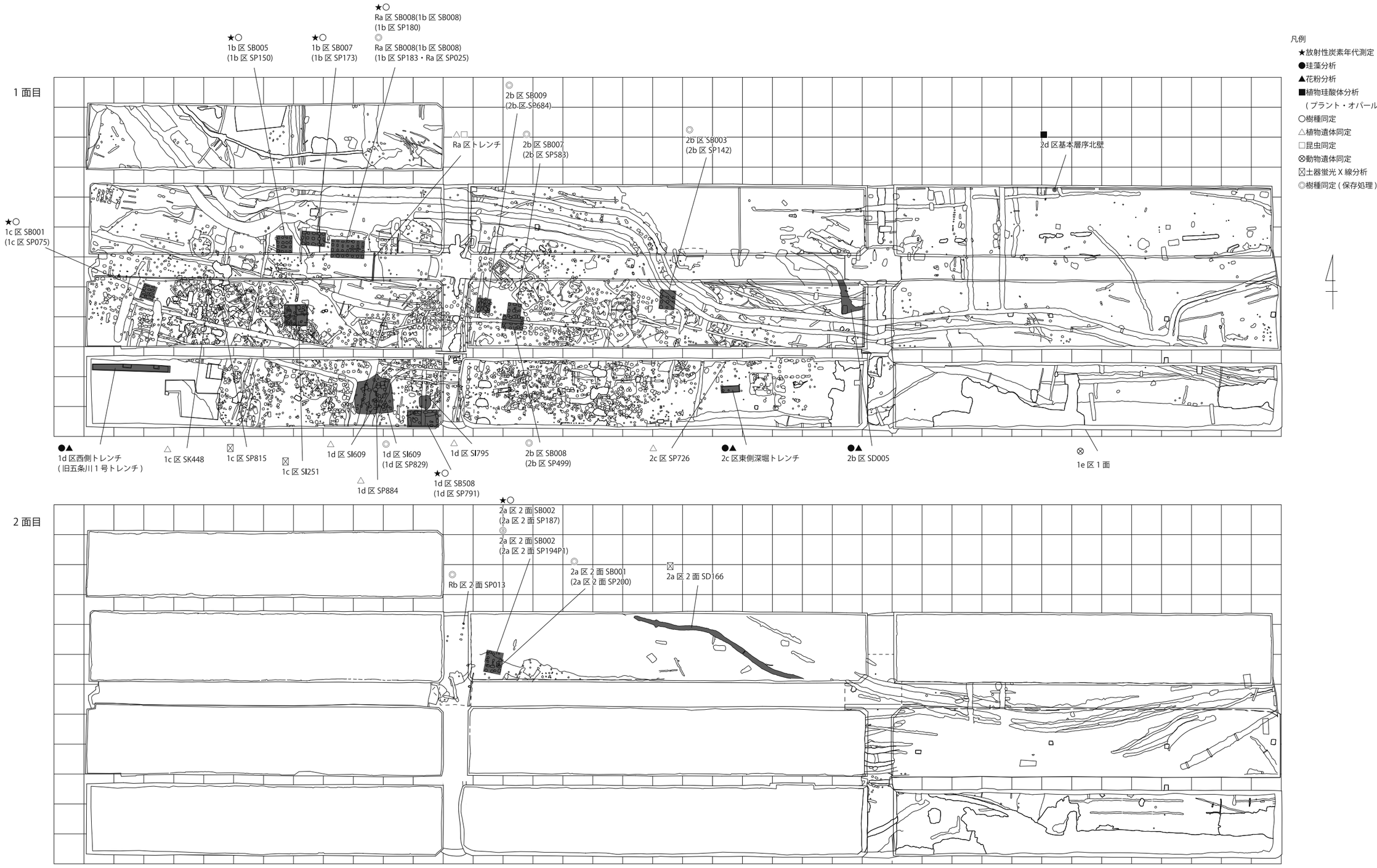
試料 No.	調査区	遺物 No.	報告書 No.	出土遺構	器種	樹種	木取り	時期	備考
1	1d区	1767	747	SP829（SI609）	礎板	スギ	追柾目	古代	
2	1d区	1768	748	SP829（SI609）	礎板	コウヤマキ	追柾目	古代	
3	1d区	1795	752	SP829（SI609）	礎板か	ヒノキ	板目	古代	
4	1b区	371	1368	SP183（SB008）	礎板	ヒノキ	板目	古代	
5	Ra区	76	1365	SP025（SB008）	礎板	ヒノキ	板目	古代	
6	Ra区	77	1366	SP187（SB002）	礎板	ヒノキ	板目	古代	
7	Rb区	59	1427	SP187（SB002）	柱根	ヒノキ	半割	古代	
8	2b区	673	1143・1144	SP142（SB003）	礎板	サワラ	板目	古代	2つに分裂
9	2b区	2045	1145	SP583（SB007）	礎板	コウヤマキ	追柾目	古代	
10	2b区	2202	1146・1147	SP499（SB008）	柱根	サワラ	芯持丸木	古代	2つに分裂
11	2b区	2260	1148	SP684（SB009）	柱根	ヒノキ	板目	古代	
12	2a区2面	189	926	SP200（SB001）	礎板	サワラ	板目	古代	
13	2a区2面	191	928	SP194（SB002）	柱根	コウヤマキ	板目	古代	



４－図版10　下田南遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

１a-１c.コウヤマキ（No. 9）、２a-２c.スギ（No. 2）、３a-３c.ヒノキ（No. 7）、４a-４c.サワラ（No. 8）

a:横断面（スケール=250 μm）、b:接線断面（スケール=100 μm）、c:放射断面（スケール=25 μm）



４－図６　自然科学分析の試料採取地点

第５章　総括

第１節　遺構

（１）調査遺構の時代変遷について

今回の下田南遺跡の発掘調査では、本遺跡が古墳時代～中世にいたる複合遺跡であることが判明した。古墳時代中期（５世紀）から集落としての営みが開始され、古墳時代後期（６世紀）から飛鳥時代（７世紀）・奈良時代（８世紀）にかけて、郡家・官衙遺跡の特徴や性格を窺い知ることができる遺構や遺物が出土し、この時期に集落の規模が大きく発展した状況が窺えた。

今回の調査で出土した遺構の時代変遷については、出土した遺物の年代観を中心に下田南Ⅰ期～Ⅷ期の８時期に設定して、その変遷の過程についてまとめたい（５－図１、附図１～８）。

【下田南Ⅰ期】（附図１）

Ⅰ期は、弥生時代～古墳時代前期（２～４世紀）である。本遺跡の黎明期といえる。調査区全体の東側に、わずかながらではあるが遺構が集中する。代表的な遺構は２ｄ区ＳＤ062、２ｅ区２面ＳＤ118、１ｅ区２面ＳＸ055などで、溝を中心とするが、１ｅ区２面ＳＰ066のように溝以外の遺構も確認できている。位置関係から、２ｅ区２面ＳＤ118と１ｅ区２面ＳＸ055は一体の溝であった可能性も考えられる。遺構の状況からは、本時期の集落は、今回の調査区外の北東側にかけて存在した可能性が予測できるが、詳らかではない。

【下田南Ⅱ期】（附図２）

Ⅱ期は、古墳時代中期（５世紀）である。本遺跡で集落の営みが始まった時期で、萌芽期といえる。調査区全体の中央南側、２ｃ区を中心にわずかながらではあるが遺構が集中して確認できた。代表的な遺構は２ｃ区ＳＩ1000、２ｃ区ＳＫ767、２ｃ区ＳＫ771などで、竪穴建物や土坑などが確認されている。竪穴建物の東側に位置する２ｃ区ＳＫ767は土師器焼成遺構、２ｃ区ＳＫ771は土器の廃棄土坑と考えられ、本遺跡で集落としての生活の営みが開始されたことが窺える。調査区外の南側にかけて集落が展開していた可能性が考えられるが、南側には中世以前の旧五条川が位置していたことも想定でき、本時期の旧五条川の流路がどの位置にあったのかは不明であるが、集落の展開があったとしても中世以前の旧五条川との間のわずかな範囲で営まれていたことも想定できる。

【下田南Ⅲ期】（附図３）

Ⅲ期は、古墳時代後期～飛鳥時代前半（６～７世紀中頃）である。本遺跡で集落の営みが急激に成長した時期で、成長期といえる。調査区東側の全体にかけて湾曲しながら東～北西に並走する数条の溝（２ｅ区２面ＳＤ130など）や、調査区中央～北側にかけて屈折や湾曲しながら東～北西に向かって延びる溝（２ａ区２面ＳＤ166など）などが確認でき、その南～西側に位置する２ｂ区ないしは１ｃ区を中心に、竪穴建物が数多く確認できた。この竪穴建物群の配置は、調査区の西側で確認できた１ｃ区ＳＤ527によって東西に分断されていた可能性も考えられる。本時期の建物については、竪穴建物に比べるとわずかではあるが掘立柱建物も確認でき、２ｂ区ＳＢ011のような側柱構造のもののほかに、小規模ではあるがＲａ区ＳＢ002やＲａ区ＳＢ003、Ｒｃ区ＳＢ003のように総柱構造の建物が出現する。また本時期については、建物の主軸方向に特色を窺い知ることができる。東西南北の正方位に建物主軸方向が合わず、竪穴建物では１ａ区ＳＩ067・１ｃ区ＳＩ169・２ｂ区ＳＩ257など、掘立柱建物では２ｂ区ＳＢ011・Ｒａ区ＳＢ002・Ｒａ区ＳＢ003・Ｒｃ区ＳＢ003などのように、北西

～南東に建物主軸方向を向ける傾向が窺える。１ｂ区ＳＩ230や２ｂ区ＳＩ372のように、一部には建物の長軸を北東～南西に取るものが含まれる。本時期の建物の中心は竪穴建物で、平面方形の建物主軸方向を北西～南東に配置する傾向がある。建物主軸方向を東西南北の正方位に取る竪穴建物の１ｃ区ＳＩ251・１ｃ区ＳＩ226などは、Ⅲ期の末頃（７世紀中頃）と考えられ、Ⅲ期～Ⅳ期への過渡期に位置づけられる。

【下田南Ⅳ期】（附図４）

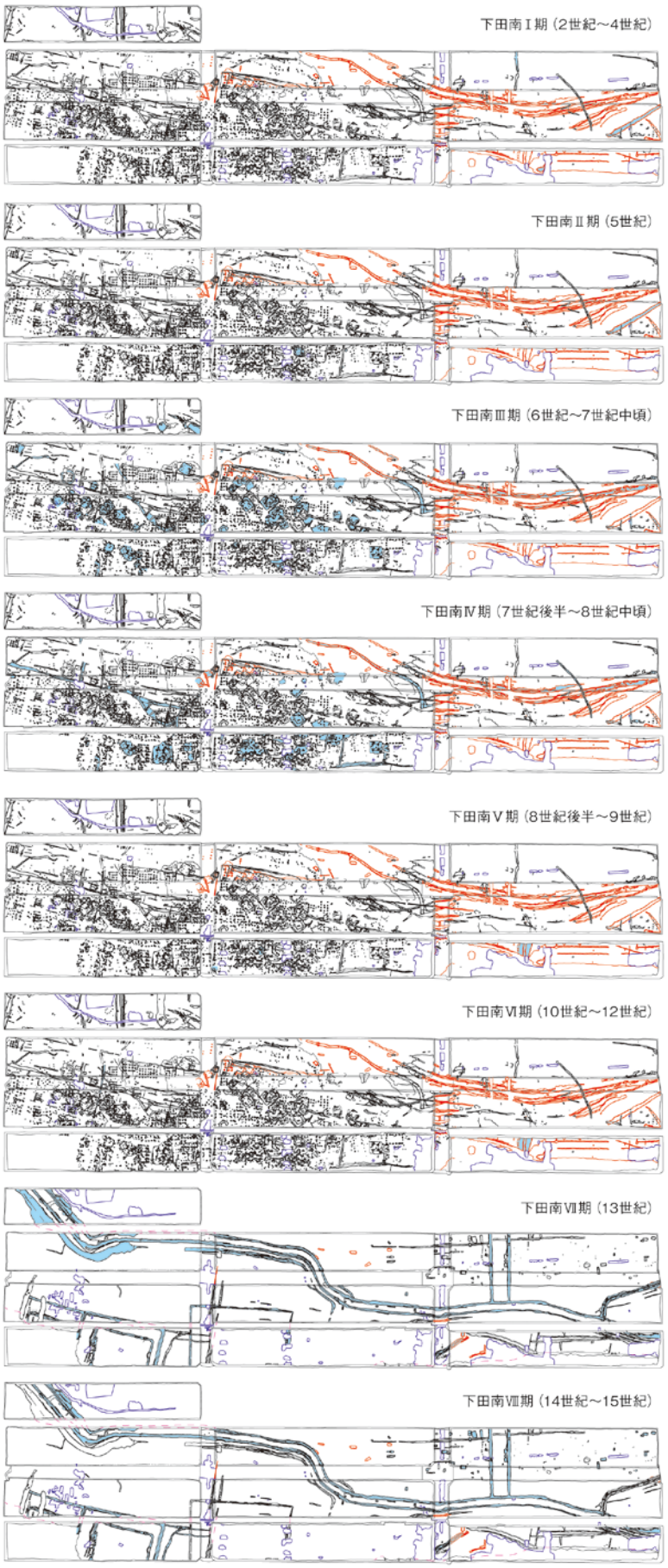
Ⅳ期は、飛鳥時代後半～奈良時代前半（７世紀後半～８世紀中頃）である。本遺跡で集落の営みが最盛となった時期で、全盛期といえる。Ⅲ期に引き続き竪穴建物が構築され、Ⅲ期に比べると竪穴建物の棟数は減少するが、調査区南側で一辺10m以上の大型竪穴建物（１ｄ区ＳＩ609）が見つかっている。また、際立って掘立柱建物が構築されており、１ｃ区ＳＢ007のように大型の四面廂付建物や、１ｃ区ＳＢ002・１ｄ区ＳＢ504・１ｄ区ＳＢ511・１ｄ区ＳＢ508・２ｃ区ＳＢ001・Ｒａ区ＳＢ004などの側柱構造のものが見られるが、１ｂ区・１ｃ区・１ｄ区・２ａ区２面・２ｂ区・Ｒａ区・Ｒｃ区・Ｒｄ区といった全調査区の中央～西側を中心に総柱構造のものが24棟確認されている。総柱構造の掘立柱建物には大小の規模の差はあるが、その大半が穀物類などの倉庫と考えられ、特に整然と並ぶ１ｂ区ＳＢ005・１ｂ区ＳＢ007・１ｂ区ＳＢ010・Ｒａ区ＳＢ008（１ｂ区ＳＢ008）・Ｒａ区ＳＢ001の５棟の倉庫群は「正倉」と考えられ、微高地を選んで構築されている。また本時期の建物の特色として、建物方向が東西南北の正方位に近づく傾向が窺える。竪穴建物の２ｂ区ＳＩ258・２ｂ区ＳＩ257のように北西～南東に建物主軸方向を向けるものは、Ⅲ期の要素が残るものと考えられ、Ⅳ期の初頭（７世紀後半）、Ⅲ期～Ⅳ期への過渡期に位置づけられる。また１ｂ区ＳＢ005・１ｂ区ＳＢ007・１ｂ区ＳＢ010・Ｒａ区ＳＢ008（１ｂ区ＳＢ008）・Ｒａ区ＳＢ001の倉庫群の南には西～南東に延びる１ｂ区ＳＤ042（Ｒａ区ＳＤ101）やＲａ区ＳＤ001（１ｃ区ＳＤ527）・１ｃ区ＳＤ512といった溝が掘削されている。また調査区東側で東西に真っすぐ延びる道路状遺構（１ｅ区２面ＳＤ039・１ｅ区２面ＳＤ050）も本期に位置づけられ、調査区外の東側に位置する薬師堂廃寺跡（飛鳥～奈良・平安時代、以下、本章では他の廃寺との比較呼称として「川井薬師堂廃寺」と記す）と本遺跡との関連が想定される。本時期は、官稲を収納した正倉と考えられる倉庫群や大型の竪穴建物や四面廂付建物の存在から、地方の郡家（評家）としての要素が色濃く窺え、郡を構成した郷の中心となる場所のひとつであった可能性が高い。

【下田南Ⅴ期】（附図５）

Ⅴ期は、奈良時代後半～平安時代初頭（８世紀後半～９世紀）である。本遺跡で集落の営みが極端に減少する時期で、減少期といえる。本遺跡では、Ⅲ期に集落が定着し、Ⅳ期に正倉などを配置する地方郡家（評家）的要素が色濃くなるが、本期になると極端に集落としての機能が減少して、Ⅱ期の様相に戻るような遺構配置となる。調査区全体の中央南側、２ｂ区・２ｃ区を中心にわずかながらではあるが遺構が集中する。代表的な遺構は２ｃ区ＳＩ018・２ｃ区ＳＩ117・２ｃ区ＳＩ447、２ｂ区ＳＢ004・２ｂ区ＳＢ010などで、竪穴建物と掘立柱建物などである。また東側の１ｅ区２面ＳＤ042も本期に相当する遺構である。

【下田南Ⅵ期】（附図６）

Ⅵ期は、平安時代前半～後半（10～12世紀）である。本遺跡で集落の営みが衰退する時期で、衰退期といえる。Ⅴ期に営まれていた集落は途絶え、Ⅰ期よりも遺構数が減少する。調査区西側の１ｂ区～１ｃ区へと南北に続く一体の溝である１ｂ区ＳＤ128・１ｃ区ＳＤ181・Ｒａ区ＳＤ097、Ⅴ期から引き続き東側の１ｅ区２面ＳＤ042も本期に入っても機能していたことが想定される。



５－図１　下田南遺跡Ⅰ～Ⅷ期変遷図

【下田南Ⅶ期】（附図７）

Ⅶ期は、中世に入り鎌倉時代（13世紀）である。本遺跡で集落の営みが再興する時期で、再興Ⅰ期といえる。Ⅶ期に入ると、調査区全体を北西～東に向かって延びる数条の溝（２ａ区１面ＳＤ001・２ａ区１面ＳＤ002など）や、調査区東側で南北に延びる溝（２ｄ区ＳＤ022・２ｄ区ＳＤ047）など多くの溝が確認できた。特に調査区中央～西側の南で確認できた１ｃ区ＳＤ061・１ｄ区ＳＤ075・１ｄ区ＳＤ551、１ｄ区ＳＤ201・１ｄ区ＳＤ254、１ｃ区ＳＤ693・１ｄ区ＳＤ502・２ｂ区ＳＤ219・２ｃ区ＳＤ693・Ｒｃ区ＳＤ063はそれぞれが一体となる大型の平面が方形となる溝で、屋敷を区画した屋敷溝である可能性が高い。調査区中央～西側の南では、旧五条川との間にて屋敷が配置されていたことが想定される。

【下田南Ⅷ期】（附図８）

Ⅷ期は、室町時代（14～15世紀）である。Ⅶ期からの継続となる時期で、再興Ⅱ期といえる。Ⅷ期では、基本的にⅦ期の遺構が継続するが、Ⅷ期の特色として調査区中央～東側の北を中心に方形土坑の配置が開始される。代表的な方形土坑は、２ｂ区ＳＫ017・２ｄ区ＳＫ018・２ｄ区ＳＫ107・Ｒｅ区１面ＳＫ006・Ｒｇ区１面ＳＫ027などである。本期に相当する土坑は27基確認されている。

（基峰）

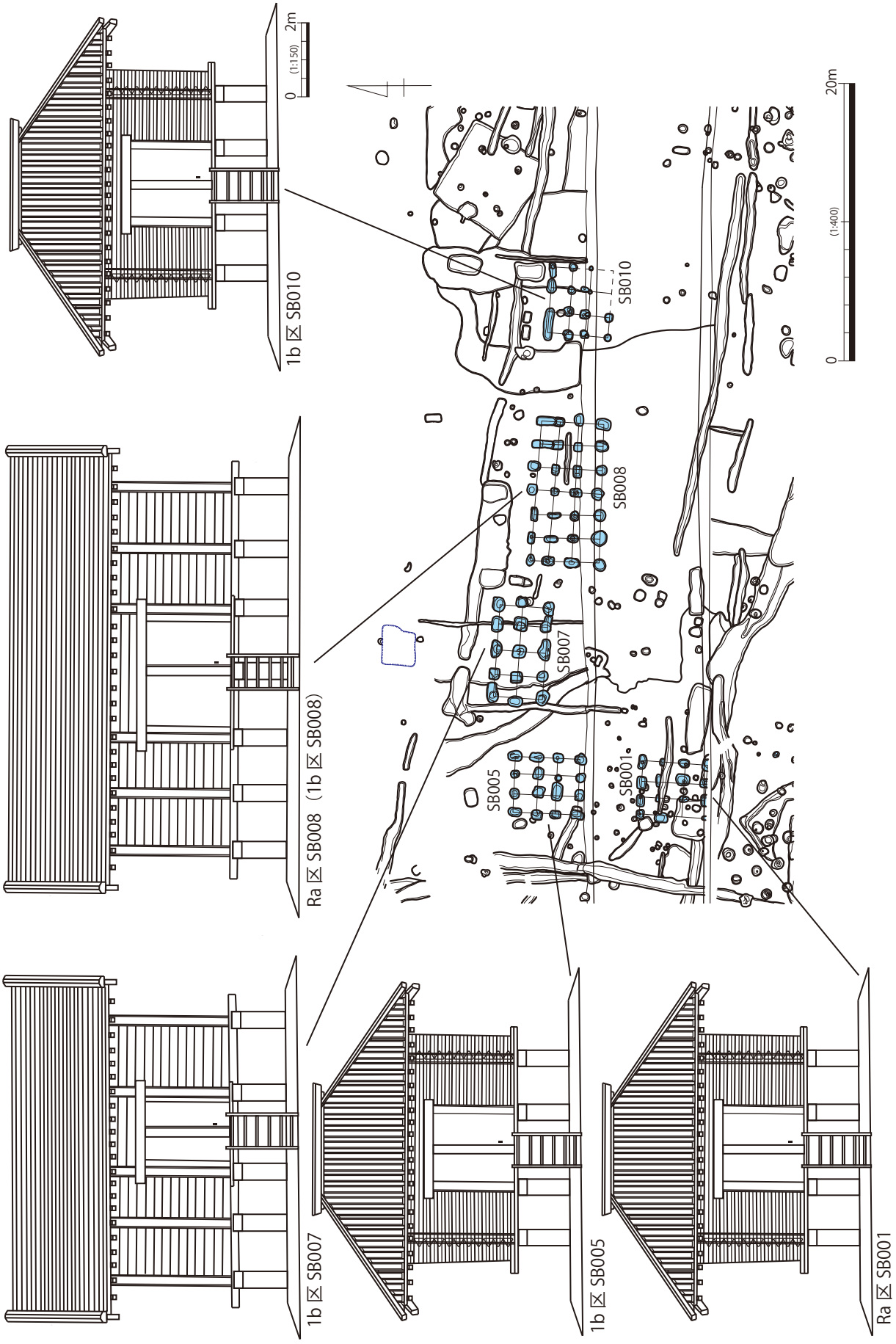
（２）１ｂ区・Ｒａ区に位置する古代倉庫群について

下田南Ⅳ期に営まれた１ｂ区ＳＢ005・１ｂ区ＳＢ007・１ｂ区ＳＢ010、Ｒａ区ＳＢ008（１ｂ区ＳＢ008）・Ｒａ区ＳＢ001の５棟の総柱構造の掘立柱建物は、北列と西列の組み合わせによって平面「鉤」状に整然と配置されていた。いずれも高床建築の倉庫と考えられ、７世紀後半～８世紀中頃にかけて、大中規模の倉庫群が形成されていたと考えられる。

中心となる高床建物はＲａ区ＳＢ008（１ｂ区ＳＢ008）で、西隣に位置する１ｂ区ＳＢ007とともに形状から長倉（横倉）と推定でき、上屋部は切妻屋根であったことが想像できる。１ｂ区ＳＢ005・１ｂ区ＳＢ010・Ｒａ区ＳＢ001の３棟は、形状がほぼ正方形となる倉で、上屋部は寄棟屋根ないしは切妻屋根であった可能性も考えられる。本倉庫群の側壁構造は不明であるが、板倉ないしは校倉（甲倉）などの造りであったことが想像できる（５－図２）。また何を収納していたのかは不明であるが、本倉庫群の南東には広場空間（建物の存在しない空間）が広がることや、その先の南東約20ｍの位置に大型の四面廂付建物である１ｃ区ＳＢ007、さらにその南約15ｍの位置に大型の竪穴建物である１ｄ区ＳＩ609が存在することから、広場空間は「庭」、１ｃ区ＳＢ007は「官舎」（曹司）、１ｄ区ＳＩ609は「厨」とも想定でき、これらの大型建物の配置とともに、倉庫群が整然と規格的に配置された状況からは、本倉庫群が官稲などを収納した「正倉」であったと想像できる（５－図３）。

地方郡家（評家）の正倉建築では、８世紀中頃までは礎石建物ではなく掘立柱建物が主体で、側柱構造のものも含まれるが、総柱構造の高床倉庫が中心で、面積25㎡未満の一般集落の高床建物（掘立柱建物）に比べて、正倉の特徴は４間×３間程度のものがその中核をなし、面積25～60㎡未満の中型の倉や、面積60～100㎡の大型の倉が占めることが指摘されてきた（山中敏史1994、p.133）。本倉庫群は、中核をなすＲａ区ＳＢ008（１ｂ区ＳＢ008）が６間×３間で面積61.60㎡、１ｂ区ＳＢ007が４間×２間で面積35.20㎡、その他の１ｂ区ＳＢ005が３間×３間で面積29.93㎡、１ｂ区ＳＢ010が３間×３間で面積27.12㎡、Ｒａ区ＳＢ001が３間×３間で推定面積24.91㎡を測り、大型の倉１棟と中型の倉４棟から構成され、地方郡家の正倉の要件を十分に満たしている。

本倉庫群が営まれた時期よりやや時代が下るが、『令義解（りょうのぎげ）』に「凡倉、皆於高燥処置之。側開池渠。



５－図２　１ｂ区・Ｒａ区古代倉庫群の配置と復元想定［倉庫復元図：岡部町教委1997、図版１・６を参考に作成］

去倉五十丈内、不得置館舎。」という記述が見られ、大宝令・養老令の倉庫令では、倉庫設置の条件として、高燥の土地であること、防火用の池・溝の設置、50丈（約150m）以内に他の建物を置くことを禁止していたことが窺い知れる。さらに平安時代まで下ると、『類聚三代格』に「応レ建二置倉院一事」として「右被二右大臣宣一偁。奉勅。如レ聞諸国建二郡倉一元置二一処一。百姓之居去レ郡僻遠、跋二渉山川一有レ労二治貢一。加以倉舎比近甍宇相接、一倉失レ火百倉共焼。言念二其弊一、有レ損二公私。宣須下毎レ郷更置二一院一以済二百姓一兼絶中火祥上。始レ自二今年一所レ輸租税収二納新院一。但前所レ納二郡家一不レ動物者、依レ旧莫レ動、其用尽倉者漸遷二新院一。置レ倉之法一依二延暦十年符一、各相去十丈、量レ便置レ之。」という延暦14年７月15日の記述があり、延暦14（797）年７月以降に、正倉を郷ごとに設置するよう定めている。山中敏史氏は、郷に設置された倉を郷倉（山中敏史1994、p.152）と呼称している。平安時代に下るが『和名類聚抄』の尾張国丹羽郡の記述からは、「吾襲、稲木、上春、丹羽、穂積、大桑、下沼、上沼、前刀、小弓、小野、小口」の12郷の名称を窺い知ることができ、現在の岩倉市域は上春郷に属した可能性が指摘されている（一の丸出版1992、p.62）。

本遺跡は旧五条川右岸の堤防上に立地し、今回の調査では本倉庫群は堤防上の微高地に構築されていたことが判明しており、その南に隣接して西～南東に延びる１ｂ区ＳＤ042（Ｒａ区ＳＤ101）やＲａ区ＳＤ001（１ｃ区ＳＤ527）・１ｃ区ＳＤ512といった同時期の溝が確認されている。前述の通り、本倉庫群の南東には東西約60m×南北20mほどではあるが広場空間（建物の存在しない空間）が広がり庭と想定され、本倉庫群の西～北東にかけては約100mに及ぶ建物の存在しない空間が広がることが確認されている。１ｂ区・Ｒａ区に位置する古代本倉庫群は、まさに倉庫令に相当する造営立地に準じている。

また全国の発掘調査によって、地方各国の郡に置かれた正倉の実態は地方社会に応じて多様であることがわかっており、周辺では古代美濃国の武義郡家である弥勒寺遺跡群（岐阜県関市・弥勒寺東遺跡と弥勒寺跡）や古代遠江国の敷智郡家である伊場遺跡（静岡県浜松市）がよく知られる。遠方では古代武蔵国の榛沢郡家である中宿遺跡（埼玉県深谷市）、同国の橘樹郡家である橘樹官衙遺跡群（神奈川県川崎市・千歳伊勢山台遺跡と影向寺廃寺）、同国都筑郡家である長者原遺跡（神奈川県横浜市）などがよく知られている。いずれも飛鳥～平安時代（７～10世紀）にいたる官衙遺跡で、郡家と地方寺院が近接して発掘されている事例が多く、郡家の周辺に寺院があることは一般化した現象といえ（５－表１）、本遺跡と川井薬師堂廃寺との関係を彷彿とさせる。

このことからも、本遺跡にて地方の郡家（ないしは評家）としての要素を色濃く窺うことができるが、本遺跡から郡庁に相当する遺構の存在や、調査区外に目を向けても周辺に郡庁に相当する場所は無いものと考えられ、郡域を考慮しても本遺跡が郡家（ないしは評家）であることは考え難い。丹羽郡の郡家（評家）については、「小折」の地名からも江南市小折地区周辺がその所在地として重視されており（赤塚次郎2001、p.61）、郡家（評家）周辺寺院として長福寺廃寺の存在が知られている。よって、本遺跡は古代尾張国の丹羽郡に置かれた郷の中心となる施設（場所）で、所謂「郡家の出先機関と推定される地方官衙遺跡の一部」（佐藤信2007、pp.77-81）と考えられる。下田南Ⅳ期の様相は、まさに佐藤信（2007、p.81）が指摘するように、地方の郡では「伝統的な単一の郡司氏族が一元的に郡内支配を行っていたというよりも、複数の有力者からなる郡司層による郡司交替が頻繁に行われていた」というような地方社会の多元的な構造を反映しているものと思われる。本倉庫群については、古代出雲国の意宇郡山代郷に設置された正倉と同様に、丹羽郡にて前進的に正倉を分散して主要な郷に設置した可能性があったことも考えておきたい。

（基峰）

５－図３　１ｂ区・Ｒａ区古代倉庫群の想像図［服部仁実画：2022年制作］

国　郡	評・郡家遺構	周辺寺院	寺院の現在地／備考
山背国久世郡	正道官衙遺跡	久世維持	京都府城陽市寺田正道
河内国安宿郡	円明遺跡	☆円明廃寺	大阪府柏原市円明／墨書土器「安宿寺」「安寺」
摂津国島上郡	郡家川西遺跡	芥川廃寺	大阪府高槻市郡家新町
駿河国富士郡	東平遺跡？	三日市廃寺	静岡県富士市伝法三日市／定額寺「法照寺」
甲斐国山梨郡	（国府関連遺跡）	寺本廃寺	山梨県笛吹市春日居町
相模国高座郡	西方遺跡	下寺尾廃寺	神奈川県茅ヶ崎市下寺尾
相模国足下郡	下曽我遺跡	千代廃寺	神奈川県小田原市千代
上総国武射郡	鳴戸東遺跡	☆真行寺廃寺	千葉県山武市／墨書土器「武射寺」（９Ｃ後半）・「大寺」
下総国埴生郡	大畑Ⅰ遺跡	龍角寺廃寺	千葉県栄町龍角寺
常陸国新治郡	古郡遺跡	☆新治廃寺	茨城県筑西市久地楽／文字瓦「新治寺」（８Ｃ後半）・「大寺」
常陸国那珂郡	台渡里遺跡	☆台渡里廃寺	茨城県水戸市／墨書土器「仲寺」（９Ｃ後半）・文字瓦ヘラ「徳輪寺」
常陸国茨城郡	外城遺跡	☆茨城廃寺	茨城県石岡市貝地／墨書土器「茨木寺」・「茨寺」（９Ｃ後半～）
常陸国筑波郡	平沢官衙遺跡	北条中台廃寺	茨城県つくば市平沢
常陸国鹿嶋郡	神野向遺跡	（鹿島神宮寺跡）	茨城県鹿嶋市宮中鹿島山（前身寺院を別に求めるべき）
常陸国河内郡	金田西遺跡	九重東岡廃寺	茨城県つくば市東岡／金田西遺跡に墨書土器「寺」
近江国栗太郡	岡遺跡	（☆霊山寺遺跡）	滋賀県栗東市目川・岡・下戸山／『西宮記』に栗太寺
美濃国武義郡	弥勒寺東遺跡	弥勒寺跡	岐阜県関市池尻／墨書土器「大寺」
信濃国埴科郡	大境遺跡	雨宮廃寺	長野県千曲市雨宮／定額寺「屋代寺」
上野国佐位郡	三軒屋遺跡	上植木廃寺	群馬県伊勢崎市上植木本町ほか／刻印文字瓦「佐位」
上野国新田郡	天良七道遺跡	寺井廃寺	群馬県太田市天良町
武蔵国橘樹郡	千歳伊勢山台遺跡	影向寺廃寺	神奈川県川崎市高津区千年／文字瓦「无射志国荏原評」
武蔵国都筑郡	長者原遺跡	（排堂廃寺）	神奈川県横浜市緑区荏田町
武蔵国幡羅郡	幡羅遺跡	西別府廃寺	埼玉県熊谷市西別府
武蔵国榛澤郡	中宿遺跡	岡廃寺	埼玉県深谷市中宿
下野国那須郡	梅曽遺跡	浄法寺廃寺	栃木県那須郡那珂川町浄法寺
下野国芳賀郡	塔法田遺跡	大内廃寺	栃木県真岡市京和泉
陸奥国名取郡	郡山遺跡	郡山廃寺	宮城県仙台市太白区郡山　※城柵とすべきか
陸奥国賀美郡	東山官衙遺跡	菜切谷寺廃寺	宮城県加美町菜切谷　※城柵との関係要検討
陸奥国安達郡	郡山台遺跡	郡山台遺跡	福島県二本松市郡山台／安達郡は延喜六年に成立
陸奥国行方郡	泉官衙遺跡	植松廃寺	福島県南相馬市原町区
陸奥国磐城郡	根岸遺跡	夏井廃寺	福島県いわき市平下大越石田
陸奥国信夫郡	北五老内遺跡	腰浜廃寺	福島県福島市腰浜町・浜田町
陸奥国白河郡	関和久遺跡	借宿廃寺	福島県白河市借宿
因幡国八上郡	万代寺遺跡	土師百井廃寺	鳥取県八頭町土師百井
因幡国気多郡	上原遺跡	寺内廃寺	鳥取県鳥取市鹿野町寺内
伯耆国八橋郡	大高野遺跡	斎尾廃寺	鳥取県琴浦町槻下
美作国久米郡	宮尾遺跡	久米廃寺	岡山県津山市宮尾（旧久米郡久米町）
備中国英賀郡	小殿遺跡	英賀廃寺	岡山県真庭市上水田
備後国三谷寺	下本谷遺跡	☆寺町廃寺	広島県三次市向江田町／『日本霊異記』「三谷寺」
伊予国久米郡	久米高畑遺跡	☆来住廃寺	愛媛県松山市来住町／伊予国風土記逸文に「久米寺」
筑前国上座郡	井出野遺跡	長安寺廃寺	福岡県朝倉市須川／墨書土器「大寺」「知識」
筑後国御原郡	小郡遺跡	上岩田廃寺	福岡県小郡市上岩田／別に井上廃寺・下高橋官衙遺跡
豊前国上毛郡	大ノ瀬下大坪遺跡	垂水廃寺	福岡県築上郡上毛町
豊前国下毛郡	長者屋敷官衙遺跡	相原廃寺	大分県中津市相原
肥後国託麻郡	水前寺廃寺	水前寺廃寺	熊本県熊本市出水町・神水町
肥後国玉名郡	立願寺遺跡	立願寺廃寺	熊本県玉名市立願寺
上総国望陀郡	（未確認・未確定）	*上総大寺廃寺*	千葉県木更津市大寺
上総国匝瑳郡	（未確認・未確定）	*龍尾寺跡*	千葉県匝瑳市八日市場大寺／郡司は物部匝瑳連（『続日本後紀』）
上総国市原郡	（未確認・未確定）	*光善寺廃寺*	千葉県市原市市原寺山
上野国群馬郡	（未確認・未確定）	*山王廃寺*	群馬県前橋市総社町／文字瓦「放光寺」・交替実録帳・定額寺
武蔵国足立郡	（未確認・未確定）	*大久保領家廃寺*	埼玉県さいたま市桜区大久保領家
伯耆国久米郡	（未確認・未確定）	*☆大御堂廃寺*	鳥取県倉吉市／墨書土器「久米寺」（８Ｃ後半）／定額寺「道興寺」
備中国都宇郡	（未確認・未確定）	*惣爪廃寺*	岡山県岡山市惣爪／旧山陽道を挟んで反対側に幸利（こおり）神社

評・郡家遺構は政庁域未検出も含む。官衙遺跡群内の新・旧遺跡名含む。武蔵国は東山道所属とした。
☆は郡名寺院。斜体は郡家遺跡未確認・未確定であるが「郡寺」と想定されている主な例。

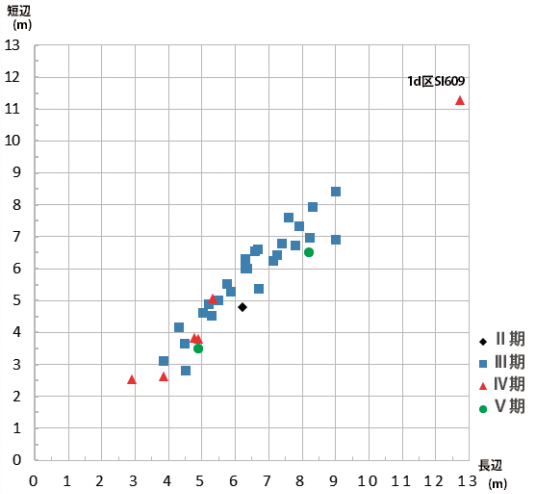
５－表１　郡家（評家）と周辺寺院 ［荒井秀規2017、p.18］

（３）大型竪穴建物（１ｄ区ＳＩ609）について

下田南遺跡から出土した遺構の中で特筆すべきものとして、長辺12.72m、短辺11.28mを測る超大型の竪穴建物である１ｄ区ＳＩ609がある。本遺跡で規模が正確に判明している竪穴建物は35棟あるが、その隔絶度合いは明らかである（５－図４）。本建物は検出面からの計測で、竪穴本体で68.9㎥以上の土が掘削されており、一般的な竪穴建物の掘削土量の数倍以上となる。建物構築の際の労力と、それに見合う重量感ある立派な上屋であったことが想像できる。また本建物の立地は、官衙的施設が立ち並ぶ中に位置しており、住居というよりも来客者などをもてなす厨的施設や集会所的な役割が想像できる。

本建物は現在確認されている古代の竪穴建物では、愛知県内最大級で、近い時期の超大型竪穴建物としては、品野西遺跡ＳＢ28（瀬戸市）、梅坪遺跡ＳＢ529（豊田市）の例が知られる。また愛知県内ではないが、周辺地域では弥勒寺東遺跡大形竪穴建物②（岐阜県関市）がある（５－図５）。

品野西遺跡ＳＢ28は、３棟が重なる内の２棟目として建てられたものである。品野西遺跡は交通の要所に立地し、竪穴建物周辺に四面廂付掘立柱建物や倉庫が確認されていることから、駅家などの公的機関が想定されている（瀬戸市埋文セ1997）。梅坪遺跡ＳＢ529は、同じ位置で建て替えられた３棟の中で最も新しい建物で、その規模から「首長居館」と推測されている。梅坪遺跡は官衙遺跡とはされていないが弥生時代の環濠集落から続く拠点的集落で、７世紀後半～８世紀にかけては掘立柱建物が建てられ、円面硯や銙帯金具が出土する大規模遺跡である（豊田市教委1995、永井邦仁2016）。弥勒寺東遺跡大形竪穴建物②の性格は不明であるが、周囲に掘立柱建物が立ち並ぶ中に立地する（関市教委2015）。弥勒寺東遺跡は古代美濃国武義郡衙（郡家）に比定されており、少数ではあるが近隣の例によると一辺10m前後の超大型竪穴建物には、梅坪遺跡のように前代からの住居の延長上にあるものと、下田南遺跡・品野西遺跡・弥勒寺東遺跡のように官衙的施設の一つとして建てられたものの２つの系統があるように思われる。



５－図４　下田南遺跡の竪穴建物規模

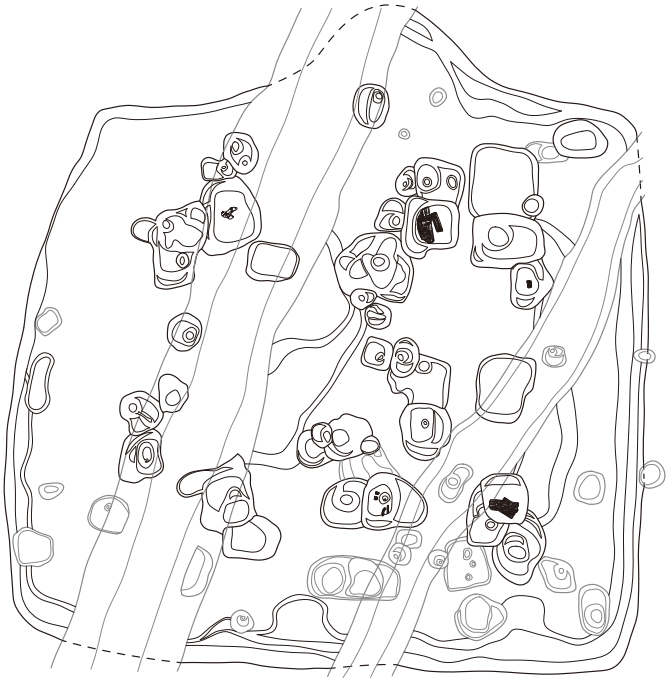
全国的に見るとこうした官衙的施設内に超大型竪穴建物が存在する事例は、主に関東・東北地方で確認されており、今回下田南遺跡でも確認されたことによって、東海地方の官衙（郡家）でも普遍的ではないにせよ存在していた可能性が考えられる。

（小島）

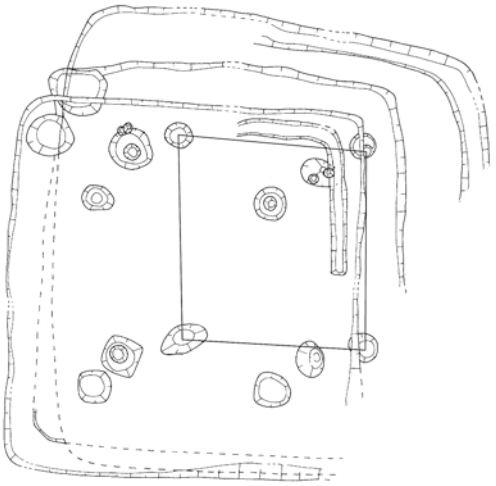
（４）２ｃ区古代竪穴建物の構造変遷について

２ｃ区を事例にして、下田南Ⅳ期（Ⅲ期）～Ⅴ期にかけての竪穴建物の構造と変遷の過程について代表的な竪穴建物の様相を概観し、雑駁ではあるが本遺跡における古代竪穴建物の構造変遷の傾向の把握としたい。

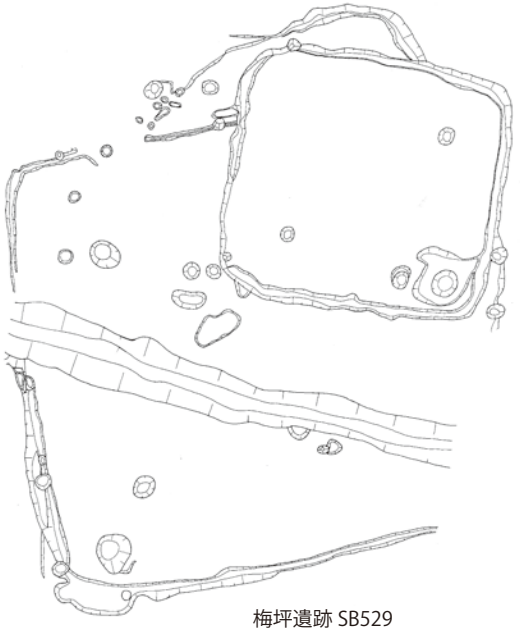
①２ｃ区ＳＩ698は一辺7.60mを測る平面隅丸正方形の竪穴建物で、出土した須恵器高坏や瑞から７世紀中頃の時期と考えられる。下田南Ⅲ期・Ⅳ期に分類したが、Ⅲ期の最も新しい時期～Ⅳ期の最も古い時期と考えられ、Ⅲ期～Ⅳ期の過渡期に位置づけられる。建物は４本支柱で上屋部を支持し、



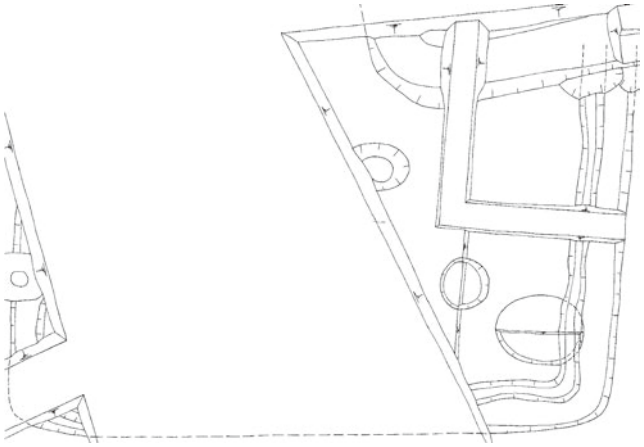
下田南遺跡 1d 区 SI609



品野西遺跡 SB28



梅坪遺跡 SB529



弥勒寺東遺跡大形竪穴建物②

0 (1:150) 4m

遺跡名	遺構名	長辺	短辺	面積	火処	貯蔵穴	主柱	主な出土遺物	時期
下田南遺跡	1d区SI609	12.72	11.28	143.5	不明（カマド）	—	4以上	須恵器:坏蓋・坏身・鉢・盤・壺、土師器:暗文土器・製塩土器、土錘	7世紀末頃～8世紀前半
品野西遺跡	SB28	9.3	8.4	78.1	カマド	—	4	須恵器:坏蓋・高盤・長頸瓶	8世紀
梅坪遺跡	SB529	10.0	9.2	90.0	—	—	不明（4）	須恵器:坏蓋・坏身・高坏・鼈　土師器:高坏・鉢、土錘多数、桃核	6世紀後半～7世紀前半
弥勒寺東遺跡	大形竪穴建物②	12.0	—	—	—	—	—	須恵器:坏蓋・坏身・鉢、土師器:甕・暗文土器、土錘	7世紀後半～8世紀

()内は推定

5－図5　下田南遺跡と周辺の超大型竪穴建物（1:150）

［品野西遺跡：瀬戸市埋文セ1997・p.33第23図、梅坪遺跡：豊田市教委1995・p.67fig.51、弥勒寺東遺跡：関市教委2015・p.65図29］

西側に出入口があったと考えられる。建物内の東壁面の内側にカマドを付設し、形状から煙道は上屋部に直に抜けていたことが想像できる。カマドの脇には貯蔵穴を有している。

②次に２ｃ区ＳＩ990は全長8.20m、幅6.50mの平面不整方形の竪穴建物で、出土した須恵器坏や土師器甕から８世紀中頃の時期と考えられる。下田南Ⅳ期に分類したが、Ⅳ期の最も新しい時期、Ⅴ期の最も古い時期で、Ⅳ期～Ⅴ期の過渡期に位置づけられる。建物の主軸方向は正方位で、建物規模は比較的大きいが２本支柱で上屋部を支持し、南側に出入口があったと考えられる。建物内の北壁面にカマドを付設し、形状から煙道は建物外側に抜けていたことが想像できる。

③最後に２ｃ区ＳＩ447であるが、全長4.90m、幅3.50mの平面不整方形の竪穴建物で、出土した須恵器坏や長頸瓶、土師器甕、灰釉陶器から８世紀中頃～９世紀初頭の時期と考えられる。下田南Ⅴ期に分類した典型的な竪穴建物である。建物の主軸方向は正方位で、建物規模は比較的小さいが４本支柱で上屋部を支持し、建物内の東壁面に大型カマド（双口以上）を付設する。形状から煙道は建物外側に地山を掘り抜けて突出する。貯蔵穴を有している。

雑駁ではあるが、以上の①～③が下田南Ⅳ期（Ⅲ期）～Ⅴ期にかけての２ｃ区での古代竪穴建物の構造変遷の概要となる。

２ｃ区ＳＩ698はまさに本遺跡における７世紀中頃の竪穴建物の典型例といえ、次の２ｃ区ＳＩ990は大型建物ながら２本支柱という上屋部の構造であったことが特徴的で、本遺跡における８世紀中頃の竪穴建物の典型例といえる。最後の２ｃ区ＳＩ447は小型建物であるが大型カマドを有する構造で、本遺跡における９世紀初頭まで下る竪穴建物の典型例といえる。いずれもカマドの残存状態が非常に悪かったため、カマド本体の燃焼部や掛口・構築材など、詳細な規模・構造を把握することはできなかったが、カマドの煙だしにその特徴を見出すことができた。①は建物内部から上屋部に直に煙道が抜けて排煙するタイプで、併せて建物内部を燻していた可能性も考えられる。②は煙道が建物外部へと抜け出る一般的によく知られる典型的なカマドといえる。③はカマド本体が大型化し、煙道が建物外側の地山を刳り抜いて長く延びるタイプで、建物から離れた位置に排煙するタイプとなる。カマドは、同一集落内においても多様性があることが知られてはいるが、２ｃ区古代竪穴建物では単純に構造変遷の傾向を把握することができた（５－図６）。

２ｃ区以外の他地区も含めて単純に下田南Ⅲ期の竪穴建物の竪穴規模よりも、下田南Ⅳ期・Ⅴ期では竪穴規模が縮小化し、カマドが大型化していく傾向が窺える。従来から竪穴建物は、一般集落では古墳時代から平安時代へと時代が下るにつれて、竪穴規模が縮小しカマドが大型化する傾向が指摘されてきた（笹森健一2007 pp.140-145）。下田南遺跡では、１ｄ区ＳＩ609のような特別な竪穴建物を除くと、竪穴建物の竪穴規模とカマドについては、一般集落と同様の傾向を示すことが理解できる。

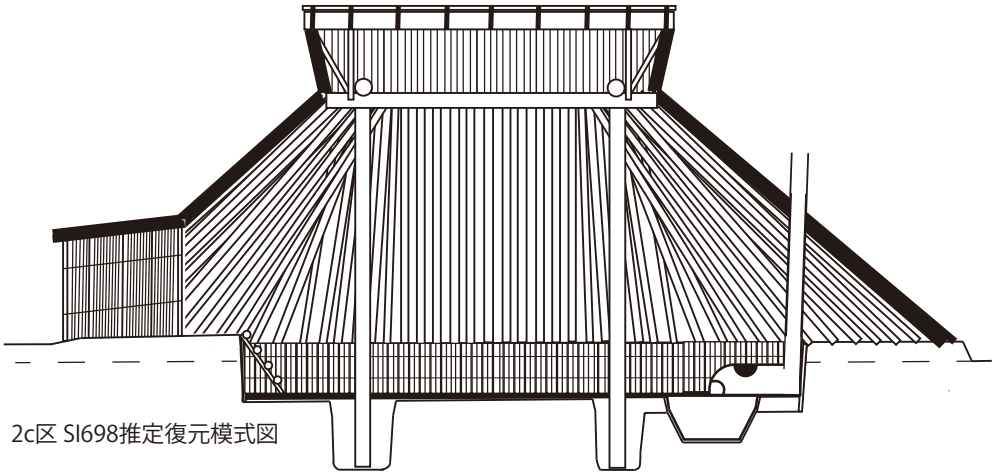
（基峰）

（５）中世の遺構について

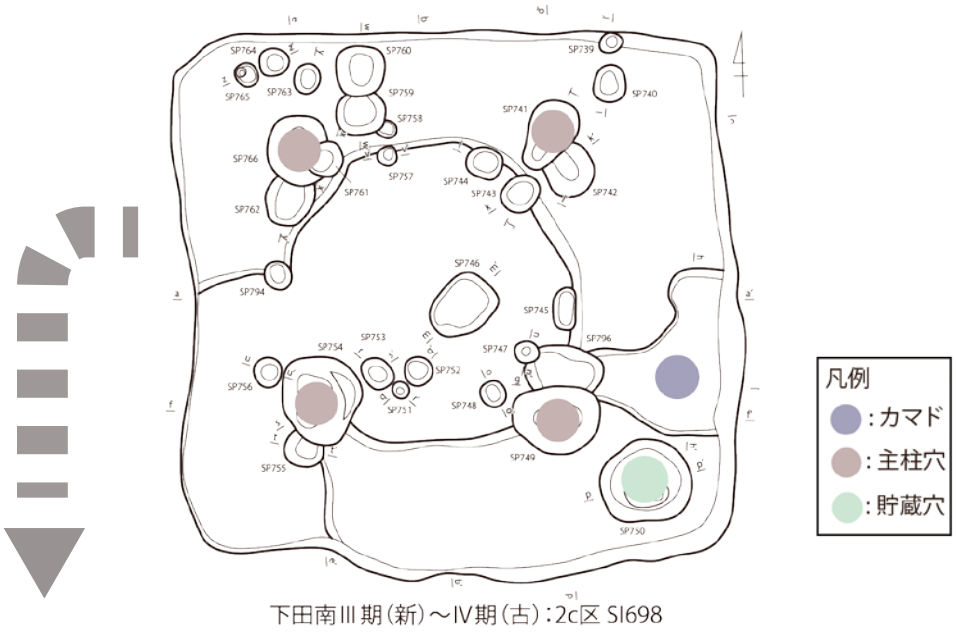
今回の下田南遺跡の発掘調査では、中世に属する建物遺構の存在は確認できなかった。

本遺跡の調査では、並走して延びる中世の溝が多く確認できた。１ａ区ＳＤ019は１ｂ区・２ａ区１面・２ｂ区・２ｅ区へと連続し、１ｅ区１面ＳＤ006まで続く長大な溝である。そのすぐ南側に並走して１ａ区ＳＤ018が、同様に１ｅ区１面ＳＤ003へと続いている。調査区全域を北西～南東へと緩やかに腕曲しながら、基本東西方向へと延びている。

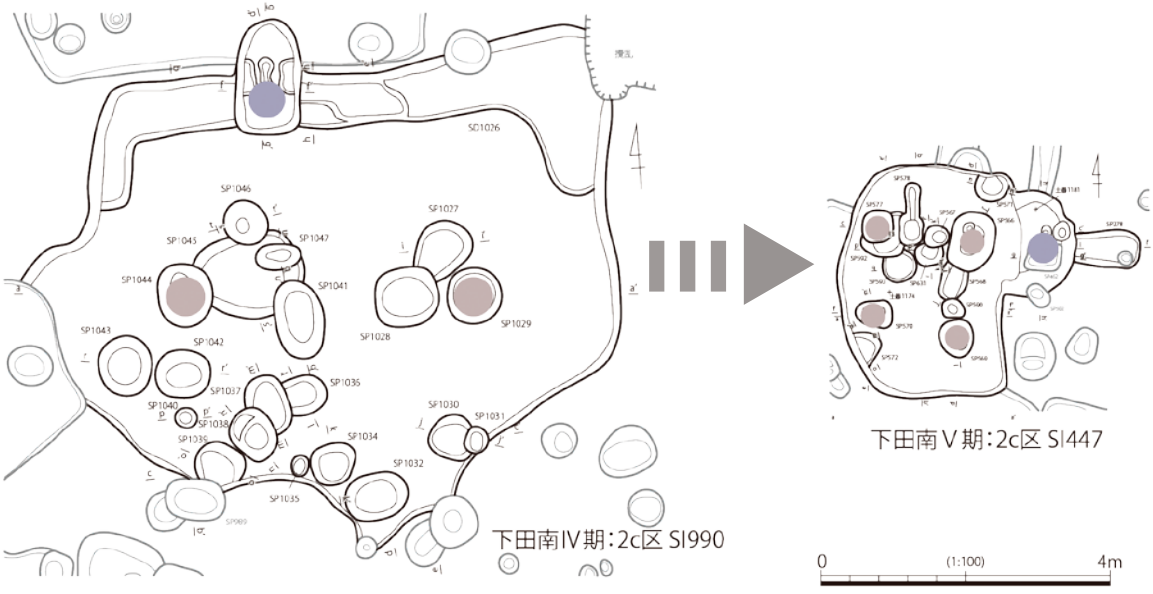
２ｅ区１面ＳＤ030と接合して真っすぐに北へ延びる２ｅ区１面ＳＤ094と２ｅ区１面ＳＤ095も



2c区 SI698推定復元模式図



下田南Ⅲ期（新）～Ⅳ期（古）：2c区 SI698



下田南Ⅳ期：2c区 SI990

下田南Ⅴ期：2c区 SI447

５－図６　２ｃ区古代竪穴建物の構造変遷

５－図版１　岩倉土地整理図 川井村之図：下田南全図（１ａ区・１ｂ区を含む）
［北が上になるように天地入れ替え、中央の斜めに走る道が５－図版２の中央の道に続く、岩倉市提供］

並走する溝で、２ｄ区に入っても同様に北へ向かって延びている。

これらの並走する溝からは、山茶碗などの中世に属する遺物が多く出土しており、掘削された時期や法量に新旧差はないといえる。このように並走する２条の溝は、近接する伝法寺野田遺跡（一宮市）でも確認されており、溝の埋土中からは山茶碗を中心とした中世の陶器類が出土している（愛知県埋文セ2007、p.78）。本遺跡で確認できた並走する中世の溝については、灌漑用水路とも考えられるが、並走する２条を一対とし、その間を道路として利用されていた可能性が考えられる。道路側溝の役割を兼ねた灌漑用水路と思われる。時期によっては、用途に変化があったと思われ、『岩倉土地整理図』（岩倉市提供）によれば、該当地区に、同様な経路をたどる道路（畦道）が記されている（５－図版１・２）。

また、１ａ区ＳＤ019の北側を沿うように伸びる攪乱の筋道には、両側に土留めが施されていたことから、近世以降の畦道の名残りであろう。１ａ区ＳＤ019・１ａ区ＳＤ018の延びる北西の先には権現山遺跡（岩倉市）が所在し、あるいは権現山方向へと続く道筋として利用されていたことも想像できる。

５－図版２　岩倉土地整理図 川井村之図：石両全図（２ａ区・２ｂ区を含む）［岩倉市提供］

次に中世の土坑について記したい。２ａ区２面、Ｒｇ区１面、２ｄ区で確認できた方形土坑は、主軸が東西ないしは南北となるものがある。いずれも掘削直後に埋め戻されているような堆積土で、斑土のものも認められた。これらの方形土坑は、墓である可能性が高いといえる。

本遺跡を二分するかのように基本東西方向に延びる前述した溝（道路）を境に、南

側に位置する１ｃ区・１ｄ区・２ｂ区・２ｃ区・Ｒｃ区にかけては、屋敷を囲む区画溝などが確認されているが、北側では方形土坑などが点在するに過ぎない状況である。２ｄ区にて実施した中世の水田の有無を調べるためのプラント・オパール分析では、イネ科植物の生育していた環境であったことがわかっており、水田が営まれていた可能性が高いといえる（第４章第４節参照）。このことから、この溝（道路）を境にして居住空間と水田などの農耕地や墓域に土地利用が分けられていたことが想像できる。

（後藤秀）

（６）近世村絵図から見た下田南遺跡について

天保12（1841）年に描かれた近世村絵図と明治17（1884）年に作成された地籍図から、今回の調査区周辺をみていきたい。

本遺跡は五条川の右岸、標高６ｍ前後の自然堤防上に位置する。村絵図によると、岩倉市は12ヶ村から構成され、下田南遺跡は川井村（現川井町）に位置する。５－図７は、『岩倉市史』（1981）より近世市域村落図と川井村図を再トレースしたものである。本遺跡全体は畑の中にあり、周辺には田畑が広がっているのがわかる。本遺跡の北東に描かれている光禅寺、白山宮、大昌寺は現在も川井町に位置する光禅寺、白山社、大聖寺と思われる。

５－図８は、本遺跡周辺の地籍図と等高線図である。村絵図同様に田畑が広がっているのがわかる。また、本遺跡周辺の表層地形の等高線図によると、本遺跡の北側は標高が高く、南側は低くなっているのがわかる。周辺の村々は、五条川に伴う自然堤防上に位置している。標高の高い場所には宅地や畑地の密度が高く、標高の低い場所は水田や草生が多い。国土地理院の空中写真を見ると、昭和35～44年（1960年代）までは地籍図同様の地割りがみられ、その後の昭和45～54年（1970年代）には圃場整備が行われて現在に至っている。

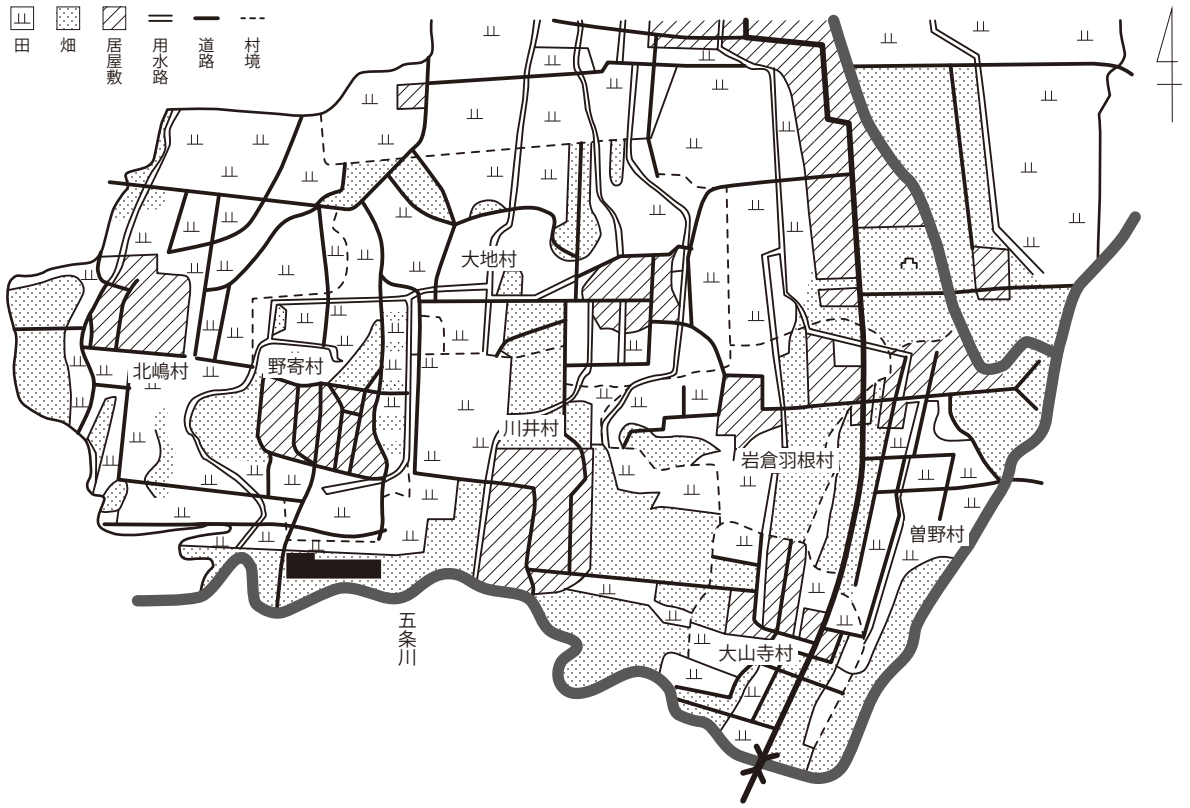
以上のことから少なくとも天保年間（1830～1844年）の後半以降、本遺跡周辺は主に田畑が広がる景観となり、現在まで続いていたといえる。

（三島）

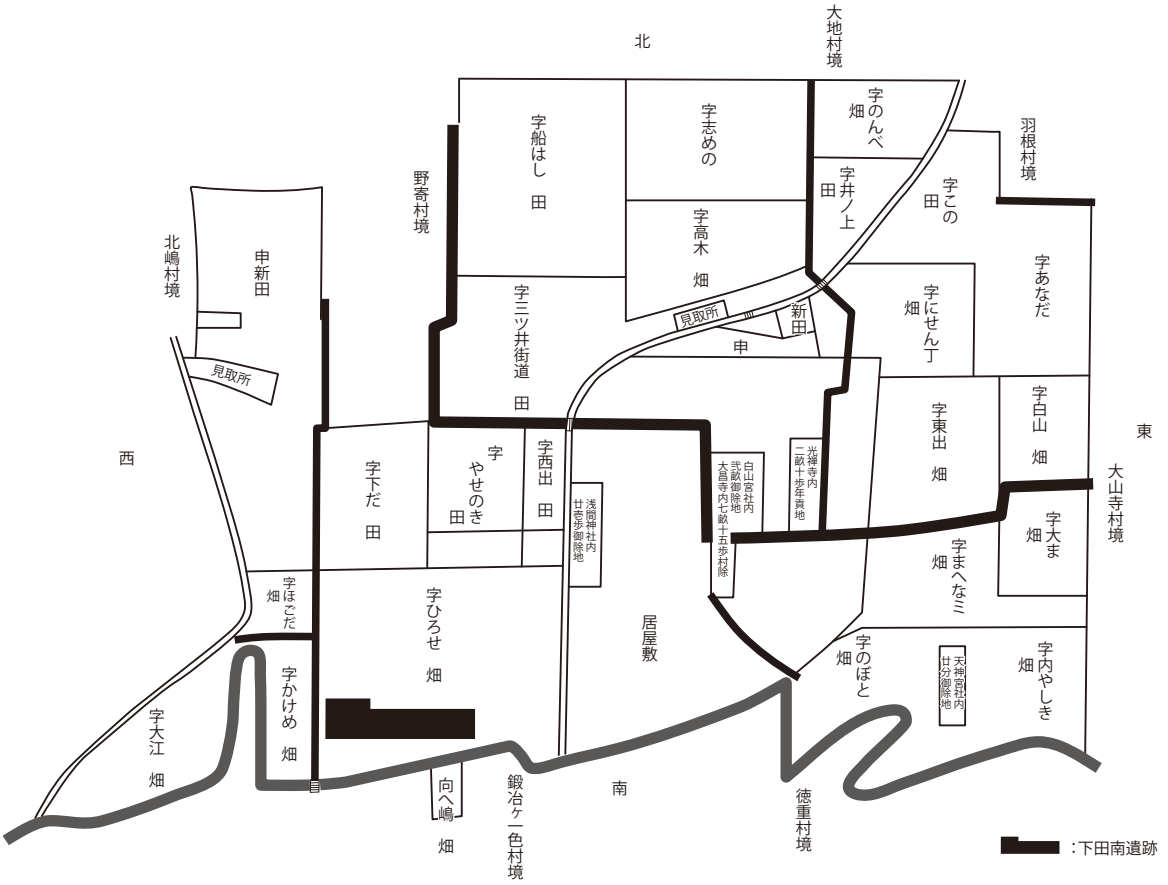
（７）旧五条川（旧河道）について

今回の発掘調査によって、現在の五条川として河川改修が実施される以前の旧五条川（幼川）の右岸の一部分と考えられる旧河道が確認できた。現在の五条川右岸の堤防より北に20～70ｍほどの地点となる。時期的には、層位と出土遺物から中世以降と考えられる。岩倉地域における旧河道の変遷については、地籍図と表層地形の分析から詳細に検討がなされており、古段階（縄文時代～古墳時代）、中段階（古代～戦国時代）、新段階（戦国時代～明治時代）の過程が示されている（蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴2015）。今回の調査で旧河道が確認できた地点は、岩倉市域において北東～南西の方向にほぼ直線的に流下する五条川が、西へと大きく屈曲して一宮市・清州市・北名古屋市域の市境付近にて青木川に合流するまでの流域である。岩倉市域をほぼ直線的に流下する五条川が、西へと大きく屈曲することは「物理学的・地質学的に考えて極めて不自然」と考えられており、瀬替えなどの人工的な改変があったことが指摘されている（蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴2015、p.84）。

調査で確認できた旧五条川（旧河道）は、蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴（2015）の各氏が復元想定する旧河道Ｅ（蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴2015、p.83）の延長線上に相当することから、中段階から新段階にかけての旧河道であった可能性が高い（５－図９）。岩倉市域をほぼ直線的に流下する五

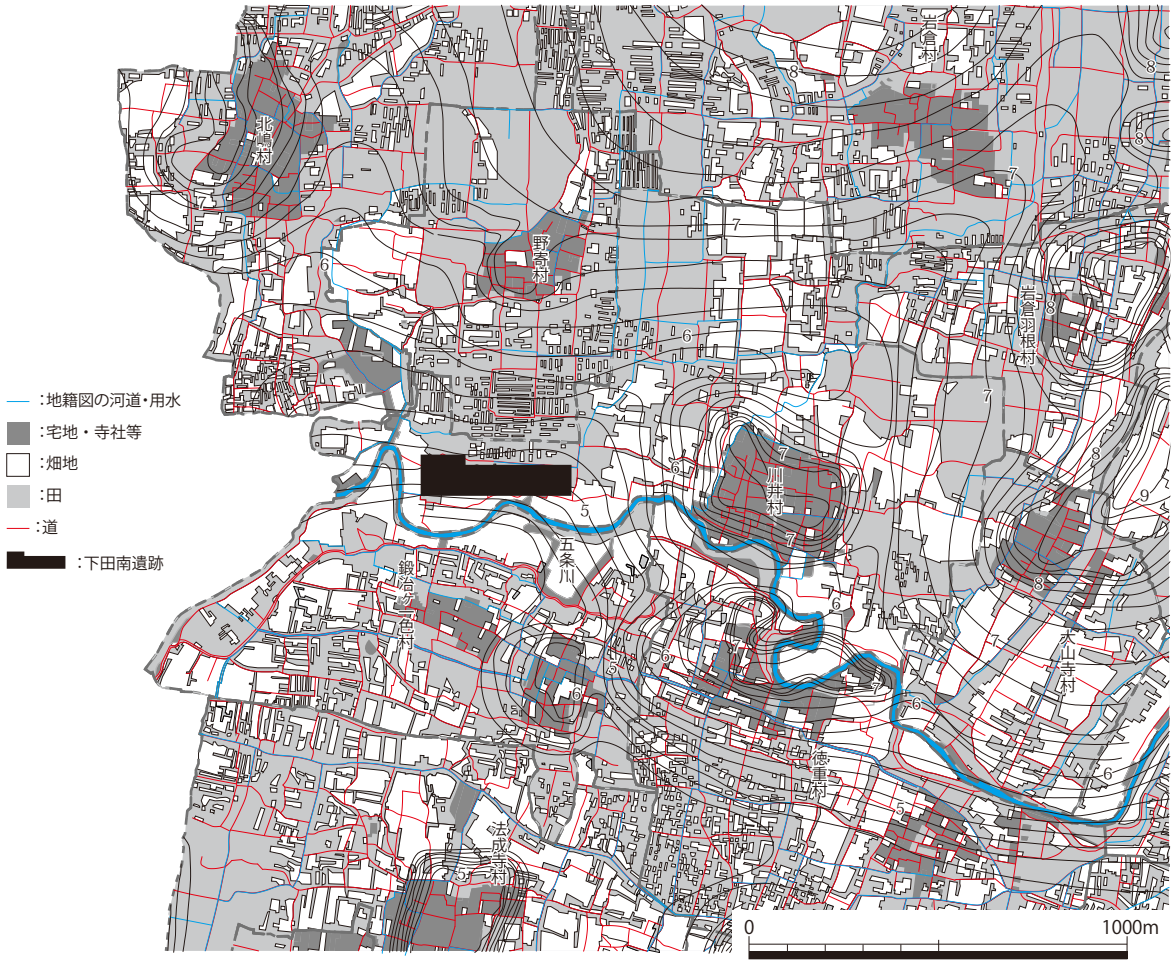


『岩倉市史』上巻（1985）P.92より再トレース一部改変
［原図：『岩倉市史 資料1 近世村絵図 金石文』］



『岩倉市史 資料1 近世村絵図 金石文』（1981）川井村より再トレース

５－図７　近世の岩倉市域村落図（上図）・川井村図（下図）

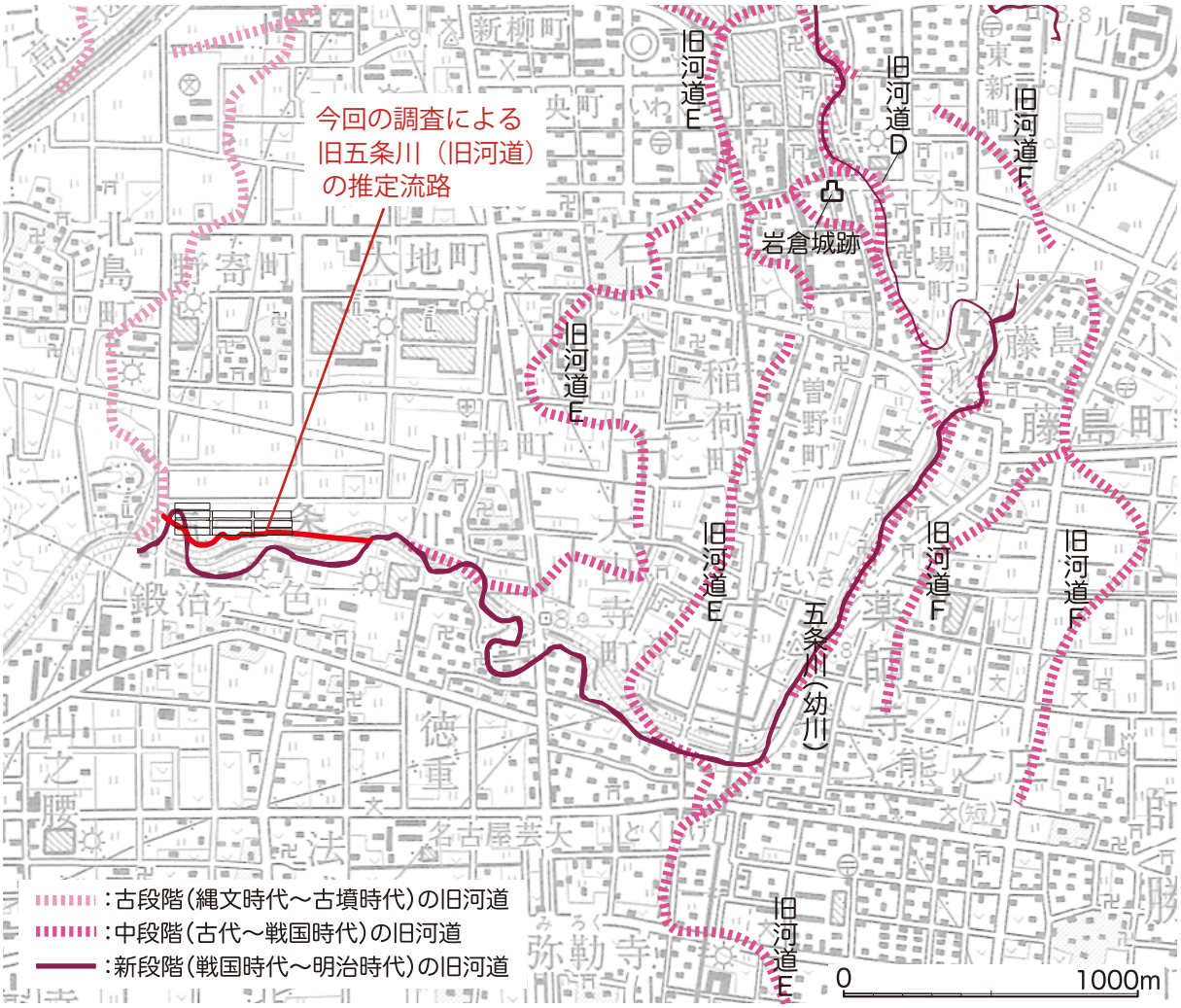


『五条川流域の河道変遷と岩倉の歴史景観』より一部改変

５－図８　下田南遺跡周辺の地籍図・等高線図（1：20,000）

条川（幼川）が瀬替えなどの改変で、西へと大きく流れを変えて以降、五条川（幼川）として機能していた時期があったと考えられる。

（基峰）



５－図９　旧五条川（旧河道）の復元想定［蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴2015、p.83.一部切り抜き加筆］

第２節　遺物

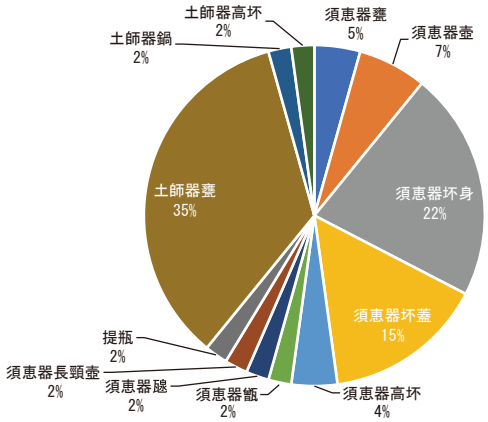
（１）２ａ区２面ＳＤ166ほか（境界溝）出土の土器群について

今回の下田南遺跡の発掘調査において、２ａ区２面・Ｒｄ区・２ｂ区・Ｒｆ区にかけて延びる長狭な溝（２ａ区２面ＳＤ166・２ｂ区ＳＤ005［ＳＫ027］・Ｒｄ区ＳＤ162・Ｒｆ区２面ＳＤ045）の底面から合計46点の土師器・須恵器が出土した（第403～406図［写真図版352～355］-930～956、第413･414図［写真図版361･362］-1049～1063、第443図［写真図版358］-1450～1455）。この溝は、下田南Ⅲ期（６～７世紀中頃）を中心としたものであるが、出土した土器から考えて下田南Ⅳ期（７世紀後半～８世紀中頃）まで継続した可能性が高い。この溝を境にして、西側は掘立柱建物や竪穴建物などの生活にかかわる遺構が多く見つかっており、東側では西側で見られるような生活にかかわる遺構が極端に減少しほぼ無くなるといっても過言ではない状況であった。周辺の遺構の出土状況からは、本溝が集落区域の境界を示す溝であったと考えることができる。ここでは、４カ所の地区をまたぐこの溝を境界溝（２ａ区２面ＳＤ166・Ｒｄ区ＳＤ162・２ｂ区ＳＤ005・Ｒｆ区２面ＳＤ045、以下「境界溝」と記す）と呼称し、溝内から出土した土器群についてその概要をまとめ、その性格を考えたい。

境界溝から出土した土器群は、２ａ区２面ＳＤ166から数多くの土器がある程度の間隔をあけた状態で数地点に渡って出土し、継続して一体となるＲｄ区ＳＤ162でも同様の状態であった。しかしながら境界溝の南端に位置する２ｂ区ＳＤ005内ＳＫ027では、複数の大型の土器が１カ所にまとめられた状態で出土している。境界溝から出土した土器は残存状態が良好なものが多く、特に土師器甕は上層から押しつぶされたような状態で出土しており、そのほとんどが完形に近い状態に接合可能であった。出土状態から、これらの土器群が単に溝に廃棄されたものではないことが考えられる。

５－表２は境界溝から出土した土器の器種別の構成と数量で、円グラフは境界溝から出土した土器の割合を表したものである。各調査区の溝内からの出土傾向として、須恵器坏類と土師器甕が共通して出土することが指摘でき、双方を合わせると境界溝から出土した土器の半数以上を占める。須恵器は坏類のほかに甕・壺・高坏・鼈・長頸壺・提瓶が出土している。土師器は甕のほかに鍋・高坏が出土しているが、その大半を煮炊具が占める。この状況は、愛知県下での古代の土師器の出土傾向とおおよそ一致している（城ヶ谷和広1991）。ただし、Ｒｄ区ＳＤ162から出土した須恵器坏蓋（第443図［写真図版388］-1450）、土師器高坏（第443図［写真図版388］-1453）は出土層位が溝底面でないことと、出土地点に近いＲｄ区ＳＤ162断面ｋ-ｋ'間の堆積土の状況から判断して、流入した可能性が考えられる。出土した須恵器坏類はほとんどが完形に近い合子型のもので、やや時代が下った天井部につ

		2a区2面	Rd区	2b区	計
須恵器	甕	1	0	1	2
	壺	3	0	0	3
	坏身	5	1	4	10
	坏蓋	2	1	4	7
	高坏	2	0	0	2
	甑	0	1	0	1
	鼈	1	0	0	1
	長頸壺	1	0	0	1
	提瓶	1	0	0	1
土師器	甕	9	2	5	16
	鍋	0	0	1	1
	高坏	0	1	0	1
計		25	6	15	46



５－表２　２ａ区２面ＳＤ166ほか（境界溝）から出土した土器群の器種別個数と割合比率

まみや口縁部に返りを持つ蓋に伴う無台や有台の坏身は出土しなかった。坏蓋と坏身の出土量を見ると、坏蓋より坏身の出土量の方が多いことがわかる。土師器甕は境界溝全体で16点出土しており、大まかには長胴型甕と体部が球形の小型甕の２種類に分けられ、長胴甕が４点、小型甕が12点出土している。土師器甕は、平底と丸底のものがあり、２ａ区２面ＳＤ166とＲｄ区ＳＤ162から出土した土師器甕には明瞭なススの付着が見られない。また、出土した土器で特に特徴的なものは、２ａ区２面ＳＤ166から出土した頸部に穿孔がある須恵器壺（第404図［写真図版353］-942）である。

５－図10は境界溝から出土した土器の出土位置を示したものである。基本的に土器は溝の底面に配置される傾向が見られ、２ａ区２面ＳＤ166の北側では土器がまとまって出土しているが、南に下るほど溝底面から出土した土器の量は減少し、２ｂ区ＳＤ005内ＳＫ027にて再び土器が集中して群となって出土している。２ｂ区ＳＤ005内ＳＫ027では、２ａ区ＳＤ166やＲｄ区ＳＤ162とは土器の出土状況が大きく異なるが、溝の連続性と２ｂ区ＳＤ005内ＳＫ027の周囲からこの土器群に関連する遺構が確認できなかったことから、境界溝に伴う土器群と考えられる。土師器甕で完形に近いものは底面に横たわった状態で出土しているが、甕ごとに向きが異なって出土しており、連続して一定の方向に向けて配置されたものはない。須恵器坏類は、坏蓋は天井部を上、坏身は口縁部を上に向けた状態で出土したものが多い。２ａ区２面ＳＤ166・Ｒｄ区ＳＤ162までの区間で出土した土器については、出土地点の間隔がある程度あいているが、地点によって間隔が不規則なため、溝内の流水によって本来の位置から流された可能性も考えられる。

次に出土した須恵器坏類と土師器甕の特徴を少し詳しく見ておきたい。

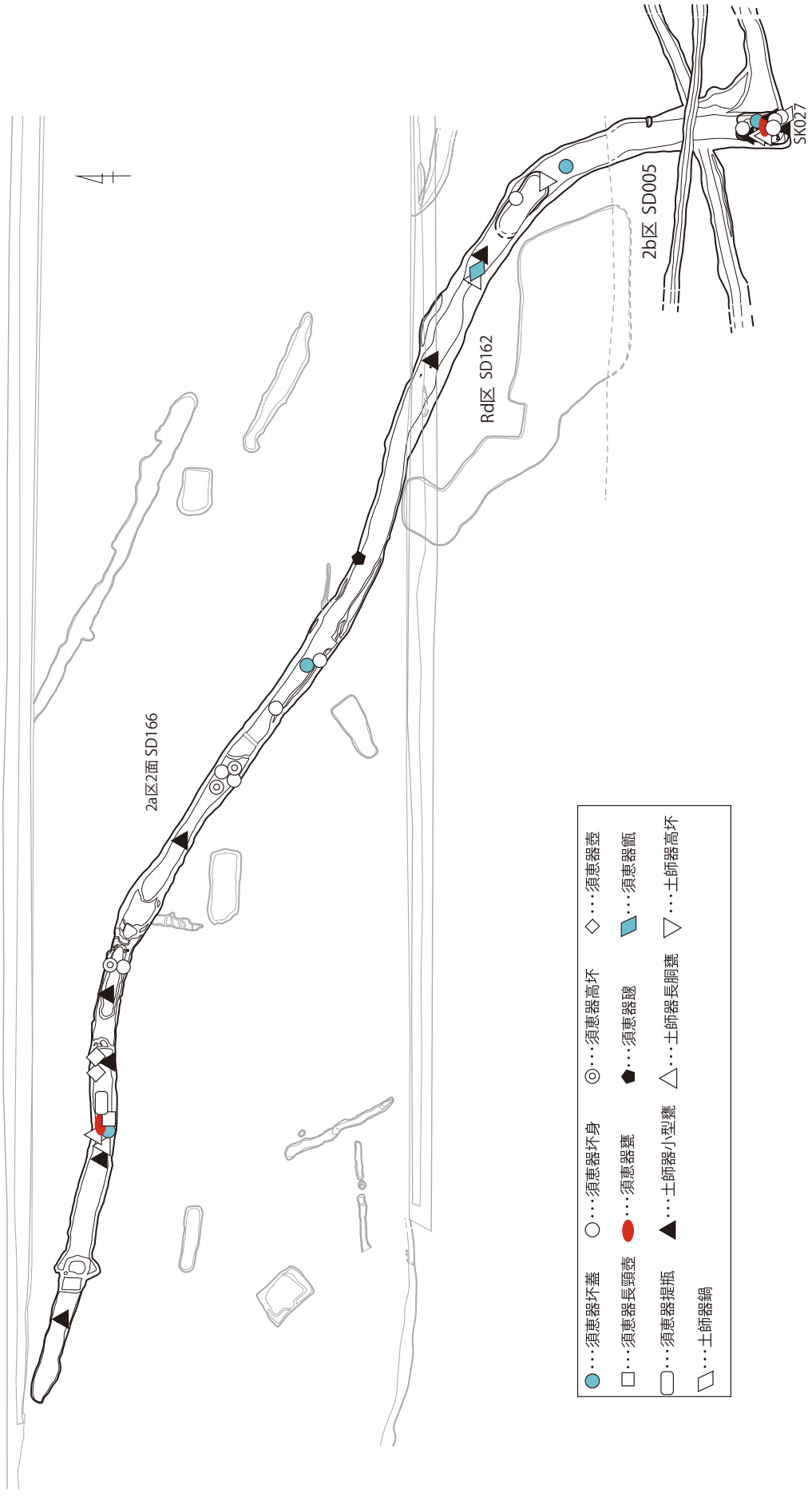
（１）須恵器坏類

須恵器坏類については、『愛知県史 別編 猿投系』（愛知県2015）の編年表を参考にした。須恵器坏類の傾向としては、坏身は受部が内傾し、ほとんどの坏身の口径が約10.0～11.0cmの間におさまる。また、底部は回転ヘラケズリを施し、丸底と平底の両方が存在する。坏蓋は口径が約11.0～12.5㎝の間で、天井部の半分以上に回転ヘラケズリが施されている。また、天井部と口縁部の境となる稜が明瞭なものと、不明瞭で沈線状のものがある。これらの傾向は、編年表（愛知県2015、pp.718-735）のⅡ-４期～Ⅲ-１期（H-44号窯式期～H-15号窯式期）の須恵器坏類の傾向に当てはまり、これらの須恵器坏類と同様のものと考えられる。

（２）土師器甕

土師器甕については、長胴型・小型甕ともに口縁端部がつまみ上げられているものが多く、表面は摩滅して明瞭ではなかったが、目の細かいハケ調整が施されていることがわかる。この特徴は「伊勢型甕」に見られるもので、尾張地域でも６世紀代から出土することがわかっている。『愛知県史 資料編４ 飛鳥～平安』（愛知県2010）によれば､「伊勢型甕」は７世紀前半頃には口縁部の屈曲が強くなり、口縁端部がシャープにつまみ上げられ、時期が下ると口縁部の屈曲が弱まって、つまみ上げも小さくシャープさがなくなる傾向が見られるのが特徴である。出土した土師器甕はこの特徴に一致することから､そのほとんどが「伊勢型甕」に相当すると考えられる。しかしながら､長胴型甕のうち１点（第414図［写真図版362］-1062）は、平底で口縁部の外反が短く、体部が粗いタテハケで調整されていることから、７世紀後半～末頃に出現する「濃尾型甕」と考えられる。

最後に、境界溝から出土した土器の性格について考えたい。この溝は、周辺の遺構の状況から考えて、集落内と集落外の境界を示すものと判断でき、出土した土器群は、何らかの祭祀活動における祭具として使用されたことが予想できよう。周辺に目を向けると志賀公園遺跡（名古屋市）においては、自然流路内から大量の土器のほかに斎串などの木製品の祭祀具が出土しており、祭祀行為の痕跡であ



５－図10　２ａ区２面ＳＤ166ほか（境界溝）から出土した土器の機種別地点

ることが指摘されている（愛知県埋文セ2001・2004）。今回調査を行った境界溝からは、滑石製模造品やミニチュア土器、斎串、土馬などの所謂祭祀具に該当する遺物が出土していないため、明確に祭祀行為が行われたかどうかは不明であるが、集落の境を示す境界溝という性格からも、土器を祭具とした祭祀行為が行われた可能性は高いと考えられる。

以上が、今回調査を実施した下田南遺跡の境界溝から出土した土器群の特徴である。本遺跡において、この境界溝と同様に土器群が出土した溝などの遺構は見当たらず、この溝が非常に特色あるものであったことがわかる。しかし、先述のように祭祀具のような遺物の出土がないことから、明確に祭祀行為が行われたかは定かではないが、この溝を境にして、建物遺構の分布に差が見られることは確かなことで、出土した土器群も意図的に配置ないしは埋納されたものと考えざるを得ない。

（後藤泰）

（2）円面硯・転用硯について

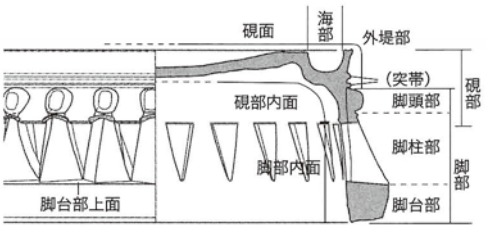
下田南遺跡からは、円面硯３点（第358図［写真図版314］-245、第361図［写真図版315］-280、第388図［写真図版341］-730）と転用硯６点（第361図［写真図版316］-298、第362図［写真図版317］-303、第371図［写真図版325］-451、第388図［写真図版340］-720、第388図［写真図版340］-721、第417図［写真図版364］-1098）が出土した。

古代の墨書土器や木簡などの文字資料が出土しなかった本遺跡において、陶硯の存在は本遺跡の官衙的様相を知る上で重要な遺物である。個々の遺物の解説は、第３章で触れている通りで、ここでは改めてより詳細に記述し、近隣遺跡から出土した陶硯に触れつつ若干の考察を加えたい。なお、円面硯の各部名称と分類については『平城京出土陶硯集成１・２』（奈文研2006・2007）に依った（５－図11【１】・【２】）。

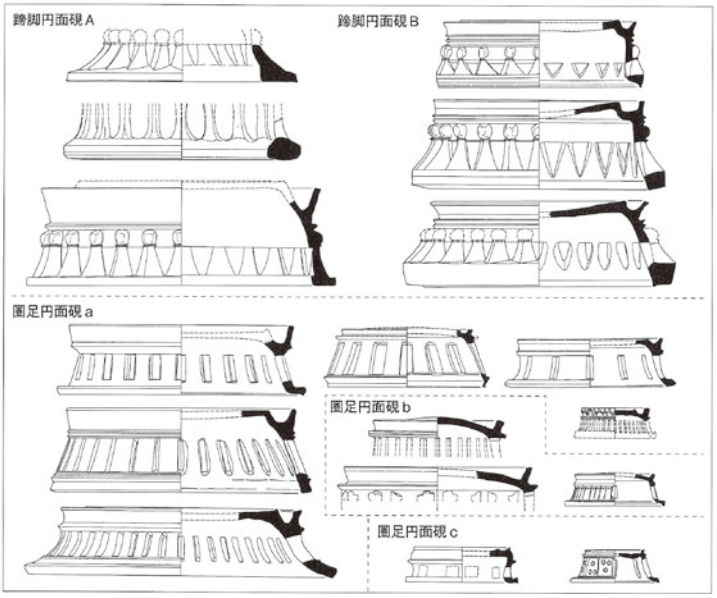
先ずは円面硯についてみていきたい。

１ｃ区ＳＫ622出土円面硯（245）は、蹄脚円面硯Ａに分類される。脚頭は全て剥離し失われているが、半球形の脚頭が付けられていたと思われる。硯面は水平で外堤部が少し高く、突帯から外堤部端までの幅が広い。硯部内面は緩やかな曲線で凹凸は無く、内面に降灰が付着していることから倒置状態で焼かれたと考えられる。高蔵寺２号窯（春日井市）や平城宮ＳＤ4951から出土した円面硯と類似しており、共伴遺物からみても高蔵寺２号窯期（８世紀第１四半期）のものと考えられ、同じ窯で作られた可能性がある。また、断面には粘土の接合痕があり、突帯を含む硯部下半と、硯面と外堤が一体となった硯部上半に分けられる。青木敬氏の接合技法の分類（５－図11【３】）によれば、「硯面一体成形技法」にあたると考えられる。ただしこの技法は「今のところ蹄脚円面硯Ｂにのみ認められる」（青木敬2014、p.24）ようで、蹄脚円面硯Ｂは８世紀第２四半期以降に出現したと考えられているため、この技法の初現が遡る可能性がある。今後より詳細な検討が必要と思われる。

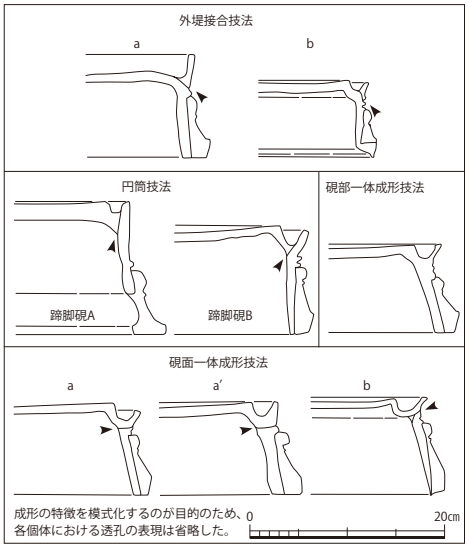
１ｃ区ＳＤ135出土円面硯（361）は、蹄脚円面硯Ｂに分類される。硯部のごく一部に脚頭が１つ残存した破片で、硯面と外堤部端が残存していないためその形状は推定で、法量も誤差を含む。脚頭は中心に若干の稜をもつ半球形で、内面に降灰と自然釉が付着しており倒置状態で焼かれたと考えられる。中世の溝（１ｃ区ＳＤ135）から混入して出土したため、共伴遺物から時期の推定は困難であるが、蹄脚円面硯Ｂは愛知県内の生産地では８世紀第２四半期に位置づけられる篠岡81号窯（小牧市）から出土しており、平城京内では「平城Ⅲ古段階には確実に使用、廃棄していた」（神野恵・川越俊一2003、p.56）と考えられていることから、本遺物も８世紀中頃を中心とする時期と考えたい。成形技法は、断面に接合痕が確認されないため「硯部一体成型技法」と考えられる。



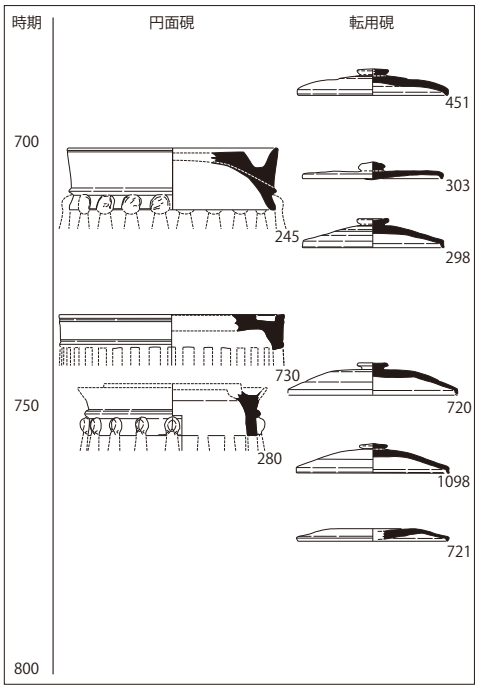
【1】円面硯の部位名称



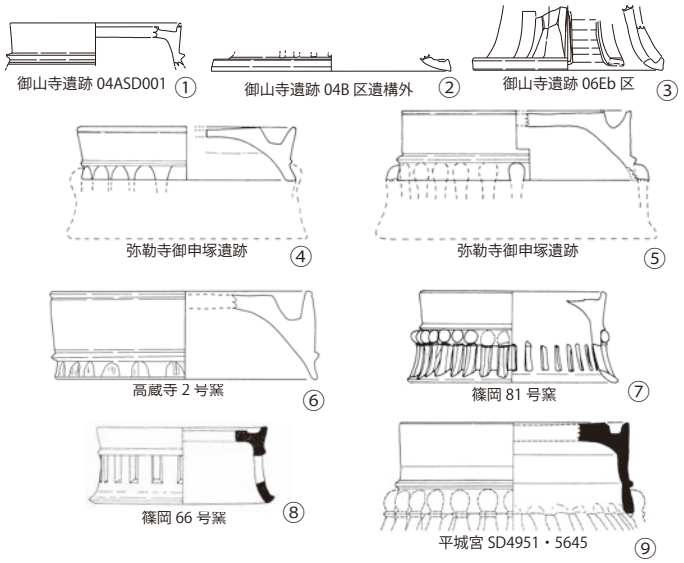
【2】円面硯の種類



【3】蹄脚硯Ｂの成形技術分類模式図



【4】下田南遺跡出土陶硯の時期（1:8）



番号	遺跡名	地区・遺構名等	種別	外堤径	硯面径	底径	器高
245	下田南遺跡	1c区SK622	蹄脚円面硯A	(22.0)	(15.2)	—	(6.5)
280	下田南遺跡	1c区SD135	蹄脚円面硯B	(20.0)	(14.4)	—	(4.7)
730	下田南遺跡	1d区表土層	圏足円面硯a	(23.7)	(17.6)	—	(5.4)
①	御山寺遺跡	04A区SD001	圏足円面硯a	(18.0)	(13.6)	—	(4.7)
②	御山寺遺跡	04B区検出	圏足円面硯	—	—	(20.2)	(0.9)
③	御山寺遺跡	06Eb区	蹄脚円面硯B	—	—	(20.0)	(6.7)
④	弥勒寺御申塚遺跡	表土層	蹄脚円面硯A	(23.0)	(15.4)	—	(5.6)
⑤	弥勒寺御申塚遺跡	表土層	蹄脚円面硯A	(24.0)	(18.4)	—	(7.4)
⑥	高蔵寺2号窯	—	蹄脚円面硯A	(28.0)	(18.4)	—	(9.2)
⑦	篠岡81号窯	—	蹄脚円面硯B	(19.8)	—	—	9.5
⑧	篠岡66号窯	—	圏足円面硯a	(18.2)	(13.6)	(20.0)	8.1
⑨	平城宮	SD4951・5645	蹄脚円面硯A	23.6	18.7	—	(10.1)

※寸法の（ ）は復元径または残存長を表す

【5】周辺遺跡・平城宮出土の主な円面硯（1:8）と法量

５－図11　円面硯の部位名称・種類・分類・出土陶硯の時期・参考事例と法量

[【1】：奈文研2006・p.26、【2】：奈文研2006・p.iii、【3】：青木敬2014・p.24、
【5】：①～③ 愛知県埋文セ2011・p.83 p.126 p.155、④・⑤ 南山大学大学院ほか1998・図版７、
⑥愛知県2015・p.425、⑦愛知県教委1983・p.39、⑧小牧市教委1976・p.62、⑨奈文研2016・PL.9]

１ｄ区表土層出土円面硯（730）は、圏足円面硯ａに分類される。出土した３点の中で最も外堤部径が大きく、脚柱の数は推定38本程度と多脚である。僅かに内堤があり、海部と外堤部は幅広で平坦な形状で、側面の突帯の隆起が小さい。内面に自然釉が付着していることから倒置状態で焼かれたと考えられる。断面に接合痕は無く、「硯部一体成形技法」で作られたと考えられる。硯部の特徴が類似するものとしては、篠岡66号窯（小牧市）からの出土がある。篠岡66号窯は、８世紀初頭～９世紀初頭までの遺物が混在しており時期の特定には至らないが、透孔の数が多いことなどから飛鳥時代には遡らず、８世紀前半～後半頃に収まると考えられる。

本遺跡の近隣の遺跡から出土した円面硯としては、御山寺遺跡（岩倉市）と弥勒寺御申塚遺跡（北名古屋市）からの出土したものが知られる。

御山寺遺跡は、本遺跡から北北東へ約3.0㎞に位置する奈良時代後半～平安時代にかけての官人層が所在した集落とされ、３点の円面硯が出土している（愛知県埋文セ2011）。内訳は、蹄脚円面硯Ｂが１点、圏足円面硯が２点で内１点が圏足円面硯ａである。円面硯の時期については、平安時代前期と推定されているが、奈良時代後半に遡るものも含まれる可能性がある。御山寺遺跡は、本遺跡で集落の衰退が始まる時期以降に古代集落が形成されるという点でもその関連性が注目できる。

弥勒寺御申塚遺跡は、本遺跡から南東へ約2.0㎞に位置し、２点の蹄脚円面硯Ａが出土している。２点とも高蔵寺２号窯出土のものとよく類似しており、則ち本遺跡出土の１ｃ区ＳＫ622出土円面硯（245）とも類似し、法量も近い。弥勒寺御申塚遺跡は、弥勒寺廃寺に隣接しており、「硯を使用することができたのは、弥勒寺廃寺の僧侶であった可能性が高い」と推測されている（南山大学大学院ほか 1998）。

他では蹄脚円面硯に限れば、尾張国府跡や東畑廃寺跡（いずれも稲沢市）からの出土が知られる。

次に本遺跡出土の転用硯について記したい。本遺跡からは前述の通り６点の転用硯が確認されている。全て須恵器坏蓋の内面を利用したもので、その中で墨痕が付着していたものは１ｃ区ＳＤ512出土転用硯（303）のみで、他は内面が平滑になっていることから転用硯と判断したものである。なお全ての出土遺物について転用硯かどうかの精査・確認を実施しているわけではないので、増加する可能性はある。６点の内で最も古い器形なのが、１ｃ区遺構外出土転用硯（451）で、７世紀第４四半期（I-41号窯式期）を中心とする時期と考えられ、最も新しい時期と考えられる１ｄ区遺構外出土転用硯（721）は８世紀第３四半期（NN-32号～O-80号窯式期）に相当する。他の転用硯４点については、その間の各時期に満遍なく分布するようである。

最後に、円面硯の検討から本遺跡が官衙的な集落として稼働していた時期と階層性の問題にふれてまとめとしたい。本遺跡では遅くとも７世紀末頃から陶硯が使用され始め、８世紀後半頃まで継続して使われ続けていたことが明らかとなった。本遺跡では７世紀後半頃から倉庫をはじめとする掘立柱建物群が建てられ、８世紀代の内にほぼ廃絶する様相が確認されており、その時期とまさしく一致する。遺物の面からも、本遺跡が７世紀末頃～８世紀後半にかけて官衙的性格を有していたことが傍証されたと言える。

また、本遺跡から出土した円面硯３点の内２点が蹄脚円面硯であるが、陶硯の種類は獣脚硯＞蹄脚円面硯＞圏足円面硯＞転用硯の順に格式を現すとされ（西口壽生2003･2010）、蹄脚円面硯については、地方では国府・郡衙やその関連施設からの出土が顕著である。本遺跡は郡家（評家）の出先機関と想定され、郡司層かそれに近い階層の官人が常在して、蹄脚円面硯を使用していた可能性が高い。しかし近隣遺跡からも同時期の蹄脚円面硯が出土していることからも窺えるように、本遺跡周辺地域では他地域に比べて蹄脚円面硯が末端の官衙施設や寺院である程度は流通していた可能性が指摘できる。

当地域は、蹄脚円面硯の生産地である尾北窯（春日井市・小牧市・犬山市）に近いことからも、蹄脚円面硯の流通においては特殊な地域の可能性があり、その流通範囲の広がりや使用者の階層などの把握が今後の課題と思われる。

（小島）

（3）２ｃ区出土の巡方（石帯）について

２ｃ区ＳＤ700から出土した巡方（第427図［写真図版374］-1243）は、腰帯具の石帯（石製）で、特に重要な遺物である。腰帯具は、古代（奈良～平安時代前期）の律令的身分秩序を表した衣服令(えぶくりょう)の成立による身分表象で、在地社会において社会的･経済的に優位な地位（位階及び官職）にあった郡司層や富豪層の存在を示すものである。

本遺跡から出土した巡方は、石むらのない緻密で均一な黒色の硬質粘板岩を使用しており、やや横長の方形の無孔であるが、背面には潜り穴の痕跡が見られる。復元すると推定で高さ3.7㎝、幅4.2㎝、厚さは0.7㎝の大きさと予測でき、残存の重さは13.0gである。全国規模で腰帯具の分析を実施した田中広明氏（2003）の分類によれば、石製巡方（潜り穴）Ⅳ期・無孔型式に相当する。無孔の石製腰帯具は８世紀末頃に出現し、その最盛期は10世紀前半頃で、11世紀代まで継続することが示されている（田中広明2003、p.25）。

愛知県出土の主要な石帯は、５－図12に示したとおりで、尾張・三河の地域ともに出土は稀有であるが、尾張国府跡からの出土が集中して目立つ。周辺に目を向けると、三重県出土の石帯については、斎宮跡（明和町）や六大Ｂ遺跡（津市）などから出土した巡方など、愛知県から出土した石帯に比べて３倍近くの出土が知られている（三重県埋文セ1992、p.8）。一方、愛知県出土の金属製の銙帯については、市道遺跡（豊橋市）や梅坪遺跡（豊田市）など三河地域からの出土が知られている。特に市道遺跡の居館地区からは垂孔（細長孔）のある巡方９点が出土しており（豊橋市教委1996・1997・1998）、参河国渥美郡の幡太郷に関連する施設と考えられている（贄元洋2009）。

銙帯（石帯）が出土した遺跡は、古代の国司・郡司などに関連する国府や郡家（評家）・駅家などの官衙施設や交通路との関連が従来から考えられてきた。本遺跡から石帯の巡方が出土したことは、遺物の時期はやや下るものの、社会的・経済的に優位な地位（位階及び官職）にあった郡司層や富豪層の存在を窺い知ることができ、本遺跡が地方の郡家（評家）の要素を色濃く持ち、その出先機関として機能していたことの裏付けのひとつになるものといえよう。

（基峰）

（4）Ｒｇ区１面出土の軒丸瓦について

Ｒｇ区１面の包含層から出土した軒丸瓦（第447図［写真図版391］-1500）は、本遺跡と川井薬師堂廃寺などとの関連を窺い知ることができる重要な遺物である。瓦当の外区直径は推定で約15.0㎝、内区直径は推定で約11.5㎝を測る。外区は無文で、内区には単弁（重弁）蓮華文が施され、花弁と子葉が高く突出し先端が尖り、子葉には稜線が見られ、中房を欠損している。

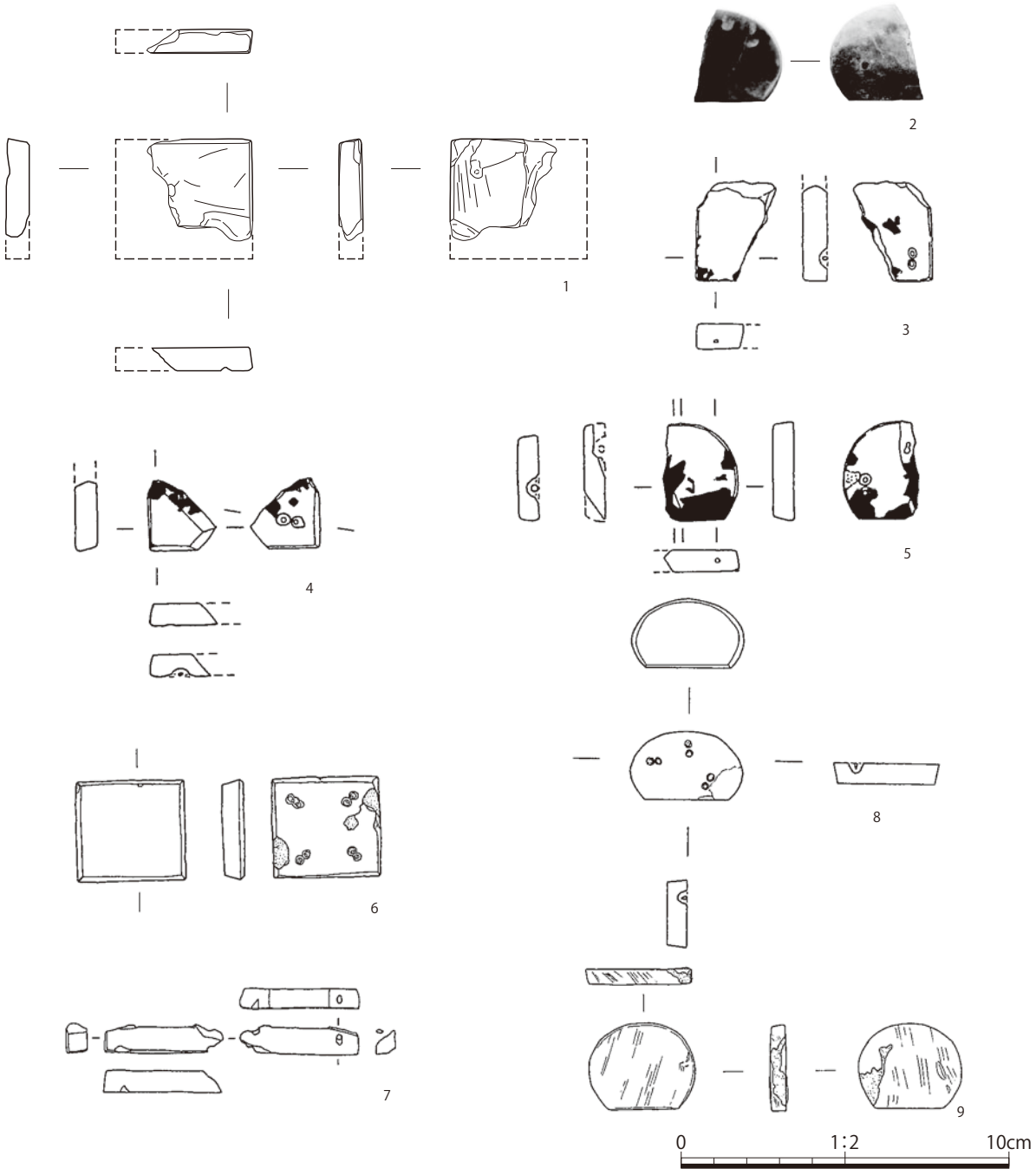
出土した軒丸瓦は蓮弁に重なる子弁を配置した文様で、川井薬師堂廃寺出土の軒丸瓦に同一文様のものが確認でき、所謂「坂田寺式」に相当するもので（愛知県2010、p.733）、尾張地域出土の古代瓦を詳細に分析・検討した梶山勝氏（2001）による「坂田寺亜式」の軒丸瓦に相当する。

『日本書紀』天武14（685）年３月の詔では「諸国毎家作佛舎、乃置佛像及経、以礼拝供養。」と記載されるように全国規模で仏教の普及がなされ、『扶桑略記』持統６（692）年には「令計天下諸寺。

愛知県出土の主要な石帯(腰帯具)

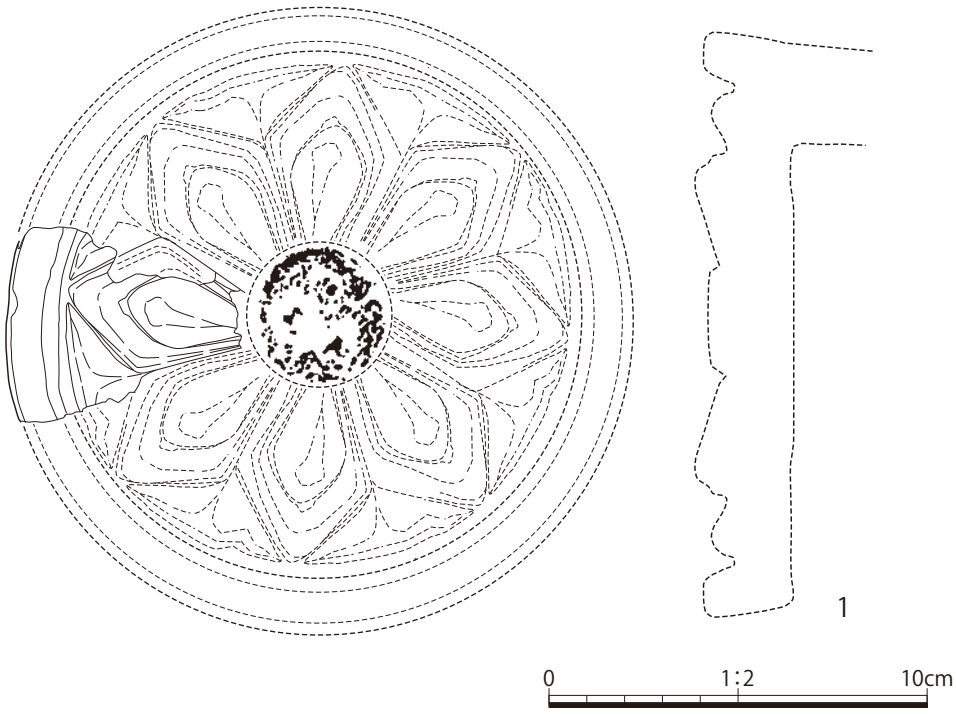
番号	地域	遺跡名	所在地	出土遺構	種別	孔	材質	高さ×幅×厚さ cm	潜り穴	主な出典文献
1	尾張	下田南遺跡	岩倉市川井町	2c区SD700	巡方	無孔	粘板岩	(3.1) × (3.2) ×0.7	(4)	
2	尾張	御山寺遺跡	岩倉市中野町・鈴井町	04B区1面包含層	丸鞆	無孔	—	(2.7) × (2.5) ×0.8	(3)	愛知県埋文セ2011
3	尾張	尾張国府跡	稲沢市国府宮一丁目ほか	SK105	巡方	無孔	大理石	(2.4) × (3.0) ×0.7	(4)	稲沢市教委1982
4	尾張	尾張国府跡	稲沢市国府宮一丁目ほか	SK105北側	巡方or鉈尾	無孔	大理石	(2.1) ×2.1×0.7	(3) or (4)	稲沢市教委1982
5	尾張	尾張国府跡	稲沢市国府宮一丁目ほか	SK105北側	丸鞆	無孔	大理石	(2.2) ×2.9×0.6	(3)	稲沢市教委1982
6	三河	梅坪遺跡	豊田市東梅坪町	SX1101	巡方	無孔	ホルンフェンスor粗粒玄武岩	3.3×3.1×0.6	4	豊田市教委2003
7	三河	下六光寺遺跡	豊川市八幡町	包含層	巡方	—	蛇紋岩	(0.9) ×4.6×0.6	(4)	豊橋市教委2013
8	三河	淡洲神社北遺跡	豊川市小田淵町七丁目	砂礫層直上IXG3r	丸鞆	無孔	チャート	2.1×3.4×0.6	3	愛知県埋文セ1991
9	三河	普門寺旧境内	豊橋市雲谷町	元々堂址東斜面	丸鞆	無孔	黒色硬質	3.2×2.6×0.5	0	豊橋市教委2016

※高さなどの数値は（ ）は残存、また公表数値の小数点2位以下は四捨五入とした。潜り穴の（ ）数値は推定である。



5－図12　愛知県出土の主要な石帯（腰帯具）

［２：愛知県埋文セ2011・p.120 抜粋・加筆、３～５：稲沢市教委1982・図版13、６：豊田市教委2003・P.55、７：豊橋市教委2013・p.196、８：愛知県埋文セ1991・p.130、９:豊橋市教委2016・p.244］



1：下田南遺跡　2：川井薬師堂廃寺　3：伝法寺廃寺　4･5：御土井廃寺

５－図13　Ｒｇ区１面出土軒丸瓦の復元と周辺出土の坂田寺亜式軒丸瓦

［２：梶山勝2001・p.6 第２図、３：一宮市教委2006・図27、４・５：岩倉市教委1983・p.30 図版Ⅱ、p.31 図版Ⅲ］

凡五百四十五寺」という記載があるように、諸国に545寺におよぶ寺院の建立がなされたことがわかる。古代尾張の地域における寺院建立は、７世紀後半に出現する。瓦の特徴から、その特色は畿内先進寺院の瓦当文様を長期間におよび継続して使用した点（愛知県2010、p.730）と言われている。古代尾張国の前期国府と推定される塔の越遺跡（稲沢市）や平安時代以降の国府跡（稲沢市）が所在する尾張の中心地であった中島郡にて、先ずは地方寺院の先駆けとして東畑廃寺（稲沢市）の建立がなされている。東畑廃寺は、金堂･塔･講堂のほかに複数の基壇建物を持ち、法起寺式の伽藍配置であったことが知られている。春部郡の篠岡２号窯（小牧市）で生産された坂田寺式の軒丸瓦（単弁蓮華文軒丸瓦）が東畑廃寺に供給されており、その系譜を引くと考えられる坂田寺亜式の軒丸瓦が、丹羽郡を中心に展開することが知られている。このことは、丹羽郡と春部郡の地域での地方豪族（氏族）層の結びつきの強さないしは同族関係を示すものと考えられている（梶山勝2001、p.10）。『和名類聚抄』の記述によれば尾張国春部郡には、「池田（いけだ）、柏井（かしわい）、安食（あじき）、山村（やまむら）、高苑（たかその）、餘戸（あまるべ）」の６郷の名称を窺い知ることができ、丹羽郡12郷と春部郡６郷との不可分な関係が想像できる。

また、丹羽郡を中心に展開する坂田寺亜式の軒丸瓦は、川井薬師堂廃寺と近接して建立された伝法寺廃寺（一宮市）や御土井廃寺（岩倉市）から出土しており、その共通性を窺い知ることができる（５－図13）。川井薬師堂廃寺と伝法寺廃寺・御土井廃寺出土の坂田寺亜式の軒瓦は、丹羽郡内の官林瓦窯（犬山市）及び春部郡内の白山瓦窯（春日井市）で生産され、各寺院に供給されたものと考えられている（愛知県2010）。坂田寺亜式の軒瓦の生産は、生産地と消費地との間に距離があることから、河川を利用した消費地への運搬が優先されたことが指摘されており、尾張の北部地域では瓦陶の兼業窯ではなく､その必要性に応じて瓦工人を招聘して瓦生産が行なわれていたことが考えられている（愛知県2010、p.744）。本軒丸瓦は、川井薬師堂廃寺のものと考えられ、官林瓦窯で生産された可能性が高い。

川井薬師堂廃寺は､昭和47（1972）年の土地改良工事に伴って塔の心礎や礎石が出土したことで（岩倉市1985、p.203）、昭和57（1982）年度と昭和59（1984）年度の２回にわたって部分的な発掘調査が行われているが、建物構造や伽藍配置などその詳細はわかっていない（岩倉市教委1991）。また官林瓦窯で生産された坂田寺亜式の軒瓦以外に､高蔵寺瓦窯（春日井市）で生産された藤原宮式の軒瓦が、勝川廃寺（春日井市）と併せて供給されていたことがわかっている。丹羽郡の旧五条川の右岸堤防上では、同時期に近接して川井薬師堂廃寺・伝法寺廃寺・御土井廃寺の３寺の地方寺院の建立が成されており、寺院の建立が郡司層だけではなく里（郷）長層まで広がっていた可能性も考えられることから、川井薬師堂廃寺については伽藍配置を有する寺院ではなく、村落内寺院的な小規模な寺院であった可能性も指摘されている（梶原義実2017、pp.62-63）。

しかしながら、今回の調査成果によって、本遺跡が地方の郡家（評家）の要素を色濃く持ち、その出先機関として機能していた可能性が高いことが考えられることから、川井薬師堂廃寺が、郡（評）家周辺寺院としての要素を色濃く持っていたことが指摘できる。地方社会では、有力豪族（氏族）が建立した小規模な古代地方寺院が、郡（評）家周辺寺院と併存することは既に知られており（山中敏史2005､p.42）､本遺跡と川井薬師堂廃寺との関連が強かったことが予測でき､川井薬師堂廃寺が郡（評）家周辺寺院としての性格を色濃く持っていたことが想像できる。

（基峰）

（５）漁撈錘（管状土錘・陶錘）について

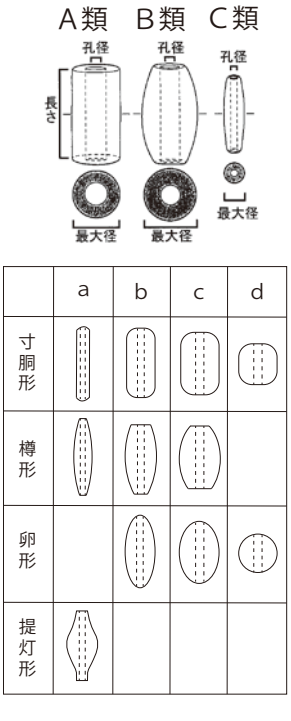
今回の調査では、各地区から漁撈具である漁撈錘（土錘・陶錘）が出土しており、図化できたもの

出土した漁撈錘(管状土錘・陶錘)

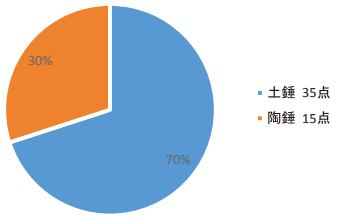
番号	図版番号	種別	形状	長さ×最大径 cm	重さ g	重さの補正
1	14	土錘	C類（樽形ａ）	(2.7) ×0.9	(4.2)	残存×2倍
2	35	土錘	C類（樽形ａ）	4.9×1.7	11.7	—
3	95	土錘	C類（樽形ａ）	4.6×1.2	4.7	—
4	175	土錘	C類（樽形ａ）	(3.0) ×1.5	(12.0)	残存×2倍
5	202	土錘	C類（樽形ａ）	(4.0) ×1.4	(15.2)	残存×2倍
6	211	土錘	C類（樽形ａ）	(3.8) ×1.5	(14.2)	残存×2倍
7	255	陶錘	C類（樽形ａ）	(3.2) ×1.1	(5.4)	残存×1.5倍
8	419	陶錘	C類（樽形ａ）	5.5×1.1	7.0	—
9	429	陶錘	C類（樽形ａ）	6.1×1.2	9.9	—
10	488	陶錘	C類（樽形ａ）	5.4×1.1	5.9	—
11	495	陶錘	C類（樽形ａ）	4.5×1.1	4.8	—
12	532	土錘	C類（寸胴形ａ）	(3.3) ×1.4	(12.2)	残存×1.5倍
13	582	土錘	C類（樽形ａ）	5.1×2.1	21.2	—
14	607	土錘	C類（樽形ａ）	(3.4) ×1.1	(4.5)	残存×1.5倍
15	608	土錘	C類（樽形ａ）	4.7×1.2	4.2	—
16	616	土錘	C類（寸胴形ａ）	(4.1) ×1.0	(4.5)	残存×1.5倍
17	617	土錘	C類（樽形ａ）	3.9×1.8	5.4	—
18	630	土錘	C類（樽形ａ）	(1.2) × (0.8)	(3.5)	残存×5倍
19	662	土錘	C類（樽形ａ）	4.2×1.3	5.5	—
20	663	土錘	C類（樽形ａ）	(2.0) ×1.3	(5.2)	残存×2倍
21	745	土錘	C類（樽形ａ）	5.4×1.9	14.8	—
22	746	土錘	C類（寸胴形ａ）	4.5×1.1	5.7	—
23	747	土錘	C類（樽形ａ）	(3.6) ×1.5	(9.2)	残存×1.5倍
24	748	土錘	C類（寸胴形ａ）	(3.0) ×1.1	(5.4)	残存×1.5倍
25	871	陶錘	A類（寸胴形ｂ）	(3.3) ×1.6	(14.0)	残存×1.3倍
26	915	陶錘	C類（樽形ａ）	4.9×1.1	5.4	—
27	916	陶錘	C類（寸胴形ａ）	7.8×1.1	7.9	—
28	929	陶錘	C類（樽形ａ）	5.2×1.1	5.8	—
29	955	土錘	C類（樽形ａ）	5.4×1.4	9.6	—
30	966	土錘	C類（寸胴形ａ）	4.8×1.0	4.6	—
31	1078	陶錘	C類（寸胴形ａ）	(5.2) ×1.3	(10.2)	残存×1.2倍
32	1104	土錘	C類（樽形ａ）	3.4×1.0	3.3	—
33	1130	陶錘	C類（寸胴形ａ）	5.4×1.1	5.9	—
34	1143	土錘	B類（樽形ｂ）	4.1×2.0	11.3	—
35	1144	土錘	C類（寸胴形ａ）	(3.4) ×1.3	(7.7)	残存×1.5倍
36	1145	土錘	C類（樽形ａ）	3.3×1.3	4.5	—
37	1146	土錘	C類（樽形ａ）	5.9×1.2	12.4	—
38	1152	土錘	C類（樽形ａ）	4.6×1.2	5.7	—
39	1159	土錘	C類（樽形ｂ）	(3.9) ×1.8	(17.4)	残存×1.5倍
40	1258	土錘	C類（寸胴形ａ）	(2.1) ×0.9	(3.0)	残存×2倍
41	1262	陶錘	C類（樽形ａ）	3.9×1.3	5.0	—
42	1271	陶錘	C類（寸胴形ａ）	4.3×1.1	4.0	—
43	1362	土錘	C類（寸胴形ａ）	(3.7) ×1.2	(6.8)	残存×1.2倍
44	1384	土錘	C類（樽形ａ）	(4.7) ×1.3	(11.1)	残存×1.3倍
45	1424	土錘	C類（樽形ａ）	5.0×1.6	11.1	—
46	1437	陶錘	C類（樽形ｂ）	5.0×1.9	15.8	—
47	1439	土錘	B類（卵形ｂ）	5.3×2.7	41.0	—
48	1445	土錘	B類（樽形ｂ）	5.7×2.6	29.6	—
49	1446	土錘	C類（樽形ａ）	4.5×1.3	6.5	—
50	1458	陶錘	C類（寸胴形ａ）	(3.3) ×1.1	(7.1)	残存×1.5倍

※長さ・幅の( )は残存、重さの( )数値は補正した推定値で、数値の小数点2位以下は四捨五入とした。

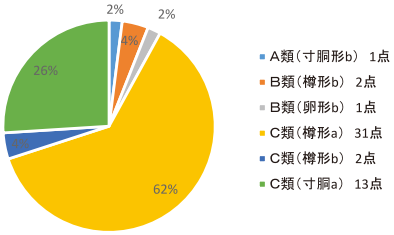
管状土錘・陶錘の形状分類



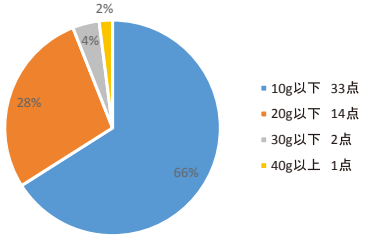
グラフ：漁撈錘の種別比率



グラフ：漁撈錘の形状比率



グラフ：漁撈錘の重さ比率



５－図14　出土した漁撈錘（管状土錘・陶錘）の形状分類と比率

［分類図：安岡早穂2018・p.72 図１の一部に加筆、富山県文振団埋文事2007・p.112 再トレースして加筆］

は合計50点で、土錘35点（70％）、陶錘15点（30％）である。

いずれも管状土錘･陶錘で、一部を欠損しているものが目立つが、形状は、安岡早穂氏（2018、p.72）の形態分類Ａ類（管状）に属し、さらに形状から「Ａ類・Ｂ類・Ｃ類」の３種類に分類した。細い形状のＣ類が大半（90％）を占め、そのうち樽形ａ（富山県文振団埋文事2007、p.102）に分類できるものが62％を占め、寸胴形ａを含めると全体の88％となる。

欠損したものに欠損個所に該当する補正係数を掛けて重さを推定すると、重さ40gまでの軽量のものが全体の98％を占める。内訳別では、10ｇまでの極めて軽量のものが33点（66％）、10ｇを超えて20ｇ以下のものが14点（28％）、20ｇを超えて30ｇ以下のものが２点（４％）である。わずかに40gを超えるものが１点（２％）であった。平安時代以降に出現するといわれている重さ100gを超えるような大型の漁撈錘の出土は認められなかった（５－図14）。

漁撈錘（土錘・陶錘）は、漁網に用いられた錘で、大型や中型である程度の重量のあるものは曳網や巻網、流水域での刺網、小型軽量のものは止水域での刺網に用いられた可能性が高いと指摘される（大沼芳幸1990、p.289）。今回の調査では小型で軽量のものが大半を占めていることから、止水域での刺網に用いられていたものと考えられ、周辺の河川などで魚を捕るための漁が行われていた可能性が高い。

漁獲の対象については、古代の漁業は捕獲する対象がごく限られたもので、水産加工品が多いことが指摘されており、10世紀に編纂された『延喜式』に見られる諸国からの貢納水産物としては、東海道の尾張国では「年魚（氷魚）･白貝･蛤貝･蝮蛸･凝海藻･鹿角菜（つのまた）･於期菜（おこのり）･塩」の記載がある。白貝・蛤貝・蝮蛸は貝類、凝海藻・鹿角菜・於期菜は海藻類で、川を漁場として捕獲する水産物として、年魚（氷魚）の名が見られる。年魚は鮎で、氷魚は鮎の稚魚と考えられており、淡水魚として最も利用価値が高く諸国各地から貢納されている（福島好和1971、pp.35-58）。

出土した漁撈錘（土錘・陶錘）の量からは、本遺跡における漁撈が盛んな活動ではなかったことが想定されるが、本遺跡においても、年魚（アユ）などが漁獲の対象となっていたことが想像できる。

（基峰）

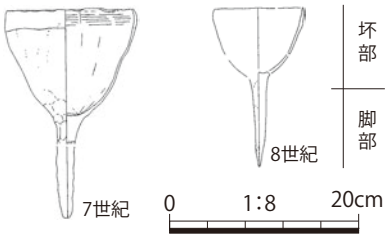
（６）製塩土器について

今回の調査では、１ｃ区から３点（第354図［写真図版310］-184、第360図［写真図版315］-266、第361図［写真図版315］-281）、１ｄ区から５点（第376図［写真図版329］-530、第381図［写真図版333］-606、第382図［写真図版334］-622、第382図［写真図版335］-633、第388図［写真図版341］-731）、１ｅ区１面から１点（第392図［写真図版344］-783）、２ｂ区から１点（第408図［写真図版357］-992）、２ｃ区から３点（第423図［写真図版370］-1177・1178、第424図［写真図版371］-1193）の合計12点の製塩土器が出土した。その内訳は坏部（Ｖ字形）１点、坏部（小型）１点、脚部（先尖り）10点で、鉢形の坏部を欠損した脚部の破片が全体の84％を占める。時期は７～８世紀に相当する（５－図15）。

漁撈錘の項で述べた通り10世紀に編纂された『延喜式』に見られる諸国からの貢納水産物として、東海道の尾張国では「年魚（氷魚）・白貝・蛤貝・蝮蛸・凝海藻・鹿角菜（つのまた）・於期菜（おこのり）・塩」の記載がある。古代尾張国の塩生産は、古墳時代に成立した長脚に鉢形の坏部を載せる製塩土器を使用した伝統的な土器製塩によって、平安時代まで貢納のための調庸塩を含めた塩の生産が行われていたことがわかっている。古墳時代以来の伝統的な土器製塩がその特徴といえる（考古学フォーラム2010、愛知県2010、岸本雅敏2021、pp.42-48）。

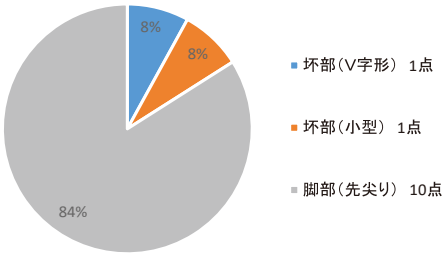
出土した製塩土器

番号	図版番号	地区・出土遺構	残存個所・形状等	時期
1	184	1c区 SB007	脚部（先尖り）	7・8世紀
2	266	1c区 SD061	脚部（先尖り）	7・8世紀
3	281	1c区 SD135	脚部（先尖り）	7・8世紀
4	530	1d区 SI609	脚部（先尖り）	7・8世紀
5	606	1d区 SD075	脚部（先尖り）	7世紀
6	622	1d区 SD201	脚部（先尖り）	7・8世紀
7	633	1d区 SD245	脚部（先尖り）	7・8世紀
8	731	1d区 表土掘削	脚部（先尖り）	6・7世紀
9	992	2b区 SB013	坏部（小型）	8世紀
10	1177	2c区 SI447	脚部（先尖り）	8世紀
11	1178	2c区 SI447	脚部（先尖り）	8世紀
12	1193	2c区 SI667	坏部（Ｖ字形）	7世紀後



製塩土器の器形（松崎遺跡）

グラフ：製塩土器の残存部位比率



５－図15　出土した製塩土器と残存部位の比率［実測図:愛知県2010・p.313 図７］

本遺跡出土の製塩土器の大半が脚部の先端が先尖りとなる７～８世紀のものであるが、尾張の地域では７世紀初頭以降に先のとがった細身の棒状脚を付けた製塩土器に統一化がなされることがわかっており（立松彰2010、pp.16-17）、松崎遺跡（東海市）から出土した製塩土器などがその全体器形を窺い知ることができる好資料として知られている。土器製塩によって作り出される塩は固形物の塩で、鉢形の坏部を壊して器壁に凝着した塩をそぎ落とすことによって散状塩を得られることから、坏部が既に壊されているために、脚部のみの出土が多い傾向となる。

貢納のための調庸塩は散状塩を俵に詰めて川船などを利用して輸送したと考えられるが、集落にて必要となる塩は製塩土器に入れたまま知多・渥美半島などから運び込まれた可能性が高い。本遺跡から出土した製塩土器は後者のようなものと考えられる。また、古代遠江国の調査事例では、数多くの製塩土器が出土した遺跡は、浜松市の井通遺跡（引佐郡家）や伊場遺跡（敷智郡家）などのように流通などの拠点となる郡（評）家に推定される遺跡に集中する傾向が指摘されている（森泰通2010、p.69）。

本遺跡においても正倉を含めた多くの高床建築の倉庫が確認されていることから、塩を貯蔵した「塩倉」が存在した可能性が考えられる。

（基峰）

（７）土馬について

今回の調査では、１ｄ区から５点（第381図［写真図版333］-609、第389図［写真図版341］-741～744）、１ｅ区１面から１点（第392図［写真図版344］-783）、２ａ区１面から１点（第398図［写真図版349］-870）の合計７点の土馬の脚部（足）が出土した。出土した地区別に見ると、１ｄ区に集中しており、５点の出土が確認できた（全体の72％）。いずれも頭部～体部を欠損した脚部（足）だけの破片である。１ｄ区の表土掘削と遺構外から出土した２点は、個々の形状は異なるが胴部が中空と

なる作りである。

岩倉市域では平成24（2012）～25（2013）年にかけて実施された中街道遺跡の発掘調査で、胴部が中空の造りである陶馬の胴部１点の出土が知られている。本遺跡から出土した土馬の脚部（足）は４点が遺構外からの出土で、遺構（溝）から出土したものは遺構（溝）の年代観が中世段階に関わる可能性があることから、遺構との関連はないものと考えられ、いずれも時期は８世紀代のものと考えられる（５－図16）。前述の中街道遺跡から出土した陶馬も、遺構（ＳＤ６：溝）から出土したものではあるが、遺構（溝）の年代観が中世段階に関わる可能性があることから、本遺跡出土の土馬と同様に、遺構との関連はないものと考えられている（岩倉市教委2013、p.48）。

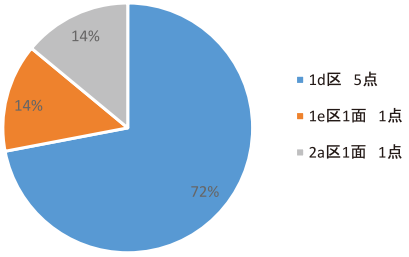
土馬については、『続日本紀』文武２（698）年４月の「奉二馬于芳野水分峯神一。祈レ雨也」や同年６月の「奉二馬于諸社一祈雨也」などの祈雨に関する記述などから、祈雨祭祀に関わる祭祀具と考えられており、効用を滅した祭祀具は破壊し再利用はないものと考えられている（小笠原好彦2015 p.366）。土馬は、脚部（足）などを欠損して出土することがその本質を表しているものと考えられ、壊し流すといった水に関する祭祀具として、溝から出土する傾向が強い。平城京では、水に関連した場所から数多くの土馬が発掘されており、畿内で始まった律令祭祀が、地方社会で定着していたことの現れともいえる。

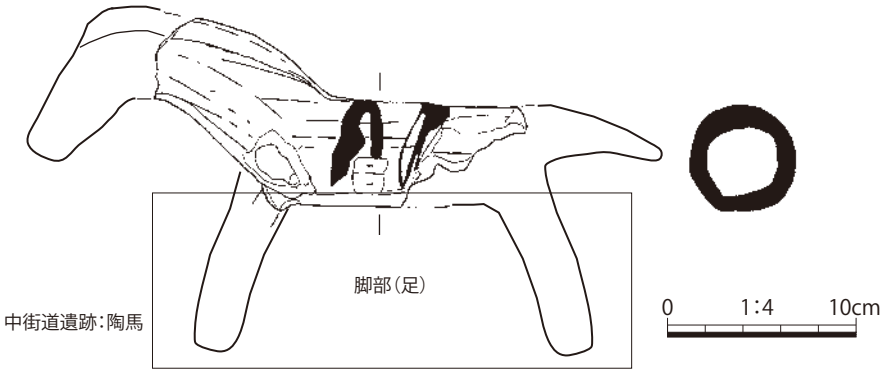
よって、本遺跡から土馬の脚部（足）のみが１ｄ区から集中して出土したことは、１ｄ区周辺にて

出土した土馬

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	残存個所・形状等	時期
1	609	土馬	1d区 SD075	脚部（棒状）	8世紀
2	741	土馬	1d区 包含層	脚部（棒状）	8世紀
3	742	土馬	1d区 遺構外	脚部（棒状）	8世紀
4	743	土馬	1d区 表土掘削	脚部（胴部中空）	8世紀
5	744	土馬	1d区 遺構外	脚部（胴部中空）	8世紀
6	783	土馬	1e区1面 SD038	脚部（棒状）	8世紀
7	870	土馬	2a区1面 SD004	脚部（棒状）	8世紀

グラフ：土馬の出土地区別比率





５－図16　出土した土馬と出土地区別比率・土馬復元図［実測図：岩倉市教委2013・p.59 第29図に加筆］

祈雨祭祀や河川祭祀などが行われ、その祭祀具として使用された後の姿といえよう。

（基峰）

（8）紡錘車について

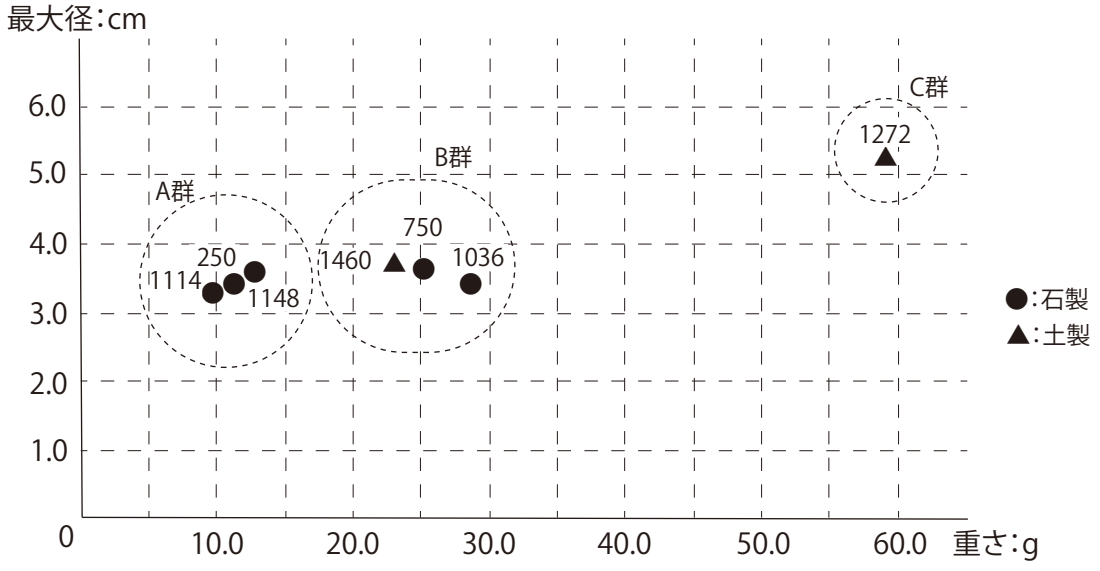
今回の調査では、１ｃ区から１点（第359図［写真図版314］-250）、１ｄ区から１点（第389図［写真図版341］-750）、２ｂ区から３点（第412図［写真図版360］-1036、第418図［写真図版365］-1114、第420図［写真図版368］-1148）、２ｃ区から１点（第429図［写真図版376］-1272）、Ｒｄ区から１点（第443図［写真図版388］-1460）の合計７点の紡錘車（紡輪部分）が出土した。１ｃ区・１ｄ区・２ｂ区出土の５点は石製、２ｃ区・Ｒｄ区出土の２点は土製である。２ｂ区出土の1036とＲｄ区出土の1460の表面には斜文による装飾が施されている。

欠損したものに欠損個所に該当する補正係数を掛けて重さを推定し、紡錘車の紡輪個々の最大径と重さを比較したところ、最大径約3.5㎝前後で重さ15g以内に収まる軽量のＡ群と、最大径約3.5㎝前後であるが重さ20～30gに収まるＢ群、そして最大径約5.0㎝を超えて重さ60gに近い重量のあるＣ群に分かれた。Ｃ群の1272は古墳時代のものと推定され、時期的にやや古いものと考えられるが、Ａ群・Ｂ群はいずれも７～８世紀を中心としたものと考えられる（５－図17）。

雑駁ではあるが、紡錘車の紡輪部分が７世紀前後に、土製から石製へと変化した様相が窺える。また、軸孔は直径0.6～0.7㎝とほぼ規格化された大きさであることから、紡錘車の紡輪に差し込まれた紡茎の規模には差が無かったことも窺える。Ａ群・Ｂ群の相違については、紡ぐ糸（繊維）の差を反

出土した紡錘車

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	最大径×高さ ｃｍ	孔径 ｃｍ	重さ ｇ	重さ補正	時期	備考
1	250	石製（安山岩）	1c区 SK868	3.5×0.6	0.6	(11.3)	残存×1.1倍	6世紀後～7世紀中	
2	750	石製（石灰岩）	1d区 表土掘削	3.6×1.4	0.7	25.5	—	7・8世紀	
3	1036	石製（滑石）	2b区 SI416	3.4×1.5	0.7	28.9	—	7世紀	斜文
4	1114	石製（滑石）	2b区 SP566	(3.3) ×0.9	(0.7)	(10.0)	残存×2倍	7・8世紀	
5	1148	石製（礫岩）	2b区 包含層	(3.6) × (1.0)	(0.7)	(13.6)	残存×4倍	7・8世紀	
6	1272	土製	2c区 遺構外	5.2×2.4	0.6	59.5	—	5世紀	
7	1460	土製	Rd区 SX163	(3.8) ×1.5	(0.5)	(23.8)	残存×2倍	7世紀	斜格子文



５－図17　出土した紡錘車の最大径・重さの分類

映したものと考えることができる。

（基峰）

（9）須恵器短頸壺・四耳壺について

今回行った調査において２ｃ区の包含層からほぼ完形の薬壺形の須恵器小型短頸壺（第429図［写真図版376］-1267）１点が出土した。口径5.0㎝、高さ6.1㎝と小型で、後世の薬師如来像の左の手のひらに持つ薬壺のようである。この小型短頸壺の外面には降灰や自然釉が見られ、器形や成形などから８世紀末頃～９世紀初頭頃の年代が想定される。下田南Ⅴ期に相当する遺物で、集落活動が最盛期を過ぎたころに該当する。

他地区から出土した須恵器小型短頸壺ないしは鉢に相当する器形で、図化できたものは６点（第351図［写真図版307］-145、第361図［写真図版316］-292、第369図［写真図版323］-417、第372図［写真図版326］-473、第399図［写真図版350］-899、第415図［写真図版363］-1067）であるが、いずれも体部が坏身や埦に類似するやや古い器形で、２ｃ区包含層出土の小型短頸壺（1267）よりも古い時期に相当する。いずれも器形や成形などから７世紀代前半～後半の遺物と考えられ、下田南Ⅲ・Ⅳ期に相当する。２ｃ区包含層出土の小型短頸壺（1267）は、本遺跡出土の遺物としては稀有なものといえる。

次に口径が10.0～15.0㎝程度となる大きさの一般的規模の須恵器短頸壺を見ると、図化できたものは７点（第352図［写真図版308］-152、第354図［写真図版310］-181、第363図［写真図版318］-332、第390図［写真図版343］-756、第400図［写真図版351］-902、第416図［写真図版364］-1082、第422図［写真図版369］-1165）であった。１ｃ区ＳＢ007出土の短頸壺（181）は口径24.2㎝と大振りで、大甕に相当する器形である。また１ｅ区１面ＳＤ002出土の短頸壺（756）は口縁部が内傾する器形で、２ａ区１面包含層出土の短頸壺（902）は残存部が体部のみであるため長頸壺となる可能性がある。２ｂ区ＳＫ426出土の短頸壺（1082）は口縁部がやや甕に類似し、２ｃ区ＳＩ240出土の短頸壺（1165）は口径が7.4㎝とやや小さめで肩が張る器形となる。いずれも器形や成形などから７世紀中頃～８世紀中頃の時期と考えられる遺物で、下田南Ⅲ期末～Ⅳ期に相当する。

なかでも１ｂ区表土掘削の際に出土した短頸壺（152）は体部上半（肩より上方）に耳を持った四耳壺で、口径は12.4㎝を測る。本来は有蓋であった可能性が高いと考えられ、尾張の地域では同規模で同様の器形の須恵器四耳壺が藤山台９丁目遺跡（春日井市）などから出土している。藤山台９丁目遺跡出土の四耳壺は、火葬墓の骨蔵器として使用されたもので、同様に須恵器四耳壺が火葬墓の骨蔵器として使用された例として、春日井市出川町出土のものが知られている。出川町出土の四耳壺は、藤山台９丁目遺跡出土の四耳壺よりも大振りの器形で高台を欠いているが有蓋で、今回の調査で出土した須恵器四耳壺（152）の器形などを考えるうえで参考例となる。藤山台９丁目遺跡・出川町出土の四耳壺はいずれも高蔵寺２・３号窯（春日井市）で８世紀初頭に生産されたものと考えられており、尾張の地域では、８世紀初頭～前半にかけて有蓋四耳壺（短頸壺）を骨臓器として使用した火葬墓が出現する（愛知県2010、pp.216-217）。また、灰釉陶器の有蓋短頸壺が塔の越遺跡（稲沢市）から出土しており、本遺跡出土の須恵器短頸壺の器形や特徴などを考えるうえで参考となる（５－図18）。

今回の調査で出土した壺蓋で図化できたものは３点（第351図［写真図版307］-141、第327図［写真図版330］-549、第440図［写真図版385］-1416）である。特に１ｄ区ＳＩ795から出土した壺蓋（549）は口径8.2㎝、器高4.7㎝と高さを有する器形で、天井には宝珠形のつまみが付いている。器形や成形などから７世紀後半の遺物と考えられる。前述の須恵器四耳壺（152）より小型でやや古い時期のもので、須恵器四耳壺（152）の蓋としては、時期や大きさから考えて１ｂ区ＳＤ243出土の壺蓋（141）

出土した須恵器小型短頸壺(鉢)

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ ｃｍ	時期	備考
1	145	短頸鉢	1b区 SP070	(9.4) × (3.5)	7世紀後	
2	292	短頸壺	1c区 SD288	(8.2) × (4.1)	7世紀前半～中	
3	417	短頸壺	1c区 SP006	(10.8) × (4.3)	7世紀前	自然釉
4	472	(短頸壺)	1c区 包含層	(7.8) × (4.4)	7世紀後	
5	899	(短頸壺)	2a区1面 遺構外	(5.8) × (5.5)	7世紀前	
6	1067	短頸鉢	2b区 SK179	(9.5) × (4.0)	7世紀前半～中	
7	1267	短頸壺	2c区 包含層	5.0×6.1	8世紀末～9世紀初	降灰・自然釉

出土した須恵器短頸壺

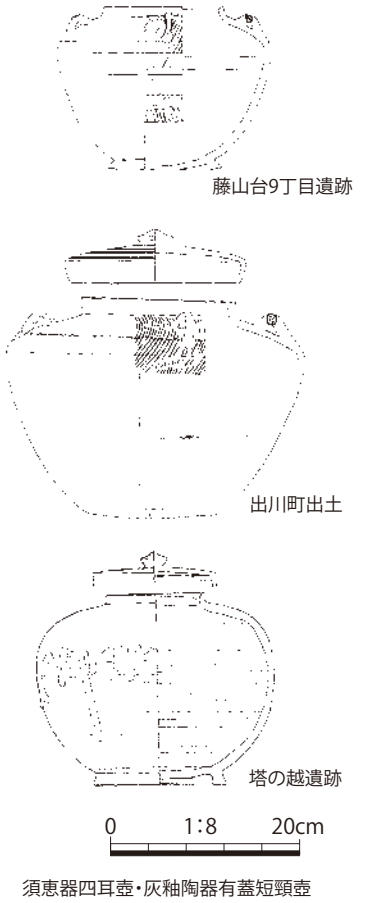
番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ ｃｍ	時期	備考
1	152	短頸壺	1b区 表土掘削	(12.4) × (3.8)	8世紀前	
2	181	短頸壺	1c区 SB007	(24.2) × (4.4)	7世紀後～8世紀	
3	332	(短頸壺)	1c区 SD512	(14.0) × (5.1)	7世紀後～末	
4	756	短頸壺	1e区1面 SD002	(11.0) × (5.0)	7世紀中	
5	902	短頸壺	2a区1面 包含層	－ × (8.3)	7世紀後	
6	1082	短頸壺	2b区 SK426	(9.4) × (2.8)	8世紀中	降灰
7	1165	短頸壺	2c区 SI240	(7.4) × (5.3)	8世紀前	

出土した須恵器壺蓋

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ ｃｍ	時期	備考
1	141	壺蓋	1b区 SD243	(12.8) × (2.8)	8世紀	
2	549	壺蓋	1d区 SI795	(8.2) ×4.7	7世紀後	
3	1416	壺蓋	Rb区1面 遺構検出面	(10.4) × (1.5)	7世紀中	

出土した須恵器短頸鉢

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ ｃｍ	時期	備考
1	334	短頸鉢	1c区 SD512	(16.0) ×13.7	7世紀後～8世紀初	
2	1124	短頸鉢	2b区 SX163	(10.8) × (7.9)	7世紀	
3	1390	短頸鉢	Ra区 SD001	(15.0) ×9.8	8世紀前	



須恵器四耳壺・灰釉陶器有蓋短頸壺

５－図18　出土した須恵器短頸壺（鉢）と周辺出土の有蓋四耳壺（短頸壺）
［実測図：愛知県2010・p.154 図４、p.127 図２］

のようなものであった可能性が高いといえる。

最後に、須恵器短頸壺に類似する器形として須恵器短頸鉢について記したい。今回の調査によって出土した須恵器短頸鉢で図化できたものは３点（第364図［写真図版318］-334、第419図［写真図版366］-1124、第439図［写真図版383］-1390）である。器形や成形などから７世紀後半～８世紀前半の遺物と考えられ、下田南Ⅳ期に相当する。器形から須恵器短頸壺と同様の用途で使用された可能性が考えられる。

（基峰）

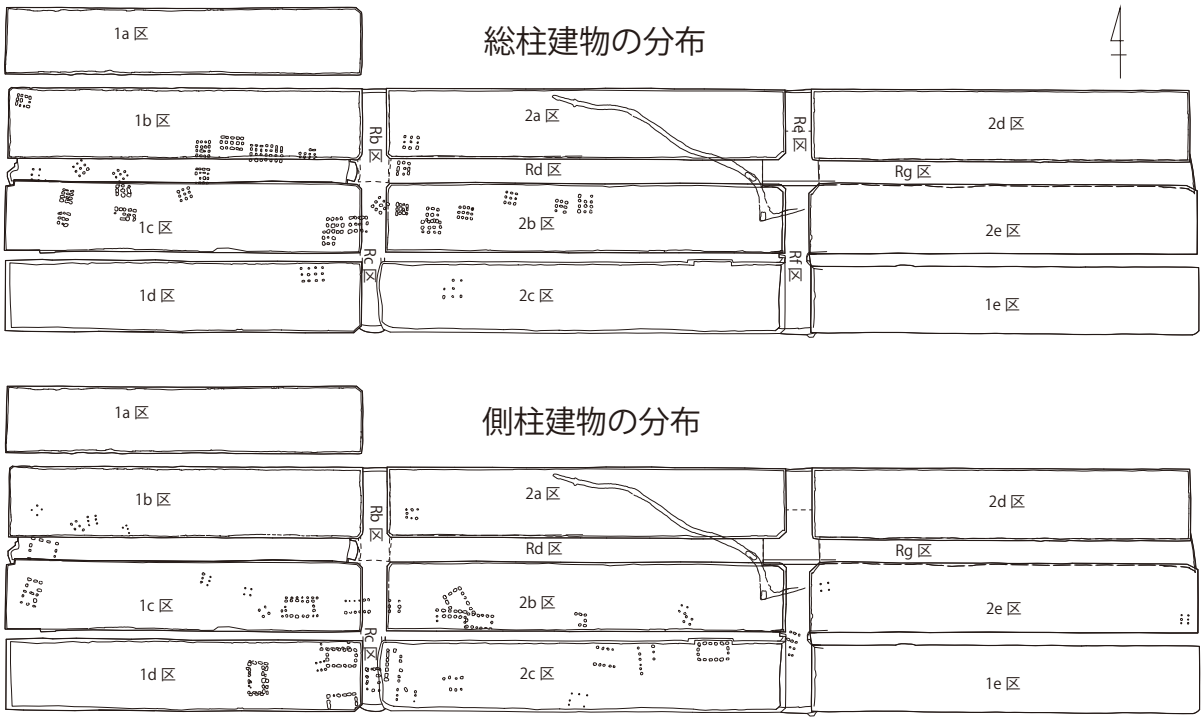
（10）掘立柱建物出土の礎板・柱根について

今回の発掘調査で、掘立柱建物の柱穴から出土した建築部材（木製品）の一部分である礎板と柱根についてまとめたい。

本遺跡では総柱ないしは側柱構造の掘立柱建物が多数確認できた。このうち17棟の建物から礎板と柱根の出土が認められた。礎板・柱根は、出土した際に既に形状が崩れているものもあったが、礎板の形状はいずれも長方形の板材と推定でき、なかには不明瞭ながらも加工痕を残すものも確認できた。

本遺跡での主要な掘立柱建物の分布を見ると、調査区域の中央より西側に建物が集中することがわかる。調査区域の中央付近に２ａ区２面ＳＤ166といったＲｆ区まで続く多数の土器群を出土した下田南Ⅲ期（６～７世紀中頃）を中心とした長狭な溝が見られ、この溝から東側には建物遺構が見られず、２ａ区２面ＳＤ166を境界としてその西側を生活域の中心と定めて建物が建築されていたと考えられる。構造に注目すると、総柱構造の掘立柱建物は調査区域の西側北寄りに多く分布し、１ｃ区～２ｂ区にかけての範囲に最も多くみられる。一方、側柱構造の掘立柱建物は調査区域の中央南寄りに多く１ｃ区・１ｄ区・２ｂ区・２ｃ区・Ｒｃ区にかけて分布する（５－図19）。

掘立柱建物の柱穴出土の礎板は、一枚の板材を柱穴の底面に敷くか、複数の板材を重ねた状態で出土している。後者の複数の板材を重ねた状態の建物はいずれも３間×３間以上の規模の総柱建物であるが、同じ建物でも個々の柱穴によって一枚の板材を使用したものと、複数の板材を重ねたものが見

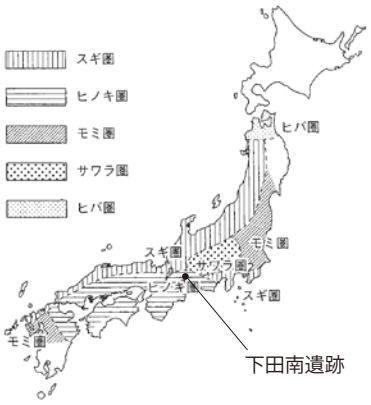


樹種同定による部材別樹種と数量

礎板	ヒノキ	4
	コウヤマキ	2
	サワラ	3
	スギ	1
柱根	ヒノキ	2
	コウヤマキ	3
	サワラ	2
	スギ	0

掘立柱建物使用樹種数量

ヒノキ	6
コウヤマキ	5
サワラ	5
スギ	1
計	17



５－図19　主要な掘立柱建物の分布と礎板・柱根に使用された樹種（建物分布図１：2500）

［下段図：弥生時代から古代にかけて各地域でもっとも利用された針葉樹の樹種　鈴木三男2012 p.98.に加筆］

られ、支柱となる柱の高さ調整を行うために複数枚重ねて使用したものがあると考えられる。一方、出土した柱根はいずれも柱穴の底面に直接設置されたもので、礎板を下敷きとした礎板と柱根がセットとなって出土したものは認められなかった。

礎板・柱根は樹種同定の結果によれば、ヒノキ、サワラ、コウヤマキが多く使用され、スギの使用が少ないことがわかった（第４章第５節・第11節参照）。ヒノキは愛知県内出土の建物の柱材としてよく使用されているもので、本遺跡出土の傾向と一致するが、本遺跡の建物では、水湿に強いコウヤマキやサワラが使用されていることが特徴として指摘できる。本遺跡での建物では、建築部材（木製品）として加工の容易さに加えて、ある程度水湿に強い木材が選ばれていたと考えられる。

以上のとおり、本遺跡の掘立柱建物では礎板・柱根にコウヤマキやサワラが使用されているという特徴が認められたが、建築部材の中心はやはりヒノキであったと考えられよう。想像となるが、本遺跡への建築部材となる木材の運搬については、地域の河川を活かした水上運搬であった可能性が考えられよう。

（後藤泰）

（11）墨書土器について

今回の調査によって17点の墨書土器が出土した。内訳は１ｃ区から２点、１ｄ区西側から２点、東側から９点、２ｂ区から１点、２ｅ区１面・２面から３点である。出土した墨書土器の種類は須恵器が２点、灰釉陶器が１点、山茶碗14点で器種は坏身・灰釉皿・碗・小皿で小皿と碗が最も多く７点である。墨書が書かれていた場所はほとんど外面底部で、文字数はほとんど１文字で底面のほぼ中央に書かれている（５－図20）。

１は漢数字の「一」のような文字が書かれていると考えられる。２は破片であるためどの部分にどんな文字が書かれてあったのか不明だが須恵器の坏身体部であると推測する。３は灰釉皿の底面に書かれている。文字は「可」のようなくずした文字が書かれている。４と５は文字の判断は不可能である。６は「大」である。７は「廾」か「土」のような文字が書かれている。８は「大」である。９は底部が欠損しているため文字の解読は不可能だが、２本の線が書かれていることがわかる。10は「大」のような文字、11は記号のような文字が書かれてある。12は欠損しているため文字の詳細は不明だが、出土した遺物から推測すると「大」ではないかと思われる。13は「大」か「イ」の文字が考えられる。14は「平」という文字か「土」と「下」か「十」と「下」が上下に組み合わせてある文字、または「廾」のように見える。15は「下」という文字だと考えられる。16は漢数字の「一」と考えられるが、底部が欠損しているため詳細は不明である。17は欠損しているが形から推測すると「大」のような文字だと思われる。

遺物の年代は１が７世紀前半～中頃、２は７～８世紀、３が９世紀後半。11は12世紀中頃、15は12世紀後半～13世紀前半、８・９・12は13世紀後半～14世紀前半。13・16は14世紀前半、４・５は14世紀前半～中頃、10・14・17は14世紀中頃、６・７は15世紀前半と考えられる。

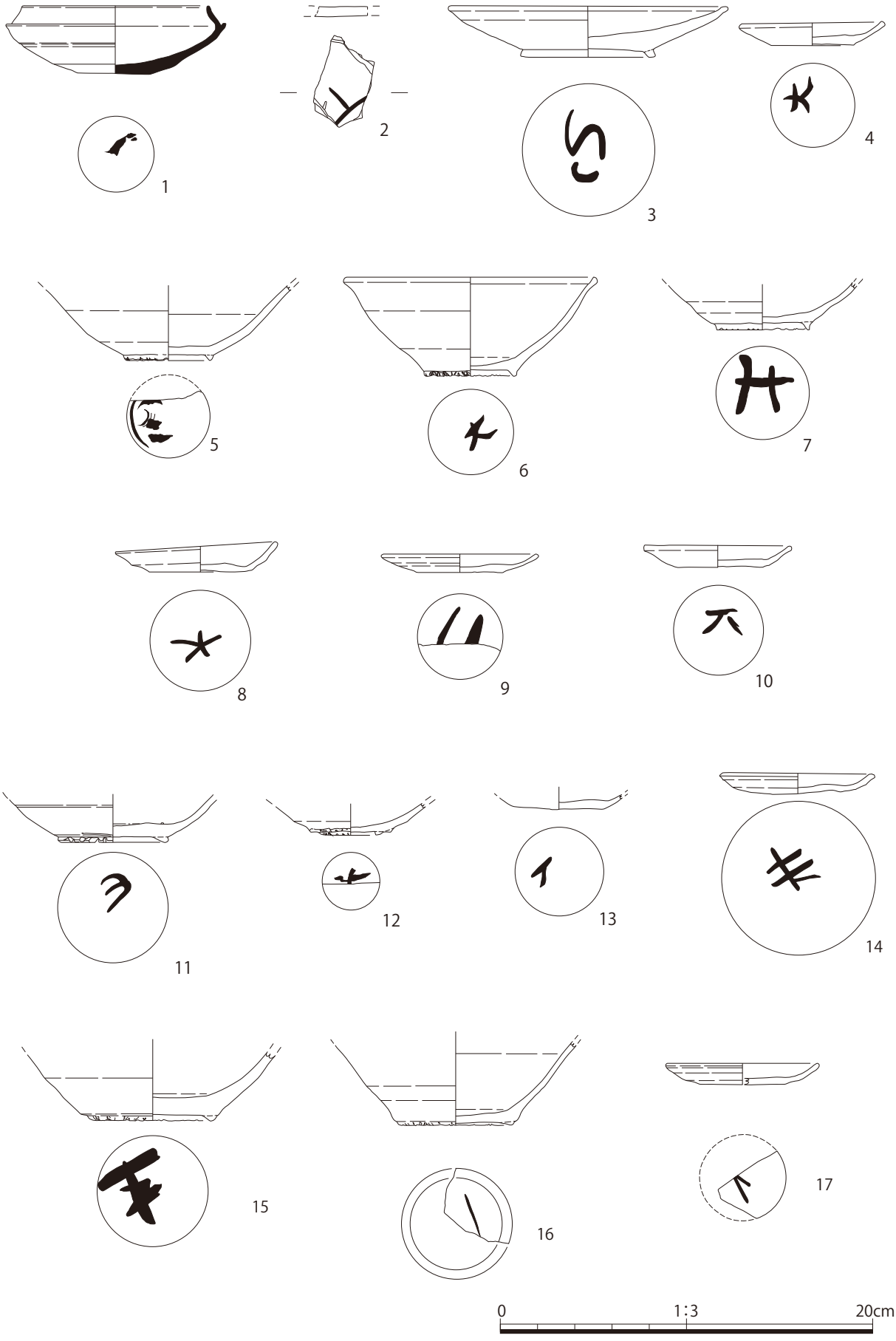
今回の調査で出土した墨書土器は、「大」やそれに類似した文字が多く書かれていた。『和名類聚抄』によれば本遺跡は尾張国丹羽郡に属しており、丹羽郡の郷名として「大桑郷」という名称がある。しかし『古代地名大辞典』（1999）によれば、「大桑郷」は『地理志料』によると現在の犬山市楽田地区、『地名辞書』によると江南市古知野町一帯から一宮市瀬部にかけて、『愛知県郡町村字名調』によると江南市山尻付近とされている。いずれもが本遺跡から離れているため、「大桑郷」との関連は考え難い。「大」やそれに類似した文字の多くは、吉祥句としての意味合いが強いと考えられることから、「大」

には「はなはだしい」ことや、「盛んである」こと、または「そのさま」という意味があり、繁栄の願いを込め書かれたものといえよう。7は「土」とも読み取れるが、「廾」の可能性が高いと思われる。「廾」には「製品を単位ごとに管理し、識別し得る方法」（愛知県埋文セ1987、p.75.）という意味がある。底部には重ね焼きをした痕があったことから、製品管理の為に書かれたものの可能性が高い。15に書かれていた「下」と思われる文字については、同じく丹羽郡に「下沼郷」がある。現在の一宮市丹陽町三ツ井に該当する地域と考えられ、本遺跡から北西約3.0㎞のところに三ツ井遺跡（一宮市）がある。しかし、本遺跡から北西約900ｍに位置する権現山遺跡（岩倉市）では、下沼郷に関する墨書土器の記述が見られないことから、地名と判断することが難しく別の意味があったと考えられる。

出土した墨書土器は、溝から多く出土したものである。また、残存状態の良いものは日常生活で使

	土器種別	器種	位置	文字	出土地点	時期
1	須恵器	坏身	外面底面	一	1c区　SD074	7世紀前半～中頃
2	須恵器	坏身か	外面体部か	？	1c区　遺構外	7世紀～8世紀
3	灰釉陶器	灰釉皿	外面底面	可？思？	1d区　SD089	9世紀後半
4	山茶碗	椀	外面底面	？	1d区　SD254	14世紀前半～中頃
5	山茶碗	椀	外面底面	大	1d区　SD255	14世紀前半～中頃
6	山茶碗	椀	外面底面	？	1d区　SD254	15世紀前半
7	山茶碗	小皿	外面底面	？	1d区　SD254	15世紀前半
8	山茶碗	小皿	外面底面	大	1d区　SD254	13世紀後半～14世紀前半
9	山茶碗	小皿	外面底面	大？	1d区　SD254	13世紀後半～14世紀前半
10	山茶碗	椀	外面底面	廾？土？	1d区　SD0051	14世紀中頃
11	山茶碗	椀	外面底面	？	1d区　SD0051	12世紀中頃
12	山茶碗	小皿	外面底面	大	1d区　SD0051	13世紀後半～14世紀前半
13	山茶碗	小皿	外面底面	大？イ？	1d区　遺構外	14世紀前半
14	山茶碗	小皿	外面底面	土と下？ 平？廾？	2b区　SD080	14世紀中頃
15	山茶碗	椀	外面底面	下？	2e区1面遺構外	12世紀後半～13世紀前半
16	山茶碗	椀	外面底面	一？	2e区1面　遺構外	14世紀前半
17	山茶碗	小皿	外面底面	？	2e区2面　SD049	14世紀中頃

５－表３　出土した墨書土器一覧表



５－図20　出土した墨書土器

用され、残存状態が悪いものは祭事などの一時的なものに使われた可能性が考えられる。

（首藤）

（12）山茶碗について

山茶碗は、本遺跡では多くが溝から出土している。時期は、12～15世紀を中心とする。山茶碗の生産は、愛知県の瀬戸・猿投・常滑にて尾張型（南部系）、岐阜県の土岐・多治見と近接する瀬戸の地域にて東濃型（北部系）が知られている。

山茶碗の生産と流通については、常滑・東濃産は庄内川を搬入経路として流通するが、常滑では13世紀後半に生産が終了し、甕が生産の中心となる。一方、庄内川左岸の瀬戸・猿投産は川を超えることが運搬上の支障になって流通が減り、猿投では14世紀初頭に生産が終了となる。このような過程において、東濃型（産）の流通が増えるが、瀬戸産も15世紀中頃まで生産が継続されるため、13世紀後半以降にも数量は減少するが、本遺跡周辺への流通もなされている（藤澤良祐1990）。生産の終焉は、尾張型・東濃型ともに15世紀後半となる。

庄内川右岸の本遺跡周辺における山茶碗の出土傾向は、瀬戸産は少なく、猿投・常滑・東濃産が占めるのが一般的で、13世紀中頃以降は東濃産がほぼ全体を占めるようになる。本遺跡でも、周辺とほぼ同様の傾向を示しており、10世紀中頃（東山72号窯式･百代寺窯式）～12世紀前半（瀬戸第３型式）の出土量は少なく、12世紀中頃になると猿投・常滑産の尾張型の出土数が多くなる。13世紀中頃～14世紀になると、東濃型の出土数が多くなり尾張型の出土数を凌駕するようになるが、15世紀以降は出土数が減少する。

次に山茶碗の使用痕についてみておきたい。尾張型の内面、特に底部内面に使用による摩滅が見られるものが多く確認できた。東濃型については緻密な胎土が用いられているためか、または摩滅により滑らかになっているのか、もとから滑らかなのか判別が難しかった。また本遺跡から出土した山茶碗は底部のみのものが多く、口縁部まで残っているものは少なかったが、体部外面が摩滅していたものは見当たらなかった。山茶碗内面の摩滅（使用痕）については、擂鉢のように使用していたとも考えられており（武部真木2006）、確かに何かを摺るような作業をしなければ、荒れた山茶碗内面の表面が滑らかにはならないと考えられる。山茶碗の生産減少については、「摺る」道具に特化した擂鉢･卸皿の生産がその背景にあったとも考えられよう。

また、今回の調査で出土した山茶碗の底部外面には、尾張型・東濃型ともに判読不明ではあるが墨書が認められるものがあった（前項参照）。

（後藤秀）

（13）１ａ区出土の賽子（サイコロ）について

ここでは、１ａ区から出土した賽子（以下、サイコロと記す）についてまとめたい。

出土したサイコロ（第346図［写真図版303］-74）は、素焼きの土製品で、成形は手づくねで、形状は不整形の六面体である。時期は13～16世紀頃と推定され､表裏の目の和が必ず「７」になる。３・４の目に黒色、２・５の目に赤色の着色が施され、１・６の目には着色がなされていない。

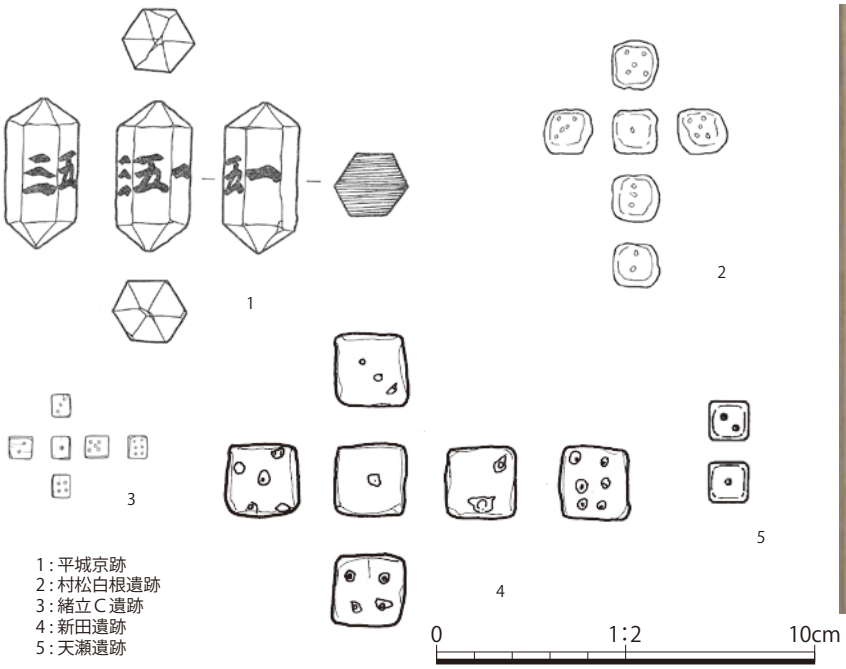
日本におけるサイコロは､奈良時代以前に中国から伝わったと考えられており､奈良県の正倉院（奈良市）には、聖武天皇が所有した象牙製のサイコロとサイコロ遊戯盤が所蔵されている。増川宏一氏によれば、７・８世紀に日本ではかまぼこ状の「朝鮮型」･「投げ棒型」･「立方体」の３つの型のサイコロが並存していたと考えられている（増川宏一1992）。サイコロの出土は全国的に認められるもので、国内で出土したサイコロの形状は、現在でも一般的な正六面体のほかに投げ棒状や多角柱のものなど

がある。代表例としてよく知られる奈良県の平城京跡（奈良市）から出土したサイコロは、立方体や多角柱の木製である。また福岡県の大宰府跡（太宰府市）などの上級地方官衙遺跡からの出土例が多く知られており（大塚初重1998）、本遺跡の周辺では、三重県の斎宮跡（多気郡明和町）からサイコロ状土製品の出土が知られている（斎宮歴史博物館1997）。

サイコロの材質には木製・骨角製・石製・土製などがあり、サイコロの目は表面にくぼみを作るもののほか、線刻や墨書で数字を記すものがある。前述の平城京跡出土の多角柱のサイコロの目には、漢数字が墨書されている。またサイコロの目の数の割り付けについては、古代には曖昧であったと考えられており（山村信榮1998）、茨城県村松白根遺跡（那賀郡東海村）から出土したサイコロでは、表裏の目の和が７にならないものが確認されている（茨城県教育財団2007）。

一方、本遺跡から出土したサイコロに類似する出土例としては、新潟県緒立Ｃ遺跡（新潟市）から出土した骨製もしくは角製のサイコロや、茨城県新田遺跡（猿島郡五霞町)から出土した石製（角閃石）のサイコロと大分県満月寺跡（臼杵市）から出土した素焼き土製のサイコロといった表裏の目の和が「７」になるサイコロがある（黒埼町教委1993、茨城県教育財団2015、臼杵市2019）。また岡山県天瀬遺跡（岡山市）から出土した石製（長石）のサイコロでは、目に赤色顔料が詰められたものがある（岡山県教委2001）。

本遺跡から出土したサイコロは六面体で、中近世の遺跡から出土したサイコロに類似例が多く見られるものである。目の彩色については、目の一部のみに彩色が残るのみで、これが製作時からのもので、彩色の際に区別するために彩色する箇所と彩色しない箇所を分けたのか、あるいは後世に一部分だけが彩色されたものかは不明である。中世になると『七十一番職人歌合（しちじゅういちばんしょくにんうたあわせ）』に、賽磨（さいすり）と呼ばれるサ



『七十一番職人歌合』に描かれた賽磨

５－図21　各地出土の賽子（サイコロ）と中世の賽磨（職人）

［１：舘野和己・和田萃1989・p.24、２：茨城県教育財団2007・p.17 第12図、３：黒埼町教委1993・p.11 第６図、４：茨城県教育財団2015・p.72 第63図、５：岡山県教委2001・p.79 第75図 賽磨：東京国立博物館提供］

イコロ職人が描かれており、中世以降になるとサイコロを用いた遊戯は広く一般に普及していたことが想定できる。本遺跡でもサイコロ遊戯が行われていたことは確かといえよう。

（後藤泰）

（14） １ｅ区１面出土のウマについて

１ｅ区１面の遺構検出の際に、調査区の東側からウマの歯（第393図［写真図版345］-805）が出土している。出土した層位から、鎌倉時代以降の可能性が考えられる。

ここでは若干の考察を行いたい。自然科学分析の結果、本資料はウマの上顎臼歯と判明した。１点のみの出土のため年齢・性別・体高の特定には至らなかった。また周辺では、御山寺遺跡（岩倉市）から本遺跡同様にウマの上顎臼歯の出土が知られている（愛知県埋文セ2011）。

本遺跡では、２ｃ区から４棟（２ｃ区ＳＢ003・２ｃ区ＳＢ005・２ｃ区ＳＢ006・２ｃ区ＳＢ007）、Ｒｃ区と１ｂ区の隣接部分から１棟（Ｒｃ区ＳＢ004）の牛馬などの家畜小屋と想定される建物が検出されている。時期は、２ｃ区ＳＢ003は７世紀後半～８世紀前半、２ｃ区ＳＢ005～２ｃ区ＳＢ007は７世紀後半～８世紀中頃、Ｒｃ区ＳＢ004は７世紀後半～末頃である。いずれも糞尿溝（溜め）などの存在は確認できないが、東西又は南北に細長い建物型式で、桁行柱間の間隔が狭小であることから、馬小屋の形態に類似する(篠崎譲治2010)。また、愛知県内では権六遺跡（知多郡美浜町）から13世紀前半～中頃の馬小屋と思われる掘立柱建物（14B区ＳＢ04）が検出されている（愛知県埋文セ2017）。本遺跡の方が建物の規模は大きいが、同構造の建物であり、馬小屋などであった可能性が考えられる（５－図22）。

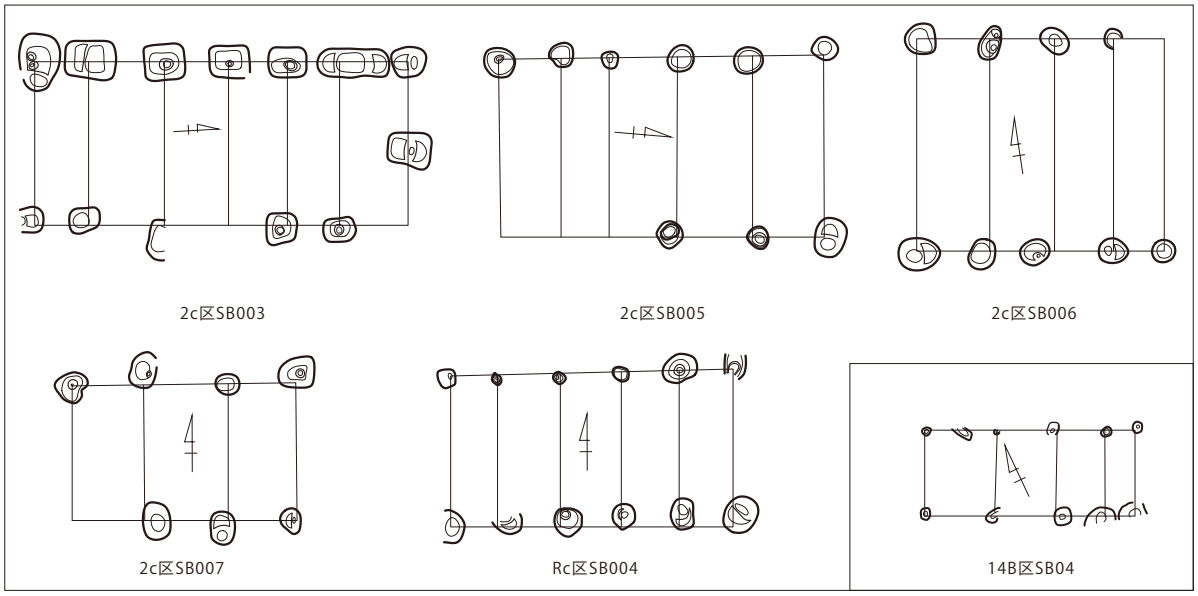
馬は古代から騎馬用・荷役用・耕作用などに利用されてきた。本遺跡でも古代～中世にかけて、荷の運搬や農耕などに用いられていたと考えられる。

（三島）

遺跡名	調査地区	遺構番号	規模				構成			時期
			長軸(桁行)	短軸(梁行)	深さ	平面	柱間規模	柱間間隔(桁行)	柱間間隔(梁行)	
下田南遺跡	2c	SB003	10.30	5.20	0.50	長方形	6×2(1)	1.50	2.20 (4.40)	7世紀後半～8世紀前半
	2c	SB005	9.40	5.70	0.15	長方形	5×1	1.80	4.70	7世紀後半～8世紀中頃
	2c	SB006	7.30	6.40	0.30	長方形	4×1	1.50	5.50	7世紀後半～8世紀中頃
	2c	SB007	6.80	4.80	0.44	長方形	3×1	1.80	4.00	7世紀後半～8世紀中頃
	Rc	SB004	7.46	3.95	0.50	長方形	5×1	1.51	3.95	7世紀後半～末頃
権六遺跡	14B	SB04	5.50	2.20	0.55	長方形	4×1	1.30	2.20	13世紀後半～中頃

※単位(m)

５－表４　下田南遺跡と権六遺跡の馬小屋と想定できる建物一覧



５－図22　下田南遺跡と権六遺跡の馬小屋と想定できる建物（１：200）

［権六遺跡：愛知県埋文セ2017・p.29 図27］

第３節　まとめ

下田南遺跡の発掘調査成果からは、主に古墳時代～中世（下田南Ⅰ期～Ⅷ期）に至るまでの集落としての変遷過程が確認できた。

発掘調査で確認できた建物を中心とした主要な遺構は、古墳時代以前（下田南Ⅰ・Ⅱ期）ではＳＩ（竪穴建物）１棟、ＳＫ（土坑）２基、ＳＸ（不明遺構）１基であるが、飛鳥～平安時代（下田南Ⅲ期～Ⅵ期）にかけては最も多くの遺構が確認でき、ＳＢ（掘立柱建物）62棟、ＳＩ（竪穴建物）69棟、ＳＫ（土坑）32基、ＳＸ（不明遺構）18基ほどであった。中世以降（下田南Ⅶ・Ⅷ期）になると、ＳＫ（土坑）29基が認められた。ＳＤ（溝）とＳＰ（ピット）は各時期にわたって数の増減はあるが普遍的に存在する。特にＳＤ（溝）については、中世以降（下田南Ⅶ・Ⅷ期）になると全調査区を並走して横断する規模の大きなもの（道路側溝）や方形区画を呈するもの（屋敷溝）などその規模が大きくなっている。

発掘調査成果として特に注目できるのは、６～７世紀中頃（下田南Ⅲ期）に入り集落の営みが急激に成長し、７世紀後半～８世紀中頃（下田南Ⅳ期）になると郡家（評家）の出先機関と推定される地方官衙遺跡の一部（郷の中心的施設）として機能していたことが推定できたことである。

しかしながら８世紀後半～９世紀（下田南Ⅴ期）の状態を見ると、前代（下田南Ⅳ期）で見られた地方官衙遺跡としての性格は消滅し、継続しなかったことが窺い知れる。この原因としては、国司ないしは郡司からの命令や、有力豪族（氏族）の衰退ないしは他の有力豪族（氏族）の台頭などによる郡内（地方行政）の再編、または洪水などの自然災害によって土地を放棄し得ない状況などが要因として想像できるが、詳らかではない。『続日本紀』天平宝字７（763）年９月詔の「疫死多レ数、水旱不レ時。神火屢至、徒損ニ官物一。此者、国郡司等不レ恭ニ於国神一之咎也。」といった東国で多発した神火などもその要因のひとつとして想像できる。

諸国の郡家（評家）と推定される遺跡の多くが、７～10世紀の長期間にわたって営まれた官衙遺跡であるが、本遺跡では８世紀後半以降になると集落としての営みが急激に衰退することが特徴であり、短期間に営まれた官衙的施設といえる。このことが木簡・墨書土器などの文字資料の出土が極端に少ない原因としても考えられる。

また郡家（評家）と地方寺院が近接して発掘される事例が多いことから、郡家（評家）の周辺に寺院が建立されていたことは一般的な現象といえ、本遺跡と川井薬師堂廃寺とは一連の遺跡として理解することが望ましいと考えられる。さらに旧五条川との関連も本遺跡の立地やその成立背景を考えるうえで重要である。

今後は、川井薬師堂廃寺の発掘成果や、旧五条川との位置関係などを含めて本遺跡の検討が行われていくことが課題と考えられ、岩倉市域を中心とした当該地域の歴史像を理解するうえで、「下田南遺跡群」として発掘調査成果が検討・究明されていくことを期待したい。

（基峰）

【引用・参考文献】（第４章以外）

愛知県 2002『愛知県史』資料編１ 考古１ 旧石器・縄文

愛知県 2003『愛知県史』資料編２ 考古２ 弥生

愛知県 2005『愛知県史』資料編３ 考古３ 古墳

愛知県 2010『愛知県史』資料編４ 考古４ 飛鳥～古代

愛知県 2015『愛知県史』別編 窯業１ 古代 猿投系

愛知県 2016『愛知県史』通史編１ 原始・古代

愛知県 2017『愛知県史』資料編５ 考古５ 鎌倉～江戸

愛知県教育委員会 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告３（尾北地区・三河地区）』

愛知県埋蔵文化財センター 1987『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第２集 土田遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1990『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 廻間遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1991『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第22集 森岡遺跡・淡州神社北遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1991『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第36集 境川遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1992『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集 勝川遺跡Ⅳ』

愛知県埋蔵文化財センター 1996『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集 大毛沖遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1997『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第74集 大縄遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2000『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集 下津北山遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2001『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集 志賀公園遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2003『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第107集 猫島遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2003『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 権現山遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2004『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第121集 志賀公園遺跡Ⅱ』

愛知県埋蔵文化財センター 2005『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 上品野遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2006『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集 島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中野郷北遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2007『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第141集 伝法寺野田遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2009『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第159集 下津新町遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2011『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集 御山寺遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2013『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第175集 下津宿遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2015『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第198集 下新田遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2016『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第203集 伝法寺野田遺跡Ⅱ』

愛知県埋蔵文化財センター 2017『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第207集 権六遺跡』

青木敬 2014「蹄脚円面硯Ｂの出現とその特質」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所 pp.24-25.

赤塚次郎 2001「第1編 原始 第3章 古墳時代の江南」『江南市史』本文編 江南市 pp.32-61.

荒井秀規 2017「評家と白鳳寺院」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社 pp.10-22.

池邊彌 1966『和名類聚抄郡郷名考證』吉川弘文館

池邊彌 1981『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館

一宮市教育委員会 2006『愛知県一宮市伝法寺廃寺発掘調査報告書 一宮市埋蔵文化財調査報告Ⅴ』

一の丸出版 1992『岩倉町史』復刻版

伊東孝夫・山田昌久編 2012『木の考古学－出土木製品用材データベース－』海青社

稲沢市教育委員会 1982『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅳ）』
犬山市 1983『犬山市史』史料編３ 考古 古代・中世
茨城県教育財団 2007『茨城県教育財団文化財調査報告書第284集 村松白根遺跡２ 上巻』
茨城県教育財団 2015『茨城県教育財団文化財調査報告書第395集 新田遺跡・上原遺跡・殿山塚』
岩倉市 1981『岩倉市史』資料１ 近世村絵図 金石文
岩倉市 1985『岩倉市史』上巻
岩倉市教育委員会 1983『岩倉市稲荷町・大山寺町埋蔵文化財発掘調査報告』
岩倉市教育委員会 1991『岩倉市文化財調査報告Ⅱ 薬師堂廃寺遺跡発掘調査概報』
岩倉市教育委員会・アーキジオ東海 2013『花ノ木遺跡・中街道遺跡発掘調査報告書－都市計画道路北島藤岡線街路改良工事に伴う埋蔵文化財調査－』
臼杵市 2019「中世のサイコロ」https://www.city.usuki.oita.jp
大上周三 2006「東国集落遺跡の掘立柱建物の理解」『掘立柱・礎石建物建築の考古学 資料集』pp.23～32.
大塚初重 1998「総論－考古学からみたあそびと芸術－」『考古学による日本歴史12 芸術・学芸とあそび』雄山閣 pp.5～18.
大沼芳幸 1990「正伝寺南遺跡出土の魚網錘について－網漁業の中での位置付け－」『一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会 pp.278-300.
大参義一 1966「尾張出土古瓦の編年的考察」『名古屋大学文学部研究論集』第41号 pp.191-205.
岡部町教育委員会 1997『県史跡 中宿古代倉庫群跡復元整備報告書』
岡本直久 1993「消費地からみた山茶碗－遺構内共伴遺物による各生産地編年対比－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第１輯 pp.61-75.
岡本直久 1999「愛知県の中世墓」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第７輯 pp.1-48.
岡山県教育委員会 2001『岡山県埋蔵文化財調査報告154 天瀬遺跡・岡山城外堀跡』
小笠原好彦 2015『日本の古代宮都と文物』吉川弘文館
小田裕樹 2020「平城京の暮らし－娯楽と遊戯－」『奈文研第12回東京講演会 奈良の都の暮らしぶり－平城京の生活誌－』奈良文化財研究所 pp.16-19.
各務原市教育委員会 2005『古代の須恵器と各務原』
蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴 2015「五条川流域の河道変遷と岩倉の歴史景観」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号 愛知県埋蔵文化財センター pp.69-88.
梶原義実 2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館
片桐孝浩 1995「香川県出土古代陶硯についての一考察」『香川考古』第４号 香川県考古刊行会 pp.36-62.
勝山勝 2001「尾張の坂田寺式軒丸瓦をめぐる二・三の問題」『名古屋市博物館研究紀要』第24巻 名古屋市博物館 pp.97-108.
加藤夏姫 2009「土馬を中心とした古代祭祀の多様性の研究－静岡県を中心として－」『國學院大學考古学資料館紀要』第25輯 國學院大學考古学資料館研究開発機構 pp.39-54.
角川文化振興財団編 1999『古代地名大辞典』角川書店
金子裕之 1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集 国立歴史民俗博物館 pp.219-290.
川崎市教育委員会 2014『川崎市埋蔵文化財調査報告第８集 川崎市高津区橘樹官衙遺跡群の調査－橘樹郡衙跡・影向寺遺跡総括報告書［古代編］－』
岸本雅敏 2021『日本古代の塩生産と流通』吉川弘文館
北條献示 1998「東畑廃寺と尾張国府・国分二寺」『楢崎彰一先生古希記念論文集』楢崎彰一先生古希記念論文集刊

行会 pp.121-132.
黒埼町教育委員会 1993『緒立C遺跡発掘調査概報』
考古学フォーラム 2016『尾張・勝川Ⅴ 古墳から古代寺院へ』
小牧市教育委員会・愛知県建築部 1976『桃花台ニュータウン遺跡調査報告 小牧市篠岡古窯址群』
斎宮歴史博物館 1997『史跡斎宮跡 平成８年度発掘調査概報』
斎宮歴史博物館 1999『史跡斎宮跡 平成９年度発掘調査概報』
崔ゴウン 2018「古代における瓦の製作道具について－「桶巻作り」による平瓦と丸瓦の復元作業を通じて－」『竹中大工道具館研究紀要』第29号 竹中大工道具館 pp.43-64.
笹森健一 2007「古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居」『住まいの考古学』学生社 pp.97-151.
佐藤信 2007『古代の地方官衙と社会』山川出版社
佐藤信編 2017『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
篠崎譲治 2010『馬小屋の考古学』高志書院
島根県教育委員会 1979『団原遺跡発掘調査概報Ⅰ－山代郷正倉跡－』
島根県教育委員会 1980『団原遺跡発掘調査概報Ⅱ－山代郷正倉推定地－』
島根県教育委員会 1981『史跡出雲国山代郷正倉跡』
城ヶ谷和広 1991「古代尾張の土師器－６世紀後半から11世紀の様相－」『愛知県埋蔵文化財センター年報』２ pp.92-110.
条里制・古代都市研究会編 2009『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣
神野恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所 pp.43-64.
鈴鹿市考古博物館 2002『発掘された国府－東海道・東山道の国府を掘る－』
鈴木三男 2012「出土木製品利用樹種の時代的変遷」『木の考古学－出土木製品用材データベース－』海青社 pp.81-102.
鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編 2017『日本古代の道路と景観－駅家・官衙・寺－』八木書店
関市教育委員会 2015『関市文化財調査報告34 弥勒寺東遺跡』
瀬戸市教育委員会 1990『尾呂－定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
瀬戸市埋蔵文化財センター 1997『瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告13 品野西遺跡』
武部真木 2006「山茶碗の用途をめぐって－摩滅痕の分析から－」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第７号（設立20周年記念論集）pp.99-107.
舘野和己・和田萃 1989「平城京左京二条二坊十一・十四坪坪境小路跡」『木簡研究』第11号 木簡学会 pp.22～24.
立松彰 2010「伊勢湾と三河湾の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム pp.2-19.
田中広明 2003『地方の豪族と古代の官人』柏書房
田中広明 2007「地方官衙の「館」と豪族の居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』奈良文化財研究所 pp.65-88.
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
東海市教育委員会 1984『愛知県東海市 松崎貝塚第２次発掘調査報告書 付載塚森遺跡』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2007『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
富山市教育委員会 2020『富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書』
豊川市教育委員会 2013『下六光寺遺跡 豊川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
豊田市教育委員会 1995『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第３集 梅坪遺跡Ⅱ』
豊田市教育委員会 2003『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集 梅坪遺跡Ⅶ』
豊橋市教育委員会 2016『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第140集 普門寺旧境内－考古学調査編－』

中村浩編 1995『須恵器集成図録』第１巻 近畿編Ⅰ 雄山閣出版
永井邦仁 2016「梅坪遺跡における古代集落の再検討」『豊田市史研究』第７号 豊田市 pp.169-202.
名古屋市博物館 1992『和名類聚抄』（名古屋市博物館資料叢書Ⅱ）
奈良国立文化財研究所 1981『奈良国立文化財研究所史料17 平城宮木簡３』
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1983『埋蔵文化財ニュース』41
奈良文化財研究所 2002『銙帯をめぐる諸問題』
奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡Ⅱ－遺物・遺跡編－』
奈良文化財研究所 2005『地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－』
奈良文化財研究所 2006『奈良文化財研究所史料77 平城京出土陶硯集成１』
奈良文化財研究所 2007『奈良文化財研究所史料80 平城京出土陶硯集成２』
奈良文化財研究所 2008『飛鳥白鳳の瓦づくりⅪ－藤原宮式軒瓦の展開－』
奈良文化財研究所 2014『奈良文化財研究所紀要2014』
奈良文化財研究所 2017『奈良文化財研究所学報第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』
南山大学大学院・西春町弥勒寺御申塚遺跡発掘調査会1998『弥勒寺御申塚遺跡発掘調査報告書』
西口壽生 2003「畿内における陶硯の出現と普及－飛鳥藤原地域出土資料を中心として－」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所 pp.9-42.
西口壽生 2010「東海産の陶硯について－蹄脚円面硯・宝珠硯を中心に－」『奈良文化財研究所紀要2010』奈良文化財研究所 pp.60-61.
浜松市教育委員会 1977『伊場遺跡発掘調査報告書第２冊 伊場遺跡遺構編』
浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡発掘調査報告書第12冊 伊場遺跡総括編』
樋上昇 2012「東海・中部－三重県・岐阜県・愛知県・静岡県－」『木の考古学－出土木製品用材データベース－』海青社 pp.193-209.
平川南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
福島好和 1971「古代諸国貢納水産物の分布について－その歴史地理学的考察－」『人文地理』第23巻第５号 人文地理学会 pp.29-59.
藤澤良祐 1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』pp.1-52.
藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』pp.19-245.
増川宏一 1992『ものと人間の文化史70 さいころ』法政大学出版局
増川宏一 2006『ものと人間の文化史134 遊戯』法政大学出版局
三重県埋蔵文化財センター 1992『三重県埋蔵文化財センター通信みえ』№７
三重県埋蔵文化財センター 2006『一般国道23号中勢道路（９工区）建設事業に伴う六大Ｂ遺跡（Ｂ～Ｉ地区）発掘調査報告書』
水野正好 1983「馬・馬・馬－その語りの考古学－」『文化財学報』第２集 奈良大学文学部文化財学科 pp.23-43.
三辻利一・岡本直久 1995「山茶碗の流通－第３・４型式を中心として－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第３輯 pp.1-41.
森泰通 2010「東海地方における古代土器製塩覚え書き2009－内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために－」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム pp.54-73.
安岡早穂 2018「土錘からみた瀬戸内海周辺における網漁の選択性（予察）」『大阪歴史博物館研究紀要』第16号 大阪歴史博物館 pp.65-74.

山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 pp.279-297.
山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
山村信榮 1998「あそびの世界」『考古学による日本歴史12 芸術・学芸とあそび』雄山閣 pp.162～173.

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもだみなみいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	下田南遺跡発掘調査報告書 本文編、実測図版編（1）・(2)、主要遺構一覧表・遺物観察表編、写真図版編
副書名	川井野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山内宏之、平松久和（岩倉市教育委員会） 基峰修、小島宏貴、三島ゆかり、後藤泰志、首藤有里、後藤秀夫（株式会社アーキジオ） 森将志、竹原弘展、伊藤茂、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、Zaur Lomtatidze、小林克也、 バンダリ スダルシャン、三谷智広、藤根久（株式会社パレオ・ラボ）、森勇一（東海シニア自然大学）
編集機関	株式会社アーキジオ中日本支店
所在地	〒463-0021　愛知県名古屋市守山区大森1-2701　℡052-799-8751
発行機関	岩倉市教育委員会
所在地	〒482-8686　愛知県岩倉市栄町一丁目66　℡0587-66-1111
発行年月日	西暦2023年 3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもだみなみいせき 下田南遺跡	あいちけんいわくらしかわいちょう 愛知県岩倉市 川井町	232289	110055	35度 26分 48秒	136度 85分 42秒	20190826 ～ 20210331	43,186㎡	工業用地開発

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下田南遺跡	集落跡 官衙跡	古墳、 飛鳥、 奈良、 平安、 鎌倉、 室町	掘立柱建物 竪穴建物 土坑 溝 竪穴状遺構 道路状遺構 ピット 不明遺構	須恵器坏・蓋・鉢・壺・甕・円面硯、土師器坏・坩・甕、灰釉陶器、山茶碗、製塩土器、軒丸瓦、平瓦、土錘、羽口、玉類、巡方（石帯）、サイコロ、ウマ歯	1b区・Ra区で飛鳥～奈良時代にかけての総柱構造の掘立柱建物群、1c区で四面廂付建物（1c区SB007）・1d区で一辺約13mの大型竪穴建物（1d区SI609）等が確認できた。建物の柱穴からは礎板が出土した。2a区2面SD166は2b区・Rd区・Rf区に続く溝で、多量の土師器甕等の土器が出土した。1c区・1d区・2b区から円面硯3点、2c区から巡方（石帯）1点、Rg区から軒丸瓦1点が出土した。

要　約

下田南遺跡は、五条川右岸の自然堤防上に形成された古墳時代、飛鳥～平安時代、鎌倉・室町時代の集落遺跡で、飛鳥～奈良時代の官衙遺跡でもある。
本調査（1a～1e区・2a～2e区・Ra～Rg区）では、総柱構造を含めた掘立柱建物、竪穴建物（うち1棟は一辺約13mの大型竪穴建物）、土坑、竪穴状遺構、道路状遺構、溝、ピット等の遺構が確認できた。
遺物は、古墳時代の土師器台付甕や坩等、飛鳥～平安時代の須恵器坏・蓋・鉢・壺・甕・円面硯、土師器坏・甕、灰釉陶器、製塩土器、羽口、土錘、瓦（軒丸瓦・平瓦）、勾玉等の玉類、巡方（石帯）等、鎌倉・室町時代の山茶碗・土師器甕・サイコロ・ウマ歯等が出土した。須恵器や山茶碗の坏類を中心に、墨書土器が17点確認できた。
出土遺物から遺構の年代は、概ね弥生～古墳時代中期（Ⅰ期・2～4世紀、Ⅱ期・5世紀）、古墳時代後期～奈良時代前半（Ⅲ期･6世紀～7世紀中頃、Ⅳ期･7世紀後半～8世紀中頃）、奈良時代後半～平安時代（Ⅴ期･8世紀後半～9世紀初頭、Ⅵ期・10～12世紀）、鎌倉・室町時代（Ⅶ期・13世紀、Ⅷ期・14～15世紀）のⅠ～Ⅷの時期に細分でき、集落の変遷過程が明らかになった。特にⅣ期では官衙遺跡としての実態が明らかになり、本遺跡の西側に位置する薬師堂廃寺跡出土の軒丸瓦と同氾瓦が出土したことも含めてその関連が窺い知れる。さらに、調査区南端で近代以前の旧五条川と推定される自然流路の存在が明らかになった。

下田南遺跡発掘調査報告書

－川井野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

本文編

発　行　日　2023（令和５）年３月21日
編集・発行　岩倉市教育委員会生涯学習課
〒482-8686
愛知県岩倉市栄町一丁目66番地
℡ 0587-66-1111
株式会社アーキジオ中日本支店
〒463-0021
愛知県名古屋市守山区大森一丁目2701番地
℡ 052-799-8751
印　　刷　株式会社 トーザワ